

ハイスクールFaiz～赤い閃光の救世主～

シグナル！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダー555 乾巧は、死んだ。

死んだはずの彼の魂は、時間軸の異なる世界の少年の体へー

彼の、長い旅が再び始まる。

本編終了後のたつくんが一卷で殺されたイツセーに憑依。一誠は

おっぱいドラゴンでも赤龍帝でもありません。

ライダーの力はかなり強い設定です。

たつくんの性格が少しマイルドになってしまうかも…。

目次

第1章 旧校舎のディアボロス

旅の始まり | 1

555 vs スティングフィッシュオルフェノク | 13

二度目の学生生活 | 20

新たな仲間 | 33

アーシアの夢 | 53

聖女と救世主 | 73

幕間 使い魔とツンデレと小さなドラゴン | 97

第2章 戦闘校舎のフェニックス

新たなる問題 | 108

不死鳥の襲来 | 117

リアスの夢 | 130

対決 | 142

決着 | 154

夢の守り人 | 178

第3章 月光校庭のエクスカリバー

動いてしまう復讐 | 198

生き残った男の子 | 211

聖剣使い | 219

意味の無い死など無い | 229

現れた脅威 | 240

届く想い | 258

繋がる心 | 274

第4章 停止教室のヴァンパイア

彼女達が水着に着替えたら	291
二人の魔王	298
重なる過去	309
変わらない関係	318
駒王会談、開始。	324
敵の姿	336
運命を求めた青年	348
赤と白く加速する世界く	362
第5章 冥界合宿のヘルキャット	
そうだ冥界へ行こう	379
リアスの想い	386
次世代の悪魔	395
Re：ゼロから始める異世界修行	406
灰色の狼と白い猫	419
幼馴染と姉妹	437
ゲーム開始、そして。	453
三人目	464
赤と青の衝突	483
第六章 体育館裏のホーリー	
新学期が始まる。	498
体育祭に向けて	515
疫病神	523
暗躍する外道	532
隣に居たい人、隣に居てくれた人	540
レーティングゲーム開幕	549

オカルト研究部 v s サイガ・デルタ

告白

幕間 外道神父の生きる道

590 572 563

第1章 旧校舎のディアボロス 旅の始まり

一月の寒空。

風が冷たく、体に当たればかなり冷える。そんな中で河原には三人の男女の姿があった。

『夢と言えば……俺にも漸く、夢が見つかったぜ』

川の字で河原に寝転んでいる三人組の一人で長めの茶髪をした青年——乾巧は唐突に言った。

『えっ!? ほんと、たつくん?!』

『なら、教えてよ……巧の夢』

巧の左隣には短い黒髪の青年——菊池啓太郎とショートヘアの黒髪の少女——園田真里は巧の夢の内容を知りたいという好奇心から、その内容を問う様に聞いた。

啓太郎や真里が驚いたのも無理はない。

何故なら、巧は以前から自分には夢が無いと言っており、そんな巧について夢が出来た、と聞いたのだから。

『世界中の洗濯物が真っ白になるみたいに……みんなが幸せになりますように』

巧はこの願いが世界中に響くように、届くようにと想いを込めて、口に出す。

そのまま目を瞑る。

これが自分の、オルフェノクの最期なんだ。

感覚的にそんなものを感じ、巧はそのまま眠りについた。

「がはっ!!!」

不思議と人気のない公園。

そんな中に二人の人影が見受けられる。

一つの人影が地面に膝をついた。膝をついたのは高校生の少年――兵藤一誠だ。一誠から見て正面にいるのは一人の少女。

その少女は長い黒髪で、白い肌や優しそうな笑みを浮かべる事ができるであろう整った顔をしている。けれど今の彼女からはその本来の顔からは想像もできないほど歪んだ笑みを浮かべて、体を覆う服にも変化が生じる。

先程までは可愛らしい白いをベースにした服を着ていた少女だったが、一瞬にしてボンテージの様な服装へ。警察官がいれば職質をされてしまうほどの露出度の高い物で身を包んでいた。

「イツセー君、貴方とのデート詰まらなかったわ。あまりに普通すぎて、あまりに平凡すぎて。あくびを堪えるので必死だったわ」

「な……なんでだよ……」

一誠は自分の貫かれた腹を手で触れてそこから溢れ出てくる血を見て、驚愕し、そのまま顔を上げて少女いや、墮天使レイナーレに視線を向ける。

何故こんな事になったんだ??

彼女が二日前に俺に告白してきたんだ!!

だから俺は彼女とのデートを楽しみにしていたのに!!

イツセーは腹を貫かれた事により、膝をついていたが、遂にその膝を限界を超えて、自分の体を支えきれなくなり、前のめりに体が倒れてゆくのを止めることすら叶わなかった。

「ほんと……人間って弱い存在だわ」

倒れる一誠を見てレイナーレは冷たい口調でそう吐き捨てた。

そこから感じれるのは人間に対する嘲笑で、レイナーレは一誠を確

実に下に見ていた。

だからこそ、気がつかなかつたのだろうか……。

一誠が肩にかけていたシオルダーバックの中からカシャという響きの良い金属音が鳴った事に。

そして、その音が何を意味するのか。

「さよなら、イツセー君。恨むなら、その身に神器を持たせた神を恨みなさい」

レイナーレはそう言つて、背中から二翼の黒い翼を広げ空へと羽ばたいていく。

その際もイツセーを一度も見ずにそのまま空の彼方へ飛んで行った。

「(なんだよ……これ、俺……なんか意味の分からねえ理由で殺されるのかよ……。ああ……。どうせ死ぬならあの人のあの紅の髪を持つたあの人の胸を……)」

これまでの人生を振り返るようにイツセーは自分の生きた時間を振り返る。

そんな中でも一番記憶に残っているのは、自分と同じ学校に通っていた紅の髪を持つ少女の事だった。

せめて彼女に触れてから死にたい。

そんな一誠の想いに応えたように懐から一枚の紙がヒラリと地面に向かって落ちてゆく。

地面に落ちてから数秒後、その紙に書かれている奇妙な魔法陣のような物が大きくなり、そこから一誠が会いたいと望んだ少女が現れたかのように一誠の目には写っていた。

「なるほど……貴方の二度目の命、私の為に使いなさい」

少女の凜とした声が聞こえ、一誠はそのまま体を地面に預け、そつと目を閉じた。

「う……ん？ ……なんだこりや」

巧は眠りから目を覚まして、体を起こして背中をのぼす。

周りを見回すと先程まで隣にいた真里や啓太郎が居ない。その上自分のいる場所が河原ではなく見たこともない様な公園。自分の腹部からは大量の出血があつた事を示すようにTシャツが血で赤く染まり、地面にも血だまりが出来ていた事が把握できた。

「大丈夫かしら、兵藤一誠君？」

自分の背後から聞いたことのない声が耳に入り、返事をするか一瞬迷うが、呼ばれている名前が自分とは異なる為、返事をせずにそのまま立ち去るつもりで立ち上がる。

「兵藤一誠君、返事しなさい！」

今度は少女の声が耳の近くから発せられ、巧は立ち上がる瞬間に叫ばれた為、驚きのあまり、立ち上がる為に踏み込んでいた足を滑らせて地面に尻餅をついてしまった。

——この女っっ!!

そんな怒りを込めた目を声を出した少女にぶつける為に巧はすぐに立ち上がり、体を少女のいるであろう方向に向ける。

「あら、やっぱり聞こえていたのね。それにしても無視は酷いじゃない、兵藤一誠君」

巧が怒りの言葉を吐くよりも先に少女は巧に声をかけ、またもや兵藤一誠という巧には聞き覚えのない名前で巧の事を呼ぶ。

巧も自分は兵藤一誠とかいう名前ではないとこの女に教えてやる！ と決め、少し怒りを込めた目で少女を睨む。

「おい、俺は兵藤一誠なんて名前じゃない。それに俺はお前が誰か知らない。兵藤一誠って奴を探してるなら人違いだ。じゃあな……」

巧は自分の言いたい事を三つに纏めて少女に告げて、背中を向けてその場から歩き出そうとする。

なんなんだよ……全く。

そう言わんばかりに溜息をついて、これからどうするかを考える始める。

「何を言ってるのかしら、貴方は兵藤一誠君でしょ？」

歩き始めた巧にまたもや兵藤一誠という名前を使う少女。

巧は自分の名前が示されているであろう運転免許書を出してこの少女に見せるために懐を探すが、運転免許証は見当たらない。

次にズボンのポケットを探していると、何やらそれらしき物を見つけ、それを強く握りしめて取り出した。

巧はそれを見つめ、それから数秒経つと、それを地面に落とした。

なんとそれは兵藤一誠が通っていたであろう駒王学園という高校の生徒手帳であったからだった。

「生徒手帳にそう書いてあるじゃない。ほら」

落とした生徒手帳を拾いあげた少女は生徒手帳についた砂利をポンポンと軽く叩き落として、巧に手渡す。

今の自分に何が起きてしまったのか。その可能性が頭を過る。

乾巧という存在の魂が既に兵藤一誠の体に憑依してしまったという奇跡が起きた事を。

だからこそ、巧はこの少女に頼った。

この状況で兵藤一誠について知っているのは彼女しかいないのだから。

不安と僅かばかりの希望を乗せて巧は少女に真実を伝える。

「信じてもらえねえかもしれないが。俺は本当に兵藤一誠なんて知らねえ」

その言葉に少女は言葉を失った……………。

「スマートブレイン、オルフェノク。ごめんなさい、聞いたことが無いわ」

その答えに巧は肩を落とす。

巧と向かい合うように座っている少女——リアス・グレモリーは役に立てない不甲斐なさを顔に滲ませていた。

二人は、巧の本来の体の持ち主、兵藤一誠の部屋に座り互いの事情を話し合わせていた。

「こつちこそ悪い。いきなりこんな話を信じてもらえないとはな」

リアスの顔を見て、彼女に責任がない事を分かっている為に巧は自分なりにフォローの言葉をかける。

巧はリアスに出来るだけの真実を話した。

自分の事、ファイズの事、そしてオルフェノクの事を。

オルフェノクに関しては反応がなくて当然と考えていたが、スマートブレインを知らないとなると巧には打つ手がなかった。

スマートブレインは巧の知る限り、日本では有名な会社で、外人と思われるリアスは日本語を流暢に使いこなしているところを見て、長年日本に滞在していると予想して聞いてみたが、答えは否だった。

それでも、この目の前の少女は転生やら憑依やらと信じられない言葉を吐く自分を信じ、親身になってくれるだけありがたいと巧は感じていた。

「それじゃあ、巧さん。次は私の話を聞いてもらえないかしら？」

高校生であるリアスは年上の巧に対し、さん付けをした言葉遣いに切り変えて、自分の話をし始める。

巧もリアスが真剣に自分の話を聞きてくれた為に自分も無下に返すわけにもいかない為、きちんとした気持ちでリアスと向き合う。

「巧さんは……悪魔を信じる？」

「信じちゃいない。別に興味もないしな」

言葉に短くそう答える巧。

巧のいた世界では、オルフェノクが悪魔と呼ばれる存在なのかもしれない。

柄にもなくそんな事を考える巧だったが、次の瞬間にそんな思考が全て打ち消しになる光景が目に入る。

「巧さんのいた世界には悪魔は居なかったかもしれないけど……この世界には存在するわ」

冷静に話を進めるリアスの背中には翼が生えていた。

まさに悪魔と呼ぶに相応しい羽を持っていた。

「お前、悪魔なのか？」

「ええ……。巧さん、あなたに一つ聞きたいの。貴方が先程言っていたオルフェノクについてよ。そのオルフェノクというのは『灰色の怪人』という特徴を持っているかしら？」

灰色の怪人……その言葉を聞いた瞬間に巧は勢いよく立ち上がった。

まさか……この世界にいるのか？！

居てもおかしくない。現にオルフェノクである自分がここにいるのだから。

そこから巧はリアスに近づいて、彼女の目を見る。

「オルフェノクはそういう特徴を持つてる。……知ってるのか」

「ええ。最近、夜の駒王町で何かに襲われたという人が続出して、その中で偶々生き残った人がこう言ったの……灰色の怪人に襲われたって」

「そうか……。場所は分かるか」

「待って、私も付いて行くわ。貴方一人では行かせないわ」

巧はリアスの同行に迷いがあつた。

いざとなれば自分は本当の姿、ウルフオルフェノクに変身できるのが感覚的にだが分かっていた。

対して、この少女がオルフェノクに太刀打ちできるとは到底思えなかつたのだ。

しかし、彼女の目に灯る強い意思を見て、巧が先に折れた。

「約束がある。俺が逃げろと言ったら俺を置いて逃げろ。」

「これが出来ないなら……付いてくるな」

「あら？ 場所は私が知ってるのだから、私が居ないとそこには辿り着けないんじゃないかしら？ それに、あの2人だっただけからはどうするつもりなのかしら？」

「お前……いい性格してるな」

巧はリアスに痛いところを突かれ、皮肉を言うことしか出来なかった。

あの2人とは……兵藤一誠の本来の両親であった。

先程、巧は一誠が彼の通ってる高校でも有名な覗き魔であった事を知り愕然となった。これからどうするかと本気で悩んだが、リアスがそこで自分を怪我から助けるために頭を壁にぶつけてしまい、それで記憶が混乱したというなんともすごいでっち上げをして見せたのだ。

その際に何故か医者診断書があった事を巧は突っ込みはしなかったが、先程彼女が悪魔である事を知り、悪魔の力によるでっち上げをしたのか？ と疑問を持つ巧だった。

「それじゃあ、早速行きましょう」

「……ああ」

リアスが立ち上がったのを見て、自分も立ち上がる事にして、足を出すと先ほどの公園で地面に落ちている所を見つけたショルダーバックを踏んでしまっていた。その中身が少し飛び出してしまうようで、それを直すために腰を屈める。すると巧はその中身を見て顔色が変わった。

「巧さん……どうかしたの？」

「いや……何でもない。案内、しっかりしろよな」

ショルダーバックの中に入っていたのは、巧と相棒とも呼ぶべき物達だった。

それらをしっかりとバッグに入れて、ファスナーを閉じ、そのまま肩にかけた。

「ここで本当にいいのか……？」

「ええ……。噂だから絶対とは言いきれないのだけどね」

日が落ちて、空を暗くしたところ、巧とリアスは駒王町の外れにある、今では誰にも使われていない建物の入り口に立っていた。

ここがリアスの知る限り、一番『灰色の怪物』が出る確率の高い場所と時間だ。

リアスは握りこぶしを作り、いざという時は自分が巧を守る！

そんな決意を固めて建物に入る。

巧は肩にシヨルダーバックを掛けながら、リアスの隣を歩く。

「誰も……居ないわね」

周りは山で囲まれており、その上に人もいない為、足音がとても響きやすく、自分たちの足音しか聞こえてこない今の現状にリアスは誰もいないのでは？ と考えるほどだった。

対して巧は、居ないことを願うようにしてオルフェノクの探索を続けていた。

オルフェノクが居れば……。誰かが死ぬのなら自分が戦う。

そういう決意の元に戦ってきた巧にとっては、オルフェノクが居ないのが一番だ。

だが、巧自身もオルフェノクの一人。

しかも上級のオルフェノク、ウルフオルフェノクだ。

それでも巧は人間である事に拘り続け、そして人間と誰かの夢を守り続けてきた。

戦うことが好きではない巧にとって人を襲うオルフェノクがいなのは嬉しい事だった。

しかし、この世界でもしもオルフェノクが人を襲うのであればそれを倒すのが自分のやるべき事と決めていた。

それが背負ってきた罪から逃げないという巧の意味でもあったから。

そんな巧の希望を打ち壊すようにそれは姿を現した。

「へえ……今日の獲物は二人もいるんだ？」

暗闇から聞こえる声。

獲物——それはつまり、自分たちの事を示していることを容易に理解できる。

巧とリアスはその場で声の主が現れるのを待っていた。

「やったね。男の方は良いとして、女の子の方は綺麗な可愛い子だ」
壊れた建物の二階から飛び降りて一階にいる自分たちの元にやってきたのは少し若い年代の男だった。

見た目は二十歳前後で服装も一見普通の人間。

だからこそオルフェノクを知らないリアスには一瞬の隙が生まれた。

「……彼がオルフェノクなの？」

「多分だけどな……」

巧は自分がオルフェノクである為か、目の前にいるのがオルフェノクであるとなんとなく察知することが出来た。

男は依然と余裕のある表情を保ってこちらへと一歩一歩、歩を進める。

「僕らの事知ってるんだ。なら……もう我慢しなくていいね！」

男がそう叫ぶと、男の顔に灰色のラインが現れる。

そのラインは顔だけでなく、体全体を覆うように発生し、次の瞬間には男の体を怪物——ステイングフィッシュオルフェノクへと変化

させる。

そこからの男の動きは速かった。

オルフェノクに変化してすぐにリアスに攻撃を仕掛けるために駆け出して、手に持ったトライデントで刺突を繰り返して、リアスの体を貫通するように放たれる。

「おい！ 大丈夫か！」

「あ……ありがとう」

避けようとしたリアスだが、足をその場で滑らせて体勢を崩してしまい、自分を突き刺すであろうトライデントの痛みに耐えるべく目をつむりそつとその痛みが来るのを待っていたが、巧が怒りを込めた声を出して、自分を地面に押し倒し、トライデントの攻撃から助けられた事に礼を告げる。

ステイングフィッシュオルフェノクはまだその視界からリアスを外しておらず、リアスも自分が狙われている事を理解してか、巧から距離を取り、ステイングフィッシュオルフェノクの意識を自分に集中させる。

敵の意識を自分に向けさせた後に、リアスは両手を前に突き出して、自分の持つ魔力、滅びの魔力を練り上げる。

滅び——その言葉通り、全てを無に帰す魔力であり、これがリアスの持つ武器だった。

——これで決めるっっ!!

そう覚悟を込めて放ったドッジボール程度の大きさの滅びの魔力は真っ直ぐにステイングフィッシュオルフェノクの元に突っ込んで行き、相手の腹部に命中する。

相手はその魔力の攻撃を受けて、数メートル程後ろに後退をしたが、その攻撃は致命傷には至らなかった。

「酷いことするね。可愛いからって何でも許されるなんて思わない方がいいよ」

よく見ると相手の腹部には火傷を負った後のような痣が出来上がっていただけで、致命傷にはならないという事実をリアスは認識

し、その場で膝をついた。

「そ、そんな……」

街の被害を抑えるために大きさは抑えたが、威力は全力で放った魔力が通じなかった事実には恐怖を感じた。

殺される……そんな恐怖がリアスの中に生まれ始める。

「おい……リアス。後ろに下がってろ」

自分の目の前から聞こえる巧の声。

そつと顔を上げると腰に奇妙なベルトのような物を巻きつけている巧がそこにはいた。

「なんだよ？ あんた何なの？」

「アルバイトき、クリーニング屋のな！」

元がつくけどな、と小声で呟く巧。

巧の足元には肩にかけていたはずのショルダーバックが落ちており、中に入っていた物を取り出した。

巧の手には折りたたみ式の携帯電話——ファイズフォン。

腰には銀色と黒で拵えてあり、縁には赤が塗られているベルト——ファイズドライバー。

ファイズフォンを開き、慣れた手つきで「555」と番号を入力していく。最後にEnterのボタンを押す。

『Standing By』

ファイズフォンから音声が鳴り、待機音が鳴り響く。

「変身!!」

巧はファイズフォンを空高く掲げ、高らかに叫ぶ!!!

『Complete』

ファイズフォンをファイズドライバーに縦に換装し、横に倒す。

変身の了解を告げる音声がなり、縁の赤い部分から体を覆うように赤き閃光——フォトンスクリームが流れ、巧の体を人間から超金属の戦士、ファイズへと変える。

この異世界に赤き閃光の救世主——ファイズが降臨した。

555 VS ステイングフィツシユオルフェノク

「なんだそれ?」

変身したファイズの姿を見て、ステイングフィツシユオルフェノクは一言声に出した。

巧も返答をせず、暗い建物に冷たい静寂が生まれる。リアスはそつと唾を飲み込む。

唾が喉を通り、体の中に入っていくのがよく分かる。それほどまでの緊張が体に走っているという事実を認め、あの青年――巧が勝つことを祈り、そつと視線を向ける。

「ファイズだ」

言葉短くオルフェノクの疑問に答え、手首をスナップさせるとカシャという金属音が鳴る。それが開戦の狼煙となった。

「意味分かんねえよおお!!」

相手は、叫びながらファイズに向けて駆け出した。

その手には先ほどのトライデントを構えながら、一步一步確実にファイズへと近づいていく。

ファイズは、相手の攻撃を待つようにその場で静止の姿勢で構えながら、その双眼でオルフェノクを視界に入れる。

「ふんっつ!!!!」

両手で持っていたトライデントを、自分の射程範囲内に入った直後、自分の持つ筋力のすべてを集中させ、ファイズの体を射抜かんと言わんばかりの速さで前に向けてトライデントでの刺突を繰り返す。

――勝った。

何時ものように相手の命を奪ったと、例え相手が姿を変えよう自分には勝てるはずが無い。

そんな確信めいた物を持っていたステイングフィツシユオルフェノクの腹部に強い痛みが生じる。

「がふっつ!!」

腹部の痛みにより、その場で膝をつく。

自分への攻撃を仕掛けたであろうファイズを探すが見当たらない。

キョロキョロと周りを見ようと体を後ろに向けた瞬間、今度は自分の顔の左半分に痛みが生じる。

「うらっ!!」

ファイズの気合の籠った声が耳に聞こえ、その時に視界に入ったのは自分の顔に全力での蹴りを入れるファイズの姿だった。

ファイズの蹴りにより、その場から吹き飛ばされ地面を転がりながら距離を取る。

「ーなんだよあいつ!? なんで人間の攻撃が痛いんだよ!!」

今までに会ったことのない未知の敵の出現。

そして、その者と自分の力の差をたった数回の攻撃を喰らっただけで理解をしたステイニングファイツシユオルフェノクはその場から逃げ出したいという恐怖が生まれた。

しかしファイズはそんな事を気にせず、カッーンという金属音と足音をこの建物内に響かせながら、確実に自分の元に向かって来ていた。

「すげーい……」

リアスはファイズー巧の戦いぶりを見てそう一言呟いた。

自分では全く勝ち目のない相手をあそこ迄、余裕を見せながら圧倒出来る巧にリアスは驚きを覚える。

それもそのはず、巧は一年間もの間、オルフェノクと戦い続けてきたのだから。

元々、オルフェノクであった為に身体能力は高く、それに加え長年に渡り、命を賭けた本当の戦いをしてきた巧にとってはステイニングファイツシユオルフェノクなどは、余裕を持って倒せる相手だった。

巧が兵藤一誠に憑依する前から戦ってきた事は先ほどの話だけは聞いていたが、こうやって目にするとその事実を認めざるを得ない。

オルフェノクと戦えるのはファイズの力もその理由の一端にある

が、それ以前にその巨大な力を巧が使いこなしているからこそ、あそこまでの戦闘能力を発揮出来るという事をリアスは認識していた。

「ー彼は一体何者なんだろう。」

リアスは巧を見て、巧のことをもつともつと知りたいという気持ちにさせられていた。

目の前のステイングフィッシュオルフェノクの腹部へのボディブローを一撃入れ、膝を地面につこうとした相手の肩に手をやり、そのまま立ち上がらせて、顔に拳を撃ち込み、振り上げた足で胸元を蹴り込まれた相手はそのまま宙を舞い、数秒の浮遊の後に地面に叩きつけられる。

巧は、目の前の相手との対峙が初めてでは無かった。

このステイングフィッシュオルフェノクは、自分がまだ乾巧の頃に初めて園田真里と出会い、その際にファイズギアを使い、初めてファイズに変身をして倒したオルフェノクだと記憶して、目の前にいる相手がそのオルフェノクと一致すると思い出していた。

「くそおおお!!!」

ステイングフィッシュオルフェノクは余裕を持って戦うファイズとそんなファイズに圧倒させられている自分に怒りを露わにして、咆哮の如く、声を上げる。

怒りを向ける対象のファイズを視界に入れながら、両手でしっかりとトライデントを握りしめ、足を前に進める。

そのままオルフェノクに接近し、ファイズの胸部に向けてトライデントを持ち手を両手から利き手である右手に変えて、腕を一瞬引いて、一秒もしない内に右手を前に突き出し、そのトライデントはファイズの胸部を貫く軌道に乗っていたが……。

「なんでだよっ!!!」
「らああ!!!」

トライデントは虚しくも空を切った。

軌道上にはすでにファイズは居らず、誰もいない空間をトライデントは貫いたのだ。

ファイズは自分に向かってくる、トライデントを右に体を少し傾けただけの最小限の動きだけを行い、そのまま自分を貫こうとするトライデントを持っていたステイングフィッシュオルフェノクの手首を拳で弾いた。

トライデントを持っていた右手の手首は攻撃により、そこに入る力は一瞬無くなり、握りしめていたトライデントは地面へと落下。

落下の際にはトライデントと地面がぶつかり合う、キイインという金属音が響いただけだった。

そこからファイズは、前に突き出していた右手を自分の左手で掴み、逃げる事を許さない様な力で動きを封じ込め、相手の体の脇に拳を打ち込み、最後に半歩引いてからの蹴り込みを脇腹に打ち込んだ。
「ハア……ハア……」

例え、オルフェノクになろうと基本的な体の構造は人間と同じである為、人体急所を攻撃されればそれだけ、攻撃によりダメージも大きい物となる。

ステイングフィッシュオルフェノクも脇を攻撃された事により、息を乱して、空気中の酸素を多く欲し、大きく呼吸を行っていた。

「……こいつ……っつ!! 殺すっ!!」

オルフェノクとなった自分。

誰も勝てる筈のない境地に達した筈の自分をこうも圧倒するファイズに疑問や謎を持つ前に怒りを抱く。

ファイズは、乾巧の体の時から様々なオルフェノクと戦闘を繰り返してきた。

このステイングフィッシュオルフェノクもかつて倒したオルフェノク一人。さらには上級のオルフェノクの中でも特に力を誇っていたラッキークローバー。スマートブレインの社長、村上ローズオ

ルフエノク。

最後にはオルフェノクの王である、アークオルフェノクにさえも、最強形態であるファイズブラスタフォームとなり、仲間である木場勇次と三原修二が変身したカイザとデルタと共に戦い、勝利さえもしてみせた巧にとっては目の前のステイングフィッシュオルフェノクは弱い部類に入るのは当然だった。

しかし相手はそんな事を知らないため、強くなったはずの自分を見下している物とファイズを認識して、攻撃を仕掛けていた。

「このやろおおおお!!!」

叫ぶと同時に、ステイングフィッシュオルフェノクの下半身が変化をし始める。

しっかりと両足が付いていたはずの下半身が魚の尻尾の様な形態に変化し、その体は宙に浮かぶ様になった。

「へへへ……お前は空飛べないもんな!」

ファイズの姿から、空中の飛行は出来ないという事が分かり、自分に利がある空中からの攻撃に切り替え、ファイズを、嘲るような笑みを見せる。

「空飛べるからって強くなる訳じゃねえだろ」

そんな余裕を見せつけるステイングフィッシュオルフェノクに皮肉を込めた一言を言つてのけ、相手の攻撃を待つ。

「んな事言つてやられるのも何時までかな!!」

ファイズの一言が琴線に触れ、宙に浮いた状態のまま、体を傾ける。

頭はファイズに向けられたままで、そのまま突撃してくる事は明らかであった。

体制を整え、数秒が経った瞬間、自分の下半身である尻尾を、大きく動かしてそのままファイズに向けて突進をする。

落下により加速と自分で行う加速により、まるで弾丸の様にファイズの元に向かっていく。

「危ないっっ!!」

ステイングフィッシュオルフェノクがファイズに迫り、横に逸れたり、相手を飛び越えようとする動作を行おうとしないファイズを見て

リアスはその危機を伝える為にできるだけ大きな声で叫ぶ。

しかし、それはリアスの杞憂にて終わる。

——これで終わりだ!!

自分の攻撃を全く避けようとしないうファイズはもう勝つことを諦めたのかと思いい、つい口元がにやけるのを止められなかったステイングファイツシユオルフェノクはファイズの次の行動を見て、現実引き戻される。

ファイズは自分の体を、後ろに倒してそつと重力の働きに従って、そのまま身を任せる。

その際にもステイングファイツシユオルフェノクの実撃は迫り、止まることはない。

しかし、ファイズが地面に倒れこんだ事により、ファイズの立っていた場所をそのまま通過してしまうと思つた矢先にステイングファイツシユオルフェノクは自分の腹部に生じる痛みが気がつく。

「うらあああ!!!」

痛みはファイズのオーバヘッドキックによるものだった。

地面に倒れた状態から足を振り上げ、そのまま相手の腹部への蹴りを全力で叩き込む。

ファイズの蹴りと自分の突撃の速さにより、壁に正面衝突を起こし、体への痛みはさらに大きくなる。

なんとか体を起こし、ファイズを探すが壁にぶつかった時の衝撃で崩れた壁の一部から土煙などが発生し、視界をそれらに奪われ、ファイズの姿を見失う。

『Ready』

『Exceed Charge』

土煙の向こうからそんな音声が聞こえる。

そつと目を細めて見てみると……そこには、右足に何かライトのような物を固定させ、陸上のクラウチングスタートのような姿勢を取っているファイズの姿が写り込む。

音声が聞こえてから一秒ほどが立つと、ファイズドライバーの縁の

赤い部分から、赤い光レーザーフォトンブラットがファイズの体の赤いラインに乗って、足に固定されているデジタルトーチライト型の器具レーザーポインターに伝わる。

そこからファイズは宙を舞うように跳躍。空中にて一回転を行い、左足を折り、右足を前に突き出す。

「やああああああ!!」

「うわああああ!!」

ファイズのキックを見て、本能的に危険を察知し、その場から逃げ出そうとしたが、その場から動けない。

脳からの「逃げろ!」という命令を乗せた信号が神経に伝わっているはずなのに、体は動く事はない。

そこでステイングフェノクは気付いた。

よく見ると自分の体は既に拘束されている事に。

先程、ファイズが空中にて一回転をした時に、ファイズポインターから赤いレーザーポインティングマーカーが放たれ、それはステイングフェノクを体を通り着くと、円錐型に形を変え、そのまま逃げることを許さない。

迫り来るファイズのキックに対する恐怖とファイズの気合の入った声が同時に建物に響き渡る。

そしてファイズ必殺のキックークリムゾンスマッシュはステイングフェノクを貫き、地面に着地をすると同時に青い炎を発生させて、その体を灰へと還した。

二度目の学生生活

「おはよう、イツセー♪」

朝：布団から体を起こしてから数秒が経つと、巧の耳にはリアスの声が聞こえた。

「ー俺の空耳だな…。」

巧はそれを空耳と判断し、大きなあくびを咬み殺す。

服を着替える為に、体を起こそうとすると…。

「おはよう、イツセー♪」

先程と変わらない声色でのリアスからの挨拶が聞こえる。

流石に二回目なので、巧も空耳とは判断せず、リアスの声の聞こえる方に体を向ける。

「なんで、ここにいんのお前?」

「あら? 私居なくても学園に行ったり、教師の方々の説明をする事ができる?」

巧からの答えをこれまた一瞬で返答を行い、その答えに巧も押し黙る。

巧の今の体は兵藤一誠という少年であるが故、彼が通う学園などへの行き方は勿論、ありとあらゆる事に関して、リアスの協力が必要不可欠である事は巧にはよく分かっていた。

「お前、あれから自分の家に帰ったんだろうな?」

「ええ、もちろん帰ったわ。それから、この部屋に入れてもらったのよ」

あれから：巧がステイングフィッシュオルフェノクとの戦闘を終えた後に巧はリアスからの質問攻めを喰らいつつもそれらをのらりくらりと躲して、その日は解散となった。

巧も兵藤家への道を覚え、なんとか帰宅。そのまますぐにベットについた。

そして目覚めると、リアスがいるという状況になったのだ。

「とりあえず、今日は学園に行く事と、先生たちへの説明をするの。

いいわねイツセー」

「…ああ」

朝の眠気からか、少しおぼつかない様子で返答をして、髪の毛に付いた寝癖に触れる。

イツセーと呼ばれることに関しても、文句はない。

自分の憑依状態について唯一知ってるのはこのリアスだけで他の者たちから見てみれば、今の巧は兵藤一誠なのだ。

だから、その一誠を巧と呼ぶのは不自然が生じる事から、今日からイツセーと呼ぶことにしたのだろう。などと頭で考えながら、リアスが部屋から出て行くのを確認し、部屋の隅に置いてあつた駒王学園の制服に着替える。

数分で着替えを終え、そのまま階段を降りてゆく。

巧はここで溜め息を一つついた。

ここから会うのは兵藤一誠の本当の両親だ。

あの夫婦は今の巧を見ても記憶を失つた一誠として見ており、本当の兵藤一誠は今居ない。

本当にこの世から消えてしまったのか、はたまた今だこの体の中に彼の魂が宿っているのか。今の巧にはそれを探る術はない。

二人に対する罪悪感は溢れ出すばかりだが、巧の心配事はそれだけでは無い。この世界でのオルフェノクの出現に関してだ。

この世界にオルフェノクがいる限り、その力の矛先は、悪魔などという人外の者達より非力な人間達に向かう可能性が高い。

今の自分が何であれ、それを止めるのが自分の役目。

結論を出して、一階のリビングに辿り着く。

そこから部屋に入ると、朝食のいい匂いが巧の鼻腔をくすぐる。

ウルフオルフェノクとして覚醒した巧は感覚も人間よりも優れており、いい匂いなどとても気分の良い物になる。

難しい顔をしていた巧の顔がほんの少しだけ柔らかいものに変わっていく。

「おはよう、イツセー。それにグレモリーさんかな？」

「二人とも、朝ごはんできたわよ」

朝食の並び立つ机とその椅子に座っている男性、彼は兵藤一誠の

父。

机に朝食を並べているの女性、彼女は兵藤一誠の母。

巧とリアスを笑顔で迎え、二人に席に座るように促す。

こんな朝の風景を見て、巧は自分と一誠の家庭環境の違いを思い知らさせる。

「おはようございます。 叔母さま、 叔父さま」

リアスの凜とした上品な声がりびングに響く。

腰を折り、綺麗なお辞儀を行うリアス。

お辞儀により、リアスの持つ長く美しい紅の髪が風に靡くように躍動する。

巧は一瞬、その佇まいに目を奪われそうになるが、すぐに意識を戻して、席に着く。

「イツセー、今朝の具合はどうだい？」

「まあ、ぼちぼち…かな…」

席に着くと、対面に座っている一誠の父が巧に話を掛ける。

巧も答えないわけにはいかない為、なんとか答えるが、それはあまりに短いものだった。

こんな時に巧は自分の無愛想さに嫌気がさしそうだ。

素直に元氣と言えない自分、自分の為に力を貸してくれるリアスにお礼が言えない自分。

そんな自分が巧は嫌いだった。

そしてこんな状況になってもそれらは消える事の無いものとして巧の中を蠢く。

「そうか。何かあったら、言いなさい。話程度なら聞くよ」

ポリポリと頬を搔く巧に向けて、一誠の父は朗らかな笑みを浮かべ、優しい声色で巧に向けて言葉を発した。

発せられたその言葉からは悪意のない優しい言葉で出来ている物。

自分にはきつとできない、優しい笑みを浮かべることやこんなにも相手の心を癒す事の出来る朗らかな笑みを浮かべる事の出来る父を持った兵藤一誠に対し、罪悪感が生まれると同時に自分もこんな素直

になれたら…。

という嫉妬にも似た何か巧の中に生まれた。

「なんとか乗り切れたわね、良かったわ」

たくさんの高校生が歩く中で特に目立った二人組がいた。

それは巧とリアスの二人だ。

二人は朝食を食べ終えた後にすぐに家を出て、リアスと兵藤一誠の通っている駒王学園に向かい、今に至る。

「お前が余分なこと話したりするからだろ」

二人は少し近い距離に並び立ち、同じ歩調で歩く。

リアスは何処かイタズラを終えた子供のような顔をしており、巧はいつもの仏頂面よりもさらに硬い顔になっていた。

「だって…巧さ…んんっ!! イッセーが猫舌だったなんて…だからあんなにフーフーしてたのね」

巧と呼びかけたが、咳払いでそれを誤魔化し、リアスは笑いをこらえながら歩く。

「猫舌で何が悪いんだよ…」

対する巧はバツの悪そうな顔でリアスの隣を歩く。

先程の朝食の際に、あつたかい味噌汁が出てきて、リアスはそれを少し冷ましただけで飲めたが、隣の巧は一向に手をつける気配がないから聞いてみると、言葉短く、「嫌いじゃない」そう答えた。

ならば何故??

食事をしながら、時折巧のいる方に顔を向ける。

すると、巧はリアスが味噌汁を飲み終わった数分後に漸く容器を手に乗せ、そこから何度も何度も息を吹きかける。

『イツセーって猫舌?』

『なんだよ…悪いかよ』

リアスはそれを聞いて今でも笑っている。

巧はこの猫舌を直そうとなんとかしてみたりはしたが、全くもって効果はない。

舌打ちをしながら、二人は学園を目指していく。

そこから歩いて少しすると、二人に絡みつく視線は一気に増えてゆく。

「えっ!? リアスお姉さまがああのエロ魔神兵藤と!?!」

「うわああああ!!! ウソダゾンナゴドー!!」

「きやあああ!!! リアスお姉さまがあ!!!」

巧の耳に聞こえてくるのはリアスを心配する声、そして巧、延いては一誠に対する妬みや怒りなどだった。

この状況から巧は、リアスが多くの生徒に慕われている事と、それと同時に兵藤一誠が度し難いレベルの変質者であったことを悟った…。

「…本当に覗きとかしてたのかよ…今時中学生でもやらないだろ」

巧に対する女子生徒の悲鳴から、巧はこの体で平和な学園生活を送ることは難しいだろうと判断し、肩を落とす。

そんな巧にリアスが肩を叩く。

「イツセー…辛いかもしれないけど今は我慢して。それと、今から職員室に行くから付いてきて頂戴」

リアスの慰めの言葉が身にしみた巧は無言のまま、リアスの後を付いていき、職員室を目指した。

巧は学校というものがあまり好きではなかった。自分の不器用な性格により、友と呼べる者も居らず、ただひたすら教室の自分の席に座っていた。

教師にも理解されない事があったりといい思い出はない。

それに一番大変だったのが、巧に目をつけて絡んでくる不良達だった。

巧の容姿はかなり整ってはいたが、普段の仏頂面により常に機嫌が

悪いと思われたりして、喧嘩に発展する場合もあった。

しかし、この学園ならそんな心配も無いとその点においては安堵し、リアスについて行き、職員室の前にリアスと共に並び立つ。

せめて隣にいるこの紅の髪を持つ少女には迷惑は掛けずにいたい。

そんな事を思いつつ、職員室の扉を開けた。

そこは巧がかつて通っていた学校と同じような風景があり、リアスは巧を先導するために歩き出し、目的の教師の元に向かった。

一拍置いて、巧はその後ろを追うようにして歩き出す。

こうして歩いていくだけで絵になるリアス。

そんなリアスは男性職員からも人気があるようで、彼女が職員室に入った瞬間に何名かの顔がほころび、彼女を視線に捉えていた。

「先生、お時間よろしいでしょうか？」

「ああ、構わないよ。グレモリーさん、それに兵藤君」

リアスが話しかけたのは、四十代と見受けられる男性教師で、教師が着るようなスーツに身を包み、少し色の濃い肌を持ち、その見た目とは反するような声の持ち主であった。

「実は兵藤一誠君の事でお話がありました……」

その教師にリアスが手渡したのは一枚の封筒。

そこに何が入っているかは巧には分からなかったが、この状況ではリアスに頼る他ない為、余計な事を言わないように少し遠くの窓を見つめていた。

窓からは教室に向かおうとしている生徒たちが多く見られ、朝の挨拶が飛び交っていた。

「ふむ……。なるほど、状況は分かりました。それでは兵藤一誠君、少し良いかな？」

自分を呼ぶ男性教師の声が聞こえ、首を窓から教師に向ける。

リアスは先程までは巧の前に立っていたが、そこから入れ替わるようにして巧が前に立つ。

男性教師からの視線を浴び、一瞬体を竦めるが、後ろにいたリアスが巧の制服の首の部分を探み、耳元で動かないと注意された為、半ば

無理やりに姿勢を直される。

「君は…女の子の着替えを覗く穴があつたらどうする?」

ようやく口を開いた男性教師の質問に巧は絶句をした。ふざけていると思つたが、教師の視線は真剣その物で、逃げる訳にもいかない。

という感じでなんでこんな質問をしなければならないのか?なんて疑問を頭で考えるようとするが、後ろからのリアスの視線を感じて、先ほどの質問に対する答えを口に出す。

「覗くかよ…中学生じゃねえんだから」

巧が目の前の男性教師にのみ聞こえるような声で髪を掻きながら答えた。

一瞬：巧やリアスや教師には静寂が生まれ、何故か職員室全体さても静けさに飲み込まれていた。

この静寂にリアスは息を飲む…。

しかし次の瞬間に巧たちを待っていたのは……。

「リアス君、君の話を信じよう!!」

男性教師の喜ぶ顔と、職員室全体の歓声だった。

その歓声に巧は呆気を取られ、リアスは安堵の息をつく。

中には涙を流し喜んでいる者も居たようで、この歓声や涙が本当に兵藤一誠という存在がどれほど問題視されていたのかを理解し、ここまでの度し難いレベルの変態なら一度会ってみたい。そんな風に考え始める巧だった。

「なんとか、一区切りついたわ。お疲れ様イツセー」

「いや、俺は別に何もしてない。お前に任せてただけだ」

教師たちに話を通し、巧は今日の授業が始まるまでに教師から記憶喪失であることがクラスに伝えられるようで、二人は職員室を出て、すぐ近くにある廊下で並び歩いていた。

二人は並び歩きながら、時計を見ると着席時間のギリギリになるうとしており、リアスは自分の教室を目指す為、巧とは違う道に体を向

け、そのまま歩き出した。

「イツセー、今日の放課後に私の使いを出すわ。それじゃ頑張って頂戴」

少し歩いたところで、リアスは振り向き巧に声をかける。

声は小さかったが、廊下である為、その声は響き渡り、巧にしっかりと伝わる。

巧もそれにうなづく形で答え、職員室で聞いた自分の教室を目指した。

放課後――

一日の授業の終わりを告げる鐘の音が駒王学園に響き渡る。

巧はまだ日が沈まない空を自分の机から窓越しに眺めていた。

それは風景を楽しむというよりは、女子生徒たちからの視線から逃げる為であった。

「なんか、兵藤って記憶喪失になってから怖くなった気がするわ…」

「そう？　確かに仏頂面って感じだけどなんか、それもクールな感じでかっこいいじゃん」

女子は巧の容姿について語りあっていた。

乾巧の体の時も、そして今の兵藤一誠も顔に関しては整ってはいたが、巧は普段からの仏頂面、一誠は普段からの変態ぶりと顔をだらしなくにやけさせていたりなどで、きちんと顔を見た事のない生徒も多いようで、こうして見ると意外と整った容姿をしていることに気が付いた女子たちが遠巻きに巧を眺めていたのだ。

「はあ…」

こんな状況と、リアスの言っていた使いとやらが一向に来ないことから、巧は何度目かの溜息を漏らす。

最後に教室を見回すが、自分に向けられる視線のみで自分に近づこうとする者は居なかった為、巧は自分の机に掛けておいた学生バック

を持ち教室を出ようと準備を始めた矢先に女子生徒たちが騒ぎ始める。

「きやああ!!! 木場くんよお!!!」

「なんでこの教室に来てくれたの!!!」

——木場：懐かしい名前を聞いたな。

巧は騒いでいる女子生徒たちに背を向けながら、帰りの支度を行っている。自分の耳に、懐かしい人物と同じ苗字が聞こえてきた。

木場勇次：嘗ての巧の友であり、仲間であったオルフェノクの青年。

巧とは幾度か正体を隠した状態で戦い、普段は互いの正体を知らない間に心を通わせた。

その後と様々な出来事があり、彼が人間を捨ててまで戦いを挑んだ際にも巧は彼を人間として捉え、殺すことはしなかった。

彼の最期：それは、アークオルフェノクとの最終決戦の際にブラスターフォームに変身した巧でさえも一対一では勝ち目が薄かった。けれど彼が自分の命を捨てるつもりでアークオルフェノクを羽交い締めにし、彼の作り出した数秒の隙を狙い、最強の必殺技——ブラスタークリームゾンスマッシュを決め、アークオルフェノクに止めを刺した。

そんな巧にとって大切な友と同じ名前を持つ少年。

そんな少年を見てみたいという興味が湧いて、木場という少年がいる方向に体を向ける。

「やあ。 少しいいかな?」

体を後ろに向けると、金髪の髪を持つ少年と目があった。

その瞬間、巧は自分の手に持っていたカバンを落とした。

目の前にいた少年は、何処か木場勇次を思わせるような雰囲気を持ち、巧はそれを初見で感じ取り、一つの仮説を立てた。

——木場も俺と同じでこの世界に来たのか?

それは彼が木場勇次、本人であるということだった。

勿論、そんな可能性は低いと分かっていた。

魂の憑依なんて奇跡がそう何人も起こるものでない。

しかも自分の仲間に都合よく。

頭では理解できていたが、前の世界では死に別れであった自分の友とどんな形であれ再開できるのは巧にとって速く嬉しいことであった。

「なあ…お前、木場勇次か？」

「…?? いや、僕の名前は木場で合ってるけど、名前の方は勇次じゃないよ、祐斗だよ。兵藤一誠君」

目の前にいる木場勇次を思わせる少年は木場祐斗という名前であつた。

祐斗は巧の質問に少し首を傾げ、一拍置いてから、その答えを否定の形で答えて、巧が床に落とした学生バツクを拾い上げて、バツクについた埃を手でポンポンと落として巧に手渡す。

「そうか…。名前間違えてわるかつたな」

この目の前にいる少年―祐斗は木場勇次ではないという事が分かつた。

もし仮に本当の木場勇次ならば、自分の本当の名前を聞いて驚かない筈がない。

祐斗からは動揺が無いことから彼は全く関係の無い人物と答えを出して、彼の隣を通り過ぎようと歩き出す。

巧と祐斗が交差し合う位置で、祐斗は巧の肩を掴んだ。

「…なんだ、なんか用か？」

「うん。そのまま帰られちゃうと僕、リアス・グレモリー先輩に怒られるからね」

肩を掴まれた事と帰ろうとしたところを止められた事により、すこし怒りを露わにしそうになったが、祐斗の口からリアスの名が出た為にその怒りは静まり、巧の頭は冷静になり始めた。

そして目の前にいる祐斗は恐らくだが悪魔であろうと予想を立てる。

「取り敢えず、着いてきて」

「ああ…」

歩き出した祐斗について行く巧。

その際に教室に一瞥をしたが、何も言わずにそのまま早歩きで教室を足早に出た。

「まさか…木場君と兵藤のカップリングなんてー!!!」

「チヨロイイワ!! サイコー!!!」

「この絡みに私が泣いた!!」

なんて異常な女子高校生が目に入ったからとは思いたくなかったのであろう……。

「なんだよ…この部屋」

巧が連れてこられたのは、校舎から少し距離のある、古びた旧校舎の一室だった。そこはライトで照らされた部屋などではなく、ロウソクが部屋の明かりとなっている大きな部屋だった。

中には本棚があり、その中には巧には到底理解できないような文字で書かれたものや、まさに悪魔の巣窟と呼ぶに相応しいと言える禍々しい物が置いてあった。

魔法陣が描かれた布…などが置いてあり、この部屋の持ち主であらうリアスに対し、部屋をなんとかしろと言ってやろう。と心に決めた巧がいた。

「…で、あれは誰だよ」

「彼女は搭城小猫さん。ここ、オカルト研究部の部員なんだよ」

「……………」

「……………」

巧の視線に横に長い椅子に座りながら、お菓子を齧る少女が見えた。

祐斗の説明により、彼女の名前を小猫と知り、視線を向けると丁度、

小猫も巧に視線を向けており、二人の目が合ってしまう。

目を反らすべきか否かと巧は考えていたが、ここで目を逸らしたら負ける気がして、そのまま目を逸らさずにじっと小猫を見てると、小猫も負けじと目をそらさない。

祐斗には、この風景が猫と狼が睨み合う様に見えるに似ているらしい……。

「イツセーよく来てくれたわね。祐斗もご苦労様」

「彼が新しい子ですか？部長」

睨み合う両者の視線が逸らされる。

巧と祐斗の入ってきた扉から現れたのはリアスとその隣に長い黒髪をポニーテールで纏め上げている、リアスにも負けない美しさを持った少女だった。

巧はまた新しい人物の登場に新しく現れた少女をじっと見つめる。

「彼女は姫島朱乃先輩。彼女はここの副部長なんだ」

巧がわからないという顔をしているとそつと耳元に祐斗の解説が聞こえる。

これまでの話をまとめてみると、リアスはまず悪魔であり、ここはリアスの仲間が集まる所と仮説を立てていた。

つまりはここにいる者たちは皆、悪魔である。

自分を除いて…と考えており、これから何をするつもりなのかを聞くために巧は口を開いた。

「リアス。俺を何のために呼んだんだ？」

「ええ。そうね、遅れてごめんなさい。朱乃、祐斗、小猫。紹介するわ、私たちの新しい眷属ー『兵士』の兵藤一誠君よ！」

「はっ?? 眷属…なんだよ？」

眷属…その言葉の意味を詳しくは知らないが、なんとなくの考えだが、嫌なものが一つ浮かんでしまった。

外れていてほしい…。そんな願いは一瞬で打ち壊される。

「だから、イツセーは私の下僕で、眷属。つまりは悪魔なの？ 私のイツセーのご主人さまなのよ」

「……………嘘だろ……………」

いきなりの事実に巧はそう眩くことしかできなかつた。

新たな仲間

「ふあ……眠い。　　ったく、リアスの奴……」

早朝、巧は欠伸を噛み殺しながら、小声でリアスへの小言を口にして駒王学園に向かっていった。

既に兵藤一誠の体は悪魔になっているという事実を聞かされた。その後、悪魔の仕事として人間の願いを叶えるという仕事に駆り出されたのだった。

この街でリアスたちの使い魔と呼ばれる者達が人間に変化して、小さな紙を配っており、その紙を受け取った人物がその紙に願いを念じると、その願いに呼応して、魔法陣に変化して、そこから悪魔が現れ、召喚した人間の願いを叶えるという仕組みである。

それに則り、巧もやる気はなかったが、リアスには借りがあり、それから逃げるのも癪だと感じ、その仕事を引き受けたのだが……。

結果は惨敗だった。

呼び出されて、魔法陣で向かったはいいが、そこからの会話を繋げることが出来ずに……呼び出した人間も巧も両者無言のまま帰還した。

その事実をリアスにそのまま伝えようと、溜息をつかれ、リアスにビシビシと指導を喰らった。

それが思いの外長く、寝る時間が少ないまま、登校の時間となった。だからこんなにも機嫌が悪いのであった。

「でも……こいつはあの紙に願ったから……リアスの眷属になれたのか……」

巧は呟きながら、自分の掌を見つめ、ぎゅっ！と握りしめる。

その言葉通り、死する前に一誠は先程の願いを叶える紙を受け取っていたようで、墮天使に腹部を貫かれ、死する直前にその紙にリアスを呼ぶような願いを念じ、その願いに呼応して、リアスが現れて、そのまま一誠を眷属にする事に成功した……。

これが巧の知る、兵藤一誠の最期。

その後は何故か、そんな一誠に自分が憑依して、今の状態に至ったという事だった。

それに巧にはもう一つの疑問があった。

自分の今の体についてだ。

今の巧はオルフェノクの姿にもなれるが、悪魔でもあると言う状態だ。

そんな巧の疑問を駆り立てた一幕を思い出す。

『気がつかなかった。もう既に悪魔になっていたなんて…』

『ここまで悪魔としての存在が希薄になるとは気が付きませんでしたわ』

『…気がつきませんでした』

祐斗、朱乃、小猫の三人は、巧が既に悪魔であると言う事に気づいてはいなかった。

3人とも事実を聞いて、驚きを隠せてはいない様だった。

朱乃の口ぶりからして、悪魔になると他の者が悪魔かどうかなどを理解できる様になる、と言ってるようにも聞こえた。

——俺がオルフェノクだからなのか？

巧は握りしめていた掌に込めていた力を抜いていく。

力を抜いた指はじわじわと広がっていき、数秒後には掌を広げた状態に近いものになった。

オルフェノクとは短命という運命を背負っている。

人間からの異常なレベルでの急激な肉体の進化。

それらは人間ベースの体では到底ついて来られないような進化。

人間としての体がオルフェノクとしての力についてこれず、やがては体が持たなくなり、そのまま命を落とす。

これがオルフェノクの運命だった。しかし悪魔の体は人間の何倍も強い力を有し、人間では耐えることの出来ないオルフェノクの力も悪魔ならば、耐えられるのかもしれない。

それでもオルフェノクの力は強いため、悪魔としての存在が希薄に思われるのではないだろうか？と仮説を立てるがそれが正解かとは分かるはずもなく、巧は空を仰ぎ見る。

巧が見た空は青く、どこまでも広がっているような美しい空。

こんな綺麗な空を見たからか、難しい事を考えないで無心になって

空を見てた。

そんな巧の背後から聞いたことのない声が聞こえる。

「ううー、なんで、何もないとこで転んでしまうのでしょうか。これも主の与えてる試練なのでしょうか？」

声から聞こえるのは少女の声で、どうやら道に躓いて転倒してしまった様子。

主…この言葉が神を指す言葉とは知らずに、その少女の方を振り向く。

巧の目に映ったのは、道端で手に持っていたであろう、大きめのバッグの中身を地面に散らかしており、その少女は天に向けて両手を合わせ、祈りを捧げていた。

見るからに宗教信仰者だと気付いた巧は、足早にその場から立ち去るか、少女の荷物を取るべきか？という二択を考えてきたが、ここで彼女を見て見ぬフリするのは、後味が悪くなりそうなので、取り敢えず彼女の散らかった荷物を纏める為に、彼女に向けて歩きだす。

巧が近づいても気づかない様なので、先に荷物を纏める事にした巧は、腰を降り、そっと彼女の散らかった荷物を一つに纏める。

服などが主に入っていた為に彼女はこの街の観光客か何かなのかという考えが頭を過ぎったが、彼女の服装を見ると明らかにキリスト教系の信者である事を察した。

シスター服に顔を覆うようなローブ。

ローブの先からは少しだけ綺麗な金髪を覗かせる。

ーあん時の帰り道に…教会があつた様な…。

巧が思い出していたのはスティングフィッシュオルフェノクとの戦闘の帰りに自分が通った道の近くに教会があつた事だった。

この少女がいるという事はあの教会はまだ使われているという事になる。

「…おい、お前」

「ぎゃっ!!」

荷物を纏め終えたが、一向に祈りを止めない少女に後ろから声をかける。

いきなり巧の声が聞こえた事により、体を震えさせて、少し大きめの悲鳴に似た声を上げる。

とはいえ、巧も後ろからいきなり声をかけたので、驚かれたことに関してはなんとも思わなかった。

無言で少女に荷物を手渡したので、そのまま学園に向かおうと、足をまっすぐに伸ばして、そのまま立ち去ろうとした瞬間――

「ありがとうございます」

「別に、気にしなくていい」

後ろの少女からのお礼の声が聞こえ、思わず振り返る。

その瞬間、風が強く吹き、巧の少し長めの茶髪は風に靡く。

目の前にいたシスター服の少女が被っていたローブはその風により、彼女の手元を離れてゆき、そのまま地面をコロコロと転がって、何処かに行ってしまうようになる。

「まっ、待って! ……きゃっ!」

そんなローブを追いかけて少女は、その場から駆け出すが、運動に慣れていない。そう主張するような走り方でローブを追いかける。けれど風に靡くローブの方が早く移動をして、彼女の元を去っていくとする。

少女は必死で走るも追いつかず、自分の前に出した足と、後ろの足が纏れてしまい、前のめりになって倒れそうになり、目を瞑るが…前から、誰かが支えてくれる感触がして目を開ける。

「あ…」

「これ、あんたのだろうか?」

「二度も助けてもらい、ありがとうございます」

目を開けると、そこには巧がおり、自分の前に倒れそうな体を左手で支え、もう片方の右手には飛んで行ってしまっていたローブを握りしめていた。

巧からローブを受け取った少女は、それを再びシスター服に取り付ける。

巧は目の前に現れたのは長く綺麗な金髪の髪、ライトグリーン瞳を持った可愛い少女。そんな少女のおつちよこちよい振りを見る。

て、かける言葉が見つからなかった。けれど、特に要件はなかったの
でその場から離れようとする。

「じゃあな…」

短めに言葉を伝え、その場から離れようとするが、そつと自分の制
服の袖を掴まれた様で振り返ると、先程の少女が巧の制服の裾を掴ん
でいた。

「二度も助けてもらって悪いのですが…。 教会までの道が分からな
いんです…助けてもらえませんか？」

少女は顔からして、困ったと言わんばかりの様子で巧の顔を見つめ
る。

少女の顔を見て、足を半歩引く。

「俺はこの辺の道をあまり覚えてない。そんなに日本語が喋れんな
ら、他の奴に聞けばいいさ」

そう言って、その場から立ち去るつもりが、次の言葉で巧は足を止
める。

「あの…？ 私は日本語は喋れる事が出来ないのです…？」

巧は自分の耳を疑った。

今こうして聞こえてくる声は日本語の筈。

しかし、目の前の少女は日本語を話せないと言った。

勿論、巧も英語が達者に話せる訳ではない。

結果として巧は悪魔の力があるのでは？という結論に至る。長め
の茶髪の際足を掻きながら、口を開く。

「分かった。おれもうろ覚えだけどなんとかなるだろ」

フェイスフォンで時間を確認。現在の時間からして遅刻する事も
覚悟しつつも、目の前の少女を自分の記憶を頼りに送り届ける事に決
め、その場から歩き出そうとした。

「あつ…ありがとうございます！わ、私はアジア・アルジェントと言
います」

一歩を踏み出した瞬間に、アジアは自分の名前を巧に伝えた。そ
れを聞き、顔をアジアに向ける。

「兵藤一誠だ」

そう短く、アーシアに名前を伝えた。

アーシアは歩き出した巧に追いつくように歩き出した。

「イツセーさんは、この近くにお家があるんですか？」

「ああ…」

教会を目指し始めて十分程が経ち、巧達は目的の教会に向かって確実に近づいていた。

アーシアは歩きながらではあるが、巧との会話を行っていたが、巧自身は、コミュニケーション能力の低さを分かっている為か、あまり自分から話しかけはしない。

逆にアーシアが巧に聞きたいことを聞いて、それに答える。そんな形で二人は歩いていった。

「うえええん!!! 痛いよ?!」

二人の耳にこともの鳴き声が聞こえてきた。

どうやら、二人の歩いている道の右側にある公園で、子供が泣いているようだった。

よく見てみると、膝からが擦りむいており、そこから血が出ている。

どうやらこの子供はその痛みにより、涙を流していたのだ。

「男の子がこんな事で泣いてはダメですよ? ……ほら、これで治りましたよ」

アーシアはその子供を見た瞬間に、その場を離れ、子供の側に駆け寄り、その場で座り込み、子供に顔を近づけながら、慰めの言葉をかける。

次の瞬間に巧は言葉を失った。

アーシアは少年が足を擦りむいた部分に両手を翳す。数秒すると

アーシアの両方の中指から指輪が出現。彼女の瞳と同じ色のライトグリーングの光を放出させ、子供の怪我は数秒たらずで消え去り、完治したのだ。

「ありがとうー。お姉ちゃん!!」

その子供は怪我が消えてから、笑顔でアーシアに向けて礼を告げる。

しかし、その子の後ろから保護者が現れ、その子供の手を引っ張って、何処かに行ってしまった。まるでアーシアから急いで離れる為に。アーシアに向けられた視線。

それは巧にも覚えのあるー化け物を見るような目。

明らかに人間を超越した力を持つアーシアと、オルフェノクである巧。

この二人が出会ったのは必然なのか、またまた偶然かー

「イツセーさん、いきなり止まってしまつてごめんなさい」

アーシアは保護者の視線が刺さつて、その場で立ち尽くす。

数秒間、彼女は立ち尽くしたままだったが、すぐに巧に顔を向ける。

巧はアーシアが自分に向ける笑顔にぎこちなさを感じていた。

「ああ…。そろそろ着くからな」

そのぎこちなさを口には出さず、そのまま歩いて行く。

この後、二人は一言の会話も交わさなかった。

「着いたな…。彼処が教会だ」

道を先導して歩く巧の視線には山の中から顔を覗かせる教会が建っていた。

アーシアはその事実に顔を笑顔に変えた。

「イツセーさん。ありがとうございます。その…御礼などをさせてもらえませんか？」

アーシアからの提案だったが、巧はこれを断るつもりでいる。

大体、悪魔である自分がシスターのアーシアに関わる事は良いこと

ではないだろう。

それに時計を見ると、そろそろ急がなければ学園に遅刻してしまう時間帯に入りつつあった。

これらを理由に巧はその場から去る事にした。

「：別にお礼が欲しかったわけじゃない。それに俺もこの後に用事があるからな。　じゃあな」

「ありがとうございます、イツセイさん！」

また教会に来てくださいね!!」

立ち去ろうとする巧にお礼の言葉を掛けるアーシア。

振り返る事もなく、巧は歩きながらそつと右手を上げて、その場を立ち去った。

この風景を一匹の小さなコウモリが監視をしていた事に巧は気づく事は無かった。

「全く：：巧さん。　貴方は悪魔なのよ？　それを自覚して頂戴」

放課後のリアスたちの根城ーオカルト研究部部室では、リアスに説教をされる巧という風景が広がっていた。

「別に：：道に迷ったアイツを俺が適当な場所まで送っただけだ。　お前に文句を言われるような事はしてない」

部室には二人しかない為、リアスは巧をそのままの名前で呼んでいた。

リアスにアーシアを送った行動を咎められ、巧なりの反論で返す。「巧さん。　教会には悪魔祓いを使える者がいるのよ。」

もしも、私達が悪魔祓いを受ければ：：死は免れないわ。人間の死しか知らない貴方にとっては、わからないかもしれないけど：：。悪魔祓いを受けると、何も感じずにその場で死ぬの」

人間としての死…。

巧はリアスに自分がオルフェノクである事だけは話してはいな

かった。けれど、巧は多く人の死を目の当たりにしていた事を知って
リアスはこの言葉を使ったのだった。

巧も自分の身を案じてくれるリアスに何か言うつもりもないが、一
つだけ聞きたいことがあった。

「リアス…。人間なのに、人間業じゃねえ事が出来る力を知ってるか
？」

アーシアのあの力に関する事だった。

傷を元どおりに直すなんていうのは医者でも難しい事だ。

それをあつさりややってのけるアーシアの指輪の力は一体なのか
？という謎を知りたい巧は顔をリアスに向けて、質問をする。

「それは神器ね。神が人間に与えた力よ。その能力は様々な物があ
るわ。特にその中でも神をも消し去ることのできる上位クラスの神
器を神滅具と言うわ。それがどうかしたのかしら？」

「……いや、何でもない」

セイクリッド・ギア―聞いた事のない単語だったが、それがアー
シアの力の秘密である事は理解でき、巧はその場から立ち上がろうと
した瞬間のことだった。

突然扉が開き、黒髪の少女―朱乃が入ってきた。

「部長、この町にはぐれ悪魔が侵入してきました」

朱乃のいつもよりも少し低めの声が部屋に響き、リアスの顔を真剣
な物に変わっていた。

「……はぐれ悪魔ってなんだよ…スライムみたいなもんか？」

巧はなんとなくの適当な予想を口に出してきた。

「ふう。やはり人間の肉は美味しいねえ…」

先日のステイングフィッシュオルフェノクとの戦闘を行った建物
で、何かを口に行っている咀嚼音が響く。

それはまるで食事を行っている時の様だ。

はぐれ悪魔のバイザーは、口に入れた人間の死体を飲み込んで、一息ついた。

はぐれ悪魔：元は、自らの主人を持っていた下僕悪魔だったが、主人を殺したり、主人の元を去り、その後人を襲うような悪魔を指す言葉。

バイザーは、次なら獲物を捕らえようとその建物から、出ようとした瞬間のことだった。

「あら？　もう、こんな人間を食べてしまったのね。

私たちの仲間を増やす機会を潰すなんて：バカな娘」

バイザーの視界に入ってきたのは、一人の人間の女性。

長い黒髪をもち、服装はジーンズにワイシャツのみという服装だが、それは自分のスタイルの良さを引き立てる為のものであり、スタイルだけでなく、その女性は顔も整った美人と言えるだろう。

「新しい餌が自分から来てくれるなんて：ありがとうねえ!!」

現れた新しい餌に食いつこうと、体を前に寄せる。

バイザーに近寄られた女性は一歩も引かずにその場で立ち続ける。

その顔からは恐怖なんて物を一片も感じられない。

自分の姿を見ても驚かずに、恐怖心を抱かない目の前の女性に怒りが現れる。

まるで自分を見下したような笑みを浮かべ続ける目の前の女性を殺そうと、自分の大きな前足を振り上げた時――

「私たちの実験に付き合ってもらうわ。果たして悪魔が我々、オル

フェノクの器として使えるのか――それが王の復活に繋がるのかを」

女性の顔から笑みが消え、冷たい物となった。

バイザーはその微妙な変化に気付かずに、そのまま足を振り下ろす

……が、相手を踏み潰せた感触はせず：次の瞬間には自分の前足から激痛が走った!!!

「うぎやああああ!!!　痛い痛い!!!」

その痛みから、体のバランスを保てずに後ろに転倒する。

ズシイイイインという地鳴りが響く。

痛みに耐えられずにのたうち回っていると、自分の足元に居たはず

の女性が目に入る。

しかしその女性はすでに人間の姿では無かった。

灰色の基調とした体を持つ怪物——オルフェノクに変化していた。

そのオルフェノクの名はロブスターオルフェノク。

「あつ…ああああ?!?!」

次の瞬間、バイザーの意識は奪われる。

ロブスターオルフェノクが手に持ったスピアードで、バイザーの心臓を貫いたからだ。

バイザーはこうして呆気ない死を遂げた。

「貴方がオルフェノクになれたら…。王の復活は格段に近づく。あとはあの堕天使ちゃん達にも伝えないとね…」

人間の姿に戻った女性は再び闇の中に紛れていった。

「はぐれ悪魔っていうのは、僕らみたいに主人を持っているのに、その主人を裏切ったり、殺したりして逃げる悪魔の事を指すんだよ」

「巧達は朱乃の話を聞いてから、祐斗と小猫を呼び出して、すぐにはぐれ悪魔の居場所に魔法陣を介して移動をした。」

巧はそこに見覚えを感じていた。

不意にリアスに視線を向けると、リアスも巧のデジャブを感じ取ったのか、説明口調で話す。

「ええ、ここは確かにこの前の所よ」

「…ここに本当にはぐれ悪魔っていうのがいるのか?」

「ええ…。人間を襲っているという情報もあるわ。急ぎましょう」

巧は人間を襲うという言葉聞いて、ファイズギアの入っている

シヨルダーバックをしつかりと持ち直し、歩き始める。気合いを入れる巧の肩をリアスはそつと触れる。

「そんなに気負わなくていいわよ、イツセー。今回ははぐれ悪魔ですもの。貴方には悪魔の駒の説明や特性についての話もしてなかったのだから」

イーヴィル・ピース。

巧は、聞いたことない単語で頭を悩ませれるが、小猫に腰の部分を押かれ、少し遅れていた歩調を速め、前に進んでいたリアス達に追いつく。

「そうね、悪魔の駒とは、上流家庭の悪魔、爵位のある悪魔に配られる眷属を増やす為の駒よ。それにより、爵位持ちの悪魔は眷属を増やすの。イツセーは、チェスを知ってる？」

建物内を歩きながら、リアスの解説コーナーが始まる。

リアスの質問にうなづく形で答え、説明の続きを待つ。

「そのチェスに則って、それぞれの駒の特性をその眷属は手にする事ができる。僧侶ならば、高い魔力、騎士ならば、圧倒的なスピード。戦車ならば、凄まじいパワーに防御力。女王は、全ての駒の特性を扱える最強の駒よ」

リアスは、自分の眷属を見つめながら説明を行った。

巧は小猫が戦車である事を初めて知り、彼女にそんな力があるのかを疑ったが、先ほどのパンチの痛さを思い出し、それ以上は口に出さなかった。

「…おかしいわね。この屋敷にはバイザーの魔力が感じられないわ」

リアスが最初の部屋の中心部分でそんな事を呟いた。

その一言で皆にも緊張が走る。

そんな中、巧は自分たちの頭上から嫌なものを感じていた。

まるで…自分と同じ何かが生まれようとしている。

何かが空から降ってくる…そんな嫌な予感がして、天井を仰ぎみ

る。

すると…天井の壁の一部からは亀裂が生まれていた。

「ーまさかつ！ バイザーはオルフェノクに!？」

「リアス！ 三人を連れて逃げる!!!」

巧の声が建物に響くと同時に天井が壊れ、空からはエレファントオルフェノクが降ってきた。

エレファントオルフェノクが、地面に落下し、その衝撃に足をシビレさせる。

いきなりのオルフェノクの登場に、祐斗や小猫や朱乃は顔を困惑に染めていた。

「うぐわあああ!!!」

エレファントオルフェノクの体がバイザーの体に一瞬、戻ると再びエレファントオルフェノクに変化した。

その後もこれが交互に行われる。

光が点滅するようにバイザーの体とオルフェノクの体が入れ替わっている。

「ーこいつ、まだ完璧にオルフェノクには変化できないのか？」

苦しみながら、今なお変化を続けるバイザーを見て巧はこれを使徒再生と予想していた。

オルフェノクには二種類がいる。

一種類目がオリジナルと呼ばれ、人としての死を迎えた後にオルフェノクに覚醒するという種類。

もう一種類が使徒再生と呼ばれる物。

オルフェノクに殺された者が、その後オルフェノクに覚醒することを指す。

オリジナルは使徒再生よりも強いが、オリジナルは数が少なく、使徒再生によりオルフェノクになる者が多い。

目の前のバイザーを殺したオルフェノクが何処かにいる。

しかし、今そんな事を考えている時間はない。

巧は急いで、バッグに入れてあるファイズギアを取り出そうとシヨルダーバッグに手をかけた、その時だった。

「危ない、イツセー君!!!」

自分に危機を知らせる祐斗の声が聞こえ、前を向く。するとそこにはエレファントオルフェノクの巨大な尻尾が迫っていた。

飛び越える事は不可能と判断し、体を前に転がして、尻尾の軌道上よりも下を潜り抜け、一息ついた瞬間だった。

エレファントオルフェノクの尻尾の攻撃により、腰を右から左に動かしたことにより、右足が巧を狙う様に向かってきており、その距離はすでにゼロに近い。

流石に巧もこの距離は避けることが出来ない。

ならば、と巧は行動を取った。

回し蹴りの要領で向かってくる右足と自分の体が接触を起こす前に、両足に力を込めて、後ろに向けて跳んだ。

前ではなく後ろに跳躍し、一秒後に巧の体とエレファントオルフェノクの右足はぶつかり合い、その体を壁に叩きつける。

壁に叩きつけられはしたが、自分を襲う衝撃を和らげていた事により致命傷は避けられた。

手を壁に添えながらも立ち上がる。そこで巧は今の自分の体の異変に気付いた。先ほどの攻撃による痛みが少ないのだ。

オルフェノクである巧の体でもそれなりの痛みがあると覚悟していたが自分の体の痛みが数秒で取れたことに驚く。

「…喰らえっっ!」

「魔剣創造!!」

エレファントオルフェノクの猛攻を許した小猫と祐斗だったが、二人は巧が難を逃れた事を確認した後に、自分のいた場所から走り出した。

祐斗は右足、小猫は左足にポジションを取る。

朱乃はエレファントオルフェノクの陽動を引き受け、悪魔の羽を生やし、できるだけだけの視線を集めていた。

リアスもまた、朱乃と同じように出来るだけ、攻撃が直撃しない間

合いをギリギリ保ちながら、エレファントオルフェノクの注意を引きつけていた。

「今よー・三人とも!!」

リアスの声が三人の耳に聞こえた瞬間、攻撃が放たれる。

祐斗は炎を生み出す魔剣を両手で持ち、右足に出来るだけの衝撃とダメージを与えられるように、一撃目に水平切りと、二撃目には上段切りを放つ。

炎を纏った攻撃であった為に、エレファントオルフェノクの体にうつすらと十字架の跡が残る。

「吹っ飛べ…」

祐斗の斬撃が左足に強襲した、一秒後。

小猫は両手で右足を持ち上げて、戦車の力を最大限に引き出す。生み出した力で巨大な体を誇るエレファントオルフェノクの体を一瞬浮かせる事に成功した。

そこから身体の重心移動と相手に体制を整える時間を与えないように素早く手を離す。

小猫のハンマー投げにも似た攻撃により、体の重心が地面に近くなり、そのまま巨大な体を残った後ろ足の二本の足で支えることは出来ず、地面にひれ伏す。

「あらあら、うふふ！ これで終わりですわ!!」

「吹き飛べっ!!」

先ほどまで、自分たちの視界の殆どを奪っていたエレファントオルフェノクは地面にひれ伏している。

悪魔の翼を生やし、空を飛んでいる朱乃とリアスは、それぞれの魔力攻撃の準備を始める。

しかしリアスには一つの不安があった。

「ー私の魔力でこのオルフェノクを倒せるの？」

先日のステイングフィッシュオルフェノクにはドツチボール程度のサイズではあったが、自分の滅びの魔力は致命傷には至らず、ただの火傷程度で済まされてしまったという事だ。

けれど、今の目の前にいるのは巨大な敵だ。

これならば最大の力を込めて撃てる。

五メートルをゆうに超えている目の前の敵が地面に倒れている以上、外す訳がない為に朱乃とリアスの二人はエレファントオルフェノクにむけて手を向ける。

二人の魔力が最大限まで上がると、リアスからは先日とは比較にならないほどの大きさの魔力攻撃が、朱乃は巨大な雲から生まれた雷を魔力により創り出し、それらは見事に混ざり合い、そのまま地面にひれ伏しているだけのエレファントオルフェノクの体に命中し、火花を散らす。

「朱乃！ 全力を込めて!!」

「分かりましたわー!」

自分から少し離れた距離にいる朱乃に声をかけて、消滅の魔力に込める力を強める。

朱乃もそれを見て、自分が放つ雷の威力を強める為、さらに魔力を注ぎ込んだ。

それから数秒が経ち、二人は息を途絶えさせながら、天井から地面に着地する。

「部長、お疲れ様でした。それとイツセイ君がまだ…」

「あつ…そ、そんな…」

地面に着地すると、祐斗はすぐに自分に駆け寄り、声をかける。

しかし、リアスは祐斗の後ろにいる、エレファントオルフェノクが立ち上がるうとするのを見て言葉を失う。

リアスの様子を不審に思った祐斗が後ろを振り向く。

朱乃や小猫も、自分たちの全力攻撃を食らっても倒せないエレファントオルフェノクに驚きの表情だったが…。

「お前ら、下がってる!!」

こちらに向けて、前足を利用し、踏みつぶそうとしてくるエレファントオルフェノクに身構えるが、後ろからは巧の声が聞こえた。

『Standing By』

「変身!!」

『Complete』

自分たちに向けて振り下ろされたエレファントオルフェノクの前足を変身を完了させたファイズが受け止める。

両手を交差させ、力を込めて踏ん張る。

そんな力を込めていても支えるのが精一杯であった。

「お前ら…っっ!! 下がってろ!!」

巧の必死な声からリアスは悔しいながらも、じぶんたちでは足枷にしかない。

その事実を受け止め、朱乃達と共にその場から退く。

巧もリアスたちが移動し終えたのを確認し、巨大な前足を支えていた両手の力を抜いて、体を前に倒し、前転により移動を行う

支えを失った右足の前足は勢いよく地面に突き刺さり、クレーターを作り出していた。

リアスはもしもあのまま巧が受け止めてくれなかったら…と考えるてしまい、頭を横に振る。

そしてあの赤い閃光の勝利を願う事しか出来ない自分を情けなく思った。

「グオオオオン!!!」

未だ自分の意識を保っていないエレファントオルフェノクはただ自分の力のままに体を動かし、目の前の敵であるファイズを踏みつぶそうとしていた。

「……」

ファイズは自分の力に飲み込まれ、ただ暴れているエレファントオルフェノクに視線を向ける。

「……こいつも…力に飲み込まれなきゃ普通に生きてたかったのかもな……」

力に飲み込まれる前のバイザーを知らない巧は、ここで倒さなければ、今よりも大きな犠牲が出る事だけは分かっていた。

だから、自分が倒す。

その罪はリアスや他の者には背負わせない。

戦うという罪は自分が背負う。

そう決意を込めて、右手首をスナップさせて、前に駆け出した。

助走を付けて、勢いよく跳躍を行う。

エレファントオルフェノクが上の階から落下してきたことにより、天井に穴が開きっぱなしだったので、跳躍をして体が天井にぶつかる心配もない。

ファイズは最高地点まで飛ぶと、そこで一瞬の静止のちに再び落下をし始める。

エレファントオルフェノクは空から降りてくるファイズが視界に入らずに、自分の体に入り込んできた際に、ファイズの居場所に気づき、ファイズを落下させる為に体を大きく揺らすが、全力でしがみついているために中々、地面への落下はしなかった。

「うらあ!!」

背中に乗った状態から、全力の力を込めて、背中を殴る。

それも一度や二度ではなく、何度も何度も殴る。

「グオオオオン!!! グギアアア!!!」

先ほどまで、同じような鳴き声だったものが、少し変化して、ファイズ自身も自分の攻撃が体の内部にまで届いた事に気がついた。

そこで一瞬、エレファントオルフェノクの体にしがみつく為の両手に込める力が弱まり、その際に、体を揺さぶられてファイズの体は地面に落下する。

「痛っ!!」

思ったよりも痛みがあったようで、思わずそう言ってしまいが、座り込んだ体制のまま、ファイズドライバーの側面についているファイズポインターに手を掛ける。

カシャという金属音と共にベルトから解除し、横向きに換装されているファイズフォンの中央に位置する部分にある、ファイズの顔を思わせるマークで出来たメモリーを抜きとり、ファイズポインターにある窪みに差し込む。

『Ready』

ファイズポインターはデジタルトーチライトの形から、先端部分が前に突き出たような形となり、右足首についている固定部分に取り付ける。

ファイズはそこで立ち上がり、横に向きになっているファイズフォンを開き、Enterボタンを押す。

『Exceed Charge』

その音声と共にファイズドライバーの縁から、ファイズポインターに向けて、フォトンブラットが伝わる。

何時ものように、溜めの動きを行い、勢いよく駆け出し、そのまま天高く跳躍。

その場で一回転をし、その際に足を前に突き出す。

ファイズポインターからは赤い光、ポインティングマークが飛び出し、エレフアントオルフェノクを捉える。

「やあああああ!!!」

そのまま必殺のクリムゾンスマッシュがエレフアントオルフェノクに突き刺さる。

数秒後に、地面に着地を決め、そつとエレフアントオルフェノクがいた方向を向く。

体の崩壊と共に古代ギリシャ文字のφが赤く示されており、何時もとは違い、青い炎を発生はさせずにそのまま灰となってエレフアントオルフェノクローバイザーは今度こそ本当にこの世界から消えた。

「ふう…」

一息ついてから変身を解除し、そのままショルダーバックにファイズギアを押し込む。

その際にリアスたちはただただ、呆然としながら、巧をみつめていたが…。

「イツセー君」

「…ヒーローみたいでした…」

小猫や祐斗がその場から帰ろうとする巧を離さないと言わんばかりに話しかけてくる。

巧は彼らとはそろそろ関わりを絶つべきだとも考えていた。

オルフェノクとの戦いでは、彼らも危険にさらす。

先程のリアスたちの攻撃の際に何もせずにしたのも、オルフェノクに対する諦めのようなものを持って欲しかったのかもしれない。そうすれば、自分には関わってこない。巧はそう考えていた。そういう考えでいたが、リアスたちは離れるどころか、こうして近づいてきたのだ。巧はそんなリアス達の存在を嬉しく思っている自分がいる事に、気付く。少しだけ口元が上がるのを止めずに少し不器用だが、確かに笑顔を浮かべている巧がそこにいた。

アーシアの夢

「イツセー、今日こそはキチンと契約を取ってきなさい！」
「何度も言わなくても分かっているってーの」

エレファントオルフェノクの討伐から一日が経ち、巧は放課後のオカルト研究部にて、リアスに今度こそ悪魔としての契約を取ってくるように催促されていた。

あしらう様に答えるが、その答えを聞いたリアスの顔が一瞬、恐怖を醸し出すような物になり、寒気を感じる。

「…まあ、契約とかいうのを取ってくれば文句は無いだろ」

寒気を感じたのと、リアスの顔から焦りに似た物を感じ取り、リアスを落ち着かせるためにもやる気はある事を示す言葉を返す。それを聞いたリアスは少しホツとした顔を見せ、巧を見つめながら、こう返した。

「そうよ。イツセー、貴方の力は上級悪魔に匹敵する…いえ、最上級クラスのものよ。後は、悪魔としての契約をきちんと取って来れば、いつか貴方も上級悪魔になれるのだから、頑張りなさい。それと、何かあった時はあなたの携帯に入っている番号に連絡して頂戴」

「ああ」

リアスの言葉にあった上級悪魔になる。その言葉に大した関心を持たなかった巧は、急いで悪魔を呼び出した人間の元に向かう為に、呼び出した場所とオカルト研究部を繋げる魔法陣の上に移動する。

「準備いいぞ」

「分かりましたわ。 それでは、イツセー君、行ってらっしゃい」

魔法陣に魔力を送り込む役目を果たす朱乃に、自分の準備が整った事を伝え、朱乃も巧の準備が整った事を確認し、魔法陣に魔力を注ぎ込む。

巧の足元にある魔法陣から赤い光が発生し、そのまま自分の体が魔法陣ごと何処かに向かつて行くのが分かった。

「……雰囲気作ってんな」

巧は魔法陣での移動から目を開け、最初に見えた景色は自分の視界を覆い尽くすように暗い空間だった。

真っ暗とはいえ、悪魔になった影響で強化された視力とオルフェノクとして強化された体の二重効果により、部屋の明かりこそ付いてないが、巧がこの家を移動するには十分な視界情報があった。

周りを見渡すと、自分の足元に靴が複数置いてあったり、一歩先には段差がある。

この二つからここが玄関である事に気づき、自分の履いている靴を脱いで、玄関からリビングに向かう廊下に足を乗せる。

リビングまでの距離はそう遠くはない。

一歩、足を前に出し後に、何かがこの家を覆った。

自分がこの空間から出られなくなった。

そんな奇妙な予感が頭の中を過ぎった。

ーリアスに連絡を入れるか？

懐にしまつてあるフェイスフォンに触れる。

フェイスフォンはフェイスに変身する為に必要な物だが、それ以前に、携帯電話としても利用が可能。そのフェイスフォンに入っているリアスの連絡先に電話を入れるか、迷ったが今のはあくまで自分の予感である為、余計な事でリアスの心配を仰ぎたくない。

ただでさえ、リアスは眷属を大事に思っている。

その眷属が危険な目にあうと知れば、勝てないと分かっているオルフェノクにも戦いを挑みかねない。

ひとまずは、様子見として連絡を入れる事はしないと決め、フェイスフォンに触れた手を下ろす。

「ふう……行くか」

部屋の前に立ち、落ち着いてない心臓。

血液が循環し、その際の鼓動が巧の体に響き渡る。それらを落ち着かせる為に、大きく呼吸を行う。

肺から二酸化炭素を排出し、口から新鮮な酸素が入り込んで、巧の体に僅かながらに残っている緊張を解きほぐす。

ドアノブを握りしめ、力を込めてドアを開く。

しかし、そこに移るのは僅かな光だけだった。

どうやら呼び出した人間は悪魔が来るという事で、雰囲気作りをしていたようだ。部屋の四隅の近くにロウソクを部屋の明かりとして立てていただけ。そのロウソクの火が巧の視界に映る。

部屋には誰かの気配を感じるが、それと同時に体の内側から、何か嫌な物を除外しようとする動きを感じる。

巧が部屋には一歩、足を踏み入れると同時に冷たいものを踏んだ様に何かが触れる。

「…血…。まさか……………おいつ!! あんた!!」

巧の足が踏んだのは床に流れている血。

それも少量などではなく、大量な出血だった。

血の流れを目で追って行くと、そこには床に伏している四十代男性と思われる人物がいた。

巧は思わず声を荒げ、駆け足で男性の元に近づく。

「ああの嫌な予感はいったのかよ!!」

声をかけて、服をゆさぶったり、肩を叩くなどの行為を行うと、男性から少しの反応が見えた。

「あんた大丈夫か!! 誰にやられた!」

「ハア…ハア…。君が…悪魔君…かい?? ハハ…普通の男の子じゃないか…………。逃げ…なさい。エ…エクソシストが…」

男性の声は途絶えつつも、何とか最後まで言葉を伝える。

こうしている間にも彼の命は尽きかけている。

抑えることのできない焦りが巧の中に生まれる。

巧は、これをどうにかできるとは考えずにリアスに連絡を入れようと懐に手を入れた瞬間――

「あらあら? まだ生きてたのかい、このおっさん!!」

巧でも床に倒れている男性でもない第三者の声が聞こえ、その声の聞こえる先に視線を向ける。

そこには灰色の髪、赤い目といった奇妙な出で立ちの少年がいた。しかし、その目からは常人とは考えられない程の狂気が感じられる。

「…お前」

「あらあら？…そ…こ…に…いるのは悪魔クン??」

いいね、いいね?。本格的に悪魔払いをしちやいます!つと、その前に自己紹介をしちやましょう。俺様の名はフリード・セルゼン。簡単に言うと少年神父。つまりはクソ悪魔共を殺す、ヒーロー。エクソシストでございますう!!!」

相手をバカにした態度と間延びした言葉使いが巧の気を荒立たせる。

自己紹介を終えたフリードは巧から刺さる殺気にも似た視線に顔を喜びに染める。

「おつ! やっぱクソ悪魔くんらしいクソみたいな目をしてくれないと盛り上がらないZE☆」

舌ペロを少しだして、笑顔を見せるフリード。

巧は男性の体に触れ、その冷たさを確認する。

先ほどから一言も喋らずに目を閉じて、眠りについたようになってる。

そう…つまりこの男性は殺されてしまったのだ。

このフリードの手によって。

巧は男性の遺体を横に倒れた状態から仰向けに直す。

フリードはその巧の行いを見て、大口を開けて笑い出す。

「ぶっひゃひゃひゃ!! なになに!! 悪魔呼びだしたクズの為にこの僕ちゃんに背中を見せちゃうの!?!」

「…お前、なんで殺した。なんで殺す必要があった」

その言葉から怒りが込められている。

背中を向けていた巧からその本気の怒りを感じたフリードだったが、そのふざけた態度は直ることはない。

「何、ヒーローみたいな事言ってるのぶぎや!!」

フリードの体は言葉の途中で宙を舞った。

巧の力の込められた拳がフリードの顔を抉るように突き刺さり、その力により体は地面から離れた。

地面に背中から落下し、鼻から生じる痛みを感じ、左手で鼻に触れる。

そこには大量の血が染み付いており、それを見たフリードの気分は高揚する。

「イイネイイネ!! そういうの待ってたんだよ!! この剣で君の体を突き刺して、この銃で、君のハートを撃ち抜いて、Fall In Love!!!」

倒れた状態から、そのまま体に勢いをつけて立ち上がり、来ていたコートの懐からは剣の持ち手だけを取り出し、右手に剣を持ち、左手には拳銃を取り出した。

右手に持っていた剣の持ち手からは光で出来た刀身が飛び出す。それを見た瞬間に巧の体が一瞬震えた。

体が理解していた。

あの剣は危険——触れれば死ぬ。

巧も真正面から突っ込む事は止め、懐からファイズフォンを取り出す。

「あらあら?! 携帯なんて取り出して、何のつもり?!」

フリードはいきなり携帯を取り出した巧に質問を投げかけるが、その質問に答えずに、ファイズフォンを開き、「106」と番号を押し、Enterキーを押す。

『Burst Mode』

ファイズフォンから音声が発せられる。

音声が聞こえた後に、巧はファイズフォンを縦に開いた状態から左に傾け、銃の形に変形させる。

この光景を見ていたフリードは思わず声をあげる。

「なんなんですかっ! その面白ケータイはっ!」

声を上げながら、光剣を上から下に振り下ろし、その軌道上に巧を

しつかりと捉えている。

巧の後ろには男性の遺体があり、巻き込むわけにはいかない為、自分の右側に向けて体を転がして、光剣の軌道上から体を外すが体のバランスを崩さないように立ち上がりフリードを視界に捉える。

「あらあら、剣じゃなくて、銃で死にたいのね!!」

巧に光剣を避けられた事に少しばかり怒りを燃やしていたフリードは体を転がして、立ち上がるうとした瞬間を狙って左手で持っていた拳銃の照準に巧を捕らえようとしたが、赤い光線が自分の拳銃を撃ち抜き、その先にいる自分に向かってきており、咄嗟に顔を直ぐに曲げられる範囲で曲げると拳銃を撃ち抜いた光線が自分の頬を擦る。先ほどまで自分の顔があった位置の背後の壁には穴が作られていた。「そのケータイおもちゃとかじゃないんだね?。いいね、君とは全力で遊びたいから…。まさか、あのお姉さんのくれた力がこんなに早く使えるなんてね…」

フリードは自分の背後に作られた穴を見て、武器をその場に放り投げる。

巧はそれに疑問を持ちながらも、右手に持ってファイズフォンでいつでもフリードを撃ち抜く覚悟であった。

睨み合う二人。

そんな殺し合いの空間には不釣り合いな綺麗な声が巧の耳に入る。

「きやああ!!」

フリードよりも奥の方から聞こえる声。

しかし、それは初めて聞こえる声ではない。

巧が脳裏に描いたのは先日出会った少女。

この街の教会に行こうとしていたが、道が分からず巧に助けられた少女。

「ーな、なんで! なんであいつがここ!」

焦る巧の視線の先にいたのは…すでに動かなくなった男性の遺体とそこから流れ出る血に怯え、恐怖の声を上げるアーシアだった。

「助手のアーシアちゃんじゃ、あつりませんか!」

フリードはアーシア見て、助手と言った。

対するアーシアはそんな声が聞こえないのか、未だ遺体を見て体を震わせている。

「…フリード神父、これは一体どういう事ですか…?」

そんなアーシアから出る声はとても震えたおり、フリードにこの現象を…誰が見ても明らかかなこの状況が嘘であってほしいと願うようなものだった。

「これが俺たちの仕事…そう、シ・ゴ・ト!!」

悪魔に頼るなんて既に人として終わってる証拠なんです!

だから、そのクソ悪魔と一緒に殺してやるのが…今夜の我々のやるべき事なんですよね?!」

「えっ……悪魔……。そ、そんな…だってあそこにいるのはイツセーさんですよ?」

アーシアはずっと床に向けていた視線を前に向けると、自分の目を疑った。

そこにいるのは、駒王学園の制服を着てフリードと向き合い、ファイズフォンを握りしめている巧だったから。

「だから、彼は悪魔なんだよね。あれ??まさか、まさかの因縁フラグあったの?? でも、俺たちは既に堕天使様のご加護が無いとダメな半端モンなんだぜ…」

フリードは近寄ってアーシアの耳元で囁く。

目から溢れ、地面に零れ落ちそうな涙をなんとか堪え、巧を捉える。

嘘だと、その一言を期待したアーシアの希望は砕かれる。

「俺は悪魔だ…」

巧の答えを聞き、フリードは切っ先を巧に向ける。

それを見たアーシアは急いで巧とフリードの間に立ち塞がった。

その行動に巧は驚き、フリードは目を細める。

「何のつもりですか…アーシアちゃん。ふざけると君の命を奪っちゃうよ……いいのかな?」

「イツセーさんは優しい人です…!! フリード神父、どうかこの方を見逃してください!」

アーシアの言葉でフリードの顔は悍ましい表情に変貌し、先ほど地

面に放り投げた光剣を拾い上げ、アーシアのシスター服を切り裂いた。

腹部の一部と、胸元の肌が露わになるが、アーシアはそれでも立ち塞がった。

その場から退かないアーシアを見て、フリードは怒りをあらわにし、アーシアの体に触れようとするが……。

「らああ!!」

自分が突き出した右手を巧の左手が弾き飛ばし、防御の姿勢を全く取っていない状態で再び顔面に巧の拳を食らってしまった。

「ぐぼおお!!! ……やっぱあんたぶつ殺す!」

巧のパンチにより、リビングの中心にあるテーブルに体を激突させる。

怒りの表情を巧に向けるが、巧はそれをなんともない顔で受け流す。

巧の体に光剣を突き刺そうと、フリードは体を起こすがそんな二者の間に、突然、魔法陣が出現する。

「おい、これ着てろ」

この状況でリアスたちが来たことにより、巧は安堵の顔を見せ、隣に立つアーシアに自分のブレザーを手渡す。

流星に彼女の服が破けたままでは、困るだろう。

巧の気遣いと恥ずかしさからブレザーを受け取るアーシア。

「その…イッセーさん。 助けてくれてありがとうございます…」

「いや、お前のおかげでなんとかなった」

互いに礼を告げる両者。

その二人の前にリアスたちが魔法陣に乗り、現れた。

「良かったわ…イッセー。 はぐれエクソシストを相手によく生きていたわ。 というか、心配は無用の様ね」

巧の前に現れた、リアスは心の底からの笑顔を巧に見せ、巧に圧倒されていたフリードを見て安堵の声を漏らしていた。

「なんですかい、この悪魔の軍勢は。 だったら、俺も墮天使様をお呼びしまーす!!!」

フリードはそう叫ぶと、天井に近い空間から歪みのような物が生まれる。

それを見て、小猫が何かを感じ取ったようだった。

「墮天使が複数来てます…」

墮天使——巧はその言葉を聞いて、アーシアの手を引く。

自分の手を引かれたアーシアは少しばかり驚いた顔を見せる。

「おい、お前はリアスと一緒に逃げろ。俺が連中を引きつける。おい、リアス…」

こいつを頼む。

そう言おうとした巧だったが、突如自分の体を何かに押しさえつけられる。

「何してんだ…離せっ!」

自分の体を押しさえつけている二人——小猫と祐斗はそれぞれが巧の服を引っ張り、アーシアと自分を結ぶ手を離させようとしていた。

「イツセーさん。本当にありがとうございます。」

また…きつとまた会えますだから…今は」

アーシアは目尻にほんの少しの涙を浮かべながら、自分と巧を繋ぐ手に込める力を抜いた。

スルリと離れていく自分と巧の手。

自分の手にはまだ、巧の手の暖かさと感触が残っていた。

「朱乃、ジャンプの用意を」

「はい、分かりましたわ」

リアスは墮天使達と戦う事はせず、その場から部屋に戻ろうと魔法陣を引くように朱乃に命じる。

早々と魔法陣の準備を済ませ、グレモリー眷属にのみ使える魔法陣を巧やリアスたちの足元にも届くように広げる。

「おい…あいつが…墮天使に捕まっちゃうんだよ!!」

「駄目だよ、兵藤くん。今は墮天使とぶつかり合うことは出来ないんだ—」

「今は逃げる方が大事…」

怒りと焦りの籠る声を出しながら、自分の体を抑え込む祐斗と小猫を何とか引き剥がそうと体を揺らし、アーシアの手を掴もうと手を伸ばす。

自分を止めようとする祐斗と小猫の声は耳に入っていない。

「！」

魔法陣による移動が行われ始める。

自分の視界が召喚による移動の時同様に、赤い光に包まれる前。その瞬間に巧が見たのは……

「ありがとうございます……イツセーさん」

涙を流しながら、自分にお礼を告げるアーシアの顔だった。

「遅れてごめんなさい……イツセー」

部屋に転送を完了し終え、巧の体を押さえつけていた小猫と祐斗の拘束も外れる。

巧はおぼつかない足取りだった。

「――俺のせいで、あいつもあのおっさんも……」

巧は先ほど、遺体と化した男性と涙を浮かべるアーシアの二人の顔が頭に浮かんでいた。

そんな巧に謝罪の言葉を小さく、顔をうつ向けて口にするリアス。

「ごめんなさい――それは、遅れた事に対することではなく、アーシアを救う判断をしてあげられなくてごめんなさい。」

巧にはそう聞こえていた。

「お前ら……何も悪くない。俺の……俺の責任だ」

リアスたちに責任はない。

彼女たちは自分を助けるためにあの場に来て、自分だけを回収し、この場に舞い戻る。それが彼らのやるべきことだっただから。下手に他種族に攻撃することが良いこととは言えないのは巧も知っていた。

けれど、自分の迷いが、あの男性を死に至らしめアシアを再び墮天使の元に送ってしまった。

あの時、フリードと対峙した際に巧はウルフォルフェノクに変身し、フリードを倒すことだって出来たはず。

それをしなかったのは、自分が怖かったからだ。

その自然の責が体を押しつぶしそうになったのはきつと勘違いではなく、真実。

そう受け止めて、そのまま部室を後にした。

「……。俺は何やってんだよ」

一晩明けた土曜日は休日の為、学校は休みとなり、巧は近くの公園のベンチに座り込み、熱々の缶コーヒーを飲んでいた。

普段ならば、こんな熱々の缶コーヒーは飲まないが、今は何かが狂っており、巧の行動には今ひとつキレがない。

「……熱っ!!!」

缶コーヒーを口に含んだ瞬間、それを吐き出す。

ボツとしていても猫舌は直らず、そのまま、巧は吐き出した缶コーヒーが地面に染みるのを焦点の合わない目で見つめていた。

「イツセー……さん？」

巧がその声を聞いて、ベンチから立ち上がる。

声の持ち主アシアは、涙を流しながら巧に歩み寄り巧の体を抱きしめた。

「なんで、ここにいんだよ？」

昨晚、堕天使が現れた事により教会に連れ帰られてしまった筈のアーシアはこうして、巧の目の前にいる。

「その…今は、お昼休みで休憩していいって言われたんです」

「そうか。なら、ここに居ればいい」

巧はアーシアの言葉を嘘と見抜いたが、それを言う必要は全くない為、何も言わずに彼女にここで休憩すればいいと勧めた。

「イツセイさんにお願いがああるんです…。私、この街のいろんな所に行きたいんです。だから…一緒に行きませんか？」

突然のアーシアからの誘いに巧は驚くが、すぐさまベンチから立ち上がる。

それを見たアーシアは、自分とは居たくないのかも…。そんな不安を醸し出すと、次の巧の言葉に驚いた。

「そろそろ昼だな。昼飯でも食いに行くか…。…お前も来るか？」

「…は、はいっ！」

アーシアは嬉しそうな笑顔で応えた。

そんなアーシアの笑顔を見て、自分も吊られて笑いそうになるが、その顔を見られたくない巧は先に歩き出した。

「これはなんですか？ イツセイさん」

「ラーメンっていう食いもんだ」

二人の向かった先は、近所のラーメン屋だった。

猫舌の巧は、以前店主につけ麺は無いかと聞いたところ…。…返答で、つけ麺はあることを知っていた為、今回もそれを注文し、アーシアの分は普通のラーメンを用意した。

そこで巧は、アーシアのラーメンを見る目に何処か見覚えを感じた。

まるで苦手な物を見るようで……。

「なんか、嫌なもんでも入ってるのか…？」

「いえ!!..むしろ美味しそうです!!」

語尾を強くし、明らかに怪しい態度を取る。

周りのお客さんの食べる様子を見て、アーシアも自ずと食べ方を理解したのか、利き手で箸を持ち、おぼつかない様子で苦戦しつつも麺を掴み取り、自分の口元に持っていくが…。

「フ〜フ〜フ〜」

自分の口元の近くで動きを止め、フ〜と息を吹いて、ラーメンの麺に籠る熱を冷ます。何回も、何回も。

これを見て、巧は先程の視線の意味を悟る。

「お前、猫舌なのか?」

「は、はい。折角、作ってもらったのにすいません…」

巧の視線にやられ、素直に猫舌であることを認める。

目の前の巧に対して、そして作ってくれた店主に対して、失礼かと思いい言い出せなかったのだろう。

ーししようがない…か。

巧はアーシアが一口も手をつけていない、ラーメンを取り上げ、自分のつけ麺をアーシアに差し出した。

「フー、フー、フー、フー。…熱っ。…俺もだ」

熱々のラーメンをフーフーして、口に入れるが、そこからは今だに熱が籠っているため、猫舌の巧には堪える。

それらをなんとか堪え、麺を飲み込んで、アーシアに向けて普段の仏頂面からは考えられない程に優しく、魅力的な笑顔を見せる巧。

「はい!!」

アーシアは、巧から受け取ったつけ麺をスルリと口に入れ、美味しそうですと感想を口にしつつ。

こちらも巧以上に優しい笑みを浮かべていた。

「イツセーさん、私こんなに楽しい日は初めてです！」
「初めてって…。そんな大層なことをしてないさ」

ラーメンを食べ終えた二人は、その後様々な場所に向かい、思い出を作っていた。

アーシアが猫舌と分かると、巧は自分も驚くほど素直になれた。
巧は冷たい飲み物を買うために自動販売機にお金を入れ、冷たい飲み物を買う。

販売機の下に受け取り口があり、そこに手を伸ばした際にアーシアは眩いた。

「いいえ…生まれて初めてでした…」

アーシアの言葉に重みを感じ、巧は掴みかけていた飲み物を落とし、てしまったが、もう一度つかみ直し、そつと受け取り口から手を出した。

「私は、元々教会で育てられた孤児でした。八つの時に死にかけていた子犬を主に助けてくださいと祈りを捧げていると、奇跡が起きました。それからすぐに大きな教会に連れられて、世界中から訪れる信者の怪我を治すように言われました。それから多くの人が私を訪れる様になりました。嬉しかったんです。私の力で誰かを笑顔にできるなら…私はこの力を大事にしたいって。そんなある日の事で、偶然出会い、治療をした男の人が悪魔だったんです。それから私は異端者として教会を追われ…」

「もういい…」

巧はそこで話を切り終えた。

アーシアの目から涙が溢れ出しそうになるのを見たから。

彼女に罪はない。

ただ、自分の力で目の前の苦しむ者を救おうとした。

それだけのことだ。

そして巧は決意する。

彼女を……あの教会に連れ戻させはしない。と

「でも…私は主への感謝を忘れたことはありません。

今は苦しいけど…いつか、いつかきつと。主は私の『夢』を叶えてくださると…信じてます」

夢。

巧はその言葉を聞いて、かつての仲間、園田真理を思い出す。

真理には夢があった。美容師になるという夢が。

しかし、彼女はそのため努力をしていた。

それはきつと主…何てものが叶えてくれるものではない。

「夢っていうのは叶えてもらうんじゃないかって、自分で叶えるもん…なんじゃねえの？」

「自分で…ですか。私は友達とお話をしたり、一緒にご飯を食べたり、本を買ったり、お花に水をあげたり…。そんなことを一緒に友達としてみたいんです。それが…私の『夢』なんです。イツセイさんの夢は何ですか？」

アーシアは空を見上げながら、夢を告げた。

それはあまりにも普通の『夢』だった。

巧は乾巧として最期に見つけた筈の『夢』を言葉にしようとしたが

…

『……………』

記憶にエフエクトが掛かり、言葉を思いだす事ができなかった。

一瞬、怪訝な顔をしたが、それでもこのことをアーシアには悟らせずに少し申し訳なさそうに謝罪の言葉が出た。

「悪い。俺には夢が無えんだ。でも、お前の『夢』は簡単に叶いそうだな」

「えっ??」

「お前の言葉通りなら…。俺もこんなんで良ければいつだって付き合ってたや」

その先は言わなくても分かった。

アーシアは巧の言葉足らずな言葉でも理解できた。

『友達なら……にいる』

アーシアにむけて巧はそう言ったのだ。

「な、なら…：お願いがあります。良いですか？」

「内容によるな」

「そ、その。私のことを名前で呼んでくれませんか？…：教会にいる時は名前で呼んでくださる人は居なかつたもので」

「んなことかよ。いいぜ、アーシア」

巧の何気ない一言に、アーシアはまた嬉しそうに微笑む。巧はそんな笑顔がやけに眩しく思えた。恥ずかしさもあつた為か、彼女から目をそらす。

休日の街中にあるどこか初々しい男女。そんな二人を切り裂くようにそれは、現れた。

「あらあら、教会を抜け出して男とデートなんて、あなたも女なのね、アーシア」

空から聞こえる女の声。

その声に反応したアーシアは、体を震わせ、巧は空を注視する。

そこには背中から黒い翼を一对に生やした者達——墮天使がそこにはいた。

「アハハ！ 私たちから逃げようなんて、無理無理！」

「面倒をかけさせるな。人間如きが」

「隣の男…：いや、あれは悪魔か？ あれは頂いても構いませんか？ レイナーレさま」

「ええ…：よく生きていたわね、イツセイ君。まさか穢れた悪魔に成り下がっていたなんて」

墮天使の中でも中心人物と思われる、レイナーレと呼ばれた女は巧に視線を向ける。

当然ながら、巧はレイナーレのことを知らない。

「お前ら二人痴女かよ。　　とうか誰だよ」

レイナーレともう一人、女の墮天使——カラワーナは肌を多く露出させた格好をしているが為に巧は痴女と呼んだ。

レイナーレとカラワーナはその言葉で怒りを爆発させる。

「下級悪魔如きが…：つつ!! レイナーレ様とこの私を侮辱する

なあああ!!」

「死になさい、イツセー君!!」

二人は手のひらで、悪魔にとつては大変な弱点である光をベースに作り出した槍を創生し、片手で持ち、狙いを巧に定め、投げつける。勢いを持って、巧の元に向かって行く槍。

地面との接触を果たすと、その場で爆発と同じ現象が起こり、爆風で軽く吹き飛ばされたアーシアは何もできずにその場で座り込む。

死んでしまった…。

自分を守る為に墮天使に立ち向かった巧が…。

受け入れがたい真実は、ジワジワとアーシアを飲み込んでいく。

「弱いものね」

「所詮は下級悪魔よ」

レイナーレとカラワナーの二名もまた、巧の死を疑わずに喜びの声を上げる。

「人を勝手に殺すな」

巧は、土煙の中から現れ、レイナーレたちを強く睨みつける。

「なっ…!? いいわ。カラワナー、ミッテルト、ドーナシーク。あの悪魔を消しなさい。私がアーシアを連れて行くわ」

「はっ…」

三人は、3つの方向からそれぞれ、枝分かれして巧に向かって行く。ドーナシークと呼ばれた男の墮天使は巧の正面から現れ、光の槍を巧の体に向けて突き刺そうと刺突を放つ。

「消えろー」

「どけっ!!」

巧はドーナシークが自分を突き刺そうと体の重心を前に寄せる際に、体を屈ませて、ドーナシークの顎に向けて全力のアッパーカットを繰り出す。

身体的な弱点…：脳が揺れたことにより、ドーナシークの焦点は揺らぎ、意識も何処かに行きそうになるが、巧をアーシアの元に向かわせない。

その意識のみで、アーシアの元に向かおうとする巧の背中に向け

て、光の槍を放とうとするが…。

「うらああ!!」

殺気に敏感な巧は、僅かながらにドーナシークの意識が残っていた事に気付き、その位置から足を最大限伸ばし、回し蹴りをドーナシークの顎に決める。

二度目の顎に向けての攻撃で、ドーナシークは確実に意識を奪われ、その場に倒れる。

「アーシア、手を伸ばせ!!!」

「イツセーさんっつ!!!」

ドーナシークが一番早く、巧の元に辿り着いた為に他の二人は巧とアーシアが合流してからでも十分に逃げられるだろう。

しかし、まだ一人、墮天使は残っている。

四人の中で最も力のある墮天使——レイナーレ。

レイナーレは、アーシアの背後から魔力で形作った光を浴びせ、意識を奪う。

意識を奪われたアーシアは必然的にレイナーレに体を預ける形で倒れる。

「ミッテルト、カラワーナ。ドーナシークを、連れて今すぐ教会に戻りなさい!」

今夜儀式を行うわ。アーシア…あなたを悩みや苦しみから解放してあげるわ」

レイナーレは奇妙なことを口走り、自分とアーシアを黒い翼で体ごと包み、この場から消え去る。

そこには、レイナーレがいた証拠として黒い羽がひらひらと舞っていた。

「アーシア!!」

巧は誰もいない公園で、アーシアの名前を叫んだ。

「ふぎけないで!!! あなた、死ぬつもりなの!!あのシスターの所に行くってなんで!？」

「死ぬ気はねえよ。」

夕方になり、巧はオカルト研究部にてリアスにアーシアの救出に行くことを伝えた。が、それを猛反発するリアス。

「別にお前について来てくれなんて、言ってない。」

ただ、俺が一人で行く。そのことを伝えたただけだ。もし仮に死んでも、俺は『兵士』なんだろう？死んだときは別の誰かをそれにすればいい」

巧の言葉を聞いて、リアスは思わず巧の頬を平手打ちした。

一瞬、巧は時が止まったかのように静止したが、すぐに顔をまっすぐ向き直し、リアスと向き合う。

「いまさら、行かない。なんて言うつもりはない」

巧はリアスに背を向け、そのまま部室を出て行くこうする。

ドアノブに手をかけようとする巧の耳にリアスの声が入ってくる。「あなたはこうしてあの子を…アーシアちゃんを助けようとするの？」

それはなぜ巧が戦うのか…。それを問う質問だった。

——そんなの決まってる…俺は、俺はただだっ!!

「人間を守るってそう決めたから…それだけだ」

巧は振り返る事なく、こう答え、ドアノブに手を掛けてオカルト研究部室を後にした。

巧の出て行った部室では——

「巧さん…あなたは…。しようがない子ね。 朱乃、行くわよ。」

小猫、祐斗。 あなた達はあの子のサポートをして頂戴。それと、伝言をお願い。『兵士はどんな駒にもなれる。プロモーションの力を宿

してる』って」

リアスは巧の答えが頭の中で何回も反復していた。

「――人間を守る。」

その為だけにあそこまでの硬い意志の籠った目を出来るのか？

リアスは巧についてまだ分からないことだらけだったが、これだけは分かった。

「みんな、イツセーを死なしてはダメよ！ 全員で生きて帰ることよ、いいわね」

イツセーいや、乾巧はこんなところで死んでいい男ではない。それだけはリアスは分かっていた。

聖女と救世主

「また、俺と一緒に戦ってくれんのか…?」

夕暮れの時間。空には日が沈みかけの太陽が昇っており、そこからオレンジ色の空を映し出している。

そんな光が視界に入りながらも、巧は気にせず相棒の機体を撫でる。

オカルト研究部室を出て行ってから、アジアの救出に向かおうとしたが、自分一人に向かって、アジアを取り戻せるのかは分からなかった。

そこで、僅かながらの希望を乗せながら、ファイズフォンにコードを入力し、自分の相棒を呼び出した。

オレンジ色の空から、何処からともなく現れた巧の愛棒ーオートバジンは、その機体を銀色に光らせていた。

このバイク、オートバジンはアークオルフェノクとの最終決戦の折、ボロボロに大破した。王の手により。そんなバジンが、何故巧の呼び出しに応じたのか。何故この世界に存在しているのか。

考え始めれば、自分がここにいること自体が既に奇跡としか言えない。だから、考えることをやめた。自分をこの世界に呼んだ何かからのプレゼントとでも考えよう。

巧は、この言葉を喋らない相棒を頼る事に決めたのだ。

本来ならば、ヘルメットをつけたいところだったが、生憎今はそんな時間はない。

オートバジンに跨って、クラッチを握る。

其処から勢いよくエンジンをかけようとするが……。

「兵藤君、待って」

「……木場、搭城。 なんの真似だ」

巧は祐斗の声が聞こえ、そちらを振り向く。

そこにはこちらに向けて歩いてくる小猫と祐斗の姿が目映った。ここまで来て邪魔をするとは考えにくい。それにリアスや朱乃の

姿も見えない事から、強い警戒心を持たなかった。

「僕らも一緒に行くよ。あの灰色の怪人相手なら悔しいけど君に任せ
るけど、今回はエクソシストや墮天使だ。君の力になれると思うよ」
「役に立てます」

祐斗は墮天使とエクソシストを名を言う時の声が一オクターブ低
く聞こえたが、次の小猫の言葉を聞き、それを頭の奥に放置する。

二人を見て、巻き込むつもりはない巧は、何も答えずに背を向けた
まま、アクセルを握りしめ、そのまま進もうとするが、何も答えない
巧に反抗するように二人は巧の進路を体で塞いだ。

「お前らはいても足手まといになるだけで邪魔だ」

「うん。あの灰色の怪人ならね。でも、エクソシスト達ならば話
は別だよ。足手まといかは、その時に判断してよ。本当に足手まとい
になるようならば、僕らはその場から急いで逃げるからね」

「……さあ、行きましょう」

睨み合う男子達をすり抜けて、小猫はオートバジンに跨る。詰まる
所……二人乗りをする小猫。

「なんでそこに乗る」

「いいじゃないですか。 どうせ無免許運転です」

無免許……

確かにこの兵藤一誠の体では免許を取っておらず、またあの面倒な
教習所に通わなければならぬ……

そう考えると気が重くなる。

「…で、お前はいいのかよ」

「うん。僕も少しづつ休憩しながらなら、バイクにも負けないつもり
だからね。それじゃ、教会で会おうね」

バイクに乗っている小猫は兎も角、目の前の祐斗は車やバイクを
持つてる様子はしない。

ならば何でバイクに勝つつもりなのか…。

少し興味の湧いた巧は祐斗を見ると、祐斗がその場から駆け出し始
め、少しすると自分の視界から消えていた。

「…祐斗先輩は『騎士』。その駒の特性はものすごいスピードです。」

でも、本人に体力がない為、まだまだ改良の余地はあります…」
「なんかに掴まれよな」

「失礼します…」

そう言った小猫は巧の制服の裾を強烈な力で掴んだ。

小猫に制服を掴まれた時には、体が思うように動かなくなり、思わず小猫を睨んだが、彼女の細腕からこんな力が発揮させるはずが…。すると先ほどの小猫の言葉にあった、『駒の特性』という言葉を出す。この白い髪を持つ小学生のような少女の馬鹿力を『駒の特性』というものであるという事を思い出して、そのままアクセルを握りしめ、クラッチを握りギアを踏み込んで、オートバジンは発進した。

巧、小猫、祐斗が駒王学園を出発する少し前――

「あーあ。なんで、私が教会の裏側の監視なんだろう？」

木の枝に座りながら堕天使のミッテルトはそう呟く。

その言葉から、自分の仕事に疲れと面倒さを感じていることを示していた。

彼女がここにいる理由、それは侵入者を見つけ殺す為であった。

彼女だけでなく、彼女らのリーダーであるレイナーレからの指示で

ある為に彼女もそれを受け入れ、監視にしていた。

彼女達が恐れている一人の存在。

それは巧の事だった。

レイナーレの知ってる兵藤一誠は、スケベでウブな馬鹿な人間。

そう聞かせれていた。レイナーレ以外の堕天使達は先ほど出会った兵藤一誠との違いに驚いていた。

身体能力だけでドーナシックを圧倒。レイナーレを除く堕天使の攻撃をかいくぐる力を持つ男だったからだ。

そんな一誠からはスケベやウブや馬鹿なんて言葉は見当たらない

かった。

むしろ歴戦の戦士……。そんな言葉が相応しい雰囲気を持つ兵藤一誠に恐怖心が僅かながらに芽生えていた。

そんなミッテルトに恐怖心を駆り立てるように見たこともない魔法陣が地面から発生し、二人の悪魔を転送させる。

そこから現れた悪魔――朱乃とリアスは、ミッテルトを見て不敵な笑みをこぼす。

「なあんだ。この見張り案外、楽しくなりそう」

巧ではなく、この二人なら……。

リアスを見て安堵の息と、自分の気持ちを高ぶらせるように声を出す。

自分が登っていた木から飛び降り、地面に着地。スカートの手端を少し持って、貴族がするような挨拶を交わす。

「これは、これは……どーもっ！ 堕天使のミッテルトです！」

「あらあら、これはご丁寧な挨拶ありがとうございますわ」

朱乃は敵に送るには相応しくないほどにいい笑顔を浮かべ、挨拶を返す。

リアスは凜とした瞳でミッテルトに向けた声を発する。

「下僕が貴方の存在を察知したの。私達の事を警戒はしてるよね」

「いいえ、貴方達の事なんか、どうだっていいけど、一応大切な儀式を邪魔するような奴を警戒しておくに越したことはないからね」

警戒――その言葉により、巧が脳裏に浮かび、思わず恐怖を顔に出しそうになったが、目の前のリアスと朱乃のそんな弱みを見せられない！

強い気持ちを持って、この警戒心と恐怖を目の前の悪魔に悟らせない為に強気に言葉を向ける。

「まあ、早い所。主人のあんたを潰せばいいわけでしょ？なら……カラワーナ、ドーナシューク!!」

ミッテルトが呼んだのは二人の墮天使の名前。

二人の名前が呼ばれた数秒後、朱乃とリアス、二人の上空の空間に歪みが生まれる。

それは、以前フリードが墮天使を呼ぶ際に作り出したものと一致していた。

そこから出てきた二人の墮天使。

「現れたのは、あの男か？」

「ふんっ。誰が相手であろうが、殺すだけ」

ドーナシークは自分の目の前に現れたのが、巧かどうかを確認し、カラワナーは殺意を持った目でリアスと朱乃を見据えていた。

「あらあら、こんなに出てきてしまっ」

二人の悪魔と三人の墮天使が相見える時が近づいていた：

「…行くか…」

山の中にある潰れかけの廃教会の目の前に、バイクに跨った巧。

その右隣には白い髪を持つ少女——小猫。

左隣には、金髪でイケメンな少年——祐斗。

この三人がいた。

巧はオートバジンに跨り、アクセルを握りしめ、エンジンをかけて、クラッチを握り、ギアを踏み込む、教会の扉に向けてオートバジンは発進する。

扉までの距離は10メートルほどであったが、オートバジンの勢いに乗った加速により、扉などは意味を持たなかった。

なんとか、教会に侵入を果たした。

しかし、今の状況に違和感を感じずにはいらなかった。

自分の周りには人っ子一人おらず、教会にはこの場所に来る人が座り為の椅子と祭壇に一つの机が置いてあるのみでアーシアどころか、エクソシストさえも見当たらない。

オートバジンから降りて、周りを見渡す。

こうしてみると、明らかに使われなくなってから時間が経っていることが浮き彫りになっている。

「誰も居ないみたいだね…いや、一人いる」

「多分あの人です、あのエクソシスト」

巧の隣に並びながら、この教会を見渡していた祐斗と小猫から巧に向けて、警戒を持つように促す言葉が向けられた。

三人からの警戒の視線にさすがに気がついたのか、観念するように出てきた一人のエクソシスト。

白い髪、赤い目という、明らかに不思議な出で立ちのエクソシストーフリードがそこにいた。

「これこれは、二度目ましてだねえ。君達い？俺としては、同じクソ悪魔と二度目の出会いなんてありえないと思っただけですけど…」

まあ、所詮は堕天使も悪魔もクズってことですかい。さあて…遊ぼうか」

フリードは明らかに先日とは違う何かを持ちながら、巧達の前に立ちふさがる。

コートからは光剣と悪魔対策の拳銃を構える。

巧もフリードがここを通す事はしないと、認識した時、巧の右側を何かを通った感覚がした。

「当たれ」

巧の隣を通った何かーそれは、この教会に置いてある椅子であった。

それを投げたであろう人物、小猫の声も巧には聞こえ、彼女の馬鹿力がフリードにむけて先制攻撃を放った。

「おおっと！…おチビさんには用がないんですわ。俺の相手は…イッセーくん！遊びましょ！」

小猫が投げた椅子を縦に剣を薙ぎ、真つ二つにしてみせたフリードはそのまま、銃を前に突き出して、巧に標準に絞り、その引き金を引く、と脳からの命令が伝達していくのが分かった。

しかし、それを途切らせる存在が自分の視界に入り、それは自分の手に持った剣でフリードの体を右斜め下から斬り伏せる様に振り上げる。

「おいおい…イケメン君。俺、今イツセー君と戦ういいところでしようが、邪魔すんなよ?」

フリードに攻撃を仕掛けた祐斗は、自分よりも後ろにいる巧に一瞬を見て、再びフリードに顔を向ける。

「イツセー君、僕らも少しは役に立つよ?」

「そうだな」

フリードは、自分がイツセーにむけて放とうとした攻撃を途切らせた、存在の祐斗を強く睨む。

祐斗を斬り殺すイメージができれば、そこから足に目の前の祐斗に一足飛びで近づけるほどの跳躍を命じ、膝を曲げ勢いをつける。

一瞬で力を貯めて、膝を再び伸ばして、体は前に進んで行く。

ふわりと浮遊をしている感覚をフリードは感じていた。

しかし、そんな自分に睨むかってくるエンジン音。

そのエンジン音はバイク。

フリードは祐斗の間合いに入りきる前に体を目の前にやってきたバイクーオートバジンに激突する。

それを運転していた巧は何一つ罪悪感を感じさせない。

「おい、ぶん殴る前に聞く。アーシアはどこだ?」

オートバジンに跨りながら、バイクに弾かれた衝撃で地面に体を倒していたフリードにアーシアの居場所を聞く。

巧もそれほどのスピードを出していないため、致命傷にはなっていない。

しかし、戦闘をするには難しいほどの傷だった。

「……その祭壇の机を吹き飛ばすと…地下につながる階段がある。それを使えば、あのシスターさんがいるところに行ける。早く行かな

いとあの子は手遅れになる。…早く行ってやれ」

まるで別人のようにしつかりとした口調でアーシアのいる場所を教えるフリード。

巧にはどれが本当のフリードなのかは分かりかねていた。

まるで人格が何人にもいるような…。そんな奇妙な考えをとりあえずは捨てた。

巧の質問に答えたフリードは自分の体から閃光弾のような物を取り出し、それを使い、閃光を発生させる。

三人はそれに視界を奪われ、視界がハッキリする時には既にフリードはその場にいなかった。

「えいっ！」

小猫がフリードの言っていた、祭壇の机を殴り飛ばす。

するとその下には地下に続く階段が存在していた。

『あの子は手遅れになる』

フリードの言葉が巧を不安にかりたてる。

オートバジンに跨り、そのまま発進させ、祐斗や小猫よりも先に巧は階段をバイクで駆け抜けた。

「ーイツセイさん。もしも…もしも最期にあなたに会えるなら…私は貴方と友達になれて嬉しかった…。そう伝えたいです。」

廃教会の地下にて、アーシア・アルジエントは奇妙な十字架を模した機械に手足を拘束されていた。

その機械から不快なものを感じ、身を振らせてはみるものの手足の拘束により、あまり大した効果は見られない。

「あら、今更どころかしようとしても無駄よ、アーシア」

目の前の墮天使ーレイナーレは、体を振らせるアーシアを見て、

不快な笑みをこぼす。

「ーやつとだ、やつとこの小娘の神器を私の物にできる。

それさえあれば、私はシエムハザ様やアザゼル様の愛を…

レイナーレはようやく手に入る最高の力に今か今か待ちわびていた。

「本当にあなたには感謝してるわ。 あなたのその力のおかげで…私は、地位を手に入れる事ができる。 まあ、神器を抜いたら貴方は死ぬだけだね。 まあ、いいでしょ？ どうせ、こんなところで死んでも悲しむ友達なんて誰もいないんだから!!!あはは!!!」

レイナーレの笑みが儀式を行っているこの部屋に響く。

自らの死ーそれを聞いたアーシアは顔をおとす。

しかし、自分に悲しんでくれる友達がない。

いや…あの少年なら悲しんでくれるかもしれない。

「イツセーさんなら…悲しんでくれるでしょうか…?」

レイナーレに向けて、放たれた言葉。

兵藤一誠の存在だった。

あの不器用な優しさをもち、自分と同じ猫舌であるあの少年なら…。

アーシアの話を聞いたレイナーレは再び大口を開けて笑い始める。

「あつはつはつはつ!!! 馬鹿ね、アーシア。 兵藤一誠がここまで来るとでも?あのバカがここにいるエクソシスト全てを倒せるとでも?」

レイナーレが指をさしたのは、10メートル以上も離れた床にいる何十人ものぐれエクソシストだった。 はぐれエクソシスト。

教会を追われ、堕天使の下僕に身を置く者たちに向けての総称。

だが、その実力は侮ってはいけない者もいるほどだ。

1人、1人が武器を持ち、それぞれが悪魔を殺す事に長けている集団。

そう…普通なら助けなど絶対に来ないような状況だ。 アーシアは神に祈る。

「ー主よ。 あの人の…イツセーさんがいつか自分の夢を見つけられますように…。」

巧がいつか夢を：自分は叶えることのできなかつた夢を見つけ、そして叶えられますように……。そう祈りを捧げた。

ー来るはずがないっ!! あの悪魔がこんな小娘の為になんて命をかける必要があるっ!!

レイナーレは、アーシアの一誠が来てくれるという希望を必死で打ち消した。

アーシアの事を嘲笑いたいのではない。レイナーレ自身が巧に対して感じた事のない何かを感じ取ったからだ。

でも、今の自分ならば負けない。

アーシアの力を奪い、とある女から力を受け取った今の自分ならばあんな下級悪魔に恐れることはなくなる。

心の中でそんな葛藤をしているレイナーレ。

そして、その恐怖を抱いたその対象は：目の前に現れた。

「なっ!? なぜ、この鎖が!!」

突如、アーシアの手足を拘束していた枷が外れたのだ。

一秒後には、アーシアの神器を取り出すために必要な機械さえも火花を散らした。

この部屋の扉から聞こえるエンジン音。

視線を扉に向ける。

そこには：バイクに跨りながら、右手でバーストモードにしたファイズフォンでアーシアを拘束する鎖を破壊した巧の姿が映る。

「来なさいー! アーシアー!」

レイナーレは、巧の登場に体を震え上がらせるが、アーシアを連れてこの場を退ければどうにでもなる。

この場からアーシアを連れて逃げ出そうと、アーシアの体に触れようと手を伸ばす。

ファイズフォンから放たれたフォトンブラッドで作られた光弾が、自分の腕を貫きアーシアに触れることを許さない。

腕からは自分の血が溢れるようにして出てくる。

ー下級悪魔如きがああ!!!

怒りを込めて、オートバジンに跨る巧を睨む。

そんな怒りの視線を、巧は全く気負いすることもなく、アーシアを見つめる。

「イツセー…:さん」

自分の目の映る少年の名前を呟く。

なんで、どうして、そんな疑問は頭から消えており、一番に浮かんできた物、それはー

ーまた会えてよかったです…:イツセーさん。

アーシアは体を起こして、巧の顔を見つめる。

巧の腰に見たことのない物を見つける。

腰にはベルトのようなものを巻きつけていた。

「待たせたな…:アーシア。こんなところでお前を死なせやしない！」

巧はそう言うと、ファイズフォンに変身コードを入力。

最後にEnterキーを押す。

ファイズフォンを空高く掲げ、叫ぶ。

『Standying By』

「変身!!!」

『Complete』

友達と平和で普通の毎日を送る、そんな『夢』をもった少女の前に赤き閃光は舞い降りた。

「全く、バイクで先に行くなんてね。エクソシスト達は僕らに任せて、君は早く彼女を」

「…:早く」

変身を完了させたファイズの元に、少し遅れて祐斗と小猫がたどり着く。

先に階段をバイクで降りていったので、自分の方が速いのは当然。

それでも数秒違いで現れた二人に驚きつつも、視線は前に向け続ける。

「…ああ」

言葉短く、二人の言葉を受け取り、オートバジンのアクセルを握りしめ、再び前に進む。

目の前にいる何人ものはぐれエクソシスト達が、道を塞ごうとしているが…。

「邪魔だあ!!!」

「…邪魔」

小猫と祐斗により、半ば無理やりながら道を作り出し、ファイズはその道をオートバジンのスピードを上げつつ通り抜ける。

バイクで階段を登りながら、十数秒掛けてなんとか祭壇の一番上までたどり着く。

そこには、ファイズフォンにより撃ち抜かれた手から溢れ出る血を押さえつけるレイナーレと、拘束から解かれ、ぐったりと地面に横たわるアジアがいた。

『Battle Mode』

アジアの元に寄る為にオートバジンを降りる際に、ファイズはオートバジンのハンドル手前に付いてあるファイズの顔を模したスイッチを押すと、音声が鳴り響く。

すると、オートバジンの機体に変化が起きる。

バイクだったはずのオートバジンが、二メートルを超える大きな人型の戦闘ロボットに変形したのだ。

いきなりの変形バイクにぐったりしてたアジアや怪我をしていないはずのレイナーレも目が点になったようだ。

「あいつらのサポートをしてやれ」

ファイズの声に反応し、顔となったヘッドライトが点滅して、了解と言っているように見えた。

後輪のスクランブルローターにより、飛行可能であるオートバジンは祭壇から飛行を開始する。

「攻撃するのは、白い髪の子ビと金髪以外だ!!」

以前、スカラベオルフェノクとの戦闘最中に、自分共々攻撃されたことを思い出して、オートバジンに指示を出しておく。これで誤射される事はないが……。

「痛っー!」

ファイズの頭部に何やら石が飛んできていた。

投げたであろう人物、小猫は若干眉を上にあげ、はぐれエクソシストに怒りをぶつけ戦っていた。

すると、小猫と祐斗ははぐれエクソシスト達から距離を取る。

それから数秒経つと、はぐれエクソシスト達は空からの攻撃により多くの負傷者が現れる。

攻撃を行っているのは空中にいるオートバジンだ。

オートバジンの前輪、バスターホイールからは12mm弾を1秒間に96発も連射可能である。

そんなバスターホイールからの攻撃を受けたはぐれエクソシスト達の大半は戦闘不能にされていた。

「くそっ! 使えない奴らめ!!」

レイナーレは、オートバジンにより戦闘不能にされた者たちを見て、吐き捨てるように言葉を発する。

巧は相変わらずの威力を持つバスターホイールに感心しつつ、アーシアに声をかける。

「アーシア。 ……起きろ」

「イツセーさん…。 これは夢でしょうか?」

「さあな。 取り敢えず、此処を出るぞ」

何処か疲れた顔をしているアーシアの体を起こし、その場から退避しようとして、彼女の手を握る。

背後にいる祐斗からの声がファイズに聞こえた。

「イツセー君! 墮天使が来てるよ!!」

祐斗の声に反応し、ファイズは正面を向くと光の槍を携えて、こちらに向けてそれを放とうとしているレイナーレが目に入った。

「きゃああ!!」

ファイズはそれを見ると、アーシアをお姫様だっこの形で抱きかか

えて、祭壇から飛び降りる。

その際にアーシアの悲鳴が聞こえるが、わざわざ階段を降りる時間ももつたい無いため、それらを無視した。

巧はこの状態で戦おうとは思わなかった。

アーシアという非戦闘員を守りながら、自分たちよりも多い数の相手との戦闘は分が悪いと判断し、この部屋からの退却を狙った。

「木場！ 搭城！ お前らも行くぞ！ 後はあいつに任せろ！」

小猫や祐斗にもすでに大半を戦闘不能にしてあるはぐれエクソシストとの戦闘よりもここから離れる事を促す。

仮に動ける者がいるとしても、それはオートバジンに任せればいい。

巧の真意を受け取った二人は、その言葉にうなづいてその場からの退却を行う。

「ふザゲルナアアアアアア!!!」

アーシアを奪われ、戦力の殆どをオートバジンと祐斗と小猫に削られたレイナーレは、怒りの狂気を込め叫びだす。

左手で魔法陣を創り出し、小瓶を取り出して、自らの手で握りしめていた。

「なんとか無事に助け出せたね」

地下から抜け出した巧たちは安堵の声を漏らす。

アーシアは長時間の拘束による為、今は椅子を布団代わりに眠りについていた。

小猫も眠りについているアーシアを見て、嬉しそうな微笑を浮かべていた。

助け出せてよかった…。

微笑を浮かべる小猫からはそんな気持ちが伝わっていた。

「兵藤君、どうして変身を解かないんだい？」

「……」

一応は、アーシアを取り戻せたが、巧は未だに変身を解除しようとはしない。

まだ、敵が残っている。

そんな気持ちが一アイズの中では生まれている。

ファイズはじつと自分たちが出てきた地下への入り口を睨みつけていた。

「うぎゃあああああ!!!」

男の悲鳴が耳に入る。

音源は地下からだった。

それはつまり、巧の危惧する敵が地下にいるということ。

身構えてる三人の前に、階段を駆け下りてきたであろう男が数名現れる。

息を途絶えさせながら、こちらに向けて歩いてくる男たち。

その中の一人の男の手が灰になって地に落ちた。

次の瞬間には、手だけでなく体さえも灰となり、その場には男の着ていた服だけが残る。

それをきつかけに、他の残った男たちも同様に体が灰となって地面に伏していく。

その場には大量の灰と着用していた服だけが残る。

「オルフェノク……」

巧のぼそりと呟いた言葉に祐斗と小猫は反応を見せる。

人の身体が灰となる現象。

巧はこれを嫌という程見てきた。

オルフェノクに殺された者の末路。

オルフェノクに殺され、使徒再生出来ずにオルフェノクになることの出来なかった人間は、数秒間だけ復活をしてすぐにまた灰となり、今度こそこの世を去る。

この現象が、目の前のはぐれエクソシスト達にも起きたということ

は、あの地下にいた者たちの中の誰かがオルフェノクという事になる。それか、元々オルフェノクだったの二つの可能性がある。

自然と硬直する身体。

祐斗と小猫はそれを実感していた。

以前の巨大なエレファントオルフェノクとの交戦の際には自分を含めたグレモリー眷属の攻撃、自分たちの剣技と拳、そしてリアスと朱乃の消滅の魔力攻撃と雷の魔力攻撃を合わせても倒すことが出来なかった。

その事実は忘れられない。

どれだけ自分が敵を倒しても、オルフェノクには勝てない。そんなトラウマじみた物が、頭の中にこびりついていた。

「お前ら、アジア連れて逃げる。逃げられないなら、ここから離れるなよ…」

目の前のファイズは違う。

自分たちの勝てなかった相手をあっさりと打ち倒してみせた。この希望が祐斗と小猫の体を動かす原動力となる。

「イツセー君、必ず勝つてよ…」

「待ってます。それと頑張ってください…イツセー先輩」

二人は戦えない自分の力を不甲斐ないと思いつつ、巧をイツセーと呼び、アジアと共にその場から離れた。

教会を出ていく三人を確認し、地下に向かおうと床にある隠し通路に顔を覗き込むと、いきなり光の槍が下から上に向かってきた。

その槍を反射的に顔を仰げ反して躲し、後ろに後退する。

「へえ…今の避けるんだ。やるねえイツセー君」

地下の入り口付近から聞こえる声。

それは墮天使、レイナーレの声だった。

しかし、そこからは先ほどの狂気や怒りを交えて叫んでいた声とは違い、どこか冷静さを持ち合わせた声だった。

巧は地下の入り口から出てきたレイナーレを見て、言葉を失った。「良かったわ、驚いてくれて。貴方のような、厄介なネズミが現れた

時のためにこれを受け取っておいて良かった。すごいでしょ、これ？」

その姿は、堕天使をイメージさせるオーダウンフォールオルフェノクと化していた。

「オルフェノクになったのか」

ファイズは、オルフェノクと化したレイナーレを見て、質問の意味を混ぜながら、聞いてみた。

「よく知ってるわね。まあ、あの女のお陰というのも気に入らないけど、この力に加えアーシアの聖母の微笑みまで加われば私はきつと：アザゼル様やシエムハザ様の寵愛を受けられるわ」

アーシアの力を欲する理由。

それは自分の地位を上げる為。

そんな理由でアーシアを傷つけていいのか？

いや、巧には許せるはずがないなかった。

正義のヒーローなんてものを名乗るつもりはない。

けれど、巧はあの少女を守ると決めている。

ここでこの堕天使を倒さなければならぬ。

例えそれが、罪であろうとも…。

「…そんな理由でアイツは死なせない」

レイナーレにも聞こえない声でファイズはぼそりつつぶやき、右手首をスナップさせるとカシャという音が響いた。

「はあああ!!」

レイナーレの声が、響き渡る。

手に持った槍を横薙ぎに振るい、その軌道上にファイズを捉える。

足を一步前に進め、自分の左腕を顔を守るように上げる。

槍と左腕がぶつかり合い、槍に籠った勢いは殺されファイズは右腕でダウンフォールオルフェノクの腹部にボディブローを決める。その一撃は体の内部にまで届き、体が地を離れ、足元が数センチほど浮かび上がる。

それを見逃さず、二度、三度と拳を腹部に打ち込む。

最後に、顎を向けての拳が決まり、ファイズの打ち込んだ拳の勢いによりその場から右に吹き飛ぶ。

「…なにっ!? 貴様……っっ!!」

この力を持ってしても目の前の下級悪魔は余裕を持って自分を圧倒し、なおかつ余裕を見せている。

許せない。

殺す！ 殺す!! 殺す!!! コロス!!!

突如、自分の脳から目の前のファイズを過剰なまでに殺すような指令が送られてくる。

体は言うことを聞かないかのように、ファイズに向かって行く。

両手を振り上げ、ファイズの肩を掴み、そのまま地面に倒そうとするが、肩に力を入れる前に腹部に蹴りを打ち込まれ、後退させられる。

肉弾戦ではファイズに分がある。

ならば……!!!

ダウンフォールオルフェノクは、右手に再び槍を創生し、今度はファイズの左半身を狙うように攻撃を放つ。

ファイズもそれに反応し、左手で槍を弾こうと手を振り上げた瞬間、左手に二本目の槍を創生し、そのまま刺突を繰り返す。

二本目の槍の創生に流石に予想をしていなかったファイズは胸部に槍での刺突を直撃する。

ファイズの胸部アーマ、フルメタルラングからは火花が散り、そしてその刺突により凹みが生まれていた。

「あははははっっ!!!これよ、これを待ってたのよ!

貴方を殺す力が私にはあるの!!何がこんなところで死なせやしな
いよ!あなたもアールシアもここで死ぬのよ!!」

僅かながらにも自分の攻撃で傷つくファイズを見て嬉しそうに声を上げるダウンフォールオルフェノク。

その陰からはレイナーレの姿が見える。

ダウンフォールオルフェノク：墮天使が扱える基本的な能力は変わりはない。けれどそのスペックの差は歴然。例えば下級、中級の

悪魔でも一気に上級クラスの力を手にすることのできる物となる。

槍の威力や基本的な戦闘能力の向上。

これがオルフェノクと墮天使の力の融合だ。

「これさえあれば、私は!! …ふふ、あの女はもつと利用価値があるのね…これからも利用させてもらいたいわ」

ファイズは、一人で何かを呟くレイナーレを見て、その隙にファイズドライバーからファイズフォンを抜き取り、「106」とコードを入力。

『Burst Mode』

銃の形に変形させたファイズフォンで、ダウンフォールオルフェノクに狙いを定め、フォトンブラッドで出来た光弾を放つ。

「くっ!!」

突然のファイズの銃での攻撃。それを考えていなかった、ダウンフォールオルフェノクは腕を前に突き出した形でその光弾を受け止めた。

痛みは感じたが、それでも腕の貫通よりは優しいだろう。

レイナーレは、貫かれていない自分の腕を見て喜びに打ち震える。

「ー勝った!! あの男にあの銃以上に強い武器はない!」

丸腰のファイズにはもう武器はない。

つまりは最大の武器の銃で通じなければ、この槍がファイズを貫き、殺せる。

そう結論付け、オルフェノクになったせいで黒い翼から灰色の翼に変化し、その羽を大きく広げ、羽ばたかせて空に浮かぶ。

ファイズはその様子をだらんとした姿勢で捉えた、黄色に光るアルティメットファインダーはしっかりと目の前の敵を捉えていた。

「いくら貴方が強くても、その銃以上の武器を持っていないあなたには私は倒せないわ!」

そう叫んだレイナーレは、両手に槍を創生し、左手に持つ槍をファイズ目掛けて投げつける。

地面との接触を果たすもそれは大きく爆発した。

オルフェノクになった影響は槍の爆発力にもつながる。

そのことに歓喜したレイナーレは、ファイズの姿を捉えていなくとも、只々力を振るいたいのが為に両手で何度も槍を投げつけて、爆発を起こしてゆく。

この爆発により地面がえぐれ、地下に部屋がある為にそろそろ地面に亀裂が入り始める。

レイナーレは、土煙が酷い中で、ファイズの姿を見つけようとしていた。

「ああのムカつく下級悪魔の死ぬところをこの目で見てやるわ。」

どこかウキウキした気分そのまま、ファイズを探すが、どこにも見つからない。

「うらっ!!」

自分の背中を誰かに殴られる。

しかも、空を飛んでいるために広がっている羽を掴まれ、バランスを失い、空中から落下する。

それなりの高さからの落下と自分を殴った者の重さまでもがダウンフォールオルフェノクに向かう。

「汚れた手で私に触れるなあ!!!」

体を大きく振らせて、自分の体を掴む存在を振りほどく。

自分の体を殴った存在「ファイズは、何も無かったような状態だった。」

「何故だ！ あの光の槍が当たれば、悪魔のあなたには多少は効くはず！ いくらその奇妙な鎧に覆われてるからって」

そこでダウンフォールオルフェノクは言葉を中断した。

彼女の視線には、空中を浮遊する状態のオートバジンが映ったからだ。

ファイズは、あの槍の雨をオートバジンを呼び出して、かい潜り、彼女が槍を打つのに夢中になり、投げ終えた後の無防備なその背後から攻撃を仕掛けた。

そういう事だった。

この勝負に終わりが見え始める。

ファイズは腰に付けてある、デジタルカメラを取り出し、ファイズフォンに付けてあるミッションメモリーを差し込む。

『Ready』

デジタルカメラだった物から、グリップ：ブラストナックルが展開される。

それを右手に装着させる。

横になっているファイズフォンを開き、Enterキーを押す。

『Exceed Charge』

体のラインを通って、フォトンブラッドがデジタルカメラ型の器具ーファイズショットに伝わる。

ファイズは右手に伝わる力を感じ、そのまま前に駆け抜ける。

ーなんなのアレ!? 怖い：怖いっ!!

レイナレは、ファイズの右手に集中している何かに恐れを抱いていた。

フォトンブラッド：それはファイズだけでなく、すべてのライダーズギアが必殺技の際に集約するエネルギー。

それはオルフェノクにとっては毒も同然。

よって、今はオルフェノクとなっているレイナレが恐れを感じるのは当然と言える。

「消えろおおお!!」

今までで一番大きい光の槍を両手で作り出す。

両手を前に突き出して、真っ直ぐ確実にファイズに向かってゆく光の槍。

ー光が毒つてのは本当みたいだな…。

ファイズは自分の眼前に迫る槍を見て、そんな感想を抱いていた。

ファイズの変身スーツ越しにも少しだけ体がこの光を拒絶しているのが分かったからだ。

もしもこれが直撃すれば、多少のダメージを負うことを考えていたが、爆殺の際にベルトが外れれば、悪魔の存在が希薄である自分でも確実に致命傷になりうる。

そんな予想を考えていた。

けれど…この一撃で決めるつもりの方は、その槍が自分の間合いに入った瞬間、それを飛び超えた。

空中で、足を伸ばして光の槍を踏み、それを足場にして更に加速をつけてレイナーレ…ダウンフォールオルフェノクに近づいていく。

ーこれです…終わりだっつ!!

「わ、私は…至高の墮天使だああ!!!」

「うらああああ!!!」

ダウンフォールオルフェノクの腹部にファイズ渾身のグランインパクトが命中し、φを模した赤い光が現れ、墮天使レイナーレの体を灰に還した。

「ふう…」

変身を解除した巧は、一息について、一番近くにあった椅子に腰掛ける。

ファイズフォンを開き、リアスに全てが片付いた事を連絡せねば…。

そんな思いでファイズフォンにコードを入力していく。

「あら…あの子負けちゃったのね。本当、あれだけネズミには気をつけろって言ったのに。馬鹿な娘。でも…これで確定してわ。

まさか、貴方がこの世界にいるなんて…兵藤一誠、いや乾巧。

貴方には見てもらいたいわ。今度こそ、王が…オルフェノクが世界を手にする所を」

「おい…: どういう事だよ」

激闘から二日経った月曜日の朝、巧は目の前にいる人物に疑問を持たざる得なかった。

「えへへへ。おはようございます、イツセイさん！」

そこには駒王学園の制服を着ているアーシアがいた。

その制服姿はとても似合っており、可愛いものだったが、巧が睨んでいるのはアーシア…:ではなく、その背後で優雅に紅茶を飲んでいるリアスだ。

「だから、アーシアは私の眷属になったのよ。だから、この駒王学園に通う事になったの。何かおかしな所があるのかしら？」

それをさも当然のように伝えるリアス。

巧が聞きたいのはそこだった。

「ーなんて、アーシアを悪魔にしてんだよ！」

レイナーレとの戦闘を終えた後、アーシアときちんとした再会を果たした巧だったが、自らが悪魔である以上、彼女と共に行動はできない。

それをすれば困るのも傷つくのも彼女だとわかっていたからだ。

そこでリアスがアーシアを引き取ってくれる、きちんとした教会もしくは施設を探すと巧と約束したのだ。それがこの結果…:。

「アーシアは、きちんとした所に身を預けるって言ったのお前だろ！」

「だから、アーシアはここにいるのよ。どこも、信用できるような者がいなかったのだから。それに悪魔に……眷属になることはちやんと了承済みよ」

巧は、リアスが兵藤一誠の親を誤魔化した際に見せた交渉術で人の良いアーシアを騙したのでは？と考えたが、目の前の少女はそんな事をするとは思えない為に、あーでもない、こーでもないと考えていると……渦中の人物から声をかけられる。

「私は……ここにいたらダメですか？」

「あら、ひどいじゃないイッセー。ここに好きなだけいろつてと言ったのは貴方なんでしょ？」

「ーこの女っつ!!!」

巧は確かにそうだったが、意味合いが違う。

が、目の前の少女の言葉を否定する事も出来ない。

……考えて出した答えは……。

「なら、……ここにいろ。お前の好きにすればいい……」

「はいっ！これからもよろしくお願いします、イッセーさん！」

アーシアは花が咲いたかのように綺麗な笑みを浮かべる。そんな笑みを見て巧も自然と笑みを浮かべていた。

「あら、アーシアには素直なのね、イッセー」

「ああもう！ 止めろ！ 頭を撫でるな!!」

巧はリアスに頭を撫でられ、自分の頭を撫でている手を解いて、オカルト研究部室を飛び出す。

そのまま旧校舎をでて、自分の教室に向かう。

少し歩いてから、旧校舎のある方角を向く。

「ーアーシア。お前の夢、叶うといいな。」

巧はアーシアの夢が叶うようにこの大きな蒼い空に……そして世界中の誰かの夢が叶うように願った。

幕間 使い魔とツンデレと小さなドラゴン

朝の日差しが空から降り注ぐ。

その光は真っ直ぐに駒王町を照らしている。

「はあ……」

この空の上にいるかもしれない神さまでさえも陽気な気分になっているやもしれない天気の中で巧はただ一人ため息をこぼす。

乾巧が兵藤一誠に憑依してからはや数週間。

その間に様々なことが巧の周囲で起きていた。

主な出来事といえば、今ため息をついている巧の隣で雪解けの春の如き笑顔を浮かべている少女、アーシア・アルジエントが巧の家にホームステイする事になった事はその一つ。

遡る事数日前、日が昇り始めの時間にリアスに叩き起こされ、家の外に連れ出されるとそこにいたのは…ポストンバッグを肩に下げ、多くの段ボールと共に立つアーシア。

巧は寝起きの体に鞭を打ち、アーシアの荷物の段ボールを家の中に運び込み、その後にはリアスが兵藤一誠の両親二人にアーシアをこの家にホームステイさせてもらえないか？という交渉に付き合わされた。

もちろん、アーシアに関するお金は全額負担するという条件、何よりもアーシアの人柄に惚れ込んだ兵藤夫妻はアーシアのホームステイを承諾したのだ。

それだけでなく、アーシアは駒王学園の生徒として巧と同じクラスに編入したのはつい昨日の事だ。

『私の名前はアーシア・アルジエントです。今は兵藤一誠さんのお家にホームステイさせて頂いています。花嫁修行も兼ねて頑張ってます!!』

自己紹介の際にはこんな事を言ってしまった、巧は多くの男子の怒りや妬みなどが込められた視線を受けるが、無愛想さが功を奏し、巧が睨みを効かせると二人の男子を除いた全員が一斉に押し黙った。

因みにアーシアから花嫁修業と冗談を吹き込んだのはリアスと聞かされ、この日の放課後、リアスは巧からデコピンを受けたのは当人しか知らないお話…。

クラスメイトの女生徒たちとも一日では打ち解けられないかと思っていた巧だったが、アーシアの持つポワポワめぐりん☆オーラによつて男子はもちろん、女生徒たちでさえもアーシアと打ち解ける事に成功した。

一部の女生徒は巧ひいては兵藤一誠の家にホームステイと聞いて、気をつけるように注意を促すが…。

『イツセーさんは…私を助けてくれたんです。私、日本に来て少ししたら悪い人たちに襲われたんです。』

そこで死んでしまうと思ったんですけど、イツセーさんが私を助けに来てくれて、こう言ってくれたんです。「こんなところでお前を死なせやしない…」って。だから、私はイツセーさんの事、信じてます』顔を赤くして巧の事を話すと、多くの女子生徒は顔を赤くして、また男子生徒もアーシアを危険から助け出した巧に尊敬の視線を向けていた。

「はあ…」

今日までの劇的な出来事を思い出し、本日二度目のため息をつく巧。

そんな巧の隣にいるアーシアは満開の花のような笑顔を巧みに向けて、声を掛ける。

「どうかしたんですか？ イツセーさん」

「…別になんでもねえよ」

ぶつきらぼうな言い方ではあるが、アーシアにむけた表情は笑顔であつた。

笑顔を見せた巧にアーシアも笑顔を返した。

ー少しばかり面倒な事があつても…いいか。

こんな風に自然な笑顔のアーシアを見て、多少の面倒事ならば頑張ってみよう。

柄にもなくそんな事を思う巧と誰よりも楽しそうな笑顔を浮かべるアーシア。

そんな二人を祝福するように太陽から陽気な光が二人を照らしていた。

「イツセー、きさまああ!!!」

「我々の彼女いない同盟はどうなったのだああ!!!」

「ーヤバい…もう面倒だ。」

先ほどの決意が巧の心中で早速崩れかけていた。

巧とアーシアは学園に着くと自分のクラスに向かう。

教室への入り口を開けると涙を流し、血反吐を吐きながらまるでゾンビの如く巧に迫る二人の男子生徒。

そんな二人を見て巧の表情はさらに硬くなる。

「そんなの知るかよ。鬱陶しい」

胸ぐらを掴む男子生徒二名の手を振りほどき、自分の席に座り込み、頬杖をかく。

アーシアは自分の席の周りにいる女子生徒達との談話に花を咲かせていた。

対して巧は…。

「何故だああ！ 何故お前の周りにフラグがああ!!!」

「うおおお!!! 俺のエロ細胞がトツプギアだあ!!!」

巧の机に一秒もしない間に接近し、巧の制服にしがみつく先ほどの男子生徒達。

「ああつ！ もうウザいんだよ、お前らつ！ あつち行け！」

「何を言っているんだイツセー！」

「お前が記憶を失う前は我々、松田、元浜、兵藤といえばこの駒王学園で知らぬ者はいないほどのエロの探求者ではなかったか!!」

この二人の男子生徒、松田と元浜という生徒は巧が憑依する前の本来の兵藤一誠の友人だ。

一誠が変態であったが、この二人も相当の変態だ。

三人はいつも女子更衣室や様々な着替え場所を覗いていた事を巧は直接、この二人から聞いた。

いや聞いたというよりはこの二人が勝手に巧に話しかけ、その事を大声で豪語し、女子達から引かれただけだったが…。

因みにこの二人はアーシアの転校初日の際に巧の睨みでも視線をそらさなかった二人でもある。

「うおおお!!お前をエロに戻してやるうう!!」

「もう一度、女子の魅力について語り合おうぞおお!!」

「うるせえ!! いいから離せよ!!」

涙ながらに巧の体にしがみつくと二人をなんとか振り解こうとして体を揺らし、大きな声を叫ぶ巧だった…。

「使い魔…?」

放課後のオカルト研究室。

巧は部屋にある長いソファ―に座りながら、朱乃の淹れた温めの紅茶を口に運ぶ。

隣に座るアーシアも巧と同じ物を口に運んでいる。

「ええ、貴方達もそろそろ使い魔を持っておいた方がいいと思つて。使い魔は情報伝達や相手の追跡、様々な事で役立ってくれるの。」

大抵悪魔は使い魔の一匹は持つものよ」

「…ああ。アイツみたいなものか」

リアスの使い魔の説明を聞いて、目を窓の外に向ける。

巧の視線の先にあるのは旧校舎の入り口に停めてあるオートバジン。

リアスの説明でオートバジンと似たものである事に気付き窓の外に視線を向けたのだろう。

「確かにバジン君は使い魔さんみたいですわね！」

「バジン君はしかも強い使い魔だしね」

「……パワフル」

オートバジンの戦闘の様子を知っているアーシアと祐斗と小猫はバジンに対する感想を一纏めてで口にする。

「あの子、そんなに強い…。イッサー、今度見せてもらつていいかしら?」

「そうですね、私も見せてもらつていいかしら?」

「そのうちな」

リアスと朱乃の願いを適当に返答し、再び紅茶を飲み込む。カップの部分は少し熱いため、丁寧に触れる。

朱乃は少しオドオドとした巧を見て、笑みを浮かべ、リアスも戦闘の時とは違う巧を見て笑みをこぼす。

「それで部長さん、その使い魔さん達はどうかやってお友達になれるんですか?」

アーシアは自分の使い魔を想像し、ウキウキする気持ちを表情に出してリアスに質問する。

不意に巧はこの部室に誰かが近づいてくるのを感じ取った。それも一人などではなく複数人だ。

その一人一人から感じられるのは自分と同じ悪魔の様なもので、警戒する必要もないと判断する。

「失礼します」

「どうぞ」

ドア越しに聞こえるドアをノックする音と凜とした声。

その声は部室内にも響き、朱乃がその場で返答する。

一秒ほどの間が空いてからドアノブに手をかける音がして、部室の入り口が開かれる。

そこから入ってきたのは何人もの駒王学園の生徒達。

この部室に入ってきた全員から悪魔と同じ気配を巧は感じ取り、彼らの戦闘に立っていたメガネをかけたショートヘアの少女はリアスと同じレベルの強さと気配を持っていた。

いきなり部屋に入ってきた生徒達に声をかける事もせず、その場で気にせずに紅茶を口にしようとしてカップに手をかけるが、既にカップの中には紅茶が入っていない事に気付いた。

「イツセーさん、あの方達は…??」

「多分、悪魔だろうぜ。 姫島、紅茶をもう一杯頼む」

「イツセー、貴方知ってたの?」

巧が口にした何気ない一言に反応したリアス。

朱乃は巧の呼びかけで、カップの中には再び紅茶を注ぐ。

「…少し熱いな。 フー、フー、フー」

リアスの一言を聞いていない巧は朱乃の注いだ紅茶に熱が籠っているのを感じ、フーフーと息を吹きかける。

カップから立ち込めるほんのりとした紅茶に熱が籠っている証拠である湯気をかき消す様にして何度も息を吹きかける。

「聞いているの、イツセー?!」

「熱っ!! 何すんだよ、リアス!!」

巧がフーフーするのに集中しているため、リアスは巧の肩をポンと叩く。

コーヒーカップに小皿を乗せた状態でフーフーしていたのでリアスが肩を叩くと巧の舌がまだ冷まっていないういコーヒーの中と接触する。

その際の熱さでリアスが声を掛けたことに気がつく。

「貴方：ソーナが悪魔って知っていたの？」

「あ……いや、なんとなくだ」

オルフェノクとしての感覚で調べたらわかった。

などと言える訳もなく、適当に答えを考えて口に出す。

リアスはその一言で納得し、来客の少女達と顔を向かい合わせる。

「あの……この方達は一体?！」

「いまここにいる方々はイツセー君の言う通り悪魔です。

あちらの方は支取蒼那さん。この駒王学園の生徒会長……ええとつまり、学校の為に頑張る方々のリーダーといえいいのかしら。ですが、本当は部長と同じ純血悪魔の一人で本来の名前はソーナ・シトリー様ですわ」

朱乃はアーシアの為に生徒会長を噛み砕いた形で説明し、アーシアも朱乃の説明でソーナに頭を下げようとソファアから立ち上がる。

「あつ、あのー！ 何も知らずに、すみません!!」

「アーシア・アルジェントさん。気にしないでください。

貴方もこの駒王学園の生徒として楽しい学園生活を送ってください」

「あ、ありがとうございます!!」

上級悪魔という事もあるのか、すこし緊張していたアーシアだったが、ソーナの優しい態度で緊張が解けていた。

「……………」

先ほどから紅茶と睨めっこしていた巧だったが先ほどから嫌な視線の様なものを感じていた。

巧に視線を向けていたのはソーナと共に入ってきた生徒の中で唯一の男子生徒。

そこからは様々な感情の混ざった視線を向けられて、いい気分はしないだろう。

ーはあ……また面倒なのに絡まれんのかよ。

朝の松田や元浜といい……面倒ばかりだ。

心中でそうぼやきながら、立ち上がる。

「なに見てんだよ」

「お前、変態三人組の一人、兵藤一誠だろ。」

会長や生徒会のメンバー、他の生徒。ましてや眷属の女の子になんかしてみろ、お前をぶっ飛ばしてやるからな」

男子生徒の答えに巧はその場でズッコケそうになる。

つまりこの男子生徒は…巧の憑依事情を知らない為に巧の事を変態と思っている。

そんな変態がアシアのような美少女と仲が良ければ不審に思うのは当然…か？

よく見るとソーナと彼女の隣にいる黒髪ロングの女子生徒を除いたほぼ全員から嫌な視線を向けられている事にいま気がついた巧。

こんなところで自分の憑依した兵藤一誠に文句を言いたくなってきた。

「匙、兵藤君はもうそんな生徒ではありません。彼はリアスを助ける為に記憶喪失になってしまいましたでしたがその結果はいい方向に向かっているのですから」

匙…そう呼ばれた男子生徒は顔を下に向けてから後ろに下がった。

「それで今日はどうかしたのかしら？」

「ええ、新人の匙に使い魔を持たせようと思ひまして」

「あら、私達もよ…どうしましょう？」

リアスとソーナは互いの目的が同じであつた事に驚き、その場で考える。

ー帰る…。って言つたら面倒か…。

本日何度目かのため息はすぐに消えていった。

木々が生い茂る森。

周囲の景色が赤く見える奇妙な森。

通称――使い魔の森。

そんな場所に巧達、グレモリー眷属は魔法陣を介して転移してきた。

シトリー眷属との勝負（ジャンケン）に勝利し、先にこの森に詳しい使い魔マスターなる者に案内の予約を入れ、この森にやってきた巧達。

「ううっ！ すこし怖いですう!!」

近くの方角から聞こえる奇妙な鳴き声を聞いて体を震わせるアーシア。

その際に巧の手を握り、巧の腕にしがみつく。

巧もアーシアに抱きつかれ悪い気分はしなかったが、気恥ずかしい気持ちになる。

「おいアーシア。 その…近いぞ」

「あつ…、い、いきなりごめんなさいイツセイさん」

冷静になり、自分のやった事を思い出したアーシアは巧の腕から距離をとって手を大きく振る。

すこしばかりラブコメような一幕を見ていたリアス達。

「使い魔ゲツトだぜ!!!」

突如聞こえる大きな声。

その声の元は巧達の目の前にある大きな樹に登っていた中年の男性。

しかしその服装はまるで夏休み中の小学生と称するような服であった。

「あれなんだ?」

「彼が使い魔マスターよ。 安心して見た目は変かもしれないけど腕は確かよ」

「本当かよ」

目の前の使い魔マスターを見て、そう思えるのかどうか。すこしばかり不安が生まれる巧であった。

「キューー！ キューー!!」

「うふふ、くすぐったいですよ」

アーシアは小さな蒼い体色をした可愛らしい小さなドラゴンを抱きしめていた。

使い魔マスターのザトウウジの案内の元、巧達は複数の使い魔候補を見て回った。

ものすごく筋肉のついたウンディーネ、毒蛇のヒュドラなどを見て回り、ザトウウジは巧に最強クラスのドラゴンを勧めてきたのを一蹴したりなど様々な体験をした。

結局、巧は使い魔を見つけるつもりは元々無かったので捕まえなかったが、アーシアは先ほど出会った着ている服を溶かすという力を持ったスライムに襲われた際に助けってくれた小さなドラゴンを気に入り、使い魔にした。

「良かったわね、アーシア」

「はいっ！ それじゃ…この子の名前はラッセーくんです！」

とても嬉しそうに名前を呼ぶ。

ラッセーという名前を聞いて巧はアーシアに抱きかかえられているラッセーを見つめる。

対するラッセーも睨んでいる巧に対してふてぶてしそうな目で返してくる。

正に似た者同士と呼ぶべきであろう。

「そのこの子は雷撃を放ったりしますけど…イツセーさんみたいに強くて優しい、そんなドラゴンになってほしいから、ラッセーという名前にししました。ダメですかね？」

雷撃を放った。

それはアーシアの体にまとわりついていたスライムを消し去る際にラッセーは電撃攻撃を行ったのだ。

そのことを思い出している巧は急な不意打ちに顔を赤くする。

この顔をアーシアやリアス達に見られたくないからか体を後ろに向ける。

「俺は優しくないが…まあいいんじゃないかねえのか。お前がそれで納得してるならな」

顔を背けているが、巧の答えにアーシアは微笑み、ラッセーに抱きつく力が強くなる。

顔の赤みが引いてから、体の向きを直してラッセーとアーシアに向かいあう。

じつとラッセーに強く視線を向ける。

見てみると確かに可愛らしい所もある。

恐る恐る、手を伸ばすと…。

「キュー？」

聞いているだけで上機嫌とわかるような声で鳴く。

それはアーシアに撫でられている時と同じレベルで喜んでいる時といえよう。

「すごいな。基本的にドラゴンは他の生物のオスが嫌いなのに…」

ザトウジは巧に撫でられて喜ぶラッセーを見て、顔色を驚きに染める。

「きつとそれはイツセーの優しさをラッセーは感じたんじゃないかしら？」

「そうかもしれないですわね」

「確かにイツセーくんは素直じゃない所がありますしね」

「……ツンデレ乙」

「つつ?!?! もう帰るぞ!!」

皆にツンデレと言われ、顔を赤くした巧は一人でその場から歩き出しました。

アーシアはそんな巧に追いつくために笑顔で駆け寄った。

第2章 戦闘校舎のフェニックス 新たななる問題

『君は生きるんだ…… 乾君つつ!!!』

『木場!!』

そこは人間の世界ではなく、正に冥界、地獄。

そんな名前で呼ばれて正解と言えるような場所。

街中にいくつも立ち並ぶ、高層ビルに似た建物は崩壊し、世紀末を予感させる風景となっていた。

そんな荒廃した世界の中で巧は自分の仲間である青年の名前を叫ぶ。

青年は穏やかな笑みを浮かべて、体からは力が徐々に抜けつつある事にその体に触れて気付く。

巧は体から青い炎を上げている青年に近寄り、彼の体を支える。

その時には青年の体を支えている巧の両手からは灰がこぼれ落ちる。

パラパラを地面に散ってゆく灰。

それはオルフェノクにとっては体の崩壊。

つまりは命の危機を知らせるものであった。

それを見ても、巧は自分の事を気にも留めずに青年の体を揺さぶる。

『おい木場、木場あ!!』

『…君と短い時間でも一緒に戦えて嬉しいよ…』

けれど僕はここまでみたいだ…乾…君。君に大きな役目を任せてしまいいけど…よろしく頼むよ。奴を討ってくれ…』

体を揺さぶられた青年は体を炎に包まれている事を気にせず口を開く。そこから聞こえる最期になるであろう言葉を一文字も聞き漏らす事ないように神経を集中させて耳を澄ませる。

『ああ… お前の理想も夢も俺が継ぐ』

青年の願いを受け止め、彼の持っていた夢を受け継ぐ事を覚悟した

巧はうなづく形で答えを青年に届ける。

すると巧の両腕にかかっていた重さが一瞬にしてなくなった。

先ほどまで巧の両腕を支えとしていた青年の体は青い炎によって燃え尽き、その体は灰と化していた。

その事実を巧の足元に積もっていた灰が示していた。

——木場っ……。俺は…俺はっっ!!

手のひらを握りしめ、両足に力を込めて、ゆっくりと立ち上がる。

荒ぶる呼吸をなんとか抑えて、真っ直ぐと目の前にいる倒すべき敵を見据える。

『……』

灰色の体を持ち、何処かファイズやカイザやデルタと言ったライダー達と似たような体で首元にはスカーフを巻いている異形。

その名もアークオルフェノク。

オルフェノクの王。

巧は自らがオルフェノクである事を目の前の王と向き合うことによつて認識する。

けれど退く訳にはいかない。

この王を倒さなければ…先ほどの青年のような者が増えるだけだから…それを止めるのはこの青年の願いだから。

——木場、一緒に行こうぜッ!

『Standing By』

「変身っっ!!」

『Complete』

勢いよく地を蹴り、土埃が舞う。

咆哮とも叫びともとれる巧の声。

ファイズフォンを胸の前まで持つて行き、腰に巻きつけていたファイズドライバーに換装し、変身を完了させたその時だった…。巧の腹部に衝撃が走ったのは…。

「イツセー、起きなさい。もう朝よ」

寝起き一番に見えたのは自分の事を起こそうとしているリアスだった。

巧は瞬きを幾度となく行い、数秒かけて自分の腹部に視線を向けるとその上には自分の愛用している枕が乗っていることに気がついた。つまりはリアスがこの枕を自分の腹に乗せたのだ、それなりに勢いをつけて…。

「……」

「もしかして怒ってる、イツセー？」

リアスは不機嫌そうな巧の顔を見て、下から覗き込むように自分の顔と巧の顔を近づける。

巧もいきなり距離を詰めてきたリアスに驚いて後ろに後ずさろうとするが足を後ろに下げると先ほどまで自分の寝ていたベットにぶつかり体をベットに打ち付ける。

ギシギシとベット内部のスプリングが働く音が耳に入り、すぐに体を起こす。

「さあ、朝食にしましょうイツセー？」

「…なんでお前ここにいんの？」

巧の質問に対する答えはなく、リアスはそのままだ一階に向かう。

そんなリアスに少しばかり苛立ちが生まれ、彼女の後を追うようにして巧は自室の扉のドアノブを握りしめた。

「ふああ？、眠い…」

「大丈夫ですか？イツセーさん」

駒王学園の教室にて少し欠伸をする。

巧は今朝からのリアスの態度に違和感を覚えてならなかった。今朝のリアスは何か変だった。

何かに焦るようで何かから逃げるようで何かを恐れているようだった。

そんな恐怖心を感じ取ったが態度には全く見せずにはいた。

だからこそ気になってしょうがない。

が、彼女にそこまで踏み込んで良いのかわからない。

彼女と自分の距離感に悩み、思考することに意識を集中させている為か自分の肩を叩いていたアーシアの存在に気づくのに少しばかり時間を有した。

「なんだアーシア」

「松田さんと元浜さんが先ほどからずっと声をかけていましたよ？」

アーシアに言われ、体を前に向ける。

巧の机の正面にはワイシャツを噛み締め、涙を流して巧に視線をぶつける松田と元浜がいた。

「…なんだよお前ら。 あっち行け」

「イツセーええ!! 貴様ああ!!なぜ朝からリアス先輩とアーシアちゃんの美少女二人と登校をしているんだああ!!」

「ああっ! すでに二人のファンクラブはお前の追跡、撲滅を行おうとしてるぞ!!」

二人は巧の机を手のひらで勢いよく叩く。

バン!バン!と音が響き、その音で顔を背けて不機嫌さをあらわにしている巧。

「そんなのしるかよ。アーシアは知ってるだろうけどな、リアスのやつはあいつが勝手に居たんだ。俺に文句を言うな」

巧の不機嫌さとぶつきらぼうさが合わさった言葉を聞いて二人は絶句した。

リアスはこの学園では知る人ぞ知る有名人。

そんな彼女と一緒に登校出来た事は一生の思い出となるだろう。

記念の様な出来事を一蹴する巧に二人は勿論の事だがこの教室にいた全員が松田や元浜と同じ状況になっていた。

ただ一人、アーシアを除いては…。

巧は今朝からのリアスの見せる何処か何かを恐れているのを無理やり隠す笑顔が頭から消えずにそのまま頭の中に残り続ける事を意識していた。

「…くそっ、逃げろよ…おいっ!」

「頑張ってください、イツセーさん!」

「キュー♪」

夜、巧とアーシアは巧の部屋にてテレビゲームを行っていた。

元々男子高校生であった一誠の部屋には複数のソフトとそれに対応するゲーム機が置いてあった。その為夜ご飯を食べ、風呂も入り終えた二人はテレビゲームを行う事にした。

「…よし。いいぞ…そのまま行け」

巧自身はあまりこういったゲームをやっていた記憶が乾巧としての時からなく、こういった物をやるのはなんと今日が初めてだった。

やり始めた最初はくだらないだろう。

そんな気持ちでやっていたが、何回かゲームで負けたりすると巧の負けず嫌いが発揮され、今ではこのゲームに熱中している。

「気をつけてください、後ろから恐竜さんが来てます!」

「キュー!?!キュー!!」

アーシアは両腕で抱き抱えたラッセーと共に巧がゲームを行う様子を眺めていた。

このゲームは主人公が様々な時間に行つて冒険をするゲームで

アーシアは主人公に迫り来る敵を見てリアクションをつけながら巧に知らせていた。

ラッセーもアーシアの両腕に包まれながらも巧のゲームプレイを見て驚いた声を出す。

「このっ!! 逃げ切れ!」

「あつ:ゴールしました!!」

〈Nice Drive!!!〉

ようやく巧がこのステージをクリアし、テレビからゴールを祝う音声流れる。

当初は時間つぶしにやっていたこのゲームも二時間近く行っていた。

時計を見て、そろそろ11時を回り眠くなり始めているアーシア。

ラッセーも少しばかりの欠伸をしていた。

そんな二人を見て、巧も眠気を誘われた様で目を擦る。

「おい:お前ら。そろそろ寝るぞ。部屋に戻れよ」

「ふあい:イツセーさあん」

「キユ?」

欠伸をしながらラッセーとアーシアは部屋を出ようとするが:。

突如、部屋の入り口近くに魔法陣が展開され始め、誰かがこの部屋に転移してくるのを察知し、部屋に戻ろうとしていたアーシアの手を後ろから引つ張り、自分の元に寄せる。

「えっ?? どうしたんですか:?:イツセーさん」

いきなり手を引つ張られて、思ったよりも巧の顔が近くにあった為か、アーシアの顔はほんのりと赤みを帯び始める。

対する巧は自分の部屋に現れた魔法陣から見える服装が駒王学園の物だと気付き、体に込めてきた力を抜いて脱力をする。

少ししてからこの部屋に現れた来客ローリアスは巧とアーシアを見据えた。

二人までの距離を長い足を全開に伸ばしつつ接近し、お互いに近づいていたアーシアと巧の二人の体を掴む。

「イツセー、今から私の事を抱いてちょうだい。勿論、アーシアを混

じって三人でも構わないわ」

「はっ?」

「ーいきなり何を言っただこの女?

リアスのいきなりの願いを心中で一蹴する巧。

ちなみにアーシアはなんの事?と言わんばかり頭の上にクエスチオンマークが浮かんでいた。

「あら、アーシアはしないの? まあ取り敢えずは…私の処女を貰って頂戴、イツセー」

いきなりのリアスの願い。

それは巧にとってはメガトン級の重さを持つ願いだった。

「ふえええ!?! 部長さん、どうしたんですか?」

「そうね…イツセーには素質があるのよ。貴方となら文句は言われなと思うの。アーシア、一緒に気持ちよくなりましょう?」

リアスはその美しい目でアーシアを打ち抜いた。

アーシアもこれまでの会話でリアスの願いとこれから行われるであろう行為を頭の中で考えてしまい顔を真っ赤に染める。

それは先ほど巧と接近した時の赤みとは比にならないほどでそういう行為をする巧と自分を思っ顔て顔を赤くする。

「…ばっ、お前何言っただの!?! 頭大丈夫かよ!?!」

求められている巧も顔を赤くしてリアスから距離を置く。

普段の静かな様子から年上と思われがちだった巧だがリアスと同年代と認識できるような態度を見せ、少しばかり嬉しそうな笑みを浮かべているリアス。

「ええ…頭は大丈夫。 不思議と怖くないの。それに私、貴方の事…大切だと思っただもの」

リアスは制服のスカートのチャックを外す。

リアスの腰回りを隠していたそれは重力によりパサリと地面に落ちる。

次に手をかけたのは駒王学園の制服のワイシャツのボタンだ。

普段から脱いだり着たりを繰り返した影響か、慣れた手つきでボタ

ンを一つ一つ外していく。

ボタンを外していく程にワイシャツは開いていき、リアスの柔らかく、白くきめ細やかな肌が露わになっていく。

ワイシャツのボタン全てを外し終えて下着だけのリアスは、今だに慌てている巧とアーシアを立ち上がった場所から見つめ、その目で捉える。

アーシアはこれから巧とそういった行為を行う事に恐怖はなかったが、いきなりやりましようと言われて出来るつもりもなかった。

「さあ…早く済ませましょう。…邪魔が入る前に」

「ちよっ…待てっ！ 何すんだよお前っ!!」

背中についてあるブラジャーのホックを両手を後ろに回して外そうとするリアスを止めるべく、思わず立ち上がり彼女の服を纏っていない体に触れる事を一瞬、躊躇したがこのままではまずいと判断し、彼女を止めるべくその体に触れようとするが…。

「きやつー……随分と大胆なのね」

いきなり自分の体に伸びてくる巧の手を見て、思わず後ろに下がってしまい、ベットに背中から倒れこむ。

巧は狼狽し、彼女を押し倒してしまった上に今は彼女の顔の直ぐ近くについてある両手を引っ込め、そのまま部屋の壁際まで下がる。

「イツセーさん、わ、私…私も!!」

先程までリアスと巧のイチャラブーアーシアから見たらそう見えてしまった物ーーを見た為か、少しばかりの焦りがある声でアーシアは力の入った声を出す。

勇気を出すんだ。

指を胸の前で組んで、目を閉じる。

正にシスターが神に祈りを捧げる際の行為と同じである事にアーシアは今になって気がつく。その直後に激しい頭痛に見舞われる。

ここで巧は自分がどうするべきかを考えていた。

ー誰でもいいからこの状況をなんとかしろっ!!

言葉にせざとも全力でまだ見ぬこの場を収める救世主が欲しいと心から願う。

目を閉じて自分の願いを心中で叫ぶ。

「そこまでです。お嬢様」

巧の耳に聞こえた凜とした声。

その声と同時に巧の部屋に出現する、見た事もない魔法陣。

その魔法陣から現れたのは一人の女性。

銀色の髪、整った顔、美しいスタイルを持つメイド服姿の女性がこの部屋に現れた。

巧の部屋はさほど大きい部屋ではない為かメイド服姿の女性がいると場違いと思えるがこの状況では巧にとっては彼女は救世主と呼べる存在であることに変わりはない。

「グレイファイア…。もう来たのね」

リアスは現れた女性をグレイファイアと呼んだ。

アーシアはいきなり現れたグレイファイアに驚き、何も言えずにいた。

巧はグレイファイアが来たことでリアスの暴走が止まり、一息ついてその場で座り込む。

不死鳥の襲来

「部長のお悩み？…ううん、そうだなあ、僕は分からないけど、朱乃さんなら知ってるんじゃないかな。なにせ部長の懐刀みたいな人だからね」

「…そうか」

リアスの来襲から一晩。

巧は昨日のリアスを見て、彼女に何かが起きていることは簡単に理解し、自分からは聞きにくいし、事情も知らない為と同じ眷属の祐斗に話を聞くことにしたが結果な微妙な答えだった。

けれども女王の朱乃ならば話が聞こえるかもしれないと祐斗の話を聞いてそれとなく話を聞いてみることにした巧。

「はうう!! 私…昨日の私はっ…ううう…」

悲鳴に似た声を上げる一人の少女—アーシアは巧と祐斗から4メートルほど後ろで両手で頭を抑え、体を小さくして蹲る。

昨日のことを思い出し、恥ずかしさと忘れたいという気持ちが彼女を支配し、あのような態度をとらせていた。

「イツセー君、アーシアさんはなんであんな風に？」

「…俺が知るかよ」

アーシアの様子を見て、無視するわけにもいかない為に祐斗は巧に話を伺う。

だが、巧自身がそれを話したくはないので祐斗の質問には答えずにそのまま旧校舎へと足を進める。

今回ばかりは巧もアーシアに手を貸すことはしなかった。

「……………」

アーシアから距離をとって旧校舎の入り口に入りかけた寸前で巧の足が止まった。

不意に誰かの視線や存在に気づいたのだ。

周りを何度も見渡して誰がいるのかを探す。

しかし、この旧校舎に近づけるのは生徒会の面々などで一般の生徒が近づいてしまわない様に魔力を使って人除けの魔法をかけてある。そんな場所にいるのは確実に悪魔などの関係者ということになる。さらに巧が感じた第三者の気配は外からではなく、旧校舎の中、さらに言えばオカルト研究室から感じたものだった。

それなのに、先ほど感じた視線はまるで自分のいる場所を的確に分かっていて見つめていた視線の様に感じた。

「イツセー君、扉開けないの?」

巧の隣にいた祐斗が声をかけ、深い思考の中から目を覚ます。すぐに扉を開けて、二人はオカルト研究室にまで移動した。

「…つつ?!? まさか、僕がここまで来てようやく気が着くなんて。だからイツセー君はあの時に止まっていたんだね?」

「…さあな」

部室の入り口前で祐斗もこの先のオカルト研究室に第三者がいることを察知し、目を細める。

その際に自分よりも遙か先に気がついた巧に声をかけるがぶつきらばうな返しをくらい、思わず苦笑する。

祐斗の苦笑に何も返さずにそのまま扉をあける。

扉を開けるといつも通り、リアスは部室に置いてある自分の席に座り、朱乃もニコニコ顔で二人の事を立ち、待っていた。

が、そこには部員ではない第三者がいた。

昨晚、リアスの暴走を止める為に巧の部屋に魔法陣を介して出現し、その後兵藤夫妻にご挨拶として様々な物を迷惑をかけた謝罪の品として渡した張本人。

グレイファイア・ルキフグスはそこにいた。

「一晩ぶりですね、兵藤一誠様」

「ええ…まあ、そうっすね」

ここで祐斗は普段のここにご顔から一転し、驚いた顔を見せる。巧の憑依事情を知らない祐斗から見れば、年上であるリアスの事を

呼び捨てにしたり、朱乃の事を姫島と呼んだりと何処か他の人たちとは違った様子を見せていた巧がグレイフィアを前にするときこちなさはあるが、敬語を使って見せたのだ。

「ここで敬語使えるんだ、なんて言ったらイツセイ君に怒られるかな？」

心中のぼやきは全く口に出さず、驚いた表情も一瞬でいつも通りの表情に戻して部室内に入っていく。

彼女がここに来ている時点で巧の話していた悩み事に関してなのでは？という仮説が生まれており、その証拠にリアスの掌は赤くなっており、先ほど机を力を込めて叩いた事を物語っていた。

けれどもどんな問題があるうとも目の前のツンデレ兵士がともにいてくれるのならばどんな事も出来る気がする。

不思議とそんな気持ちにさせられた祐斗はゆつくりとオカルト研究部室の敷居を跨いだ。

「これで皆様お揃いになりましたか？」

銀髪メイドのグレイフィアはグレモリー眷族が全員集合である事を確認し、リアスの隣いたはずの場所から一步前に足を運ぶ。

「今日、私が来たのはー」

グレイフィアの説明が始まり、部室に集合していた眷族の体がピクリと反応する。

壁に背中を合わせて、両目を閉じていた巧も目を開き、顔だけはグレイフィアに向ける。

「待って、グレイフィア。 私が説明がするわ。今日は……つつ!!」

リアスは座りながら静止の言葉をグレイフィアにかける。

一瞬、後ろを向いてリアスに視線を向けたグレイフィアだったが、リアスの顔を見てその場から数歩後ろに下がる。

リアスの説明が始まろうとした瞬間――。

この部屋の中心部から炎が生まれる。

その炎が生まれると同時にどこからともなく鳥の鳴き声が聞こえた。

巧はそんな炎の中で直立する一人の男を見つけた。

あの男がこの炎を生み出した事に気づいた。

「ふう人間界は久し振りだな。　つと、会いに来たぞ。　愛しのリアス」
炎が収まり、一気に鎮火する。

すると一人の男がリアスを見て、喜びの混じった声を上げる。

しかしそれを受けたリアスの顔からはリアスと呼ばれた事に関する嫌悪感だけが滲み出ていた。

巧たちの元に突然現れた男――ライザー・フェニックス。

この男はリアスの婚約者。

けれどもリアスはそれを断固拒否し、今日まで断り続けてきたが、今日は遂にお互いの話し合いとなった。

巧はいきなり現れたライザーにイライラが生まれ始める。

そんなライザーは朱乃のお茶を飲んで一息ついていた。

「いいね。　リアスの女王が入れてくれたお茶は美味しいな」
「痛み入りますわ」

普段とは違い、完全な作り笑顔を浮かべライザーに対応する朱乃。

ライザーはそんな朱乃の本心などいざ知らず、彼女に対して男としての視線をぶつけていた。

自分の隣で自分の指で触れているリアスの事を置いておきながら。朱乃は巧たちと同じように壁側に移動し、その場で立ち見と同じ状態でこの場を見守る。

ライザーは巧たちが見つめているのにもかかわらずリアスの長く美しい紅髪の触れ、反対の手で白く艶やかな太腿に触れる。

――いけ好かない野郎だな。

巧のライザーに対する第一印象はそれだった。

赤いジャケットにネクタイをつけない状態のワイシャツのボタンを複数も開けており、とこぞのホストかよ！とツツコミを入れたくなるような格好だった。

「ライザーっ！ 前にも言ったように私はあなたとは結婚なんかしないわ！」

長く自分の体を触れた事、そして自分の大切な親友で眷族である朱乃に卑しい視線をぶつけた事を合わせて、ライザーに向けて否定の言葉をぶつける。

「おいおい、リアス。 君は自分の家のお家事情や今の冥界の事情を分かっているのか？」

ソファアールから立ち上がったリアスに向けて、やれやれだぜと言わんばかりに両手でジェスチャーをする。

こういった行動一つがリアスやそして巧のイライラを募らせる。

「ええ、分かっているつもりよ。 確かに純潔の悪魔は先の戦争で減ってしまった。 けれども、私は自分がいいと思う人と結婚をしたいの！それは決してあなたではないわ！」

だから二度と言わない！私は…あなたとは結婚しないわ、ライザーっ！！」

リアスは自分の意思と持ち続けた『夢』の為にライザーに今までで一番、大きな声で否定の言葉をぶつける。

巧はここまで感情的になるリアスを見るのは初めてで少しばかり驚いていた。

ーこれでも面倒事も終わりだな。

これでライザーとの話し合いは終わり、立ちっぱなしの状態からあの柔らかいソファアールに座れるのかと思うと気が楽になり、それに加えて心の中で早く帰れと念じる。

しかし、リアスの否定の言葉を浴びてもライザーは動かずにポケットに突っ込んでいた右手をリアスの顎に添える。

自分の顔を近づけて、リアスとの距離を近づける。

「俺もな…リアス、フェニックス家の看板を背負っているんだ。 名前

に泥を塗られる訳にはいかないだよ…っ！それにな、俺は人間界が嫌いだね。この世界の空気や炎は汚れている。炎と風を司るフェニックス家としては…不愉快でならない」

するとライザーの周囲から熱気が発せられる。明らかに怒りや殺気の類を放出していた。その殺気に対抗するようにリアスも自分の体にある滅びの魔力をぶつけようと魔力を体から放出させる。

祐斗や朱乃や小猫は臨戦体制をとり、アーシアは戦闘を恐れ、体を小さくする。

グレイフィアは二人の様子を見て、静止の言葉をかけようと空気を吸い込んで、声を発するために口を開けようとするが…。

「嫌いなら来るんじゃねえよ」

「…なに？」

壁にもたれかかっていた巧の声に反応するライザー。

その際にライザーの眉は上に上がり、怒りを露わにする。

ライザーの怒りを込めた視線は巧の近くにいたアーシアを震わせる。

「聞こえないなら、もう一回言ってみよう。嫌なら来るな。お前のくだらない話のせいで さつきからソファアには座れてないからな。リアスに振られたんならさつきと帰れ」

巧はすべてのイライラをライザーにぶつけた。

事実だけを伝えた巧の言葉にリアスは思わず込み上げてくる笑いをこらえようと必死だった。

グレイフィアは自分よりも先にライザーに言葉をかけた巧を見ていたが、こんな言葉をかけるとは予想外。そんな心情を顔に表していた。

「貴様っ…!! 誰に向けた言葉か分かってるのか!!」

「リアスに振られた男だろ？さつきと帰れ」

ライザーの事を厄介払いするように追い払う巧。

自分の中にある大きなプライドが音を立てて崩れ去りそうになる。

ライザーは自分の隣を通り過ぎようとする巧の顔に向けて悪魔として込められる全力の拳を振り抜き、放った!!

「イツセーっっ!!」

リアスはその場から巧の名を叫ぶ。

巧は強い。けれどもファイズにならない巧の強さを見た事のないリアスは年相応の少女のように叫んだ。

パシィィ!!

甲高い音が響く。

ライザーは自分の魔力を込めて、巧に向けて放った拳は確実に直撃し、あのムカつく小僧の顔を見てやる。

そんな風にニヤニヤしている。

瞑っていた目を開くと驚愕の景色が目に入った。

「こういう事は適当なところで切り上げとくもんだ。でなきやカツコ悪いだけだぜ」

先ほどと変わらない様子で自分の全力の拳を片手で受け止めて尚且つ、その拳の勢いを片手のみで殺した巧の姿がそこにあつたからだ。

自分を見下したように見つめる巧に対して、唇を噛み悔しさを露わにする。

「おやめください、ライザーさま。 兵藤一誠さまもご自重ください」
凜とした声が巧とライザーの動きを止める。

その声の持ち主、グレイフィアは二人を声のみで圧倒し、ライザーも先ほどまで炎のように燃えていた怒りを押さえ込み、ソフアーに音を立てて座り込んだ。

巧もソフアーに座ったライザーとこの場の空気からまだ話し合いが終わらないであろう事を覚悟し、再び壁際まで戻る。

「こうなる事は旦那さま方も想定内でした。

リアス様がそこまでご自分の意見を貫き通したいのならレーティング・ゲームにて決着をつけるのはどうでしょうか?」

グレイフィアの提案に巧とアーシアを除いたすべての者が驚きを顔に露わにする。

「……」

レーティング・ゲームとは何かを聞きたい巧とアーシアだったが霧

困氣的にそんな事を聞く空気ではなかった。

口を開く事のできない二人の為に朱乃と祐斗は二人に説明を入れる。

「爵位持ちの貴族の悪魔が互いの眷属を戦わせるチェスに似たゲームだよ」

「これが…私たちが悪魔に転生する際に利用した悪魔の駒がチェスの駒に似てる理由ですわ」

巧とアーシアはぼんやりとだが、ある程度の理解をしてこの話を聞く。

「なあ、リアス。君の眷属はこれで全員かい？」

「ええ…そうだけど？」

ライザーは立ち上がって、巧たちを見回してリアスに質問をする。

その目からは嘲笑を感じさせるもので、その視線を浴びている巧は目の前のバカを殴り飛ばしたくなったのを無理やり押し込めた。

「ハッハッハッ!! こちらの半分にも満たないな。俺はゲームを何度も経験しているし、勝ち星も多い。その上、眷属でさえもこちらを上回っていないとは」

大口を開けて笑い越えをあげるライザー。

リアスはそんな大口を開けているライザーの口内にタバスコを打ち込んでやろうか、と思っつてしまっいほどだ。

笑い声を止めたライザーは指と指を合わせ、快音を響かせる。

地面からはフェニックス家の物と思われる紋章が床に広がり、そこから先ほどの炎と同じ物が出現する。

今度、転送されてきたのは一人や二人ではなく、十五人もの悪魔。

「はっ??」

巧の間の抜けた声が皆の耳に聞こえた。

が、それも仕方のない事だった。

現れた十五人の悪魔は皆、年齢の違いはあれど全員が美女、美少女と呼べる綺麗な顔立ちをした者たちだった。

「……リアス、こいつらは何だ」

巧はリアスの元まで歩き、近づいてから耳元で囁く様にこの場に現

れた女性たちについて質問を行う。

なお、ライザーはリアスに近づいてから尚且つ、キスを出来そうな距離にまで近づく巧に怒りの視線をぶつけていた。

「彼女達はライザーの眷属よ。…見てわかる様にそれだけの関係とは思えないのだけどね」

リアスの視線に促され、ライザーに視線を向ける。

確かに主従関係だけでなく、それ以上の関係もあるであろう事を巧は理解した。

「お前も苦労してたんだな…」

「心配してくれてありがとう、イツセー」

こんな男が婚約者ではさすがにリアスが辛い事を感じ、珍しく優しい言葉をかける。

優しい言葉をかけられたリアスは巧の口からそんな事が聞けるとは思っていないかった様で、心からの笑顔で返す。

「おいっ！ さっきから見てれば、俺のリアスにどれだけ近づいてるんだ!! 下級悪魔如きがっ!!」

二人のやり取りを見て声を荒げるライザー。

自分には見せない様な美しく、優しい笑顔を唯の眷属悪魔で立場から考えれば自分には遠く及ばないと決めつけている巧に見せる事に對して腹を立てた様だ。

「こいつと結婚するんに他の女を作んのかよ」

ライザーの怒りを無視して、そのまま言葉をぶつける巧。

その目から、巧の力の片鱗を見せつけられたライザーは体が巧に對して危険と判断をする様なシグナルが発せられる。

「ーぶざけるなっ!! 俺は、フェニックスだ!!」

なんであんなクソ餓鬼一人に怯える必要があるんだっ!

体のシグナルを無視して、湧き上がりそうな巧に對する恐怖心に無理やり蓋をする。

足を移動させて、巧とにらみ合う。

「さっきの質問、答えてやる。そうだ。よく言うだろ? 英雄、色を好むってな。まさかお前…羨ましいのか?」

睨み合った状態のライザーからは巧の怒りを駆り立てる様な言葉ばかりが出てくる。

最後に巧を見下した目と表情を作る。

その際にはライザーの背後にいた、自身の眷属達も巧に向けて嘲笑を向けられていた。

「バカツ!! 俺はな、お前みたいに適当なのが男として許せないんだよ!!何が英雄だ! 唯のスケコマシじゃねえか!!」

巧は自分に彼女がいない事に關して多少のコンプレックスを持っていた為は何股をかける事を堂々と言うライザーに怒りとすこしばかりの嫉妬があり、それが表に出て、すこしばかり焦った口調での返答となる。

「何だと…?? 口を謹めよ、下級悪魔。」

さつきから何なんだ、貴様は俺に恨みでもあるのか!」

スケコマシ…と呼ばれた事に怒りが爆発し、ライザーもつかさず声を荒げて返答を行う。

ライザーの言葉を聞いた巧はすこしばかり落ち着いた表情を見せる。

「ああ。 あんたは面が気に食わない。小学生の時、俺を勝手に班長にした奴に似てる」

『プツ!』

巧の思わぬ返答にグレモリー眷属はアーシアを除いて全員がその場で吹き出した。

リアスは口を押さえてその場で膝をつき、祐斗は一人壁ドンを行いその表情を隠し、小猫は今にも笑い出しそうな顔で自分の持っていたお菓子を口に詰め込み笑いを堪え、朱乃は先ほどまでの作り笑顔が消えて、本心からウフフといつ間の笑みをこぼす。

なおグレイフィアは体はまっすぐ保っていたが、顔だけは下を向けて笑いと戦っていた…。

「きつ、貴様アアア!!! ミラツ!あの男の口を塞げっ!今すぐだあ!!」

ライザーの叫びと命令に反応し、十五人もの眷属の中から一人の少女が飛び出した。

ライザーに巧への攻撃を指示された少女、ミラは中華風の服装と髪型で、その手には棍棒を持ち巧に向かって行く。

「――何よ、あの男構えも何もない。」

よくあれでライザー様に楯突いたものね。

自分が攻撃しようと、突進してくるのが見えているにもかかわらずに全くの動きも見せない巧を見て、見下したような気持ちで攻撃に移ろうとしている。

ミラの持つ棍棒はそのリーチの長さで素手の巧よりも間合いは大きい。

だからこそ、その間合いを利用し、巧の間合いが届かずに尚且つ自分の間合いが届くギリギリの位置での攻撃に移ろうとした。

「なっ!?!」

攻撃に移ろうとしたミラは驚きの声を上げる。

突如、自分の体が突進の勢いをなくしてその場で静止をしていた事に気付いた。

自分の体が動かない事に恐怖し、棍棒と共に後ろに後退し距離を取ろうとするが棍棒は何かにくっついていてるようにその場で固まっていたように感じる。

「――何っ!?! 何なのよ!!」

全く訳のわからない現象にミラは困惑し、思わず涙を流そしそうになる。

自分の涙腺から弱さと恐怖を表した水滴が溢れる。

その刹那――

「おい」

自分の耳に聞こえたのはひどくぶつきらぼうで乱暴な声。

けれども今のミラにはその声がひどく優しく聞こえた。

「あつ…。あんた」

「いきなり何すんだよ。あぶねえだろう」

自分に声をかけたのは先ほどの攻撃対象だった男、乾巧。

巧は棍棒の先端を片手のみで握り、その動きと持ち主であるミラの動きをも止めた。

「貴様…。唯のクズではないみたいだな。ミラの攻撃を片手で止めるとは…」

ミラの後ろにいたライザーは巧の動きを見て、認識を改めた。その目で巧を警戒し、そしてまた観察していた。

「このガキ…実践慣れしてやがる。」

それもゲームじゃない、本物の殺し合いを…。警戒するのはリアスでも雷の巫女でもない。あのガキか…。まあ、いざとなればあの手で勝てばいい。王を取れば勝ちなのだからな。

ライザーは心中でゲームに勝利するある手を想像し、下衆な笑みを浮かべ、巧はその笑みを見て不思議と拳を握りしめていた。

「ミラ、下がれ。今日のところはここまでだ。それじゃあな、愛しいリアス。それにクソガキ、おまえはこの俺が直々に潰してやる。そのふざけた口を二度と聞けないようにしてやる」

ライザーはミラを下がらせて、リアスには甘い声を掛け、巧には敵意を剥き出しにした辛辣な言葉をぶつける。

「待つてください、ライザーさま。…あんた、名前は？」

ライザーはそのまま冥界に転移しようと再び魔法陣を開こうとするがミラの声で押し止まる。

ライザーもミラの行動を許可し、すこしばかり時間を与えることにした。

ミラはライザーに頭を下げた後、巧に視線を向けて、名前を聞いたです。

「おまえに教える必要ねえだろ。さっさと帰れ」

ミラの待ち望んだ返答とは全く逆の返答に少し泣きそうになりはじめる。

巧はミラの質問を一蹴し、部屋から出て行こうとするがその頭に向けて、リアスは軽く頭を叩く。

「何すんだよお前っ!!」

「敵とはいえ、女の子なのよ。もっと愛想よく…は無理だけどせめて

名前くらいは教えてあげなさい。部長…いえ、主人の命令よ」

リアスのあまりにも理不尽な命令。

巧はそんなの知るかつ！と返そうと考え、そのまま無視して立ち去ろうとしたが、再びハリセンを振り被るリアスが見え、かかるとに火花が散りそうになる程の速さと勢いを持ってその場で回れ右を行う。

「……………いつ、兵藤一誠」

数えるほどしか乾巧の名前も名乗ったことはないが、それでもまだこつちの方が勝っていた為に癖で乾巧と名乗りそうになったのを押し殺し、兵藤一誠の名を呼ぶ。

「なら、兵藤一誠っ！覚悟しなさいっ!!」

あんたを倒して……………私に跪かせてやるっ!!」

ミラはそう言って、再び先ほどいた自分の場所に戻る。

再びライザーとその眷属たちは炎に包まれ、今度こそ本当に冥界に帰還した。

「やっと終わった…」

面倒事が終わり、巧は最寄りのソファアに座りこんで、この一件が終わってもまだ面倒事がある事を思い出し、ソファアに崩れるように座り込んだ。

リアスの夢

「ほらほら、イツセー！急ぎなさいっ!!」

巧の耳に届く、リアスのご機嫌そうな声。

それが巧のイライラを最高潮へと誘う。

「あのアマっ…!!」

巧は自分の体の何倍も大きなバックを背負い、ごつごつとした岩が道に転がっている山道を歩く。

ーあん時に意地でも行かないって決めれば良かった…!

早速後悔をしていた。

何故、巧はこんな山道を歩いているのか…。

それは先日来襲した、ライザーとの戦いに備えてだ。

グレイフィアがリアスへの提案として十日の修行期間を与えた。

それはライザーとの経験の差や戦力を鑑みての事だった。

ライザーとの戦いではレーティング・ゲームという物を行うと聞いたが、特にやることはない。

そんな風に考えていた巧。

すると一晩が経ち、朝になり、体を起こすと自分の部屋に座り込む

リアス。

そのリアスの隣でお茶をそそぐ朱乃。

お菓子を頬張る小猫。

タンスや引き出しから服を取り出して、ボストンバッグに服や着替えを詰め込んでいる祐斗。

そんなリアスたちを見て、苦笑いを浮かべるアーシアがいた。

そのままひっ張られて、巨大な荷物を渡されて山登りをしている巧。

当然だが、気持ちとしてはイライラが募り、いつも以上に硬い仏頂面。

途中で荷物を降ろそうと力を抜くと、遠距離にいるはずのリアスに見張られている感覚には見舞われ、渋々巨大な荷物を運ぶ。

尚、祐斗は巧と同じ大きさの物を持ち、小猫はただでさえ巨大な荷

物の何倍もの大きさの物を背負っているため、自分だけ逃げるのも癪。そんな負けず嫌いな気持ちも巧の中の何割かを占めている。

ブツブツと文句を口にしながらも巨大な荷物と共に山登りを終えると、巧の視界には大きな建物が目に入る。

「ここはグレモリー家の所有する別荘の一つなの。さあ、すぐに着替えて、修行を始めるわよ。何しろ十日しかないのだからね！」

こうして巧たちの修行が始まりを迎えた。

ジャージに着替えた祐斗と巧。

二人の手には木刀が携えられ、祐斗は両手で構え、巧は片手で持ち、地面に着くかつかないかという持ち方をしていた。

「祐斗、イツセー。互いに全力でお願いね」

リアスは審判役として二人の中間に位置する場所に立ち、祐斗、巧の順に目を向ける。

いつも通り、しつかりとした構えで剣を握る祐斗。

だらけたようにした剣を持ち、構えも何もない状態の巧。

一般人が見たら、祐斗の方が強いと感じるが、リアスと巧と対峙していた祐斗は巧に隙が全くない事を感じていた。

「ーすごいっ…。脱力してのに、あそこまで隙がないなんて。

ーああの祐斗がそう簡単に攻められないなんて…。

祐斗は下級悪魔の中では上位に匹敵する力を持っている騎士だ。

そして彼の持ち味のスピードと剣術を知るリアスからしてその祐斗が攻めあぐねているというのは珍しい光景だった。

ファイズとしての戦闘を二度見てきたが、そのいずれもが徒手空拳による物だった。

剣を扱うところなど見てなかったリアスは剣を持ってもここまで

隙のなさを見せる巧に只々感心していた。

「ーイツセー…いいえ、巧さんは強い人なのね。私なんかとは違う。いつも我儘ばかりの私とは…。」

下僕のはずなのに…。

自分は皆を引つ張るリーダー、王なのに…。

巧は自分では倒せないような相手を次々と倒していく。

現にアーシアは巧に強い好意と信頼を寄せていた。

それを妬む事は無かったが、自分の弱さが証明されていく気ではなかった。

「はあああああ!!」

自己嫌悪になりつつあったリアスの思考を現実に取り戻したの
は祐斗の怒号。

上段に剣を構え、四メートルほどの距離を自慢の脚力で一瞬で詰
め、木刀の間合いに入ると同時に刀を下に振り下ろす。

それに掛かった時間はおよそ、一秒ほど。

振り下ろされた刀は確実に巧の左肩に向かう。

しかし、刀が巧の肩に触れる前に祐斗の視線から巧の姿は消えた。

「なっ…?!」

姿を見失い、戸惑いを見せる。

どこにいるんだという驚きから周りを見渡していると不意に右頬
に痛みが生じる。

「…痛いっ、痛いよイツセー君!」

「……」

行き場のないイライラを祐斗の頬をつねる事で発散する。

祐斗は頬をつねられながら、巧がああ後にどんな行動をしていたの
かを考えていたが、どう考えてみても巧がどのような行動をとったの
か、祐斗には予想もつかなかった。

「ー僕の攻撃を避けた後に彼は何をしたんだ…?」

巧のとった行動はシンプルな行動だった。

祐斗の一撃目が自分の体にぶつかる前に身体の重心を右に逸らし、
そのまま足を前に踏み出し、勢いをつけ、一瞬の加速で祐斗の視界か

ら外れ、身体の右側に回り込み祐斗の頬を掴むという行動を起こしたのだ。

「…もう、いいかなイツセー君？」

「とりあえず、お前は許してやる」

勝手に自分の荷物を漁り、荷造りをした祐斗には大しての仕返しを行い、胸の中のイライラが少しばかり取れたのが実感できた巧だった。

「次は魔力の扱いについてですわ」

続いての修行は朱乃との魔力に関する修行。

尚、生徒は巧とアーシアの二人。

それ以外の面々は各々の修行に励んでいた。

「それではまず、魔力でこのように野球ボール程度の玉を形作ってみてください」

朱乃は胸の前に両手を隙間を空けた状態で突き出す。

何をしているのか、巧は朱乃を見てそう思ったが、よく見ると朱乃の両手の間には何やら米粒程度の何かが浮かんでおり、それは一瞬にして野球ボール程度の大きさにまで膨らんだ。

「すごいです!!」

「……」

アーシアはその光景に驚き、朱乃にキラキラとした目を向けて、巧は無言でそれを強く見つめていた。

「さあ、二人ともこれをやってみてください。イメージとしては体全体を流れるオーラを手のひらに集中させるように」

朱乃の説明を聞き、巧の頭に一つの光景が浮かぶ。

それはファイズとして戦う際に、オルフェノクに必殺技を放つ際に

必ず、ファイズドライバーの縁からフォトンブラットがキックならファイズポインターに向かい、パンチならファイズショットに、斬撃ならばファイズエッジへと集中する。

その光景をイメージし、それに似たようなものである事に気付き、それを題材にすることに決めた。

そこからの行動は早く、瞼を閉じ、手のひらを前に突き出し、ファイズに変身しているイメージでファイズドライバーの縁からフォトンブラットが拳につけたファイズショットに集中するのをイメージし、拳を強く握る。

「あらっ、イツセー君もアーシアちゃんも魔術の才能があるみたいですね」

朱乃の声が届き、閉じていた瞼を開けると、自分の掌の上には赤い色をした野球ボール程度の大きさで形作られた魔力のボールが浮かんでいた。

「イツセーさん、私も出来ましたっ！」

振り返ると自分と同じように掌の上で魔力のボールを形作る事に成功して、嬉しそうな声を上げるアーシアが目に移る。

しかし、自分の作った魔力のボールとアーシアの作った魔力のボールでは色が異なっていた。

アーシアのボールは彼女の神器である聖母の微笑みで相手を癒す際に発生する色と同じ、ライトグリーン。

対して巧はファイズに変身する際に発生するフォトンストリームと同じ赤色だった。

「灰色…か」

その中で赤色で形作られていた魔力のボールの中で一部分だけは灰色で構成されているのに気付き、アーシアや朱乃には気付かれない程度の大きさの声を漏らし、誰も居ないはずの上の階と自分たちを遮る天井を仰ぎ見た。

「当たれ…っ！」

小猫の小さな気合いと共に巧に向けて放たれた拳。

勢いと力が込められており、小猫の小さな体を見たらこの少女が打ち込んだ拳とは思わないであろう程の力が込められていた。

しかし、そんな拳を体の重心をそらすだけでかわし、前に体を寄せていた小猫の足に自分の足を引っ掛けるように前に突き出し、体のバランスを崩す事を狙う。

「……っっ!!」

前に飛び出た為に巧の突き出した足が引っ掛かり、小猫の体は自然と前に倒れこむ。

前に倒れこみ、体と地面が衝突する前に自分の両手を地面につけて、その場で両手に勢いを込める。

その場でのハンドスプリングを行い、巧との間合いを取り、一息つく。

——本当に…強い。変身しなくても…この人なら焼き鳥王に勝てるかも。

呼吸を整える際に、心中で目の前にいる男の実力の底の無さを考えただけでなく背中からも冷や汗が流れてくるのを小猫は感じ取った。

その冷や汗が意味する物に小猫は心当たりがあった。

巧と重ねている。

かつて…自分が慕い、大切に思った姉に。

巨大な力を手にしたが故にその力に呑まれ、自分を見失った存在を小猫はもう一つ知っている。

灰色の怪人

一度しか見ていないが、力に呑まれるそれはまさに姉と同じように思え、小猫の脳裏にはその姿が消えた事はない。

けれども…巧は違う。

そうであってほしい、小猫は自分の攻撃全てを受け流して尚、汗ひとつかかない目の前の男にそんな期待を込めて、次の一撃を放つべく、拳を握りしめ、右足に力を込めて強く、強く、地面を蹴った。

「くらっ！……起きなさい……巧っ!!」

睡魔と戦う巧の頭に衝撃が走る。

虚ろな意識の中で自分の名を呼ぶ、懐かしき少女、真里の姿が巧の目にはぼんやりと見え、閉じかけていた巧の目は一気に開き、その思考と意識を現実に取り戻した。

「…真理」

自分に声をかけた少女の名を呼びながら、巧はその場から立ち上がる。

「どうしたのイツセー?」

けれども巧の目に真っ先に飛び込んできたのは黒髪のショートヘアではなく、どこまでも輝く、宝石の如き美しさを持つクリームゾンレッドの長い髪。

その髪の持ち主、リアスはいきなり見知らぬ女性の名を叫ぶ巧を見て、思わず首をかしげる。

「夢か…」

周りを見ると、隣にはアーシアや朱乃や小猫や祐斗。

リアスは五人よりも少し前の位置に座り、先生のような立ち位置であることを見て、先程まで何をやっていったのかを思い出す。

「イツセー、私が話していたこと覚えてる?」

三大勢力の対戦やどうして転生悪魔が生まれたのかを話していたのに、いきなり寝てしまうんだから」

リアスは溜息を吐きながら、こめかみを抑えた。

対して巧も頭を掻いて先程までに聞いていた内容をうつすらとしたしか覚えていないが、それらをうまく組み合わせる。

嘗て、この世界には悪魔、墮天使、天使という者たちが存在し、悪魔と墮天使は人間界という地獄の所有権を求め争いあった。

そんな二つの勢力を一掃すべく、神は天使と共に二つの勢力に戦いを仕掛けた。

三つの勢力はギリギリまで争いあったが、悪魔は指導者であった魔王と純血と呼ばれる名門の悪魔のほとんどを失い、神と天使たちも多くの天使を失い、墮天使も幹部以外の者たちがほぼ全て戦争で亡くなってしまうらしい。

そんな中で悪魔が開発したのが、あらゆる生物を悪魔に生まれ変わらせることのできる悪魔の駒を作り出し、種の滅亡を免れた。

これが巧の思い出した内容だった。

一言で言えばどうでもいい内容だった。

巧にとっては特に関係もないため、いつも間にか睡魔に負けてしまったようで、今に至ることをここで思い出す。

「……寝る」

「ごらっ！ 寝ちゃダメよ、イツセーっ!!」

再び睡魔に負けそうになる巧を声を出して、必死で寝かさなようにするリアスであった。

「月か……」

夜、布団に入っても中々寝付けない巧。

昼間に寝てしまった分のツケをここで払わされたような物だ。

窓から見える月を見て、中々風情がある物だな。と考えて、布団から体を起こし、寝室を出る。

寝室を出ると長い廊下があり、巧はゆつくりと歩きながら屋敷の出入り口を目指した。

長い廊下を歩き、木で作られた扉を開けて、大広間に出ると女子たちの寝室につながる二階への階段を下りているリアスが目に入った。

「…巧さん」

リアスは誰もおらず、二人だけの状態な為本当の名前で巧を呼ぶ。巧もリアスに会うとは思わずにいたので、彼女の言葉に対する対応が遅れる。

「ねえ、私の話に付き合ってもらえないかしら？」

巧とリアスは屋敷を出て、月見のできる様な場所にいた。

そこは枠組みなどはなかったが、ドーム型の建物となっており、手すりの部分にリアスは身を乗り出して腰掛けた。

そんなリアスの手元には分厚い本と羽ペンが握られていた。

「作戦か」

「ええ、気休めにしかならないけれどね」

「なら、やる意味ないだろ…気休めならな」

巧のバツサリとした言葉も今のリアスには深く突き刺さる。

顔を落とし、紅の髪がリアスの表情を隠す。

そこからは表情は読めず、リアスの声のみが巧に届く。

「ライザーは聖獣と同じ能力を持つ不死鳥、フェニックス。誰も勝てない…だって不死身なのだから。私じゃとてもじゃないけど…勝てないわ。けれど、私は諦める事はしたくない。選択肢の中に戦う事があるのならば、私は戦う事を選ぶ。だって私には…叶えたい夢があるから」

「夢…？」

ここで巧がリアスの言葉に反応し、声が漏れた。顔をうつむかせていたリアスは不意に顔を上げて、巧の顔を見つめる。

その表情はいつも毅然と振る舞い、自分よりも年上で力が強いと認めた男に啖呵を切っていたリアスとは別人の様に見える、どこか焦りのある顔。

巧はその表情に見覚えがあった。

美容師になる夢を持っていた真理はようやく、美容院で働ける様になる為の最終試験まで行ったが、そのテストで店の者に準備が遅いと言われ、再びテストをされると言われ、焦りを見せていた真理と同じ様

に巧には感じた。

「リアス：お前の夢って」

「：私の夢は、普通のリアスでいる事。私がグレモリー家の次期当主であつても、私の結婚する人は私の事を普通のリアスとして見てくれて、愛してくれる人がいいの。私はこの小さな夢を持ち続けていた
い」

リアスの夢：それは自分を自分として愛してくれる者と巡り合う事だった。

それを聞いて、巧はライザーがりのままのリアスを愛するとはとても思えなかった。

だからこそ、目の前の紅の少女は戦う。

「巧さんには夢がある？」

「さあな…。忘れちまったよ」

リアスの問いに苦笑を浮かべ、返答を行う。

すると手すりに座っていたリアスはそこから下りて、巧の元まで近づくと、笑みを浮かべた。

その顔が巧には真里とひどく重なる。

「夢を持つ事の先輩として：一言。夢を持つと時々凄く切なるけど、時々凄く熱くなるの。知ってた？」

「ああ：知ってるよ」

『ねえ、巧。夢を持つとね、時々凄く切なるけど、時々凄く熱くなるの』『なんだかよく分かんねえけど、欲張りだよお前』

巧の見上げた空にはそんな風に言葉を交わし、隣同士で歩いている自分と真理の姿が見えていた。

「まあ：取り敢えず、あのスカした焼き鳥には負ける気はないね」

「ふふつ、そうね、巧さんがまだ小さい頃に勝手に班長にした人に似てるんだものね？」

いつの間にかリアスの胸の中にあつた不安は消え、巧という事にとこか幸福感を感じ、巧と寄り添う時間を堪能するリアス。

巧もリアスと共にこの二人だけの夜の時間に嬉しさと楽しさを覚

え、夜は更けていった。

「ねえ、さつきなんで私の事を真理って言ったのかしら？もしかしてその真理さんと恋人だったのかしら？」

「ちげえよ、バカ。 あいつとはそんなじゃねえ」

真理の事を聞かれ、嬉しそうな気持ちでリアスの言葉を否定し、リアスも巧の顔を見て、ホツとした気持ちになる。

「ねえ、巧さん。 …もし、ここで私が好きって言ったらなんて答える？」

突然のリアスの問い。

横を振り向くと、顔を赤くして巧の言葉を待ち、目を閉じて何かを待つリアスの顔が真正面から巧の視界を奪っていた。

巧もそれを見て身を乗り出して：二人の影が徐々に近づき、零距离となった…。

「痛っ!!」

「ませてんじやねえよガキだろ、まだお前」

零距离となったのは影だけで、実際はリアスのおでこに巧のデコピンが炸裂した。

リアスの白い肌を際立たせるように巧がデコピンを打ち込んだ場所には赤みを帯びていた。

「ねえ、なら真剣に考えて巧さん。 お願い…」

リアスは今度こそ、真剣な答えがもらえると巧の手を握った。

振りほどかれると思うと思わず力が入り、それと同様に手に震えが走るのがわかる。

けれど巧の手はそんなリアスを包むかのようにして、彼女の手を振りほどくことはなかった。

巧は手を握られた当初は振りほどこうとしたが不安に包まれるリアスの表情とそれと同じように震えている手のひらを感じるとそんな思考は一瞬で吹き飛んだ。

今、目の前で震えている一人の少女の手を握り返してやれるのは世界中で彼女が手を握っている自分だけ。

そう考えると不思議と手に込める力は強くなっていく。

「……もし」

「えっ？」

長い間があった。

リアスは返事をもらえるとは思っておらず、自分でも驚くほどに間拔けな声が漏れる。

顔を赤くし、巧の次の言葉を待っていた。

目を見上げ、目の閉じて、次の言葉を紡ぐために口を開く巧。

「俺が十年後に生きてたら……そんな時に答えてやるよ」

巧はそう答えた。

いつか短い期間だけの仲間であった少女に質問された際の答えと同じではあった。

けれど意味合いは違う。

不器用な巧なりの応援だった。少なくともリアスはそう受け取った。そこに潜む巧の真実をまだ知ることはなかった。

——ありがとう……巧さん。私、勝つわ。いつか、その返事を貰える日の為にも。

対決

「アーシアと私はこの本陣にて指示。祐斗と小猫は体育館に向かって、朱乃は準備が出来たら体育館に向かって、その場の敵を撃破。

最後にイツセー、貴方は出来るだけ暴れてちょうだい。バジンの使用許可も出たから、それを存分に利用して」

リアスの気合の入った指示がグレモリー眷属全員の耳に入る。

巧はオカルト研究部に置いてある時計を流し目で確認しつつ、ゲーム開始の十二時までの時間を計った。

巧たちの十日間の修行期間も終わり、遂にゲーム当日を迎えた。

集合場所はオカルト研究部室となっており、巧とアーシアはバジンに乗り、この場まで向かった。

今、バジンは廊下に置いた状態で再び主人の指令を待っている。

「良かったです。バジン君も一緒に戦ってくれるなんて」

「そうが」

皆が駒王学園の制服の中、唯一シスター服を着ているアーシアはバジンが停めてある廊下に目を向けて、呟く。

どうやらリアスがバジンの使用をグレイフィアに申請し、巧の使い魔として扱いで使用は許可された。

レーティング・ゲームでは使い魔の使用も許可されており、その為バジンの許可が下りたのだろう。

「確かに心強い味方が一人でも増えてくれてありがたいからね」

バジンの強さの目撃者でもある祐斗もアーシアに同意の意見を述べ、朱乃が入れた紅茶を飲み、ゲーム開始を待っていた。

「……よし」

拳につけるグローブの感触を確かめ、最終的な確認を行い、気合を込めている小猫。

その顔からはやる気が満ち溢れ、いつも以上に集中していることが伺えた。

「イツセー、ちよつといいかしら?」

「……なんだ?」

壁にもたれていた巧はいつもの机に座るリアスからの声に反応し、机の前まで歩いて近づく。

リアスと目が合い、先日見せた年相応の顔とはまた別の強く意志を持った顔をしていて、巧も無意識のうちに真剣な顔になる。

「正直に言えば……貴方をお願いしたいのはピンチの時のヘルプ要員。ライザーと私たちの大きな差は戦力の数。向こうは一人がやられても大きな変化はないけど、私たちの場合は一人でもやられてしまうと大きく状況は変わってしまう。だから。自由に動き回りつつも誰かが危険と察知したら助けてあげて……お願いね」

「分かった。やるだけやるさ」

「ありがとう、イツセー」

リアス嬉しそうな顔と声で、その白く細い光のような手を巧の頭に伸ばし、優しくゆっくりと触れる。

一瞬、何をされたか分からずに挙動不審になるが、自分のやられていることを理解して、リアスの手を掴んで頭を撫でるのを止める。

「むう!!部長さんばかりズルいですう!!」

二人の様子を見ていたアーシアは今度は後ろから巧の頭を撫でて、巧は再び自分の頭を撫でる不届き者を止めるのであった。

「みんな、時間よ。 場所について」

時計が十二時を指し示したと同時にリアスの声を通る。

巧たちは立ち上がり、魔法陣の書いてある床に立つ。

一秒も経たぬうちに床に書かれた魔法陣は光を放ち、グレモリー眷属、一人一人の体を粒子に変え、別の場所に転移させた。

「……あれ?? どうしてでしょう? 移動したのにまた部屋?」

巧の気持ちを代弁するようにアーシアは首を傾げる。

周りを見回してみるが、普段のオカルト研究室と遜色は無く移動をしていないと判断するのが当然だ。

巧も周りを見てみてどうなっているのか、と頭を悩ませていた。

『皆様、この度グレモリー家、フェニックス家の審判を務めさせていただきます、グレモリー家の使用人、グレイファイアです』

巧の耳に聞こえたグレイファイアの声。

その声の出どころは巧たちのいる場所よりも高度は高い。

頭の中でここが何処なのかという疑問は消えた。

窓からうつすらと見える空は今までに見た事のない色をしていて、異世界を表すような空だった。

『両チーム、転移された場所が本陣となります。』

グレモリー眷属、オカルト研究室。フェニックス眷属、新校舎となります。互いの本陣に入られた場合に兵士はプロモーションを可能にします』

プロモーション、チェスでポーンが相手の本陣に侵入した場合、ナイト、ビジュップ、ルーク、クイーンのいずれかになる事のできるというルール。

そのルールがこの場合にも適応され、自分の強化につながるであろう事を説明の中で理解し、そのままグレイファイアの話に耳を傾ける。

『それでは、30分後にゲーム開始となります』

ここでグレイファイアの声が途絶え、話が終わる。

再び作戦会議や下準備の為の時間が設けられ、話が終わるとすぐにリアスの元に巧を除いて集合する。

「さっきの通りの作戦よ。祐斗、小猫、貴方達は体育館で相手を引きつける事、朱乃からの連絡が来たら直ぐに逃げる事よ。」

アーシアは怪我人が帰って来た時の為に私から離れない事。

朱乃はゲーム開始前にこの本陣の周囲にトラップと逃げられないように結界を張って。それじゃ…私の可愛い下僕達、不死身のフェニックスを吹き飛ばしてあげましょう！」

「「はいっ!!」」

「…おっ…」

四人の声に混ざりながらも巧も小さく声を出し、ゲーム開始までの時間をバジンの調整に使った。

『イツセー、敵の様子は如何かしら?』

「…特に無い。おれも今の所見つかってもないしな」

耳につけた通信機から聞こえるリアスの緊張感を与える声にけだるそうに答え、欠伸をする。

レーティング・ゲームが開始して10分弱。

リアスからの指示が暴れまわれとの事でこのバトルフィールドを動き回ってみたが、今の所は敵との接触は無かった。

それも不自然なほどに。

相手の人数は明らかに自分たちを上回り、この駒王学園の敷地面積から考え、バイクで移動している巧が敵に出会わない確率はかなり低い。

『ライザーは貴方を警戒して、誰にも接触をさせないようにしているのかもしれないわ。気をつけて、イツセー。いきなり貴方を大人数で襲撃してくるかもしれないわ』

リアスの危惧はそこから来ていた。

ライザーが巧を戦力差で押し切ろうとしたのなら、いくら巧といえども10人近くを一人で相手するのは厳しい、だからこそ誰かの助けが必要となり、助けに行つた者が動いた事でできてしまった隙を突かれ敵が攻めて来る可能性も否めない。

巧が単独で敵を撃破する事自体がリアスの作戦の中核を担っていた。

『ごめんなさい、イツセー。一旦切るわ、もしその場に敵がないの

ならそのまま祐斗と小猫のいる体育館に向かって!』

リアスからの指示が最後に聞こえ、巧も二人の危険を考え、体育館に向かう為に再びバジンに跨り、体育館に向かう為にアクセルを踏み、その場から発進する。

ブロロ…とエンジンが掛かって、徐々に加速していく。

ハンドルを器用に操り、魔力で構成されたバトルフィールドでの駒王学園のレプリカを駆け抜ける。

「…??」

「撃破」

女性の声が巧の耳に入る。

ブレーキを掛けて、その場で急停止。

オートバジンから降りようと地面に足につけようとすると巧の足元一体に大きな魔法陣が展開されて、そこから熱が発生する。

「うわあ!!」

それは一瞬で爆発し、巧のいた場所は大きな穴が開き、これをまともにも受けた者は無事では済まない事を示す。

「案外あつけないものね…。あの坊やも」

空中にて巨大な水晶に乗り、その様子を眺めていた紫色の長髪の女性――ユーベルーナは楽しげに口元を緩める。

ユーベルーナは自分が爆発させた男の様子を見ようと未だ煙が立ち込める爆発の中心地点に目を向けた。

少し時間が経ち、煙が消えても巧の体がその目を捉える事は無かった。

「なっ!? 何処に…!?」

巧が居ない事実には狼狽しつつ、首を動かして周囲を確認し、探索を行う。

先ほどまで感じられていた巧の荒々しいオーラと存在。

悪魔としての存在は希薄ではあるが、それ以上の何かを併せ持つ存在とユーベルーナは認識していた。

不意に自分の体のバランスが崩れた事に違和感を覚えた。

自分が空中に浮かんでいるのは水晶による浮遊のため、バランスが

崩れる事は無いーははずだった。

「きゃっ!!」

次にユーベルーナを襲ったのは先ほどの小さな違和感の比にならない程の体の揺れ。

自身の背後では何かが浮遊している事に気がつき、振り向くと…。

「らあああ!!」

自分が体を預けている水晶に向けて、全力の飛び蹴りを放つ巧とその巧の近くに浮遊するオートバジンだった。

突然の奇襲、それはユーベルーナの虚をつき、水晶により浮遊していた体は地面へと落下。

10メートル以上の高さからの落下は悪魔といえどもそれなりの痛みを感じたようで、ユーベルーナの顔からはその苦痛が伺えた。

「…まさか一撃加えられるなんてね…」

自分の目の前で着地をする巧に賞賛の言葉にも似た言葉をぶつける。

巧の実力に確かに驚きつつ、この場で倒すイメージを頭の中で組み立て始める。

ユーベルーナの攻撃は魔力に頼る事が多い。

特に爆発を起こす魔法では群を抜いているーそう自負していた。けれど、目の前の下級悪魔は悪魔の存在があまりにも希薄であった。

魔力などは感じられるし、その実力は秘めている物を加えればさらなる高みに行くことも容易に想像がついた。

それなのになぜ、こんなにも悪魔としての存在が希薄であるのか、その答えにユーベルーナはたどり着く事が出来ずにいた。

思考の波に吞まれていたユーベルーナは一旦自分の考えを止め、巧を倒す為の合図を送る。

両手を前に突き出し、ここから半径50メートル以内には自分のチーム、つまりはライザー眷属しか立ち入れないようにする為の結果を張る。

これで巧を消せる、そう答えを導き出したユーベルーナは自分の近

くに潜む仲間達に向けて右手を前に突き出した形の合図を送る。

「兵藤一誠…覚悟っっ!!!」

そんな怒号を上げて巧の視界に入ってきたのは以前、巧にしてやられたミラであった。

あの時と同じように棍棒を携え、そのまま棒先を確実に巧の鳩尾を抉るようにして、刺突を放った!!

「決まった!!」

今度こそ、巧を討つたとそう感じたミラは思わず声を出してその喜びを表現した。

その声を聞いて、ミラと共に巧を包囲する役目を担っていた複数の悪魔達はぞろぞろと集まる。

集まったのミラを入れて兵士の四人。

それに加え、女王もこの場に集結しておりライザーは、巧をただのガキとしてではなく、敵となる存在として排除しようとしたのだ。

ーあのライザー様の心に残る男が…あの程度なの？

ユーベルーナはライザーの女王として長年側に居続けたが一人の下級悪魔相手はここまでの警戒もしたことは一度たりともなかった。

それに自分自身の目を見た、巧がライザーの拳を受け止め、尚且つライザーが覇気にも似た何かを気圧された瞬間を…。

ミラの攻撃を喰らった巧は膝をついたまま動くことはなかった。けれども倒れてもいなかった。

仮に戦闘不能ならばすでにこの場から消え、転移をされているはずなのだ。

それを行われていないのなら…この男は!

巧がまだ倒れていないことを確認し、杖の先に魔力を集中させる。放つのは自分の最も得意な爆発魔法。

近距離からの爆発で確実に仕留める。

頭の中に勝つためのイメージを作り、それを現実の物にする為、勝つためにユーベルーナは魔力を放とうと杖の先を巧に向けようとした瞬間ー世界が止まった。

白いラインが巧の顔に現れ、その目は白に染まっていた。

『ライザー様の兵士四名、戦闘不能』

無機質な空間に響く、グレイフィアの声。

その知らせを聞き、あるものは動きを止め、あるものは確かな喜びを噛み締めていた。

各々が違った喜びを噛み締めている中で木場祐斗と塔城小猫は喜べる状況ではなかった。

「イツセー君…だね」

「そうですね…」

互いに背中合わせた状態で駒王学園に似たバトルフィールドに点在する体育館の中に二人は敵の動きを待っていた。

祐斗の前に立つのは双子の姉妹、小猫の前にはチャイナに似た服を着ていた少女。

二人はライザーの眷属で、祐斗は兵士の小猫は戦車を相手していた。

「貴方達のチームが四人倒しても…私たちの勝利に変わりはないわ!!」

ルークの少女、シユエランは小猫との間合いを一気に詰めて掌を広げた状態での拳の刺突を腹部に向けて、体全体を利用して放った!

両腕を十字にしてその拳を正面から受け止め、何事もなかったように自分からの攻撃を小猫は狙っていた。

右足を前に一歩踏み込み、左足を振り上げる。

小猫の放ったのは水平蹴りではあるものの巧との修行であそこまでのラフスタイルながら、相手にダメージを与えるのは体の使い方や攻撃を与える場所に影響されることも大きいと小猫は巧を見て学んだ。

「力だけじゃない…体の重さを乗せるようにっ!!」

身体の重心を足に置くイメージのまままで水平蹴りは向かって行く。

ただの水平蹴りと判断し、後ろへのステップを踏み、そのまま下がって避けようと身体を後ろに預けようとするが、背中に何かがぶつかる。

それは無機質で冷たいもので、どこか鋭さを感じさせる。

振り返ると自分は身体よりも少し大きめの剣で作られた壁に寄りかかっていたことに気づいたシュエラン。

振り返った頃にはもう遅く、小猫の巧風の水平蹴りはシュエランの身体に直撃。

剣で出来た壁は破損し、そのまま体育館の壁に激突。

そのまま地面に付すと数秒後にはシュエランの身体は淡い光となってこのバトルフィールドとは違った空間に飛ばされた。

一方の祐斗は自分や小猫よりも幼い子供を傷つけるのはあまりいい気分はしない為、リアスの指示を待っていた。

『祐斗、小猫！ 今すぐそこから離れて、朱乃、体育館を破壊して頂戴』
通信機からはリアスの声と朱乃への指示が聞こえ、祐斗は双子の姉妹の相手を放棄し、そのまま体育館を飛び出す。

小猫は既に外に出ており、祐斗の到着を待っていた。

「あっー!! 待ってー!」

双子の姉妹はそのまま祐斗を追ってくる…が、次の瞬間にはその少女諸共体育館は破壊された。

尚破壊したのは朱乃の放った雷であった。

その表情はうっとりとして、まさに女が惚れた男を見るそれにひどく似ていた。

苦笑いを浮かべる祐斗。

小猫は先ほどのシュエランの動きを封じた剣の壁を作り出した祐斗と向き合う。

「祐斗先輩、ありがとうございます」

「…? ああ、そのことなら気にしなくていいよ。僕の判断でああしたからね」

『ライザー様の兵士二名、戦車一名戦闘不能』

小猫達の元に届いた先ほどの三人の戦闘不能を知らせるグレイ

ファイアの声。

それを聞いてひと段落、と言いたいが彼らグレモリー眷属は人数が六人。

巧が倒した四人と先ほどの三人を加え、七人倒した。

フェニックス眷属の残りは八人と油断できない数字。

二人は一旦ここから離れ、朱乃の回復を待つ為にも動き出そうとするが…。

「逃げる！ 木場！ 塔城!!」

巧がオートバジンに乗って自分達の元に向かってくるがその顔は焦りや焦燥に駆られていた。

ここで祐斗が自分達に何かが迫っていることに気づく。

「祐斗君、足元に魔法陣が!!」

朱乃は空からの祐斗達を見ていた為に気づいた。

今、祐斗と小猫の足元には巨大な魔法陣が作り出されて、それは今にも溜め込まれた魔力が爆発しそうになっている。

「まずは一名…撃破」

祐斗の耳に届いたのは一つの声。

聞きなれない声は体育館付近の上空からのものだった。

朱乃がそれに気づき、雷による攻撃を行おうとするも…。

「小猫ちゃんっつ!!」

祐斗は持ち前のスピードと反応速度により、とっさの爆発から小猫を守り、彼女を爆発から守る盾となった。

「祐斗先輩っつ!」

小猫の小さな声は祐斗に届くことはなく、爆発と共に消えていってしまった。

巧はその場でオートバジンを停めて、ボロボロとなってしまう祐斗に駆け寄る。

着ていた駒王学園の制服は既にボロボロとなり、祐斗の身体が傷だらけになるのがよく分かる。

「まさか、こんな初歩的なトリックに引つかかるなんて。卑怯なんて言わないわよね?」

「貴様！」

ユーベルーナは挑発的な笑みを浮かべ、悪魔の翼を大きく広げ、そのまま突進して行く。

朱乃は怒りの込めた叫びと共に両腕には雷を携えて、それらを球体の形に形成し直し、勢いよく投げる。

が、ユーベルーナが身体を守る為に幾重にも重なるように魔法陣を貼る。

朱乃の雷はユーベルーナの結界のほぼ全てを破壊したがその雷という刃は彼女自身に届くことはなかった。

「木場…おい木場っ!!」

「ごめん…ね。こんなところでリタイヤなんてカッコ悪いけど…
さ」

「駄目です、祐斗先輩!!」

祐斗は無理矢理作った笑みを浮かべる。

それを見る巧と小猫は身体の中にある何かが身を引き裂いているのでは錯覚するほどだった。

小猫が受けるはずの傷を受けた影響で、身体がまともに動かずに腕を巧の服の裾を掴むところまで伸ばすのが精一杯であった。

けれどその震える手の力とは思えないほどの力があることを巧の身体に伝えていた。

「無茶なお願いかもしれないけど…。勝って…イツセイ君。君が部長を守って…ほしいんだ」

祐斗は巧にリアスを守って欲しい。

それを伝える為に力を振り絞った。

何処までも傲慢で自分勝手な願いと祐斗はわかっていた。

自分に出来ないから誰かに託す…そんなのは言い訳にしかならない。
い。

それでも、この想いを祐斗は巧に伝えたかった。

「……ああ」

決して優しい声ではない、けれどその声を聞いて祐斗は身体力を抜いていく。

最後に巧に拳を突き出し、巧も自分の拳を突き出して重ねる。

それを見ると満足そうにして祐斗の身体は淡い光となってこのゲームフィールドから別地点にある医療施設に運ばれた。

『リアス様の騎士一名戦闘不能』

それを聞いて巧は立ち上がった。

不意にオルフェノクが灰になる瞬間と祐斗が転送される瞬間が重なる。

祐斗に託された想いを受け止める。

その時、巧の拳には祐斗の想いが確実に伝わってきた。

決着

『リアス様の騎士一名、戦闘不能』

自分の大切な眷属の戦闘不能を告げる審判の声がリアスの耳に届いた。

その事実を聞くと無意識のうちに歯をくいしばり、その痛みを耐えていたリアス。

「ぶ、部長さん」

隣でソファアに座るアーシアが心配そうに自分の手をリアスに重ね、落ち着かせる為に声をかける。

「ありがとう、アーシア。そうよね、祐斗の為にここで私が止まるわけにはいかないわね」

不安そうに見つめるアーシアが目に入り、沸騰しそうになっていた自分の怒りから熱が抜けていく。

今はここで怒りを燃やすよりも、祐斗の為に、そして自分の為にライザーを倒す事を考えなければならぬ。

その為に自分が出来る事…。

リアスは思考を巡らせ、自分のやるべき事を確認した。

「ー祐斗がいなくなった所を一気に攻めるのなら…。私が直接、ライザーを叩く！」

普通、チェスで王が自ら攻める事は中々しない。

何故なら、王が倒されればそのまま負けとなるからだ。

そのルールがこのレーティング・ゲームにも採用されている。敢えてそこを突く。

それがリアスの狙いだった。

「アーシア、動きましよう。私と一緒にきてきて」
「分かりました！」

リアスとアーシアはその場から立ち上がり、ライザーの本陣である本校舎に向けて歩き出した。

「リアスは後女王クイーンに僧侶ビショップと戦車ルークにあのガキが残ってるのか」

本校舎の一室、ライザーはソファに座りながら情報伝達の為に帰ってきたユーベルナの報告を受けていた。

その傍には自分の眷属である女性二人がいて、ライザーは女性たちの肌に慣れた手つきで触れる。

「クッククック、このゲームで勝てばあの我儘姫に雷の巫女が俺の物になるのか。そういえば後二人、女がいたな。　　まだまだ楽しめそうなあ」

リアスや朱乃が自分の物になると考えると口元を緩めずにはいられず、そのまま声を漏らす。

この男、ライザー・フェニックスはこういう男だ。

美しい女性であれば誰であろうと欲しがり、そこにお互いの気持ちは存在しない。

自分に抱かれるのが女の幸せと考えると典型的なダメ男。

そしてリアスを抱く自分を想像して、余韻に浸っていると一筋の不安がライザーの気持ちを変えた。

「先ほど…一気に入ちが四人ほどやられたな。あれはあのガキか？」

その質問にユーベルナはすぐに返事はしなかったが、そのからだは明らかに動揺を示していた。

「はい。正直に言うとなんをされたのか分かりませんでした。あの坊やがいきなり物凄い魔力に似た物を発したかと思うと私以外の者は全てその場に倒れてしまっただけ」

「なに？」

ユーベルナの答えに眉をひそめるライザー。

一瞬、目の前の女王を疑いかけたが、体の震えを見ると疑いは感じなかった。

「あの坊やは…悪魔以上の何かなのかもしれません。私たちの知らない」

「い新しい何か」

「……」

普段のライザーならば大笑いをする場面であったが、巧の秘めたる力を目の当たりにしている為に否定の言葉が出せなかった。

「けれど、巧を倒さずともいいのだ……結局は。」

「報告」苦労だ、ユーベルナ。お前は外の掃除をするといい。

ミイ、ニイ、お前らもその掃除だ」

ライザーは眷属に指令を出し、そのまま部屋を出る。

向かっているのは新校舎の入り口で、口元が徐々に三日月形に近づいていく。

「ーさあ……俺が相手をしようリアス。」

これから戦うリアスに向けて、一言告げてそのまま足音は響いていった。

『イツセー、小猫、朱乃。私とアジアはこれからライザーに奇襲をかけるわ』

体育倉庫の中に逃げ込んだ三人は、リアスから通信を聞いて、各々別の表情を見せる。

巧はいつも通りの仏頂面、朱乃はリアスに対して反対の意見を告げて、小猫は指示ならと受け止めていた。

『相手は貴方たちを倒す為に全ての戦力を投入してくる筈よ。そこを狙って、私の奇襲。いくら不死といってもライザー自身は強い心を持ってはいない。だから……私がライザーの心をへし折ってやるわ』

通信機越しに聞こえるリアスの声。

固い意思があり、何者にも動かせない物に思えた。巧は何も言わずにそのまま倉庫から出た。

小猫もそれに続き、朱乃は我儘な弟や妹を持った姉のような目をし

て二人の後を追った。

「…敵の匂い」

体育倉庫を出て目の前にある運動場。

駒王学園の運動場にはトラックが書いてあり、上空から見れば右上に当たる場所から歩いている。

小猫は巧と朱乃よりも数歩早めに歩き、ゆつくりと二人を先導している。

巧は主に警戒してるのはユーベルーナの爆破だ。

魔力の為に実体がないから防ぎようがない…わけではないが、防ぐことは難しい。

突然、巧、小猫、朱乃の足が止まった。

三人の視点はただ一点に向かう。

その先には先ほどとは違い紫の髪を揺らしながら、巧たちを見下ろしていたユーベルーナがいた。

「あら、この状況でまだ続けるのかしら？」

煽りも気にせずに朱乃は背中から黒い悪魔の羽を生やし、ユーベルーナと同じ高さまで上昇する。

一瞬で上昇を終えて、相対する二人。

両者にらみ合いが続き、西部劇さながの場面だ。

「はあっ!!」

先手を打ったのは朱乃だった。

ピストルを抜くが如き速さで腕を前に突き出し、一瞬で魔力の雷を形成し、その細い雷は真っ直ぐに目の前の敵を貫く為だけに進む。

対しユーベルーナはその雷の接近を許さず、両手で魔力結界を張り片腕で三本の魔力結界を作り、合計六個の盾を作り出し、朱乃の雷を受け止める。

盾と雷がぶつかる寸前、ユーベルーナは笑みを浮かべた。

「さっきと同じ結果ね。貴方の背後に魔力の爆弾を作ってるわ」

そのまま両者の盾と矛はぶつかり合い、ガラスが割れる音を立て

て、そのまま勢いを失った雷は消え、ユーベルーナは魔力の爆弾を作ろうと杖を朱乃に向けようと腕を動かす前に痛みが彼女の体を襲った。

「なにっ!?!」

雷が自分の体を襲っていることに気づき、苦々しく顔を歪める。

先ほどまで左手を構えていた朱乃の手が逆になっていた。

「あらあら、私も馬鹿じゃありませんの。雷のコントロールくらいできますわ」

一回目の雷をフェイクとして扱い、本命は二回目の雷。

それを食らった後に気が付いたユーベルーナ。

「場所を変えましょう? それくらいの気遣いはあってもいいでしょう?」

朱乃の提案にユーベルーナはうなづき、懐に忍ばせた一本の瓶に手を添えた。

「――油断大敵ね、雷の巫女さん。敵がなにをもってるのかを考えないなんて。」

朱乃との勝負をすることよりも巧から距離を取れることを心のどこかで安堵している自分を感じていた自分を消して、朱乃を倒すことに集中する。

二人はそのままテニスコートまで移動を行った。

それから…二人の女王の魔力対決は火蓋を切って落とされた。

「塔城、下がってろ」

「嫌です。先輩の方こそ下がっててください」

巧と小猫の前には残ったライザーの眷属全てが集中していた。

特に不利と言えるのが、騎士が二人も生き残っているという事実。

「――二人も騎士がいるなんて…。」

祐斗先輩がいてくれたら…。」

あの時自分をかばって戦闘不能となった祐斗を思い、小猫は顔を少

し伏せる。

けれどそんなことをしている内に一歩一歩、確実に迫ってくるライザー眷属。

「あの双子の猫は任せた…」

巧は言葉短くそう告げると、ライザー眷属に突進するように突っ込んでいった。

その巧に合わせ、ジーンズの片足部分の布が何故もなく、顔を仮面で覆われている女性が前に出る。

それを見ても全く速度を落とさずに真っ直ぐに駆け抜け、自分の持つ全ての勢いを右腕に込め、前に突き出す。

勢いと重さを持った拳、それを受け、仮面の女性ーイザベラは両腕をクロスさせ、防御の体制をとる。

それから一瞬の間も待たずに巧の拳とイザベラの両腕はぶつかりあった。

快音を響かせ、両者はそのまま対峙する。

巧の拳を正面から受けたイザベラはその判断を正解であることにした。

今：自分の足が地面に亀裂を入れているのに気がつき、下手に避けたら巧の拳が体に入ることと考えてしまい、背中に悪寒が走る。

「カーラマイン、シーリス。その兵士を沈めなさい!!」

円形の包囲網においては少し外側に位置するポジションでライザーと同じ金髪をもつお嬢様然の少女は騎士二人に攻撃の指示を出す。

指示を受けた二人の騎士はその巧の真上に向かって跳躍。

腰に収めた剣を抜き、カーラマインは自らの剣に炎を灯し、チーリスは身の丈はあるであろう大剣を持ち、そのまま真下にいる巧に向けて刀身を振り下ろす。

真上から、熱と自分の髪が風に揺れているのに気づき、真上に視線を向け、自分に攻撃してくる二人の存在に気がついた巧は腰を落とし、体の重心を右にずらす。

巧と拳と腕のぶつかり合いをしていたイザベラはいきなり、力が抜

けた事でバランスを崩し、前のめりになる。

タイミングを見計らって、そのまま足を真横に向けて蹴りたて、真上からの剣戟を躲す。

けれど人息つく間もなく、巧の視界には自分に向けて放たれた魔力弾が写り込む。

それは速さこそあるが目測のみで拳で弾ける事を判断し、裏拳の要領でその魔力弾を弾きかえす。

「きゃっー」

弾いた魔力弾の弾道上にいた先ほどの指示を出していた金髪の少女は慣れない様子で自分に向かってきた魔力弾を躲す。

その際に悪魔の翼とは違った、炎で形作られた翼が巧の目を奪う。

一目見て巧には理解できた。

目の前の少女は明らかに戦闘慣れしてない。

自分よりも幼い少女を殴るのは気が引けたが今はそんな悠長な事を言ってる場合ではない。

最悪、殴られる前に彼女が自分からリタイアする事を願いつつ、その場から前に駆け出し、一瞬で、彼女は巧の間合いに入る。

あとはここで拳を振るうだけだが…。

「きゃっー」

明らかにおびえた様子をした少女に巧の動きは止まる。

両手で体を覆い、目からは少しだけ涙を流す。

「ーなんだよこいつ…。」

とてもでないが殴る気のなくなった巧は拳を収め、背を向けながら金髪の少女に向けて一言。

「やる気がないなら帰れ」

これをそのまま受け取ると嫌な意味になるが、この状況では金髪少女もその真意を受け取り、巧から距離を取る。

するとイザベラは一步前に出て、巧に視線を向ける。

「すまないな。 彼女…いや、彼の方はレイヴェル・フェニックス。

ライザー様の妹君であらせられるお方だ」

「…別に話してほしいなんて言ってるねえぞ」

ライザーの妹であることを聞いて、一瞬の戸惑いはあったが事実を聞いて、その場で納得する限りであった。

あそこまで戦闘慣れしてないこと。

自分が拳を向けたら涙目になったこと。

けれどそんな説明は求めていない巧はイザベラに少しだけ悪態をついた。

「いや、貴様は今我々の敵だ。それにも関わらず、彼女に対して拳を収めてくれたことに一言礼を言いたくてねっ!!」

語尾が強くなり、巧とイザベラの距離は一瞬で変わる。

足を振り上げ、そのまま巧の顎を狙い、振り抜く。

空気を裂き、まっすぐと狙い澄ました一撃は巧の腕の中で勢いを殺される。

「…行くぞ」

掴んだ足を離し、足を一步前に踏み込んで体をイザベラの正面に持っていく。

そこから巧の中での正拳突きがイザベラの腹部にまっすぐと突き刺さる。

その衝撃は皮膚だけでなく、体の内側にまで響き、五臓六腑に染み渡る。

「うっ…ぐうあ…っ!!」

体から吐瀉物を吐き出しそうになるのを我慢にして、その場で膝をつく。

その瞬間、巧は勝負に終わりを決めた。

「トドメ…を刺さないのか？」

「もう一発食らいたいならな」

巧は振り向かず、イザベラから距離を取る。

イザベラにはそれが次の敵が自分と戦う際にこの場に倒れている自分自身が邪魔になることを防ぐためであろうと考察を立てる。

それに気づいた瞬間、イザベラは意識を失った。

『ライザー様の戦車一名、戦闘不能』

ここで巧は周りを見わたし、状況を確認。

小猫が相手をしている双子の猫擬き姉妹に加え、チーリスが二人に加勢しようとしているのを発見した。

けれど巧はそれに加勢することはなかった。

すでに彼女の近くに自分の相棒が向かっていったからだ。

『Battle Mode』

いつも通りの電子音声の流れ、オートバジンの体をバイクから戦闘用マシンに変身させる。

この一連の流れを見ていた、ライザー眷属は全員残らずその変形に釘付けになっていた。

「…ありがとう、バジンくん」

自分が不利になったのを感じて、体育倉庫から加勢に来てくれたバジンに向け、感謝の言葉を告げる。

言葉なきバジンは返答こそしないが、指を立ててサムズアップを小猫に向ける。

あの三人の相手を小猫とバジンに任せ、残りの相手を全て巧が引き受ける事となったが…。

「くっ…」

「はあああ!!」

先ほどの魔力弾を放った僧侶の少女とカーラマインの二人は別々の反応を示していた。

カーラマインは声をあげ、気合いとともに巧を標的と捉えら剣を構え、巧に向かって行く。

巧もそれに対応すべく、体を構えるが…。

ドオオオオオンツ!!!

その場にいた全員の耳が捉えた爆発音。

音源は…：新校舎の屋上。

そこからは二酸化炭素を含んだ黒い煙が立ち込め、爆発によるものでは、と考えるものもいたであろう状況。

けれどこの状況を作り出したのは二人の男女。

「ふう…もつと楽しませてもらえろと思っただがな」

スーツを着崩し、何事もなかったかのように煙から出てきたのはラ

イザー・フェニックス。

そこからは余裕も持っているのがよく分かる。

「黙りなさいっ!!」

対してはリアス・グレモリー。

ライザー同様に怪我はないが、ライザーの言葉一つ一つに対して、怒りを募らせたいる。

この屋上にいるのは、リアスの背後にいるアシアを入れ三人だった。

正直に言えば巧がライザーを倒すはずだった。

けれど相手も巧の真価に気づき、巧よりも勝つ可能性のあるリアスを攻め始めた…。

そうリアスは解釈していた。

ーわたしじゃライザーには勝てない…けど、巧さんならっ!!

ライザーに怒りを燃やしているのは事実だが、ここで怒りに身を任せ、敗北を選ぶよりも、ライザーに時間を取らせ、残った戦力を全て潰した後に巧がファイズに変身してからライザーを叩く。

リアスの中でライザーを倒すための道筋が生まれる。

手のひらで魔力を広げ、いつでも自分の魔力で繋がる場所にファイズギアを置いてある。

その事を知ってるのはリアスと巧だけ。

『巧さん、私は時間稼ぎしかできないわ。』

その後もアシアの力は怪我を治せるけど、魔力と体力の回復はできない。つまり…私は戦えない。だけどお願い、勝って』

リアスの願い、それは彼女自身の持つ夢の為。

ここでそれを断る事はできない。

口にはしなかったが、巧はそのままリアスからの通信を一旦切り、目の前の相手に集中する。

一太刀目を見て、躲して、間合いに入ろうとするも体の通り道を消すようにしてカーライマインの刺突が繰り返される。

足を軸にして、体を独楽のようにして回転させ、刺突を受け流す。受け流す際に巧とカーライマインの体は交差し、巧は回転の勢いをつ

けた拳を鎧越しに叩きつける!!

「ぐはああ!!」

腹部への拳により、口を広げ酸素を外に漏らすほどでありそのまま後ろに後退せざるをえないものだった。

一瞬、意識が飛びかけた事を鑑みて、もう一撃食らえば確実に―――負ける

その決定的事実をカーラメインが悟るのに一秒足らず。

されど、逃げるなどの選択肢はない。

目の前の敵に背を向けるなどカーラメインの一人の戦士としてプライドが許さない、そして目の前で戦う男への侮辱になる。

改めて自分の対峙している男の圧力に押し負けそうになるが、体全てに力を込め、一つ間を置く。

一瞬の静寂を切り裂いて、カーラメインは前に足を踏み出す。

その一步の勢いが彼女に味方し、今までで一番の初速となった事を彼女自身も自覚した。

剣を振り上げ…上段からの斬り落とし。

カーラメインが目を凝らすと先ほどまで巧のいた場所にその姿はない。

一瞬の戸惑いが生じ、一筋の乱れが生まれる。

その後、カーラメインの腹部に二度目の衝撃が走り、その意味に気づく。

――私の負け…だな。

巧の拳は一撃目よりも勢いがなかった事から、すでに自分が限界に近い事に気づいていた。

その上での威力であった。

地面に倒れながら、自分を倒した男の姿を捉える。

見た目からしてまだ16歳程度である事は伺えるが、自分たちを圧倒するあの動きを見せるには戦場にいたはず。

それも常に生死を賭けた本当の戦場に。

カーラメインは最後まで巧の真相に行き着く事はなかったが、心中で巧がライザーに勝ってもおかしくない。

そんな風に考えながら、淡い光に包まれていった。

「なるほど……やはりただのガキじゃないな、貴様」

新校舎の屋上から、自分の眷属を圧倒する巧の姿に思わず声を漏らす。

ライザーは朱乃やリアスよりもマークしていた巧が自分の想像以上であった事に驚いていた。

「ライザー、余所見をするなんて私の事を舐めてるのかしら？」

リアスも巧と小猫、そして突如現るバジンの奮闘に感謝しつつ、ライザーに目を向ける。

「いいや、君の事を侮っていたつもりはない。でも、あのガキが思った以上だからなあ」

「当たり前じゃない、イツセーは、いえあの子たちは私の大切な下僕よ、貴方のハーレムなんかには負けるわけないわ」

リアスの言葉には小猫をかばって戦闘不能となった祐斗への思いも込められていた。

ここに祐斗はいないけれど彼もまた大切な下僕であり、家族でもあるのだから。

「言うじゃないか、リアス。確かに、あの雷の巫女といいその僧侶、戦車たちや君が俺のハーレムに加わるのは確かに楽しみだ……がっ！」

リアスと向き合っていたライザーは、突如運動場に向けて半径だけで十五メートルはあろう火球を飛ばした。

「イツセー、小猫逃げてっー!!!」

「バジンくーんっ!!!」

突然の奇襲。

ライザーが攻撃を仕掛ける様子を見ていたリアスとアーシアは無意識的に叫んだ。

今からあの火球を止める事は出来ないが、この危機を知らせる事くらいは出来る。

その思いと共に声を張り上げ、危機を伝える思いは飛んで行った。

火球が勢いよく地面に着くと、その場で大爆発を引き起こした。

その爆発はテニスコート付近で対決している朱乃とユーベルーナにまで被害をもたらした。

朱乃は突然の炎の来襲に気を取られ、ユーベルーナの爆発がその身に直撃する。

爆発により生じた風で体は浮き上がり、そのまま火の海に飲まれてしまう。

朱乃同様に炎の海に巻き込まれたユーベルーナは傷を負ったが懐から取り出した瓶の栓を開け、その自身の液体を頭から被った。

すると朱乃との戦闘の際の傷、ライザーの作り出した炎の海での傷は何事もなかったかのように塞がり、まさに完全回復をしていた。

「…あつあ…どうして、こんな…」

アーシアは目の前の光景に怯えたような声しか出せなかった。

「…どうして、自分の眷属の皆さんを傷つけるのでしょうか？」

生まれた疑問はそれだけだった。

火の海に飲まれるライザーの眷属を見て、思わず自分の神器を使い、治療を施そうと考えてしまうほどだった。

アーシアの目に移るのは苦しそうにしているライザーたちの眷属の顔だった。

自分に流れる血が冷たくなるのを感じ、ショックによって気を失ってしまう。

リアスは慌てて倒れるアーシアの体を支える。

一瞬、聖母のような優しい目をしたリアスは気を失ってしまったアーシアを労わるように金の髪を撫でる。

アーシアの体を寝かせたまま、一秒前までとは全く逆の憤怒の表情を見せ、ライザーにぶつける。

「…こんなやり方で勝って嬉しい？ 今すぐ炎を消しなさいっ!!」

「…まあ、取り敢えずはあのガキも消せた事だろうしな」

ライザーは魔力で作った火の海から魔力を抜くと、一瞬で鎮火し、運動場一面は黒焦げになっていた。

けれどその中で一つだけ疑問だったのが、そこにいたはずのライザー眷属や巧たちの姿が何一つ見当たらないことだった。

「…お前、兄貴なら妹をビビらせんなよ」

新校舎の屋上に響いた気だるそうで、不機嫌そうな声。

『ライザー様の兵士二名、僧侶一名、騎士二名、リアス様の女王一名戦闘不能』

グレイフィアの声と共に巧が抱えていた二人、小猫が抱えていた二人、バジンが抱えていた二人、計六名の体が淡い光と共に医療用の空間に転移された。

「きつ…貴様っ!!」

ライザーは思わず顔を歪める。

その視線の先にいたのは、先ほどの炎の海によってライザーが自分の眷属ごと消したはずの巧がいて、その隣にはしっかりと小猫とバジンが傷のない状態でリアスの共に集まっていたからだだった。

「イツセー！ 小猫、良かったわ…二人が無事で…」

リアスは巧と小猫が無事であった事を心から喜び二人の体を抱きしめようと二人の体に手を回そうとするも…。

「…やめろよ、たくっ」

人付き合いもできない巧にしてみれば肉体接触などさらに出来ないことであるため、物理的にリアスから距離を置く。

「お兄さまっ！ 一体を何を考えますの!?!」

次にライザーの目に飛び込んだのは自分の妹でもあるレイヴェルの姿。

先ほどのライザーが行った自分の眷属を含めた攻撃に対して怒りを燃やしている。

今までも似たような手を使ってきたが、今回は度が過ぎている。

最悪の場合、死者さえも出たほどであった。巧と小猫とバジンが手を貸してくれなければ。

同じフェニックスであるレイヴェルにとってはあまり危険ではなかったが、自分以外のものにとってはライザーの作った火の海はまさに地獄といっても過言ではない。

相手チームへの攻撃ならまだしもこんなにも味方が多い状態であるな攻撃をすれば死者が出てきても不思議ではない。

火の海の中で焦るレイヴェルを現実に引き戻したのは、突然隣に現れた小猫だった。

『校舎に逃げるから…来るなら付いてきて』

火の海の中で巧は数名のライザー眷属を助け出し、火の及ばない新校舎に逃げ込んだ。

小猫やバジンらの手助けによりテニスコート付近で倒れていた朱乃を助け出すことに成功した。

思った以上のけが人は居なかったので安心をしたレイヴェル。けれど今の彼女は怒りをライザーにぶつけるのみとなっていた。

「…おい、焼き鳥。行くぞ」

レイヴェルに対して、何を言うべきか戸惑っているライザーは巧の忠告など目に入っていなかった。

その時には既に巧の腰にはファイズドライバーが装着しており、ファイズフォンを握りしめている事を知らずにいた。

『Stu ndy ing By』

「変身っ!!!」

『Com plete』

ファイズフォンを高く掲げ、ファイズドライバーに換装、ベルトの縁からフォトンストリームが放出、巧の体を赤い閃光が覆う。

巧の体全てを覆うと一際眩しい光が放たれ、正面に立っていたライザーとレイヴェルはその激しい光に耐えられず目を瞑る。

目を開けたライザーの目に映るのは、一人の戦士。

金属のベルトを腰に巻きつけ、先ほどの赤い光が通っているであろうライオン。

顔の部分は仮面で覆われ、表情は読み取れない。けれどその立ち振る舞いでわかる実力。

ここに来てライザーは自分の足が震えている事に気がついた。けれど、それを無理やり打ち消し、自らを叱咤する。

「ふざけるなっ！　なぜ俺が…不死であるこの俺があんなガキ一人に怯えているんだっ！」

ライザーの心中を気にすることなく、ファイズの拳は今まで倒れていった祐斗や朱乃、そして突然の主からの奇襲によって戦闘不能となった、ライザー眷属の想いが込められているかと感じるほどに重く、そして深くライザーの腹部に突き刺さった。

「ぐほお…ハア…ハア…舐めるなああ!!」

ファイズの拳により肺からの酸素の供給は一瞬止まり、巧に対する恐怖感が体を支配する。

けれど、ライザーの中にある自尊心と誇りがそれに勝り、体を動かす原動力となる。

立ち上がり、声を荒げ、自分の背中から炎の羽を生やし、低空飛行の姿勢をとり、地面を強く蹴る。

ライザーの突進に対応すべく、腰を屈める前傾姿勢をとる。後ろにいるリアスたちに攻撃がいかないようにする為だ。

今のリアスは魔力を使い果たし、息も切れている。その上、体力を回復させてくれるアーシアは先ほどの光景に心が耐えられずに気を失っている。

ここで巧がライザーを圧倒してもリアスが倒れてしまえば意味はない。

空気を裂き、ライザーとの距離が残り四メートルに迫ったと同時にファイズはクラウチングスタートのような姿勢から走り出した。

「らああああ!!」

「死ねえええ!!」

炎の羽をロケット噴射のようにして、加速し、勢いは最高潮に達し

たライザー。

走り出した勢いしかない、ファイズ。

これだけならば、ライザーが力で勝る。

が、交差する二人の影の片方がその場から吹き飛び、黒焦げとなった運動場に叩きつけられた。

「おのれえ……貴様ああ!!」

地面に伏しているのは、ライザー。

巧はライザーと交差する寸前で動きを止め、ライザーを待つ姿勢をとった。

そのまま加速し続け、巧みに向けて炎を纏った拳を撃ち込もうと前に突き出したライザーを待っていたのは巧が腹部に向けて前に出した、右足だった。

慣性の法則に従って、ライザーは加速して続けた分、自らの腹部に入った蹴りの威力に押し負け、新校舎の屋上から投げ出され、地面に伏したのだ。

地面に降りた、ライザーを視界に捉えつつ、ファイズフォンについてあるファイズの顔を催したメモリーに手を掛け、抜き取る。

『Ready』

抜き取ったミッション・メモリーを握りしめ、オートバジンに近づき、左ハンドルにある窪みに差し込む。

ファイズショットやファイズポインター同様の電子音声が流れる。

手首を返し、ハンドルを抜き取る。

ファイズの手には赤い光を纏う剣が収められていた。

「剣になった……すごいわね、バジンって」

「なんでもあり……」

「冥界でも見たことありませんわ……」

リアス、小猫、レイヴェルは三者とも同じような反応を見せる。

巧はその反応に伝えることなく、新校舎の屋上から飛び降りる。

「……貴様ツツ!!」

自分を待つような態勢をとる、ファイズに向け、ライザーはその場

から走り出す。

ファイズは左手首をスナツブさせ、それを迎え撃つ。

ここでライザーは手のひらで炎を形成する。

それを長く伸ばし、一本の剣の形にした。

魔力の才能を持つライザーならば造作もない事である。

「ふんっ!!」

身の丈はあろうかという巨大な大剣を炎で作りだし、その刀身を巧みに向けて、振るい落とす!!

ライザーからすればファイズの持つ、剣は細いため、この巨大な大剣をもってすれば簡単に折れる、と予想を立てていた。

が、現実は違った。

「……はあー」

ファイズエツジを横に倒して、大剣を受け止めた、ファイズはそのまま刀身を滑らせるようにして、攻撃を受け流す。

巨大な刀身が地面に落ち、ライザーの体はバランスを崩した。

その隙を見逃さず、足を前に踏み込んだ、ファイズは左手を後ろに回し、勢いをつけてから、斜め上からライザーの体を斬り裂いた。

ついで、二撃目はそこから、腹部を突き刺す刺突。

ファイズエツジはライザーの体を貫き、体を崩壊させる。

φの赤い文字が浮かび、その場で倒れる体。

勝負がついた。そう思ったファイズは脱力の姿勢を見せる。

ファイズの勝利を感じたりアスや小猫だったが、違和感を感じる。

ライザーであった肉塊が集まり出し、それらを徐々に形を成している。

十秒ほどして、バラバラだった物はライザーに再生した。

「はあ…ハア…貴様、何をしたっ!?!」

額や僅かに見える肌からは玉のような汗を帯びていた。

「…何なんだ今のは!?! 何故、あんなにも再生に魔力がかかる!?!」

ライザーいや、フェニックスとはどんな攻撃を受けても受けてすぐに回復する仕組みとなっている。

けれど、巧…ファイズの攻撃はそうではなかった。

回復に大量の魔力と十秒もの時間を要した。

この時、ライザーはファイズが持つフォトンブラッドの恐ろしさを体で感じていた。

一方の巧も、この目で見るまでは不死なんてものを信じてはいなかった。過去にも、複数の命を持ったオルフェノクはいた。けれども、数に限りがあった。けれど、今日の前にいるのは、文字通りの死なない存在。

儂くも短い生を全うした巧と、永遠とも言える時間を不死として生きるライザー。

相反する存在は、ぶつかり合うしかないのかもしれない。

「ぬおおらああ!!」

再び、炎の大剣を形成し、横薙ぎでの一撃。

背後からの攻撃ではあったものの、ライザーの復活を見ていたファイズはステップを踏みながら、後ろに下がり、ライザーとの距離を取っていた。

大剣を肩で担ぐような構えを取り、右手を前に突き出す。

手のひらから四角形の頂点のようにして四つの火の玉が形成され、それらを弾丸のように打ち出した。

ファイズはそれを仮面越しに見て、避ける事を考えずに、そのまま前に駆け出す。

火の玉は鉛玉程度の大きさを持ち、速さは弾丸よりも遅い速さだった。

一発目の火の玉は巧の真正面から向かってくる。

「らあ!!」

気合いと共にファイズエッジを横に薙ぎ、火の玉は真つ二つに割れる。

続いて、二発目、三発目の火の玉は同じ弾道上に乗ってファイズに向かっていく。

右にファイズエッジを薙ぎ、切り返すように左に薙ぐ。

が、二発目は弾いたが三発目の存在に気づいたのは火の玉がフルメ

タルラングと接触し、小さな爆発を起こした時だった。

「うう…」

思いがけぬ二段撃ちに声を漏らす。

ライザーはこれを好機にファイズに近づいてくる。

その顔から油断があることに気づき、ドライバーに横向きで換装されているファイズフォンを開き、Enterキーを押す。

『Exceed Charge』

フォトンブラットがラインを通じて、ファイズエッジに伝わる。

仮面の下の表情は見えない為、ファイズの行動に気づかないライザーは余裕を持って距離を詰める。

「らあ!!」

立ち上がったファイズはファイズエッジを下から搦り上げるように、振り抜く。

刀身からは先ほどの伝わった大量のフォトンブラットが弾け飛び、波となってライザーに向かっていく。

「しまった!!」

炎の翼を広げ、その場から飛び立とうとするライザーの体を確実に固定して動くことを許さないフォトンブラット。

これを勝機と見て、ファイズエッジを片手で持ったまま、ライザーまでの距離を詰める。

ファイズエッジの間合いがライザーに届いた瞬間のことだった。

突如、ライザーの体が爆発した。

上半身が爆発したことにより、フォトンブラットの拘束を解かれ、下半身は地面に倒れる。

この光景にファイズのみならず、リアスや小猫やレイヴェルも呆然としていた。

が、リアスがここでこの場にはいないが、まだゲームで戦闘不能になっっていない者の名を口にする。

「ユーベルーナよ！ 気をつけて、さっきの爆発はあなたの攻撃からライザーを助ける為の物なの！ 何故ならー」

「俺は不死、フェニックスだからな」

上半身の再生を終えた、ライザーがリアスの言葉を繋げた。
ファイズは振り向きやいなや、至近距離でライザーの攻撃を受け、後ろに後退する。

ファイズの位置は先ほどまではリアスたちに背を向けていた状態であったが、ライザーの攻撃により、位置が逆転してしまった。

この状況を待っていた、そう言わんばかりにライザーはほくそ笑む。

「お前は強い。その奇妙な道具もそうだがな。貴様の自力は下級悪魔のレベルを大きく超える。正直に言おう、未恐ろしい男だ。

それでも勝つのは俺だ。お前は俺を倒せば勝つが俺は違う。

俺はお前を倒さなくてもいい。俺は…リアスを倒せば勝つんだからな」

ファイズはその言葉の真意を読み取ることは出来なかったが、無意識のうちにその場から走り出した。

ライザーはリアスたちに体を向けて、左手を新校舎に翳す。

一瞬にして、先ほどの火の海を作り出した物よりは幾分か小さいがそれなりの大きさを持った火球を作り出した。

「バジンくんっ！」

「バジンっ！」

リアスと小猫の声が聞こえる。

ユーベルーナはリアスに向けて、爆発を引き起こそうとしたがバジンがそれを身を呈して庇い、運動場に落下した。

思わず言葉を失いかけたファイズだったが、ライザーを止めるべく、背後からの攻撃を仕掛けようとするが…。

「うわぁ!!」

小さな爆発がファイズを襲った。

けれどそれはファイズを戦闘不能にするには弱かったが、意識を逸らすことは出来た。

「ライザー様の勝ちね…坊や」

空に浮かぶ、ユーベルーナは先ほどの自分の傷を癒した液体、フェ

ニックスの涙の入った小瓶にそつと口付けをする。

「リアスっつ!!!」

ファイズの攻撃は間に合わず、ライザーの手のひらから火球は離れていった。

「部長…!!」

レイヴェルは自分の近くで主人の名を呼びながら、自らの体を盾にして炎から守ろうとする小猫の姿が自分の視界を捉えているのが分かった。

自分たちに迫る火球。

それは先ほど、火の海を作った火球よりは大きさでは小さいがその質はとても高い。

先ほどの火の海に恐怖は抱かなかつた。

自分を助けてくれた存在がいたからだ。

けれどこの場にはいない。

背中に炎の羽を生やそうにも魔力を練られずいて、逃げられない。

この時、自分がどうなるのかを無意識のうちに悟っていた。

「小猫…レイヴェル」

諦め掛けていたその時、レイヴェルの目は美しい紅の髪を捉えていた。

自分と小猫の体を強く抱きしめ、優しく名前を呟き、その手で自分の髪を撫でた存在がいた。

この時、レイヴェルは自分と小猫を抱きしめた存在がリアスであることに気づいた。

三人はそのまま巨大な炎に包まれる。

けれど、リアスが残り僅かな魔力を二人の身を守る為の結界を作る為に使い果たし、リアスのみがライザーの炎を受けた。

『リアス・グレモリー様、戦闘不能。このゲーム、ライザー・フェニックス様の勝利となります』

聞きたくないアナウンスがファイズの耳に届いた。

そのままリアスの元に駆けつけ、変身を解除する。

「ねえ…巧さん。 ごめんなさい、負けてしまったわね…」

「…おい、ふざけんなよ。目を覚ませよ、リアスツ!!」

リアスは満面の笑みを浮かべ、その目からは自分の『夢』が叶わないものになってしまった、事実には耐えられずに頬を伝う涙が流れていた。

それは頬から巧の手に伝わる。

リアスの体は徐々に淡い光となり、そのまま医療の空間に転移された……。

レーティング・ゲームが終わり、治療の必要のある祐斗と朱乃とリアス。気を失ってしまったアーシアは念の為に治療空間に残ったまま。

オートバジンはそのままオカルト研究部に転移された。

「先輩…部長」

小猫はその場でこの部屋にいない者たちを呼ぶ。

返事のない呼びかけに虚しさが募る。

巧はその場でソファアーに座り込んだ。

脱力しきった様子で、天井を見上げていた。

「…俺に何が出来んだよ…。俺はアイツに何をしてやりたいんだよ。」

最初は自分の世話をしてくれるリアスに借りを返す意味で眷属として側にいた。

けれど、かつての真里と同じように夢を持つ一人の少女であることを知ったその時から巧には“借り”などという言葉では片付けられない感情が生まれていた。

自分に何が出来るのか、その答えは簡単には出てこない。

「…夢を応援してやる事…いや、違う。」

夢を持つていない俺にできるのは……。

巧の脳裏に出来事が浮かび上がる。

夢のない自分何が出来たのか、それを思い悩んだ末に出した答えは「夢を守る事…だよな。真里、啓太郎」

巧はその答えを導き出させてくれた仲間の名を口にする。

その目はかつて自分の出した答え時と全く同じ色をしていた。

夢の守り人

レーティングゲーム終了から三日が経った。

幸い休日による三連休だった為、巧と小猫はゆっくりと休みを取る…ことはなかった。

兵藤夫妻にはアーシアが友達の家にお泊りに行つてると巧の口から伝えられ、夫妻もそれを信じている。

実際は二人を除いたグレモリー眷属は冥界にて療養中。リアスはライザーとの今夜行われる婚約パーティーの為に冥界にて待機。

「何処に行くんですか…先輩」

その日の夜、巧はオートバジンの手入れをオカルト研究部室内で行っていた。

そんな巧に背後から声をかける小猫。

「リアスを助けに行く」

「無茶です…私も行きます」

巧の意見を軽く否定して、自分の同行を提案する。

リアスの救出に行くのは巧だけではなく、自分の役目でもある。小猫はそう考えていた。

あのゲームで祐斗が残っていれば状況は変わっていたかもしれない。最後にライザーの攻撃からリアスが自分たちの盾になろうとしなかったかもしれない。

いくつもの可能性が小猫の頭の中を巡り、思考をかき乱す。

「危険すぎる、お前はここに残れ」

「嫌です。それに先輩…冥界への行き方分かっているんですか…？」

小猫の疑問に巧は苦虫を噛んだ顔をすする。

そこが巧の一番の難点だった。魔力による移動としか考えていなかった為、答えに戸惑う。

しかし、それは小猫も同じだ。

行き方などは知っていても、それを行うだけの魔法陣がない。

二人ともそこから先の言葉が出なかった。

このままでは間に合わない、そんな焦りと不安が巧と小猫に生まれつつあった。

そんな時、オカルト研究部室の扉をノックする音が聞こえる。

突然の来客だったが、心当たりがない。

リアスや祐斗たちは冥界で待機しており、ライザーがわざわざ来るとも思えない。

「失礼します」

突然の来客がドア越しに入室の許可を問う。

思考を巡らせていた巧と小猫は返事をしなかった。けれど来客が沈黙を肯定として、扉を開く。

そこから現れた来客に巧は何処か見覚えを感じた。

「副会長……神羅椿姫先輩」

小猫が来客の名をつぶやき、椿姫は巧と小猫の前まで歩み寄る。

二歩手前程の距離で立ち止まり、制服の内ポケットから何やら小さな紙を取り出し、巧と小猫に差し出す。

「これは婚約パーティー会場とここを繋ぐ魔法陣です。会長は会場に向かっている為、私が代理でこれを」

淡々とした説明口調だったが、今はこれが会場に乗り込む為の最後の希望だ。

「会長と……この紙を託したあるお方からの伝言です。『私の親友を頼みます』と『妹を連れ戻したくば会場まで乗り込んできなさい』だそうです。 それでは」

椿姫はそれだけを言って、最後に小さくご健闘を、と応援とも取れる声を掛け、部室を後にした。

巧は手のひらにある魔法陣の描かれた紙を見つめる。

「……行くぞ」

巧は紙を懐に入れ、オートバジンに跨る。

小猫も何も言わず、後を追う巧の後ろに乗り、腰に手を回す。

二人と一台のバイクは紙にかかれた魔法陣が放つ大きな光に包まれ…冥界へ移動した。

『なら夢を持つ先輩として…一言。夢を持つと時々凄く切なるけど、時々すごく熱くなるの。知ってた？』

『ああ…とても知ってるよ』

ー巧さん、貴方は私にとって…とてもとても大切な

「大切な人…」

白いウエディングドレスに身を包んだリアスがただ一言そう呟いた。

リアスは今、ライザーとの婚約パーティーの出番を待っているところだった。

自分の負けは自分の負け。

その勝敗で自分の夢が潰えることも覚悟の上だった。けれど、感情は納得していない。

理性では分かっているつもりだった、それなのに…。

「どうしてこんなに苦しいのかしら。夢って…呪いなのかもしれないわね」

かつての巧の仲間、海堂直也もリアスと同じことを口にした。

『夢は呪いと同じ…途中で挫折したものは呪われたまんまだ』

この言葉は彼の仲間、木場勇次の中に残り続けていた。

リアスもまた夢を諦め、その呪いに苛まれそうになりかけている。俯き続けるリアス。

突如、リアスのいる待合室の床に巨大な炎が発生する。

巨大な炎は部屋全体を覆うことはなかったが、数秒間燃え盛り、一人の男をこの部屋に運んだ仕事を終え、すぐに鎮火していく。

「よく似合ってるじゃないか…リアス」

「何のつもり？ ライザー」

「お待ちください、ライザー様！ この部屋は男子禁制です」

現れたライザーはリアスの不快感を煽る様な笑みを浮かべ、あの女に歩み寄る。

その際に、メイドの一人がライザーの歩みを止めようとする。

「堅いこと言うなよ、俺は今日の主役じゃ、ないな。今日の主役は花嫁だったな、ハツハツハツ!!」

自分の言葉を途中で区切り、花嫁という単語を強調してその場で笑い出す。

リアスは目の前の男を張つ倒したい気持ちを抑え、ライザーを止めようとしてくれたメイドたちに視線を向け、辞めるように促す。

「まだ花嫁のつもりはないわ、それに…なんなのこのドレス。まるでー」

「ウェディングドレスだろお？ いいじゃないか、もう結婚は決まっているんだから。まさか、今更結婚が無くなるなんて甘い考えが君の中にあるわけでもないだろう？ それとも…あのガキがなんとかしてくれるとでも？」

リアスの言葉を潰しにかかるライザー。

今のままのリアスが自分と結婚したところで、自分の物になるとは思えない。

それは…巧の存在が心の中にあるからだ。

まだ希望が残っている為、自分に振り向かない。

しかし、その希望をへし折ってやる、そう言わんばかりに巧を嘲笑うような言葉をぶつける。

「…まあ、君も早く諦めて、俺の花嫁になる覚悟を決めるんだ。毎

晩、楽しみしているからな」

最後に今までで一番不快になるような笑みを見せ、ライザーは部屋を出た。

思わずその場で膝をつきたくなる気持ちをごらえ、両足で地に立つ。

涙を見せることなく、リアスは自分を呼ぶ声をドア越しから聞い

て、そのまま歩き出した。

「先日のゲーム、申し訳ありません…」

レイヴェル・フェニックスはグレモリー眷属の皆に深々と頭を下げる。

普段のお嬢様らしい風貌からはイメージのつかないほどにしっかりとした謝罪を行う。

「いえ、気にする必要はありませんわ」

朱乃はこの場にグレモリー眷属を代表して、返答する。

気に止む必要はない…その言葉はグレモリー眷属の総意だったが、それがレイヴェルの罪悪感を駆り立てる。

ここで罵られた方がどれだけ良かったか、断罪される方がどれだけ良かったか。

こうやって、自分に優しい言葉をかけられるのが一番辛い。

その気持ちに気付いていた朱乃だったが、彼女を責めても何の解決にもならない、そのことをわかっている上で先ほどの言葉をかけた。

「僕たちもゲームの様子は見てたけど、貴方が謝る必要はありませんよ」

祐斗は治療空間からゲームの様子を観戦していた。

画面越しに戦う自分の仲間と何もできない自分。

ただ、唇を噛み締められているだけの自分に怒りが湧いていた。

けれど、自分にできるのは見届けること。

そう信じ、祐斗はゲームの行方を見届けた。

その祐斗の脳裏に浮かぶのは、ファイズとして戦う巧の姿だった。

あのライザー・フェニックスにあんなやり方をさせたという事はつまり、巧がそこまでライザー・フェニックスを追い詰めた事になる。

それが誇らしく思い、それと同時に何もできない自分との差を痛感する限りであった。

「イツセイさんや小猫ちゃん…大丈夫でしょうか」

アーシアはぼつりと眩き、この場にはいない巧と小猫の身を案じた。

どんよりとした雰囲気になる四人であったが、その後ろから声をかける女性がいた。

「ですが…実力は拮抗、いえそれ以上の物であったと感じています…私だけでなく、多くの者が」

現れたのはリアスの友人、そして巧と小猫にこの場に通じる魔法陣を椿姫に託した一人、ソーナ・シトリー。

「それにまだ諦めるのは早いのでは？」

「えっ？」

ソーナの何かを投げかけるような言葉に祐斗は漏れた声で反応する。

一瞬の間が生まれるが、三人は同じような顔を浮かべる。

「そうですね…まだ、終わってませんね」

「ええ、彼ならきつと…」

「部長さんを助けてくれます…私の時みたいに」

三人の脳裏に浮かんだ、不器用で猫舌でワガママな青年が誰かを見捨てるような男ではない事を知ってる。三人は巧がこの場に来るのを待ち望んでいる顔を見せる。

「冥界に名だたる貴族の皆様、御集まりいただき、光栄に思います」

会場の中心に、炎と共に現れたライザーは白い礼服にも似た物を着用していた。

会場の視線が一気に集まり、心なしが心の高ぶりを見せる。

「今日、皆様にお集まりいただいたのは、私と名家グレモリー家の次期当主、リアス・グレモリーとの婚約という歴史的瞬間に立ち会っていただきたく思いました。それでは…登場していただきましょう、我が妃…リアス・グレモリー!!!」

ライザーがその名を呼ぶと、白いウェディングドレスに身を包んだリアスが魔法陣と共に転移される。

リアスの姿を見て、多くの男性は唾を飲み込む…。

しかし、パーティ会場には似合わないようなバイクのエンジン音が聞こえていた。

それは徐々に強くなり…婚約パーティー会場の出入り口を何か突き破る。

現れたのは銀色のバイクオートバイに跨る巧とその背に手を回す小猫であった。

「き、貴様…なぜここにいる!!」

ライザーは巧がこの場にいる事に対し、狼狽し、自信に満ち溢れていた声は擦れている。

ライザーの声を聞いても、巧も小猫とその声を無視して、突然の来客に呆然としているギャラリーではなくリアスに近づく。

「な、何をしている衛兵! こいつらをつまみ出せ!」

鎧を着て、簡易的な槍を構えた兵士達が巧と小猫に近寄ろうとするが…。

『Battle Mode』

主人である巧に近づく衛兵をバトルモードに変形したオートバインがファイズ以上の馬力を駆使して押しつける。

それを見て、新たな衛兵達が巧と小猫を止めようとするが…。

「待ちたまえ、ライザー君。 彼らは侵入者ではない、リアスの眷属だ。 ここにいるのは当然の義務のはずだ」

「でっ…ですが」

他の悪魔とは違う装いをして、リアスと同じ紅の髪を持つ二十代半ば程度の男性がライザーに待ったをかける。

普段は他人を見下し続けるライザーもこの男性には逆らおうとはせず、反論のために出した言葉は徐々に小さくなっていく。

「それにその青年、兵藤一誠君の力にすこし興味があつてね。 これは私が考えた催しさ」

会話どころか初対面の者にいきなり、用があると言われたがこの男性が何を考えているのか分からないが、この場を収めてくれるのなら口を出す意味もないと判断し、暫し男性の言葉に耳を傾ける。

この男性がリアスの兄である事には気づく事のない巧だった。

「兵藤一誠君：君のあの力、もう一度私や上級悪魔の方々の前で披露してもらえないだろうか？」

「あつ、はい」

珍しく言い淀む巧であったが、隣の小猫に脇を軽く殴られてから返事をする。

「相手は：ライザー君、お願いできるかな？」

男性は周りを見渡してから、ライザーに視線を向け、巧の相手を依頼する。

ライザーは一瞬の戸惑いがあったが、隣で巧の事を想うリアスを思い出して、承諾の返事をする。

「いいでしょう：このライザー・フェニックス、身を固める前に最後の炎をお見せしましょう！」

巧とライザーの再決闘が決定したが、周囲の悪魔はそうではなかった。

何故なら、巧が勝利した際には願いを叶えるという条件が付いていたからだ。

その事を聞き、多くの上級悪魔は批判的な声をあげる。

「そんな下級悪魔如きに、何故!?!」

「黙れ：。彼は私の願いに応えるため、この場にいる。そして私は彼に願いを頼んでいる側だ、文句は言えまい」

全ては鶴の一声で片付いた。

男性の見せる覇気とも思える一言で：。

『まったく、懲りないな貴様は』

巧とライザーが決闘を繰り広げるのはレーティング・ゲームで使われた異空間と同様の物。

そこはコロシラムのように円形に広がり、巧にとつてもライザーにとつても逃げ場のない場所だった。

「イツセー」

リアスは映像越しにライザーとにらみ合う、巧を思い声を漏らす。傷ついて欲しくはなかった。

しかしもう止められない：自分には。

こうして見守る事しか出来ない。

『せっかくの婚約パーティーを邪魔するとは無粋な男だなあ!!』

ライザーの怒号が異空間に響き、背中から炎の翼が出現し、その羽を噴射させ、勢いをつけて加速。

巧の目の前で手のひらを翳し、炎が噴出される。

勢いよく噴出した炎は巧やその周囲を炎に包む。

会場にいる誰もが、この程度か、と諦めた声を漏らす。

ライザー自身も完全に、勝利を予感していた。

「ぬぐう！」

突如、自分の背後から脇腹に蹴りを入れられた。

その蹴りは勢いよく突き刺さり、思わぬ攻撃に足を前に出す。

攻撃を加えた者ー巧がいるであろう背後に勢いよく振り向く。

何事もなかったような巧が銀色のベルトを見せつける。

『おい、知ってるか？ 夢を持つとな：時々すごい切なくなるが、時々すごい熱くなる：らしいぜ』

巧は攻撃を仕掛けるではなく、正面からライザーに問いかける。

その言葉を聞いたライザーは首を傾げ、会場から試合観戦をしていた多くの上級悪魔もライザー同様の反応をする。

『俺には夢はない。でもな：夢を守る事は出来る』
けれどリアスは違った。

巧が懐からファイズフォンを取り出す仕草を見て、思わず涙が溢れるのが止まらない。

ー巧さん：貴方はっ！

リアスは気づいてしまった。

彼は：巧は自分の持った我儘な『夢』を守る為にこの場に立って、不死であるライザーに立ち向かっている、その理由を。

『Stunning By』

ー変身っ!!

ファイズフォンを空高く掲げ、ドライバーに換装し、横に倒す。

『Complete』

赤い光を身に纏い、赤い閃光の救世主は冥界の地に一人の少女の夢を守る為に舞い降りた。

左手首をスナツブさせると、カシャという金属音が鳴る。

それが開戦の狼煙となった。

二人は同時に駆け出し、互いの胸に全力の拳を叩き込む。

二人の速さは一緒だった、けれど後ろにより多く後退したのはライザーだった。

「はあ…はあ!! ぬうああ!!」

ライザーは右足を地につけ、勢いよく左足を振り上げる。

魔力のない物理攻撃であったが、ファイズはこの蹴りを膝を立て、受け止める。真正面からの攻撃を受け止められたライザーは、体のバランスを崩し、思わぬ形で後ろに後退する。

背筋が曲がり、地面に倒れる。

そんな無様な真似を見せまいと筋肉が、脳が最大の力を背筋に送る。

体を持ち直し、頭は元の位置に戻ろうとゆっくりと上昇していくが：その先にはすでにライザーの顔目掛けて、放たれた拳が置いてあり、ライザーの顔とファイズの拳は正面衝突を起こした。

ファイズのパンチ力は2.5t。それほどの力で殴られればライザーの顔など痛みがのたうちまわって当然。

しかし、傷ついたライザーの顔を覆うように炎が噴出され、数秒で顔の傷は全治する。

「ーなんだこのガキ…この前とはまるで違う！」

ライザーは先日ของเกมで喰らった一撃とも重さの違いをこの一瞬で気付いた。

ベルトの使用者が変わったように。

壁の瓦礫が、ライザーに乗りかかるが立ち上がり、羽を広げ空が高く舞う。

これはライザーの狙いでもあった。

「貴様は見たところ空も飛べない様だな…いくら地上戦が強くても、空を飛べなければ意味はない！」

両手を前に突き出し、地面に向けて火の弾丸を無数に撃ち出す。

両指合わせて、計十本の指から弾丸は発砲される。

玉の大きさは小さいが、当たれば確実にダメージを残すという物で、これでファイズを葬る、そう決めて炎の弾丸をさらに撃ち続ける。

「チツ…」

仮面の下で巧は思わず舌打ちをする。

ライザーの推測通りノーマルファイズでは空を飛ぶことは出来ない。

最終形態のブラスターフォームでならばそれも可能であったが、今はファイズブラスターもそして、超加速状態への変化を可能とするツール、ファイズアクセルも巧の元には存在し得ない。

無い物ねだりをして意味など無い為、ドライバーからファイズフォンを抜き取り、コードを入力。

『Single Mode』

ファイズフォンを開いたまま、右に倒し、拳銃の形に変化させる。ファイズフォンには左側の側面に銃に形態変化した際の為の引き金が存在する。

この炎の弾丸を避けながら、ライザーに当てるのは至難の技だ。けれど、ライザーにも付け入る隙がある。

今、炎の弾丸により、軽く地面には炎が広がり、ライザー自身の視

界も対象は遮られている。

今、自分のいるこの場所から数歩下がり、勢いよく踏み切りをつけ、勢いよく跳躍する。

「何っ!?」

ライザーの停滞地点は45メートル、ファイズのひと飛びは35メートルと10メートルの差はあるが、ライザーの足元に向けて飛んだ為、ライザーの反応も少し遅れ、巧には充分な程に簡単な射撃だ。「ぐっ!」

ファイズフオンの引き金を三回引き、フォトンブラットで形成された弾丸はライザーの体を下から貫いた。

そのうちの一発が炎の羽に直撃し、空に浮遊していたライザーの体を落下させ、地面に叩きつける。

一方のファイズは、確実に着地を決める。

「舐めやがって…この俺があ…こんなガキに…っ!」

地面に落下して、数秒が立つが、ライザーの傷は先程とは違いと少しばかりの時間と魔力を消費する。

フォトンブラットの恐ろしさを隠すため、顔を歪めファイズを睨むが仮面の下の表情が見えないため、ライザーは巧がどんな表情で自分を見ているのかが分からない。

それがライザーの恐怖を煽る。それが数秒続いたが体の傷が治つたな事を感じて立ち上がる。

今度は手のひらで炎を形成し、一本の剣を作り出す。

レーティングゲームでも使用した炎で固形化させた大剣である。

「おらああ!」

上段からの振り下ろしに後退して避ける。

振り下ろした地面にはヒビが入りっており、その力の強さを示していた。

次に大剣を引きずる様に駆け出す。

地面と刀身が擦れ、火花を散らす。

「はああ!!」

大剣の間合いにファイズが入った瞬間に、下から掬い上げる形で持

ち上げる。

当然、ステップを踏み、後ろに下がり、大剣を避けたはずのファイズの体を炎が襲う。

「くっ!!」

よく見ると、大剣の刀身は熱で溶けていたかの様に赤に染まっていた。

あの剣は元は炎により作られた物。

つまり、固形化をとりて炎に戻す事もまた容易。

一撃目を避けた後に二撃目は固形化を解いて、炎がファイズを襲った。

武器こそ無いが、それでも負けるわけにいかない。

ファイズは地面に膝をつけていたが、勢いよく立ち上がり、両手を振って駆け出す。

「どうした!? 怖いか!」

剣の間合いに入ると先ほどの一撃を思い出し、加速が止まる。

それを見たライザーは思わず、声を荒げ巧を挑発する。

「この野郎…っ!」

ライザーの挑発に反応する事もなかったが、腰のホルダーからファイズショットを取り出し、ミッションメモリーを取り付ける。

拳に取り付ける、横倒しになっているファイズフォンを開き、Enterキーを押す。

『Exceed Charge』

ファイズドライバーからフォトンブラットがファイズショットに伝わり、充填が完了する。

余裕をひけらかすライザーも二度もフォトンブラットの恐ろしきを経験してる為、ファイズショットを目にし、体に打ち込ませまいと炎の大剣を盾として自分の体を守るように前に突き出す。

「うらああ!!」

巧の叫びが響き渡り、ライザーが大剣を前に突き出した一瞬後にグランインパクトは発動し、赤い光を纏った拳は炎により作られた大剣とぶつかりあい、火花を散らす。

ファイズのグランインパクトを剣を利用して受け止めるライザー、体のすべての力を利用してはなお、その勢いは衰えることはない。

「負けるかああ!!」

その叫びに呼応するように背中から、先ほどの何倍もの炎が背中に灯る。

巨大な羽となった炎はライザーの力そのものを表す。

ファイズも全神経を拳一点に集中させる。

フォトンブラット以上に込められた負けられない思いが、リアスの夢を守るという自分の意思が巧の背中を押す。

二人の突撃はエネルギーの衝突による、爆発で終わる。

爆発により生じた威力と風圧が二人の体を引き剥がし、その場から吹き飛ばす。

互いに20メートル以上は離れていた壁に叩きつけられ、呼吸が乱れる。

「ハア…ハア…」

「…はあ…はあ…!!」

呼吸を整え、足に力を込めて、左足を前に出す。

ひと飛び35メートルのファイズは飛び方向を真上ではなく、正面を突き破る様にして、飛び出す。

ライザーもファイズが飛び出すのと同時に体を前に出す。

炎の羽がなくとも、体がファイズに向かう。

「ぐふう!!」

最初に入ったファイズの拳はライザーの胸を貫く。

拳の勢いはライザーが今まで喰らったどんな攻撃よりも重い。

魔力もフォトンブラットも何もない筈の物理攻撃。

対してライザーが放ったのは自分の体の一部でもあり、魔力で作った炎を纏う拳。

炎の拳はフルメタルラングに凹みを加える。

それは以前、凹みを入れたダウンフォールオルフェノクの物より、さらに深い。

左手でライザーの肩を掴み、右手で一発、逃げる間を与えぬように二発と乱打を打ち込む。

「らあ!!」

気合いを入れ、放った拳はライザーの顔に深く突き刺さり、その体をふわりと浮遊させ、地面に倒す。

大の字に地面に倒れ、殴られ、怪我をした部分は再生の炎が灯る。けれど…先ほどとは再生にかかる時間も炎の量も圧倒的に違う。

「俺が倒れるか、貴様が力尽きるか。一体どっちが早いんだろうな…？」

「知るかよ…っ!!」

立ち上がったライザーは至近距離で、炎の弾丸をファイズの腹部に打ち込む。

思わぬ攻撃に、体は後ろに後退し、その場で膝をつく。

「ハア…ハア」

ここで巧は自分の疲労を認識した。

これまでの戦闘では巧は大したダメージを負ってこなかったが、その疲れは明らかだった。レーティングゲームが終わってからまともに体を休める事をしてなかったのだから。

けれど…負けるわけにもいかない。

リアスの夢の為に、そして巧自身の誓いのため。

「まだ立つか…だがっ!!」

体を起こすファイズにライザーは褒め称えるような、言葉を送るも束の間。

立ち上がった瞬間を狙い、足を水平に蹴り出す。

自分の視界にライザーの蹴りが迫っている事を気づき、肘を立て、その蹴りを受け止める。

体に伝わる振動がその蹴りの重みを知らせる。

ファイズは蹴りを受け止めた肘を大きく降るい、ライザーの蹴りを吹き飛ばす。

思わぬ防御に体はバランスを崩し、後ろに重心が向かう。

「はあー」

「ぐふう!!」

ライザーの鳩尾を襲う、膝蹴り。

あまりのラフファイトに一瞬、意識が遠のくがなんとか止まり、ファイズにフックパンチを放つ。

腰を屈め、水平移動しながら避け、隙だらけの腹部に移動しながらの横蹴りでカウンター。

横倒しがうまく入り、10メートルほど飛ばされる。

腰のホルダーに手をかけ、ファイズポインターの側面の窪みにミツシヨンメモリーを差し込む。

『Ready』

いつも通りの音声が聞こえ、右足にセット。

ファイズフォンを開き、Enterキーを押す。

いつも通りの姿勢でフォトンブラットの充填を待つ。

『Exceed Charge』

フォトンブラットが右足のファイズポインターに充填されて、左足から前に出し、その場から駆け抜ける。

5メートル程進んだ場所で勢いよく踏み切り、跳躍。

空中での一回転をして、右足を前に突き出す。

ファイズポインターからは赤いポインティングマークがライザーの体を突き刺す。

一瞬にして円錐状の形に展開する。

この瞬間、ライザーは思わぬ笑みをこぼす。

狂ったからではない。自分をここまで追い詰め、そして勝利した男に向けての礼だった。

——今更になって…お前に俺が負ける理由が分かるなんて…。

——己の為だけの拳よりも、自分とそれ以外の何かを背負う者の拳はそれ以上に重い。

「お前の…勝ち…だ」

「やあああ!!!」

「ファイズ!のクリムゾンスマッシュは、リアスの夢に巻きつく呪いを焼き尽くし、ライザーを貫いた。」

『ライザー様、戦闘不能。この勝負、兵藤一誠様の勝利となります』

「兵藤一誠くん、ありがとう。さて、報酬は何が良いかな? 絶世の美女かい、爵位、お金どれかな?」

この勝負を提案した男:リアスの兄、サーゼクス・ルシファーは笑みを浮かべながら、戦闘フィールドから転移された巧に尋ねた。

この時、自分の近くにライザーがいない事に気づき、少し周りを見渡す。

「ライザーなら心配は無い。フェニックス家の男はあれくらいで死にはしないさ。兵藤一誠君、息子に挫折を与えてくれた事を感謝する。」

君のおかげでライザーはまた一つ大きくなってくれる」

ライザーよりも年齢はあるが、それでも兄か父親の区別がつかなかった巧は不器用ながらの会釈で対応し、一人の女性の元に向かう。

上級悪魔達をかき分け:今回の主役でもある花嫁の元へ。

「巧さん…」

人前だというのに自分の本名を口にするリアス。

今はそれを咎める理由はない、巧は何も言わずにそっと右手を差し出す。

差し出された右手を左手を伸ばす事で掴む。

二人は何も言わずに…この会場から出て行こうとするが…。

多くの上級悪魔。

この場にいる一部の男性が道を阻む。

リアスの兄であるサーゼクスは魔王として有名で、リアス自身もその美貌と才能により、冥界では名が知れ渡っていた。

そんなリアスが有望視されていたライザーとの婚約をする事を聞いて涙を飲んだ男性悪魔は少なからず存在していた。

実力ではライザーに勝てないため、婚約者に名乗りをあげる事を半ば諦めかけていたが、いきなり現れたリアスの兵士である巧がライザーを倒した事で、新たな婚約者に名乗りをあげようとする者がこの場にいた。

そしてまた、婚約者狙いでは無いが貴族―純血の血を重んじる者もいる。この婚約を破談にする事をよく思わない者もいた。

この場には第二、第三のライザーになりうる者が多くいた。そして彼らは巧に目を向け、言葉をぶつけようと口を開こうとするが…。

「退け、俺の歩く道だ」

言うなれば王の一言。

たった一言でこの二人がそのまま去る事を許さぬ者の敵意は消え去った。

道を阻んでいた者たちは無意識のうちにその場から退いていた。

巧は、ようやく道が空き貴族のトンネルを抜け、パーティー会場の出入り口に向けて歩く。

「お疲れ様、イツセイ君」

出入り口では祐斗が開口一番に巧に告げる。

その隣には小猫や朱乃やアーシア、グレモリー眷属だけでなく、ソーナやレイヴェルらが二人を待っていた。

その傍にはオートバジンが主人の帰りを今か今かと待ちわびてい

るように見えた。

「…バジン君を使つて、これで帰ってください」

小猫が巧に渡したのは行きに使つた魔法陣入りの紙。それを受け取り、巧はオートバジンに跨る。

リアスもその後ろから二人乗りをしようとするが…。

「流石にその服では難しいですね」

朱乃に止められ、魔力で形作つたいつもの制服に一瞬で着替えを行う。

準備も済み、ようやくと言わんばかりに勢い良く巧の腰に手を回し、二人乗りを行う。

するとソーナが一言。

「兵藤君…免許は持つてるのですか？」

ここに来て最大の問題を提起され、何も答えぬまま、逃げるようにしてオートバジンは発進する。

アクセルを踏み込む前にリアスは…。

「ごめんなさいアーシア。私も彼を好きになつて…」

何かを言い切ると巧の腰に入る力がより一層強くなる。

何も聞かずにそのまま走り続ける巧。

その言葉がアクセルの音で掻き消されていたのかは誰も知らない。

「お前なあ…」

呆れたような声を出す巧の視線の先には、兵藤夫妻に頭を下げ、ホームステイの依頼をするリアスが居た。

壁に寄りかかる巧の隣には頬を膨らませているアーシア。

「任せなさいっ！」

「ええっ！ こんな可愛い子が私の息子を好きなわけがない！と以前なら言えたけど…今なら嬉しいかぎりね！」

家の家主でもある兵藤夫妻はあっさりとOKを出してしまい、巧の望まぬところでリアスは兵藤家のホームステイが決定した。

「ねえ、イツセー今から私買い物に行きたいの、バジンに乗って二人で行きましよう?」

「わ、私も同じです! イツセーさん、わ、私もバジン君に乗っていきたいです!」

休日の昼間から二人に迫られ、巧は面倒そうにあしらう。

普通の男子高校生から見れば血の涙を流すような光景だ。

「普段はあいつ使うなって言ったのはお前だろ。それになんで俺がそんなことしなきゃならないんだよ」

今日も今日とて兵藤一誠こと乾巧の日々は続いていく。

そして新たななる不穏な影は確実に迫りつつあった…。

「ようやく…実験の完成ね。でもまだ改良の余地はありそうね」

とある場所、とある時間。

何かの実験室のような場所で、一人の女は艶かしい笑顔を見せる。

彼女の足には数人の男たちが縋り付いていた。

「俺に、俺にもう一度“ー”の力をくれ!!」

「あの力は…俺の物だあ!!」

複数の男たちは立ち上がり、何かを求めるように手を伸ばす。そこから赤い光が発生するが…。

女性の隣にいた青年が手に持ったベルトを腰に巻きつける。

狂った様に、おもちゃを手にした子供の様に笑みを浮かべていた。

「変、身ッ!」

『St undying By』『Com plete』

青年の姿が変わり…数秒の間に男たちは赤い炎と共に灰と化していた。

第3章 月光校庭のエクスカリバー 動いてしまう復讐

朝の日差しがカーテンの隙間から手招きしてる。

その細い光が巧の瞼に触れ、眠気が徐々に消えていく。

「おはよう、イツセー。 さあ、朝ごはんの時間よ」

「おはようございます。イツセーさん」

目を覚ました巧が最初に見たのはエプロン姿のアーシアとリアスが自分に向け、朝の挨拶を掛ける姿だった。

「どう？ おいしいかしら、私の作った朝ごはん」

「私はフーフーしなくていいお味噌汁を作りました」

朝食の際、巧の隣にはアーシアとリアスが腰掛ける形で自らの作った品の感想を巧に求める。

三人の光景を見て、兵藤夫妻の顔も綻ぶ。

息子とそして新たに住むこととなった二人の娘と呼んでいい少女たちが仲睦まじくしている事を心から喜んでいようだ。

「不味くはない。というか、リアスくつつくなよ！」

アーシアは巧との距離を開け、質問に応じるが、リアスはその豊満な体を押し付けるような形で質問を投げかける。

異性にあまり興味のない巧とはいえ、リアスを女性として意識せざるを得ない状況となっていた。

「イツセーさん、私のお味噌汁はどうですか!？」

リアスとの接触で顔をほんのりと赤くする巧を見て、ほおを膨らませ、アーシアも自分の体を巧に預けるようにして、味噌汁の感想を尋ねる。

「冷まさなくていいのは、だいぶ楽だな」

巧は素直に褒めることが苦手である為、アーシアと向き合った形とはいかなかったが、アーシアはその声を聞いただけで心の中に暖かい

気持ちが廻っていくのを感じる。

五人の暖かい食卓は三人が朝食を食べ終わるまで続いた。

「イツセー、お前は どう思う?」

「ああ、是非とも感想を聞かせてくれっ!」

「馬鹿じゃねえか。なんでそんなこと俺がしなくちやならないんだよ」

巧の呆れたような声が松田と元浜に突き刺さる。

「ぐはあー」と鈍い声を漏らし、二人の手に握られていた雑誌はそのまま地面に落下する。

松田の持つ本にはグラビアアイドルが水着で艶やかなポーズをとる写真があり、元浜の雑誌にはすこし幼さの残る少女の肌を露出させた写真、つまりはエロ本。

この二人は巧にどちらのスタイルがいいか、決着をつける為にも今日は体育の着替えを覗き、その際に一年の小猫の下着姿を見納めよう! と誘いを持ちかけたものの、巧の単純な否定により、二人は地面に伏した。

「な、何故……何故お前には分からないんだ!」

「お前は……誰よりも女体の素晴らしさを理解していたはずではないのかっ!!」

自分の足元にすがりつく二人のゾンビを振り払い、席に座りなおす。

呻き声を上げながら地面に倒れている二人に目を向ける。

——なんだかんだでこいつらと一緒にいるよな。

この二人と一緒にいることが多くなることを自覚し、気恥ずかしくなり、二人に気づかれる前に目を反らす。

ここで巧は前から聞きたかった本音を二人に尋ねる。

「お前らどうして俺に関わるんだ」

「んなの、決まってんだろ。友達だからだろ？」

「ああ、記憶が無くなってツンデレになってもイツセーはイツセーだからな！」

二人の何気ない答えは巧の胸を打つ。

その答えを聞いて、「おう」と言葉を返し、そっぽを向いて窓越しに青空を見つめる。

その顔がいつもの仏頂面よりも幾分が柔らかい物になっていたのはこっそりと巧の顔を見ていた松田と元浜の見間違えではないだろう。

『イツセー、先ほどは言わなかったけど、今日の部活は家になったわ。』

詳しい理由はついてからするから、まずは家に向かって』

放課後の巧に掛かってきたリアスからの電話。

その内容は今日のオカルト研究部としての定例会議だった。この部は普段はオカルトについて調べ、その結果を文化祭やイベントの際に報告するのが表向きの仕事。

けれど裏では悪魔の契約を取るといふ仕事を持っている。

その報告を行うのが、今日のやる事と聞いている。

巧は教室を見渡し、アーシアがまだこの教室にいるかどうかを探し、その姿を見つけたが声をかけるのを躊躇った。

理由は、アーシアと話を楽しんでいる女子がいるからだ。

するとその女子と巧の目が合う。

「アーシア……あんたの彼氏が私に嫉妬してるよ？」

「ききき、桐生さん、何を言ってるんですか!？」

アーシアの友人——桐生藍華は巧とアーシアの関係を茶化すような事を耳元でつぶやく。アーシアもそれに反応し、顔を真っ赤に染める。

面白い反応をするアーシアを見て、更に藍華は微笑む。

「ほら兵藤。アーシア、返すね。　　というか、兵藤も気をつけてあげないとアーシア可愛いから変な男に狙われないようにしなきゃ。そのうち取られちゃうよ」

アーシアの背中を押して、巧の側まで寄せる。

巧もその早さにすこし驚いたが、避けるわけにもいかないのでその場で動かずに二人を待つ。

藍華の茶化しとも忠告とも取れる言葉に、一応の反応を見せる。

確かにアーシアは正に美少女と言える容姿を誇る。加えて優しそうな雰囲気と癒されるオーラから既に多くの男子から絶大な人気を誇っている。

そんなアーシアの近くには巧がいる事が多い。その為、二人は恋人なのでは？ という噂が飛び交うほどだった。

巧からしてみればどうでもいい噂であったが、巧に好意を抱くアーシアからすれば嬉しいような恥ずかしい噂だ。

こうして二人は今日も隣に並んで歩き、帰宅していく……。

「可愛いですね、イツセイさん」

「ええ、まだ素直な感じがありますわ」

「でも、その頃からかしら？ おっばい、おっばい言い始めたのって」

「今のイツセイ君からは想像もできないね」

「……変態の目覚め」

「随分な言われようね」

「うっせ」

巧はリアスの茶化しにそっぽを向き、反応を見せる。

今、この家には兵藤一誠の母——涼子とオカルト研究部の皆が巧の部屋に集結し、アルバム鑑賞会を行っていた。

その理由は……本日は旧校舎の改築工事を行い、部室を使えなくなるのでという理由であった。

巧、ひいては一誠の記憶を戻す為としてアルバムを鑑賞していると、アーシアや朱乃や祐斗や小猫としてはほのぼのとしたものであり、涼子からしてみれば自分の息子の懐かしい日々に触れる時間であった。

「……」

「懐かし、そうね」

一つ一つの写真を愛おしそうに見つめる涼子に対し、巧は心の中で真実を伝えるべきか迷いそうになる。

そんな巧の心中を悟ってたか、隣に座るリアスが巧に声を掛ける。申し訳なさそうに顔を俯ける巧の手に自分の手をそつと重ねる。

普段ならこういった接触をすればすぐさま離れようとする巧であったが、不思議と今日はそんな気持ちになれず、リアスの暖かい手の温もりを感じていた。

——私が巧さんを支えてあげなきゃ、彼は私の大切な人だから。

リアスも自分が重ねた手から伝わる巧の存在に頬を赤に染めつつも、この暖かさが消えてしまわないよう——などと考えてしまっていた。

二人の手が重なり合って数分経つと、二人の様子を見てアーシアが迫る。

「部長さんだけずるいです!! わ、私も!!」

「ちよつと、アーシア何をっ!?!」

「あらあら、私もイツセー君と触れ合いたいですわ」

「お前ら何やってんだよ離れろ、暑苦しいっ!」

アーシアは真正面から巧の体にしがみつき、首に両手を回し、巧の体を抱きしめる。

そのシーンを見たりアスが真横から巧に体を寄せる。

二人に当てられた朱乃がリアスとは反対方向から迫り来る。

三人の美少女たちに囲まれ、普通の男子なら卒倒ものであるが、人が三人もくつついていたことによる熱の発生の方が巧にしてみれば辛い。巧の声で三人はしゅんとした態度を見せ、残念……などと口にして、巧から離れる。

小猫と涼子はその様子をお煎餅を口にしながら楽しみに見ていた。自分がこの場にはまたまた面倒なことになると嫌なので、この部屋から出ようとする巧。

立ち上がり、顔を前に向けると不意に、一枚の写真を手に取りそれを見つめる祐斗が目に入る。

その際に見えた祐斗の顔を見て、体の動きが一瞬停止し、視線は一点に集中。

その時の悠斗の顔は巧が幾度か見たことのある想いを持った者のする顔だった。

——復讐

『貴様……死にたいんだってな。俺は木場とは違う。望み通りにしてやるっ!!!』

真理と自分をオルフェノクによって殺された過去を持つ草加雅人はオルフェノクに対し必要以上の怒りを燃やしていた

巧は拭いきれない不安感が募る中、何も語らずに部屋を出た。

その日の夜、巧は初めて悪魔として呼び出された以来ぶりに召喚をされた。

その人物の願いは引越しでの荷物の整理だった。

グレモリー眷属の力持ちというのは小猫と決まっており、男である祐斗も戦車である小猫に力という部分では負けていた。

けれど、その小猫は既に別の依頼で召喚先に向かっているために代わりとして巧が召喚に応じた。

生憎、召喚者の願いが荷物の整理のため、多くのコミュニケーションをとる必要もないから巧でも大丈夫だろうというのがリアスの判断だった。

巧を呼び出した召喚者は何処にでもいるような普通の男性、年齢も四十代前半である事が伺える。

「君が悪魔君？」

「……まあ」

相変わらずのコミュニケーション能力の低さに序盤から会話の進まない事を予感していた巧だった。

「ええと、私と名前は澤田冬樹。短い時間かもしれないが、よろしく頼むよ」

「兵藤……です」

男性の自己紹介の名前に眉がピクリと反応を見せたが、一瞬の間が空いた後に自分の名前を名乗る。

巧の初めての悪魔として仕事が始まった。

互いに何も語らずに黙々と仕事をこなす。

頼まれた仕事は澤田の部屋に置かれた段ボールの荷物を既に配置されたタンスや収納に入れ、重い荷物を巧が担当し、運びこむ形で仕事を行う。

二人が無言であったのも理由の一端であったのか、仕事自体は一時間と掛からずに仕上がった。

「ほら、麦茶だよ」

「ああ……どうも」

静かになったリビングで澤田の住むアパートの窓から見える月を眺めていた巧の後ろから麦茶を差し出し、労りの笑顔を浮かべる澤田。

猫舌である巧からしてみればありがたい事この上ないが、何故か澤田が持つ湯呑みには自分と同じ麦茶ではなく、熱々のお茶が注がれていた。

「はあ……一人というのは寂しいものだね」

湯呑みに口を添え、少しほど喉を鳴らした澤田は巧に問いかける。

どう答えるべきか答えに迷うが、答えない巧をみて、答えを出すのを待っている澤田を見て、言葉を返す。

「まあ……悪い訳でもないですけど」

結局、口を突いて出たのはすこしばかり反抗じみた言葉。

その答えを聞いて、澤田はふふつと笑みをこぼし、巧に朗らかな目を向ける。

「確かに……寂しいが悪い訳ではないね。若いうちは一人が好きという時があるかもしれない。けれど歳を重ねると家族と一緒にいる事がとても、とても嬉しく思えるんだよ」

「……それは分かります」

澤田の言葉に今度は肯定的な言葉を返す。

巧にとって家族に値するのは真理や啓太郎。

一年間という時間ではあったが、彼らといた時間は巧にとってもとても濃く、幸せな時間と言える。

だからこそ、目の前の男性の言葉に頷けた。

「今、私は単身赴任をしててね。どうしてと片付けなければならぬ仕事がある。早く片付けて家族に会いたいものだよ」

巧の隣で月を見上げる澤田の目には意志が込められ、彼に託された仕事は何なのか聞きたい気持ちをごらえ、麦茶を喉に流し込む。

窓の隙間から風が入り、部屋干しにしてある洗濯物たちが少しだけ風にたなびく。

——アイロン掛けもまともに出来ない奴にロクな奴は居ない、だったか？ 啓太郎

巧はその場で立ち上がり、澤田に目を向ける。

「アイロン台とアイロン……借りるぜ」

「ありがとう兵藤一誠君。部屋の整理だけでなく、アイロン掛けまでしてもらって。君とはまた会えると思いたいよ」

別れ際、澤田の言葉に少しだけ嬉しい気持ちが生まれ、巧は行きと同様に魔法陣により、部室へ転移された。

巧のきつい一言に流石に男性も申し訳ないと感じたのか、一言の謝罪が入る。

ここで巧はこの男性の願いをリアスから聞くのを忘れた事に気がつく。

「……あなたの願いは何だ。それと対価を貰う」

巧にできる初対面の人間との最大のコミュニケーション。

それをぶつけ、男性は大きく笑いだす。

「いや、ようやく悪魔っぽくなってきたと思つてな。願いつていうか俺の話し相手になって貰えれば良いが……、それも無理そうだしな。

まあ俺の愚痴でも聞いてくれ」

どうやらこの男性はこの短時間で、巧の人間関係構成の下手さに気づいたようだ。軽く馬鹿にされ事でムツとしたが、それをなんとかこらえて、男性の座った柔らかいソファアの対面に位置する場所に巧も座り、グラスに注がれた氷水で喉を潤し、男性の話に耳を傾けた。

喧嘩の大好きな息子がいる、生真面目すぎて面倒な部下、娘と絶縁中の部下、研究が大好き過ぎる部下、DSすぎてDMな社員に人気のある部下。

などと男性の口からは話の話題がこれやこれやと溢れ出し、そのほとんどは巧の左耳に入り、右耳を通過する。

男性は酒が入った為、少々口を滑らせている。

「……たくつ、ヴァーリの奴は少し目を話すと暴れるし……どいつもこいつも俺が未婚だからって馬鹿にしてよ……。ガキの頃に考えた武器の名前で弄つたりしやがって……畜生が!!」

巧は半ば呆れながら男性の話に付き合っていた……。

こうして巧は二件目でも契約を結ぶ事はできず、この部屋から逃げ出すようにして部室へと転移した。

その際に対価としては部屋の冷蔵庫においてあった飲み物を持ち帰った。

勿論、男性の許可を得て……。

再び部室に帰ってきた巧は、リアスの机にこんな置き手紙が置いてある事に気がついた。

『お疲れ様、イツセー。二回目の召喚に関しては契約が取れなくもしょうがないわ。私達ははぐれ悪魔の討伐に向かつてるわ。何かあったらファイズのケータイに電話します』

置き手紙を見て、急いで懐のファイズフォンを取り出し、連絡が来ていないかの確認をする。

その結果、リアスからの連絡は無く、現れたはぐれ悪魔の討伐に成功した事を意味していた。

ここで巧はリアスの手紙に続きがある事に気がついた。

『P.S. 私達だけで討伐を終えた場合は、連絡がないのでそのままバジンで先に帰ってね。それじゃあ、おやすみなさい……イツセーへ』

この文面に目を通し、巧はオカルト研究部を後にして、オートバジンに乗って、自宅への帰宅していった。

——何をしているんだ、僕は……。こんな風な幸せが何時までも続くなんてありえないこと……。わかっていたはずだ。

祐斗は、雨が降る街の中を彷徨っていた。

自分の心が乱れたのはあの写真……。幼き日の一誠とその友人がゲームをしている後ろの壁に飾られていた聖剣が写っているのを見たからだ。

聖剣、イメージとしては正義の英雄が持つに相応しい剣と思う者もいるが、この剣を握られるのは数少ない一部の人間のみ。

聖剣に適合できる因子をという細胞にも似た物を持つ物だけだった。

「みんな……」

暗雲立ち込める中、空を仰ぎ見て、自分の仲間を思う。

蘇る記憶。嘗て聖剣を扱えるようになる為に集められた子供達、辛い実験を耐え抜いてきた自分たちを待っていたのは死というゴールだった。

しかもそれは実験の一部でもあった。

狂気の計画——聖剣計画の唯一の生き残り、木場祐斗にとってエクスカリバーは仲間の命を未来を……そして『夢』を奪い去った元凶そのもの。許す事など出来はしない。

「お前が……消えろっ!!!」

祐斗の耳に届いたのは何処かで聞いた事のあるような声。

けれど嘗ての物とはどこか違う。

音源は自分がいる道を十メートルほど進んだところを右に曲がった角である事を察知し、ナイトのスピードを持って一秒ほどで角を曲がる。

そこで目にしたのは……一人の青年と一つの屍体。

雨の中で血だまりが生まれ、水面に映る白い髪的青年。

「フリード・セルゼンっ!!!」

「君は……あぐあああつっ!!! 邪魔だよおお!! 今いいところなんだ!! 出てくんなアレックス!!!」

祐斗は自分の神器である魔剣創造の能力で一瞬で魔剣を創造し終えるが、フリードの目は以前と違い狂った様子など見せずにいた。しかし、その一秒後にはフリードの頭に激痛が走ったかの様に頭を抑える。それを見て祐斗の動きが止まる。

激しい頭痛に見舞われたフリードだったが、目の前には祐斗しかないのにも関わらず、もう一人誰かがいるように声を荒げ、誰かの名を叫ぶ。

この奇行に首をかしげる祐斗であったが、そんな物は次の瞬間に吹き飛ばす。

目の前にいるフリードの手には黄金色に淡く光る剣が握られていた。

——忘れる筈ない。 あれは……あの剣は……!!

「エクスカリバー」

今、木場祐斗の復讐が動き出す。

「フウ、久々の日本ね!」

「そうか、イリナは日本に幼馴染がいると言っていたな。

久々に会いに行くのかい?」

「うん! 勿論、イツセー君、私の事見て驚くかな! 幼馴染といえは

ゼノヴィアにもいるんだよね? 男の子の幼馴染が」

「ああ……もう、会えないけどね」

——君は今何処にいるんだ、アレン。

生き残った男の子

「エクスカリバー」

「…っう。漸く収まりやがった。ってクソ悪魔の癖にこのエクスカリバーちゃんを知ってるとはねえ」

雨に打たれている事など頭の隅っこに放置し、祐斗は自分にとって何よりも壊したかった復讐相手と思わぬ形で出会ったことに驚き、声を漏らす。

「…どうやらその輝きと僕の悪寒、本物の様だ」

「そうそう、このエクスカリバーちゃんて君の端正な顔を切り刻んじやうぜ☆」

フリードの手の中に収まり、黄金にも似たオーラを刀そのものから発生させる。そのオーラを肌で感じ、悪魔にとっては最恐の武器、聖剣の一本ーエクスカリバーである事を察知。祐斗は自分の神器である魔剣創造の能力でイメージした魔剣を一振り創造し、手の中に収める。

柄を両手で持ち、腰を落とし、いつでも斬り込める体勢を作り、その時をじっくりと待つ。

フリードは自分の持つエクスカリバーを両手で構え、祐斗の動きを一瞬でも見逃さぬ様に、その目で捉え続ける。

一秒か一分か、互いに正確な答えは知り得なかったが、二人の足が同時に前に出た。

「はあああああ!!!」

「ぬひああああ!!!」

声と剣が同調する様にぶつかり合い、大気の波を作る。鏢迫り合いとなるが剣に力を込め過ぎる事はしない。

けれど祐斗もフリードも互いに力を抜く事などせず、前に力を込め、押し切ろうとしていた。

鏢迫り合いを繰り広げたフリードの剣に込められた力が一瞬ゼロになり、奇妙な浮遊感にも似た物が祐斗を襲った。

前方に体が倒れかけていた祐斗に見えたのは、後ろに後退しようとして後ろ向きに跳躍するフリードだった。

「逃がすかああ!!」

「逃げるわけねえしよ!!!このエクスカリバーちゃんの餌食になりやがれよおお!!!」

後ろへの後退を許すまいと左足を前に突き出し、そこを支点に足に力を込め、全神経を集中させて前に足を突き出し、両手で持っていた剣をフリードに向けて、突き出す。

その剣は後ろに後退しようとするフリードを突き刺す一撃になると確かな手応えを得た祐斗。

しかし、フリードのバックステップは一秒の間も開けずに終わりを告げ、一瞬の反転。フリードの体は前に向かっていく。

フリードはエクスカリバーを肩で担ぐ形で裕斗に突進していき：自分の間合いに祐斗が入るとエクスカリバーを横に一閃。

「ぐわあああ!!」

フリードの一撃は祐斗の右腕を制服ごと斬り裂き、悪魔にとっては最恐の一撃。聖剣での攻撃に成功する。

その際に斬り裂かれた腕からは黒い液体ー血が垂れ落ちる。

聖剣での一撃は擦り傷でさえも悪魔にとっては致命傷。その痛みが体をのたうち回り、その場で膝をつく。

「やあ、やあ、クソナイト君。取り敢えず君はここで退場でございます」

「まだまだ…だっ!!!」

魔剣を杖代わりにして、体を支えて立ち上がる。

その双眼にフリードとエクスカリバーを捉え、狂気と憎しみを携え、それでもなお、祐斗は前に進む。

その行く末は何処に向かうのか、知っていてもなお。

「はあああああ!!!」

「うおっ！ 片手が使えなくとも中々に厄介でございますなあ？ だれどこのエクスカリバーちゃんには勝てるわけないでしょ!!!」

魔剣を片手で持ち上げ、横に薙ぐ。

祐斗の一撃は聖剣の痛みもあって、一撃目とは雲泥の差があると
言っているほどの物。

そんな一撃を後ろに下がるステップで軽やかに避け、エクスカリ
バーを片手持ちから両手持ちに変え、力を込める。

フリードが両手でエクスカリバーを振り下ろす寸前…。

「んあ？　なるへそ、なるへそ。　ごっめんねえ☆今日の君の相手は
ここまでになりやした。ばいちゃらば!!」

小型の魔法陣がフリードの右耳の真横に現れ、数秒程の不穏な会
話の後、自分の羽織っているコートの懐から閃光弾を取り出し、地面
に叩きつけ、眩い閃光が祐斗の視界を覆う。

「…逃げたか。　…これは」

視界から光がなくなり、目を開けるとそこにはフリードの姿は居ら
ず、ただ雨が降り注ぐだけであった。

祐斗もフリードの撤退により、手の収めていた魔剣を解除して、足
に力を入れ、立ち上がる。

立ち上がった際に先ほどフリードのいた場所が赤い鮮血に染まっ
ている事に気がついた。

祐斗は自分の腕と地面に落ちてある鮮血を見比べても明らかに色
が違い、それがフリードの物であると結論付けた。

頭に浮かんだ答えを奥にしまい、祐斗は再び雨の中を歩き始める。

「たくっ！　アイツの邪魔が無けりゃ、今頃スッキリ爽快気分になれ
たっつのにー！」

「そう、熱くなるなフリードよ。所詮は今のうちだけだ。今ではあの
計画により後から生まれたお前の方が主人格となっている。残った
人格もいずれは消え去る筈だ。いまさら主人格を取り返す事はほぼ
不可能なのだからな。それよりも今は残ったエクスカリバーの回収
だ。コカビエルが持っている本数だけではまだ足りんからな」

ーチユンチユンー

小鳥のさえずりが巧の耳に届く。

それと同時に体を起こし、背筋を上に向けて伸ばし、横目で自分の周囲を確認。

隣を見てもリアスもアーシアも居らず、巧にしてみれば氣を楽にする事のできる朝であった。

「イツセーさん、朝ごはんが出来ましたよ」

「今日も私たちが作ったの。早く食べましょう」

そんな時間もいつの間にか過ぎ、アーシアとリアスが巧の目の前に現れ、モーニングコールの様に巧を朝食へと向かわせる。

巧も体を起こし、一階に行こうとするが、ふと昨日の事が頭を過る。

「昨日はどうだった」

「祐斗の事ね。私の予感が当たるとなると今のあの子に私たちの言葉が届く可能性は少ないわ。私の王としての力不足を感じるわ」

リアスも巧の言葉一つで聴きたい内容を理解し、返答に応じる。

巧の知らない祐斗の過去が今の祐斗の変貌の一端となっている事だけは分かっていた。

かつての草加雅人がそうであった様に……。

「部長さん、イツセーさん、お父さまとお母さまが待ってますよ」

「ええ、すぐ行くわアーシア」

一階に降りていたアーシアの声で二人の真剣な空気も柔らかい物に変わり、二人はそのまま一階に降りていく。

「なあ松田、イツセーよ！ 我々彼女いない同盟で何か大きな事をしようとおもうー！」

「それはなんだ元浜よ!!」

「……」

教室に着くなり、松田と元浜の二人に絡まれ、巧はため息をこぼしたくなるが、二人は巧を挟み真剣な面持ちで会話を続ける。

「例えば有名な怪盗を捕まえて、覗き見の極意を教わる…とか!」

「おおおおおっつ!!! それは名案だ!!」

二人は気分が高揚し、席から立ち上がり空中で腕相撲をするのかと思わせる様にして腕を組み、喜びの声を上げる。

「そしてもう一つ…最近、巷で噂となっている灰色の怪人と謎の戦士―仮面ライダーについて調べるのだあ!!」

「はっ??」

「仮面ライダーってなんだ元浜?」

仮面ライダー…。

意味を知らない巧でも何となく、その前後の言葉で察してしまっている。

それはファイズである自分の事ではないかと。

以前、リアスが言っていたようにこの街では灰色の怪人、つまりはオルフェノクの出現が多数あり、巧が憑依する以前から暴れている事も多々あったと耳にしていた。

けれど最近では巧が現れた事を感じたのか殆どのオルフェノクは自ら人を襲う事は少なくなりつつある。

けれどオルフェノクを倒していた時期からそういったファイズの存在が噂になり、この二人の耳に届いてしまった。

頭の中でそんな経緯を想定する巧。

「まあ、仮面ライダーの方は殆どが作り話だけだな。なんかバイクに乗って灰色の怪人を倒したり…などなど、作り話って説もあるが…。

しかーしっ! 先ほどの怪盗に関しては確かな情報がある! この駒王町にはまだ現れていないが、確かにここ最近、犯罪で金を手に入れた奴らから金を奪い取り、貧しい人に分け与える…言うなればルパンの様な怪盗がいるとな」

「それじゃあ…俺たちがその怪盗から覗き見の極意を教われれば、女子

の着替えを…」

「見放題ってことだああ!!!」

エロ男子二人に囲まれ、巧は机に顔を付した。

元浜の話した殆どの言葉を耳にすることなく。

「わあ、ピッカピカですね!」

キラキラと反射する地面、新品同様に反射した物を映し出すガラス。

それらを前にして、アーシアは驚きを口にして、目を輝かせていた。旧校舎の改築が終了し、ガラスなどが美しくなり、その風景に心までもが美しくなったと言わんばかりにアーシアの顔もキラキラとしていた。

「……」

隣のアーシアが美しくなった旧校舎に驚いている中、巧も声さえ漏らしていないが、美しく作り立てのような風情を醸し出す旧校舎の改築に驚いてはいた。廊下を歩いていると、一つの曲がり角にぶつかる。

角を曲がると一つの部屋を見つけた。

その部屋の扉を見ただけで、その部屋が自分の知っている旧校舎の中で最も危険な場所では無いかと推測出来た。

「なんだよこれ…」

巧の目に映ったのは、扉全体に警察が事件が起きた際に関係者以外の立ち入りを禁止するために張る「KEEP OUT」の文字が振られているテープが扉に幾重にと貼られ、扉には大きな南京錠が掛けられており、まるでそこには何か危険な化け物が封印されているような気がしてならなかった。

そつと扉に歩み寄り、封印されたと見える扉に触れようと手を伸ばす。

伸ばした腕が、指がその扉に触れる寸前――

「イツセイさん？どうかしたんですか？」

「いや…なんでも無い。今行く」

自分の背中からアーシアの心配そうな声が聞こえ、急いで扉に向けて伸ばしていた手を引っ込める。

アーシアの心配を駆り立てる気の無い巧はその場から急いで離れ、そのまま振り返る事もなく、その扉から距離を取り、アーシアと合流してリアスの待つ部室に向かった。

そこは月の出ない夜のように暗く、光など一寸も届かない様な闇。

「よかった…封印が解けたんじゃないんだ」

その闇の中でコトコトと音を立てている棺桶。

先ほど扉に触れようとした侵入者が去っていった事に安堵し、溜め息を一つ。

彼はそのまま再び静かに息をひそめる。

この世界に自分だけが居れると祈りながら…。

巧とアーシアが入ったオカルト研究部にはいつも通り、お菓子を頬張る小猫、ソファーに座るリアス、この場にいないのは何時もニコニコとした朱乃とクールな様子の祐斗の二人。

「祐斗は…今は居ないわ」

リアスは祐斗がこの場に居ない辛さを噛み締め、コーヒーを口に含み、流し込む。

「リアス、奴の過去に何があったんだよ」

「そうね、誤魔化すのはもう、意味は無いわね。祐斗は元々、教会が行っていた聖剣計画という計画を行うために集められた…言わば、実験体だったの」

リアスが口にした祐斗の過去。

アーシアは予想もしていなかった答えに両手で口を抑え、小猫も悼

む様に目を細める。

二人の様子は祐斗の中にある憎しみの根が更に深いものである事を思わせ、巧は頭の中で予想していた。

祐斗が暴走を始めた大きな理由がこの先にある――と。

「聖剣計画は、悪魔に無類のダメージを与える最強の剣、エクスカリバーを扱うために必要な因子を人工的に作り出すための計画よ。

そして祐斗はその因子を埋め込む存在だった。祐斗の他にも多くの子供達が集められ、毎日苦しい薬物の投与を行っていたわ。結果は：誰一人としてエクスカリバーに適応出来ず、そのまま計画は中止となったわ。実験を行った科学者は祐斗達を処分する事にしたの。子供達は必死で抗い：生きるために戦った。けれど：生き残ったのは祐斗ただ一人。その祐斗も教会の者が撒いた毒ガスにより命を落としかけていた。そしてそこを私が通りがかり、私の騎士として――悪魔に転生させたの」

リアスの焦点は自分の顔を鏡のように移す紅茶に向けられていたが、話を終えると巧とアジアに移動する。

「私は：あの子の王失格ね。私をもっとしっかりしてたら、今頃祐斗はここに居たのに」

「：まあ、あいつもバカじゃないだろ。生きてはいるさ」

巧はリアスの向かいにあるソファに座りこみ、口を開いた。

リアスは何時ものながら、遠まわしな巧のフォローに内心感謝しつつ、紅茶の二口目を含む。

「でも：木場さん、本当に大丈夫でしょうか？」

アジアも巧のとなりに座りつつ、今はこの場に居ないイケメン少年を心配していた。

しみりとなる、オカルト研究部室にノックする音が聞こえ、そこから入ってきたのは先程まではこの場にいなかった朱乃だった。

「あらあら、皆さんお揃いですね。 お客様をお連れしましたわ」

朱乃の後に入ってきたは……この学園の生徒会会長、支取蒼那ことソーナ・シトリー、その人だった。

聖劍使い

夕方、夏も近づき始め、暑さは少々なりを潜めていたが、夕焼けの風情を醸し出していた。

「会長さんと部長さん、どんな話をするんでしょう。それに木場さんの事も気になりますし」

先程のソーナの訪問を受け、アーシアは不安そうな声を漏らす。それを受ける巧と小猫も声には出さないが、心中ではそれが残り、アーシアと似たような気持ちであった。

「…恐らく、厄介な事になるかも……」

小猫の呟きは部屋を出る前に一瞬だけ見えた、ソーナとリアスの顔を思ったが故。

そしてもう一つ、三人の中では祐斗の事も残る。

先日から、明らかに奇妙な様子を見せる祐斗。

いつも見ている祐斗からは感じられない雰囲気。アーシアと小猫も大方の予想は立っていた。

聖剣——それが今の彼を変えている事に

何度目かの厄介ごとを前に、巧は顔を空に向けた。

そこから見える空はとても澄んでいた。それが嵐の前の静けさを表していた様に、巧には見えた。

「…ああ、わかった」

フェイスフォンを耳に当て、リアスからの電話を受ける。

内容は至極普通なもので、ソーナとの話が長引き、帰るのは少し遅れるため、叔母さまと叔父さまに伝えて欲しい、という連絡だった。

「部長さんはなんて？」

「別に…話があるから、帰りが遅くなるだけだよ」

自宅が目の前になり、会話も消える。

アーシアは巧の返答を聞き、危険な事ではないと感じ、ほっと胸を撫で下ろす。

二人は並びながら、玄関に向かって行くが、その動きが一瞬静止する。

次の瞬間には、アーシアは無意識の内に足を後ろに数歩後退させ、巧も手が少しだけ震えているのを自覚する。

自らの震えを見て、目の前の家には何かがいる事を予感いや、発覚し、巧は何所かでこの感覚を感じた事があり、それは一秒もたたない内に鮮明に蘇った。

以前、フリードとの好戦の際に巧みに向けられていた光剣、レインナーレーダウンフォールオルフェノクが形成した光の槍。

それらと相対した時の感覚と似ていて、正に蛇に睨まれた蛙という状況であった。

「イツセーさんのお父さまとお母さま!!」

深い思考の波に潜っていた巧の隣で、アーシアはこの家の家主、つまり兵藤夫妻を思い、二人を呼んだ。

アーシアの悲痛な叫びにより、顔を上げ、焦りにも困惑にも似た色を持った顔の巧は急いで、玄関に駆け寄り、靴を脱がずにそのまま家の中に駆け込む。

ー頼む、生きててくれ!!

自分が乾巧である事。本当の息子である一誠ではない事を知らない夫妻を守るのは自分の役目。そう決めていた巧はあの二人に何かあつては、一誠に顔向けできないと考えて、二人の安心を願いつつ、廊下を駆け、リビングの扉を勢いよく開けた。

「そうなの…懐かしいわねえ」

「そうですね、ってあれ?」

リビングを覗けば、涼子はソファアに腰掛け、それと向かい合うよ

うに置かれている二つ目のソファアには亜麻色の髪を両サイドの二つに束ねた顔立ちの可愛らしい少女と青みがかった髪の一部に緑のメッシュを入れていている端整さと鋭い刃を思わせる顔つきの少女の二人が座っていた。

「あら、イツセーにアーシアちゃん。お帰りなさい」

「イツセー君、久しぶりー」

涼子は巧にいつも通りの言葉を掛け、向かい合うソファアに座る少女は元氣な声で声を掛ける。

亜麻色の髪の少女の言葉に驚きを感じ、冷や汗が流れる。

今、この少女は巧に向けて、久しぶりと言った。

それはつまり、この少女は兵藤一誠の関係者、若しくは友人である事に気が付いた。

「……………」

ここで返答に詰まり、言葉が出そうにない巧はそのまま返答をせずにバックから弁当箱を取り出し、キッチンに持っていく。

そして、目の前に自分に向けて声を掛けた少女など居なかったようにしようとしたが、ここで妨害が入る。

「ちよ、ちよつと！ 無視しないでよ!!」

「…放せ」

自分の右腕を抑えた少女に睨みを利かせたが、少女は引く事なく、寧ろ巧との距離を一気に詰める。

互いの唇が触れそうになる寸前の距離まで詰め寄られ、少女の整った顔立ちがはつきりと眼に映る。

「…えっ?」

不意に耳に届いたのは少女が漏らした声。

自らが掴んでいた巧の右腕を離し、何歩か後ろにおぼつかない足取りで後退する。

巧もいきなり距離を詰めてから、今度は距離を置いた少女に何が起きたのか全く分からず、思わず彼女の顔に視線を向けていた。

「あつ…そうだわ、イリナちゃん。ゴメンね、言い忘れてたけど、今

イツセー、事故に遭っちゃって記憶喪失なの。だから、イリナちゃんとの記憶がないのよ」

「そ…っか、大変だったね、イツセー君」

イリナ…そう呼ばれた少女の顔を見てみるも自分の記憶の中には全く当てはまる人物は該当しなかった。

つまり、この少女は巧にとっては初対面でも少女からは久しぶりに会う幼馴染である事を痛感し、ここでも自分…乾巧という存在が誰かの心に傷を負わせ、帰ってくるか分からない兵藤一誠を思う、という十字架を背負わせている気がしてならなかった。その後はドアの近くにいたアーシアも交え、各々の再会を想い、会話を楽しんだ。

「良かったわ、二人共」

帰宅したリアスの第一声と共に体を抱き寄せられる巧とアーシア。アーシアは顔を赤くして、照れた様子を見せる。巧は気恥ずかしさを見せていたが、それとはまた別の事に対して仏頂面を全開にしていた。

「ごめんなさい。私のせいで貴方達を傷つけてしまうところだったわ。ソーナから聖剣使いが、この町に入った事を聞いて急いで帰ってきたけど…まさか、イツセーの幼馴染だったなんて」

「でも、お母さまと、とても仲良く話してましたよ」

アーシアの報告を聞き、リアスはほっと安心した様子を見せる。

けれど彼女の目には何事も無かった事を喜ぶアーシアと何かに対し、言いたい事を溜め込んだ巧の顔が入った。

「イツセー…ごめんなさい、私達のゴタゴタを、叔父様や叔母様を巻き込んでしまっ」

「いや…別に」

リアスが頭を下げたのに、反応して、言葉を掛ける。

リアスが頭を下げたのに反応して、言葉を掛ける。

今の巧の状態を知っているのは自分一人である為に、そして巧の性格からして、あの兵藤夫妻が有事に巻き込まれるのは何よりも嫌う、と分かっていたからだ。

もし仮に、イリナが兵藤一誠の関係者で無かったら、兵藤夫妻の、命の保証などあるはずがなかった。

「それで、奴らの目的は何なんだよ」

「それはまだ分からないわ。けど、明日の放課後に部室で話し合いが行われる…そうよ」

「明日…か」

巧はその場からベッドに倒れこみ。

そのまま眠りにつこうと体の力を抜こうとするが…。

「イツセー、お休みしたいところ悪いけど、貴方に指名よ」

夜の川で人影が二つ。

一つは巧。もう一つは、以前巧を召喚した金髪の男性。

そこで二人とも釣竿を両手で持ち、男性は魚が釣れるのを今か今かと待ちわびていた。

「どうだ、悪魔君。釣れたか？」

「いや、別に」

男性は隣にいるにも関わらず、巧に成果を尋ねる。

しかし、一匹も釣れない巧はぶつきらばうに、そして短めに言葉を切った。

ここで会話が途切れ、沈黙が生まれる。

川の水面に二人の姿が反射され、写し出される。

どこか事務的で、どこか自由な時間。

巧はこの時間が嫌いではなかった。

不意に隣に座る男性に視線を向け、改めて確認する。

この男性がただの一般人ではない事を。

巧は前回、彼の愚痴に付き合わされただけで高級な品を頂き、今回もそれなりの品を渡すと約束された。

それらについて質問をしようとするが、最後まで言葉が出ずにいた。

喉の奥に言葉が押し留められている気がしてならない。

けれど、それらを問う事を決して許さない。

グレイファイア・ルキフグス、紅髪の魔王：サーゼクス・ルシファー。

この二人の雰囲気と目の前の男性の持つ雰囲気はひどく重なる。

「おいおいどーした、悪魔君。浮きが動いているよ」

男性のアドバイスが的確に入り、二人の夜釣りは互いに何匹か釣れるのか、競争！となるまで続いた。

「私は紫藤イリナ」…ゼノヴィアだ」

ゼノヴィアとイリナは自己紹介を短いながら行う。

巧はゼノヴィアの側に立て掛けてある布に覆われた物体に目を向けていた。

「それで、神の信徒が悪魔に会いたいなんて…一体どんな要件？」

一触即発の中で、オカルト研究部には不穏な空気が漂っていた。

オカルト研究部のメンバーと神の信徒と呼ばれたイリナとゼノヴィアの二人が、ソファアに座りながら向かい合っているのだから。

リアスを除く面々はライザーの時と同様に立つことを余儀なくされていたが、祐斗だけは部室の隅に寄りかかりながら、イリナとゼノヴィアに禍々しい視線をぶつけ、いまにも斬りかかりそうな面持ちであった。

「元々、行方不明となっていた一本を除く、六本のエクスカリバーは教会のそれぞれ派閥によって所有されていましたが、その内三つが…墮

天使の手によって盗まれました」

イリナの告げた事実には巧を除く、メンバーが小さく声を漏らす。そんな中で巧はただ一人、状況についてこれずにいた。

顔をむすつとさせていると、それに気がついた朱乃がそつと隣に立ち、巧の耳元で囁く。

「エクスカリバーは元々一本の剣でした。先の大戦で砕け散りましたが、教会の技術力や錬金術の応用によって砕けた欠片から七本に分けて、この世に再生されたのです。それが…あの二人が持つ物ですわ」
これで先程のゼノヴィアの側に立て掛けておいた、剣の形をした何かの正体がハッキリとした。

「なるほど…つまり貴方達は、私がこの町にやってきた聖剣泥棒の墮天使と手を組む、と言いたいのか？」

「ああ、その可能性は否めない。聖剣は悪魔にとって忌むべき存在だ。君たちが破壊するというメリットは大きい。仮にこの仮説が本当ならば、私達は貴方がたとえ魔王の妹であろうと…消滅させる」

巧が朱乃の解説を聞いている間に話は大きく展開されており、リアスはゼノヴィアとイリナの示唆された意味を即座に理解し、静かに怒りを燃やしていた。

エメラルドグリーンの美しい瞳の色は彼女の髪と同じ紅へ。体の表面からも赤い魔力の膜が生まれる。後ろに立つアーシアは普段見ないリアスの怒りに驚きを隠せない。

「私の事をそれだけ知ってるのならば言わせてもらおうわ。私はグレモリー家の次期当主として、墮天使と手を組む事などしない！」

リアスは語尾に心からの意思を込めるように伝えた。

その言葉を受けたゼノヴィアはふつと笑みを浮かべ、それを待っていたような顔を見せた。

「ああ。私達も貴方がそこまでバカでない事くらいは知っているさ。今のはただの確認事項。さて、我々はそろそろ行かせてもらおう。先程も伝えたように、この街で起こる件には不介入を守ってくれれば、それでいい」

ゼノヴィアは伝える事を伝え、この場から去るためにガーゼのよう

な布で包まれた聖剣を肩に抱える。

イリナも同じように、身支度を整える。

一瞬、巧の方に顔を向けて…。

「あら、お茶の一杯くらい飲んでいけばいいのに」

「悪いが悪魔と馴れ合う気はない」

それ以上何も話す気はない

ゼノヴィアの言わんとする言葉が巧には聞こえていた。

けれど、その先は何も言わずに部屋を立ち去ろうとしていたが…首が何故かこちらを向いている。

「アーシア・アルジエント」

ゼノヴィアは彼女の名前を呼んだ。

呼ばれたアーシアはビクリと体を震わせて、少し間を置いてから返答した。

「は、はい…」

「まさか、こんな地でかつて魔女と呼ばれた者に出会うとはな」

巧はアーシアの背中からその小さな体が先程よりも大きく震えているのに気がついた。

けれど、巧には自分が何をすればいいのかが分からない。

言葉で彼女を守る事など不器用な自分に出来るわけが無いと自覚がある為に更に歯痒い。

「あなたが悪魔や墮天使までも癒せる力を持ったが為に追放された魔女さん？」

イリナは笑みを見せながら、アーシアの心を削るように言葉で追い詰めていく。

何も言えずにそのまま下を俯き、目頭に涙が集まり、今にも下に溢れ落ちそうになっていた。

「しかし。悪魔になるとは…魔女の名に相応しい行為だな。だが、君は今でも我らの主を信じているのか？」

「何を言ってるの？ 彼女は追放された上に悪魔になってるのよ？」

二人は独自で話を進め、巧も割り込む隙を逃してしまう。

小猫や朱乃も先程から何も言わなかったが、この二人に対していい感

情を持つ事は難しいと考える。

何も言わないのは教会の使い、それも聖剣使いともなると勝手に行動を起こしていいと許される判断は出来ない事は分かりきっている。それ故に祐斗もまだ、リアスの忠誠心を胸に秘めているからこそ、復讐心を胸の奥にしまい、頑丈な鎖で縛り付けていた。

しかし：乾巧はそんな男ではなかった。

目の前で人ー仲間が傷つけられたのならば、たとえ相手がオルフェノクだろうと、フェニックスだろうと、一万人のライダー部隊であろろうが戦いを挑む男だった。

そんな男は聖剣使いを相手にするのに一切の躊躇などせずにその引き金を引いた。

「おい、いい加減にしろ」

「…何？」

突然、話に割り込まれたゼノヴィアは目を細めて、ゆっくりと顔を向けた：巧に向けて。

「いつまでも昔の事でグチグチ言いやがって。それにお前もだ。何拗ねてんだよ」

巧の言葉はゼノヴィアやイリナのみならず、祐斗にむけられていた。

流星に祐斗もこれには反応をせざるを得なかった。

「…何だつて？もう一回言ってみろ…ッ！」

普段の敬語や優しい語尾は一切の消え、敵意のみが剥き出しとなった物だけ。

普段の敬語や優しい語尾は一切消え、敵意のみが剥き出しになる。ゆっくり、ゆっくりと生気の無い足取りではあるが、確実に近づいていく。

「君に：君に何が分かる!!みんなの死は決して昔の事なんかじゃないんだ!! 僕は壊さなければならぬんだ!彼女たちの持つ聖剣を：他の聖剣を全て壊さないと、それはいつまでも昔の事にはならないんだ!!」

すると、祐斗は：セイクリッド・ギア神 器の能力で魔剣を作り出し、光を受けてキラ

りと輝く刀身、その先端である剣先を巧に向けた。

「僕と…僕と戦え、兵藤一誠!!」

「ああ…。俺もお前をぶっ飛ばしてやりたいと思っていたところだ」

先程まで、悪魔vs教会の対決になりかけていた状態から一変、いきなり巧vs祐斗となる展開となってしまった。

「一つ…聞かせてくれ、君は何故聖剣を壊したいんだ？」

ゼノヴィアは巧に剣先に向けた祐斗にゆっくりと問う。

「君たちの先輩だからね…。僕はこの力で確実に聖剣壊していく。もちろん、君たちの持っている物も含めて…ね」

祐斗は怪しく光る魔剣を携えて、巧と共に旧校舎の外に向かっていく。

ゼノヴィアは隣に立つイリナに顔こそ向けないがゆっくりと告げた。

「この戦いを…見届けよう」

意味の無い死など無い

「この戦い…見届けよう」

相棒のゼノヴィアからの提案に間を開ける事なく、頷いて肯定の意を示すイリナ。

彼女も突然変わった自分の幼なじみを見定めたくなった。

一誠が何故悪魔になったのか、その理由を知らずしてイリナは一誠を敵と定める事は出来なかった。

もし仮に彼が望んでそうなった訳ではなかったのなら…。

何かの理由で悪魔になったのだとすれば、それを知らずに一誠を拒絶するのは決して飲み込んではならない。否、飲む込まないと心に決めて、イリナもまた相棒のゼノヴィアに並び立つようにして巧と祐斗の後についていった。

「それじゃ…いいね」

「ああ」

旧校舎を出てすぐに広がる芝生。

西部劇に出てくるガンマンの決闘のようにして、なおかつ侍同士の斬り合いを連想させる殺伐とした空気を祐斗と巧を中心に醸し出していた。

「あの二人つたら…もう」

「ですが、今の祐斗君にはイツセー君のようなやり方でしか止められないかもしれないですね…部長」

「なんでこんな事に…？」

「祐斗先輩も…意外と男子っぽい」

リアスは右手で頭を抱え、嘆息をする。

朱乃は二人の男子らしさを見て、納得したような顔をする。

アーシアは先程までは自分の所為で決闘が起こりそうになったが、その行き先は逆方向に向かい首を傾げる。

ちなみに小猫は片手で袋から新しい煎餅をとりだして、口に入れる。

そして渦中の二人は――

「いいのかい？ 変身しなくて」

「ああ、今のお前に必要ないね」

「そうか：：なら、後悔するよっ!!」

巧の言葉に額に青筋を立てつつも、それらを押し止めて、なんとか自分を律する。

――落ち着け：：いくら変身してなくても、彼を倒すには冷静さが必要なんだ

巧と自分の戦力を鑑みても、自分が勝てる可能性は五分以下とみて十分。それが祐斗の下した判断だった。

エレファントオルフェノク、ダウンフォールオルフェノク、そしてライザー・フェニックスとの激闘を全て乗り越えて来た巧。

そんな巧を前にしても、祐斗は勝つ可能性を模索し、突くべき隙を探し続ける。

自分は正攻法で勝てないのならば、奇策でしか勝つ術はない、そう決めて。

「おい：：もう、始めようぜ」

決闘の始まりを急かすように又は、祐斗の動きに対応すべきか、巧は腰を低くして、“待つ姿勢”を取った。

それは祐斗にとっては、先手を譲られたと言っても過言ではなかった。

剣を持つ祐斗と素手の巧。

普通ならば間合いや攻撃力では祐斗が勝る。そう判断される状況だ。

しかし、乾巧という男はそんな普遍的な男ではない。

ファイズという鎧を纏い、武器を持ったオルフェノクに素手で挑む

事も幾度かあった。

その際には時折、“待つ姿勢”を取って、カウンターを狙う。

「ふざけるな…ツツ!! 君は、僕をバカにしてるのか!

けれども今の巧の行動に祐斗は自分の感情の蓋を剥ぎ取り、それらを表に引きずり出した。

祐斗にしてみれば決闘の場において先手を譲られたのは自分を見て、と言われたのと同義だった。

「ふざけるなああツツ!!」

咆哮。

片手に持つ魔剣は煌びやかな輝きから、妖しい光へ。

騎士の特質である圧倒的スピードを現時点で引き出せる最高速度で巧に向けて、真正面から突貫。

打ち出された感情は祐斗の体と同調し、彼の体を弾丸へと変貌させた。

真正面からの突貫に対しても巧は動じる事なく、ただひたすら“待った”。

祐斗の突貫から自分への接触までが永遠に感じられる程に。そして、巧はそこから“動いた”。

「らああ!!」

「祐斗っ!!」

リアスは今までに聞いた事のない、獣のような咆哮を見せた祐斗の様子に思わず、決闘に口を出してしまいそうになる。祐斗がリアスに見せたのは最高速の速さ。

自分が見た事のない速さで、巧に突貫していく。

その姿はまるで終わりを知って、撃ち抜く事のできない鉄の壁に向けて発砲された弾丸の様に儼い。

「パキキイイイイ

まるで金属が折れた様な金属音。

ただ折れたのではなく、純粋な力でへし折られた様な悲しい響き。祐斗と巧の接触、そこから連想されるどちらかがどちらかを傷つける風景。リアスにとってはそれが何よりも辛かった。

巧がファイズに変身しないと云った時は心中で胸騒ぎがしたが、巧ならば祐斗を無力化出来ると信じ、この場は見守ると決めたリアスだった。けれど、裕斗の咆哮と目に宿る狂気は本物だった。

あんな目をして、祐斗が仲間を斬る…。

その風景から逃げる様にして、目を閉じていた。

どうやら隣にいたアーシアも同様で、目を閉じたまま自身の腕を掴んでいた。

「部長…あれをー」

隣の朱乃に急かされ、思わず目を開ける。

「うぐ…ッ!!」

リアスの目には地面に蹲り、砕けた魔剣を苦々しそうに見つめる祐斗。先ほどの場所から全く動いておらず、リアスが最後に見た時と同じ姿勢の巧だった。

「イツセー君、凄い」

「ああ、君の幼なじみは…バケモノだな」

軒並みな感想を漏らすイリナの隣でゼノヴィアは巧をバケモノと表現した。

騎士として現時点で引き出せる最高速度を引き出した祐斗をただの蹴りの一発で沈めた巧をどう表現すべきか迷ったからだだった。

こんなところで少しは教養をつけるべきか、などと考えるゼノヴィアだったが、先ほどの光景がフラッシュバックする。

巧は目にも映らぬ速さ、を実感した事がある。

ファイズの強化フォームであるアクセルフォームの高速移動に加えて、巧本来の姿でもあるウルフォルフェノクはアクセルフォームに

は劣るがスピードに長けた力を持つ。そんな巧にとって祐斗の動きを見切るのは容易ではないが、困難でもなかった。

尚且つ、今の祐斗は策の一つも持たずにただ真つ直ぐに向かって来るだけ。そんな相手に自分から動く事なく、間合いを見計らい、祐斗が自分との間合いを確認し、剣を振りおろす瞬間を完璧に、ここしかないタイミングで蹴りを撃ち込んだ。

祐斗は迫り来る巧の蹴りをいなす事も、躲すこともできなかった。それを行うにはあまりにも自分は加速しすぎた。

僅かばかりの対応として、攻撃の為の剣を巧の蹴りを防ぐ為の盾に利用したが、自分の速さと巧本来の蹴りに威力が加算された巧の蹴りは祐斗の魔剣を紙のように散らせ、祐斗の体に深々と突き刺さった。

「兵藤一誠、いいものを見せてもらったよ。それでは、私達はここで」
ゼノヴィアは二人の対決を見終わると肩に聖剣を掛けて、その場を立ち去ろうとする。

隣のイリナは未だに巧の強さに惚けていた。

「ちよつと待って。一つだけ聞かせて、今回の聖剣事件の首謀者は誰なの？」

「コカビエル。神の子を見張る者の幹部」

それだけ答え、ゼノヴィアはイリナの肩を引っ張りながら、最後に祐斗を一瞬だけ瞳に捉え、その場を後にした。

「くそっ…!! 僕はまたっっ!!」

「何を言ってるの、祐斗!!」

ゼノヴィアとイリナが去ってから、オカルト研究部室にまたもやりアスの声が轟く。

何故なら…。

「僕は行かなければならないんです。聖剣を破壊する為に、そして

みんなの無念を果たす為にも」

祐斗はゼノヴィアとイリナからの不介入を忠告されてから一時間も経っていないのに、それを破ろうとした。そして自分がグレモリー眷属から外れるように提案した。

今度ばかりは黙っていられないと朱乃も言葉は出さないが、反対の意を顔に滲ませる。

けれども祐斗は止まることなく、そのまま部室を後にしようとして歩き出す。

そこからは表情が抜け落ち、能面のように造られた顔になってしまったのかと小猫は下から祐斗の顔を覗き見て、背中に冷たい汗を感じた。

ドアノブに手を掛け、部室を出て行くこうとする祐斗に巧が一言、声を掛けた。

「お前さ、それでこいつらが喜ぶと思ってるのか？ 偶にいるんだよなあ、そういう馬鹿が」

巧が祐斗に掛けたのはまたしても、怒りを煽るような言葉。

二度目の態度に、思わず手を伸ばす。

胸倉を掴みあげ、自分と同じ位の身長の巧を勢いよく壁に叩きつける。

二人の距離が一気に近くなり、目に宿る怒りの炎が巧には酷く儂く見えていた。

「それじゃ、僕は一体どうすればいいんだ!! 聖剣計画の生き残りは僕だけ…ならば、この命を捧げても聖剣を全て破壊すること以外、何も出来ないんだ!」

「そうかもな。お前がやることに俺は口出ししないし、したくもないね。でもな、残されたこいつらはどうなんだ？ 今のお前が抱えてるものと同じ物を胸の中に抱えちまう」

巧が示したのは、祐斗の後ろにいて、その背中を…いつ壊れてもおかしくない姿を捉え、この場に留まって欲しいと願うリアス達だった。

「それでも…ツツ！ 僕は…ツツ！」

リアス達の姿を見ても、その気持ちを变える事のない祐斗を見て、巧は拳を祐斗の頬に打ち込む。

衝撃から地面に倒れる祐斗に、巧はいつの間にか、乾巧として接している事に無意識の内である為に気が付かない。

「お前の行動が、お前を助けようとした奴らの死を…無意味にしているんじゃないのかよ」

「君に…何が分かるっ!! 平穩で家族がいて、友達がいる、そんな…普通の生活をしてきた君に僕の何が!!」

「知るかよ。俺はな、お前じゃねえんだ。だから、お前の過去について理解出来るなんて、これっぽっちも思っちゃいない。でもな、これだけは分かる。意味なく…死んでいった奴は一人もいないってな」

祐斗は声が出なかった。

巧の目が全てを語っていた。多くの死を見てきた事を、そして多くの仲間を失ってきた事を、それら全てをその目が物語っていた事を理解してしまった。

「君は一体…何者なんだ?」

「さあな…一応は、リアスの下僕、みたいだな」

祐斗の視線を奪っていた巧の目は、先ほどの何もかもを見通すような目から一転して、いつもの気だるそうな、不機嫌さを露わにする目となっていた。

その変貌に自分は何か幻覚を見ていたのか、などと心中で考えながらも、地面から立ち上がる。

「君のあの目は…この前まで、普通の男子高校生をしていた人の目じゃない。ファイズである事が…君の何かを変えたのだろうか?」

巧の正体にリアス以外の者が初めて、触れた瞬間であった事にリアスは勿論、巧も気がつく事はなかった。

祐斗は先程までと比べて落ち着いた様子を見せたが、それでも部屋を出る事を止めはしなかった。そのまま単独行動を開始し、リアス達も今日はここで解散となった。

「イツセー、お前を男と見込んで頼みがある！」

「やだね。なんで俺がそんな事しなきゃならないんだよ」

「返答が早すぎるぞ！　せめて内容を聞いてからにしろ！」

一日が経ったが、日常はこうして回り続ける。

今朝から、巧は松田と元浜の二人に絡まれ、自らの防衛反応に従って、二人の頼みを要件を聞く前に却下した。

流星にこれには二人も怒り、せめて内容だけでもっ！と頭を下げる為に一応は話を聞く事になった。

「お前、女子の下着を盗むヌベラっつ！！」

前半を聞いて、聞く事を拒否した巧は机の中にある教科書の角で松田の頭を真つ直ぐに叩く。

獅子脅しを喰らったように頭の痛みへのたうち回り、地面を転がる。

「いったあああ!!何すんだよ!!」

オルフェノクであり、悪魔でもある巧の腕力を持って、放たれた一撃は人間の身体にはかなりのダメージとなった。

1パーセントの慈悲をくれる事もなく、のたうち回る松田を元浜が笑いながら見ている際にも、反対側を向き、時折視線を向ける程度しかしなかった。

「ん？」

先程から、巧の視界の端にちよこちよここと何が映る。

最初は気にならなかったが、好奇心を止められず、思わず目で追うと…教室のドアから小さい体の小猫が手招きをしていた。

巧の机はドアから離れているために小猫が口を動かしても声が届く事はないが、このタイミングからして…目的は祐斗に関する事であ

るのは明白だった。

「おい、どこに行くんだよイツセー?」

「…ちよつと用ができた。すぐに戻る」

いつになく真剣な表情の巧に松田や元浜もそれ以上は問いただせずに教室を出ようとする巧の背中を見送る事しか出来なかった。

「それで…なんの真似だ」

「イツセー先輩…私と祐斗先輩と一緒に教会の人に共同戦線を持ちかけましょう」

小猫が密会に選んだのは、まさに人通りの少ない校舎裏。

そこで小猫は巧に提案を持ちかけた。

勿論、小猫は巧が二つ言葉で承諾してくれるとは考えていなかったが、断るとも考えていなかった。

仲間の危機に駆けつける、絶対に誰も死なせない。

それが小猫から見た、巧の印象であり、願望だった。

墮天使に囚われたアシアを救い出し、ほぼ絶望的だったリアスの夢を守り抜いた巧ならば、きつと祐斗の事を救ってくれると、そう信じていた。

しかし、巧の返答は小猫の期待を粉々に砕いた。

「やだね。そもそも、俺たちはあいつらに関わるなって言われたんだぞ。その意味分かってんのか?」

返答を聞いた小猫の目は丸くなっていた。

「…そんな事ない、あの人は…イツセー先輩は、お姉さまと違う!!」

『意味なく…死んでいった奴は一人もいないってな』

あの時、小猫は巧の背中がとても大きく思えた。

だからこそ、信じたいと思った。

何処か“姉”に似ている巧を――

「もうっ…いいです。イツセー先輩がそんな人なんて…最低です」

小猫は巧に向けて言葉を吐き捨てその場を去った。一人残された巧はフェイスフォンを取り出し、時間を確認。

今の時間は一時間目がとづくに開始されている時間だった。

「やあやあ、悪魔くん。 今日も俺の夜釣りに付き合ってもらおうよ」
深夜零時を回った頃。

巧はいつも通り、悪魔の召喚に応え、最近ではお得意様となりつつある、謎の雰囲気を持つ男性に夜釣りのお供を頼まれた。

「勿論、こつちからのお願いだからな、釣竿や餌なら用意してある」
男性が呼び出したのは、いつもの自宅ではなく、駒王町にある堤防だった。

いつもの和服で釣りに臨むその姿に、ブレない男と感じながら、用意された釣りセットを手取る。

隣の男性が器用に釣竿を操り、浮きと釣り針を遠くまで飛ばす様子を見て、あれを自分にはできないと判断し、そのまま糸を海に沈める形で釣りは開始となった。

「今日はまた、一段と不機嫌そうな顔じゃないか。何かあったのか？」
「いや…別に何も」

目の前の男性に話してもしようがない事なので、口を閉じようと決めていたが、突き刺さる視線。

「どうやら男性は話を聞きたくてしようがないようであった。

「かつて自分を助けようとして多くの仲間を失った奴がいて。そいつは今、復讐に目が眩みそうになりかけてる。かつて俺の仲間にも似た奴が居たんだ。もう御免だ…誰かが犠牲になるのは」

関係のない人間にだからこそ、話せる事もある。

巧は自分の今の悩みを隣で釣りに勤しむ男性に打ち明け、この疑問から抜け出す道を教えてもらいたかった。

「なら…復讐をさせちまえばいいのさ。無理に止めようとするのは悪手。復讐を終えた後は案外スッキリするもんだらうよ。自分の抱えてる嫌な荷物が無くなるんだからな。もし仮に犠牲になりそうになつてんのなら…そいつは悪魔くんが止めてやればいいんだらうよ」

「そうっ…すか」

隣の男性の答えに、型崩れした敬語で返答し。

巧は自分の竿に反応がない事を確認し…魚が食いつくのを待ちわびた。

「あれがアザゼルの言っていた面白い男か」

現れた脅威

「まさか、俺たちが神父の服を着る事になるとは…」

深い暗闇の中で、匙元士郎は自らが着ている神父の服が鏡に反射する姿を捉え、ため息混じりにボヤク。

「けれど…目的のためなら何でもするさ」

隣にて着替えを完了させるのは、木場祐斗。

二人の目の前には聖剣使いのゼノヴィアとイリナがそれを待ちわびていた。

外での見張りを行っていた小猫が二人の様子を見て、四人の元に戻る。

「それではいいな。 私たちはこの街の西側を探索。 君たちは東側を担当してくれ、お互い敵に接触があった場合は携帯電話に連絡をしよう」

イリナは自分の持つ携帯電話を見せ、小猫も同じように携帯電話を持って示した。

「それと…一ついいか？ 何故この場に兵藤一誠が居ない？ 彼がいれば、かなりの戦力になる筈だ」

「いいんです…あんな人。 祐斗先輩の為に動こうとも思わない…最低な人です」

小猫は間を空ける事なく、ゼノヴィアに返答した。

けれど、その言葉は無口な小猫をさらに冷たい印象を抱かせるだけの重さがあった。

小猫をよく知らない、匙でさえも冷や汗をかきそうになる。

「…あれえ…なんで俺、こんな事になってんだ？」

ここで匙は自らの行動を振り返っていた。

いつも通り生徒会として、想い人であり主でもあるソーナ・シトリーと駒王学園の為に汗水垂らして、働いていた。 そんな時に小猫が自分に声をかけた。

放課後に、小洒落たカフェにて二人だけとなりながら、祐斗の状態と身の上話を聞かされた匙はその場で男泣き。

二つ言葉で聖剣の破壊に協力する事にした。

その後、街で救済を求める哀れ過ぎる聖剣使いの二人を見つけて、小猫に呼び出された祐斗と聖剣使いの二人と自分と小猫の五人で聖剣の破壊に挑む事となった。

ここで生まれた疑問は、何故巧がこの場にいないのか、という事だった。

匙の巧ー兵藤一誠の第一印象は最悪だった。

女子更衣室の覗き、数々の変態行為。

それらに手を染め、全くの悪気はなく、寧ろ開き直る。

これらの行為をしていた一誠が突如、鳴りを潜めた、と話を聞いた時は耳を疑ってしまった程に。

その後、悪魔として対面してみると、明らかに自分の中の兵藤一誠のイメージが崩れ落ちた。

更に匙を追い詰めたのは、ライザー・フェニックスとのレーティンゲームの映像をシトリー眷属の皆で見た事だった。

ファイズとなり、戦う巧にまだ幼かった頃に見ていたヒーロー物の主人公を投影してしまったのだ。

それ程までに巧の後ろ姿に影響された匙は彼にー自らのヒーローに追いつく為にも震える足を叱咤しながら、この場に立っているのだ。

「それでは、我々は街の西側を探索する。君たちは東側を頼む」
ゼノヴィアの静かなる指令と共に作戦は開始された。

「と言っても、聖剣を持った神父なんてすぐに見つかるのか？」

別行動をとって、公道を悪魔組の三人は歩いていた。

どこの方角からの攻撃にも対応するために三角形の形をしつつ、移

動を行う中で中々現れない、聖剣泥棒に対しての疑問を口にする。

「以前、僕と交戦したこともある。だから、ここよりも人気のない場所にいる可能性はあるかもしれない」

祐斗は以前の戦闘からして、人気のないとは言え、公道でフリードが襲ってくるこの可能性が低いことを提示し、ここからの移動を示唆した。

小猫も同様の考えで祐斗の発言に苦言は一切受け付けなかった。

匙は祐斗の提案に乗る形で聞き返す。

「なんだ、ここよりいい場所知ってるのか？」

「ああ…ない事はない」

三人はその場から駆け足で移動し、夜の街から姿を消していった。

「それで…悪魔くんは今の所ボウズみたいだな」

巧の依頼人である男性は、これまた生きのいい魚を釣り上げ、糸を持ち上げながら、釣った魚をバケツに入れる。

隣で座る巧の様子を首だけ向ける形で確認すると、釣竿はピクリとも動かず、まさにボウズと言える状態。

「…なんだよ」

男性がやっぱりと言った顔で見ていた為に急に羞恥が湧き出てきて、目を細め、これまた不機嫌と言った顔を見せる。

巧の不機嫌そうな顔を見て、男性は笑みをこぼす。

「そんなに怒っていると体に力が入りすぎて、魚も逃げてくんじゃねえのか？」

男性の指摘は間違っていない。

巧は水面を覗き込み、自分の餌の状態を確認。

夜行性である悪魔とオルフェノクの細胞が混ざっている巧にしてみれば、水面越しや夜間でも問題なく目視できた。

水面越しに見える巧の餌は全くと言っていいほどに食われていな

かった。

対して隣の男性が仕掛けた餌には今なお、新しい魚が食いつきそうだった。

二人の距離は2メートルも離れていない。

つまりは魚たちはわざと巧の仕掛けた餌を食おうとはしない。海の上にいる圧倒的な捕食者の存在に気が付いているから。

巧自身もここまでくると一匹でも釣りたいと思い始め、体の力を抜いて、イライラによつて無意識のうちに体の外に殺気とまではいかないが、闘気に似た物を発していた事に気がつく。

普段通りの気持ちで魚を待つ事約五分後…。

「釣れたみたいだな、悪魔くん」

「ああ…一応、な」

釣れた魚を男性と同じバケツに入れ、一息つく。

完全に力を抜いた巧がその場から、立ち上がる。

目を大きく見開き、感覚を研ぎ澄ませ、目と耳で目の前に現れるであろう“敵”を待ち構えた。

「まさか…この距離で気づかれるとは」

周囲の建物の影と夜の闇から声が聞こえる。

声の持ち主は夜の影から足音を響かせ、現れた。

黒いタイトなズボンに灰色のTシャツと黒のシャツといった格好をした少年だった。

ダークグレーと呼ばれる白と黒が混ざった色。だが白の色が強い髪を持ち、どこか現実離れた美少年と呼ぶべき容姿。

「すまねえな、驚かせて。前に話したろ？ こいつが俺の義理の息子って感じのヴァーリだ」

「ああ。君の話聞いてね、少し興味を持ったから会いに来たのさ」

アザゼルはヴァーリの隣に立って、巧に説明をする。

先ほどの映像を見た為にヴァーリに対し、隣の男性と同じ安心感を持つ事は難しいと思ってしまう巧。

不安感が心中に募る巧だったが、ここで巧の体は巨大な何かを感じる。

無意識にその方向に体を向けてしまっていた。

突如、別方向に体を向けた巧に対し、驚きもせずとその様子を男性とヴァーリは伺っていた。

「あんたら…もう家に帰れ。それと俺は今日はここまでしか付き合えない」

巧は先ほどの感覚が、何処で味わったのかという答えをすぐに導き出していた。

何かをえぐられる感覚、それは悪魔にとっては天敵の聖剣でしかない。

その感覚が以前、ゼノヴィアとイリナが戦闘をせずにそのまま状態で感じ取った物とは格が違う。

それはつまり、それほどに大きな力が働いている事を意味する。

釣りを行っていた場所から走り出し、ファイズフォンを取り出し、素早くコードの入力を開始し始めた。

「イリナ、彼らの場所まで後どれくらいだ?！」

「ええ…と、一分もしないよ!」

木々が生い茂った森と認定されてる場所を、白と緑のラインの入ったコードを纏いながら、ゼノヴィアとイリナは駆け抜けていた。

ゼノヴィアは肩に自らの聖剣、破壊の聖剣を抱える。

イリナも肩に紐の形に変形させた、擬態の聖剣の解放を急ぐ。

小猫からの連絡で場所と状況が伝わり、二人も戦闘準備を走りながら、行っていた。

「見えた!」

自らの体を覆うコートを勢いよく外し、少し露出のある教会の戦闘服が露わになる。

ゼノヴィアの視線の先に、木々がなくなり、光が差し込む開けた場所と距離がある為に正確には見切れないが、戦闘を行っている祐斗を捉えた。

「はあああ!!」

相棒を解放し、両手で担ぎ上げながら、ゼノヴィアは祐斗と聖剣泥棒のフリードの間を裂くように斬りかかる。

聖剣を振り下ろし、二人は以前オルフェノクとなったはぐれ悪魔のバイザーを撃退した建物の屋上を破壊した。

「はいい?? またまた新手ちゃんですか??」

祐斗と斬り結んでいた相手ーフリードは破壊された屋上からまだ壊されていない地帯に飛び移る。

フリードが肩にトントンと置いていたのは、聖剣。

「あれが盗まれた聖剣ね」

「はい。あれは天閃の聖剣、祐斗先輩の速さと殆ど同じです」

フリードの持つ聖剣の正体を知ったイリナ。

厄介な速さ故に中々攻めきれない小猫。

匙は手首を回し、何かを準備するような仕草を見せる。

「木場ーゼノヴィアさんー俺が奴の足を止める。」

その隙に攻めるんだ! ラインよ!

匙の右手首から濃いピンク色の光が発生し、黒い何かを形成していく。

黒い蛇を模した神器。

その名もー

「行くぜ、黒い龍脈!!」

黒い蛇の口元から青白いラインのような物が発射され、祐斗とゼノヴィアのみを警戒していたフリードの足に勢いよく、幾重にも巻き付いた。

「よしきたー今だ!!」

フリードは突然の事で不意を突かれ、自らの足に絡まる物体を見て、焦りを感じた。

「クソォー! なんですか、コレェ!!」

自らの持つ聖剣でラインを断ち切ろうと振り下ろしてみるのが、ラインと刀身が接触しても一向に切れる気配はない。

「はあああ!!」

「これで終わりだああ!!」

フリードの最も近い位置にいたゼノヴィアと祐斗が勢いを付け、加速し自らが持つ刃でフリードを切り裂こうとした。

フリードの視線とゼノヴィアの視線が重なる。

ゼノヴィアの頭を支配したのは、攻撃よりも

幼き日の記憶だった。

「ア、ア…レン?」

「…そんなはずはない!…アレンはアレンはっ!」

いきなり急停止したゼノヴィアを見て、祐斗も動きが止まる。下にいたはずのイリナもゼノヴィアの様子を見て、何かと合点が一致した顔を見せた。

「そ、そんな…。貴様はフリード・セルゼンじゃないのか…?」

「いいや…違う。この男はフリード・セルゼンという名前ではない。本当の名前は…お前が一番知ってる筈だ」

建物から顔を見せたのは一人の男性。

眼鏡をかけ、口髭を蓄えた神父服に似たものを着ている男。

この男は祐斗とその仲間を奪った元凶、聖剣計画の発案者であり、その咎を問われ追放となった…

「バルパー・ガルレイツ!!」

祐斗は突如現れた男性に憎悪の念が込められた目で直視していた。

イリナは呆然として動かないゼノヴィアの代わりとして、フリードを戦闘不能にするための一撃を食らわせる為にその場から発進する。

「フリード、体に流れる因子を聖剣に集中させろ!そうすればその程

度の拘束など容易い」

「アイアイさあ！」

フリードが目を閉じたコンマがつくほどの間で聖剣全体に黄金色の光が灯る。

その光を帯びた聖剣でラインを断ち切った。

背後から祐斗が最高速のスピードを持って、接近。

斜めからの振り下ろしを狙って、魔剣を振り抜く!!

「あまつい」

「なっ!?」

「フリード、今の状態では勝てるものも勝てない。再び、薬を投薬してやる。そろそろ、お前が主人格となるだろう」

手に持った聖剣を背後に回す事で祐斗の振り抜いた刃の勢いを相殺し、受け止めた。

建物の屋上から、バルパーのいる地点まで飛び降りる。

小猫と匙、イリナもフリードとバルパーが逃げる事を予感し、二人のいる場所まで走り出すが…。

「はい…ちゃらば!!」

再びの閃光弾に視界を奪われた。

次の瞬間には、そこには誰もいなかった。

「そんな…いや、そんな筈はないっ！ イリナ…奴らを追うぞ！」

「ちよっと、待って！ゼノヴィア」

「木場！」

「祐斗先輩ッ!!」

屋上からすぐに飛び降り、元来た道を巻き戻るように引き返し始めるゼノヴィアとそれを追うイリナ。

言葉一つ発さずに静かな表情で祐斗も二人を追った。

匙と小猫はなにも出来ない無力感をその場で打ち拉がれながら、噛み締めていた。

「それで…一体これはどういう事、小猫？」

「説明してもらいますよ…匙っ。」

小猫と匙の前にこの状況で会いたくない人ナンバーワンが現れてしまった…。

「それで、祐斗はそのバルパーを聖剣使い二人と共に追っていったのね？」

「はい…」

小猫は現れたりリアスと朱乃にこれまでの経緯を話した。

勝手な行動とはいえ、主人であるリアスを心配させた事は申し訳ないと思いい、罪悪感を感じていた。

「イツ…あの人はどこにいますか？」

一瞬、巧の名を口にしかけたが、間を空けて言い直し、巧に対する評価を形容した。

リアスと朱乃もあの人と言われ、少し考えるが、すぐに巧の事だと気づき、小猫の肩に手を置く。

「小猫…イツセーは祐斗の事を見捨てたわけじゃないの。イツセーが…彼が誰かを見捨てた事がある？」

「でも…ッ。あの人は断りました。動くなと言われた事を理由にして」

姉と同じだった。

自分を守ってくれると、そばに居てくれると信じていた姉は突然、力に溺れ自分を捨てた。

彼も一緒だった。

突然現れて、自分や仲間を助け…自らが持つ大きな力を誰かの為に、誰かの『夢』を守る為。

怖かった。そばにいてくれる人が自分から離れるのは…。

「小猫…あの人はきっと私たちを裏切らない。それだけは約束するわ」

「…はい」

力なく頷いた小猫は極度の緊張状態にいた為か、今は居ない姉を思

い、心労が祟ったのか。

その場から崩れ落ちるように眠りについた。

「全く…。朱乃、イツセーは？」

「はい、今は…バジン君と共に祐斗君の捜索を行ってくれています」

「良かったわ…事前に連絡しといて」

眠り姫のように可愛らしい寝顔をした小猫をお姫様抱っこをしつつ、リアスは朱乃が展開した円形の魔法陣を足下に展開された、魔法陣によって帰宅した。

「あの会長…向こうはいい感じで終わりましたけど…」

「うちはうち、他所は他所ですっ！ 尻叩き後、997回！」

「ヒイヒイヒイ!!!」

匙が四つん這いになって、ソーナからの物理的な説教を尻叩きという形で受けていた。

翌日、彼の尻が真っ赤になっていたのは言うまでもないだろう。

「あいつから連絡は」

「無かったわ」

悠斗の失踪から一夜が明けた。

一晩かけて、巧は祐斗とゼノヴィアとイリナの捜索をしたが、見つける事はできなかった。

「私たちも、ただ待っているだけではいけませんので、使い魔を放って探索中です」

朱乃から今の状態を聞き、巧はその場から動き、部室に置いてあるアレを取り出した。

「どこに行くの？ そんな物まで持って」

「あいつら…探しに行くんだよ」

巧が肩にかけたのはナツプザック。
その中に入っているのはファイズギア。

リアスは巧の言葉を背中で受けて、任務を出す。

「もしも…何かあったら、連絡を頂戴」

「ああ…」

それだけ答え、巧は部室を出た。

アーシアはこれから一体どうなるのか、という不安と今だ姿を見せぬ祐斗の無事を心中で祈っていた。

巧が部室を出て、数十分。

リアスの使い魔からの連絡を受け、リアス達はその場所に即座に向かった。

「なっ…これは！」

魔法陣による移動で飛んだのは駒王町にある山の一带にある公園だった。

ついて即座にリアスが目にしたのは、人としての形をした自らの使い魔に介抱されているイリナだった。

教会の戦闘服はほとんどが破られて、体にはいくつもの生傷があり、先程まで凄まじい戦闘を行っていた事を語っていた。

「アーシア！」

「はいっ…！一体、誰がこんな事を」

リアスの指示と同時にアーシアはイリナに駆け寄り、両手の中指から指輪が形成される。聖母の微笑での治療効果をもたらす、エメラルドグリーンが光が発生し、生傷の多いイリナの体を癒す。

「二人は…無事よ。私だけが…逃げおくれ…あいつの力…パンパじゃない」

それだけ伝えて、イリナは再び意識を失った。

あいつと称されたのが誰なのか、リアスには見当がついてしまう。けれどその人物であることだけは外れて欲しいと願うリアス。

グレモリーの紋章とは違う物が刻まれた魔法陣がリアス達のそばに出現し、ソーナ達はこの場に到着した。

「リアス」

「ソーナ、来てくれたのね」

「ええ、連絡をもらったのに来ないわけにはいきませんからね。それよりも彼女の体力の消耗が酷いですね」

「はい…。私の治療では、失った体力は元に戻せません」

ソーナはアーシアの治療を受けるイリナの容体を把握し、この場所での治療はここまでと判断を下す。

「私の自宅に彼女を運びます。そこならば、医療施設は揃ってますので。椿姫、彼女を頼みます」

「はい」

ソーナの女王たる椿姫は王の指示により、イリナの体を抱え上げる。

再び足下に魔法陣を展開させ、ソーナの自宅に転移した。

「二応、祐斗ともう一人の聖剣使いの無事も分かった事だし、イツセーを呼びましょう」

リアスは携帯を開き、巧にメールで公園にいる事とイリナの状態を打ち込み、送信した。

匙はいきなりの展開に何が何だか、把握しきれておらず、申し訳なさそうにソーナに尋ねた。

「あの…今ってどうゆう状況に…ツツ!!」

質問の途中で胸に何かが突き刺さる寒気を覚える。

匙と同様の反応を小猫やアーシアも見せた。

ソーナとリアスと朱乃はこの寒気を一瞬で理解し、その元凶がいる方角に視線を重ねる。

「あらあらっ…見つかっちゃいましたね☆」

匙にとっては二回目の対面で小猫やアーシアはよく見知った顔。

フリードが並木の一本の影から姿を見せた。

ここまでのプレッシャーをフリードから感じた事に疑問を感じえないソーナ。

確かに実力はあるが、それでもあそこまでのプレッシャーを感じるほど歴然と差があるとも思えなかった。

「あらあら、気がついちゃいました?！」

不敵な笑みを浮かべ、自らの体を覆うコートを広げる。

その中に収められてある物を見て、ソーナは答えに辿り着いた。

「なるほど…あなたはいくつもの聖剣を所持しているんですね。だから、彼女を圧倒できた」

「いや、あのツインテールのお姉さんから擬態の聖剣を頂いたのは俺様ですが、今は戦うつもりはナツシンググツ!!」

好戦的な性格のフリードらしからぬ行動。

両手を挙げて、一応の降伏のポーズを見せる。

「まあ、お話があるんだわあ…うちのボスが」

空の色が変わった。

先ほどまで夕日が照らしていた街は見えなくなり、紫な青などが入り混じった色に変貌し、空に一人の男が浮かぶ。

「墮天使…」

「それに翼が10枚…幹部クラスですわ」

空に浮かぶ男はこの場にいる誰よりも大きな体を持ち、墮天使特有の黒い翼を両脇に5枚ずつ生やし、その存在の大きさを表していた。

「初めましてだな、リアス・グレモリー。我が名はコカビエル」

空に浮かんだコカビエルは口を開き、リアス達を見下ろした状態から薄ら笑いを浮かべる。

リアスもお返しと言わんばかりに勝気な笑みを浮かべ、返答に応じる。

「ええ、初めまして墮天使の幹部さん。それで、この地に一体何の目的で侵入したのかしら?」

ここで全ての謎を解き明かす、そのつもりでコカビエルに問う。

質問をされたコカビエルもリアスに知られても問題は無いと判断したのか、ただの気まぐれか、質問に答えた。

「一言で言えば、再び戦争を引き起こす為だ。取り敢えずはこの街で暴れさせてもらう。そうすればお前の兄、サーゼクスは出てこざるを得ないだろう」

何気なく答えたコカビエルにリアスは恐れを抱く。

そんな危険なことを軽々と口にして、実行に移そうとする目の前の墮天使に。

今、そんなことをすればどれほどの被害、そしてその先に待つ物をリアスは予感していた。

「確かに、そんなことをすれば…再び戦争が始まるわ。でも今度こそ、止められなくなる。人間も墮天使も天使も…悪魔も皆が滅びるわ」

言葉で止められる相手では無いと分かっていたが、一抹の望みを抱き、否定をする。

「そうか…なら、それも面白いだろう。俺は…ずっと退屈してたんだよ。アザゼルやシエムハザは戦争に乗り気ではなく、悪魔も今や平穏を望む魔王になり、天使は…」

突如、言葉を切ったコカビエルを首を傾げつつも、リアスは隣のソーナに視線を向ける。

冷や汗をかきながら、コカビエルの企みを聞き出そうと今度はソーナが質問を問い直そうとするも、それを消すようにコカビエルは強く宣言する。

「リアス・グレモリー、ソーナ・シトリー。貴様らの通う学び舎…たしか、駒王学園とだったな。そこを戦場の中心としよう。貴様らの通う学び舎だ…魔力が立ち込め、心地よい混沌が楽しめそうだ」

翼を広げながら、コカビエルは君の悪い笑みを浮かべる。

高笑いをしていたコカビエルが突如、その笑いを止めて、何かを思いつくようにリアスに問いかける。

「リアス・グレモリー。貴様の眷属の…」

「やあああああ!!!」

高らかな叫びがコカビエルに届き、その音源を辿ろうと体を振り向くと自分に向かって右足を突き出し、まっすぐ突っ込んでくる仮面の戦士が目に見え込んでいた。

「…」

時を遡る事、数十分前。

祐斗とゼノヴィアとイリナを探す為に勢いよく部室を飛び出た巧であったが、その結果は芳しくない。

そんな状態が続いていた巧の元にリアスからのメールが届く。

学生ズボンに入っているフェイスフォンを取り出し、メールを確認するとイリナの発見と祐斗とゼノヴィアは無事であること、リアス達の現在地が書かれたメールを確認。

急いで巧もその場に向かった。

オートバジンの交通規制ギリギリまで飛ばし、リアス達のいる公園に向かうその途中。

巧は自らの目を疑った。

突如、自分の視界が捉えていた公園の周囲の空が青と紫の混じった色の何かに包まれたように見えた。

「くそっ…!」

ヘルメットに下で苦しそうに声を漏らす。

明らかに異常事態。

この時点で巧は交通規制のルールを破るほどのスピードでオートバジンを走らせていた。

オートバジンのエンジンにより、思わぬ速さで公園付近まで到着した巧だったが…巧の目の前で壁にぶつかった。

先ほど、明らかに何者かが細工し、リアス達のいる公園に奇妙な細工を施した事。

自分があるまま向かっていっても、無事に合流できるのかという物。

しかし、しかしなどと考える時間などないのだ。

この青紫の壁を破って行くしかない、結論付けた巧はオートバジンの後輪部分に留め具をしておいてあるナツプザックから、ファイズドライバーを腰に巻きつける。

5・5・5

いつも通りの変身コードをリズム良く入力。

Enterキーを押す。

『Standing By』

「変身」

いつもより静かに、ファイズフォンを胸の高さまで掲げ、呟くように言いながら、ファイズフォンをベルトに装填。

垂直となった携帯を真横に倒す。

『Complete』

フォトンブラッドが巧の体を覆う。

一瞬にしてファイズに変身を完了させる。

そのまま流れるように、オートバジンに跨り、勢いよくその場から発進。

スピードを加速させ、青紫の壁を打ち壊しながら公園への侵入を完了させた。

ファイズは閉ざされた空間の中で最も大きなプレッシャーを侵入して一秒も立たぬ間を感じ取った。

迷いなど生まれない、ファイズは相棒と共に大きなプレッシャーの持ち主の元に向かっていく。

「あれ…かよ」

ファイズは大きなプレッシャーの持ち主を見つけ出し、それが空に浮かぶ黒い羽を持った存在。

墮天使である事を把握したが、以前倒したレイナーレとは格が違うなどこの距離でも分かっていた。

恐らく、強化形態なしの今の現状で勝つ事は難しい。

巧の頭にはオルフェノクの実力者が集められたグループ、ラッキークローバーの面々が浮かび上がる。

少なくとも、あのクラスの実力者である事は覚悟しなければならぬ。

しかも攻撃の破壊力では目の前の存在が圧倒的に強い。

それらの点から、巧が有効な手として考えたのは背後からのクリムゾンスマッシュだけだった。

『Battle mode』

状況を伺っていたオートバジンも意志を持って、変形。

そのままジェット噴射を行い、ファイズの土台になる事にした。

『Ready』

『Exceed Charge』

ミッションメモリーを腰に付けてあるファイズポインターに装填し、右足に取り付ける。

真横に倒されたファイズフォンを開き、Enterキーを押す。

フォトンブラッドが体のラインを伝わり、右足に収束され、溜まりきったところでスタートを切り、その場から疾走。

「はあー！」

加速をつけたところで、跳躍。

オートバジンの浮遊している地点まで悠々と到着し、鋼鉄の相棒を踏み切り板の様に勢いをつけるために踏み、再び空高く跳躍。

空中で一回転し、ファイズポインターから赤い光、ポインティングマーカが飛び出る。

それは背中を向けたコカビエルの体を到着し、円錐状に形を広げる。

そして

「やあああああ!!!」

ファイズの攻撃がコカビエルに牙を向く。

「この力…。そうか貴様が『ファイズ』だなあ！」

コカビエルへの後ろからの奇襲。

現時点での最強必殺、クリムゾンスマッシュでの攻撃はポイントイングマークをつける時点までは成功の色を見せていたが、やはり歴戦の墮天使の名は伊達ではなかった。

「うらああああ!!!」

背後にいるファイズの必殺キックを墮天使の生み出す光の槍を盾として活用させ、真っ向から捻り潰そうとした。

声を上げ、気合いを入れ直す。

赤い光と金色の光が互いを飲み込まんとする勢いで発光し、巨大な爆発が発生。

ファイズとコカビエルはその爆発に飲み込まれた。

届く想い

「イツセー!!」

リアスは、目の前で起きた爆発の中心にいる少年の名を叫んだ。周囲にいたメンバーは、叫びこそしないが言葉を失う。爆発から数秒が経った頃、爆発の煙の中からベルトと少年——巧が吹き飛んで来る。「うっー」

地面に叩きつけられ、痛みが現れているのが表情からも伺える。そんな彼から少し離れた所に、ファイズドライバーとファイズフォンが転がっている。あの爆発の際にベルトが外れて、変身が解除してしまい、巧の体は生身の状態に戻ってしまった。リアスやアーシアは、巧にすぐさま近寄る。

「イツセー!大丈夫?」

「すぐに治しますから!!」

「いや、いい。…それよりも、アイツは」

アイツ。巧の視線の先に居たのは、翼を広げたコカビエル。しかし、その様子は巧とは異なる。多少の傷と服の乱れだけが見受けられただけだった。

それは、つまり。

巧の不意打ちは、失敗に終わったのだ。

「気落ちするな、ファイズよ。あの女から聞いた以上だ。何百年振りだよ。この俺が、肝を冷やしたのは。貴様の攻撃を受けた瞬間、戦争を思い出した。…そうだ、これこそが俺の求めているものだッ!闘争、殺戮…その果てにある勝利。ああ…心地がいいぞ。お前なら、俺を満たしてくれるかもなあ、ファイズ」

目の前の戦いを、純粹に——心底楽しんでいた。この男は、殺しに魅了されたのではなく、闘争。自分の全てをぶつけ、そして勝利する。その心地よさに魅了された墮天使。

それが、コカビエル。

過去の大戦で、魔王や神との戦いを生き残った存在。

そんな存在を前に、巧は尚も立ち上がる。

「さあな。お前の気持ち悪い戦闘趣味に付き合うつもりはないね」

「…ふっ。聞いていた通りの男だ」

もはや威圧感すら感じられるコカビエルの視線に、アーシアは崩れ落ちそうになるが、それでも隣の巧を支えんとし…共に、コカビエルをしつかりとその目で捉える。

否、その場に居る者が、巧同様にコカビエルを睨みつける。勿論、絶対にはめるといふ決意の籠る瞳だ。

「面白い。魔王の妹たちよ、そしてその眷属共!!そんな目をして居るならば、俺を止めてみろ!戦場に来ることができたならば!」

そう言い残して、コカビエルは姿を消した。その瞬間、紫と青の入り混じった様な色だった空は、オレンジ色の空へ。奇妙な空間から、本当の駒王町に戻った事を示す。

「リアス。…私たちも早く学園に」

「そうね。みんな、魔法陣で…って、どうしたのイツセー」

ソーナとリアスが、その場に居る全員を集めて、魔法陣での移動を試みようとしたが、巧はその声を無視した。一人、公園の森林方向に視線を向ける。その表情は、嫌な予感が当たってしまった、といった表情。

巧は、コカビエルの言葉を思い出して、周囲を警戒した。そして、気付いた。リアスやソーナは、コカビエルの襲来と学園…いや、街の危機に少し集中を欠き、気付かなかった。

自分達の周囲を覆う程の何かの気配を。

「会長!!」

匙は、それを目の前にして、思わずソーナの名前を呼ぶ。振り向いたソーナ、いやその場にいた全員…巧を除いた…が驚愕。

その視線の先には、自身たちに迫り来る何十体ものオルフェノク。

「……」

リアスから話を聞いていたソーナは、その迫力と誤魔化しの効かない存在感に息を飲む。その場に居た全員が、一瞬気圧されるものの、次の瞬間にはスイッチを切り替え、一戦闘態勢に。

けれど、そんな皆を巧は止めた。

「お前らは、先に行け」

それは、この街に向かうかもしれない50体以上のオルフェノクを自分が引き受ける、という言葉だ。

「ダメよ、一人じゃ危険すぎる」

「それじゃ、アイツの思うツボじゃねえのかよ」

ここでリアスは巧の真意に気づく。

このオルフェノクが、自分たち…ひいては、街に向かう可能性を考えれば、ここで食い止めるのは必須。けれど、彼らに時間と人員は割けない。

だからこそ、自分が一人で残り、他のメンバーを学園に行かせる。それでもコカビエル相手にどこまで通用するかは、分からない。

「分かったわ。…なら、イツセー。絶対に帰ってきていいわね」

「ああ」

リアスの言葉に、短いけれど力強く、確かに巧は答えた。隣にいたアーシアは、そっとファイズドライバーとファイズフォンを差し出す。

いつもと変わらない優しい笑顔で。

「イツセーさん、先に待ってます」

小さくうなづいて、アーシアから受け取ったドライバーを腰に勢いよく巻きつけて、ファイズフォンを開く。いつもの様にコードを入力。

『Standying By』

「変身ッ！」

『Complette』

すぐさまファイズへ変身を完了させて、リアスとソーナに目線方向を向ける。ソーナを中心に、メンバーが集まり移動用の魔法陣を展開させる。一瞬のうちに彼らは学園へと向かう。

後は、自分の役目だ。ここで、街へ向かうであろうオルフェノクを倒す。

「ふう…」

仮面の下で、一呼吸。ここからは、自分がいかに早くこの敵らを倒し、彼らに合流出来るかだ。

今、自分のやるべき事を、しっかりと確認してからファイズはいつも通りに右手をスナップをさせる。カシャという音と共にファイズは勢いよく、オルフェノクの群れに突貫していった。

「リアス…」

ソーナは、目の前で俯く友人にどんな言葉を掛ければいいのか分からずにいた。

オルフェノク。ソーナは、その存在をリアスから話だけは聞いていた。けれども、その存在は何処か空想上の生き物について語られている気だった。

たった数分前に目撃した存在は、ソーナの認識を根底から変えていた。目の前に現れた存在の放つプレッシャーは、悪魔の持つ魔力と違ったものとは異なる。それでも、気圧されてしまった。

そんな敵の集団に、たった一人で立ち向かおうとした巧にも負けないくらいに驚愕はしていたが。

「…ふう。ごめんなさい、ソーナ。それで、学園の状況は？」

下を俯いていたリアスも何とか心の整理をつけたのか、覚悟を決めた顔つきで、ソーナに訊ねる。そんな親友の様子を見て、一安心してから伝えるべき情報を言葉にした。

「紫藤イリナさんの保護を確認した後に、コカビエルの存在を感知した使い魔からの情報で、私の下僕が学園に結界を張りました。しかし、あのコカビエルになると被害は免れません。…堪え難い事です

が」

「どうしようもない事実には、唇を噛み締めるソーナ。」

「彼女は悔しかった。自分の愛する学園を戦場にしてしまった事が。そんなソーナの心境を慮り、リアスも掛ける言葉を探す。」

「ソーナ。……悔しいけれど、お兄様に……いえ、魔王サーゼクス様に頼りましょう」

「……っ!?分かりました。私からもお願いします。サーゼクス様なら、私の所より話がいよいよでしょうから」

リアスの提案に一瞬の驚きを見せるものの、その判断を肯定。ソーナも同様の考えを示した。リアスは朱乃に視線を向ける。朱乃もまた王の考えを受け止め、その場を離れる。

「リアス、これからは私は学園を覆う結界を張る方に回ります」

「ええ。分かっているわ……私達が時間を稼ぐ」

親友二人は、それ以上の言葉を交わさずにお互いに背を向けるように歩き出す。

言葉にせずとも分かっていた。お互いが何をすべきなのかを。

「朱乃、魔王様への連絡は？」

「繋がりました。魔王様の部隊は1時間で到着されるようです」

1時間。それは、今の状況を鑑みればあまりにも辛く、長い。こっちの戦力は、回復役であるアシアを除いて3人。それも騎士の祐斗と――最大の希望の巧を欠いている。それでも、祐斗も巧も、死んだ訳ではない。そう、まだ希望は消えてない。

「……小猫、どうしたの？」

コカビエルが待ち構えている校舎に向かおうとするリアスの目に、小猫が映り込んだ。

緊張と不安の入り混じった表情を浮かべていた。

「私……イツセー先輩に、酷い事を言っちゃいました。……結局、謝れませんでした。それなのに、また先輩に頼って……」

「…私もよ。私も王なのに、イツセーに頼ってしまった。困らせてしまった。だから、謝りましょう。この戦いを生き残って」

小猫を、後ろから抱きしめる。口にした言葉は、小猫にもそしてリアス自身にも向けられてるのかもしれない。そんな事を思いながら、リアスの指は小猫の白く柔らかな髪をゆつくりと撫でる。

「さあ、行きましょう。私達の学園を守るために！」

4人の少女は並び立ち、校庭へと向かっていく。

この学園を、そしてこの街に住まう人々を守り抜く為に――

「ああああ、負け戦に本気になっちゃって」

フリード・セルゼンは、目の前の光景を静かに嗤った。駒王学園の校庭の中心部分には、彼ともう一人の男性――バルパー・ガリレイが居た。彼らの足元からは、眩しい光が発光。

強い光の元に4本の聖剣――エクスカリバーが並び立ち、その時を待っていた。

「もう少しだ。もう少しで私の悲願は達成される」

そう言ったバルパーの瞳には、純粋に夢を追う者の光がある。…その為に多くの命を犠牲にした事を抜きに考えれば、この男は夢に、理想に生きた男なのかもしれない。

いや、この男は夢に呪われてしまったのだ。

悪魔を滅する正義の剣――聖剣を、自分は使えない。それならば、使える者を生み出そう。その為に、多くの命を犠牲にした。

夢に呪われた男の隣で、冷めた目で戦場を見つめる。

「ああああ、お仲間が二人も増えたみたいですね。…っ。また、出てきやがった」

空高い場所に浮かんだ玉座に座したコカビエルの放った地獄の番犬――ケルベロスと戦うリアス達。当初は、四人だったがいつのまに

か、二人増えていた。

フリードは、合流した一人ーゼノヴィアを視界に捉えた瞬間に、この数日間で何度目かの頭痛に襲われる。膝から崩れ落ちそうになるも何とかその場で耐える。

「あのビッチがそんなに大切ですかい」

ー黙れ…。お前は、消えろ

頭の中に響く、もう一人の声。いや、この体の本当の人格の声。

「ほお、まだ抵抗する気力があるか。あれから薬を投与したが、余程あの娘…ゼノヴィアとやらが大切らしい」

その隣にいたバルパーは、感心した様な声こそ出すがその目に優しさはない。

「へえ…。そんなじゃ、あの聖剣のお嬢さんを斬り殺したら、コイツもいい加減にしてくれちやうでございますか?」

愉悅に満ちた笑みを浮かべるフリードの背後から、より一層の強い光が。その意味を理解するバルパーは、大きく笑った。

「完成だっ!! 4本のエクスカリバーは、今、一つになったッ!! 行け、フリード。あの小娘を殺し、お前がその体を手にしろっ!」

バルパーの残酷な指令に、フリードは彼に負けない歪んだ笑顔で応じる。

「はいヨオ。バルパーのおじさん」

「はあああ!!!」

気合いと共に、ゼノヴィアはエクスカリバー・ディストラクションの聖剣を振り下ろす。

文字通りの破壊力を見せつけて、ゼノヴィアの目の前にいたケルベロスのの一体は、胴体を切り裂かれて絶命。

彼女は、コカビエルに襲撃された際に何とか難を逃れ、街の外れにいた。けれど、駒王学園を中心に流れる不穏なオーラを感じて、その場に向かって、リアス達との共闘を決めた。神の信徒として、なんて言ってる場合ではなかった。目の前の敵を倒す為ならば、と覚悟を決

めて彼女は聖剣を振るう。

魔物に対して絶大な攻撃力を持つエクスカリバーを持つゼノヴィアではあるが、他のメンバーは異なる。加勢の為にも次の敵を探そうと周囲を見渡す。しかし既にコカビエルの放ったケルベロス達は、全滅していた。ならば残る敵は――。

「危ないっ！」

「――っ!!」

突然、嫌な気配を感じて背後に向けて全力で聖剣を振るう。それと同時にリアスの声が聞こえた。振り向くように難いだ聖剣は、キイイインという金属音と共に止まった。

「あら、いい反応しちゃてるなあ。ゼノヴィアちゃん☆」

「黙れえ…!!お前は、一体何者なんだっ！一体なぜ、アレンと同じ顔をしている!!」

ゼノヴィアの一撃は、受け止められた。同じエクスカリバーを持ったフリードによって。その表情は、余裕と愉しみに満ちていた。それがまたゼノヴィアの怒りと謎を駆り立てる。

――ゼノヴィア!!

彼女の頭の中に浮かんでくるのは、優しく微笑む幼馴染の姿。まだ幼かった自分の隣で微笑んでくれた少年。

「アレン…ねえ。もうそろそろ居なくなるよ。…あんたが死ぬからね！」

ゼノヴィアの視界から、フリードの姿は消えた。一瞬、呆気を取られて反応に遅れた。その一瞬だけで、今のフリードには十分過ぎた。

「…死ねえ…」

だが、背後から突き立てられたフリードの持つエクスカリバーがゼノヴィアの体を貫くことはなかった。

彼女の背中へ、何十本もの魔剣により守られていたからだ。

「悪いが、君の持つその剣を…破壊させてもらう」

フリードの視界に映るのは、後から合流したもう一人の存在――木場祐斗。

聖剣を…エクスカリバーの破壊という夢に呪われた少年だった。

「木場…祐斗…」

一瞬、死を覚悟したゼノヴィアは、自分を守るようにフリードと向き合う少年の名を呟く。

しかし、彼の目は以前とは異なる色をしていた。ゼノヴィアの記憶の中にいる祐斗の瞳は、怒りと憎しみの入り混じった色をしていた。けれども、今の彼からはそんな物を微塵も感じなかった。

「何が、あつたんだ？」

「頭が冷えたのさ。……彼のおかげでね」

静かに微笑みながら、祐斗は神器により生み出した魔剣を握りしめて呼吸を整える。瞼を閉じて、頭に浮かぶのは実験の果てに命を落とした同志達の姿。

「君は、生きろっ！」

「早く、逃げるんだっ！」

毒ガスの影響もあり、一人…また一人と倒れていく。その中で、祐斗は仲間達の言葉と共にただ走り抜けた。…そして、生き残った。悪魔として。

「僕は…」

ずっと、分からなかった。彼らを犠牲にしてまで生き残った自分に出来る事は、復讐しかないと思っていた。けれど、今の仲間を悲しませたくはない。

「なあーに、しよぼくれてんのさいケメンくくんっ!!」

「…っっ!?!」

突如、視界前方に躍り出てきたフリードの一撃を、咄嗟に前に突き出した剣で受け止める。

キィイインという甲高い音が皇帝に鳴り響く。祐斗は、腕と足に力を込める。鏝迫り合いとなる両者。しかし、その表情はまるで正反対だ。

「この前の復讐鬼つぶりは、何処に行っちゃたのー??」

「…っ、黙れっ！」

言葉と共に、フリードの持つエクスカリバーは妖しく光る。その光に嫌悪感を露わにする表情と言葉を返す。

また、心がぐらつく。あの光を見ると、怒りと悲しみがこみ上げてきてならなかった。

あの光を求めた自分たちは命を落としてしまった。

どうする事が、彼らの為にも…リアス達の為にも、自分の為になるのだろうか。自分の選ぶべき道が分からない。

「だから、そんな顔して…俺の前に立ってんじゃねえっすよー!!」

今度は、背後からの横薙ぎの一撃を跳躍する事で躲し、地面に着地を決める。そして一瞬の間に地面を強く蹴りたてて、フリードとの距離を詰める。

「はああ!!」

「うひよよよい!!」

天閃の聖剣も取り込んでるエクスカリバーを持つフリードは、祐斗にも負けない速度を持つ。祐斗とほぼ同時に突進。

叫びと共に、交錯する二人。一瞬のすれ違いざまにお互いが最速の一撃を繰り出す。通り過ぎて、二人の距離はまた離れる。

「…くっそ…」

「あれれ。なまくら魔剣じゃ、この最高仕様のエクスカリバーちゃんには敵いませんぜ」

膝をついた祐斗の魔剣は、砕け折れた。対して、フリードの手にあるエクスカリバーは、傷一つなかった。

その事実には、祐斗は膝をつく以上の痛みを感じた。自分が、仲間の犠牲の果てに手にした力は、自分達を殺したエクスカリバーには勝てない。

「哀れなものだな。お前のその力では4本分のエクスカリバーを合わせたあの剣には勝てない」

「バルパー…ガルレイっ！」

膝をつく祐斗を嘲笑う様に、目の前に現れたのは初老の男性パーバルパー・ガルレイ。祐斗の目は、複雑といった色をしていた。目の前

の男が、自分達を殺した元凶。そんな男を前に何をすればいいのか、分からなかった。

「…悪魔になって、生き延びるとはな。……まあ、それでも貴様に渡した方が連中も喜ぶか」

そう言つて取り出したのは、青白い輝きを放つ宝石の様な物。祐斗はそれが最初は何か分からなかった。しかし、その石の放つ光は祐斗に懐かしさを覚えさせる。

「あの実験で死した者から取り出した聖剣を扱える様になる因子だ。これの発明により、今では多くの聖剣使いを量産出来た。しかしこれは今や殆ど残りカスの様な物だ。これから死する者へのせめてもの餞別だ」

バルパーはそう言つて、聖剣の因子を祐斗の足元にわざと投げける。コロコロと転がる因子をゆっくりと手を伸ばす。因子が放つ光を受けて、祐斗は彼らの存在を感じとる。

――怖がらないで。僕達が一緒だよ。

――僕達を、受け入れて

――神様が見てなくても…

――僕達の想いは、一緒だ。

祐斗の頭に流れ込んでくるのは、希望と優しさに満ちた声だった。周りを見れば、因子の放つ光で形作られた仲間達の姿があった。奇跡の様な現象に、祐斗は涙を堪えられない。

「まさか…いや、聖剣の因子に込められた想いが具現化したのか」

「…こんな奇跡が」

バルパーは、研究者らしく目の前の信じられない光景を科学的に解析しようと頭の中で計算を組み立てていた。

対して、ゼノヴィアは、目の前で起きる奇跡が神からの贈り物の様に捉えていた。

「祐斗…」

「こんな事も…いえ、きつと」

「綺麗…」

「聖歌が聞こえます」

悪魔の四人も、このあまりにもありえない光景を素直に受け止めて、アーシアは目に涙を浮かべ、静かに微笑む。リアスはそつと立ち上がり、彼の名前を呼ぶ。

「祐斗ッ！彼らの想いに応えてっ!!そして…あの聖剣を砕きなさいッ!!」

「リアス部長…」

主人の力強い叱咤を受けて、祐斗は覚悟を決めて、答えを見つけた。そんな表情を浮かべる。彼らの周りを囲む青白い人影は、ゆっくりと祐斗の元に集まり…彼に吸収されていく。

それは、まさしく同志と一つになった。その瞬間だった。

「僕は、もう二度と僕や…同志達のような人を生み出さない。その為に、貴方と貴方の生み出した剣を僕の…いや、僕達の生み出した剣で超えるっ!!」

その表情は、もう夢という呪いを振り切った男の顔。

「僕の魔と、仲間達の聖。それが、一つになった…聖魔剣」

祐斗は創造した剣を、構えてバルパーに向ける。後ろに後退しようとするバルパーの前に、またしてもフリードが躍り出る。

「ようやく振り切ってくれちゃって。まあ、その方が面白いですけどねえ〜」

笑顔を浮かべるフリードだが、その表情は、一瞬だけ崩れる。祐斗の隣にはゼノヴィアが立っていた。

「…戦えるのかい？」

「ああ。私達の共同戦線は、まだ生きてるからね。君にだけ、闘わせるわけにはいかない」

祐斗の言葉には、ゼノヴィアのフリードに対する動揺も含まれていた。詳しい事を知らないが、二人の間には何かある事は分かっていた。だからこそ、彼女がフリードと戦えるのが心配だった。けれど

も、それも杞憂に終わった。なぜなら、今の彼女からは、動揺の色は消えていたのだから。

「あれは、…壊さなければならぬ」

何を、とは聞かなかつた。二人は、それ以上は言葉を交わす事も無く、同時にフリードに向けて突貫した。

二人は同時に前に駆け出したが、悪魔でもある祐斗の方が、スピードでは分がある。ゼノヴィアよりも早く、フリードに接近した祐斗は、先制の一撃として真上からの振り下ろしを浴びせる。

「速い、な。でも、そんなんじや通用しないぜっ！」

「分かってるや」

これまでの攻防で、祐斗のスピードは、牽制にはなり得ない事を分かっていたので、この一撃目が避けられるのは分かっていた。後退して避けるフリードを、祐斗は深追いしない。むしろ、後ろに下がる祐斗にフリードは一瞬の疑問を抱く。

「…つつちっ！」

背後から迫る何かに咄嗟に反応。振り向きざまに聖剣を振るう。イリナから奪った擬態の聖剣の能力を駆使。剣の刀身が、鞭の様に伸びて背後にいるであろう敵に備える。その刀身に、エクスカリバー・トランスペアラ透明の聖剣の効果を上乘せ。見えない攻撃が、背後の敵を襲う、が。

「甘いっ!!」

ゼノヴィアは、気合いと共に己を襲う聖剣を自身の持つ破壊の聖剣で受け止める。高い金切り音を立てながらも、攻撃を受け流す。そのままフリードに向けて駆け抜ける。

「ちっ！」

舌打ちを響かせて、伸ばしきりのエクスカリバーを元の状態に戻して、距離を取ろうと避けようとするフリードに祐斗は突っ込む。

「これで…おわりだっ!!」

「くそ…がっ！」

咄嗟の一撃に、フリードも対応しきれなかった。せめてもの足掻きとして己の目の前にエクスカリバーを突き出す。

けれど、祐斗の気合いと共に放たれた一撃は、エクスカリバーを正

面から斬り裂いた。

エクスカリバーが砕け散るその瞬間に、フリードローいや、本来の人格であるアレンは静かに微笑み、祐斗に言った。

「ありがとう」

そう言い残し、地面に倒れこむ。呼吸を整えながら、地面に倒れるフリードに疑問を抱きつつも、祐斗は自分が握る剣に…祈る様に呟く。

「僕達の想いは、エクスカリバーを超えたんだ」

「祐斗…」

リアスは、自身の過去に巻きつく呪いを振り切った騎士の姿に、どう言葉を付ければいいのか分からなかった。これで一段落…とは、いかない状況だったが。

「ハッハッハッ!!!まさか、4本分の力を合わせ持つエクスカリバーを超えるとはな。これは、予想外だ。面白い、面白いぞ!」

上空にて座すコカビエルは、高笑いを響かせる。無論、その様子からは圧倒的な強さゆえの余裕が見えた。

「あ、ありえん。いくら被験者たちの因子を取り込んだとはいえ、所詮は残りカス。4本分のエクスカリバーを超えることなど…。いや、奴は自身の剣を聖魔剣といった。聖と魔のバランスが崩れていたのなら」

コカビエルとは対照的に、バルパーは、祐斗の勝利が自身の立てた計画に大きな影響を与えたとして目に見える動揺を露わにしていた。その時、バルパーの胸に光が走った。

文字通り、墮天使の光の矢が彼の体を貫いたのだから。

「えっ…?!」

あまりにも呆気なく、バルパー・ガリレイという男は、この世を去った。

「お前は、知りすぎた。まだその秘密は漏らす訳にはいかなくてな」

特に悪びれる事もなく、コカビエルはそう言って玉座から降り、ゆっくりと地面に降り立った。

「どうした、リアス・グレモリー。聖魔剣の小僧。俺の首を獲りにこないのか？」

二人も…いや、朱乃や小猫やゼノヴィアも戦闘態勢を取っていた。回復役であるアーシアも己を奮い立たせていた。けれど、そんな努力が無駄に思えるほどのプレッシャーを目の前の墮天使は放っていた。攻める様子を見せないリアス達に痺れを切らして、コカビエルは攻めなければならぬ理由を伝える。

「お前達にいい事を教えてやる。先ほどのバルパーが使っていた、エクスカリバーの融合。その際に起こるエネルギーは、全てこの街に還る。つまりは、この街は崩壊するという事だ。時間は後、三十分。止める方法は、ただ一つ。…俺を倒す事だ」

その発言を聞いて、その場にいた全員は息を飲む。魔王の援軍も、間に合わない。つまり、ここにいる者達だけでコカビエルを倒さなければならぬ。

理解した時、リアスは悪魔の羽を広げ、滅びの魔力を手に纏う。

コカビエルに攻撃を開始しようとした時――。

一つの音が聞こえた。

聞こえた音は――バイクのエンジン音。

『リアス、彼が…到着しました』

「ええ、そのようね」

小型の会話用の魔法陣が、リアスの右耳の隣に展開。彼の到着を伝

える。

リアスの目に飛び込んで来たのは、銀色のバイクに跨る青年。

乾巧の姿だった。

繋がる心

「ようやく来たな、ファイズ」

太々しい顔の巧を見て、コカビエルは三日月のように口元を曲げる。その笑みは、安らぎを与えるものとは程遠い。むしろ、相手に恐怖を、その先にある死を想起させる冷たい笑みだ。

「イツセー、良かった無事で」

「…ああ。なんとかな」

バジンを降りた巧に、リアスは駆け寄って声を掛ける。制服の汚れや頬に傷があり、先程の戦いの影響が全くないとは言えない状態なのは分かった。

「…ごめんなさい、また貴方を頼る様な事になって」

「お前は、そんな事言うキャラじゃねえだろ。いつもみたいに、偉そうにしてろ」

相変わらずの巧に、こんな状況なのに笑みが溢れてしまう。それは、リアスだけではない。

「イツセー君、…：僕は」

「答えを、見つけたのか」

「うん。…君が、気付かせてくれた」

「別に、そんな事しちやいないさ。…お前が、見つけたんだ」

男子二人の、短い言葉。どうやら男という生き物は、そういう物らしい。女子であるリアスは二人を眺めて、そんな事を思った。

「さあ、私の可愛い下僕達。…コカビエルを倒して、この街を、私達の大切なこの学園を守りましょうっ！」

眷属達は、主人の言葉に力強く頷く。巧も、ファイズファンに変身コードを入力。いつもよりも、力強く、高らかに叫ぶ。

『Stand bying By』

「変身ツツ!!」

『Complete』

超金属の戦士ーファイズは、いつも通り右手をスナップ。真っ先

にコカビエルに向けて、駆け出した。

「ほお、来るか…面白いっ!!」

この状況は、コカビエルにとつて嬉しい誤算だった。ファイズー巧のみならず、リアスやゼノヴィアといった者達も戦うのだから。

「余興相手には十分だっ!」

無論、ここで終わるつもりはない。むしろ、彼の楽しみはここから先にあつた。再びこの世界を、破壊と混沌の満ちた戦場へ。その為に教会の持つエクスカリバーを奪い、魔王の身内であるリアスとソーナの居るこの街を余興の舞台に選んだのだから。

「はあっ!」

真つ先に、コカビエルの眼前に飛び込んで来たのはファイズ。コカビエルは気合いと共に放たれた拳を片手で難なく受け止める。その時に感じ取るのは、ファイズ、いや巧の拳の重さだ。ただ腕力に身を任せた一撃ではない。そこには戦いの技術であつたり、何よりも巧の意思が込められていた。

「いい一撃だ。…だが、これだけでは足りんっ!!」

空いた片手で、光の槍を創生。カウンターの一撃をあびせようとするコカビエルの頭上を何かが通り過ぎる。

「…えいつ」

白髪の少女、小猫がコカビエルの背中を拳で連打で浴びせる。もちろん、ファイズよりも力も弱い。ダメージとは言い難いが、それでも十分だった。

ファイズが連打を撃ち込むには。

「らあっ!」

「ぐっ!」

下から掬い上げるように、ファイズの左アッパーはあごを捉える。そこからインターバルを空けずに、右ストレートが鳩尾を襲う。背後にいた小猫も既に距離を取っていた為に、僅かながらに後ろへ後退。

すぐに、集中を取り戻そうと刺激をかき消さんと脳の指令が届く、そのコンマ数秒を、二人の剣士は見逃さない。

「はあっ!!」

「喰らえっー!」

聖剣と聖魔剣の同時攻撃。コカビエルの着ていたコートを斬り裂き、その下にある肌にうつすらと切り傷を残す。

二人の剣士ー祐斗とゼノヴィアも、コカビエルの一撃に警戒し、深追いを避ける。

攻撃こそ仕掛けていないが、リアスと朱乃も、コカビエルに向けていつでも一撃を放てる状態だ。その二人の後ろに、回復役のアーシアは気丈に立っていた。

「……まさか、ガキだけで、俺に勝とうとしているのか?」

僅か数十秒の攻防。それだけで、コカビエルの墮天使としての…戦士としてのプライドは大きく傷つけられた。

自身と敵対する者に、恐怖を抱くものは誰も居ない。

「…ならば、壊してみろ、この俺をつ!!」

叫びと共に、背中から計10枚の翼を大きく広げる。墨のような黒に一瞬、目を奪われかけた小猫の目の前に突如、コカビエルが。

「小猫っ!!」

「「小猫ちゃん!!」」

リアスと朱乃は魔力を練り上げ、ファイズと祐斗とゼノヴィアは、小猫を守る為に、その場から駆け出す。

コカビエルの標的となった小猫は、懐に飛び込み、拳を打ち込もうと飛び出す。

けれど、それよりも一瞬早く。コカビエルが光の槍を小猫に向けて振り上げた時だった。

『Battle Mode』

巧にはとても聞き慣れた音声。けれど、コカビエルにとっては聞き慣れない音。一瞬、目を奪われたと同時に。

ファイズを超える馬力を持った銀色のスーパーマシンの拳がコカ

ビエルの顔に叩き込まれた。

「な、なんだ…」

「コカビエルの眼前には、小猫を守るように立ちふさがるオートバジンの姿が。」

「ありがとう、バジン君」

少しばかりの笑顔を見せ、バジンもまた力強いサムズアップで応える。

『Ready』

バジンの隣に立ったファイズは、ファイズフォンからミツシヨンメモリーを抜き取り、左ハンドルの窪みに換装。掴んだそれを一気に引き抜く。そして高熱を帯びた光剣―ファイズエッジが、紅く光る。

「全く面白い男だよ。兵藤一誠は」

「…うん、僕もそう思う」

微かに笑ったゼノヴィアは、破壊の聖剣を地面に突き刺す。突然の行動に祐斗は疑問の表情を浮かべる。

「彼にだけ任せるのが嫌になってきた」

「えっ?」

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

何かの呪文らしき物を唱え続けるゼノヴィアの隣に、歪みが生まれる。空間の歪みは、何かを大きな物を取り出せるほどの大ききさへ。

「この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。デュランダル！」

歪みに手を入れてから、何秒か経ってから、歪みからはとてつもないプレッシャーをその場にいた全員が感じ取った。

そして、そのプレッシャーは、形となって現れる。

「デュランダル…だどっ!?!」

コカビエルが最も早く反応した。その顔には、なにやら拭いきれない悔しさを滲ませていた。

「エクスカリバーに並ぶ聖剣の一本よ。…つまり彼女は」

「ああ、私はイリナや他の聖剣使いとは違って、天然物さ」

と、皆が驚く中でも巧はあまり凄さを飲み込めてはいなかった。しかし、ゼノヴィアの持つ剣から放たれるプレッシャーを素直に認めてはいた。

「兵藤一誠。悪魔である君にだけ任せるわけにはいかないんでね。神の信徒として、聖剣使いとしてね」

「それは、僕のセリフでもあるよ」

祐斗、ゼノヴィアがファイズと共に並び立つ。小猫もバジンと共に構える。リアスと朱乃は、いつでも援護射撃を放てるように警戒を怠らない。アーシアも、すぐに回復に移れるように集中力を切らさない。

「…神…か。くくく…っ」

それでも、コカビエルはその上をいった。

黒い翼を広げ、低空飛行。その速度についてこれたのはファイズのみ。

ファイズは祐斗もゼノヴィアも気づかない速度で、皆の前に躍り出る。一瞬遅く響いたのは、金切り音。

「…くっ！」

「いいぞ、いい反応だっ！」

二人の視線の先にいたのは、コカビエルの一撃をファイズエッジで受け止めるファイズ。けれど、ファイズ…巧は、仮面の下で苦しげに息をする。

…強いつ…!!

以前戦ったレイナーリーダーダウンフォールオルフェノクとは、レベルが違う。

たった一撃を受けただけで、それを痛感。この男を、あと30分程度で仕留めなければならぬ事実には、肩が重くなりそうだった。それでも、諦めるなど選択肢にはない。

それは、この場にいる全員が。

「はあっ!!」

「雷よっ!!」

リアスの滅びの魔力と朱乃の雷がコカビエルを背後から襲う。邪魔者を払うかのように翼を動かして攻撃を受け止める。勿論、ダメージが無いわけでない。それでも、手も足も使わずに攻撃を受け止められた事に驚かざるを得ない二人。

「貴様らの父と兄の攻撃を知る者からすれば、今を受け止めるなど造作もない」

父…。巧は不思議に思っ、朱乃に視線を向ける。その表情は強い怒りを浮かべていた。

「私を…あの者と一緒にするなあああ!!」

怒りと共に、朱乃は悪魔の翼を広げる。そのまま地面を滑空して、低空飛行でコカビエルに突貫。朱乃を援護する為に祐斗とゼノヴィア、そして小猫も同様に前に飛び出す。

こちらに向かつてくる朱乃を見て、罅迫り合いを演じていたファイズだったが、咄嗟に後退。その一瞬後、5メートル程度の距離にまで朱乃は接近。そこから、最大威力の雷をコカビエルに向けた。

「はああ!!」

その声はさつきまでと違う。怒りと、憎しみの込められた声。声と共に放たれた雷を、軽く前に突き出した右手で受け止める。

「…っ!?!」

「俺は、お前の父親の雷を受け止めたことがある。まだ未熟な貴様の雷を受け止める事の何処が不思議なんだ」

数秒経つと、朱乃の魔力が底をついたのか、その場で膝をつく。呼吸も荒い。そんな朱乃を冷たく見下したまま、空いたもう片方の手を振り上げる。

その右手を、ゼノヴィアの一閃が捉えた。

「なにっ!?!」

「今回は、切れ味重視の攻撃をさせてもらおうっ!」

右手に注意を向けられたコカビエルは、己の背後に迫る敵を感知。咄嗟に振り返り、回し蹴りを浴びせる。背後にいた小猫は、そこから何十メートルも吹き飛ぶ。しかし、小猫をキツチリと受け止めているバジン。けれども敵の存在がまだゼロではなかった。振り返った正面には、聖魔剣を振り下ろす祐斗が。

「まだ…だっ！」

「小賢しいぞ…雑魚共がっっ!!」

光の槍で、聖魔剣を受けながら、それを受け流しカウンターの一撃をあげせようとするも、再度腕に軽い衝撃が走る。振り向くとそこには祐斗の背後から魔力を放ったリアスの姿が。

「リアス・グレモリー…っっ!!」

「まだ私で終わりにゃないわ!!」

まだ、終わらない。その言葉通りにこの連携の中心人物が、コカビエルの死角ー上空から、一番強い敵の存在が。

「やあああ!!!」

「ファイズウウウツ!!」

両者の雄叫びが、校庭に響く。上空に飛び出したコカビエルの光の槍。ファイズの握るファイズエッジが衝突。赤と黄色の二色の火花が咲いた。

何秒間の衝突の後、ファイズとコカビエルはお互いの攻撃の衝撃により吹き飛ばされる。地面に倒れるファイズに駆け寄る仲間達。そこには、本来は敵である聖剣使いーゼノヴィアも加わっていた。この不思議な光景に、コカビエルは笑いを堪えきれなかった。

「それにしても、聖剣使いが悪魔と共闘か。今は居ない神が知れば、随分と呆れることだろうよ」

「神が、居ない…? どういう意味だコカビエル!」

神について、違和感を感じる一言を口に出され、ゼノヴィアは我慢する事もなく、叫びながら訊ねる。

しかしコカビエルの口から返ってきたのは、答えではなく嘲笑だっ

た。

「ハツハツハツ！本当に何も知らない様だな。貴様も」

「何を…だっ！」

笑いを止めたコカビエルは哀れむ様に、ゼノヴィアと小猫を治療するアーシアを見て、彼女達にとつて受け入れがたい真実を言い放つた。

「先の大戦で、四大魔王のみならず…神も死んだのさ。この事実を知るは、各勢力の上層部だけ。…魔王や神の死により、戦争は中断。そしてこの時からの均衡は、今も保たれたままなのさ」

コカビエルの口にした真実に、二人は。

「何を…言ってるんだ…??主が、神が居ない…だと?」

握っていたデュランダルを、地面に放り捨てて、その場で膝から崩れ落ちる。

「主がもう、いらっしやらない。……っ」

小猫の治療を、突然止める。小猫は、それを疑問に思わなかった。元シスターであるアーシアにこの事実は酷すぎた。そつと、倒れそうになるアーシアの体を支える。

二人のみならず、祐斗や朱乃やリアスも驚きに包まれていた。そんな中で、アーシアは小猫の力を借りながらも、コカビエルに訊ねた。「それをどうして…私達に」

「お前達は前座だ。まずは魔王の身内とその眷属の首を土産に冥界に…いや、悪魔共に再び宣戦布告！そして、教会…天使や信徒達にお前達と同じ事実を叩きつける！そうすれば、均衡は崩れ…再び戦争が始まる。そして、堕天使が勝つツツ!!戦争が始まれば、二度目の戦争は無いと言ってたアザゼルもシエムハザも動かざるを得ないだろうからな」

コカビエルの野心を聞き、リアスは立ち上がり、尚も訊ねた。

「何故、そうまでして戦争を求めるの!?そんな事になれば、三大勢力だけじゃない…人間にも影響が出るわ!」

ファイズは、チラリとリアスを見やる。横顔からも分かる必死さに

巧は言葉が見つからない。

「あの戦争時…多くの墮天使が死んだ。奴らは皆、墮天使こそが最強である事を信じていた。…だが、結果は停戦で決着がつかず、その上二度目の戦争もない。これでは、奴らの魂は眠るに眠れない筈だ。だからこそ、俺は天使も悪魔も全て捻り潰す事でようやく、奴らの墓前に最強という名の華を添えられると思った。その為だけに、俺は全てを捨ててきた」

巧は、コカビエルという一人の男の本質に触れた気がした。

「…こいつは…」

きつと、コカビエルにはこんな馬鹿な自分を慕ってくれた部下がいたのだろう。けれども、彼等は皆戦争により死んでいった。だからこそ、彼等の最後の願いを叶えようとしていたのだろう。

納得は、出来ない。けれど、全てを否定することはできない。少しだけ、理解出来た。いや理解できてしまった。

それでも、乾巧という男は…

「まだ、立ち上がるのか」

「ああ。…アンタを、止める」

コカビエルを止めなければこの街に住まう人が犠牲になる。その数だけ夢が潰えてしまう。

それは、それだけは見過ごせなかった。

ファイズエッジを構えるファイズの隣に、リアスが並び立つ。二人を中心に、祐斗、朱乃、小猫、アーシア、オートバジン、そしてゼノヴィアが並ぶ。

「行くぞ」

皆が、静かにそれを答える。

コカビエルは両手に光の槍を創生し、口元を緩める。

「お前達は、最高の前座だっ!!…だが、そろそろ幕引きの時間だな」

駒王町崩壊まで、あと15分を切っていた。

「うらっ！」

「…えいっ」

ファイズの思い一撃がコカビエルの顎を、小猫の細く鋭い蹴りが腹部を襲う。それらを受けても倒れる事はない。追撃のファイズエツジの一撃も光の槍で受け止める。

「ふんっ！」

コカビエルは上半身の捻りのみで光の槍を投擲。放たれた槍は、ファイズの仮面をスレスレに通る。一瞬遅れて、祐斗はその先にいる少女の名前を叫ぶ。

「アーシアさんっ!!」

コカビエルの狙いは、回復役のアーシア。動きも機敏ではないアーシアにこの一撃を避ける術はなかった。

しかし隣にはオートバジンがいる。オートバジンはアーシアを抱えて飛空し槍を避ける。二人のいた場所を通り過ぎた槍は、体育館に衝突し、爆発。体育館であった場所は崩壊。地面は深く抉れてさっきの一撃の重さを示していた。

「喰らえっ！」

「これなら、どうだっ！」

一撃を避けられたコカビエルの翼が二枚、斬り落とされる。祐斗とゼノヴィアの同時攻撃は見事成功。

「貴様らああー！」

翼を二枚斬り落とされたコカビエルは、自身の肩を掴んで逃げる事を許さなかったファイズを強く睨む。

そこから、ファイズは肘の力のみで繰り出される拳を頬に叩き込む。けれど、対するコカビエルもサンドバックになどなっていないかった。五発目を打ち込もうとするファイズの胸部を、一瞬で創生した光の槍で突き立てて反撃。体勢を崩す所に追い打ちの前蹴りを喰らわす。腹部を捉えた蹴りによって、吹き飛ぶファイズ。そこを好機として、前に飛び出そうとするコカビエルの前に朱乃とリアスが立ち塞がる。

「彼の所へは」

「行かせないっ!!」

二人は、互いの最大出力を迷う事なく絞り出す。この男を止めるには最大の攻撃ですら、足りない。

朱乃とリアスの魔力が、混ざりたいながらコカビエルを襲う。

「小賢しいっ!!」

前に突き出した両手で、巨大な雷と赤黒い滅びの魔力を受け止める。手からは、軽く血が漏れ出し、ダメージを与えるが足りない。

「…えい!」

魔力を受け止め続けるコカビエルの手を狙って、小猫は踵落としを放つ。

「…それで、俺を壊せる思ったか!」

「…くっ」

コカビエルはその一撃を読んでいたのか。魔力を受け止めていた両手を片手に切り替えて、空いた片手で小猫の足を掴む。凄まじい握力で掴まれた足は悲鳴をあげ、小猫の苦しい声が漏れだす。

「小猫ちゃんを…っ!」

「離せっ!」

小猫の救出の為に接近する祐斗とゼノヴィアに向けて、受け止めていた朱乃とリアスの魔力を跳ね返す。祐斗達は二人の魔力の強さを知る為に、互いの剣をにして受け止める。

「まずは一人…っ!」

「…あああっ!」

足を捻り潰さんと、更に込められた力に小猫の足は悲鳴をあげていた。その声は小さいがリアスと朱乃を動かすに十分だ。

悪魔の中でもグレモリーは、眷属に対する愛情が深い。その事を知るコカビエルの立てた策略。それに気づかず、コカビエルへ向かうリアス達。そんな彼女らに、一瞬で創生した光の槍を放つ。

コカビエルのクラスの光の槍ならば、一撃で殆どの…魔王や最上級は除くが…悪魔には致命傷になる。今までのコカビエルならば、ここで勝利の笑みを浮かべてしまうが、今は違っていた。

『Exceed Charge』

決して、油断できない男がまだ居るのだから。

ファイズの必殺の斬撃ースパークルカットは、コカビエルの放った光の槍を真つ二つに。そのまま、駆け出す。

「面白いっ!!来い、ファイズ!」

掴んでいた小猫を放り出し、コカビエルも駆け出す。

ぶつかり合う赤き閃光と黒。

「やああああ!!」

「死ねええええ!!」

下から突き上げる様に繰り出された光の槍と上から振り下ろされたスパークルカット。

これまでの斬撃とは異なり、金切り音ではない音が響く。

「ああああ!!」

せめぎ合う二つの光。周囲にいたりアス達もただ見守る事しかできない。

そして、決着が訪れた。

「俺の勝ちだ、ファイズっ!!」

「くっ…」

力と力のぶつかり合い。その軍配は、コカビエルに。力の押し合いに負けたファイズは、光の槍を下から突き上げられた為に上空へ。

「まだ…だっ!」

そこからの機転の利かせる。ファイズエッジに換装されたミッシンメモリーを抜き取り、腰のホルスターに入れてあるファイズショットへ。

かつてのラツキークローバーのマスターJを倒した時の、クリムゾンスマツシユから、グランインパクトへの繋がる必殺技のコンボ。

思い出した記憶と似たこの状況に、巧は希望を見出だす。

だが、あの時とは状況は異なっていた。

あの時のミスターJは、ファイズの一撃を受け止めた上で撥ね返そうとしていた。けれども、コカビエルはファイズの一撃の前にカウンターを繰り出そうとしている。これでは、不利なのはファイズ。

しかし、今の巧ーファイズにも共に戦う仲間がいる。

「彼の邪魔はさせないっ！」

「今だ、兵藤一誠!!」

カウンターを放とうとするコカビエルの脚を、二つの鋭い斬撃が切り裂く。

祐斗とゼノヴィアが、互いに最高の一撃を浴びせる。

「さっきのお返し、です」

「うふふ…そうですわね」

二つの斬撃により痛みを堪えるコカビエルの背中に撃ち込まれた鋭い蹴り、一瞬遅れて放たれた雷。

アーシアの治療を受けた小猫とやけにニコニコした朱乃。

「イツセー、お願いっ！」

リアスの滅びの魔力を、コカビエルの腹部へ。これまでのダメージもあるのか避ける事をせずにそれを受けた。

ここでようやく、コカビエルは膝をつく。

そして最後はー。

上空にいたファイズは、仲間の援護に素直に感謝していた。

ーありがとう、お前ら

落下し続けるファイズの体を、そつとオートバジンが受け止めた。

「お前…」

ヘッドライトの部分が点滅し、力強く頷く。

すると、突然ファイズをボールの様に強く放り投げた。

落下の速度に加えて、ファイズを超える臂力による投擲により、威力は倍増…いや、それ以上となっていた。

そしてそこに、アーシアの声援が届く。

「負けないで、イツセーさん！」

これは、もう負けるわけにはいかなかった。

『Exceed Charge』

ファイズファンを開いて、ENTERキーを押した。ベルトの縁から、赤いフオトンブラッドが、体のラインに沿ってファイズショットに伝わる。

ーあぁ。

アジアに向けた仮面の下で、少し笑って巧は頷いた。

「やぁあぁ!!!」

仲間達の最高の援護によるグランインパクトは、コカビエルの胸部に叩き込まれた。

放たれる一撃の瞬間。巧は、コカビエルが笑っていたのを見た。

ーまさか、俺が負ける気になるとはな。

それは、コカビエルの予想を遥かに上回る展開だった。

4本のエクスカリバーを合わせても、それを超える聖魔剣が生まれた。

自身の力を少しだけでも見せても、怯える事なく立ち向かう。

神の不在を知らせても、心を折らずに立ち上がる。

そして、あの強い意志。消して折れない黄金の精神。

「過去にしか目を向けない俺と、未来を守ろうとするお前たち…か」

敗北したというのに、コカビエルは最高の闘いが出来たという喜びから笑顔を零していた。

「お前の…いや、お前達の勝ちだ」

駒王町は、崩壊という運命を逃れた。

そして街には、いつも通りの夜明けの太陽が昇ろうとしていた。

コカビエルとの決戦から数日後。

巧は、昼休みに静かな校庭にいた。大きな木の下で天然芝生に寝転がり、日差しを浴びる。

数日前の鬨いが嘘の様だ、と思った。あの後、崩壊した校舎などを生徒会やようやく着いた魔王の援軍が修復したとリアスから聞き、一先ずは安心した。

勿論それだけではない。倒れないコカビエルを魔王軍が拘束、墮天使との取り決めでその身柄を引き渡し、然るべき措置を取った。

恐ろしい男だった。

巧一人では、決して勝てる様な相手ではなかった。

「俺は…あいつらを、守れるのか？」

これから先、あのレベルの敵がまた現れた時に、誰一人欠ける事なく乗り越えられるのか。そんな漠然とした不安が現れて、巧を飲み込もうとしていた。

「イツセーさん！一緒に、お昼を食べましょう」

聞こえたのはアーシアの声。

「おおーい、アーシアちゃんだけじゃなくて、ゼノヴィアちゃんも一緒にみたいだぞっ！」

「うおおお!!羨ましいぞ、イツセー！」

「いや、ゼノヴィアっちごめんね、このアホ二人も一緒に」

「とても愉快でいいじゃないか」

「そうだね、きつと」

巧に手を振るアーシアの後ろには、松田や元浜、桐生に祐斗。そしてゼノヴィアがいた。

コカビエルの撃退後、彼女はイリナと共に帰国する事は出来なかった。

その理由としては、神の不在を知ってしまったからだ。その事を教会に知られてしまった。その結果として彼女は異端に、そしてー教会を追放。行くあても無かったゼノヴィアを、リアスは眷属に勧誘した。

つまりは、今の彼女は悪魔で駒は騎士。転入生として巧とアーシア

のクラスに入り、どうやら友人も出来ている。その中でも、アーシアと一番親しくしている様子だ。

「おうっ」

自分を呼ぶ友人達の声に、小さくも確かに応えた。

今は、彼らの未来を、夢を守ることが出来た。

それだけで、十分だった。

「まさかこうなるとはね…」

「どうかしましたの、リアス？」

昼休みの旧校舎。巧と共に昼食を取ろうとしたが冥界から重要な知らせが来ると聞かされ、それを断念。知らせを待っていたリアスの元に魔法陣を介して、一枚のプリントが届けられる。その内容を見たリアスは、驚きに満ちた声を漏らす。その声に反応した朱乃が立ち上がる。

「これは…っ」

リアスから受け取ったプリントには、悪魔の用いる言語で書かれた文字が並べられていたが既にその言語を理解していた朱乃は、その内容をすぐ理解する。

プリントにはこう書かれていた。

要約――三大勢力のトップによる会談が開かれる。場所は駒王学園。

「どうしたんだ。随分と面白そうな顔をしているじゃないか」

「まあ、面白い物を預かったからな」

マンションの窓から見える月を着に、酒を飲む。巧の悪魔としての仕事の依頼人、お得意さんの男性は楽しそうに微笑む。その後ろには巧に義理の息子と紹介したヴァーリという少年。

「コカビエルが暴れたというのに、何故何もしなかったと各勢力から非難を浴びてとうとう頭がおかしくなったのかと思ったぞーアザゼル」

「おいおい、俺はあの坊主から逃げろって言われたんだぜ？その言うことを聞いたただけだ」

「ふん……。それにしても、あのコカビエルを倒すか…面白い」

それだけ言つて、ヴァーリはリビングを出た。

「……。ファイズ、兵藤一誠…か」

カシヤ、と小さな音が一人しかいないリビングに響く。男性ーアザゼルは、手のひらにあるデバイスを弄ぶ。

リストウオッチ型のデバイス、SB-555W。

もう一つの名前を、ファイズアクセル。

第4章 停止教室のヴァンパイア

彼女達が水着に着替えたら

「暑い…」

夏の到来。それを告げるように、空からは強く日差しが降り注ぐ。そんな太陽の下で、体操着姿の巧はボヤク。その他には掃除用のブラシを握りしめていた。

その理由は、駒王学園のプール掃除をオカルト研究部で担当することになったからだ。

話は一ヶ月以上前、コーコカビエル戦にまで遡る。あの時、基本的な戦いはオカルト研究部が担い、生徒会は学園の外に被害が及ばないように結界を貼り続けていた。そのおかげで、街の外には被害は無しという結果に終わる事ができた。しかも、その後の破壊された学園の修復を担当させてしまった為に、リアスがせめてものお礼として、プール掃除を担当する事にしたのだ。勿論その案に、オカルト研究部のメンバーは、コー巧を除いた全員がコー快諾した。

巧とて、生徒会のメンバーが何もしてないなど思っただけではない。むしろ、彼女らのお陰で被害がほぼゼロで済んだのだから。けれど、こんな休日に暑い日差しを浴びて、広いプールを掃除しなければならぬのもまた面倒だった。

「が、頑張りましたよ！ イッセーさん！ さらにこの後は遊べるんですから！」

「…ああ」

やけに気合が入ったアジアは、巧のやる気を引き出す様に応援する。けれど、暑い日差しが消える事もない為に、声からやる気は感じられない。それでも掃除する手は止めない。何だかんだで、律儀な男なのだ、乾巧は。

「そう言いながらも、キチンと掃除するのがイッセー君だよな」

「確かに。後、アジアには言動が3割増優しい」

「ツンデレなイッセー先輩ですから」

ニコニコとした笑顔で巧を評した祐斗とその隣で揶揄うゼノヴィア。最後に才チを作る小猫。強く睨むが、3人は特に反応を見せずにそのまま掃除を再開する。

巧は掃除を丁寧に行う小猫を見て、この前の小猫の謝罪を思い出す。

「ーごめんなさい、イツセー先輩。私、酷いこと言って

ー気にすんな、大した事じゃないさ

あの時の小猫は普段の落ち着いた様子ではなかった。年相応の、高校一年生らしい女の子がそこにいた。

「あら、小猫に熱い視線をむけて、どうしたの？」

「…んな訳ねえだろ」

後ろから囁くりアスに、デコピンをお見舞い。そして、掃除を再開し始めた。

「ありがとうございます、イツセー先輩」

「意外だな、お前が泳げないなんてな」

掃除をし終えたオカルト研究部の面々は、生徒会との約束通り、掃除し終えたプールを一番最初に使用していた。

そんな中で、巧は小猫の手を引いて水泳の指導をしていた。リアスからアーシアと小猫が泳げない事を聞いて、巧は驚いた。アーシアはともかく、戦闘中に機敏に動ける小猫と泳げないというのが繋がらなかったからだ。

謝罪の一件から、小猫は巧に対しては年下らしい振る舞いをー無意識なのかは分からないがー取っていた。

巧としてもそんな小猫を無下に扱うわけにもいかなかった。

「うう…。いや、小猫ちゃんは泳ぎを教えてもらってるだけなんです!!ああ…小猫ちゃんを疑う罪深い私をお許し下さい…はうう!」

プールサイドで頭痛に苦しむアーシアの隣で、苦笑したゼノヴィア

は彼女を介抱。少しすると何故か二人揃って神への祈りを。そしてまた頭痛に襲われる。巧から見ればコントの様な風景が繰り広げられていた。

「大丈夫ですかね」

「別にいいだろ、放っておいても」

二人の間には、全く険悪な雰囲気はない。その事を理解してるからこそ、放置という結論を出す。巧と小猫は、案外周りに目を向けるタイプなのであった。

「ねえ、イツセー君」

不意に掛けられた声。振り向けば、巧同様に水着姿の祐斗。彼のファンである女子生徒からしたら嬉しい姿であろう。

「何だよ」

「勝負しない？50メートル競争で。買った方がジュースの奢りって事で」

「…まあ、いいぜ」

比較的素直に巧は、この誘いに乗った。隣の小猫に頑張ってくださいと応援されれば、いよいよ負けられない。いや、元々乾巧は負けず嫌いな男なのだ。つまり、売られた勝負は買うタイプ。

「あら、面白そうね。じゃあ、私がスターターをやってもいいかしら？」

「なら、私は審判を」

どうやら、リアスや朱乃も二人の勝負に興味がある様で、ウキウキした様子でいた。

数分後には、準備は完了。スタート地点には、飛び込む姿勢の巧と祐斗がいた。

スターターのリアスは、勢いよく腕を振り上げた。

「スタートッ！」

リアスの声は、休日の駒王学園にとっても響き渡った。

「クソ…」

額から少しばかりの汗を流しながら、悪態をつく巧。彼らの前には、ゴクゴクと冷たいジュースを飲むリアス達の姿が。祐斗との勝負に負けてしまい、この暑い中一人で6人分のジュースを買ってきた。

「君のおかげで、美味しいジュースを飲めてよかったよ」

「皮肉かよ…」

プールサイドで座り込む巧の隣にゼノヴィアがお礼を告げに来る。水着姿のゼノヴィアは、普通の男子高校生なら唾を飲んでしまうほどのスタイルと美貌を誇っていた。

「この間は大変みたいだったらしいね」

「俺よりもあいつだろ。大変なのは」

大変、そう言つて巧はリアスに目を向けた。

この間、というのは一週間ほど前に起きた一件を指す。

巧のお得意様でもあった男性が自ら墮天使の総督ーアザゼルと正体を明かしたのだ。

しかし巧は全く動揺を見せなかった。

『そうか』

正体を明かしたアザゼルに、そう一言だけ返した。

以前からこの男性が只者ではない事を察していた。巧の人生経験や、オルフェノクとしての感覚がそれを感じ取っていた。そして、決め手となったのはコカビエルとの一戦。あの戦いで巧が感じた墮天使としての巨大な力。自身のお得意様でもある男性からも同質のものを感じていた。

故に、納得した様な表情で言葉を返せた。

「あの時は、笑ってしまつたよ。普通、悪魔が墮天使…それも、総督に遭遇しても何もなかった様に話すとはね」

「別にいいだろ。実際、何もなかったんだからな」

それはその通りだが、それでゼノヴィアは、笑いを我慢できずにいた。

笑われた巧もムツとした表情でそっぽを向く。

「そういえば、お前：なんで悪魔に」

「：そうだね、君にも言うべきだね」

思い出した様に、巧は訊ねる。今でこそ軽口を叩く関係ではあるが、少し前ならあり得なかった事だ。そうならざるを得ない理由があったのだろうか。

その時、年相応の笑顔から一転。一人の戦士としての顔つきへ。その一瞬の変化を感じたり、巧も聞く姿勢を取る。

他のメンバーは、プールでボールを使った遊びに興じる。そんなメンバーを眺めながら、ゼノヴィアは語り始める。

「私は：元々、アジアと同じように孤児院で育った。その時、私と同じ孤児院にフリード：いや、アレンという少年がいたんだ」

その時、あのはぐれ神父とゼノヴィアに繋がりがある事を知った。あの男が何かを抱えているのは分かっていたが、ゼノヴィアに繋がるとは思ってもみなかったのか、巧は驚いた表情を浮かべていた。

「アレンは、私とは違って落ち着いていた少年で、孤児院の皆のリーダーみたいなものだった。いつも楽しく、こんな生活が毎日続くのかと思っていた。けど、私が10歳の時にそれは壊れた。教会の研究者がアレンにエクソシストにならないか、と話を持ちかけた。アレンはその提案を受け入れて、孤児院を離れた。その時は、気付けなかった。その男が教会の闇に通じているなんてね。悪魔に対抗できる程の力を持った強化人間を作り出す。その適性にアレンは適応し過ぎていたらしい。その後、私も教会の戦士になる事を決意した。そして聖剣使いとして教会の戦士になった」

けれど、まだ話は終わりではない。巧は、それに気づき、無意識のうちにつきを促す言葉を吐いていた。

「それで：アイツは？」

「聖剣使いになった時には遅かったんだ。何もかも。彼に実験を行った派閥の人間は、教会を全員追放されていた。彼と同じ様に実験をさせられていた者に話を聞いた。その場にいた研究者を皆殺しにして、出て行った：と」

そこからの経緯は、巧でも分かった。はぐれ神父を名乗り、様々な

場所を流れ続けた人生だったのだろう。しかし、合点がいかないところもある。

「なんで、アイツはフリードって名乗ってるんだ？」

「…教会に属する医者のお話を基にした私の推測だが、彼に施された実験は、まだ幼かった彼の精神では耐えられないものだった。その痛みにはアレン自身が耐えられないと脳が判断。もう一つの人格を作ってしまった。…つまり、多重人格になってしまったんだ。それも、人に痛みを与える事に何の躊躇もない冷酷な人格を」

「それで、お前は…」

「彼を、助けたい。教会に追放されたのもあるが、聖剣使いの立場では、彼を殺せても…救う事は出来ないからね。悪魔の身でもそれは変わらないが、リアス部長にも好きな様に生きろ、と言われたからね。好きにさせてもらうさ」

「そうか」

あまりの話に、巧は掛ける言葉がなかった。いや、元々口下手な巧にこの状況でゼノヴィアに掛ける言葉が探せる筈もなかったが。

「すまない、リアス部長にだけのつもりだったが…」

「聞いたのは、俺だ。お前に頼んでな」

沈黙が二人を覆い、時間が経つのすら遅く感じる。そんな二人を突然、水が襲った。

「……………」

水着を着ているとはいえ、突然水を掛けられるのはいい気分ではない。

けれど、掛けた本人ーリアスは、変わらない態度を振る舞い続ける。

「二人とも何で怖い顔してるのよ、楽しいプールなのよ！」

「お前……………」

反撃の為に、巧は勢いよくプールに飛び込んだ。巧に釣られて、ゼノヴィアも勢い良くプールに向かって行った。

「楽しかったわね！」

「ええ、そうですわね……」

上級生のリアスと朱乃は、いつもと変わらない余裕のある様子で、その後ろを巧達が歩く。

「まさかイツセー君があんなに必死になるなんて」

「意外とお子様……」

「ふふ、随分な言われようだね、イツセー」

小猫や祐斗のいつも通りの言葉に上乘せするゼノヴィア。相変わらずの態度の巧の隣にいるアーシアは、苦笑いをするしかなかった。

普通の、学生生活を謳歌している彼らの前に、非日常を齎す存在が現れた。

「ここは、いい学校だね」

プールを抜けて、校舎を出た巧達に声をかけて来た一人の青年。巧を除いた全員が警戒する事はなかった。

巧は、知っていた。この青年が普通の人間ではない事を。

「何の…用だよ」

「そうだな、一言で言えば君に会いに来たんだ、兵藤一誠」

巧の前には、アザゼルが義理の息子と紹介した青年——ヴァーリが立っていた。

二人の魔王

目の前の青年は、自分に会いに来た。つまり、戦いの意志はない。そう判断して、巧は肩の力を抜く。

「…いい反応だ。たしかに、コカビエルを討ったというのも、あながち間違いではないみたいだな」

そういった青年、ヴァーリは巧との距離を詰める。その距離が、1メートルを切ったところで、ヴァーリは、自分の喉元にある刃に視線を送る。

「何の真似だ？」

「…僕の勘さ。君からは、危険な匂いがする」

ヴァーリの喉元に刃を向けた裕斗は、鋭い目つきで剣を構える。そんな裕斗を軽く笑って、ヴァーリは脚を振り上げる。振り上げられた脚は、裕斗の手首を捉えた。一瞬、痛みに苦しむ裕斗はヴァーリから視線を外してしまった。しまった、と急いで視線を戻した時には目の前には魔力を纏う拳が。

「よく止めたな」

「話があるのは、俺だろ」

ヴァーリの拳をギリギリで止めたのは巧だった。裕斗に視線を向けて、下がる様に促す。その意味を把握した裕斗は素直にそれに従い、リアス達と共に距離を置く。

「一応、言わせて貰えば…先に仕掛けたのは彼だ。つと、こんな話をしに来たんじゃない」

「さっさと話せ。こっちは暇じゃない」

「そう言われると困るな。俺は、コカビエルを倒した君と、その仲間を見に来たんだ。争いを仕掛ける為でも、君らに復讐をしに来た訳じゃない」

一瞬の視線の交錯。混じり合う、二つの視線。巧の後ろにいたりアスは唾をゆつくりと呑み込む。何秒か経ち、ヴァーリはそつと視線を外しながら笑う。

「今回は、顔合わせのつもりでね。アザゼルが少し落ち込んでいたよ。君が正体を知っても反応が薄かったと」

「んなこと知るか」

「それもそうだ。…いずれ、君とは戦う事になる。その時が、今回の続きだ。それまでに、他の誰と戦う事になっても死なないでくれよ」

「やだね。何で俺がそんなことしなきゃいけないんだよ」

巧の言葉にも、美しい微笑を返すだけ。苛立つ様な態度を見せて、巧はヴァーリの背中を見送った。

少しして、オカルト研究部は校門にて解散となった。

ヴァーリとの邂逅から数日後。今日は本来なら学校が休みであるはずの土曜日。しかし、巧とアーシアは制服を着て玄関にいた。平日と勘違いしているわけではない。

「二人とも、後でキッチンと見に行くからな！」

「がんばってね！」

スーツ姿の兵藤夫妻に、アーシアは笑顔を、巧は苦い物を飲み込んだような顔を浮かべていた。

今日は駒王学園の生徒たちの保護者が学校に来る。つまりは、授業参観ということだ。

「そういうえば部長さんは何の用事だったんでしようか？」

「知りたきゃ、後であいつにきけばいいだろ」

リアスは朝早くに家を出ていた。巧が理由を聞くとなぜか疲れた表情を浮かべるだけで答えは聞けなかった。

会話のない状態が何分か続いたが、二人はとあるマンションの前で立ち止まる。すると、見計らったかのようにマンションのエントランスから見慣れた青髪の少女が出てくる。

「やあ、イツセー、アーシア。早めに行動しておいてよかった。五分前行動は良いものだ」

何故か勝ち誇る表情のゼノヴィアに、言葉を返さずに巧とアーシアは軽く笑う。

「なんで、そこで笑うんだ？」

何処かズレた少女は、これまた可愛らしい表情で首をコテンと傾げる仕草がとても似合っていた。

巧は、この前…プールで辛く凄惨な過去を語った少女と同一人物なのかと疑いたくなるほどに、今のゼノヴィアは優しい笑顔を見せていた。

「さあ、皆さんにお配りした粘土を使つて好きな物を創造ビルドしてください!!そこから科学は…失礼、化学は始まります!」

トレンチコートを羽織る若い男性教師は、頭頂部の一部が寝癖に様に跳ねさせて、興奮した口調だ。

巧は、机の中心に置かれた粘土をただ見つめるだけ。自分が想像力とかそういうった所に弱いのは一番分かっていた。けれども、逃げるわけにはいかなかった。

巧の…いや、学生たちの後ろにいる保護者の視線が故に。
「……」

一瞬、自分とアーシアを見ているであろう兵頭夫妻に目を向けて、予想通りに優しく見守る二人を見て、腹をくくる。

ため息をこぼしたから、比較的早く粘土に手を伸ばす。

「…ふう」

巧が作り始めてから、約30分。周りを見渡すと、半分近くの生徒が作り終えていた。巧もなんとか作り終えて、息を漏らす。巧の机の上に置かれた粘土でつくられたバイクーオートバジン。粘土故にファイギアには劣るものの、中々の出来栄えに巧自身も満足していた。

8割近くの生徒が作成し終えたところで、今度は保護者も含めた批評会が始まる。各々が席を立って、友人や保護者と一緒に作品を見て回る。

「初めまして…ゼノヴィアと言います。いつもアーシア…さんとイツセー…くんとは、仲良くさせてもらってます」

「まあ〜！貴方があのゼノヴィアちゃんね。お話は聞いてるわよ、今後とも二人と仲良くしてあげてね。…それと、私たちの前だからって気を使う必要ないわよ。いつも通りにしてあげて」

ゼノヴィアは、初対面の涼子に言葉を選んだ上での挨拶。しかし、人生経験の長い涼子にはあっさりと言破される。ゼノヴィアは、その優しさに満ちた表情に、異国にいる母に等しい存在を想起する。それと同時に背中に寒気も走ったが…。

「これは、家に置いてあるイツセーのバイクか…。昔は、私も母さんを乗せてデートに行った事もあってね」

「そうなんですか!?す、すこし羨ましいです…」

「今度、イツセーを誘ってみたらどうだい?きつとアイツも喜ぶさ」

アーシアは、巧とのバイクをデートを想像して顔を赤くする。そんな彼女の隣で、兵藤真司ひょうとうまことは軽く微笑む。

そして、話題の中心たる巧は…。

「これはどうだイツセー。俺の芸術は!」

「いやいや、こつちに方がいいだろう!!」

なぜか張り合う松田と元浜の作品の評価をさせられていた。巧としてはまだ距離感の掴めない兵藤夫妻の近くにいるよりも、この二人の方が楽だった。

「…どつちも酷い。俺からしたら、大差ねえよ」

こんな素直な感想を口にしても、二人は気にせず自分に絡んでくる。

「何をっー!」

「はっ!!お前のバイクだって、小学生が作りましたって感じだろうが!!」

「…はっ…?」

いつのまにか二人は、巧にとって初めて出来た悪友になっていたのかもしれない。

そして、それはある意味では眷属にも負けない大切な絆になる。

巧がそれを否定しようとも、他のクラスメイトから見た3人の姿は、あの変わらない3人組の姿に映っていた。

「これがバジンね。可愛らしいじゃない」

巧の作った粘土製のバジンを手に取りながら、リアスは微笑む。巧とアーシアは、旧校舎でリアスと、その隣にいた朱乃に会っていた。この時に、朝から出かけていた理由もはつきりした。その理由を聞いていただけの巧でも疲労感が肩にのしかかった。

「…それにしても、お父様もお兄様もはしやぎ過ぎよ、全く」

「わ、悪気はないですから…」

落ち込むというよりも、疲れを滲ませるリアスの顔を見て、アーシアもやんわりとフォローをするも効果はあまり無い。そんな二人の隣で、巧は少し複雑そうな表情の朱乃を捉えた。

「どうかしましたか、イツセー君?」

「…いや、気にすんな」

巧が見ていた事に気付いた朱乃はいきなり距離を詰める。朱乃との距離が急接近した為に、巧の頬にやんわりと赤が差し込む。つまりは、照れているのだ。

「ーイッサー君は、異性への興味が無いわけではないのね。ふっ、いい事を知れたわ。」

年上らしい朱乃の笑顔を、正面から受け止められずに目をそらす。二人の姿は、初々しいカップルのように見えるかもしれない。

「あらあら、目を逸らしてはいけませんわ」

微妙に後ろに下がる巧を見て、サドステイックの血が燃えたのか、流さないと言わんばかりに一歩前に足を進める。

しかし、足はそれ以上は巧に接近はしなかった。

彼女たちの妨害によって。

「随分と楽しそうね…朱乃」

「ず、ずるいですうーイッサーさん、私の顔もみてください！」

目が全く笑ってないリアスト、朱乃から巧を解放したアーシア。そして、状況に全く着いてこれない巧。ニコニコとした笑顔を崩さない朱乃。正に混沌と言わんばりの状況を、朱乃は一気に攻め立てようと言葉を紡ぐ。

「ねえ、部長イッサー君を「うおおお!!!」魔女っ子の撮影会が始まるぞ!!!」

朱乃の言葉を覆うように、男子たちの雄叫びにも似た声が校舎から離れた旧校舎に届いた。四人は、何かかと思ひ、声のする方に歩き出した。

「魔女っ子と聞いてまさかとは思ったけど…」

「どうやら、そのまさか、でしたわね」

四人の到着した場所は、体育館。男子たちの熱狂の元は、体育館のステージ。

そこには文字通りの魔女少女がいた。

巧とアーシアは、誰だ？といった表情で、リアスと朱乃は、苦笑いといった真反対の反応を見せていた。

「はーいっつ!!お前ら、さっさと解散しろ!!」

白熱する男子たちを止めたのは、生徒会役員唯一の男子——匙元士郎だった。ブーブー、と反対行動を見せる男子たちを押さえつける手際は凄腕と言わざるを得なかった。

あれ程までの騒ぎだった集会は、ものの数分で解散となる。悔しさを滲ませた男子たちは、おぼつかない足取りで体育館を後にする。

「はあ…それよりも、貴方もこの場に相応しい格好で来ていただかないと」

ため息と共に、匙は今回の騒動の原因たる女性に注意する。巧は、この場にいる意味はあまり無いと判断。教室に戻ろうと体育館の扉に向かうが、その扉が突然強く開いた。

「匙、遅いですよ。体育館での騒動はどうなりましたか……」

現れたのは、生徒会長のソーナ。けれども、彼女の言葉は少しずつ勢いを失い、匙と向かい合う女性を目にした瞬間に体を硬直させた。それは、前方にいた巧が心配してしまうほどに。

「おい、大丈夫「ソーナちゃーん!!!」

ソーナに声をかける巧を飛び越えて、件の女性がソーナを抱きしめる。その行動にどう反応すべきか迷う。そんな巧の肩をゆっくりと叩き、リアスが声をかける。

「あの方は、セラフォル・レヴィアタン様。…四大魔王の一人で、ソーナの実のお姉様よ」

「…あいつ…が??」

巧の頭には、以前会った事のある魔王の一人で、リアスの兄。サーゼクス・ルシファーが浮かび上がる。彼の堂々たるオーラは、確かに魔王の王たる威厳を放っていた。しかし、目の前の少女にも見える魔王は、あまりにも幼く見えた。妹であるソーナの方が大人っぽさを醸し出していた。

「イツセーがそういうのも、無理ないわね。……軽いよ、今の四大魔

王様はプライベートの時は、お兄様も含めて」

「…お前の兄貴…も？」

さらりと口にした事実には巧は食いつく。これまで巧は、リアスが一人っ子であると勘違いしていた。ライザーとの婚約も長男が居れば、そもそも問題にすらならない。

「部長のお兄様は、サーゼクス・ルシファー様です」

今日、何度目かの衝撃が巧とアーシアを襲うことになった。

その日の夕食。

兵藤家は、普段と異なる色を見せていた。その色とは…とある三人。

一人目は、リアスの父であるグレモリー卿。二人目は、巧も面識のあるグレモリー家に使える女性、グレイフィア。三人目は、グレイフィアの夫であり、リアスの兄であり、魔王の一人ーサーゼクス・ルシファー。

三人のオーラに、流石の兵藤夫妻も圧倒されると思われたが…。

「さあ、どうぞどうぞ、一杯と言わずに!!」

「これはこれは、それでは是非とも」

「いやー、この料理も美味ですね」

男性陣は、酒を煽り、すっかり出来上がっていた。その空気感は、とても楽しそうなのが巧にも伝わる。一方の女性陣は。

「食事まで用意していただき、ありがとうございます。今回のお礼はまた…」

「いいのよー気にしないで、グレイフィアさんも食べてね」

クールなやり取りをしながらも、涼子もグレイフィアに食事を勧める。落ち着いた大人の振る舞いの様なものを感じる。

どうしてこうなったのか、話を少し遡る。

ソーナの姉、セラフォルとこの遭遇の後、巧たちは会話を繰り広げていた大人組五人を発見。リアスが声をかけて、話を聞くとこのまま兵藤家に夕飯を食べに来ないかと提案していた所だった。すっかり意気投合した保護者達は、自身の種族の壁など知らずに大盛り上がりを見せていた。

「いやー、うちのリアスも中々に成長しておりますて…」

「ええ。あの様に授業を受けるリーアたんを見て、何故か涙が」

「分かりますー！ウチも最近、アーシアちゃんという娘が出来て、もう可愛くて可愛くて」

食事を勧める巧達を他所に、男性陣の話題は娘…つまりは、リアスとアーシアの話題へ。二人とも、苦笑いを浮かべてはいるものの、悪い気はしていないのだろう。巧は特に気にすることなく箸を進める。

ここで、少し熱い肉を口にしようとするためにフー、フー、と息を吹きかける。しかし、かなりの高温なのか、中々に熱が抜けない。悪戦苦闘する巧の視界に、突如エメラルドグリーンが差し込む。

「フー、フー、フー」

真横で息を吹きかけるアーシアの横顔に、数秒間凝視してしまった。その白い肌や宝石の様に輝くブロンドの髪。巧も、ほんのりと頬を染めてしまった。

そんな巧の腕の皮を、リアスの指が抓る。

「…痛ッ！……、何すんだよお前」

「別に……」

隣に座るリアスに、巧は怒るもリアスは顔を背ける。

そんなに大きな声を出してない為に、大人達は気付いてる様子はない。無視を決め込むリアスにこれ以上は無理と判断し、巧は冷ました肉をなんとか頬張って、自室に戻っていった。

「なんだよ…アイツ」

夕飯を食べ終えた巧は、自室でベットに横たっていた。ライトを点けずにただ天井を見つめるだけ。一階からは大人達の声が聞こえて、まだ宴会は続いていることを察する。

それよりも、巧の頭にあっただのはリアスの怒った表情。

「ーまさか、な…。」

一瞬、思い出したのはライザーとのレーティング・ゲームに臨む前夜。リアスは、巧に告白をした。けれども、それは辛い現実から逃げたかっただけで、心からの物ではない。少なくとも巧は、そう思っていた。しかし、先程の表情やこれまでの自分に対する態度を鑑みれば、もしかしたら…と考えを深めてしまう。

「ンなわけねえか」

自分の勝手な勘違いに違いない。そうやって、結論を出して瞼をゆつくりと下ろす巧。何秒か経って後で、コンコンとノックが聞こえる。

「少し…いいかしら？」

開いたドアからひよっこり顔を覗かせたのはリアス。その表情は、少し罪悪感を滲ませていた。巧の椅子に座り、向かい合う二人。

「さつきは…ごめんなさい。その、つい…」

「全くだ。…つたく、いきなりなんだったんだよ」

「それは…。巧さんが、アーシアや朱乃の事ばかり…見てるから」

徐々に、言葉も小さくなり、顔を俯けてしまう。表情の見えないリアスに返す言葉を探すが見つからない巧。

逃げたくなる程に重い沈黙が二人を襲う。

「少し、いいかい？」

そんな沈黙に包まれた部屋に響いたのは、低音の声。その声の主は、サーゼクス。リアスの髪と同じ、紅を揺らしながら微笑む姿は、まるで物語の中から抜け出した貴公子の様に見える。

「お兄様!？」

突然の兄の登場に、リアスは立ち上がって反応する。

サーゼクスは、兄としての優しい笑顔から一変。悪魔の長たる魔王としての顔へ切り替える。

「リアス。もう一人の僧侶の解放についての話があつてね」
また、新しい波乱が自分達に近づきつつある事を巧は予感して
いた。

重なる過去

「ここにもう一人の僧侶の方がいらっしやるのですか?」

リアス、そしてその眷属の全員が集合していた。場所は、旧校舎の一室の入り口前。ここに来た目的とは、目の前の部屋に封印された現状では最後の眷属を解放するため。昨晚、サーゼクスから許しを得たリアスは、早速放課後に封印を解くつもりだった。

「ええ。……もう完了したようね。ありがとう朱乃」

部屋に施された封印を、朱乃が解いたのを察知して、扉を開ける。巧は、封印された眷属がどんな姿をしているのか想像していた。その脳裏に浮かぶのは、筋骨隆々な大男。強すぎるが故に封印されていた、そんな風な予想を立てていたが、そんな予想とは真反対な声が、部屋の中から響く。

「いやあああ!!む、無理ですうう!!外に出たくないですう!!」

部屋の中から聞こえたのは、少年とも少女とも聞こえる中性的な声。声の主が気になったアーシアは、駆け足気味に部屋に入る。巧も、気にはなるので、アーシアを追う形で歩き出す。

部屋に入った二人が第一に感じたのは、部屋の暗さ。まるで、外からの光を拒絶するように、窓には黒いカーテンが吊るされ、電気は全く点いていない。暗い場所でも、目の冴える悪魔でなければ、歩き出すのも危なく思えたが、二人はそうではない。何秒かして、部屋の中にいるものに気付く。

棺。そして、その中には、駒王学園の女子生徒の制服を着た少女：??

「…女の子、なんですか?」

封印されていた。その言葉に似合わない少女に、首を傾げながらリアスに尋ねるアーシア。

リアスは苦笑いを浮かべて、首を横に振る。

「いいえ。この子は、男の子よ。名前は…ギヤスパー・ヴラディ。あなたと同じ『僧侶』よ」

「ちなみに、女装趣味があるのですわ」

「ええー!!?」

声を大きく上げるアーシアの隣で、巧もまた驚いていた。なんども瞬きを繰り返しては、ギヤスパーを見つめる。その姿は、どこからみても少女だ。ギヤスパーを見続ける巧は、一瞬だけ？寒気を感じた。ギヤスパーに対してではない。より正確に言えば、ギヤスパーの中にあるナニカに。

「コイツは…何者だ」

「えっ…?」

「なんで、コイツはここに封印されてたんだ」

珍しく驚いた表情と声の巧に、リアスは反応に遅れた。巧の横顔は、よく見なければ分からないほどだが…緊張しているように見えた。

「この子は、元々は人間と吸血鬼…ヴァンパイアとのハーフなの。それに加えて、セイクリッドギア 神器の持ち主なの」

「ぼ、僕の話なんて…しないで。ぼ、僕はここにいたいんです…」

ギヤスパーは起こしていた体を棺に戻し、掛け布団に包まっていた。そんな引きこもり少女に対して、朱乃やリアスは、心優しい姉や母親のように言葉を掛け続けるものの効果は見込めない。十分近くの間、奮闘を見せたものの、進展を見せない。

「はあく。お前なあゝ」

ため息と共に、巧はギヤスパーに近づき、布団を剥ぎ取ろうとした瞬間。

「やめてっ!!」

ギヤスパーの目が、妖しく、美しく、輝いた。

その時、世界は止まった。

「ま、またやっちゃった…」

暴発による時間停止。もう何度目か、数える事すら諦めた風景に、ギヤスパーは顔を俯ける。部屋の隅へ逃げようと動こうとした彼の

頭を何かが引つ叩いた。

「痛っ！……えっ？」

自分以外の誰もが停まってしまった世界で、自分の頭を誰かが引つ叩いた。そんな事実にも、驚きを隠すことは出来なかった。体を包む布団を取って、振り返るとー。

「お前、なにしたんだよ。さっさとともに戻せ」

どういうわけか、停まらずに、動き続ける乾巧に、兵藤一誠に、ギヤスパーは、言葉に出来ない感情を抱きつつあった。

停まった時は、再び動き出す。

「な、なんだ…今の感覚は」

「今のギヤスパー君の神器の力さ」

動き出した時間。その瞬間と、停まる寸前の感覚に違和感を抱いたゼノヴィアは、周りを見渡す。その隣にいた祐斗は既に知った感覚であるために、冷静に解説をする。

「い、今のは…一体」

「今のが、ギヤスパー君の神器ー停止世界フォービドゥン・パロール・レューの邪眼の力です」

自身の視界に入れた物を、一定時間のみ制止させる能力を持った神器。

「ギヤー君、どうしたの？」

部屋の隅で呆然とするギヤスパーの肩を叩き、声を掛ける小猫。ギヤスパーの視界の先にいる存在をゆっくりと目で追う。

「あ、あの人。停まらなかつた。あの方は、動けてた」

驚いた表情で、けれども少しだけ笑顔を見せたギヤスパーは、まるでヒーローを見るように、巧のこを見上げていた。

「ギヤアアアア!!!」

「そらそら、どうした！早く逃げなければ…このデュランダルの餌食になるぞ!!」

旧校舎の手前に広がる芝生の上を駆け巡るのはギヤスパー。そしてそれを追うのは聖剣を携えたゼノヴィア。

「そんな顔をしなくてください。止めてきます」

オロオロとしたアーシアの隣で、小猫は居た堪れなくなる。目の前の命懸けの鬼ごっこを繰り返す二人を止めに入る。

「二人共、落ち着いてください」

「むう…。いい方法だと思ったんだがな…」

「た、助かった」

小猫の介入によりゼノヴィアは、やや不満顔で剣を置く。対するギヤスパーは命拾いしたと膝から崩れ落ち、その場に座り込む。そこにアーシアも駆け寄る。

「次はどうする？私のアイデアがダメなら次はアーシアか？」

「わ、私ですか…」

「三人で一緒に考えよう」

女子三人の中に、巧は居なかった。

ギヤスパーの解放の後、リアスと朱乃と祐斗の三人はサーゼクスに呼び出された。その時に、ギヤスパーの引きこもりを少しでもいいから改善してほしい、と頼まれた。こちらの三人は快く引き受け、巧はギヤスパーの態度を見て、すぐにどうこうなるものじゃないと決めて、帰宅してしまった。

「ムムム…。これだけ考えてもいいアイデアが少しも出てこないとは！」

「こうなれば主に祈るしかありません！」

「ああ、主よ！私たちに後輩を救う知識を…あうっ!!」

述べる口上すら揃えた二人は、同時に頭痛に見舞われる。悪魔である二人が神に祈るなど自殺行為だ。

もはや見慣れた光景に突っ込む気がない小猫。気が緩んでいたのと、相手との実力差故か後ろからの何者かの接近にようやく気付い

た。

「…誰っ！」

「おやおや、そんな気張るなよ。こっちは、女の子相手に手を出す気は毛頭ないからな」

振り向いた先にいたのは、男性。…それも、かなり強力な力を持った。袴姿の男性は顎髭に手をやり、ポリポリと搔く。その振る舞いからは無精さを感じる。

「今、聖魔剣使いかファイズ…いや、兵藤一誠は居ないか？」

「二人共ここにはいない。一体何の用だ」

小猫同様に、男性の強さを感知したゼノヴィアは、小猫とアーシアとギヤスパーを守るように男性に相對する。その手は既にデュランダルを構えて、敵意を…闘志をむき出す。

「まあ、肩の力を抜けや。せつかくの別嬪が勿体無いぜ」

瞬き、いやそれよりも早く、短い時間…男性を見失った。次の時には、彼の手はゼノヴィアの肩に乗せられていた。

「……っ!？」

大きく目を見開き、男性の様子を伺う。後ろにある三人に逃げろ、と叫ぶべき自身に選択を迫る。

そんなゼノヴィアの不安を、取り去るかのように男性は口元を緩める。

「いい集中力だ。最後までその三人を守ろうとしたのは、悪くない。急な訪問悪かったな。兵藤一誠に伝えておいてくれ。また、お前と話がしたいってな」

それだけ言って、踵を返そうとする男性を…その名を叫んだ。

「待て!! 『アザゼル』」

「…っ!？」

「アザゼルって…墮天使の!？」

墮天使の総督の名前を聞いた三人は、男性を強く見入る。背中を見せていた男性…アザゼルは、振り返りながら飄々とした態度を崩さない。

「何だ？手短なら、答えるぜ」

「フリードセルゼンは何処にいる！お前達が送還した筈だ！」

「お前さんが奴とどういう関係かは知らないが……。やつは消えた。墮天使が保有する監獄に入れようとした直前でな。灰色の怪物が襲撃し、奴を連れ去った」

「そうか……」

「質問には答えませ。またな」

そう言つて、アザゼルは二度と振り返ることなく、その場を後にした。

ゼノヴィア達がアザゼルと接触した。巧がその知らせを受けて、部屋に駆けつけたのは夜の7時を過ぎていた。

部室には、既に巧とギヤスパーを除いた全員が集合していた。

「全員揃いましたね。ゼノヴィア……話をしてもらつていいかしら」

「……私達が、3人でギヤスパーのことで話し合つていた時。アザゼルがやつてきました。奴は、木場とイツセーの事を探していました。特にイツセーには、また話したい……と。それと、これはイツセーに伝えておきたい。灰色の怪物がフリードを連れ去った。灰色の怪物については既に小猫やアーシアから説明は受けている」

そう言つて、ゼノヴィアは椅子に座り込む。

視線の先には鍵で閉ざされた部屋が。更に、その中で怯えているであろうギヤスパー。

「そのアザゼルについてだけ……ソーナからの報告では、匙くんやその他の神器持ちの悪魔に声を掛けていたそうよ」

「それは、一体どうして何でしょうか？」

「神器の研究……。それが今のアザゼルの最大の興味らしいわ。だから、未知の聖魔剣を持った祐斗。そして、ファイズのイツセーに近づこうとした事に納得だわ」

話を聞き終わると、巧は部室を抜けて、ギヤスパーのいる部屋の前

に立つ。慌てて追いかけるリアスは、巧の隣へ。

『巧さん』には、まだ言つてなかったわね。ギヤスパーについて」

「…あいつが何で封印されてたか、か？」

「ええ。ゼノヴィアとアーシアにはもう伝えたの。後は、貴方だけ」

リアスが、本当の自分の名前を呼んだところを見ると、他のメンバ―は部室にいるらしい。相変わらず気を回すのが上手い。

巧は、兵藤一誠としてではなく、乾巧として、ギヤスパ―ヴラデイに向き合おうとしているのを、リアスだけが断片的に感じ取っている。いた。

「ギヤスパ―がヴァンパイヤとのハーフなのは、もう伝えたよね。その影響で、ギヤスパ―は、親兄弟から疎まれていた。ヴァンパイヤは悪魔以上に血を重んじる種族なの。それもあり、家族からは愛されず、友達も出来なかった。時折、人間の世界に向かつてても、ヴァンパイヤであるが故に嫌われた。その上、自分では制御できない時間を止める眼まで持つてしまった。ギヤスパ―は頼る人もいなく、その果てに殺された。…そこを私が、眷属として蘇らせた。これが、ギヤスパ―が今ここにいる経緯よ」

ギヤスパ―の過去を聞いて、巧は重ねざるを得なかった。

ギヤスパ―・ヴラデイと乾巧の過去を。

二人とも、望んでない力を手にしてしまった。その力が故に、ギヤスパ―は友を持ってず、巧は夢を持ってなかった。何よりも、自分自身が嫌いという点とまた同じ。

掛ける言葉もないままで、巧はそつと扉に触れる。二人の違いは、仲間に、己の中にある力を受け入れてくれる仲間の有無。いや、本人の意思があるかどうかだ。

巧に、園田真里や菊池啓太郎がいるように。

ギヤスパ―にもリアス達、オカルト研究部がいる。

後は、彼がこのドアを自分の意思で開けるか。それだけだ。

「お前、いつまでここにいるんだ」

「……………」

「一人になりたきや、さっさと出てけ」

バアン！と轟音が響き渡り、部室の中にいたアーシアらも慌てて外に飛び出す。そこには、ギヤスパアの部屋の扉を、蹴り飛ばした巧の姿が。

「ほ、僕は……」

隠れ場所である棺から出て来ていたのか、扉のあった場所の手前で膝をついて涙をこぼすギヤスパア。その涙を見て、慌てて駆け寄ろうとするリアスを、先程出てきた祐斗が止める。首を横に振り、彼も巧の真意を察して、目線だけをギヤスパアへ。

「……ここが君の正念場だよ、ギヤスパア君。」

男として、乗り越えるべき壁がある。祐斗は、巧に背を押される形で壁を乗り越えた。祐斗にとってのそれが、今ギヤスパアの前にそびえ立つ。

「……僕は……死にたい。」

親からの愛を受けず、一人の少女により、親や兄弟の元から解放された彼を待っていたのは辛い現実。

現実には、幼くも純粋な彼の心を傷つけて、欠片へと変えていった。傷ついたその果てで、今の仲間達に出会えた。それなのに、ギヤスパアは、彼らに歩み寄ることは出来なかった。

彼らが、怖いのではない。彼らを傷つける可能性のある自分が怖いのだ。こんな自分を仲間と呼ぶ人達の、停止した表情を見る度に、血の気が引いていく。吸血鬼としての自分さえも死んでしまいたくない。

「……死にたいの、本当に？」

何処からか、声が聞こえた。

「……うん。僕は、……死んだ方がいいんだよ。」

「……彼らは、そんな事望まないよ？」

「えっ？」

何かの声に釣られ、周りを見渡すと。ギヤスパアの周りには人がいた。全員が、ギヤスパアの眼を恐れずに、見据えていた。

「……ホントニ、シニタイ??」

「ぼつ、僕は……。生きる、んだ!!ぶ、部長の立派な眷属として!!」
リアスや、巧にではなく。己の中にいるナニカに言い聞かせるように、ギヤスパーは誓った。

——そっか。なら、いい現実^夢を。

顔を上げたギヤスパーに飛び込んできたのは、ひどく柔らかい感触と、美しい紅色。

「部長……めんなさい。こんなにお待たせして」

「いいの、いいのよ。貴方が、一歩でも前に進めたんだもの」

これを皮切りに、皆がギヤスパーに声をかける中。一人、巧だけが旧校舎から出て行くこうとするのを見て、ふと決意をする。

——あの人みたいなの、強い背中をもった男になりたい。

小さくも確かな決意が、少女のような少年の心に火をつけた。

変わらない関係

ギヤスパアの引きこもり問題が前進した日から一週間ほどが経過した。学校の授業も終わった巧とアーシアの二人は、神社に続く階段を上っていた。

「ギヤスパア君も少しづつ登校し始めるみたいですよ。小猫ちゃんがクラスの人達との間の役をしてくれてるみたいで。それに眼の特訓もしてるみたいでして」

「…あいつ、あの格好で学校に行ってるのか？」

巧の頭には、女装が無駄に似合うギヤスパア。そして、人と話す事の難しさからの脱却を目指し、ゼノヴィアが考案した紙袋を被さった姿がチラつく。修行中はそんな格好でも問題は無いが、いざ日常生活となると話は変わってくる。

「流石に教室では外してるみたいです。少しづつ改善していけばいいんですけど…。いえ、これはきつと主の与えられた試練！主よ、ギヤスパア君の事を見守りください…痛っ!!」

「お前も懲りないな」

いつもの流れで、頭痛に見舞われるアーシアを苦笑を浮かべる巧。顛顛の辺りを抑えるアーシアの頭を、少し力を込めて撫でる。彼女にとっての自慢の髪が少しばかり乱れるが、彼女の顔は少しばかりほんのりと朱に染まる。

「きつさと行くぞ。早くしないと日が暮れるぞ」

「はっ、はい!!」

せつせと階段を登る巧の背中に、追いつかんとすべくアーシアも頭痛の事をすっかり忘れて、そこから歩き出した。

アーシア　ゼノヴィア
ーこいつやあいつって、しよつちゆう頭痛になってるな…。

なんて、ボンヤリと考えながら、目的の神社が見え、階段を登りきったところで足を止める。

「イツセーさん？」

急に巧が止まったところで、アーシアも同時に足を止める。そして気付く。巧の視線の先にいた存在を。

そこにたつてるだけで肌がピリピリと痛みを受け取る。体の内から外へ漏れ出す神々しきにも似たオーラ。人よりも何かの作品とすら思える容姿。極め付けに頭の上には光の輪が浮かぶ。

「……天使」

こちらに気づいていたのか、または今気づいたのか。天使の男性は、ニツコリと、正に天使の笑顔を浮かべながら軽く会釈する。その会釈にアーシアは、ハツとなって返す。一方の巧は、特に反応せずにした。すると、男性の体が上手い具合に壁になった為か、彼が動いた際に一人の女性が姿を見せた。

「朱乃さん!」

どうして天使の近くに……。そう言わんばかりに驚いたアーシア。しかし巧も同様にーしかし、表情は変えずにー驚く。朱乃は一言二言、男性と会話を交わした後で二人の元へ。

「お待たせしてしまつてごめんなさい。今、明日の会談に向けての話し合いを行つていまして。そこで、天使の代表のミカエル様との打ち合わせを」

「なるほど、貴方が噂の【ファイズ】ですか」

いつのまにかいたのか、巧の目の前に天使ーミカエルが。優しい笑顔を浮かべていた。

「天使の代表として、コカビエルを討伐してくれた貴方にお礼を申し上げたいと思つていましたね」

「あんたらの為に戦つた訳じゃ無い。…俺は、俺だ」

一つの勢力のトップに立つ男に対しても、いつも通りのぶつきらぼうで愛想のない言葉を正面からぶつかる。普通ならば、周りも絶句しなければならぬが、既に巧の性格を把握している二人なので、苦笑いを浮かべるだけ。

一方の天使の長とも言える男性は、目の前の少年にとつともない興味を抱いた。彼の言葉には嘘がなく、飾り気もない。つまりは、本当に彼が他を守る事を己の為と言える人物であると納得できた。

「貴方とはもつと語りたいのですが、今日は時間がもうありませんので。それでは皆さん、明日の会談で」

そう一言だけ言って、ミカエルは光と共に転移した。他の目的の所に向かったのだろう。元々、教会の人間だったアーシアは、一番圧倒されていた。

「…それで、なんで俺らを呼んだんだ」

巧は、ミカエルとの邂逅というイベントを前に進展しそうにない空気を察し、朱乃に尋ねる。巧達は朱乃に呼ばれて、ここに来たのだ。

「伝えなければ、ならない事があるんです。お二人に」

付いてきてください、と朱乃は神社に入っていく。二人も、それを追う形で歩き出す。

朱乃以外の住人がいないであろう事を、朱乃の後ろで歩きながら巧はこの神社の人気の無さから感じ取った。

「どうぞ」

朱乃は、一室の前で立ち止まると横引きの襖を開き、二人に部屋に入るように促す。室内は勿論、和室になっていた。部屋の中には二つの座布団が置いてある。それと対になる形でもう一つ座布団があり、朱乃が座るための物。

「それで朱乃さん、私たちにお話って？」

3人が座ったところー巧は胡座をかいているがーアーシアが早速本題へ。隣の巧も、朱乃に視線を向けて、話をするように催促していた。

「ええ…。この前のコカビエルとの戦いでのを覚えますか？」

突然の質問に、巧もアーシアも思い出すような仕草を見せる。何秒か経つと、巧が思い出したように小さく口にする。

「お前の親父の攻撃を知ってるのか…って所か？」

「はい。その通りです。コカビエルと、私の父は同じ組織に在籍しています」

それは、意味することはつまり

「あ、朱乃さんのお父様は…墮天使ですか…？」

「雷光の名を称する墮天使、バラキエル。それが私の父です」

「貴方達、二人の経緯を知り…伝えなければ、と思いましたが」

自身をーいや、この体の本来の持ち主、兵藤一誠は墮天使のレイナーレにより、命を奪われた。アジアも、巧や裕斗らの救出により命は落とさなかったものの、殺されかけた経緯を持つ。

二人が、この経緯から墮天使、ひいてはその血を引いた自分を恐れて、嫌う事も朱乃は予想している。だからこそ、巧に時折敢えて女性を意識させる行為を行うなどして、嫌われまいとしていた。そんな自分がいた事すら、朱乃は嫌悪感を抱いていた。

姫島朱乃にとって、兵藤^乾一誠^巧は不思議な男子に見えた。

最初は、本人と出会う前から噂で人となりを目にはしていた。曰く、最低の覗き魔、性欲の権化、変態3人組の一人。数々の通り名が存在していたが、いざ対面するとそのイメージは払拭された。リアスが、彼を眷属にした際にどういう理由かは不明だが、記憶がなくなっってしまったらしい。その事を後から聞かされ、彼女は納得もしていた。周りにはリアスを事故から庇った際に頭を強く打った影響で記憶喪失となったとしている事も。

一般人離れした戦闘能力。咄嗟での判断能力の高さ、決して折れない精神力。

彼を知れば知るほど、朱乃は巧を無意識の内に目で追っていた。彼を慕ってるであろう友人のリアスや後輩のアシアに申し訳なきを感じながらも、朱乃は自分の気持ちを殺そうとしてきた。けれども、そのダムは決壊してしまった。

今、朱乃は自分の事を明かす覚悟で巧たちの前に居る。

「お、おいつ!?!」

「何をしてるんですか、朱乃さん!!」

沈黙の中、朱乃はすくり、と立ち上がって、着ていた巫女姿を脱ぎ始める。突然の行動に巧は咄嗟に背中を向け、アシアは巧との間に入る事で視線を塞ぐ。肩から胸元にかけての部分を開けた所で、二人に対して背中を向ける。

「…つつ!!」

一瞬の逡巡を表情に浮かばせたものの、朱乃の意思は変わる事はない。バザッ、鳥が羽ばたくかのような音が部屋に響き渡るのと同時に、その音に反応し、振り向いた巧とアシアの視線は黒に奪われる。

二人の視線の先には、相反する種族の翼を背中から生やす朱乃が。彼女の白く、シミひとつない肌から異なる形の黒い二翼は幻想的な絵画にも見える。駒王学園の生徒たちが見たら、学園の二大お姉様ーちなみにもう一人はリアスーの艶姿に唾を飲み込むであろう状況にも関わらず、巧は全く表情を変えなかった。

隣に座るアシアは、巧とは対照的に表情を驚きに染める。

「…この翼は、私の醜さの象徴。父から受け継いだ翼を捨てるが為に、私はリアスの『女王』になった。けれど、その結果生まれたのは悪魔と墮天使の翼を持った醜い存在」
姫島朱乃

朱乃の独白は、一旦終わりを迎えた。言葉を控え、巧とアシアの言葉を待つ朱乃。アシアは掛けるべき言葉を探すも、これといった物が見つからない。どう言葉にすればいいのかが分からない。

堪え難い沈黙の中で、巧はすくりと立ち上がる。当然、二人の視線は巧に向かう。

「話は終わりか?」

「ええ…。イツセー君は、何も思わないのですか? 貴方を殺し、アシアちゃんの事を殺そうとした墮天使の血を引いてる私の事を」
「……」

髪の毛を搔いて、巧も少しばかりか言葉を選んでいた。

といっても、巧自身はそれほど墮天使に悪感情を抱いては居なかった。かつての世界でも、人間の中にも悪人と善人がいた。オルフェノクの中にも、人として生きようとする者もいた。つまり、この世界でも同じことが言える。個人の行動で種族を否定する様な感情を、巧は持たなかった。

「俺は別に殺されたってつもりはない。その事をお前が気にしてんなら、余計なお世話だ」

この体の本来の持ち主、兵藤一誠ならば別だが、巧は殺されたという感覚はない。つまり、

「お前が墮天使の娘とかそんなのはどうでもいい。お前は…お前だからな」

「私は…私…?」

「…だからな、お前が何処の誰の娘だろうが、俺が知ってるのは…姫島朱乃だ」

朱乃の父親など、巧にとっては関係ない。父親が誰であれ、巧やアーシアと朱乃の関係が変わるわけでは無い。これまでも、これからも。

巧はそう言い切ると、ピヤシヤリと引き戸の襖を開けて、出て行ってしまった。

部屋に残った朱乃は、何処か呆然にしてるアーシアに向けて微笑む。

「彼は不器用な人、ですね」

「はい。とっても」

金色に輝く髪を揺らしながら、アーシアは頷いた。

朱乃は、短く言葉を紡ぐ彼の背中を思い出し、白い頬を赤に染める。

「私も…参戦します。本気にさせられてしまったわ」

「ふええ…!?!」

「…いいかしら、リアス?」

その名に呼応するように、リアスは襖の向こうから現れた。

現れた、といってもリアスは朱乃達の会話を聞いて、部屋の外で待っていたのだ。

「…ダメ、と言いたいけれど。選ぶのは、イツセーよ」

その言葉とは裏腹に、リアスの目は強い光を宿す。つまりは、負ける気はないらしい。その強い瞳に射抜かれても、朱乃はいつもの調子を崩す事なく、落ち着いた様子だ。

「そうね、悪いけれど私が一位を頂きますわ」

「わ、私も負けません!!」

一人の朴念仁の隣を巡る少女たちの戦いの火蓋は、神社の一室で切って落とされた。

駒王会談、開始。

三大勢力の会談当日の夜。

開催地の駒王学園の片隅、旧校舎にオカルト研究部の全員が集まっていた。

リアス達は、先日のコカビエルとの戦いが議題の一つとして挙がる為に、その証人として、ソーナらと共に参加することになっていた。「それじゃ、ギヤスパー。まだ力の制御が完璧ではない貴方を会談に出席はさせられないの。だから会談が終わるまでは、ここにいて頂戴。でも、安心して。イツセーも付いてくれるから」

「は、はいっー」

女装少年ーギヤスパーが、リアスからの忠告に素直に頷く姿はまるで姉妹に見える。部屋の中で、何故か段ボールに座るギヤスパーを巧は椅子に座りながら眺めていた。

力の調整のための修行を始めたとはいえ、その成果は芳しくなく、まだ不安の残るギヤスパーを部室に待機。同時に、部員で唯一ギヤスパーの停止が効かない巧を保護者として待機させることに決めたのはリアスだった。まあ、実際には他にも理由はあるのだが…。

「イツセー。会談がめんどくさいって理由でここに残るのだから、ギヤスパーの事をしっかりと見ておいて」

「分かってるから、何度も言うなよ」

巧が、この会談への参加を拒否したのだ。コカビエルを実質的には討伐したファイズー巧は出席すべきなのだが、本人がそういった注目されるのを拒み、ここでの待機を望んだ。

「会談が終わったらイツセー君の電話に連絡を入れますので、そしたらお願いします」

「おう」

ふと、朱乃が思い出したかのように、巧に連絡事項を。昨日、天使の代表のミカエルと約束を果たす為だ。これは珍しく、巧からミカエルに合う姿勢を見せた。朱乃も驚きはしたが、ミカエルとの仲介を引き受けてくれた。

「ギャー君、ここのお菓子とかはすきにしていよいよ」

「あ、ありがとう！小猫ちゃん」

小猫はいつも部室で食べているお菓子の山を指差していた。ギャスパーも早速、その中の一つを手に取り、つまんでいた。小猫も一つを口に運び、微笑を浮かべる。

その様子を見た巧は、一先ずは安心の気持ちが出た。周りを見ると、アーシアやゼノヴィアは各勢力のトップとの邂逅ともあって緊張があるのか、二人とも深呼吸をしていたりと日常の風景に見えた。

「イツセー君は、凄いよ」

「はあ…？」

突然、隣の椅子に腰掛けた裕斗は開口一番にそう言い放つ。突然の賞賛に巧は背中が痒くなる。何いってんだよ、そんな視線を受けて、裕斗は優しい笑みを溢す。

「君が、居たからこの景色がある。君が居たからだよ」

「いきなりなんだよ」

何秒かの沈黙の後、巧と裕斗は同時に軽く笑う。

「木場…」

「裕斗、でいいよ。君とは対等でいたいんだ」

いつか、君を追い抜く。

その言葉は、彼の背中ではなく、隣で戦う事を決めた戦士の眼。その眼を受けて、巧は軽く笑うだけ。

「そうか…好きにしろ、裕斗」

こうして、彼らの会談までの時間は緩やかに過ぎて行くー。

目の前の扉が遠く感じる。

私、リアス・グレモリーは、今までに感じたことの無い緊張に見舞

われていた。これから自分の担う役目を考えると、そうなるってしまうもの無理ない筈…、と解をつける。

「リアス、緊張してるのですか？」

「そういう貴方も、でしょ？」

とある部屋の扉の前で、隣を歩く親友のソーナはそう尋ねた。とは言え、その彼女の服の端々が微かに揺れてる事から彼女も私と同じなんだと不思議と安心した。

私は一瞬、背後にいる私の眷属たちを見つめる。皆、私を見て笑顔を浮かべてくれる。

ふっと、体を縛り付けていた緊張は消え去る。私はドアの扉に手を添えて、ゆっくりと開く。

向こうの部屋からの光が、私の目に届いてきたー。

「彼女たちは、私の妹とその眷属だ」

「その隣にいるのが、妹のソーナちゃんよ☆」

部屋の中心に設置された円卓と椅子に座っていたのは、四人。その中の二人は、私も知る魔王様の二人。お兄様ーサーゼクス様の後ろには、グレイフィア。残りの椅子には、天使の代表ーミカエルと、墮天使の総督ーアザゼルが座していた。

アザゼルとミカエルの二人は、それぞれ自身の背後に部下を待機させていた。

ミカエルの背後には、一人の女性天使。アザゼルの背後には、見覚えのある銀髪の青年。

「彼女たちは、先日のコカビエルの事件において活躍した」

「彼女たち…じゃなくて、ファイズだろ。活躍したのは」

アザゼルの茶化すような発言に会場が静まり返る。けれども、私は彼の一言に納得していた。それは勿論、私以外の皆も…。

沈黙の中で、アザゼルの後ろで静かに笑いに耐える青年に目が留まる。

彼は、先日私達の前に現れた。巧さんとの会話からして、彼が墮天

使の組織に属する者である事は分かつてはいたが、この会議に出席出来るほどの人物とは想定していなかった。

「んじや、まあ…会談を始めようか」

この空気を作り出した張本人からの提案で、この世界も巻き込むであろう会談は密かに始まった。

部屋の壁際に立って、私たちは会談を見守る。今は、各勢力が他の二つの勢力に対する見解を述べる時間。三番手の天界の番が終わり、ここから議論が展開される。

ルシファア様や、レヴィアタン様が言葉を吟味した上で、発言していく中で、時折アザゼルは空気も読まない発言を敢えて行う。

「はあく。そんな堅苦しいのは、ごめんだ」

「堅苦しいなど、そんな事を言ってるのではなく…」

型破りな発言の後で、笑うのもその行動がわざとである事を物語る。内心、私はいつこの会談が破談になるでは、と不安になる。ふと、部屋に取り付けられた時計を見ると、既に開始から1時間が経過した事に気づく。

巧さん、ギヤスパー。

私は、今この場には居ない二人の事を考える。私の力が及ばないばかりに、旧校舎に残すという選択肢しかないギヤスパーとそんなギヤスパーの為に、敢えて面倒くさいなどと理由をつけて残ってくれた巧さん。

二人が、仲良くなってくれれば…なんて事を考えていると、隣にいた朱乃がこちらを見つめていた。朱乃に見つめられ、私も会談の間中である事を思い出す。

咄嗟に背筋を伸ばし、頬が赤くなるのを自覚しながら体勢を直す。

「…二人の事ですか？」

右隣の裕斗がボソリと少し距離を詰めて呟く。その小さな声に、私は静かに頷いて答える。すると裕斗は少し笑って、言葉を返す。

「大丈夫ですよ。ギヤスパ―君も、イツセー君も」

「ええ…そうね」

そこで会話を切り上げ、視線と集中を会議に戻す。

私が聞いていない間に、私とソーナの役目が高くなる事に気づく。互いにその事に気づき、私は持っていたプリントを取り出す。これは、先日のコカビエルとの戦いの詳細をまとめた物。これを元に、私とソーナは報告を行う。

「では、ここで議題を変えましょう。ここからは、先日のコカビエルの一件についてです」

「分かった。では、この街の統治者であるリアスからの報告を。悪魔から見た報告であるため、同じくこの街に住まうソーナ君を証人に務めてもらう」

「はい」

私達の声が重なり、同時に一歩前へ。

一呼吸おいて、私はプリントに目を通しながら報告を始める。

「以上が私、リアス・グレモリーが関与した事件の報告です」

最後に、ソーナも自身の名前の告げることで証人の役目を果たす。

報告を終え、余裕の生まれた私は代表者たちの様子を漸く見れた。

「…なるほど、ですが問題はあります。コカビエルの動機です。憎しみだけではないとはいえ、彼は再び戦を求めている。コレは由々しき事態なのでは？」

「それについて、堕天使総督はどのようなお考えで？」

私達も含めて、その場にいた全員がアザゼルを見つめていた。ここが一番の山場、不思議と私はそう感じ、見逃す事が出来ない。

「…奴にもうその意識はない。未来に目を向けるガキどもに負けて、今は俺たちの領地で静かに囚われてるよ…自分の意思でな」

「自分の意思…で？」

「ああ。圧倒的なまでの実力差を覆した若者に気付かされた…：らし

い

そう、コカビエルはあの戦いの後で悪魔側から墮天使側に引き渡され、その身は毎回の墮天使の領地で刑に服してる。彼を変えたのは、間違いなく巧さんだ。あの戦いを見れば、誰だってその事に気付いたはず。

「…ともかく、俺らに他所に戦争を吹っかけるつもりはねえ。んな、事してる余裕があるなら、神器の研究を優先するさ」

「セイクリッド・ギア神器。最初、あなたがその少年、パニシング・ドラゴン【白い龍】を戦力に引き入れたと聞いた時は肝を冷やしましたからね」

その時、私たちに動揺が走る。

彼が、伝説のドラゴンを宿す存在であることに。

白い龍、そしてその龍と双璧をなすのが、赤い龍。

この二匹は、下段の三大勢力の過去の対戦の際に、ドラゴン同士の喧嘩という理由だけで、戦場をかき乱し…その果てに、神器にその魂を封印されたという逸話がある。

その伝説とも言える存在を、目の当たりにして動揺が無いわけがなかった。しかし、この状況的に驚けない。

「信じねえだろうが、俺は神器の研究を戦争の為にしてたんじゃない。

……もう面倒なのはゴメンだ」

さっさと和平を、結んじまおうぜ

アザゼルの何気ない一言は、大きく歴史を変えた。その現場に居合わせた私たちは、そんな一幕をただ見てる事しかできなかった。

私達が動揺に包まれる中で、二人の魔王様やミカエルには動揺は見られなかった。

「たしかに、戦争の中心たる神と魔王は既に亡くなった。今の膠着状態は我々にとっても芳しくない。取るべき手段は、手を取り合い、互いの力を強くする事ですな」

「私もその意見には異論は無いわ。私達に取れる手は、少ないのだから」

「では、…そういう事でいいかな」

「漸く終わったな。…これでいい、例え神がいなくても、世界は回る。いや、回り続けられないとならない。俺たちは、ようやく前に進めるって訳だ」

アザゼルの言葉はこの会談の終わりを意味する。代表者の四人がフツと肩の力を抜いたのが分かる。それはつまり、この会談の山場を無事に越えた事を意味する。朱乃達も同様の反応を見せており、私もなんとか一段落出来たと安心した。

「では、姫島朱乃さん。兵藤一誠君をこちらにお呼びしてもらえませんか？」

「はい、かしこまりました」

朱乃は、そう言つて携帯を取り出して、巧さんへ連絡を取る。

「それじゃ、主役が来る前に…ヴァーリ。お前、和平が結ぶことについてどう思う？」

「…特に何も。俺の目的は変わらない。戦争があろうとなかろうとアザゼルは、自身の背後にいた青年ーヴァーリに、声をかける。けれど何処か上の空な態度と、冷たさのある答えに私は背中が強張るのを感じた。

その感覚と同時に、裕斗が彼に初見で危機感を抱いた事にも納得できた。

「そうかいそうかい。まあ、悪くはないな。次は…」

「イツセー君に話を聞くのかい？」

「まあな。アイツは面白い。例えば、世界に影響を与える存在でなくてもな。お前もそうなんだろう、ミカエル」

「ええ…。彼とは少し話をする約束になってますので」

「リアス…。イツセー君と、連絡が取れないのだけけど…」

朱乃が、私の元に近寄つて静かに呟く。ここで私の中で嫌な予感がある。言葉にはし難いナニカが、これから私達に襲いかかろうとしているのではないだろうか。

その瞬間、私達の感覚が止まる。

これは、ギヤスパアの瞳の効果……………。

その部屋にいた一部のものを除き、この会談に関わる多くの者達の時間は静止した。

時間は少しばかり遡る。

リアス達が、会談に参加していたのと同時刻。場所は旧校舎のオカルト研究部。

「よしっ…うん。…次は…」

部室のソファアの上で、段ボールに体を入れながら携帯ゲーム機を操作するギヤスパア。

傍目から見れば違和感の塊だが、この景色に既に慣れていた巧は何も言わずに朱乃が入れてくれた冷めた紅茶を味わう。猫舌の自分のために適度に温度を下げられた紅茶は、それでも尚美味い。朱乃に内心感謝して近くにあったクツキーを摘み、口に運ぶ。

「…うう、何か話した方がいいのかなあ…」

ゲーム画面に意識を向けながらも、時折自身の前方のソファアに座る巧に目を向ける。この沈黙をどうすればいいのか、コミュニケーション能力の低い為に判断に迷う。

それは巧とて同じ。先程からのギヤスパアの視線には気づくものの、不快感はない為に文句の一つも言わない。

けれども、目の前でこうもチラチラと見られては、言い分はしないのも事実。しびれを切らし、巧は口を開く。

「俺に、なんか言いたいことでもあるのか？」

「な、な、なんでもありません!!!」

「さっきから何でこつちを見てんだ」

尋ねる巧に、驚くギヤスパア。まるで会話になりそうにない雰囲気

だったものの、少しばかりの勇氣を取り出し、ギヤスパーは俯きながら呟いた。

「…イツセー先輩は、僕が怖くありませんか？」

「怖い訳ねえだろ。お前なんて」

「そうですよね…。先輩は、強い人ですから。だから、オルフェノクつて言う敵とも戦えるんですよ」

「リアスから、聞いてたのか？」

「はい。それに、フェニックスとのレーティングゲームも僕はここから見ていました」

次に来るのは、巧の罵声。少なからず、ギヤスパーはそう想定していた。自分は、あの時にリアス達の不利を知りながらも、ここで試合を見ていただけの部外者に成り下がっていた。そんな自分は、怖がらずとも、責められるだけの事をした自覚はある。

そんなギヤスパーの内心を裏切る様に、巧は間を少しばかり空ける。

「別に…お前が思うほど強くなんかねえよ」

「えっ」

現実として、乾巧は周囲が思う程に強いわけではない。何度か、ファイズの資格を捨てようとしたこともあった。戦線を離脱し、抜け殻に成りかけたこともあった。仲間に殺される事を願ったこともあった。それら全ての壁をなんとか壊し続けてこれたから、今がある。けれどもその壁も、一人では壊せる筈もなかった。

「俺も、お前と同じだ。一人じゃ、ダメだった」

「僕と…同じ？本当ですか…？僕も、僕も強くなれますか…」

巧は、一度だけ微かに笑いながら、応えた。

「成れるさ」

「は、はいーい、イツセー先輩？」

優しさの残る表情からの一変。巧の顔付きが険しいものに。その変化にギヤスパーも反応し、声をかける。

何か、来てる…。これは…。

巧の鋭い感覚は、既に【敵】を感知。それも、相手が一人ではなく

ん複数であることも。彼らの目的地が、ここである事も察していた。ならばと、巧は即座に行動に移る。リアスのテーブルの上に置いてあるナツプザックに手に取り、中にしまつてあるファイズギアを取り出す。

「わっ！」

「それ持つて後ろにいろ」

勢いよくナツプザックをギヤスパーにパス。巧の指示に従い、ギヤスパーは後ろに下がる。自身の後方に、ギヤスパーが居ることを確認。巧はファイズフォンを取り出し、この会談の後で連絡を取り合うことを約束した朱乃に電話を掛けるべくファイズフォンを開く。

番号ボタンに指が触れた瞬間。部室の扉を吹き飛ばす程の爆発が発生。それにより、壊された扉や木材が部屋を中心にいた二人へ向かう。

「下がれえー！」

「は、いい!!」

咄嗟に頭を抱え、地面に倒れこむギヤスパーを担ぎ、部屋の隅へ。巧の回避により二人とも無傷では済んだものの、敵の侵入を許す。

『部室には不審者が入つてこれない様に魔力を掛けて置くわ。用心のためね』

会談前のリアスの発言を思い出す。この状況を鑑みて、朱乃とリアスが施したそれを破壊できる敵が侵入して来たのだ。この部室、いやそれだけではなくトツプ会談が行われているであろう部室にもー。

「あらあら、まだ臭い息が二つもござんすね。…おやおや、お留守番をしているのは例のヴァンパイヤと、イケメン君かあのおチビさんかと思つてましたがね…」

爆弾により部室に漂う煙から姿を現したのは、巧が見知った人物。勿論、味方としてではなく敵として。彼が着慣れた神父の服ではなく、黒いコートと黒いズボン。コートに下に白いシャツを着ていた。但し、その狂った様な笑みに変わりはない…いや、寧ろ以前よりも攻

撃性の増した様な笑顔。

「おつ久しぶり！やあ、やあ、ようやくシヤバに出て暴れられますったく…最近の実験やら他の被験体しか会ってませんからねえ」

「おまえっ…」

「どうやら、僕ちんのこと忘れてないみたいだなあ。みんな大好き、フリード・セルゼンだよ!!」

軽快な動きと、人を馬鹿にした様な笑みを浮かべるフリード。その後ろには二十人以上は配下と思われる者がいた。その中には、スーツを着た者。ローブを羽織り、表情の伺えない者などがいたがそこまで気にする余裕は巧には無かった。

「何の用だ。洗濯物なら、受け付けねえぞ」

「いや、イツセー君の隣にいるそのクソハーフヴァンパイヤに用があるんで、退いて…って、そうは問屋がおろさないってね」

フリードが要求を伝えるよりも前に、巧はフリードに殺気を向ける。退く気はない、と意志を伝える。そんな巧の態度に、フリードは笑ってみせた。

「ヒヤハツハツハツ!!いいね、いいよ。サイコーですねえ、イツセー君。これだから、面白いんだよ!」

そう言っつてフリードは、そこから魔法陣を展開し、手を突っ込む。そこから何かを取り出す様な仕草を見せて、一気に魔法陣から手を引き抜く。

「…つつ!?」

「…ベルト…?」

フリードが取り出した物を見て、巧は驚き、ギヤスパーは首を傾げる。それと同時に巧の持つ物と、それを見比べる。

「イツセー先輩のに、似てる…」

ギヤスパーの指摘は、ほぼ間違いない。

巧の持つベルトと、フリードの取り出したモノーベルトは、似ていて当然なのだ。

同じ目的のために作られているのだから。

「変……………」

フリードは、取り出したベルトを勢いよく腰に叩きつける様にして装着。右手に持っていた銃のグリップの物——デルタフォンを右頬に近づけ、

「…………身」

『Standying By——Complete』

部屋に響く様に流れる待機音と共に、デルタフォンを右脇腹の部分に取り付けてあるビデオカメラ——デルタムーバーに換装。

フリードの体を、フェイスとは異なり白いフォトンストリームが走る。

「デルタ……」

巧は、目の前の戦士の名前を小さく呟く。巧の焦りを見て、フリードは変わらずに壊れた笑顔と声を高らかに上がるだけだった。

敵の姿

「デ、デルタ…？」

巧が変身するファイズに似た戦士へ変わったフリードを前に、ギヤスパーは巧の呟いた言葉を反芻するように聞き返した。とはいえ、巧自身もその言葉に返す余裕は無かった。

「…逃げ…」

逃げろと言いかけるのを、無理やり押し殺す。仮に逃げろと言ったとして、どう逃げる。リアス達のいる部屋に行けば安心ではあるもののその場所が分からない。第一、目の前の敵がそれを許す訳もない。彼らの目的がギヤスパーである以上。

「…さてさて、さつさとファイズに変身してよー。こちとら、他のベルト持ちとやりたいの!!アンタ以外は、一応味方って事になるから殺さないし」

『Standying By』

「変身っ!!」

『Complette』

最早、迷う必要はなかった。

仮面越しでも分かる殺意に、巧の本能が体を反射させる様に行動させる。先ほどのフリードと同様にフォトンストリームが体を走り、巧の体を戦士へ変える。

「うんうん。君は会談に出ると予想していたけど、まさかここにいるとはねえ。まあ、そのおかげで仕掛けが役に立ちそうだよっ！」

デルタは後方に下がり、同時にローブを着た女性達が前に出る。その瞬間に、ファイズの足元に魔法陣が展開される。その光景は、ライザーとのレーティング・ゲームの一幕を想起させる。

ライザーの『女王』は魔力による爆発を用いて、ファイズの間隙を突く動きを見せた。その一瞬の間隙が、ライザーを勝利に導いた。

反射的に巧はギヤスパーに向かって手を伸ばす。それが、今の巧にできる一番の守り方だった。あと数センチで、ギヤスパーの肩に届かんとした瞬間、一発の光弾が巧のローファイズの手の甲に被弾。その

手は、ギヤスパーに届く事はなく、その体を強い光が包んだ。

光に包まれ、時間の感覚が無くなりかけていた巧ではあったが、仮面―アルティメットファインダーに視界が広がる。そこは、見慣れた場所ではあったが、部室ではない。

校舎から、旧校舎にかけての道。木々が生い茂り、まるで森林公園の一部の様。そこにいるのは、巧だけではなかった。

「ようやくアンタと遊べるよ。ねえ、イツセイ君」

「アイツに、ギヤスパーに何する気だ」

巧の前には、デルタ。そして、そのデルタの配下であろう黒スーツの男たちが計10人。

11対1。あまりに不利な状況に、普通なら腰が引けても可笑しくはない。しかし、そんな事で怖気付く様な男ではない、乾巧は。

「あのクソハーフヴァンパイアの眼を使つて、パーティが始まるって手筈なんすよ。上司曰く」

「パーティ…!?!」

時間が止まる感覚。何度目かの感覚だが、どういう訳か巧には通用しない。これが意味するのは、フリードの言うパーティが始まってしまった。

「…ちっ！」

舌打ちをして旧校舎へ走り出そうとする巧を遮る様に、黒スーツの男たちが動き出す。上に来ていたスーツのボタンを外し、ソレは露わになる。

「変身」

腰に巻きつけてあるベルトのバックル部分にある縦に取り付けてあるプレートを横に倒す。

まるでライダーに変身のような仕草で、男の体は変化する。一人が変身し終わると、他の男たちも同様に変身を完了させる。

その戦士の名前は、ライオトルーパー。ファイズやデルタ、そしてカイザには及ばないものの多対一の様な集団戦のために制作されたライダーズギア。その効果が最も発揮されそうな状況下で、巧に襲いかかろうとしていた。

「本当は嫌なんすよー、こういうの。でも、アンタをやるにはこれくらいじゃないとダメって言われちまったんで…ねえ!!」

デルタが駆け出すのを見て、ライオトルーパー達が追うように巧、ファイズに突貫。

待つ形のファイズは、いつものように右手をスナップ。カシャつという金属音が響いた。――

今、僕――木場裕斗は、止まった世界の中にいる。より正確に言えば、ギヤスパ―君の持つ神器の力により生まれた停止世界の中。数秒前つまり、この場所に停止の力が及んだ瞬間に僕は聖魔剣を創造。停止の力を跳ね除けた。

僕の隣にいたゼノヴィアも見たところは同じ様な事をして、停止されなかったんだろう。その証拠に、彼女の手にはデュランダルが握られていた。その刀身からは悪魔からは毒にも等しい聖なるオーラを漂わせる。

「木場…いまのは」

「うん。間違いない、ギヤスパ―君の眼の力だ」

僕は隣にいたはずの部長、朱乃さん、アーシアさんの様子を見て確信していた。3人とも停止の力を受けてしまい、まるで石化しているように見える。これは僕が停止の世界の外側にいるからこそその見え方ではあるけど。

「俺たち上位の力を持った者は、別にして…ここまで残るか」

墮天使勢力のトップブーアザゼルは、停止されなかった僕やゼノヴィア、そしてミカエルの部下である天使の女性を見ながら呟く。その表情からは何故か焦りを感じはしなかった。むしろ、この状況を予想していたように見える。

「あれは、…ま、魔法使い!!ムムム、魔女っ子の私を差し置いてあんなに目立つなんて!!」

子供っぽい言動のレヴィアタン様に苦笑したくなるが、それよりも気になる発言に、僕は窓から空を見つめる。

「…これは」

僕の知る駒王町の空ではなく、巨大な魔法陣が空に広がる。そこからローブを纏う存在、魔法使いが次から次へと出現していく。

ここで絶望的なことに、この会場の介護を担っていた墮天使や悪魔などは停止の力により攻撃を受けるのみの形に。

ふと、ここである事を思い出す。会談が始まる前に、ギヤスパ―君の側にはイツセー君が居たはずだ。この反乱には、ギヤスパ―君の力が利用されている。つまり、もう既にイツセー君は倒されてしまった可能性も十分にあつた。

「……っ！」

「落ち着け、木場」

旧校舎に向かおうとする僕を、ゼノヴィアは肩を掴んで止めた。ここで、頭に登っていた血液が引いていくのを感じる。

「無策に飛び出しても、無駄に命を落とす可能性が高い。ここは、作戦を練るべきだ」

あまりにも真つ当な正論に、僕も頷くしかない。振り返ると既に、サーゼクス様は作戦思案のためにグレイフィアさんと言葉を交わしていた。

「この停止の力は、ほぼ間違いなくギヤスパ―君のものだ。ならば、最初にギヤスパ―君を敵の手から取り戻す必要がある」

「しかし、今はこの場所を含めて、転送が儘なりません。恐らくは敵の妨害によるものですが…」

あの敵の数をうまく掻い潜り、ギヤスパ―とイツセー君の元に行く必要がある。…僕は、咄嗟に手を挙げた。

「僕が、行きます。僕が二人を助けに行きます」

「…木場。そこは「僕が」ではなく「僕達が」ではないか？」

僕の隣に立つ形で、ゼノヴィアも二人の救出に名乗りを挙げた。

サーゼクス様は、一瞬の思考を見せた所で、答えを出したのか目を軽く細める。

「この役目は、危険が高い。それでもいいのかね」

「はい。仲間が、捕まっているのならばそれを助ける為に僕はこの聖魔剣を振るいます」

「私も同感だ。短い付き合いとはいえ、あの泣き虫を放っておけない。それにイツセーにも返さなければならぬ借りがある」

僕達の言葉を受けて、サーゼクス様は軽く微笑んでありがとう、と返してくれた。

「いい度胸だな、お前ら。：おいヴァーリ、お前も力を貸してやれ」

「了解…。まあ、肩慣らしにはなるだろうな」

アザゼルの言葉を聞き、ヴァーリは背中から翼を生やす。：いや、あれは神器だ。

バランス・フレイク
「禁手化」

その言葉と共に、青い光に包まれたヴァーリは、白い鎧に纏っていた。翼を軽く翻して、飛び出していった。

あれが、白い龍の力。伝説のドラゴンの一角。知識としては知っていた物が、目の前に現れるどう言葉にするか迷う。神々しさすら感じられる鎧を着た戦士は、空に浮かぶ魔法陣に向かっていく。

「：君が、彼を危険と判断したのは間違いない。私も同じだ。彼の、あの力は：危険な匂いがする」

いつかの僕の判断を肯定するが、今の彼は頼れる存在だ。彼が、暴ればそれだけそこに目が向かう。僕らも行動がしやすくなる。

彼が暴れる内に僕らも動くべきだ。そう判断を出し、魔王様達やグレイフィアさんに外へ出ることを伝えようと声を掛ける寸前、床に魔法陣が二つ出現。

「これは、レヴィアタン…の」

魔法陣の紋章を見て、グレイフィアさんはすぐに答えを出し、隣のサーゼクス様やレヴィアタン様は顔色が一変。特に、レヴィアタン様は明らかな動揺が見られる。

それに、グレイフィア様の言葉の意味はー。

「御機嫌よう、三大勢力のトップ達」

魔法陣と共に現れたのは、二人の女性。僕らローいや、サーゼクス様達に声を掛けた褐色の肌をしたドレスの様な服を着た女性。もう一人も女性ではあるものの、まるで街中に居るような女の人。黒いズボンに白いワイシャツといった格好。二人は正に対照的という言葉が合う。

「私は【真】の魔王を血を引く者、カテレカ・レヴィアタン。今日、この場で貴方方の首を取るために馳せ参じました」

「カテレアちゃん…！」

「そしてロー」

彼女の言葉に嘘はない。元々、魔王は血筋による世襲制だ。しかし、三大勢力の終結後に冥界は二つに分かれた。他の勢力を倒す事を目的とした派閥と、悪魔という種を守る事を目的とした派閥に。当然、相反する勢力はぶつかり合い、後者が勝利を掴んだ。その際のリーダー格にサーゼクス様やレヴィアタン様がいた。

そして、負けた勢力ロー旧魔王派は、冥界の僻地に身を置いた。同時に、旧魔王派の指導者達は歴代魔王達の血縁者。彼女がレヴィアタンの椅子に座っていた可能性も否めない。

「ローこれで、終わりですっ！」

彼女、カテレアは手に持っていた杖を振り上げた。その時、杖の先端から光が発生。それから漏れ出す魔力は、明らかな殺意が込められていて。

強い爆発が、僕達を襲った。

「あら、これで終わりなの？ 呆気ないのね」

「…貴方は目的の人物に会えたのですか？」

爆発の中心からゆっくりと地面に降り立ったカテレアは隣にいた女性と牽制するような言葉を交わす。常に笑顔を絶やさない女性の

態度はどこか不気味であり、妖艶な魅力を纏う。

「残念だけど、フラれてしまったようね。フリード君の方が当たりだったわ」

「そうですか。……やはり、あれだけでは無理ですか」

会話に一区切りつけて、爆発と煙の中心地から魔力によるシールドに似た物を発見。カテレアは攻撃の失敗を把握。

その事に不満げはなく、むしろ当然とさえ思っていた。

一度は、自分を退けた者達が、呆気なく破れるはずもない。

「三大勢力のトップが、防御結界ですか……。その悪足掻きが、どこまで持つのですかね……」

カテレアの目に移るのは、魔王や天使の長、そして墮天使総督のみ。そう、そのメンバーにばかり目が向いていて、他のメンバーには目がいつてなかった。そこから消えた二人の若い悪魔のことなど、頭の片隅にも無かった。敵意と、復讐心に満ち満ちたカテレアの隣で、女性は静かに囁く。それは、美しさも同居してはいたが見た者に恐怖を抱かせる類の物。どこか獣めいた瞳で、カテレアの姿を逸らすことなく見定め続けていた。

「貴方達は、ここで終わる。そして、私達がこの世界を再び構築する！」

「…貴方は、この世界が目的ですか？」

防御結界を解いたミカエルは、落ち着いた声で言葉を返す。当然、相手はそれを望んでいる訳もないが。

「ええ。この腐敗した世界を…私達が、変革する」

高尚な言葉を述べてるつもりのカテレアの後ろで、共にある女性は、くすくすと笑いを浮かべる。アザゼルだけは、それを見逃す事をしなかった。

仲間への行為としては、違和感がありすぎる。アザゼルは、決してそれを飲み込む事はせずに確かめる。

「高尚な言葉を言ってるつもりでも、後ろのお仲間は笑ってるみたいだが？」

「…つつ!?」

「失礼な、そんなことする訳ないでしょ?」

女性は、戯けた態度と言葉を見せるが、それが嘘であることなどこの場にいる全員が見抜いていた。

「…まあ、なんであれアイツが敵である事に異存はねえな?」

「カテレア、降る気はないのか?」

「貴方は、真の魔王ではない!そんな貴方の言葉に縛れる物など有りはしない!」

最早、衝突は不可避。アザゼルは前に出て臨戦態勢を取る。相手が相手なだけにカテレアを気を引き締める。

魔王の血を引く者と、堕天使総督は互いの最速を持って相手に突貫していったー。

「木場…こつちだ!」

「分かった」

テロリストと思われる女性の襲撃の最中、僕とゼノヴィアの二人は旧校舎の近くにまで辿り着いた。

あの爆発の後、アザゼルの指示で僕ら二人は建物に身を隠し、戦闘を回避しつうここまで来た。

「そう言えば、それはなんだ?」

「ああ、これは…」

僕の手にある腕輪を見て、ゼノヴィアは僕に尋ねた。これを手渡したのはアザゼル、その効果は。

「ギヤスパ―君の力を抑えるための物らしい。堕天使は特に神器の研究に力を注いでいるらしいからね。こういった物を作れても不思議じゃないんじゃないかな」

「…そうか。言われてみれば、ギヤスパ―を助けたとしても、暴発した力の止め方までは考えていなかった」

そんな会話を繰り返していくうちに僕達の目の前に見えたのは、変

わり果てた旧校舎の姿だ。爆発と敵の襲撃により、壊された壁や外に露わとなる部屋。

僕達の大切な場所をこんな風にした敵に、怒りをぶつける気持ちが高まる中で、見慣れたバイクが倒れてるのを発見。

「…それは、イツセーのバイクか。壊れてるのか？」

「いや、完全には壊れては無いと思うけど」

地面に倒れたバジン君を立て直す。車体に傷はついてるものの大きな破損は見られなかった。素人目だから、確信は持てないけど。

「確かここを…」

『Battle Mode』

「へ、変化した！」

僕は、バジン君の座席より少し手前に付いたボタンを軽く押す。聞いたことのある音声が鳴って、バジン君の体は変化していく。バイクだったはずの車体は、人型の大きなマシンへ。初めて見たゼノヴィアは、開いた口が塞がらないと言った様子だ。

「バジン君、力を貸してくれないかな？」

バジン君は力強く頷く。そして、その体は旧校舎へ向かおうとする。

僕もゼノヴィアと顔を見合わせて、互いに前に進む。その手には、愛刀を携えて。

階段を登り、部室の前に立つ。

この部屋の向こうには、複数の敵の気配が感じられる。そして、ギヤスパー君の魔力も。けれど、イツセー君の魔力は感じられない。

「この程度の敵に…イツセーが負けたのか？」

「…まずは、ギヤスパー君を助けよう」

そうだな、そう言葉を切って会話が終わる。ドアに対して正面に向かって立つバジン君が勢いよく拳を振り抜き、砲弾ともいえよう威力で拳を叩きつける!!

ドアが吹き飛ぶ風圧を感じながら、僕とゼノヴィアは部屋に突入。

奇襲により動揺を見せる敵――魔法使い。敵の数は、10人。ギヤスパ―君の位置は、部長の机がある辺り。速度に長けた僕は、敵への攻撃よりもギヤスパ―への接近を図る。

攻撃役としては、破壊力に長けたゼノヴィアと馬力の高いバジン君が。

「おのれっ―！」

ギヤスパ―君を拘束、そしてその力を増大させる魔法陣を発動させていた魔法使いを攻撃魔法を唱える前に一閃。聖魔剣で切り裂き、その体は倒れこむ。

「木場、こちらも片付いた。…それより、彼はすごいな。私が二人を片付けた間に残りを倒していたぞ」

ゼノヴィアの視線はバジン君に向いていた。文字通り、その身一つで魔法使い達を屠っていた。彼が居なければ、この奇襲も難しかった筈だ。

「あっ…！」

ようやく魔法陣が消えて、体を拘束する物が無くなったギヤスパ―君が僕に向かって倒れこむ。その体を受け止めて、腕にアザゼルから貰った腕輪を取り付ける。何秒か掛けて、息を与えようと深呼吸を行うギヤスパ―君。ようやく落ち着いたのか、いきなり僕の服の掴む。

「いつ、イツセー先輩がっ!!敵に、連れてかれてしまっ―！ぼ、僕を助けようとして」

その時、轟音が響いた。音の方向は、僕達が通ってきた道とはまた違う方角。けれど、距離はそう遠くはない。

間違いない、彼が戦っているんだ。

「ギヤスパ―君、立てるかいい？」

「は、はい！」

「バジン！君の主人を助けにいくぞー！」

僕達は、音のする方―イツセー君が居る場所へ向かった。

「らあっ！」

ファイズの拳が、デルタの装甲を捉え、そこからの乱撃。アッパーやフックを織り交せて逃さない。ライダースーツを身に纏っていたとしても、人体急所は変わらない。その筈なのに、デルタは、倒れなかった。

「ヒヤハツハツ!! まだまだ足りませんなあ!!」

フックによる一撃を膝を立てて受け止める。カウンターの一撃を、腹部と顎に一発。それ以上の追い討ちをせずに距離を置く。同時に、三人のライオトルーパーがファイズに接近。銃と剣を兼ねた武器——アクセレイガンを振るう。体勢を崩したはずのファイズは、それらの三つの斬撃を受ける事なくスウエーのみで避ける。避けると同時に、三人全員にカウンターをお見舞い。

「…つち、ウゼエな」

何秒かの間を開けるとデルタとライオトルーパーは、ファイズを覆うように輪を囲む。これは圧倒的な実力差を覆す為の戦術だ。

デルターフリードとて、本来の戦い方は剣や銃を使った機動力のある戦い方だ。肉弾戦では巧に大きく劣る。そして、このライオトルーパー達に変身した者達はもつとそうだ。

一年間、多くのオルフェノクとの戦いを切り抜けてきた巧にしてみれば、問題なく対処できる。

事実、戦い始めた時は十人いたライオトルーパー達は、五人にまで減っていた。

そろそろ決着をつけなければ…。敵に捕まってしまったギヤスパアの事を考えればここでの時間の浪費は無駄でしかない。ファイズは、パンチンググニット——ファイズショットを取り出す。

『Ready』

『Exceed Charge』

ミッションメモリーを換装、Enterキーを押して必殺技を発動。フォトンブラッドがファイズの体を走る。

「はっ！」

ファイズは、強く地面を蹴って飛び出す。その先に、デルタが。同

時に邪魔するように残りのライオトルーパー達がファイズの前に立ち
はだかろうとするも、二つの影と地面から出現した剣により阻まれ
る。

「行け、イツセー！」

「今だ、イツセー君！」

ゼノヴィアと裕斗
二人の剣士に後押しを受けて、ファイズはさらに加速。ここに来て
の加速にデルタは反応出来ずに、防御の体制を取るだけ。その防御の
上から全力のグランインパクトを叩きつける。

「がはっ！」

地面に体が叩きつけられ、ベルトは衝撃で外れてしまう。デルタは
その姿を維持出来ずにフリードへ。

ファイズに似たベルトの戦士の正体が、自身の幼馴染だと気づいた
ゼノヴィア。

「アレンっ!!」

「ダメよ、お嬢ちゃん」

「ゼノヴィア先輩!!」

「ゼノヴィア！」

堪らず駆け寄ろうとする彼女の前に、一人の女性が。ゼノヴィアに
迫る危機に、裕斗とギヤスパーはゼノヴィアの名を叫ぶも遅かった。

ただ、巧にだけは違う反応を見せていた。

女性は、巧にとって初対面ではなかった。

裕斗やゼノヴィアにとっては、カテレア・レヴィアタンと共に会談
の場に現れた女性であったが。

何度も、何度も死闘を繰り広げて来た。

巧が、乾巧の時からー

「ー影山、冴子…」

巧の記憶と変わらない恐怖を抱かせる笑顔を、女性ー影山冴子
は、見せていた。

「…ようやく会えたわね、ファイズ」

運命を求めた青年

「そいつを離せ。ぶっ飛ばされたくなきやな」

「あら、随分とビックマウスね。余程、この子の事が大切なのかしら？」

ゼノヴィアの喉元を銀色に光るレイピアで撫でながら、挑戦的な声色で笑う一体のオルフェノク―ロボスターオルフェノク。

その声に、彼女の腕で抑え込まれたゼノヴィアと剣を構える裕斗は聞き覚えがあった。

まさに一触即発の状態。ファイズにしても、人質を取られてる以上は無理な攻撃は仕掛けられない。けれど、この敵を見逃す事もしたくない。

ロボスターオルフェノク―影山冴子は、巧がまだ乾巧であった頃からの敵。オルフェノクの中でもトップクラスの實力者であり、アークオルフェノクとの最終決戦の際にも上手く逃げ延びていた。巧が何より警戒しているのは、實力よりも行動。この女が動けば、少なくとも人類にいい方向には向かない。予知にも近い巧の勘と思考が、ここで仕留めるのが最善と判断。しかし、その一歩を踏み込めない。

「いい子たちねえ…。偉い子にはご褒美をあげないとねっ!!」

突然、ゼノヴィアを解放。ゼノヴィアの背中を軽く押して、前方へ。その行動を見て、ファイズと裕斗が動く。

動き出す二人を見て、軽く笑う。ロボスターオルフェノクは腕を構え、溜めの動きを。そこから自身の持つ筋力を最大限に引き出した上での一撃必殺―突きか放たれる。

「ダメエ!!」

そこから見える未来に争うようにギヤスパ―は、声と共に意識を目に集中させる。ロボスターオルフェノクを停止させるために。けれど、まだまだ力に翻弄されかけている状態では、間に合わない。

「…アレン…」

刃が自分に迫る事を受け入れ、木にもたれる形で倒れる幼馴染の名前を呟いて、ゼノヴィアは目を瞑る。

彼女の肉体を、細い刃が触れた瞬間――甲高い音が聞こえ、刃はそれ以上進む事はなかった。

「二人から…離れろっ!!」

ロブスターオルフェノクは聖魔剣の一撃が自身に迫った事を認知し、後方へ大きく下がる。彼女の視線は、ファイズでも裕斗にも行かず、折られたレイピアに向けられていた。

次いで、その視線は折った張本人に向けられる。

「流石ね、ファイズ。腕前はまだまだ健在ね。…でも、今回はここまでね」

「…っ!」

逃すわけには行かない。ファイズは一気に距離を詰めようと駆け出す。ロブスターオルフェノクはそれよりも遙かに速い速度を持って視界から外れた。同時に、倒れていたフリードとデルタギアを回収していた事にも気づく。

「…すまない、イツセー。私の所為で」

「いや、アイツは最初からやる気は無かった」

変身を解除し、ファイズから巧の姿に戻ったのを認めてからゼノヴィアは謝罪をする。対する巧は、特に怒りといった感情は見せずに冷静を保つ。

巧の中の影山冴子は、決して不利な戦いは行わない敵。自身が有利な状況で仕掛けてくる。先ほどの状況でも、巧が有利になりつつあるのを察知し戦闘を避けた。だからこそ、ここで倒しておきたい敵であった。

四人と一台は一段落といった雰囲気になりつつあったが、その雰囲気は一回の爆発で吹き飛ばされる。

爆発の中心は、校舎のある方角。裕斗とゼノヴィアは、すぐに察する。あれは、アザゼルとレヴィアタンの戦闘の余波。

「行くぞ」

二人の顔を見て、まだ終わりではない事に気付く。すぐさま巧は前に向けて歩き出す。

彼を待つのは、本来のこの体の持ち主とそこに宿る存在が戦わなけ

ればならなかった宿敵。

もう一人の伝説のドラゴンを宿す者。

——同時刻、駒王学園空中——

「あらよつと!!」

アザゼルは己の掌から生成した光の槍を、前方に構える敵に射出。10を超える光の槍は最短距離で、カテレア敵に向かう。

悪魔にとつては猛毒の槍、それも墮天使の総督が放ったそれは、下級の槍の比ではない。それを知るカテレアは巨大な防御魔法陣を展開。盾と槍がぶつかり合い、相殺。

それを確認し、一気に間合いを詰める。その一瞬で、自身の右腕に魔力を集中させる。腕からは灰色の霞んだ光が放たれ、その威力が重い事を物語る。対するアザゼルは臆する事なく、放たれた拳の一撃を難なく受け止めた。

「おいおい、この力にこのオーラ。かつて負けた魔王一族の末裔にしちゃ随分なもんだな」

「黙りなさいっ!!」

売り言葉に買い言葉。

アザゼルはこの襲撃と今の戦闘を通じて、カテレアを分析した。今、自分が戦っているカテレアはかつてのカテレアとはかけ離れた力を見せつけている。

ここでの可能性は一応は二つ。自身を鍛えて、力を蓄えた——プライドの高い悪魔の大半は修行などはしない——可能性はない。

もう一つは——。

「誰だ、お前にそんな力を与えたのは」

「っ!?!: 流石ですね。あなたを褒めるなど不愉快ですが」

「やめろよ、照れるだろうが」

「だからこそ貴方はここで終わるっ!!」

アザゼルが受け止めていた筈のカテレアの拳から尋常でないほど

の力が。本能的に危険を察知したのか、手を離す。

次の瞬間――アザゼルは、己に迫る拳を捉え、同時に気づく。その腕には蛇が巻きついていた事に。そこから放たれる禍々しいオーラは、アザゼルの思考に一筋の仮説を掴ませる。

「蛇……まさか、お前ら」

「死になさいっ!!」

そこから先は言わせないと言わんばかりの突貫に後方に下がる事も出来ず、半身になって攻撃をストレスで躲す。衣服が少しばかり破け、頬からも僅かに血が流れる。

「余裕が無くなってきましたね……アザゼル」

「そうだな、そろそろ奥の手って奴を出してみるか」

破けたコートのポケットから取り出したのは、一本の槍。しかし、その大きさはナイフ程度で、持ち手の下には紫色の宝玉が取り付けられていた。

それは、正にアザゼルにとっての切り札ともいえる存在。

バランス・ブレイク
「禁手」

その言葉に呼応し、宝玉からは強い光が放たれる。数秒間その光は続き、輝きが収まるとアザゼルの姿は金色の鎧を纏っていた。

「作ったという事ですね、忌々しい神器をつ!!」

人工的な神器の開発と研究。それが、今のアザゼルの最大にして唯一の趣味。それは最早、趣味の範囲を超えて、一つの武器にすら昇華された。その武器と共に、アザゼルは前に進む。

「貴方の命と共に――」

「今時、敵の前で喋るのなんて古いぜ……?」

言葉を紡ぐカテレアの懐に一瞬に入り込み、拳を打ち込む。シンプルな打撃でもアザゼルのスペックと神器の元になった存在も相まって、必殺技になり得る。

「こいつは五大龍王の一角、ファーブニルを封じ込めて作られた神器で、俺の最高傑作だ。それ、もう一丁!!」

容赦なくカテレアの頬に打ち込まれたフックパンチ。攻撃を受けて、空中から地面に急降下――地面に叩きつられる。数十メートルも

地面を転がり、ゆっくりとした動きで、杖を支えに立ち上がる。

「ここまで……ですか。でも、ここで終わるわけにはいかないっ!!」

カテレアは、命を捧げた。

この突貫は、自殺に等しい。

目の前の敵を倒すことは出来ない。せめて、道連れにすべきだ。

ある意味、彼を敵として認めているからこそその選択。カテレアの身体は人体のルールを破り、ゴムのように腕が伸びた。突貫する身体と共に腕はアザゼルの右腕に絡みつく。それが意味する事は――。

「なるほどね、道連れって訳か。だが悪いな」

「……………」

何の迷いも躊躇もなく、アザゼルは光の槍で己の片手を斬り落とす。その行動を見て、カテレアはただ自分の負けを確信した。

彼女は、己の頭を貫く槍の明るさを拒むように瞼を閉じた。

「あれは……アザゼル」

「勝ったみたいだね」

校舎に着いた巧たちの上空で、アザゼルとカテレアの戦いが終わった。しかし、四人と一台に訪れるのは平穏ではない。

彼らを待っていたのは、自身たちを狙う無数の魔法使い。特にギヤスパ―。彼を取り返せば、この静止した時間の解除はされない。敵の狙いを察知し、巧は裕斗に視線を送る。それだけで、裕斗も巧の考えに気づく。ギヤスパ―を抱えて、防御結界を張る魔王達の元に駆け出す。

「この数を彼は一人で相手にしていたのか」

エクソシストとして幾度となく実戦経験を積んできたゼノヴィアでも驚く、数の差を物ともしない白い鎧を纏った戦士に賞賛の言葉を呟く。隣の巧は、特に躊躇する事なく冷静な様子で変身コードを入力。

『Standying By』

「変身っ！」

『Complete』

ファイズへ変身を完了させて、ファイズエッジを換装。バトルモードになっているバシンと共に敵に向かう。

何秒か遅れはしたもののゼノヴィアも追いかける形で、駆け出す。

視界に映るのは、敵、敵、敵、敵。

四方からは敵が常に視界に映る。1秒たりとも気が抜けない。だけど、ゼノヴィアに不安は無かった。自身の背中を守る存在がいたからだ。見たことのない鎧——実際は強化スーツだが——を纏った仲間と人型の変形ロボットのバイクという変わり過ぎるメンバーではあったが。

「ふんっ！」

手を持って余す程の威力と切れ味を誇るデュランダルを振るい、敵を屠る。一撃で敵を沈め、次に目を。この動作を何回も繰り返すが、同時に背後にいるファイズは、その動作を連続で、速度も桁違い。改めて、彼の実力の高さを再認識する。同時に、変形バイクことオートバジンも遠距離魔法を放とうとする魔法使いを認知すると、バスターホイールという遠距離射撃を繰り出す。

ゼノヴィア達を囲う魔法使いの背後では、裕斗が仲間内では巧以外では反応する事が難しい超速移動と共に聖魔剣を振るい、確実に敵を葬っていく。

しかし、状況は芳しくない。

まだ時間は停止し続け、敵の魔法使い達は駒王学園に転移し続ける。それに加えて、こちらの増援を呼ぶ魔法陣を使えないようにしている。

つまり、この停止状態を解決しなければ、状況は変わらない。

「ほ、僕のせいだ…」

ほぼ永久的に増え続ける敵を前に、諦めない仲間や自身の能力で停止した仲間達を見回し、ギヤスパーは膝をついた。

悔しい。なんで、なんで僕はこんなに弱いんだろう。

僕が、裕斗先輩みたいに、ゼノヴィア先輩みたいに。

そして、イツセー先輩みたいに強ければ、きつとー。

いや、違う。どんなに望んでも、僕は僕でしかない。

今までは、過去は変えられない。けど、今を…未来を、変えることは出来るかもしれないんだ!!

「僕が、強くないと…いけないんだっ!!」

ギヤスパーの叫びに呼応するように、彼の両目は強く光る。

セイクリッド・ギア

バランス・ブレイカー

神器には、禁手と呼ばれる形態が存在する。先ほどの、時

間停止はそれにあたる。あの結果は今のギヤスパーの自力ではない。魔法使い達がギヤスパーの潜在能力を無理やり引き出した上での物。

それが、キツカケになる。

ギヤスパーと時間停止に陥った者達を庇うための防御結界を張っていたサーゼクスは、そう直感。だからこそ、ギヤスパーに対して何もしなかった。

その直感は、現実のものになった。

「…えっ?」

誰かの口から漏れた声。

突然、止まっていたはずの時間が動き出した。その証拠にリアス達は動き出し、学園全体にすら及んでいた時間停止の際に発生するオーラは消え去った。

魔法使い達には動揺が走る。自身達を有利にしていた状況から一変。サーゼクス達の魔法陣の使用が可能となる事を察知するやいなや、逃げ出す者もいた。

その恐怖はやがて多くの者に伝染。学園にいた魔法使いの半分近くは逃げ出していた。

「お兄様、これは一体どういう…」

「今は、説明している時間が惜しい。彼らと共に戦ってほしい」

時間停止を受けたことのみ、微かに記憶にはあるが状況を把握しきれないリアスは、サーゼクスに尋ねる。

リアスは、兄が指差した方向を見て、瞬時に気持ちを切り替える。

「朱乃、小猫、ソーナ、行くわよ。アーシアは、ギヤスパーをお願い」「は、はいっ！」

唯一、戦闘要員ではないアーシアに、気を失って倒れているギヤスパーの介抱を任せて、リアス達も飛び出す。

大切な人と共に戦う為、飛び出す妹の背中を見て、何も感じない訳ではない。

「サーゼクス様、ここは私も…」

「ああ、この結界は私とミカエルで十分だ。彼らを…頼む」

本当なら、若い彼らではなく自分が敵と戦うべきなのに。魔王という立場上、彼らはそう簡単には動けない。サーゼクスの隣にいるセラフォルも同じ。

最も信頼し、愛する女性に妹とその大切な仲間…いや、家族を託し、魔王は戦場を見つめ続ける。

「はああ!!」

「雷よっ!!」

リアスの滅びの魔力と、朱乃の雷が遠距離からの魔法を吹き飛ばし、尚且つ、魔法使い達を襲う。

魔力弾が放たれ、リアス達が狙われるもソーナの生み出す水壁が、直撃を阻む。

軽快なスピードで、小猫とゼノヴィアが敵に肉薄し、互いの攻撃を敵に放ち続ける。

二人を超える速度を持って、裕斗は聖魔剣を振るい、敵を切り払う。そして、ファイズはー。

「やあああ!!」

光剣を操り、敵集団を分裂させる。一人で既に百人以上の敵を斃していた。分裂した半分をリアス達に任せ、残り半分―五十人は下らない―をオートバシンの二人で対峙する。

「ちっ!!いい加減、くたばりなさい!」

「二人で調子に乗りすぎよっ!」

あくまで近距離での攻撃しかないファイズ相手に、敵もわざわざ突貫してくる訳もない。だが、ファイズは敵の放つ魔力弾を全て切り裂き、放たれた魔法を回避。

「…なぜ避けられる!」

魔法使いの一人が、自身がファイズの背中から放った爆発の一撃を難なく避けられた事に驚愕。そんな動揺を見せる隙をついて、必殺の一撃を浴びせる。

「ならば、同時だっ!!」

一人の魔法使いの声に合わせ、魔法使い達が一斉にそれぞれの魔法を放ってくる。それら全てを薙ぎ払おうと剣を構えるファイズの前に、メイド服を着た女性が。

「…アンタ…」

「怪我は大丈夫ですか?」

片手で魔力での防護壁を展開。正面からの魔法攻撃を全て封じる。涼しげな表情で、こちらの安否を確かめる銀髪のメイド―グレイファイアに仮面の下で驚いた表情を見せる巧。

「貴方達を一人も欠かさせる訳には行きませんからね」

「なら、あっちに行ってくれ」

あっち…とは、言うまでもなくリアス達の事だ。巧は、自信過剰でも傲慢―素直ではないが―な人間ではない。今の自分の実力とリアス達の実力を考えて、一人で敵を引き受けている。

「確かに事実上コカビエルを倒した貴方に下手な手助けは必要ないとは思いますが…。貴方の戦う姿は、あまりに哀しい」

「…かもな」

自分よりも遥かに強く、大人のグレイファイアの言葉に否定は出来ない

かった。

自分と同じ種族であるオルフェノクを斃し、最期にはその王まで。こちらの世界に来てからは、オルフェノク以外の種族とも戦った。その中で、傷つくのは自分だけであつて欲しい、と思うようになっていた。また出会えた大切な仲間にも、傷ついてほしくない。

ー死んでほしく、ない。

そんな思いからか、巧は一人で敵を倒す事を意識している。無理をした姿は大人から見れば、背伸びしてる子供と同じ。

「貴方は、リアスにとって大切なー」

音が聞こえた。

グレイフィアにより紡がれる言葉よりも、そちらの音に反応。音が聞こえたのは、二人から10メートルも無かった。

一瞬遅れて、爆風がファイズとグレイフィアを襲った。地面を転がる巧は、自分の変身が解除された事に気がつく。

「イツセー！」

転がった方向には、リアス達がいたのかすぐさまこちらに駆け寄った。立ち上がるとうとする巧の体をリアスは両手を使い支える。

「…悪い、もう大丈夫だ」

「でも…」

確かに大きな傷はない。しかし、額からの汗、少しばかりの息切れ。間違いなく疲労は蓄積されている。そんな状態でまた新手の敵と戦おうとする巧を、リアスは止めたい衝動に駆られる。

「部長！今の音は一体」

さらに多くの声が聞こえ、振り返るとアーシアや気を失っていたギヤスパーも含めたオカルト研究部全員とソーナが集合していた。

全員で音の方向に向かおうとするが、グレイフィアがみんなの前に立った。

「お下がりにください、皆さま」

「グレイフィア、何が起こったの」

「こう言う事だ」

巧にとって、聞いたことのある若い声。その声からは、これから起

こる出来事に胸を躍らせるかのような楽しそうな声でもあった。

爆発の中心たる穴から、よつこらしよと言いなながらアザゼルが出てきた。立ち上がると彼は、視線をゆっくりと上に向ける。

その先にいたのはー。

「悪いな、アザゼル。俺はこちら側に付かせてもらう」

夜空の下、美しい白い光を放つ鎧を身に纏ったヴァーリ。彼は、仮面の下でこれから起こす事象を待ちきれずにいた。

「そうか…。いつ頃、決めたんだ」

「彼がコカビエルを討ち取った夜にね。彼と戦うには和平は邪魔なんだよ。…彼の敵になるには、テロリストの方が都合がいい」

ヴァーリの視線が、一瞬だけ巧に向けられる。その意味は、ただ一つ、彼は戦いたいのだ乾巧と。

「テロリスト…ねえ。シエムハザに調べさせておいて正解だったな。三大勢力の不満分子を集めて、対抗しようなんて大層な奴らだ。組織の名前は、カオス・ブリゲードの団だったか」

「しかし、そんな者たちが一つになるとは…」

アザゼルの言葉にグレイフィアが驚く。実際、統制の取れる連中ではない。そんな者たちが紛いなりにも一つの組織になる事が出来るのか、と言わん表情だ。

「簡単な話だ。…立派な、リーダーがいるのさ。…ウロボロストラゴン、オーフィスだ。違うか、ヴァーリ？」

「そうだ。だが、奴らは力の象徴としてオーフィスに付いてるだけだ。本来の目的は覇権とかいう下らないモノさ」

実際、自分たちに立ちほだかつた敵の数を見て、あれ以上の力や数にリーダーとされてる存在に巧は軽い寒気を感じる。そこまで実力者が敵の大将として立ちほだかる事に。

「お前の目的は何だ？ただ強い奴と戦いたいだけなら、和平の下でも可能はずだ。それとも同じ魔王の末裔として反旗を翻したくなっただか？」

「…つまらないからさ。アンタに出会い、ルシファアの力も、アルビオンの力も扱えるようになった。でも、平和で暖かい世界では、その力

は意味がない。いつか現れると期待した俺のライバルも遂には現れなかった。だから、俺は君を――兵藤一誠をライバルに決めさせてもらったよ」

「…??」

「…えっ!? そ、それよりも今、ルシファーって!？」

巧は、いきなり自分の名前が出てきた事で顔を顰め。

リアスは、巧の名前が出てきた事と、アザゼルの会話の流れで自然と出てきた悪魔として流しきれない事実、驚きの声を出す。

その場にいた全員がアザゼルの方を見やり、言葉を待った。

「アイツは前魔王の孫で、その息子と人間の女との間に生まれたハーフだ。半分人間だったからこそアルビオンを宿す事に出来た。まったく、チートとか漫画の主人公みたいな奴だよ」

サラリと口にされた事実は、巧以外の全員を驚愕させる。悪魔の事情についてかなり疎い巧は、取り敢えず睨みつける。

「おい、お前。勝手に人を変な事に巻き込むな。俺はな、お前みたいに戦いたくて仕方ないタイプじゃない。同じような奴を見つけて、勝手にやっつてろ」

「君みたいなタイプの者をそれなりに見てきた。多くは――偽善者だ。口先だけの半端者で、力の伴わない者達ばかりだ。誰かの為と言いながら、いざとなれば保身に逃げる」

「イツセーさんは違いますっ!! わ、私のことを友達と言ってくれました。私が命を落としそうになったら、助けてくれました!! と、とても優しい人なんです」

ヴァーリの言葉を遮る様に、アーシアは反射的に叫ぶ。今の言葉は、巧を――アーシアの想い人を貶す物だから。

ヴァーリは鎧のマスク部分を収納させ、顔を露わにして軽く笑う。寧ろ、その言葉を待っていたと言わんばかりだ。

「そう、そうなんだ。彼は口先だけじゃない。本物なんだよ。だから、君を俺のライバルに選んだんだ。誰かの為に本気で戦える様な強い者をね。…でも、問題が一つある。それは、君の闘争心の無さ」

ゆつくりと地面に降り立ち、巧に歩み寄るヴァーリ。警戒を怠るこ

となくその行動に警戒を向ける。

「だからー」

言葉と共に向けられた手はアーシアに。そこから魔力を放とうとするが、巧の手がそれを阻む。

「そう、その表情さ。君の性格からして、周りの人を殺して復讐者という設定が一番良いと思った。彼女で足りないのなら、君の両親をー」

戦闘欲に満ちたヴァーリの頬を巧の拳が捉える。

マズイと、グレイファイアが二人の間に入ろうとするが。

「…アンタは、下がっててくれ」

「ああ、そうだな。君でなければならぬ。俺のライバルである君こそ」

その言葉と後ろ姿を見て、グレイファイアは察した。これは、避けられない戦いだ。自分にできることは、見守る事といざという時に彼の命を守る事だけだ、と。

「先程の私の言葉を忘れないでください。貴方は死んではいけません」

その言葉に背中を押された感覚があった。

軽く小さくうなづいて、ベルトを腰に巻きつける。

いつもの様に変身コードを入力

「変身」

『Complette』

巧が変身する後ろで見守るリアス達の視界は、見慣れた赤い光に包まれた。

「悪いな、頼んだぜファイズ。いや、兵藤一誠」

コートの内ポケットから取り出した風変わりした時計型デバイ

スローファイズアクセルを弄びながら、アザゼルはコレを自分に渡した青年のことを思い出した。

『一体誰なんだ、お前さんは？俺の部下を灰色の怪物から助けた事には感謝してるが』

『いえ、貴方の部下の方なら一人でも充分でしたよ。僕は少し手助けをただけです』

『それに、この変な機械をファイズに渡せ、なんてよ。たしかに俺はファイズ、兵藤一誠との接触はしてるがな』

『彼を見て、知った上でその機械の処遇を決めてください。今の僕は、彼には会えませんから…』

『名前も分からない奴から物を受け取るつもりはねえぜ』

そういう時、青年は少しだけ困った様に笑った。

『木場勇治です』

「お前さんはこいつに相応しいんだろ、ファイズ」

ヴァーリに向けて駆け出す巧に対して、イタズラ小僧の様な笑顔を浮かべてアザゼルは始まってしまった戦いを見つめた。

赤と白く加速する世界く

私ーリアス・グレモリーは、目の前で起きてしまう戦いを見守る事しか出来ない。

かつて、三大勢力の間で起こった戦争。その最中、戦場をかき乱す様に現れた二匹の龍ードレイグ赤龍帝とアルビオン白龍皇。その内の一匹を肉体に宿す存在と戦おうとする彼の背中を見つめるだけだ。

「たく…ッ、イツセー！」

彼の本当の名前を呼びそうになるのを押しとどめ、今の彼の名前を呼ぶ。けれど、彼は振り返ってはくれない。

無意識の内に足が動き、彼のもとに向かおうとしたことに気づいたのは、お兄様に止められたから。

「ダメだ、リアス。…彼を信じるんだ」

「でも、もしっ…」

いつも、彼だけが戦う。コカビエルの時も巧さんが居なければ、私達に勝ちは無かった。そう、今だって。

本当は彼と一緒に戦わないといけない私達は、また守られてる。

「リアス…大丈夫ですわ」

「朱乃…」

お兄様の手を振りほどき、彼を止めようと思った。例え、ワガママと言われてもいい。主人としての矜持など捨てても構わない。それでも、彼には生きて欲しい。

私の手を優しく握る朱乃の手は、いつもより少しだけ暖かく思えた。

同じ年の彼女は私に落ち着かせる様に、けれど確かな口調で言葉を続けた。

「だって、イツセー君ですから」

そんなシンプルな言葉を受けて、何も言葉を返せない。私は、不安になる気持ちをなんとか押し込めて、これまでで一番の強敵に向かって走り出す彼の背中を見つめ続けた。

「死なないで、巧さん」

「らああ!!」

先制の一撃目は、ファイズの右ストレート。ファイズショットも取り付けられてはいないが、並みの敵には十分な攻撃。

対するヴァーリは晒していた鎧のマスク部分を再び収納。軽くステップを踏む様に躲す。同時にカウンターの一撃を加えるべく、一歩前に踏み込む。打撃が来ると想定していたファイズは、ヴァーリの攻撃に耐えるべく防御の姿勢を取る。

けれど、カウンターとしてファイズを襲ったのは打撃でも斬撃でもない。魔力弾による衝撃だ。

「…ツチ」

ヴァーリクラスの相手ともなると、小さな魔力弾でも十分にこちらにダメージを与えてくる。

さしもの巧も、オルフェノクではなく悪魔や堕天使といった存在と戦う経験は薄い。それも格上の相手は。

「悪いがこちらも手加減はしなくない。せつかくの戦いがつまらなくなるからね!」

「知るかッ!」

ヴァーリは後方に下がりファイズとの距離を置き、右手を前に突き出す。掌の前方の空間に魔法陣が展開され、そこから複数の魔力弾が放出される。

「ちっ!」

自身に向けて射出された魔力弾を、横っ飛びの形で回避。そこから、最大の脅力を以って、ヴァーリに突貫。

向かうヴァーリも、動揺することなく迎え撃つ。ヴァーリがファイズの間合いに入った途端、右ストレートを放つ。危なげなく、その一撃を回避し、手首を掴み取る。

「いい一撃だ。やはり俺の見立ては間違いでないな」

「勝手に決めんなって、言っただろっ!!」

掴まれた右手首を振り払い、その動作に繋がるように左のフックを

放つ。その一撃はヴァーリの後退で空を切る。どこか余裕すら感じられるヴァーリに巧は違和感を抱く。

「悪いが俺も少し本気を出させてもらおうよ」

『Divide』

鎧の背中から生えている翼デイベイン・デイベイディング白龍皇の光翼が一瞬、強い光を放ち、その能力を解放する。

半減と吸収。

10秒ごとに触れた相手の力を半減させて、その半減した力を自分のもので吸収する。それが、この神滅具ロンギヌスの力。

文字通り、神をも滅ぼせる力。

その力が、ファイズにも牙を剥く——

「……なんだよ」

「驚いた……。神以外に効かないのは初めてだよ」

——事は無かった。

機械音が聞こえ立ち止まったファイズだったが、すぐさま動き出す。

ファイズに変身した際には、神器の効果は得られない。これは、アーシアの神器による回復が得られない事から分かった事実だった。ひいては、このヴァーリの力の効果が無効になるのは、リアス達も分かっていた。しかし、それだけではないと分かっている。

エンジン音が聞こえた。

ヴァーリとファイズの間バイクが止まる。

オートバジンは主人の状況を鑑みて、自身が必要と判断。自動でここにきた。

「サンキュー、な」

少しばかり傷がついた車体を軽く撫でて、右ハンドル部分の窪みにミッションメモリーを嵌め込む。

『Ready』

ファイズエッジを換装し、構える。切っ先をヴァーリに向けて、ジリジリと間合いを詰める。

数秒間の睨み合いの果て、ファイズは駆け出した。先ほど同様に、掌を前方の空間に突き出す。そこから射出された魔力弾は一つだが、その大きさは先程の比ではない。自身は翼を利用し、上空を舞う。その高さは、ファイズの全力跳躍でもギリギリ届かない高さを計算して、滞空していた。

『Exceed Charge』

聞き覚えのある音が聞こえ、一瞬。ヴァーリの、その場にいた全員の視界が光に包まれる。忘れられた音が、爆発と共に訪れる。次の瞬間、ヴァーリの視界には拳を振りかぶるファイズの姿が。

ヴァーリの放った一撃に対し、ファイズエッジを構えたファイズは前方に駆け出す。

強い風を受けながら、向かう先には魔力弾。それなり…いや、並みの悪魔ならば避ける事が出来ない速度の攻撃。けれど、迷う事なく突っ込むファイズ。

『Exceed Charge』

ドライバーに装填されてるファイズフォンを開き、enterキーを押す。いつもの音声が流れ、フォトンブラッドがファイズの手元、ファイズエッジに集約される。

キイン、と甲高い音は完了の合図。より一層強い光を放つ剣を振りかぶる。

「やあああああ!!!」

気合いと共に振り下ろされた光剣は、巨大な魔力弾を縦に真っ二つに。まるで、豆腐を切るように見事に割れる。

一瞬の静寂の後、爆風と軽い爆発がファイズを襲うものの、そんな事知ったもんかと言わんばかりに、光剣を地面に突き刺す。

そのまま、地面に突き刺した剣を足場に、その場で跳躍。

ファイズエッジの分の長さで爆風による風圧により普段よりも高い到達地点にファイズは向かう。

背負い鎧を纏った敵に向かい、力強く振り絞ったストレートを顔面部分に叩き込んだ!!

ヴァーリは自身の頬を襲った痛みを驚く。よく見ると鎧の仮面の一部がパラパラとカケラになっていた。

感情的になる間も無く、次の一撃が来た。

「…ははっ、いいぞ」

打ち込まれたのは胸の中心部分。一瞬、呼吸すら忘れかけた一撃の重さにヴァーリは笑うしかなかった。

これを見ていた。自身と並ぶ強さを誇るライバル。その一撃を受けてたからこそ、ヴァーリは笑えた。

鎧の胸部分に付けられていた青い宝玉にはヒビが入り、仮面部分は一部が破損。

ゆっくりと地面に着地してみせたファイズを素直に褒める言葉しか出てこない。

身体中は痛く、特に地面からの落下のせいで背中部分は特に大きい。自身にそんな痛みを与えられる存在はそうはいない。だからこそ、

「君は、本当に面白い」

「知るかよ…」

手首をスナップさせるファイズ。

寧ろ、ここからがスタート。彼のギアは上がり続ける。

これまでの戦闘経験により培われた勘は、ヴァーリの脳裏に一つの予測を立てさせる。

ならば、こちらこそそれなりの対応をしなければならない。

「行くぞ…」

小さく呟くような声とは裏腹に強く風を切り裂く音が駒王学園響いた。

第二幕の先制攻撃はヴァーリだった。

ファイズは仮面部分に向かってきたヴァーリの拳を、とつさに避け後方へ。その攻撃の威力と速度に背筋に寒気が。

「らあっ!!」

お返しだ、と言わんばかりに距離を詰め、今度は得意の右ストレートを放つ。その一撃も、ヴァーリは慌てることなく対応。体を反らし、難なく回避。

そこから、連続技につながるもののクリーンヒットせず、ファイズは攻撃の手応えを掴めない。

「…っっー!」

「今度はこちらの番だ!」

鎧の脇腹めがけて放った右フックを、手首を掴まれる形で塞がれる。当然ファイズの動きは鈍り、そこに隙を生む。

右手首を掴む左手の力は尋常ではない。拘束を解くのに一瞬気を取られ、普段よりも遅れてから気づく。

空いたもう片方の手から、魔力を放出させている事に。

「終わりだっ!!」

一撃喰らえば、大ダメージは否めない。いや、勝負は決まるであろう一撃が、一秒もせずファイズに迫る。

それでもなお、ファイズはー巧は、終わらない。

「あああっ!!」

咆哮、叫びに似た声と共に、足を振り上げー蹴りを放つ。

対象は、ヴァーリの胴体ではなく、魔力を放出せんと纏っている右手。

風を切りように鋭い一撃は、見事に右手に直撃。掌の向く方向を、ファイズではなく上空へ。

それだけでは終わらない。振り上げられた足ではなく、地面で踏ん張る右足で地面を強く蹴りたてて、軽く宙を舞う。その体勢から、軽く横軸回転。回転の威力を持った右足はヴァーリの鎧、仮面部分を直撃。

一部破損した仮面は、今度は完璧に破壊。鎧越しに巧を、ファイズ

を見ていたヴァーリを襲ったのは、続く連撃として放たれた力強さを
持った拳。

久しぶりの生身の痛み。ファイズの一撃を、生身の頬に受けた
ヴァーリは、自分が横たわっていた事に気づく。

よく見れば、鎧にもヒビや傷がつけられており、すでにボロボロ。
痛みと喜び、そして屈辱にも似た感情を抱えながら、ゆっくりと立
ち上がる。前方にはファイズが。

仮面をして、鎧を纏う姿では表情が見えない。しかしヴァーリは巧
が今の自分とは正反対の感情と表情をしている事は分かる。

「悪いけれど、もう少しだけ…続けさせてもらおうっ！」

言葉と共に、ヴァーリは強い光に包まれる。何秒かすると、鎧は最
初の時のように傷はなく、仮面に関しても完璧な状態でヴァーリの端
正な顔を覆う。

思わぬ再生的行為に、ファイズも一瞬呆気を取られる。しかし何度
目かの魔力放出にはキッチリと対応を取っていた。

芸のない動きに見えたが、片手で魔力を放出させながら、もう片方
の手で何かを操作するような手つきを見せる。

その動作に目を奪われそうになるも、気持ちを切り替えて、前へ。
ファイズが距離を詰める間、攻撃を仕掛けないヴァーリ。その違和
感は、ファイズがヴァーリに対しての一撃を放ったと同時に一発の攻
撃に昇華される。

「…っくー！」

「悪いが、俺も一芸だけではないんでな…っ！」

背中を襲った痛み、ファイズの装甲越しでも煙が上がり、その威力
は並大抵のものではないことを示す。

痛みに苦しむ間も無く、ヴァーリの鋭い蹴りがファイズの胸部を襲
う。呼吸が止まる一撃に意識が持っていかれそうになるが、ギリギリ
の所で踏ん張りを利かせ、踏み留まる。

その一撃にホツとするのもつかの間。今度は、ヴァーリの番だ。ファイズに向けて放たれる乱打。

鋭さや正確さではファイズ：いや、巧の方が上だが、その一撃の破壊力はヴァーリが上に行く。

肉体自体のスペックの違いや、アルビオンの力といった要素が混ざっているからだ。

その一撃ー魔力も練り込められているためーを、己の反射神経と戦闘により培われてきた直感を頼りに、何とか回避し続ける。

「このままでは、ジリ貧だぞ」

「知るかつ」

巧を煽るように言葉を浴びせるヴァーリではあるが、基本的に戦闘においては冷静な巧に大した効果は望めない。

次の手を考えながら放った一撃、腹部を狙った右フックは、ファイズの無駄の無い動きにより空を切る。

それだけではなく、空を切った拳を引き戻そうとした所で、ファイズに手首を掴まれる。

『Ready』

機械音が響き、ヴァーリの胸元に閃光が走る。

バアン、と軽い衝突音と火花が散った。その原因は、ファイズが握りしめるバイクの右ハンドルーファイズエッジ。

先程、空中でヴァーリに浴びせた一撃の前に、ジャンプの最高到達点を増やすために足場にしたファイズエッジを、ヴァーリの連撃回避をしながら回収した。

否、ファイズエッジの落ちてる地点に誘導しながら回避したと言った方が正しい。

ーまずいっ！あの光剣はっ！
ゾクリッ。

本能的にファイズが握る剣に危機感を抱き、後方に下がって距離を取るも、ファイズは距離を詰めて間合いに到達した途端、剣を勢いよく振り下ろす。

体を半身にして、上段振り下ろしを回避する。しかし、第二撃目の

横薙ぎがヴァーリの横脇腹を狙う。

接触する直前で、小型の防御魔法陣を展開させて、魔法陣とファイズエツジの接触に終わる。

「ハッハッハアツ!!」

ファイズとヴァーリの距離が開いた時、ヴァーリは突然笑った。

あまりにも急なことに、巧と仮面の下で驚いた表情を見せる。

「君に敬意を表する。ここまで俺を追い詰めてくれた宿敵だ。俺にはまだ上がある。…君に、その一つを見せる」

まだ上がるのか。

彼の實力にはまだ上がある事に、打ち拉がれたいがそんな余裕はない。そんな間があれば彼は、ファイズを殺せてしまうのだから。

警戒の糸を決して切らずに、ヴァーリの一挙手一投足に意識を向ける。

『Half Dimension』

鎧の背中に生えた二翼の翼が光り輝く。

次の瞬間、異変は起きた。

ヴァーリが前方のオーファイズがいる場所に向けて手を伸ばす。

伸ばされた手と開かれた掌が、何かを掴むような仕草を見せる。

すると、空間は圧縮されたように歪んでいく。

勿論、その場所から見て背後にあつた学校の校舎も半分に縮んでいく。

巧は咄嗟の反応で、横っ飛びで空間の歪みに巻き込まれる事なく一難を避けられたが…。

「空間を歪めるなんて」

ファイズとヴァーリの二人から離れた場所で見守るリアスはヴァーリの起こした現象に息を飲むしかなかった。

「まあ、ドラゴンを宿した奴は大概そんなもんさ」

アザゼルは不安に包まれるリアスにあっけらかんとした声で返し、前に出た。他人事のように振る舞うアザゼルにリアスは言葉を返さうとするが、止まる。

彼が握りしめていた何かが見えたからだ。

「…今のは…」

一瞬だけ見えた何かは時計の様なものだった。それも、この状況を打破できるほどのデバイスである事を、リアスは知らなかった。

「流石だな、この攻撃を何度も避けられるとはね。君ほどのテクニクタイプはまだいたとはね」

ファイズは翼を広げ、空で滞空するヴァーリを見上げている。ファイズのスーツは傷が少なく、息も上がっていない。しかし、状況はヴァーリに圧倒的に分がある。

二人の差は攻撃の間合いだ。

ファイズの基本的な攻撃は近距離。強いて挙げれば、ファイズエツジを用いたスパークルカット、クリムゾンスマッシュは中距離に該当する。この二つは相手の動きを拘束した上で放つため、結局相手の元に向かわなければならぬ。

ただ一つの例外として、最強形態のブラスターファイズがある。

あの形態は銃を用いるため、遠距離からの攻撃も可能となる。

しかし、今のファイズの手元に形態変化の為のツールは存在しない。無い物ねだりはしても仕方ない。それでもこの状況を打破できる策は巧の頭の中にはなかった。

いや、より正確に言えばひとつだけ除外したい策はある。

変身を解除し、ウルフォルフェノクとなる事だ。

ヴァーリのハーフディメンションは発動までの僅かなタイムラグが存在している。その一瞬を、ウルフォルフェノクの脚力を以って突く。

今のノーマルファイズで戦闘を続けるよりは、勝てる確率が高いだろう。しかしそれは、周囲の者達に自身の正体が露見する事が大きなデメリットだ。

勿論、それも覚悟の上だ。いや、いつかは伝えなければならないだ

ろう。

巧の脳裏に、自身の秘密を伝えた朱乃の姿が浮かび上がる。少しばかり怯えた様な表情をした少女。自分だけが、伝えるべき秘密を抱える事は、自身を信頼してくれる彼ら達に：顔向けできない。

明確な答えが出せず、次の行動に移らない巧：ファイズの背中から声がした。

「兵藤一誠っ!!」

呼ばれた声に反応し、振り返った先には手に何かを持った墮天使の男性ーアザゼルが。

「ウチの『バカ息子』の世話の礼だ」

手に持った何かを、巧に向けて放り投げる。受け取った巧は、仮面の下で大きく目を見開く。

それは、この世界に来てからは手元に存在しなかったデバイス。

ファイズの強化形態ーアクセルフォームに至る為の時計型デバイス、ファイズアクセル。

「…っ!! あんた、これ!」

「詳しい話は後でしてやるさ」

そういったアザゼルは、前方を指差す。当然、その先に戦いの続きを待ちわびるヴァーリが。

ため息を一つ落とし、受け取ったファイズアクセルを手首に巻きつける。

「それは逆転の秘策かな?」

「ああ…」

右手首に巻きつけたファイズアクセルから赤い瞳のファイズの顔を模したミッションメモリーを抜き取る。

そのミッションメモリーをファイズフォンに換装。

『Complete』

変身完了の音声が今一度鳴り響き、ファイズの体が再び変身する。

ファイズの胸部装甲ーフルメタルラングが展開。装甲の下にあった内部装甲が露わになる。

同時にファイズのスーツを巡っていたフォトンストリームの色が、より高い破壊力を示す銀色へ。仮面の瞳の色は、黄色から赤へ。

「なるほど、それが君のもうひとつ上の姿か」

新たな姿を披露したファイズにヴァーリは嬉しさを隠さない。掌をファイズに向け、魔力を込める。

ほんの僅かな時間の経過と共に、ファイズが居た筈の空間が歪み始める。歪み始めた空間を見て、ヴァーリは目を見開く。空間と共に歪む筈のファイズは既にそこにはいなかった。

『Start Up』

響いた機械音。

一瞬、腹部に強烈な痛みを覚えたヴァーリは苦悶の表情を浮かべる事しかできない。

その一撃を受けて、気づく。この一撃は。

思考が纏まる前に、次の一撃がヴァーリの顎を仮面越しに捉える。その一撃により、仮面の顎の部分は破壊される。

避ける間もなく、今度は頬を襲う高速の一撃。

一秒にも満たない僅かな時間の中で、ヴァーリの目は音速の一撃の正体を捉える。

先ほどまでとは異なる姿をしたファイズの姿を。

そして、次の一撃がヴァーリの腹部を貫かんばかりに放たれた。

そこからは最早ファイズの独壇場だ。

アクセルフォームの発動時間は僅か10秒。

その10秒を持って、ファイズの高速の攻撃は何度も、何度もヴァーリを襲った。

ノーマルファイズとは攻撃力のスペックが大きく異なる。

おまけに、攻撃を避ける隙も与えずに次の攻撃が敵を襲う。

さしものヴァーリもこれには堪えた。

普通の蹴りや拳でも、アクセルフォームでの乱打は必殺技になりうる。

既に鎧はボロボロでそこから覗く素肌や整った顔立ちは血で汚れていた。

『3』

残り秒数を告げる機械音。

『2』

その音声をどこか他人事のようにヴァーリは受け止めていた。

『1』

ああ、そうかこれでーっ終わりか。

『Time Out』

『Reformation』

最後の一撃ーっ胸部を穿つように放たれた拳を受けて、体が宙を舞う。地面に倒れこむまでの数秒間、ヴァーリは信じられないほどの幸福感に満ちていた。

「君の、勝ちだーっ」

自分に敗北を与えた借り物のライバルを、本物のライバルにすることに決めたのと同時に、ゆっくりと地面に倒れこんだ。

「勝ったの……?？」

呟いた私の言葉に、部員のみんなは顔を見合わせる。

お兄様やグレイフィアの顔を見れば、ホツとした顔をしている。

そうだ、彼がーっ巧さんが勝ったんだ。

「まさか……までとはな…想定外だぜ、まったくな」

近くにいたアザゼルの呟き。確かに彼が巧さんに投げ渡したデバイスでファイズは進化的や、加速したと言った方が正しいのかもしれない。

そんな事を考えるのを放棄して、私ーっ私たちは、彼の元に駆け

寄り、その名前を呼ぶ。

「イツセー!!」

「…おう」

いつも通りぶつきら棒な彼。ファイズの姿から変身を解除し、いつもの彼の姿へ。その姿を見て、私は強く…強く、彼を抱きしめる。

「おいっ!?何だよ、いきなり」

「少しだけ…このままがいいの」

彼の少し嫌がるような、恥ずかしがるような声を無視して、私は巧さんを強く抱きしめる。何秒か経つと、諦めたのか溜息をつく彼。それを確認して、私はもっと強い力を込めた。

「あらあら、部長つたらイツセー君を独り占めなんてズルいわ」

「そうですっ!!私だって、負けないくらい心配してたんです!」

アーシアと朱乃の声が聞こえ、私も彼の体から離れる。私の正面には少し涙目のアーシアはいつも通りの笑顔を浮かべる朱乃。その後ろには小猫と裕斗とゼノヴィア、そして意識が戻ったギヤスパーが苦笑いを浮かべていた。

ここで私は隣に立つ巧さんに視線を向けると、彼は既に立ち上がっていたヴァーリを見つめていた事に気付く。

まだ続ける気なの!?

当然、その相手をする事になる可能性が高いのは巧さんだ。

私達は咄嗟に巧さんを庇う様に戦闘態勢を取る。

警戒心を解けない私たちの前に、翼を広げたアザゼルが降り立つ。

「落ち着けよ、ファイズがアイツを倒したのは見ただろ。それに今のアイツじゃまともな勝負は出来ねえさ」

その言葉に納得出来る私ではない。なぜなら彼は巧さんを戦う気にさせる為に叔母様や叔父様、さらにはアーシアを殺そうとしたのだから。

私たちの緊張の糸を切ったのは、結界の破れる甲高い音。

同時に、私達とヴァーリの間に割って入ってきた第三者の男。

「よっ、ヴァーリ…って、随分とまたやられちゃったな」

「ああ…。こちらが試すつもりが、このザマだ」

軽口を叩き合うところを見ると、この男はヴァーリの仲間といったところかしら。つまり、テロリスト。

「つて、墮天使の総督に魔王が二人、天使の長まで。こいつは、退散するしかねえな」

こちらの面子を見て、男は退散しようとする。手に持った棒を巧みに操り、転移の術を発動させる。

強い光が放たれて、光が止むとそこに二人の姿は無かった。

敵に逃げられた。

その事実よりも私は、眷属のメンバーが誰も欠ける事なく、この一騒動を乗り越えられたことの方がずっと嬉しかった。

今回の協定――駒王協定で、三大勢力は文字通り手を取り合う事に。

けれど、これは始まりに過ぎない。

降りかかる苦難と彼の最期の運命と向き合う事になる。

旅はまだ途中なのだから――。

駒王協定から一週間程経ったいつものオカルト研究部の部室。

私は部長席に座り、冥界から送られてきた資料に目を通す。

「というわけで!!この俺が、お前たちの実力アップも兼ねてオカルト研究部の顧問になることになった!」

教師らしいスーツ姿のアザゼルは自慢げなポーズをとって宣言。どうでもいいと決め込んでいた巧さんは、朱乃の入れた紅茶をフーフーしている。その姿は猫みたいで可愛い。

「アーシア、今度私に漢字を教えてくださいませんか。少し今日の授業で分

からないところがあってね」

「はいっ！任せてください。きっと、主も私たちの努力を見守ってくださいますから！」

「ああ…主よ!!」

元協会出身のアーシアとゼノヴィアは、いつもの様に祈りを捧げる。けれど、今までとは異なるのはダメージを受けない事だ。

ヴァーリとの戦いの後で、巧さんはミカエルに尋ねた。どうして、アーシアとゼノヴィアを破門にしたのか。

尋ねられたミカエルは、他の信徒の祈りと信仰を乱す要素となるゼノヴィアとアーシアを異端として排除するしかなかった。残酷とも言える言葉を使って答えた。

その言葉を聞いて二人は、今が幸せだから充分だ、と返した。

巧さんも二人の言葉を聞いて、何も言わなかったが、一つの願いを呟いた。

二人が祈りを捧げることの許可。

本来通るはずのない願いを、ミカエルは叶えると約束してくれた。

「って!!お前ら、ちっとは顧問の言うことを聞けっ！」

部員の全員から軽く無視されていたアザゼルが大きな声を出して、みんなもようやく注目する。

「知ってると思うが、今回の協定でお前らの名前は多くの連中に知られる事になる。敵にも…な。そこで、まだまだ未熟なお前らを、俺が鍛える事になった。特に、木場、ギヤスパ、アーシア。お前らは俺が研究の知識を叩き込んでやるから覚悟しておけよ」

「はいっ!!」

部員みんなの声が元氣よく返ってきて、アザゼルは軽く笑う。

私は紅茶を飲みながら僅かに微笑んだ巧さんの横顔がチラリと目に入った。

あと少しで、夏休みが始まる。

今年の夏は、いつもより楽しみだ。

「デルタはしばらく動けないわ。貴方の出番ね…。ファイズを排除してちょうだい」

冥界のとある場所。

影山冴子は、とある青年の肩に手を置く。

青年は、憎しみを隠しきれない表情で小さく言葉を漏らす。

「ですがどうやって」

「協力者の手引きがあるわ。ファイズを処理して、とある女の子が欲しがっているの」

言葉に反応するように影から一人の青年が。

優しい笑みが似合う青年だが、その瞳からは憎しみと薄汚れた欲望が滲み出ていた。

「よろしく、僕はー」

自身の前髪で敢えて視界を塞いだ。

青年ー天城奏あまぎかなでは心で呟く。

どうでもいいんだよ。あんたの事なんか…。

目の前の青年の名前を忘れて、頭の中はファイズを倒す事を目的にしていた。

奏の手には、デルタのベルトとは異なるベルトが握られていた。

第5章 冥界合宿のヘルキヤット そうだ冥界へ行こう

目が醒める。

ふわりと、まるで宙を浮いていたような感覚がした。夢を見ていた気がした。部屋の窓越しに聞こえるセミの声が、乾巧兵藤一誠の視界をクリアにしていくな。

「イツセーさん。あつ、起きたんですね。もうご飯が出来てるので呼びに来たんです」

「ああ」

愛想が無く短い返事だが、呼びに来た同居人ーアーシアは、特に気を悪くしない。部屋を出る巧と共に階段を降りて、一階のリビングに向かう。

リビングに入るドアを開けるの、既に朝食が用意されていた。時刻は朝の8時半。正に朝ご飯といったタイミングだ。

「イツセー、お早う。叔母様はもう出掛けたから私達だけね。さつ、食べましょう」

茶色いエプロンを身につけたもう一人の同居人、リアス・グレモリーは優しそうな笑顔で二人を出迎える。

三人は席に着き、朝食がはじまった。

女子二人が話しを交わし、時々巧に話を振る。

そんな流れの中、リアスは少しばかり不安げな表情で巧にゆつくりと尋ねた。

「そう言えばイツセー、昨日の夜中に出掛けたの？」

「まあな」

「何処に行ってたの...?」

「何処でもいいだろ」

巧の表情を見て、これ以上の詮索は無理だと決めて、リアスはそう、とだけ呟いた。

リアスの頭に浮かぶのは夜中にバジンに共に家を出る巧の姿。行き先は恐らくだがオルフェノクの元であると予想を立てていた。夏休み前に、巧とアザゼルの部室での会話を偶然聞いてしまった。

『……最近、オルフェノクとされる存在の目撃情報が多数あってな。その多くに禍カオス・フリゲードの団が関わってる。つまり、オルフェノクもあの連中の仲間ってことになる』

『一人の女だ。そいつが、オルフェノクの奴らを引き入れてる』

『カテレアの隣にいた女か。部下からの情報は逐一俺の耳に届くようにしてる。特にお前の、ファイズの力が必要な案件なら』

『ああ。俺が闘う』

ドア越しに聞こえた巧の声は強い決意に満ちていた。ドア一枚の隔たりがまるで巨大な壁にも負けない分厚さにリアスには思えた。

「…ぶ、…部長、部長！」

「…えっ!?…、っめんなさいアジア」

完全に停止していたリアスに、アジアが何度か声を掛ける。自分と呼ぶ声に気づいたリアスが少しばかり遅れて、言葉を返す。

巧がいた席に目を向けると既に居なくなっていた。自分に声を掛けたアジアもご飯や味噌汁の器には何もなかった。

つまりリアスはそれだけの時間、止まっていたという事になる。

待たせてしまったアジアに謝罪をして、残るご飯を食べる事を再開した。

一人、リビングを出た巧は溜息を溢す。このどうしようもない自分に対してだ。リアスに、夜にオルフェノクとの戦闘を行っている事がバレてしまった為、厳しい対応をした事。元々、優しい対応など取れる訳もないが、それはまた別の問題だ。

少しばかり伸びた地毛の明るめの髪を軽く掻きながら自室に戻ろうとする所で、ピンポンとインターホンが鳴る。

巧は朝早くからかの家を訪ねてくる人物に心当たりがあった。

ここでも溜息を溢し、玄関に向かう。鍵を開け、訪問者の顔を見る
と分かりきっていた事なので特に表情に変化はない。

「また来たのかよ、お前」

『お前』ではありません。『朱乃』と呼んでください」

巧の目の前には、夏用の私服に身を包んだ姫島朱乃がいた。膝上程
度の丈のスカート、白い半袖のシャツとシンプルな服装の彼女は、何
処か不満げだった。

朱乃は、少し前から巧にいろんな意味で大胆なアプローチを掛けて
きた。勿論、朴念仁且つぶつきら棒な巧には全く通じず仕舞い。彼女
同様に巧に密かにー彼女たちはそのつもりー想いを寄せるリア
スやアーシアも同情していた。

そんな感じで、朱乃は自分の女としてのプライドを軽くへし折られ
た気分ではあったが何処か嬉しくもあった。外見や性的なアプロ
チで簡単に動くといった朱乃の中の男性のイメージを、巧がいい意味
でぶち壊したのだから。

そんな彼女にも一つ譲れないところがあった。

巧の朱乃の呼び方だった。

以前から巧は、朱乃の事を『姫島』か『お前』と呼ぶ。これではリ
アスとアーシアとの差を、朱乃は感じざるを得ない。

その為、名前で呼ぶように頼むものの結果は芳しくない。

次なる手をつ！を作戦を企てる朱乃の後ろから声が聞こえた。

「僕たちもいいですか？朱乃さん」

ひよこ、と現れたのはこれまた爽やかな私服姿の裕斗。その後ろに
はスポーティ私服のゼノヴィアと見た目通りの可愛いと評されるで
あろう私服の小猫。そして変わる事のない女装姿のギヤスパーマ
でが居た。

つまるところ、この家にオカルト研究部の部員全員が集合した。

「今日は皆に集まってもらったのは夏休みの予定についてなの」

男子高校生の一室には似つかわしくない見目麗しい光景がその部屋には広がる。

八畳のスペースを持つ巧の部屋に、街を出歩けば多くの男性が二度見をするであろう美少女たち、女性の目を惹くイケメンと女装っ子が集合していた。

「夏休みの予定?どこか合宿にでも行くのか?」

手を上げながら質問を口にするゼノヴィア。

彼女の脳裏には炎天下の下、必死に汗を流し、部活に打ち込む高校生たちの姿が浮かび上がる。

しかし、このメンバーはあくまでオカルト研究部。一体どんな合宿になるのがまるで分からない。

「正解よ。より正確に言うと、私は冥界に帰るから皆もそれに付き添ってもらおう形になるわ」

「冥界に行くんですか!?!」

リアスの言葉に、元シスターのアーシアは驚かざるを得ない。その隣に座るゼノヴィアも同様に。元々敵対する勢力の本拠地に味方として向かうことになるなど考えもしなかったのだろう。特に聖剣使いとして悪魔を葬ってきたゼノヴィアは複雑そうな表情に。

一方の朱乃達、古参の眷属組は冥界への帰省が珍しいものではない為に、落ち着いた様子だ。

ただその中で、巧だけは不満げ、とは言えないものの厳しい表情を浮かべていた。

巧の頭の中にあるのは一抹の不安。自身が冥界に行ってる間、オルフェノク達の動向とこの街に降りかかる火の粉を考えていた。

特に兵藤夫妻、本浜や松田、桐生愛華といった本来の兵藤一誠の家族や友人を危険に巻き込みたくはない。

それだけ敵は危険なのだから。

影山冴子が率いるオルフェノク達、敵になったデルタ。自身を一方的にライバルと定めたヴァーリ。

これらの敵が、この街に襲いかかる可能性は否めない。

そんな時に自分が街に不在という最悪の事態だけは避けなければならない。

「リアス、俺はー」

「安心しろ、イツセー」

リアスに冥界行きを断ろうとした時、さつきまではこの部屋に…いや、この家に居なかったはずの人物がドアの前に居る。

「アザゼル：!?あなたどうやって!」

「どうやってって、普通に玄関からお邪魔させてもらったぜ。それとイツセー」

飄々とした態度で何もなかったかのようなアザゼルはそこに居た。一瞬の事で部員全員が驚いた顔を見せる。勿論、巧とて表情に変わりはないが寒気を感じていた。

仮にこの男が自分たちの前に敵として立ちはだかったのなら、と考えただけで冷や汗が出そうな想定を。

「お前がいない間、この街と連中に関しては俺と俺の部下に任せてくれ」

巧の前に座り、その目を見据えながら口にした言葉を、巧は信じる事に決めた。

「分かった」

この二人の会話の裏にある意味を、把握しているリアスを除いたメンバーが不思議そうな顔をしている。

しかし、これでオカルト研究部全員の冥界行きが決定した。

その日の夜、巧は松田と元浜に夏休みに遊ぼうと誘われていたことを思い出し、メールで断りと理由を伝えたい所、死ね!と嫉妬の込められた返事をいただいた。

出発当日。

巧達は、夏休みにもかかわらず学校の制服を着ている。リアス曰く、冥界行きには一番相応しい服装らしい。

制服を着たオカルト研究部のメンバーとアザゼルが集合し、とある場所で立ち止まる。

「さあ、行きましょう」

皆を先導する形でリアスは、駅の中へ入っていく。

巧達の目的地は、駒王町最寄りの駅だった。勿論、悪魔が乗るような特別な電車など巧達が知る限りでは走っている訳がない。

巧、アーシア、ゼノヴィアは古参のメンバーに連れられる形で駅の中を歩いていく。

「一旦、ここで別れるわ。イツセー、ゼノヴィア、アーシアは私に着いてきてちょうだい。アザゼルと朱乃達は後からお願い」

エレベータの前で立ち止まったリアスが、乗る人数を制限する為に二つのグループに振り分ける。

リアスを先頭にし、エレベータの中に入る三人。

スカートのポケットからカードを取り出し、行き先ボタン近くに設置された電子パネルに翳す。

ガコンツ!!

起動音が軽く響き、数秒後にエレベータは下へ向かう。

このエレベータを利用するものにとってはありえない現象。行き先ボタンは一階と二階を指しており、決して地下には行く事はない。

目的地に着いた為、エレベータは動きを止める。

ドアが開き、アーシアとゼノヴィアが二人同時に出る。次いで、リアスと巧が後を追う形で降りた。

「この街にこんな空間が…」

「不思議な感じがします」

アーシアとゼノヴィアの二人は、今の自分たちのいる空間を見て素直な感想を述べた。

四人がいる空間は外観そのものは駅のホームに似たもの。しかし、その規模はその比ではない。本来の駅のホームよりも更に広く、長い距離を繋ぐものであることを想起させる。

「ここは人間界と冥界を繋ぐ駅の役割を果たしているわ。いつも、私たちはこのルートを通って、冥界と人間界を行き来してるのよ」

女子二人に対し、優しい説明をリアスは加える。巧もこの空間の大きさに驚きはしたが、二人ほどの感情は無かった。そんな巧の顔を、リアスは少し寂しげに見つめる。

「なんだよ」

「ごめんなさい。無理やり連れてくる様な事になってしまった」

見られていた事に気付いた巧は、見ていたリアスを軽く睨みながらぶつきら棒なりに口を開いた。いつもの自信のあるリアスとは違った年相応の少女の対応に巧は眩く様に言葉を返した。

「謝られたって困る。別に嫌々って訳でもないからな」

「えっ??」

「本気で嫌なのに一緒にいるほど、俺は優しくくない」

背を向けながら伝えた一言。

その一言でリアスは巧なりの優しさを受け取り、笑顔を返す。

「ありがとう、巧さん！」

そんな一幕があり、少しすると後のメンバーがやってきた。

全員がいる事を確認し、再び歩き出した。

数分間歩くと、駅のホームにそびえ立つ列車が目に見え込んできた。

「部長、これって…」

「ええ。グレモリー家所有の列車よ。これに乗って冥界に行くわ」

巧が想像していた移動よりも随分と現代チックな移動法だった。

そこから準備を経て、列車の汽笛の音が出発を祝う様に空間一帯に響き渡った。

リアスの想い

冥界へ向かう電車の車内。

巧は、出発前にリアスから受け取った紙を手にとった。

紙は五センチ四方で、その中心には悪魔に馴染みのある魔法陣。その内容は今、後方にある荷物を置く車両に待機させてあるオートバジンを召喚する物。リアスが、巧の為に用意した物だった。

そのリアスは、アザゼルとの予定の打ち合わせや主が眷属と同じ車両には乗らないしきたりに基づいて待機していた。

「それがバジン君を呼び出す召喚用の紙ですか？」

「らしいぜ、……って、近いんだよ！」

巧の視界を遮る艶のある黒髪。朱乃は、自身の顔を巧の肩に乗せる様な姿勢に。巧自身は、急に近寄られて驚く感情の方が強いらしい。

「リアスやアシアちゃんはもうバジン君には乗りましたか？」

「乗ってねえが、それがなんだよ」

「うふふ……。それでしたら、私が一番乗りではいけませんか？折角、『免許証』が見つかったのですし」

免許証。それが巧が平常時にバジンを運転したからない理由だった。本来の体の時には持っていた運転免許証だったが、まだ高校生の一誠は所持して居ないと思いつ込んでいた。

しかし、夏休みに入る直前。リアスやアシア達による一誠の部屋の大掃除の最中に、巧が憑依する前の一誠が取ったであろう運転免許証が見つかったのだ。後から一誠の母――涼子から聞いた話では、高校一年の夏に兵藤一誠は女の子にモテたいという理由から、短期アルバイトで貯めたお金で、バイクの免許を取りに行ったらしい。結果は免許を取っても惨敗に終わり、その免許は役目を果たすことなく部屋の片隅に眠っていた。

因みにアシアは、以前一誠の父――真司に、バジンに乗せてもらう事を薦められた理由がはっきりしたらしい。

これにより巧はファイズに変身せずともバジンを乗れることになった。それ以降、リアス達からやたらとバジンに乗りたいと言われ

る様にもなる要因ではあったが。

「まあ、そのうちな」

「ええ、楽しみにしてますわ」

短い返答に、朱乃は嬉しそうな声で答える。

車内の椅子に座る巧、その隣で微笑む朱乃。

専用の机で、剣についての考察を話し合う剣士組。

ギヤスパアの持つてきたゲームと一緒に楽しむアーシア。

そして、誰かと言葉を交わすでもなくただ窓の外を見つめる小猫。

消えゆきそうなその姿を、巧は意識の外に持つていくことが出来ずにいた。

アザゼルとの打ち合わせを終え、眷属のみんなの本人確認をする為にみんなのある車両に向かった私の前に嫌な光景が。

「ごめんなさい、リアス。彼、今寝てしまってるのよ」

「うう〜！イッセーさん、私だつて言つてくれれば…」

車両に備えられた椅子に座る朱乃。その隣には彼女の太腿を枕にして眠る巧さんがいた。

「なんのつもり…朱乃」

「なんのつもりもありません。ただ眠そうな彼に枕を提供しただけですわ。可愛い後輩の世話をしただけのことです」

「先輩…。そう来るのね。分かったわ、取り敢えずはイッセーを起こして頂戴」

「分かりましたわ」

そう言った朱乃は、皆に普段の仏頂面とは違う優しい表情の巧さんの肩をゆっくり揺らし、眠気を払う。

起こされた巧さんは自分が朱乃に膝枕をされていた事に気付き、目

を開けてからすぐに体を起こす。

その顔はほんのりと赤く染まっただけで、そんな巧さんの顔を見て朱乃はまた少し嬉しそうに笑う。

そんな二人の空気に、私は耐えられなかった。

「お楽しみのお返しだけれど、本人確認をさせて頂戴」

普段よりも少しばかり低い声で私は皆に、立ち上がるように伝えた。

その言葉で、巧さんやアーシア、ゼノヴィアを除いた皆は立ち上がる。

三人も釣られる形で立ち上がり、私は車掌のレイナルドに目を向ける。

「それでは失礼いたします」

モニターを搭載した認証機器を手に、みんなの事を移す。

あれは、皆の中にある悪魔の駒イニシャル・ピースを読み取る。そのデータを、登録された駒のデータと照合し、本人確認となる。

「完了いたしました」

当然、不審な点などない為に認証はあっさり終わる。

ここで、アーシア達がレイナルドに視線を向けていたので、少し遅めの自己紹介をする。

「紹介が遅れてしまったわね。彼は、レイナルド。昔から、この列車の車掌を務めてもらってるの」

「ニューフェイスの方は初めましてですね」

「初めまして」

「…ども」

レイナルドの挨拶にアーシアとゼノヴィアは二人同時に応え、巧さんは言葉短く、小さな声で応える。

そんな対応を取っても、レイナルドの顔色は特に変わらない。

「本人確認と同時に皆様の入国手続きも完了させました。そろそろ、次元の壁を突破しますので私はこれで」

軽くお辞儀をした後、レイナルドは車両を出た。

次元の壁を越える…、そろそろ到着ね。

「そろそろ到着ね。みんな、準備しておいてちょうだい」

私たちを乗せた列車が、人間界と冥界を繋ぐ異次元を突破。

先ほどまでの暗がりから一変。紫色の空が広がる大地へー。

「すごい、すごいですー!」

「…ああ」

「ここが冥界か…」

巧さん達三人は初めてきちんと形で見る冥界の空に驚きの声を漏らす。そんな三人の反応が新鮮で、私は軽く微笑んだ。

特に巧さんが、普段の仏頂面な顔から少し驚いた様な表情になったのだから。

「イツセー、アーシア、ゼノヴィア。少しこっちに来てちょうだい」

机の物を一旦片付け、私はグレモリー領を示す地図を広げて三人を呼んだ。呼ばれた三人は開けていた窓を閉め、私の元へ。

「貴方達に、グレモリー領の一部を与えたいと思っているわ。赤い印がつけられた所以外で欲しい所があれば、是非言って」

「土地ですか…。どうしましょう」

「部長、手にした土地は何をしてもいいのか?」

「ええ、勿論。何を建てても、構わないわ」

二人からの質問があるなか、巧さんは特に口を開かない。

私は堪らず、彼に声をかける。

「イツセー、貴方はどう? 何処か欲しい所とかはある?」

「俺はいらない。他の奴らに回してやれ」

何の迷いもなく、そう言い切って巧さんは座っていた座席に戻ってしまった。

私は彼のある部分が少しだけ、怖かった。

彼は、あまりに自分に無頓着だ。自分に対する欲も少ない。戦う理由や戦い方も自己犠牲的な面が目立つ。

一人で窓の外を眺める彼の姿が、今にも消えそうな儚さを抱えてい

る様に見えた。

「それじゃあ、お前ら。また後でな」

「ええ。アザゼルも、お兄様の会談でサボらないでよ」

無事に目的地の駅に着き、別の場所で降りるアザゼルは列車に残り、私達は列車を降りる。

駅の構内を歩いて、ホームを出る寸前。パンツ！と花火が鳴る音が聞こえた。聞きなれた音に私は笑みを隠せなかった。

だってこれはー。

『おかえりなさいませ、リアス様。眷属の皆様！』

ホームを出た私たちの前には、私たちの帰省を歓迎してくれる人達が多くいた。

鉄砲を空に向けて放つ兵隊。楽器を鳴らし、綺麗な音を奏でる楽団。

このグレモリー領を支えてくれる人達が私たちを迎えてくれる。

「ひ、人がいっぱいいますう…」

私たちの中では飛び抜けて人見知りのギヤスパーは、巧さんの隣で巧さんの着ている制服の裾を握りしめていた。そんな様子のギヤスパーに巧さんも文句が言えなかったのか小さく溜息をつくだけ。

同時に、この歓迎方法が初めてのゼノヴィアとアーシアも啞然とした様子。それでも少し時間が経つと、演奏に耳を傾ける程に余裕が生まれたみたい。

「おかえりなさいませ、リアス様。眷属の皆様」

一列に並んだメイドと執事の中で、一人だけ前に出ているメイドーグレイフィアが私たちに挨拶の言葉をくれる。

「ありがとうグレイフィア」

「何事もなくて良かったです。それでは皆様、こちらで用意した馬車

にお乗りください。本邸にて旦那様や奥様がお待ちです」

そう言つて彼女が示したのは移動用の馬車。と言っても、人間界の物とは異なり、体軀も大きく眼光は鋭い。そんな馬車を見てるうちに、メイドにより私たちの荷物を回収されたのを確認。

私はみんなを先導する形で馬車に乗り込もうとすると…。

「す、すみません！あの、列車の中にこの様な鉄馬がございまして…眷属のどなたかの物ですか？」

まだ若い、私たちと同年代であろう執事見習いが、押してきたのは巧さんの相棒でもあるバジンだった。

巧さんも一人で重そうに引く彼を見て、咄嗟に近づくと

「俺のです…。その、すみません」

「いえ！こちらこそ、その…なんとというかカツコよくてつい触つてしまったので」

何処かぎこちない二人の会話。冥界の悪魔と元人間の悪魔でも、男の子という点では似た趣味を持つのかも知れない。

「リアス、俺はこいつに乗っていく」

「そう、分かったわ」

巧さんが優しくそうにバシンを撫でる姿を見て、私は馬車に乗つてとは言えなかった。彼も、時々は自由に乗りたいたいのだろう。普段は、オルフェノクなどの荒事に近い要件でしか乗れないから。

「それでしたら、私も一緒に乗りますわ」

私の隣を通り過ぎ、バジンの座席に跨つたのは朱乃。私は先ほどまでの感慨を返して欲しかった。

「…おい、降りろ。お前はあつちに乗ればいいだろ」

「いやですわ。イツセー君たら、いつまでも私を『朱乃』と呼ばないから意地悪したくなりました」

「ヘルメットが一つしかないんだ、怪我すんぞ」

「イツセー君の運転技術を信用してますわ」

年相応の少女の様に想い人に甘える朱乃の姿。私は出会った頃の彼女と今の彼女を重ね、少しだけ嬉しさを感じる。

「…よろしいのですか、リアス様」

「どういう意味、グレイファイア」

「その言葉通りです」

つまり、朱乃に譲ってもいいのかと。そう、これは既に女の勝負。気になる彼のバイクの後ろなどあまりにも大きな特権だ。

「裕斗、小猫、ギヤスパ。ゼノヴィアと一緒に馬車に乗ってあげて」
「はい」

「分かりました」

「あ、あの…。部長とアーシア先輩は」

「無粋な事を聞くな、ギヤスパ。あの二人は今から戦場に向かうんだ」

何か後ろでボソボソと話す三人の会話はよく聞こえなかった。けれど、私の隣でアーシアも覚悟を決めた顔をしていた。

「イ、イツセーさん！私もバジン君に乗りたいです！」

「そうよイツセー、先約は私の筈だわ」

強く宣言する私たちに対し、巧さんはより強い溜息をするだけ。一方の朱乃は、私たちの視線を受け、負ける気のない表情だ。

「あらあら、部長もアーシアちゃんも普段からイツセー君に構ってもらってるじゃないですか。…少しくらいいいじゃない」

「ダメよ。朱乃、貴方がそこに乗ると言うのなら私やアーシアが手を挙げてでも不思議ではないでしょう」

「そうです…こういうのは平等な筈なんです！」

ぶつかり合う視線。いつのまにか座席を降りた朱乃はいつものニコニコな笑顔で私とアーシアを捉える。

「ここで退く訳にはいかない。むしろ、ここが天王山!!」というのかしら…日本では。とにかく、絶対に負けられない戦いがここにある！」

「「じゃんけん ポンッ！」」

厳正なる抽選により、勝敗を決めることにした。クラスメイトの子が言っていたわ。

この国では、こう言った時にこのじゃんけんで決めるのだと。

「……つく!!」

「…そ、そんな…」

その結果——私と朱乃は敗れた。つまり、勝者は——。

「わ、私ですっ!!いい、イツセーさん…後ろに乗っていいですか」

「…たくつ、決めるのが遅いんだよ。さっさと乗れ、置いてくぞ」

巧さんの手で、一つしかないヘルメットを受け取ったアーシア。

初めてつけるヘルメットに勝手が分からないのか、戸惑うアーシアを見て、巧さんが堪らずに行動に出る。

「お前、こんな事も出来ないのにバイクに乗りたいのかよ」

呆れた様な声でアーシアの頭に手を伸ばし、慣れた手つきでヘルメットを彼女の頭に被らせる。

こんなシチュエーションにアーシアも動揺せずには居られない。なぜなら、私が同じ状況になったら動揺しない筈がないのだから。

こうして巧さんの後ろをかけた戦いは多くの人に見られる場所で繰り広げられ、一番文句のない人物の勝利に終わった。

「兵藤一誠様は、ああいった方なのですか？」

「ええ。酷く不器用でしょ？」

本邸に向かう馬車。私と同じ馬車に朱乃とグレイフィアが乗り、他のメンバーはもう一つの馬車へ。

この馬車の中で、グレイフィアは少しだけ巧さんに関する事を私と朱乃から尋ねてきた。

「リアス様、彼は…」

「分かってる」

彼女が何を言おうとしたのかが分かった。

この冥界では、一夫多妻制が普通の常識として存在する。人間界にはある場所とない場所もあり、日本は後者に該当する。

巧さんの隣に、恋人になれるのはたった一人だけ。もし、巧さんが

複数の女の子とも付き合いたいと望み、女の子の方もそれでもいいとなった時には、彼に想いを寄せる私達は三人同時に恋人になれる。

けれど、彼の性格的にそれは難しい。彼はライザーを嫌悪していたし、なによりそんな器用な事ができる人じゃない。きつと巧さんは一人の人をずっと愛してしまうような人だ。私の勝手なイメージだけだ。

「そんな彼だから、私も…朱乃も、アーシアも、好きになれたんだと思うわ」

「その通りね、リアス」

女王としての顔ではなく、一人の友人として、朱乃は言葉を返してくれた。

そんな私達を乗せて、馬車は本邸への道を進んでいく。

次世代の悪魔

「大きい屋敷ですね…」

目の前に見えた大きな建物への感想を呟いたアーシア。

言葉では返さないものの、巧は同様の感想を抱く。

二人の前方を走る馬車、そしてその先には巨大としか形容できない程の規模を誇る屋敷が鎮座している。

かつて巧の居た世界にあったスマートブレインの本社とは違う意味での巨大さ。あれは近代的な街に合わせた壮大さであり、二人の目の前にある屋敷は巧たちが住む駒王町や近代的な街には合わない大きさを持った物だ。

「ふう…着いたわね」

屋敷の前で馬車は止まり、そこから実家を前に少し緊張した様子でリアスが降りてくる。次いで、共に馬車に乗っていた朱乃やグレイファイア達が降りてきた。

全員が馬車から降り、巧も止まっている馬車の近くにオートバジンを停める。巧が座席から降り、後ろのアーシアも慣れない様子でバジンから降りた。巧から見たら何故かニコニコ顔のアーシアはつけていたヘルメットを既に外しており、自分が座っていた所に置いた。

「イツセーさん、ありがとうございます。バジン君に乗せてくれて…」
「おう、さっさと行くぞ」

頬を軽く赤に染め、優しげな表情のアーシアにいつも通りの言葉と幾分か和らいだ顔で言葉を返し、巧たちはリアス達と合流した。

リアスとグレイファイアが先導し、グレモリー家の屋敷を歩く巧たち。

外観から想定していた広さは流石の一言に尽きる。シャンデリアなどの装飾も煌びやかだ。正に貴族の住む家と呼ぶべき部屋に、初見の巧やアーシアやゼノヴィアは言葉が出ない。

「あつ、リアスお姉さまー!!!」

元気の良い少年の声が聞こえた。

声の方向からは、リアスと同じ紅の髪を持った少年が此方：リアスに向けて走ってきた。少年は、リアスの腰に抱きついた。突然現れた少年ではあるが、服装や何よりもその髪を見て、リアスの血縁であるのは明白。

「部長さんの弟さんですか？」

「そういえば紹介していなかったわね。ミリキヤス、皆に挨拶をして頂戴」

ミリキヤスと呼ばれた少年は、巧たちの正面に位置を直す。その立ち姿からは先程の幼い様子ではなく、気品を漂わせる。

「ミリキヤス・グレモリーです。お姉さまの眷属の皆様、こんにちわ」
「ミリキヤスは、お兄様の子供で私の次のグレモリー家当主候補なの」
ミリキヤスの挨拶と、リアスの補足により目の前の少年はとてつもない立場に立っている事に驚くアーシアとゼノヴィア。

一方の巧は特に興味がないというか、話の大きさについて行ってないのか特に顔色に変化は無かった。

「眷属の皆様への挨拶は済ませたのかしら、ミリキヤス」

ミリキヤスが走ってきた方向からゆっくりとした足取りでこちらに向かってくる女性。その顔立ちにはリアスによく似ていた。しかし、その髪は亜麻色でリアスとは違う。

「初めての方も何名かいらっしやるわね。リアスの母、ヴェネラナ・グレモリーです。はじめまして」

「…」

どう見ても姉にしか見えない目の前の女性の正体に巧は内心で驚く。それ以外にも、ヴェネラナから自身に向けて視線を向けられていた為に居心地が悪かった。

心当たりは、ライザーの一件。あの婚約騒動で巧はリアスの婚約を破断したので、彼女の母からは恨まれても仕方ないと考えていた。「そんな顔をしないでください兵藤一誠さん。あの一件はもう終わったことです」

巧の僅かな視線に気付き、微笑と共に口にした言葉。その言葉にグレイフィアを除いた全員が巧とリアスを見合う。

「お母様…、その、イツセーは元々こんな顔で、あの一件も特に気にしてないから…」

「おい、どういう意味だ。こんな顔って」

「その仏頂顔の事よ。私のお母様にそんな顔してもダメよ」

向き合う巧とヴェネラナの間に割って入るようにリアスが巧の隣に立つ。巧はリアスの言ったフォローの一言に反応し、いつもの言動を晒してしまった。

「どうやら新しい花婿候補がいるようで良かったわ。しかも今度は娘の気持ちに沿った縁談になりそうね」

さらりと爆弾のように放たれた一言は一部の例外を除いては、その場にいた何名かを凍らせる事に成功した。

「……??」

状況についてくる気のない朴念仁を除いては。

「リアスの眷属諸君、ここを我が家だと思ってくれて構わない」

広大な広さを誇るグレモリー家本邸の一室。若さと大人の持つ威厳を混ぜ合わせた男性の声が響く。食事が行われるにしては広すぎる部屋に巧たちは座っていた。

駒王学園の食堂にも負けない広さ。その中心に置かれたテーブルの上には美味である事は間違いない料理が置かれていた。

そんな中で巧は食事に集中出来ずにいた。この広すぎる部屋に加えて、部屋の壁には数十人のメイド達が待機。この家の家主であるリアスの父リアスの父リアスの母リアスの母男性とヴェネラナからの視線。

そこに敵意や悪意が無いとはいえ、時折向けられる視線は人付き合いの下手な巧には酷なものだ。それらを上手く遇らう術も知らず、かといって無視を決め込む事が出来る相手では無いのも分かっていた。

巧の態度も相まって宴と呼ぶにはあまりにも静かな食事が始まる。グレモリー眷属の皆が目の前の食事を基本的なテーブルマナーに従って食べ始める。

ある程度食べ進めると、ヴェネラナが悪魔としては新人のアーシアとゼノヴィアの二人に声を掛けて会話が始まる。二人は緊張していたものの二人の近くに座る朱乃が会話の中継役に入る事で円滑なコミュニケーションを取れていた。

「味…どうかしら？」

「美味いぜ…普通に」

巧の正面に座ったリアスが巧に声を掛けた。表情は特に乱れてはいなかったが、何処か疲れているようにも見える。

その原因が、自分の両親である事も察していた彼女だがどうすべきか迷っていた。

二人の沈黙を裂くように、リアスの父ーグレモリー卿は低く響きやすい色気のある声を巧に掛ける。

「兵藤一誠君。今、君に恋人はいるのかな？」

「…??」

父親の唐突な質問に、リアスと巧の二人にクエスチョンマークが降り注ぐ。しかし父の言わんとする事を先回りで予感したりアスの顔が赤く染まる。

真顔とも仏頂面とも解釈される険しさを滲ませたままの巧。そんな彼に僅かに視線を向ける朱乃とアーシア。巧の答えによつては血を見る羽目になると覚悟を決める裕斗、小猫、ゼノヴィア、ギヤスパー。

それぞれの想いが頭を駆け巡る中で、巧はゆっくりと言葉を返す。

「別に…いない…です」

「ふむ、なるほど。いきなりすまないね。私も若い子の恋愛に少しばかり興味が湧いてしまったね」

「…そうっすか」

飄々としながらも、本心を悟らせまいと振る舞うグレモリー卿。対して巧も彼の狙いまでは見据えてはいないものの、何か試されている、観察されているとこれまでの経験が警鐘を鳴らす。

「それでね…君にリアスを「お父様ツ!!それ以上は…」

ゆつくりとグレモリー卿は言葉を選び、舌の上で吟味したものを紡ぎかけた所をリアスの声が制止する。

普段の振る舞いからは想像出来ない程の激しさを宿した声。そんな声を出した本人、リアスも自身の咄嗟の反応に驚いていた。けれども、あのまま会話が続けば、父が巧に何を言うのか分かってしまった。だから、止めたかった。自分の気持ちを他人を介して、それも自身の家の持つ立場で外堀を埋めさせる様な事はしたくなかった。仮にライザーの一件や婚約の事を持ち上げれば、彼に迷惑を掛けるのは目に見えていた。

リアスは、巧の重荷になるのだけは嫌だった。

巧の重過ぎる荷を自分も共に背負いたいからー。

冥界到着の翌日。

巧はグレモリー邸の一室のベッドで体を寝かせていた。

今日は魔王の管理する、魔王領と呼ばれる土地に出向く予定だ。とはいえそれまでの時間は暇な為、グレモリー眷属ー巧を除いたーの皆はこの領地の観光をしていた。

今朝、自分の部屋を訪れ、一緒に外に出かけようと誘ってくれたりアスとアーシアに断りを入れた。その時の二人の顔は残念そうではあったものの巧の事を考えて、特に何も言われなかった。巧としてはそれが一番ありがたかった。心配する様な事も、しつこく誘う様な事もせずにごく普通に対応してくれた。

「…何やってんだよ、俺」

そう呟いた先にあるのは、着替えや暇つぶしに持ってきた漫画やゲーム機を入れたバックではなく、少し小さめのポストンバッグ。その中には念の為と持ってきたファイズギアが。

ベットから体を起こし、ポストンバッグの中からそれらを取り出す。

頭に浮かび上がってきたのは、短い期間とはいえ巧にとっては大切な場所となった駒王町とそこに住まう人達。

兵藤夫妻、松田、元浜、桐生愛華、クラスメイト達。

こんな口下手で不器用な自分と向き合ってくれる人達。そんな人達を巧は彼らの知らない闇とそれに連なる者達から守ること。それが自分の役目でもあり、自身が殺してしまった兵藤一誠への贖罪になるのだ。

巧の部屋の窓には冥界入りした時に利用した列車が。

あれに乗り、駒王町に帰ると言う考えが頭を過る。

同時に、今は自分達の代わりに街を守る者達という事を思い出す。まだ数回しか共に戦った事のない者達だが、彼らならとも思えた。

「ごめんなさい、一誠さん」

ドアへのノック音が聞こえ、自身を呼ぶヴェネラナの声。特に返答はしなかったが沈黙を了承と捉え、ドアが開く。

「そろそろリアス達が帰ってきます。貴方もそろそろ支度をなさって
は？」

「分かり、ました」

ぎこちない敬語に対し、馬鹿にした様な笑みとは違う優しさの籠った笑みを浮かべたヴェネラナ。

「無理しなくてもいいのよ」

「いや…でも…」

続かない会話。巧もヴェネラナが自分に悪意や敵意が無いことは分かってはいるが自身に向けられる期待の様な視線に落ち着かない。ここで巧はヴェネラナの後ろに誰か子供がいる事に気づく。

ヴェネラナの腕の裾を掴み、彼女の体を壁代わりにして時折顔を覗かせる。覗かせた顔はリアスとその兄を彷彿とさせる顔立ち。

「ほらミリキヤス、憧れの彼よ」
ファイズ

「は、はいっ!!」

初対面の時とは打って変わって、品の良さそうなお坊ちゃんから小学校に通う子供の様な態度を見せるミリキヤス。

ゆつくりと巧の元に歩み寄ると自身の小さな手を勢いよく差し出した。

「お父様や皆さんのお話を聞いて、貴方のファンになりました!!あ、握手してください!!」

一瞬、動揺したが隣にいたヴェネラナの説明によりぼんやりと事情を把握した巧は慣れない手つきで、小さなファンの握手に応じた。

「ありがとう、ミリキヤスの事」

「…おう、気にすんな」

観光に出かけていたリアス達と合流し、巧は魔王領ルシファードに向かう冥界製の電車に揺られていた。

座席に座る巧は自分の正面に座るリアスとの会話を打ち切り、窓の外を眺める。窓から見える風景は全くもって未知の物だ。

「ーそういうええあいつ、なんで俺の話を知ってたんだ……?」

巧は、今の自分がどういいう立場にいるのかこの後思い知る事になる。

ルシファードに向かう電車に乗り、目的の駅に着いた私達は、そこから地下鉄に乗り換えて五分ほど経った所で電車が停止する。

今回は若手悪魔の顔合わせ。それが行われる場所の地下にある駅のホーム。

「それじゃあ、みんな…行くわよ」

私の声に応える様に皆が電車から降りる。

降りた途端に黒いスーツのボディガード達が私達を囲う様に配置につく。一番前にいたボディガードの先導で少し歩いて、大きなエレベーターの前に。

それに乗り込み、目的の階のボタンを押す。

エレベーターの動く音が聞こえ、アーシアは少し緊張しているのか呼吸が少し乱れていた。

「ここから先にいるのは、私達のライバルになる人達。常に平常心を保つてな」

同時にエレベーターのドアが開いた。

開いた先には既に使用人が待機し、私達に会釈を。

「グレモリー眷属の皆様、お待ちしておりました。どうぞこちらへ」
使用人に先導され歩いていると私のよく知る彼の姿があった。

「サイラオーグ！」

自分の名前を呼ばれ、彼もこちらを向く。

裕斗や巧さんよりも一回りも大きな体格に身長。何より闘志むき出しの顔は巧さんとは正反対。

私は、みんなに向き直る形でサイラオーグを紹介する。

「彼はサイラオーグ、私の従兄弟なの」

「サイラオーグ・バルだ。よろしく頼む」

先ほどの表情とは違い、幾分か和らげた顔での挨拶。けど、その目は巧さんを捉えていた。彼もまた巧さんの活躍を知る人。

当然、巧さんもその視線に気付いてはいるものの厄介事になると分かっているのか特に視線を合わせない。いつもの彼らしい対応だ。誰が相手でも変わらないその姿勢に私は笑みが溢れそうになる。

「ここで立ち話もなんだから、向こうにいつて話しましょう」

「ああ、そうだな」

談話の提案は、私達の向かう方向から聞こえた轟音で掻き消された。

その原因に既に察しがついている私とサイラオーグは溜息しか出

ない。

「やはりこうなったか……。すまないリアス、少し行ってくる」

「ええ：：お願いサイラオーグ」

そう言った彼は大きな背中を翻し、彼の眷属と共にこの騒動を止めるべく歩いていった。

「あの方大丈夫なのでしょうか？」

心配した様子のアーシア。たしかにあれだけの音を聞くと、そう思ってしまうのも無理はないわね。

「大丈夫よ、サイラオーグならね」

「部長の言うとおりに、アーシア。さっきの彼からはとてつもない覇気があった。多くの悪魔を狩ってきた私が言うんだ、間違いないよ」

妙に説得力のあるゼノヴィアの言葉は正に的を射ている。

彼は、サイラオーグは若手悪魔最強と言われる人物だから。

「よく集まってもらってくれた。：：まあ、いきなりハデにやらかしてくれたそうだがな」

若手悪魔の顔合わせが正式に行われる一室。

今、私たちがいるところよりも更に高いところから声が聞こえる。

そこにはお兄様とセラフォル様。そして冥界の実権や政治に大きく携わっている上層部の面々が。

私達一六人の若手悪魔の下僕は私達の更に後ろに控える形に。

皮肉げに言った男性悪魔の言葉に先ほどの轟音の原因の一人、『グ
ラシヤラボラス家』の次期当主はサイラオーグの一発を受けた頬を抑
えながら悔しげな顔を。もう一人の原因、『アガレス家』の
次期当主は特に動揺はしてはいなかった。

後の面々、私や問題が落ち着いた頃にやってきたソーナ、サイラ
オーグ、最後の一人：：ディアドラ・アスタロトは上層部の言葉を特に

重く受け止めてはいなかった。

そこから上層部の言葉、そしてお兄様の短い挨拶で一旦区切りがつき、話の中心が私達に移り変わった。

「今の段階で構わないから、皆の夢…または目標をこの場で語ってくれないかい？」

私達よりも高い位置にいたセラフオール様、お兄様ーシルシファー様の願いに応じるかのようにサイラオーグが前に出た。

「俺の夢は、『魔王』になることです」

サイラオーグの後に、私。そして他の悪魔達がそれぞれの夢や目標をこの場で発表していく。

私の夢ー民に認められる一人前のグレモリー家当主となり、レーティングゲームの各大会での優勝。

私の夢を聞いた皆の表情はとても頼もしかった。私や夢を語る他の若手悪魔達を見る巧さんの目はとても優しく、けど私には何処か切なくも見えた。

きつと彼は、夢を持つ者にとっても優しい。

その夢を、守る為に戦ってきたのだから。

最後にソーナの番が来て、一歩前にでる。

「私の夢は、階級や出身に関わらずレーティングゲームを学べる学校を作る事です」

堂々と今の自分の目標を口にしたソーナ。

けれど、周囲の反応は先程とは全く異なっていた。

「はははっ！」

「これは傑作だ！」

「可愛い者ですな…夢見る乙女は」

先程までの静けさから一変。上層部の悪魔達がソーナを、ソーナの掲げた夢を思い切り笑い出した。

私は、自分の掌に力が思っているのを握り締めた手から痛みが生じてから気付いた。

悔しい。今の私は夢を笑われた友達を助ける事すら出来ない。

笑い続ける悪魔達が突然、笑うのをピタリと止めた。

彼らに対して巧さんが殺気にも似た怒りの視線を放ったから。彼らが笑うのを止めると巧さんはみんなの視線に気付き、明後日の方向に体を向け始めた。

この後すぐ、上層部の悪魔に対しやはり我慢できなかったセラフオルー様が怒りを露わにした。

そして、私達とソーナ達により、若手悪魔によるレーティングゲームの開催をルシファー様が提案されて、今回の顔合わせは終わりを迎えた。

Re：ゼロから始める異世界修行

若手悪魔の顔合わせを終え、リアス達は本邸に戻るとヴェネラナからの提案で部屋にある風呂ではなく、本邸の敷地内に作られた露天風呂に入らないかと提案された。断る理由もなく、その提案に乗ったりアス達。

というわけで、巧達は日本の温泉をモチーフにしたことは明らかな風呂で体を休めていた。

「かああゝ、いい湯だぜ全く」

顔合わせの後、本邸で合流したアザゼルも桶に酒を乗せて、お猪口を叩く。背中からは六対の黒い翼を広げてリラックスモード。極めつきは頭にタオルを乗せて鼻歌を歌いだす始末。

オカルト研究部の顧問の姿に裕斗と女子のようにタオルを胸のところまで巻いたギヤスパーは苦笑していた。

「お前もそう思わねえか、イツセー」

「別に、アンタみたいに気が抜ける程じゃない」

悪くない、そう言わない巧の言葉選びは中々だ。普段から積極的に話しかけてくるアザゼル。酒に酔ったのか、ここぞとばかりに巧に話しかけてきていた。

「お前、上層部の連中に喧嘩ふっかけたらしいな。…ハツハツハツ！お前らしいぜ、たくっ」

「喧嘩なんてふっかけちゃいない。ただあいつらが気に食わなかっただけだ」

「それだけの理由で、上層部の会話が止まるくらいの殺気をぶつけられる奴は冥界が広くてもお前くらいさ」

アザゼルの笑い声と話し方故にそこまでの大事のように思えないが、悪魔としての知識のある裕斗とギヤスパーからしたら巧とした行為は危険と言わざるを得ない。

特に裕斗は巧が上層部の悪魔に殺気を叩きつける直前に制止をしようとしたが間に合わなかった。

同時にソーナの眷属の匙元士郎が飛び出そうとする姿も捉えていた。あのままだったら彼が何かをしていたであろうことは容易に想像できた。

巧は彼が目をつけられるよりも、自分が目を付けられる方がいいと考えていたのだろうか。裕斗はそんな悲しい予想を立てていた。

「でもイツセイ君、あんな無茶はしない方がいい」

だからこそ、裕斗は行動に起こした。

これから先、彼に守られるのではなく共に戦える様に。

「ぼ、僕もそう思います。確かにイツセイ先輩は強いし、僕なんかじゃ助けられないかもしれないけど：僕も頑張ります」

二人の自分とは違う真っ直ぐな眼を、巧は直視出来ない。逸らした先にあるのは駒王町とは違った夜の空。

「……分かった」

少しの間を空けて、短く簡潔にまるで降参する様に言葉を吐く。

その様子に裕斗とギヤスパーは肩の力を抜けた。

青臭い青春の一ページの様な瞬間を、三人とは違い長い年月を生きてきたアザゼルはニンマリとした顔で見ている。

「おいおいお前ら、そんな感動シーンを見せつけるなよ。それじゃあ、辛気臭い話はここで終わりにして：【女】の話でもしようや」

ーあつ、ウザい

性格も考えも噛み合うことのないオカルト研究部の男子三人の気持ちが珍しく一致した瞬間だった。

『まあ、そうっんけんするなよ、イツセイ！お前にだってあるだろ、好みの女ぐらい』

壁越しに聞こえる声に、私ーそして、朱乃とアーシアは聞き耳を立てていた。

本邸の敷地内にある風呂でお湯に浸かる私達の耳に届いたのは、壁の向こう側にいる男子たち、というかアザゼルの声。

他の三人の声はアザゼルよりは小さいものの私達にも聞こえる大ききさだった。

先程までは少し重い雰囲気の話だったけど、アザゼルによる今の話題へシフトしていった。

『一緒の家に住んでるリアスが好みか？』

彼の好みの女の子。恋愛の二文字からとても遠い彼がそういった話をするのはイメージでできなかったけど、この流れなら彼の好みを自然と知ることが出来る。そう考えるのは私だけではないよね。

「朱乃、アーシア…貴方達」

「リアス、静かに」

「一緒に住んでるなら…私も居ますよ、イツセーさん」

いつものまにか壁に近寄り、耳を壁に当てている朱乃。

お湯に浸かりながら正座をして、祈る様につぶやくアーシア。

因みに小猫とゼノヴィアは、最近のマイブームについて二人で仲良く語ってる。…この二人は平和ね。

「リアス、貴方も分かかってるでしょ。彼の難攻不落さを」

「ええ…ここはお互いに頑張りましょう」

私も朱乃の隣で壁に耳を当て、男子達…巧さんの声を聞き漏らさない様に準備を整える。

何度かアザゼルの揶揄いの言葉を受けたり、アーシアや朱乃の名前を出したり、墮天使の女性を紹介しようか、などと私達からしたら冷や汗ものの提案をされつつもその全てを拒否する巧さん。

ようやく出た答えは、あまりにも短く、悲しいものだった。

『誰かを好きになったことなんて、無かった』

声しか聞こえないのに。その声に含まれた色はきつと美しくない。

そんな確信が持てた。

『そんな事、考えた事もなかった』

昔乾巧から今兵藤一誠へ。彼の記憶の中に誰かに恋をした事などなかった。そんな余裕が持てなかった。彼の短い言葉は私たちに彼の心の鎧の厚さを改めて知らしめるきつかけになった。

翌日の早朝。

朝食を取ったリアスたちはアザゼルの指示で屋敷の前で待機していた。オカルト研究部全員が既に集合していて、皆運動に適した服装。今日からソーナ達のレーティングゲームに向けての修行が始まる。

『誰かを好きになつたことなんて、無かった』

リアスはふと、昨日の巧の言葉を思い出し、彼の顔に視線を向けてしまっていた。その瞬間、彼女の視線に気づいた彼はまだ眠気の取れていない眼をして、こちらを睨む。

「…なんか用でもあるのか」

「べ、別に…なにもないわよ」

咄嗟のことで下手な対応になってしまったが、それ以上の追求もない。もう一度巧を見るといつも以上に物静かで、何かを隠している子供のように見えた。

少しするとアザゼルが相変わらずのスーツ姿で現れた。

「集まつてるな。よし、今からシトリー眷属とのゲームに向けての修行を始める…前に、それぞれの課題を発表する」

アザゼルの一言に皆の空気が変わる。

彼もそれを察して、口角を軽く上げてからリアスたちを見つめる。

「まずはゼノヴィアだ。お前はデュランダルを完璧に使いこなす事を重点にしていけ。あれは対悪魔としては最強クラスの武器だからな。それから『もう一本の聖剣』にも慣れてもらう」

ゼノヴィア自身も知らない聖剣の存在を示唆されたものの、アザゼルは特に言う気もないのか、話を次に進めた。

「木場、お前は『禁手』を一時間…いや、一日でも長く保てる様に修行をしていけ。発動状態を普通にして保つ日と、実戦訓練で保つ日とを繰り返していくんだ。それと並行して、通常の訓練や剣術の修行をしていけばいい。剣術の方は師匠に一任してある」

「はい」

裕斗の明るく、力強さの感じる返事にアザゼルは頷く事で応える。次に視線は既に怯え始めているギヤスパ―へ。

「ギヤスパ―はまず対人スキルの向上だ。悪魔や神器の才能ではお前は中々の物を持つてるからな。その恐怖心を克服できれば、暴走しがちなお前の力もそのリング無しでも落ち着く筈だ」

「は、はい…。そうだ、僕も強くならなきゃ」

ギヤスパ―は、自身の腕に付いている神器の力を抑えるリングを見て、自身の決意と共に心を奮い立たせる。その姿は夏休みを迎える前の彼とは見違える物があつた。

「リアス。お前はそのまま暮らしていけば、魔力や身体能力は高まり大人になる頃には最上級悪魔になれるだけのポテンシャルを秘めてる。でもそれよりも強くありたいんだな？」

「ええ、そんなの待ってられないわ」

一瞬、巧を見たりアス。彼女の気持ちを察したアザゼルは内ポケットから一枚のプリントを取り出して渡した。

そこには、この期間でやるべき事や眷属の『王』として知っておくべき事などが記されていた。

「アーシア。お前は単純な魔力の絶対量や操作技術の向上。基本的な体力もつけてもらう。そして神器による回復能力の進化を遂げてもらう」

「進化…。『禁手』の事ですか？」

「それもあるが、今は回復範囲の事だ。実戦で敵がわざわざお前を怪我したやつ所まで何もしないと思うか？」

その言葉に皆が返事に詰まる。レーティングゲームや実戦において、回復能力は下手な攻撃手段よりも何倍も貴重だ。そんな力を持つ彼女を敵がみすみす見逃す訳もない。アザゼルの言う回復範囲の拡大は眷属皆の安全を守るには重要だ。

「手を触れずに回復させる手段を、アーシアには会得してもらう。

まあ、俺もサポートにつくからその辺は難しく考えすぎるなよ」

「はい！頑張ります」

意気込むアールシアを、皆が暖かい気持ちになり見守っていた…。

アザゼルの視線が、痺れを切らしていた小猫と朱乃に向けられる。二人ともリアスや他の眷属同様に強くなりたい気持ちがあるから。

「朱乃、小猫。お前たち二人には同じことを言わせてもらおう。お前たちのここからの成長には、自身の中に流れる血を受け入れる事が重要だ。お前らが自分の全てを使えば、ライザーとのレーティングゲームに負けることは恐らくだがなかっただろう。わざわざイツセーが迎えに行く必要も無かった訳だ」

朱乃はともかくとして、小猫にも何らかの事情があるところの場で知った巧は思わず小猫に視線を向けてしまう。アザゼルの物言いにリアスは反論を述べようとするも、アザゼルがすかさず言葉を続ける。

「例えそれが辛い事でも、今のままじゃいつかお前らが足手纏いになる。そしてその代償を…リアスや木場やゼノヴィアやアールシア…イツセーが被る事にもなりかねない。そうならない為にも、お前らは今の自分を受け入れて、前に進むしかないんだ。それを飲み込んだ上で、修行に打ち込め」

二人は特に言葉を返さずにいた。少しして、朱乃が頷き、小猫も無表情ではあるものの、小さく頷いた。

その二人を巧は、黙って見つめていた。

自身の中に流れる血。先ほどのアザゼルの言葉は巧にも言える物だった。オルフェノクであるが故に自由自在にファイズギアを使いこなせている。そんな血を引いた自分を好きになれない。もし、受け入れる事が出来たら…好きになる事が出来れば、自分も誰かを愛する事が出来るようになるのだろうか。

そんな事を思いながら、空を見上げると何かの接近を感じ取った。その何かを明確にしようと感じを研ぎ澄ませようと集中した瞬間、巧の鼓膜にアザゼルの声が響く。

「最後にイツセー。お前は…って、どうやら気付いたらしいな。それとほら、これ受け取れ」

「…って、なんだよこれ」

アザゼルがいきなり巧に投げ渡したのは、巧の着替えなどが入ったバックと一振りの刀。

両手に持った荷物を抱える自分の足元：影があつたはずの場所は一気に暗くなる。それはつまり、自分たちの真上に巨大な何かがいる証拠。

「ドラ…ゴン？」

誰かの呟いた声が聞こえた。

今、巧の前に浮かぶのは少なくとも巧のいた世界ではゲームや漫画やアニメと言った二次元の世界の生き物というか幻獣。

巨大な体、固そうな鱗、刃のような爪や牙。背中には巨大な両翼。「まさかお前とこんなところで相見えるとはな、アザゼル」

「きちんと魔王様の許可やお手続きは完了させてきたぜ、タンニーン」まるで友人のような辛口を叩き合う二人。

目の前のドラゴンの詳細を知らない巧は珍しくどうしたらいいか分からずにいた。

「イツセー、こいつはタンニーン。お前の先生役の一人だ」

「ほう、この小僧が噂のファイズか。先程は俺の接近によく気付いたな。久しぶりに鍛えがいのある者だといいが」

「こいつは、元龍王の一角でな。ドラゴンから悪魔に転生した転生悪魔だ。ちなみに最上級悪魔で最強クラスだ。気張れよ、イツセー」

因みに、アザゼルの言う龍王とはドラゴンの中でも高潔な者たちで構成されおり、伝説的な存在。

元々は六匹のドラゴンがいたが、今はタンニーンを抜いた五匹で大龍王と呼ばれている。しかし、そのほとんどが封印されていたり、表舞台からは消えている為にとても貴重な存在といえる。ちなみに、アザゼルの持つ人工神器の力はそのうちの一匹により、完成されている。

「リアス、修行を始める前にイツセーから伝えるべき事がある。いいか？」

「ええ…何かしら？」

タンニーンの紹介も終わり、ようやく修行となりつつあったがアザ

ゼルがそれに待ったをかける。

アザゼルの言葉を受けて、巧がリアスの前に。

「俺は、レーティングゲームではもうファイズにならない」

「…えっ…？」

突然の告白にリアスは頭の中が真っ白になる。

対する巧も自身の言ってる意味が彼女に対する迷惑になると分かっけていても、容赦なく言葉を繋げる。

「…使いたく、ないんだ」

「どうして？」

「こいつはオルフェノクを倒す為の物だ。…だからだ」

それだけ言っけて、巧はリアスに対して背中を向けた。それ以上は何かを聞くのが怖くなって。

リアスは、何かを背負い続けようとする巧をただひたすらに見つめ続けた。

波乱の後の一波乱。

こうして、リアス・グレモリー眷属の修行が開始した。

修行開始から九日が経過。

巧は、グレモリー家の所有する土地の一画―後にファイズ山と名付けられる事になる山―にいた。

少しばかり汚れたスポーツ用のシューズ。山故に泥や汚れが付いてしまっていた。

「…はあ…」

乱れた呼吸を整えるべく、息を吐く。顔を見上げた先にあるのは青い空ではない。

「まだまだ行けるな、兵藤一誠!!」

巧を鼓舞させる様に、巨大な龍―タンニーンは、口を開く。

その動作の意味とその結果を、すでに何回も味わっている巧は片手

で握った剣を強く握り直す。

「らあ…っー」

ファイズの変身時同様の掛け声。その場から駆け出し、助走の先にあつた大きな木を踏み台にして跳躍。

自身の体を流れる魔力を剣の刀身に集約させる。イメージはファイズの必殺技の一つ、スパークルカット。

約15メートル程のジャンプ。空中で剣を下から上へ振り上げる。その一振りで刀身に纏っていた魔力は、刀身を離れてタンニーンへ向かう。

口を開け、火花を発生させてからの火炎放射。まさにドラゴンの技を発動しようとするタンニーンだったが、回避のために動作を止める。見た目と違った素早い動きを見せ、巧の放った一撃を回避。

その一撃がタンニーンにとってダメージを与えられる物と認めた上での回避。

「今のはいい一撃だ。単純な攻撃力、そして速さ共に申し分ない。十分に実戦で通用する物だ」

「そうか」

タンニーンの言葉に、特に反応を見せない巧。表面通り受け取っていないのか、どうか。本来、下級悪魔の一撃が最上級悪魔に痛手を与える事などそうはない。しかも目の前の少年は、本来の力を発揮していない素の状態。それなのにここまでの物とは思ってもよらないタンニーン。

仕切り直し、今度は接近戦を仕掛けようとするタンニーンの視界に墮天使の総督が映った。

「まさかここまでやれるとはな…イツセー。生きてる様で何よりだ」

アザゼルの訪問もあり、二人は一旦休憩を取る事にした。

二人の表情を見て、何かを察したタンニーンは距離を置いた場所で休みを取り、巧とアザゼルは巧の拠点とする場所に座っていた。

「俺の提案とはいえ、またお前に面倒をかけたな。…すまん」

「あんたが命令したわけじゃない。俺が、自分で決めた」

巧は、自身の前に広げられたおにぎりを口にし、アザゼルは持参したサンドイッチを。

「元々、ファイズの力はオルフェノクを倒す為に使うもんだ…。アイツにもそうだったしな」

過去、ライザーとのゲームの際も巧は不死の力を持つライザー以外にファイズギアを用いてはいなかった。それにリアスの夢がかかった勝負でもあった故の一回きりと決めていた。

レーティングゲームによるファイズギアの使用の禁止。これは元々、アザゼルが巧に提案した。表向きの理由としては巧の信念。その裏にはアザゼルの意図が隠されていた。

「今の冥界は不安定な状態だ。元々敵だった天使や墮天使と手を組んだ為に生まれた敵、旧魔王派を含んだ禍^{カオス・ブリゲード}の団。これだけでも厄介なのに、暗躍する謎の種族…オルフェノク。そしてそれに対抗できるファイズ、デルタのベルト」

そう語るアザゼルからは普段の飄々とした態度は感じられず、本気でこの先のことを危惧している様に巧には見えた。

「あんたには迷惑をかけてる、こっちこそな」

「何いってんだよ、まだお前は学生だ。なら、小難しい事は俺^{顧問}に任せろ。…といっても、お前のベルトは未知の物だ。それを色んな奴の目に触れさせるのは面倒だ。特に悪魔の上層部にはな」

巧の脳裏には、ソーナの夢を笑った連中の顔が浮かび上がり、アザゼルの言葉に納得する。

「地位もないお前をどう利用しようとしてくるか分からない。そんなる前に手を打って置こうって訳だ」

「ああ…分かってる」

アザゼルとの会話が一瞬止まり、巧が弁当…リアス・朱乃・アジアによるお手製…の惣菜の一つを箸でつまんだ瞬間。

「ここまでで…ついいい。本物の兵藤一誠は何処だ」

世界が止まった様に、巧には思えた。

足元に掴んだはずの惣菜と箸が落ちていた。自分が落とした事に気づいたものの手を伸ばせない。

それよりも衝撃的な事実が目の前に落ちていたから。

「まさか本当とはな…。質問を変えるぞ、お前は一体何者だ」

逃げる事も誤魔化す事も許さない目、けれどその目には顧問の先生のような優しさも紛れている。

一人で戦う、そう決めていた巧の意思を否定するかの様な目だ。

「俺はー^{いぬい}乾、^{たくみ}巧だ」

その返答にアザゼルは信じられない物を見る目をしていった。自分で導き出した筈の答えは、荒唐無稽であると自覚していた。その仮説はたった事実への昇華された。

最早、誤魔化せる相手ではないと巧も分かっていたのだろう。巧自身も驚く程にすんなりと話を進めていた。

自身がこの世界とは少し異なる世界から来た事、元の世界でオルフェノクと戦っていたこと。その戦った相手の中に影山冴子が居たこと。戦いの果てに自身は命を落とし、兵藤一誠の肉体に憑依した事を。

ただ一つ、自身がオルフェノクであることを除いては。

「これで辻褄があった。…こんな話なら、尚更表には出せねえよ。因みにお前の正体を知ってるのは、リアスだけか？」

「ああ。目覚めた時に、あいつが目の前にいた。…あんたは、いつから気づいたんだ」

巧の質問、それに対してアザゼルは軽く戯けた様に答える。

「んなもん、最初からだ」

「そうか」

自身の正体に気づいた時点で、特に驚きはなかったのか。アザゼルは軽く拍子抜けして、自身の推理を最初から聞かせる

「あのコカビエルを倒した奴が、数ヶ月前まで女の乳や尻を追っかけ

た小僧って時点だな。部下に調べさせたさ、過去に兵藤一誠に戦闘経験があったかどうかを。結果は無し。兵藤一誠は何処にでもいる平凡な男子高校生。そうとしか言えなかった。なのに会談が行われる前の時点でのコカビエルを上回っていた。他にも確信的な事柄がもう一つ。あの木場勇治という男だ」

「木場…か。アイツが何か言ったのか？」

巧は夏休み前にアザゼルからファイズアクセルの入手経路を尋ねていた。その際に木場勇治から渡されたと知らされ、彼がこの世界にいるという事実を知った。

「いや、何も。ただ、お前を知ってる様な口ぶりだ。…兵藤一誠の交友関係に木場勇治の名前はない。いや、人間界の戸籍にも木場勇治という男の名前は存在していなかった。そんな男とお前が知り合いなのも変な話だろ？」

「言われてみれば、…な」

ここまで言い当てられるとは思ってもみなかったが、アザゼルに悪意を感じない為か何も思う事が無かった巧。

「正直に言えば、お前の正体云々は本筋じゃない。…重要なのは、本来異世界…いや、並行世界の種族であるオルフェノクがなぜこの世界にいるのかだ。俺の調べではオルフェノクに該当する種族が表舞台に現れたのはここ数年。実際のところ、裏でコソコソしてた時期を含められて軽く見積もっても十年前ってところだ」

スマートブレインという巨大企業を隠れ蓑していたオルフェノク達。表舞台に立つにはそれなりの根回しが必要になるのは巧にも分かる。

「そしてそのコソコソしてた連中のリーダーがあの子、だけじゃない。お前が本来いた世界にも居たって事は、アイツを連れてきた奴もいる可能性がある。勿論、手段は分からないが自力で来たって可能性も否めないがな」

「…連れてきた…奴…」

最終決戦の際、影山冴子は死した訳ではない。忽然と姿を消した。灰となったであろうオルフェノクの王…アークオルフェノクと共

に。

巧の様に死んで、誰かに憑依した訳でもない。おそらく協力者がいる可能性が高い。

「本当に厄介だぜ。イツセーで、いいか？…デルタの他にベルトはあるのか？」

「もう、ない。壊れたからな」

三本のベルト、二本目と呼ばれるカイザのベルトは最終決戦時には木場勇治が使用したが、アークオルフェノクの一撃で破壊されてしまった。既にこの世には存在しないものだ。

「そうか。三本目や四本目、終いには五本目のベルトなんて言われたらいよいよ大事になるからな。お前も凄いいもん背負い込んでたな」

「あんた程じゃない。…それが俺の役目だ」

ありがとうな、小さく呟いた巧の言葉を聞き取ったアザゼルは顔を伏せて、口角を軽く緩ませる。

「長話になっちまったが、まだ案件があつてな。小猫が倒れた、それとお前に呼び出しがかかっている」

約半分を過ぎた修行期間、まだまだ波乱は終わらないらしい。

そう確信した巧はいつもの仏頂面を浮かべていた。

灰色の狼と白い猫

アザゼルの指示もあり、一旦グレモリー家に戻る事になった巧。ボロボロだった運動着から着替えの私服へ。夏用の薄めのジーンズ、白のTシャツの上にベージュのYシャツを着て、初日に泊まった部屋で時間を潰していた。

少しするとノックの音が部屋に響く。

ドアを開くと、ヴェネラナが立っていた。

「お久しぶりですね、一誠さん。少しお時間をいただけませんか？」

その問いに首を横に振ることが出来なかった巧は、彼女を部屋に招き入れる事になった。

ヴェネラナからは小猫の経過と今の体の状態を伝えられ、取り敢えず問題が無いことは分かった。話が一段落つき、会話が止まりかけた所でヴェネラナは話を切り替える。

「一誠さん、貴方に不信任を抱かせるような態度を取ってしまった事を夫婦共々謝らせてください」

「いや、別に……そんな事しなくても、いい」

この本邸に着いた時から、巧は自身に向けられる視線に違和感を感じていた。けれど、今の彼女からはそう言った物は感じられなかった。

短くも辿々しい返事ではあったが、巧の本心そのもの。

悪意や敵意のあるものではないのも分かりきっていたから。

「ただ、期待してしまったの。貴方ならあの子の夢を守り、そして叶えてくれるかも……と。そのせいで手を出しすぎてしまったわ」

立ち上がったヴェネラナは部屋の外に向かうこともせず、巧を少しだけ見つめる。

「あの子と……あの子の眷属仲間をこれからもお願いします」

「ああ、分かった」

そのリアスに似た顔立ちは、彼女の優しい笑顔を巧の脳裏に浮かばせる。

何があつたとしても、その約束だけは守り抜いてみせる。

巧はそんな自分の決意を胸にしまった。

ヴェネラナが部屋を出た数分後、リアスが飛び込んできた……文字通り。どうやら巧の一時的な帰還を知らされ、レーティングゲームの勉強部屋から走ってきたらしい。

「お前のお袋から、小猫の事は聞いた」

「そう……。また私のミスだわ。自分の修行の事で頭が一杯になつてたわ」

自身を責める言葉を吐くりアスに慰めの言葉一つ掛けられない巧。とはいえ、リアスは慰めの言葉を待つてゐる訳では無い。元々掛ける必要もないのだが。

巧はふとした疑問を取り上げる。

「あいつは何で倒れるまで無茶したんだ。……そんなキツイこととしてたのか」

「ええ……それもあるけど、どちらかと言えば精神的な事もあるの。巧さんも気付いてるかもしれないけど、あの子にも辛い過去があるの。朱乃や裕斗のように」

アザゼルが修行前に小猫に掛けた言葉。それを考えれば、小猫にも何かしらの事情があるのは予想していた。

「そうか」

「いいの？ 知らなくて」

「あいつが自分で話したら、聞かかもな」

ゼノヴィアの時とは違い、今回は本人自身の秘密だ。なにより巧自身、秘密を抱えている。人には話したくない過去があつて当然。小猫にどんな秘密があろうと、巧の中で小猫が後輩で、仲間である事に変わりはない。

見えづらい優しさを持つ巧。その優しさが今だけは、リアスの目に真つ直ぐで明るい光のように映つた。

そんな感じで、二人の会話を楽しんだ後。巧は再び修行に戻ろうとするが、リアスの提案——小猫に一目会う事——を受け入れた。リアスに連れられ、小猫の部屋に入った。

部屋の構造は巧の部屋と大した変化はなく、リビングに該当する場所には巧の部屋にあるベットと同じものが置かれていた。

「イツセー君……」

「部長……。なんでイツセー先輩が」

二人に反応したのは小猫ではなく、ベットの隣に椅子を置いて看病をしていた朱乃だった。数秒遅れて、小猫も朱乃と同様の反応を見せる。

「……お前、なんだそれ」

驚いた巧の視線の先にあるのは白い猫耳。しかしその部位は、ネコ科の動物ではなく、一学年下の後輩の頭に付いていた。

猫耳姿の小猫は特に語る事もなく、朱乃とリアスの二人も静かにすること五分。それなりの時間が流れ、小猫の小さい呼吸音が部屋に響いた。

「私は猫又と呼ばれる妖怪なんです」

かつての自分——リアスの眷属になる前は、姉と二人で生きてきた。今よりは貧しくも苦しい生活ではあったが、家族と幸せに暮らせていた。そんな二人の転機。姉が上級悪魔の眷属になった事。それにより家族と共に過ごせる幸せと、金銭的な意味での幸せが成り立った様に見えたが、そんな幸せは長くは続かなかつた。姉が悪魔になった事により、戦闘の才能が更に開花。猫又の中でも最上位とされる種族、猫？。魔術のみならず仙人が扱える力をも持つと言われる種族。成長した力は、彼女の精神すら飲み込んだ。力を扱いきれず、主の悪魔を殺し、その果てにはぐれ悪魔という烙印が押される結末を迎えた。

その結果は小猫にも刃を向けた。上層部の悪魔は姉と同じ力を秘めている可能性が高いとの理由で小猫の死を求めた。そこに待ったをかけたのがサーゼクス。彼を介して、リアスの眷属となり、今の名

前を与えられた。

「悪魔になつてから、私はずっと怖かつたんです。姉様のようになりたくないから」

彼女も、ギヤスパーや朱乃と同様に自身に秘められた力に怯えていた。それは勿論、巧とも同じ。

「血の雨を降らせ、その雨の中で恍惚した笑みを浮かべたあの人の同じ力を……私は使いたくなくなつたんです」

その気持ちを、巧は痛い程理解できるつもりだ。巧はオルフェノクへの変身能力を好んではない。しかし、必要な物であるとは考えている。その力がなければ、ファイズへの変身能力も喪失するのだから。

「無理して使うことなんてねえだろ、別に」

そんな巧だからこそ、今の小猫の辛さが分かる。小猫には背負うべき罪も想いも殆どない。ここで引き返したとして、遅くはないだろう。

「イツセー先輩。私は無理してでも、強くなりたいんです。イツセー先輩みたいに。部長の夢を叶えられるくらい」

修行前にアザゼルに言われた言葉。

自身の力に尻込みしているうちに、仲間の誰かを失うかもしれない。小猫に起こりうる最悪の未来を提示され、自身の恐怖心よりも更に恐ろしい事に気がついた。

起きてしまった事象は変えることは出来ない。だから、そうならない為に……後悔などしない為に。

小猫は、前に進めた。自分の意思と足で前に踏み出せた。彼女の目の前にいる青年を、一人で戦わせない為にも。

「私、必ず追いつきますから。イツセー先輩」

普段の無表情からは一変した、満面の笑みを浮かべた小猫がそこにいた。

その笑顔を巧は勿論、朱乃とリアスも驚いた顔で見つめていた。

巧はその日のうちに授業再開の為にリアスたちと別れ、再び修行場

に戻った。

タンニーンの背に乗り、グレモリー家本邸から飛んできた巧。時刻は既に夜の為薄暗い。けれども、夜空には満点の星空が浮かび、かすかな光を振らせる。

「助かった、タンニーン」

「気にするな。明日から修行を再開するか。……どうやら着いたようだな」

意味深な言葉。

タンニーンの視線の先に、人影があつた。

その人物はどうやら焚き火をしていたのか、その炎により影が地面に写っている。

「君が……兵藤一誠、いや仮面ライダー555ファイズか」

その声は低く、巧の細かに響いた。

影の主——男性の放つ威圧感に、巧はこれまで感じた事のない緊張を体に走らせる。

「そんな風に名乗った覚えはない」

いつも通りの返答。しかし、その声には僅かな緊張が含んでいた事にタンニーンと男性は気付いた。

「あんたは……何者だ」

巧の問いに、男性はゆつくりと立ち上がり、巧の顔を見据えてしっかりと答えた。

「私は——本郷猛。仮面ライダー1号だ」

修行期間はあと一週間。

巧にとっては忘れ難い一週間の幕開けとなる。

「見極めが甘い……っ！」

「……っちー！」

甘さや優しさの籠ってない拳を横合いから放った掌底で軌道を逸らし、自身の顔面への直撃を防ぐ。

一撃を防いだ掌底を放った右手は、硬い石を殴ったかのような感覚に見舞われる。

「はあっ！」

低く響いた気合いと共に放たれた蹴りは、巧の腹を腕を十時に構えてた防御の姿勢の上から捉える。魔力による防御力の上昇を施したのにもかかわらず、その一撃はまるで体の内部を通り、巧の体を内側から攻撃する。

「……っ！」

オルフェノク、悪魔とて人体急所は鍛えられない。けれど、この一週間で何度も味わった痛みに屈するつもりもない巧は確かな意志を持ち、男性——本郷猛を睨む。

そんな視線を受けても全く動じない本郷猛は、まさに巧よりも何枚も上手としか言えない。巧とて目の前の男性が自分よりも格上と分かっている。しかしながらそれを認めるのは癪な為か、自然と本郷を観察し、彼から学ぼうとしていた。あくまで無意識的にだが。

再び彼に接近しようとする巧の真上に現れようとする存在を感知、その場から後方に下がり、咄嗟に距離を取る。

一瞬後には、巧がいた場所は炎に包まれる。

「威力こそ抑えたが、他の速さや炎の放出速度は手を抜いてはいない。あの一撃を咄嗟に感知したのは流石だな……兵藤一誠」

「ああ。一週間前よりも一回りもふた回りも大きく成長した」

本郷とタンニーン

教師役二人の言葉と同時にジリリリ、と拠点とする場所から時間を告げる鐘の音が。その音を聞いて、巧はようやく肩の荷が下りたように思えた。

本郷猛が、二人目の教師役として現れて一週間。巧はかつて逃避していた修行というものを図らずも全力でこなしていた。睡眠時間や食事を除いてはぶっ続けで二人と実戦形式の修行。

巧の下級悪魔としては飛び抜けた戦闘センスと実戦経験、なにより体力と負けん気が無ければ成り立たない。

一週間という短い期間ではあったものの、並みの悪魔では一秒でも保たないであろう別格クラスを相手に出来るほどにまで成長していた。

巧はタンニーンの背に乗り、グレモリー本邸を目指していた。アザゼルの連絡でシトリ一家とのレーティングゲームの前に、三大勢力によるパーティーが開かれる。巧もそれに参加することになった。当初はアザゼルに断りを入れるつもりだったが、オカルト研究部——主に一部女性陣——の反対により、棄却された。めんどくさい、そう言わんばかりの巧の視界に一台のバイクが映る。

本郷猛とその愛車、サイクロン号。本郷も巧の見送りをなるべく、本邸まで一緒に移動している。

「世話になった」

「いや、私に出来るのはこれくらいだ。気にしないでくれ」

グレモリー本邸前。巧は本郷と向き合い、別れの言葉を交わす。

「短い期間ではあったが、君と出会えて良かった。また、会おう」

本郷猛はサイクロン号に跨り、何処かへ去っていく。

彼の行き先は、分からない。けれど彼は現れる。人類の自由を守るべく。そんな男の背中を、巧は視界からバイクが見えなくなっても追いかけて続けた。

その後、本邸に戻った巧は既に集合していた他のメンバーと合流。二週間以上ぶりの全員集合となった。

本邸の一室に集まったオカルト研究部の皆の顔つきなどから成長を感じたアザゼルは軽く笑む。

「どうやら全員、ある程度の成長はしてきたとみて間違いないな」

アザゼルの指示で、部員全員に何を修行してきたのかを報告形式で発表し、最後に巧の番となる。ちなみに発表の前に自分だけ異様に厳しいレベルでの修行となっていた事に気付いた。本邸の外で修行していた裕斗やゼノヴィアは近くの別荘に泊まっており、野宿はしていないらしい。一方の巧は……。

誤魔化す事なく自身の修行内容を伝えたところ、部員は勿論アザゼルも驚いた。……いや、引いた表情をしていた。そんな目で見られる筋合いは無いと言わんばかりにムスツとした顔になってしまう。

「まあ……なんだ。あの二人をファイズにならずとも相手に出来れば、お前は合格点どころか百点満点だ」

「アザゼル。アイツは、一体何者だ」

既に二人目の教師、本郷の存在をその場にいる全員が知ってる為、特に気にする事なく直接尋ねた。

「本郷猛……アイツがまだお前くらいの若い時に出会ってな。三大勢力の大戦以降、久しぶりにマジで戦った男の一人でな。今では墮天使というより、俺個人の協力者の一人だ。お前と同様にベルトを使って『変身』する男だ。だから、今回お前の修行を引き受けてもらうように俺から頼んだ」

巧を除いたりアスたちは、ファイズの他に仮面ライダーがいる事を聞いて驚く。対称に巧は、納得した表情。

同時に彼の言葉の深み、その強さの一端を垣間見た気がした。

「細かい話は明日のパーティの後だ。ほれ、今日はもうゆっくり過せよお前ら」

休むのもトレーニングだ！ アザゼルはそう言って修行後初の顔

合わせは終わりを迎えた。

翌日の夕方。グレモリー本邸の客間で巧は他のメンバーを待つていた。その隣には裕斗が座る。

高校生にとつての正装、学校の制服ではなく、スーツを着た二人。白のシャツの上に黒いジャケットを羽織る裕斗。紺色のジャケットの下にはより青みの強いワイシャツ。黒いスキニータイプのズボン。更に靴は高級な革靴。これらをグレモリー家の使用人から着るよう言われ、今に至る。髪型も普段の伸ばしっぱなしではなく、冥界の都市から美容師を呼ばれ、うまくセットされている。

つまりイケメンと呼ぶに相応しい男子二人がそこにいた。

女性陣とギヤスパーも同様にパーティの為の準備をしている。

そんな巧たちの元に三人目の男子が現れる。

「おつ、ここに……って、マジかよ」

入ってきたのはシトリー眷属の一人、匙元士郎。その服装は巧や裕斗と同じスーツ姿。しかし、匙には巧と裕斗の二人がカッコいいと素直に思えてしまったようだ。

「あれ、匙君。どうして君がここに？」

「リアス先輩から聞いてないか？俺たちも一緒に行こうって誘われたんだよ」

「なるほど。席空いてるから、座ったら？」

おう、と短く答えた匙は巧の隣に座った。巧も特に気にすることなく、三人に沈黙が続く。

「お前たちはどうだったんだ……修行は？」

その空気に耐えかねたのか、匙が裕斗と巧に話を振る。

「まだまだ、かな。イツセー君に比べたら。でも、少しは強くなったつもりだよ」

「そっか。なら、俺もだ。それなりにキツイ修行だったからな。兵藤はどうだったんだ？」

「変な強いおっさんとドラゴンに追いかけて回された」

あまりに掻い摘んだ説明で匙の頭の上に？ のマークが浮かぶように見えた裕斗。それでも匙は、言葉よりも巧自身を見つめ、その成長や強さを肌で感じ取る。

「一つ聞いていいか……。おまえ、ゲームでは変身しないのか？」

「ああ」

聞かれた質問に嘘やカマを掛ける気など一切ない巧は、素直に答える。返ってきた答えに相手が納得するかは別として。巧の回答を聞いて、匙の表情は悔しそうな物へ。

「お前、俺たちをバカにしてるのか!？」

「俺が使うか、使わないかは俺の自由だ。お前に関係無いだろ」

匙からしてみれば、巧の行為は自分たちを見下した上での行動とも解釈できてしまう。同時に自分への怒りも芽生える。事前にソーナから聞いていた事ではあったが本人の口から言われると、更に酷だ。巧にそんな考えを芽生えさせた自分の弱さが悔しくて堪らない。

匙をそこまで駆り立てる理由は、人間らしくシンプルな物。

「俺には……夢があるんだよっ!!」

夢、その単語に巧はピクリと反応を示す。隣の裕斗もそれに気づいたが二人の間に入る事はしない。

「俺は、教師になりたいんだ」

巧の様子に気付かない匙は、そのまま語り続ける。

巧の目には、匙が何処にでも夢を持つ者として映り続けるだけ。

「会長が前に言ってたレーティング・ゲームの学校で俺は先生になって生徒達に教えたいんだ。誰にだってチャンスはあるって事も。昔から俺バカやってたから……そんな俺がこの無茶を叶えて、未来の冥界の子供に伝えてやれるんだ」

匙の夢は、ソーナの夢を共に叶える事。変革の時期を迎えた悪魔といえど未だに下級悪魔は下に見られる風潮は変わらない。そこを危惧したソーナは、悪魔であれば誰もが通えるレーティング・ゲームの学校の創立を掲げた。その夢を笑われようと、彼女は前に進もうとしている。匙はそんな彼女と共に夢を叶え、未来へ繋ぐと輝いている。

る。

「頑張れよ、匙」

巧が思わず口にした一言と表情に匙は拍子抜け。先ほどまでの怒りを抱えた表情から一変、力強い笑みを浮かべる。

「おうー！」

裕斗はそんな二人を、いつもの笑みを持って見つめていたが、巧の優しさに一抹の不安を抱いてもいた。

少しすると、グレモリー眷属とシトリー眷属の女性陣とギヤスパアの支度が終わったのか、リアス達の声が客間の外から聞こえる。

客間を出た巧達は外で待っていたリアス達と合流。女性陣は皆、それぞれのセンスで選んだであろうドレスを着ている。駒王学園の誇る美しい少女達。そのうちの一人、リアスは部屋を出た巧達に声を掛ける。

「三人ともごめんなさいね。待たせてしまって……………」

謝罪の言葉の途中で、リアスはドレスコードされた巧を見て、言葉が止まる。普段とは異なるスタイリッシュな巧に目を奪われてしまった。そこへ、朱乃やアーシアも加わる。

「あら、イツセー君。スーツ姿もお似合いですわね。……私のドレスどうかしら？」

和服のイメージの強い朱乃ではあったが、西洋式のドレスも難なく着こなせている。

「どうですか…………？ 変じゃないですか、イツセーさん」

元々ヨーロッパ系の血を引くアーシアは、西洋式のドレスが似合っており、絵から飛び出したお姫様と言える。

そんな三人の少女の視線を受け、巧の返事は。

「んな事いいから、さっさと行くぞ。…………たくっ」

いつにも増して愛想のない答えだ。

一人でそそくさと本邸の外へ向かう巧。その背中に三人の小さな怒りのこもった視線が突き刺さるのを、当の本人を除いた皆が気づいていた。

パーティ会場の隅。そこで巧は壁に寄りかかる。本人の醸し出す雰囲気は気怠さと帰りたい気持ち相まってこの場においては異端だ。

冥界関係者や、リアスやソーナを含む若手悪魔、上級悪魔、そしてその眷属達。これらのメンバーが集まった場で巧は徹頭徹尾一人を貫いた。

ちなみに他の眷属たちは……。

リアスは会場に着いた際に、他の上級悪魔、ひいては貴族の立場にあるもの達への挨拶回りに向かったが既に終えたらしく、今は朱乃と共に同世代の女性悪魔達と談笑していた。

裕斗は、会場に着いた途端、女性悪魔達から声を掛けられていた。彼の周りには四、五人の女性がいるのがいい証拠だ。

ゼノヴィアは、どうやら特訓をしたとはいえ未だにパーティ会場という人混みに慣れないギヤスパアの隣にいた。二人ともドレス衣装の為、時折若い悪魔に声を掛けられるものの、ゼノヴィアが盾の役目を果たしていた。

小猫は、巧のすぐ近くで食事を食べまくっていた。本人曰く、一人でいるのもなんですから、と巧に気を使う様な物だ。巧は好きにしろと返し、特に拒絶もしなかったが。

最後にアシア。彼女もこの会場にいる同世代の女性悪魔、特に眷属悪魔との交流を図ろうとしていた。ただ、時折顔を赤めて巧を見つめるのでそこに関しては首を傾げざるを得ない。

「いいんですか、イッセー先輩」

「あれ……か」

窓の外を眺める巧の隣で、小猫が軽く袖を引っ張る。かけられた言葉と共に視線を送るとアシアと、先程まで一緒にいた女性悪魔では

ない男が並んでいた。

「いいだろ、別に。あいつだって他の奴らと仲良くしたいって言うってだからな」

パーティに入る前に、『他の悪魔の方と仲良くなりたいです』と言っていたアーシアを思い出し、特に気にする事もない巧。自分はアーシアに指示や命令を出せる関係ではないし、本人の意思が何よりだ。そう言わんばかりの巧。その隣で小猫が、男の行動に怒りを露わにする。

「っ痛!! お前何すんだよ」

「あれが、仲良くしてる二人に見えますか……唐変木先輩」

小猫に言われ、視線を送る。

男性悪魔はアーシアの肩に手をやり、無理やり自分に体を寄せさせる。そんな男性にアーシアも嫌悪感を抱いているのか、引き離そうとするものの力では叶わない。男性は怯えた様子のアーシアに、満足した様子。

周りに助けを求めるアーシア。

しかし、この場はパーティ会場。殆どの者がアーシアのSOSには気付かない。そう、一部の者は。

男の肩を、気怠さとほんの少しの怒りを顔に馴染ませる男が掴んだ。

「……あの方、前にも同じ事してませんでしたか?」

私——リアス・グレモリーは突然、同年代の子が不審そうな顔つきをして、その視線の先を追う。

その先にいたのは……。

「アーシアちゃんじゃ、ありませんか?」

隣の朱乃は即座に気付き、私に確認を取る。背中しか見えないがあの金色の綺麗な髪とドレスの組み合わせは、あの子だ。隣にいるのは、アーシアが想いを寄せる巧さんではない男性。着ているスーツを

軽く着崩して、軽薄な印象を与える。

「あの時の男ね……」

一瞬見えた横顔だけで、私は即座に思い出す。以前もこういうったパーティの場で、あの男に声を掛けられた事を。その時は、馴れ馴れしく肩に触れたきた。あまつさえその時も隣にいた朱乃にも不愉快な視線を向けてきた。その時は二人で上手く立ち回ったが、アーシアにそんな真似が出来るとは思えない。むしろ騙されてしまうかもしれない。

そんな不安が胸をよぎるが……。

「あらあら、みんな凄いわね」

「何言ってるの、朱乃。早くアーシアを……って」

ニコニコ笑う朱乃。その理由は。

ナンパ男に対し、凄まじい目線を向けるゼノヴィアと神器を発動しそうなギヤスパ。

いつも私たちに見せてくれる優しい笑顔の筈の裕斗。無表情で拳を鳴らす小猫。

「やっぱり彼は、ヒーローですわね」

「ええ、そうみたい」

アーシアの助けに応じる様に、巧さんは男の肩を掴み、力づくでアーシアに触れていた手を無理やり引き離す。男が驚いている間に、巧さんはアーシアを連れて会場の隅へ。

因みにその後、巧さんが私の眷属と女性悪魔に知られると、色々なことを聞かれた。

……私がアーシアを助けに行けば良かったわ。

「あの、イツセーさん。助けてくれて、ありがとうございます」

「本当だ。あんなのに絡まれたら無視しとけ」

巧は、これ以上の面倒は厄介は御免だ、とアーシアに自分や小猫の近くにいる様に言ったら、特に文句のない返答が返ってきて内心驚い

ていた。

先程まで自分がいた所まで戻ると小猫の他に二人の女性が。その二人に見覚えを感じる巧だが答えが見つからない。すると、小猫と話をしていた少女がこちらに軽く会釈。アシアも会釈を返すが、巧は気にする事なく小猫や二人から少し離れたところへ。

「相変わらず無愛想な態度ですね、ファイズ」

「誰だ」

自分を知ってる風に話しかけきた金髪の少女に対し、巧も自分流で対抗。嫌なムードが流れるかに見えたが。

「まあ、仕方ありませんわね。会ったのはあの時だけですし。レイヴェル・フェニックスです」

「……………」

名前を聞いてもピンとこない巧。その巧になんとも勘付くレイヴェル。今度こそ――。

「ライザー・フェニックスとのレーティングゲームの際にいた『僧侶』です。バジン君や部長と一緒に居た子です」

今度は小猫が二人の間に入り、補足を加える。その説明を聞いて、該当する記憶を検索。その中に彼女が居た事をようやく思い出せた巧。

「あいつ……………の妹、か」

「ええ。貴方に負けたライザー・フェニックスの妹ですわ」

台詞だけなら嫌味にも取れるが、口調と表情はそう語っていない。「貴方のおかげで、お兄様は変わりました。貴方に負けた後、私や他の眷属の者へ謝罪をしました。今では、すっかり修行をする様にもなりました。貴方に負けないように、だそうです。本当でしたら今日はこのパーティに参加するつもりでしたが、貴方やリアス様が来ると知って、イザベラ以外の眷属を連れて修行に行ってしまったので。今は私もフリーの『僧侶』です。フェニックス家の代表としてここに」

「……………そうか」

気に入らない、そう評価した男ではあるが、話を聞く限りではその限りではないようだ。

「だ、だから、あ、貴方にお礼を……、と思つて」

途端に顔を赤くするレイヴェル。どうやらお礼を言うのが目的らしい。しかし巧は。

「要らねえよ。あいつが変わつたのと、俺は関係ないからな」

視線を逸らし、窓を……その先にある森を見つめる巧。瞬間、背中に嫌な寒気が走る。何か邪悪な者が近づいているような予感。咄嗟の防衛反応か、巧は近くにいた者に視線を向ける。

そして、気づく。

「小猫……っ！」

先程までいた白髪の少女が音もなくこの場を去っていった事に。

「どうしましたの……？」

「悪い、コイツを頼む」

巧の顔色の変化に気付き、声をかけるレイヴェルとその後ろにいるイザベラにアーシアの事を任せる。

「分かった」

「……ええっ！」

二人は、多少驚いたものの、巧の頼みに応じてくれた。

そして巧は、小猫を追ってパーティ会場から外へ向かった。

「イツセーさん……」

既に見えなくなった巧の名前を呟くアーシア。隣に立ったレイヴェルが優しく肩を叩く。

「あの二人が戻るまで、もし良ければ……お話でもしませんか？」

「それはいいな。あの男の話でも聞かせてくれないか？」

巧への心配を隠せないがアーシアは巧を信じる。

心の中で、彼を呼び。

——気をつけてくださいね、イツセーさん。

もしもの時の保険を掛け終え、巧は内ポケットにファイズフォンを

しまう。

既に小猫の気配は、この会場からは感じない。つまり、森へ向かったと言える。

先程感じた敵の気配は特に大きなものが三つ。つまりは、三対一の構図が成り立つ。

それでも構わない、と会場の外に出る巧の背後から聞き馴染みのある声が。

「イツセー君」

振り返ると、裕斗、ゼノヴィア、ギヤスパー、朱乃の四人が居た。

「お前ら、なんで」

「君とアーシアを見てれば分かるさ。……さあ、小猫の所へ行こう」

既に臨戦態勢の四人に、巧は反論できずにそのまま同行する事に。

戦闘になる事だけは、と巧は心中で願っていた。

パーティ会場敷地内の森を四人で駆ける四人。ドレスを着た三人は、既に魔力で服装を変化させていた。

数分間、走り続けた所で、裕斗と巧の二人が止まり、三人も止まる。

闇夜の中でも問題なく行動できる悪魔の目は、その先にある光景を捉えていた。

「一体なんのようですか……黒歌お姉様」

「この黒猫一匹を送っただけで、血相を変えて私の所に来てくれるなんて、嬉しいわ——白音」

聞こえてきた会話、森の少しひらけた場所に立つ小猫の視線の先には黒歌と呼ばれた美女が高い木の枝に座っていた。その頭からは猫耳が生え、尻尾も付いていた。その風貌に巧は、先日の小猫を重ねる。「彼女は黒歌。小猫ちゃんの姉で、はぐれ悪魔よ」

朱乃の耳打ちに改めて黒歌を見つめる。姉妹だけあり、小猫が成長したらあんな感じになるのか、と納得。

「そうね、今日はあんたを……」

「それよりも、後ろの連中はいいのか？」

森の中から突然現れた男性。古代中国時代の鎧を身につけてた男は巧たちが隠れている場所を呼びさす。

「美猴、ヴァーリの仲間の一人だね。どうするイツセー君」

その答えを、行動で示す巧。

バレてるなら仕方ないと立ち上がり、小猫の元へ向かう。後にくる形で四人も同様に小猫の隣へ。

「うっひょく、グレモリー眷属がこんなに居るとはな。特にファイズが居るなんて、これはラッキーだぜ」

無邪気な笑顔を浮かべる美猴。彼はどうやらヴァーリ同様に戦闘狂らしい。

「どうしたイツセー、そんなに周りを」

周囲を確認する巧にゼノヴィアが尋ねるが、その言葉は続けられない。

巧が警戒していたのは、もう一人の敵。

先程感知したの、三人の厄介な敵の存在。

最後の一人は、森の陰からユラユラと踊りながら、クツクツと小さな笑みを浮かべてやって来た。

「これはこれは、いつかのイケメン君やハーフヴァンパイヤ、クソビッチ幼馴染ちゃん、そしてそしてく!!! イツセー君では、ありませんか———!!」

夜の暗さでも小さく光るデルタギアを腰に巻き、デルタフォンを指でクルクルと回しながら、ゼノヴィアの幼馴染は彼女の前に記憶の中の笑みとは全く異なる物を浮かべて現れた。

幼馴染と姉妹

『此度のパーティーは、若手悪魔たちの交流を目的として……』

パーティー会場の中心に位置する場所から聞こえる魔王くんのスピーチを、リアスは殆ど聞き流していた。いや、まともに聞いていられる精神状態ではなかった。アーシアと彼女以外の眷属は皆、この会場には居ない。最初に飛び出した巧の表情から察して、只事ではない予感がしている。

視界の端でレイヴェルとイザベラの二人と共にスピーチを聞くアーシアを確認し、リアスは兄に背を向ける形で会場を離れる。

皆が森に向かったと確信したりアスは会場を離れて、そのまま森へ向かおうと一階への階段へ。

急ぐ彼女の元に一つの影が。

「どうしたリアス嬢」

「あなたは……」

振り返った先にいた影の主に、少し驚いた顔を見せる。

「一つ尋ねたいが兵藤一誠はここにいるか？」

その問いにリアスは――。

ほぼ同時刻。場所は、会場から少し離れた森の中。

「あ、アレン……!!」

ゼノヴィアは、思わぬ形で再び出会った幼馴染の名前を呼ぶ。

呼ばれた彼は彼女の記憶の中とは全く違う人物に。

「だっかつらつく、何度も言わせるなっ、ての。もうアレンの奴は奥の方に縮こまってるの。まあ、お寝んねしてるってわけよ」

幼馴染の顔で、身体で、邪悪な笑みを浮かべる男に、ゼノヴィアは

変わらない決意を示すだけ。

「そうか。なら、お前を倒し……アレンを目覚めさせる。それが、私の役目だ！」

気合いと共に、ゼノヴィアは右手にデュランダルを顕現させる。以前までは呼び出すのに詠唱が必要だったが、これも修行の結果の一つ。

「それはいい目標だな、俺に勝てれば、だけどねえ——！」

その決意を、嘲笑うフリード。彼の隣に、美猴と黒歌が並び立つ。

「こつちの頼みを聞けば、今回はあのアホと一緒に退散すつから」

頼み、その言葉を聞き巧は逡巡させられる。この場での戦闘を回避できるのならそれに越した事はないのだから。

すると黒歌は無邪気な笑みを浮かべ、小猫を指差す。

「白音、私と一緒に来ない？」

その提案を受け、小猫は予期していた物なのか特に動揺は見られない。巧としては、動きたいがそういう訳にもいかない。ここで自分一人で動けば、共に彼らをも巻き添いにしてしまう可能性がある。

「私は……」

小さな呟き。小猫は迷っていた。自分が姉の元へ向かえば、恐らくこの場は丸く収まる。いくら巧が居たとしても、姉や美猴、そしてフリードの三人を前に無事で済むとは思えない。

着いて行く、そう答える小猫の前にギヤスパーが立った。

「こ、小猫ちゃんは……行かせない」

「ギャー君……」

普段は誰かの背に隠れることの多いギヤスパーが、何処にも隠れず、仲間を守る為に、己を奮い立たせ敵に立ち向かおうとしていた。

「どうして？ それは、私の妹よ。必要だから来てもらいたいの」

「違うっ!!」

響くギヤスパーの怒声。それにその場にいた全員が驚いた。

「家族なら……『それ』なんて言わない。貴方は小猫ちゃんを傷つけるかもしれない。……だから、僕が守る。僕は……僕だって、男なんだ!!」

ギヤスパアの決意を下らないと可愛らしい笑みを浮かべる黒歌。すると一変。その美しい顔から笑顔が消え、冷酷なものへ。

「そう。なら……死ぬ」

一発。

手を前に突き出して放った魔力は小猫とその前方のギヤスパアへ。

二人の前にゼノヴィアと裕斗が立ち、互いの剣を以って放たれた魔力の塊を斬り崩す。

「よく言ったギヤスパア」

「次は僕らの番だね、イツセー君」

二人の声に応じる様に、ギヤスパアを腕に抱えた巧は立ち上がる。

「おう」

巧は剣士二人組よりも素早く二人に近づき、朱乃に小猫を投げ渡す。自身はギヤスパアを抱えて後方へさがっていた。

因みにこれは悪魔の駒の能力の応用。兵士の特性、プロモーション。他の駒の力を使う事ができる。即座に騎士の能力を発現させた。

「あれあれ、ていうわけで……交渉決裂でござんすね!!」

「だなぁ……いー お前どっち行く」

黒歌のすぐ後ろで、美猴とフリードは、嬉々とした表情だ。建前的に闘いはする気は無いと言った美猴だが、ヴァーリを退けた巧に興味津々と言った様子。

「もちろんイツセー君でござんす。……変身」

『Standing By——Complete』

闇夜の中で、白い光共にフリードの肉体はデルタへと変化。

表情は仮面に隠れているが、ウキウキとした待ちきれない様子は体への反応として露わになる。

フリードがデルタへなった事でまさに一尺触発の雰囲気の中、小猫の耳が聞き慣れたエンジン音を捉える。

「……………の音」

何秒かすると小猫の元で燃料を切らし倒れているバイク状態のバジンが。久しく運転もしておらず、グレモリー家本邸からこのパーティまで走行してきたからだろう。

そして巧の手には、小猫により投げ渡されたファイズドライバーが。

——久し振りだな。

珍しく感慨深さに耽る巧ではあったが、即座にそれを腰に巻きつけて、約一ヶ月振りに変身を果たす。

『Standing By』

「変身」

『Complete』

赤い光が巧を包み、再び冥界の地に赤い閃光が現れる。

変身を完了させた巧は、久し振りに手首のスナップを。

懐かしい音が冥界の森に響いた。

「朱乃さん、どうしますか」

剣を構える裕斗は、隣の朱乃に耳打ちをした。

リアスのいないこの場では、彼女が指示役を担うことになっていた。

「黒歌は、私が相手をします。裕斗君とゼノヴィアちゃんとギヤスパー君と小猫ちゃんの三人で美猴。イツセイ君がフリード。この形でいきましょう」

朱乃の作戦に裕斗は頷く。

この作戦の肝は朱乃と巧。朱乃が最上級の悪魔に比肩する黒歌相手にどこまで食い下がれるか。巧が、どれだけ早くフリードを倒せるか。それにより作戦は大きく変わる。

朱乃はこの指示を、皆に伝えようとするも……。

「行くつよー!!」

巫山戯た声と共にデルタが巧に突貫。

朱乃の作戦通りの相手と思いきや、デュランダルを振りかぶるゼノヴィアが二人の間に割って入る。

「はああ!!」

振り下ろされた一撃はデルタには当たらず、地面を穿つ。

その僅か後方で立ち止まったデルタ、フリードはイラつきを隠さない態度。

「あのさあ、この流れならイツセイきゅんでしょ相手は」

「そうかもな。……それでも、お前は私が止める」

一瞬、巧を含む皆に視線を向けるゼノヴィア。

フリードを、一人で相手にする。

その視線の意味を理解してない者はおらず、巧も彼女の事情を知ってるので止まることも出来ない。

「ゼノヴィアちゃん。危険になったらすぐに私達の元へ来なさい」

「はい………副部長」

そんな二人のやり取りに、フリードは何処か飽きた演劇を見るかのような態度で割って入る。

「はあく。悪いけど、もうアレンの奴はいないからさ。アンタの首をチョンパしても問題ないよ」

「そうか。なら、このデュランダルで貴様を斬り伏せた後、アレンを目覚めさせるだけだ」

デルタとゼノヴィアは同時に突貫。

幼馴染の戦いが始まる。

「ファイズの相手なんて、今回は当たりだな」

クルクルと器用に手に持った赤と金色の棍棒を回す美猴。そんな様子の相手にも、巧の態度は変わらない。

「やっさと来い」

目の前の相手を出来るだけ早く倒し、ゼノヴィアか朱乃達と合流しなければならぬ。

一向に攻める気を感じさせない美猴に痺れを切らし、巧は飛び出す。ファイズの身体能力とここ一月の修行の為か、動きにはキレがある。

「……マジかよっ!?!」

棍棒を回す美猴の間合いに詰め寄り、加速の勢いを乗せた右ストレートを彼の胸の部分へ。

この不意打ちに、手に持った棍棒の回転を止め、盾がわりに使う事に対応。けれど、その勢いは体だけでは止めきれず、後方へ数メートル程下げられていた。

「なるほどねえ……コイツがヴァーリを退けたファイズか。面白い!!」

美猴の雰囲気と纏うオーラが一気に変化、上昇。

その一瞬で、巧も構えを見せて備える。美猴の一撃に対して。

「伸びろ……如意棒!!」

赤が迫る。

先程まで彼の手元にあつたはずの棍棒の先端が巧の、ファイズの仮面に向かって来ていた。

首を右へ逸らし、直撃は避けるものの、後方からは木が壊れる音が背中越しに聞こえる。今の一撃の威力を物語る証拠だ。

「いい反応してんなあ……ファイズ」

美猴の声に反応し、彼を見るとその手元には既に伸縮を終えた棍棒が。伸びる距離も未知。しかし、それ以外にも伸縮にかかる時間が速い。

「コイツはどうするファイズ!!」

棍棒——如意棒。

美猴の持つ棒は、彼の出自に大きく由来する。

元是最遊記で有名な妖怪、孫悟空の持つ棍棒を指し、彼がその血族の末裔である事につながっている。

「……っ!」

美猴の放つ棍棒での攻撃をなんとか掻い潜り、耐える巧。

彼の技は、性格もあるのか少しばかり粗野ではあるものの、洗練された物も感じ取れる技。

「逃げてるだけじゃ……俺たちは倒せねえぞっ！」

気合いと共に仮面部分を狙う一撃。腕をクロスさせて一撃を受け止め、美猴もカウンター防止の為か後方に下がる。

現時点では、巧がやや押され気味ではあった。同時に巧の中の焦りも募る。

咄嗟に左腕に巻きつけられたファイズアクセルに手が触れそうになるのを止める。ここで使えば、新手が現れた時に打つ手が無くなる可能性もある。

何よりファイズアクセルの効力は十秒間限定。その中で、目の前の美猴の他にフリードと黒歌を倒さなければならぬ。下手な賭けはまだ打てない。

再び美猴との距離を詰めようと前に足を踏み出す巧の前に一匹のコウモリが。

「イツセー先輩、これを！」

手に何かを持っていたコウモリからギヤスパアの音が。それに足を止めつつも、コウモリが投げ渡した何かを受け取る。

『Ready』

受け取ったオートバジンの左ハンドルのパーツ部分。

ハンドルの中央にある窪みに、ミッションメモリーを換装。

森の中でも強い光を放つ光剣へ。

「らあああ!!」

森の闇を、切り裂く様にファイズは勢いよく美猴に突貫。

輝く光剣を、勢い良く敵へと振り下ろした。

「へえ、あれがヴァーリのライバル（仮）なんだ」

棍棒とファイズエッジの斬り結びへの感想を、木の枝に座りながら
呟く黒歌。

「なら、美猴の次は私の番にや♪」

二人目の黒歌は、頭の上の猫耳と尻尾を軽く揺らして見た目通りの語尾を付ける。

「なら、さっさと片付けなきや……」

三人目の黒歌の視線の先には、剣を構える裕斗、雷を放つ朱乃、姉である自分に打撃を打ち込む小猫、ヴァンパイアの力を解放し、皆のサポートに回るギヤスパー。

「遊ばれてるわね……」

「ええ、悔しいですけどー!」

今の自分と木の枝で優雅に座る黒歌の実力に圧倒的な差がある事を思い知らされる。

隣の裕斗も先程から、聖魔剣を以って何度も黒歌を斬り伏せているものの、それらは全て彼女の作った分身体。

しかも、本体同様に攻撃もするためはかなり厄介な技だ。

「えいっ!」

黒歌の分身の一体が放った魔力の塊を、可愛らしい声と共にギヤスパーの魔術で受け止める。

今までとは違ったギヤスパーの行動。

先程の黒歌への啖呵と同様に、戦闘面でも成長は著しい。元々、才能に富んではいたものの極度の対人恐怖症の為に苦しんでいた。けど、今は懸命に自分の力を受け止め、それを自分と仲間の為に使えるようにと磨いている。きつと神器も彼ならば使いこなせるだろう。

少しづつ前を往く後輩が朱乃には眩しく見える。

「……そうね。私も、強くならなくては」

「朱乃さん……?」

「朱乃先輩」

聖魔剣を握る裕斗と、黒歌同様に猫耳と尻尾を生やした姿となった小猫は朱乃に視線を向ける。

「小猫ちゃん、『仙術』のコントロールは?」

「まだまだ未完成です。……でも、お姉さまの本体は分かります」

仙術。

それが、黒歌をはぐれ悪魔にした力。

人間の元々のエネルギーを根源としたもので、魔力や光の力とは全く異なる物。それらを上手く扱えば、周囲の敵の探知、打撃に応用すれば体の内部からの破壊。他にも植物の成長を早めたり、枯らせる事さえも可能となる。

今の小猫には全ては扱いきれないし、危険も多い。

仙術の源は、本人の力だけではなく周囲の自然からのエネルギー。そういったものを集めると邪悪な気も寄せ付けられ、使用者を穢そうとする。

「あら、ようやくあんたも使う気になったのね、白音」

「お姉さまを、超える為です」

その言葉を聞き、黒歌はくすりと笑った。その笑顔には毒気が一切なく、妹を思う一人の姉の物。

「そっかなら、こつちも本気を出すにや☒」

黒歌を中心に森を覆うような結界が展開される。冥界の空ではなく、紫色の空間へ変わった。同時に黒歌の分身体が消えて、霧が発生。それらはゆらりと揺れながら……四人の元へ。

「吸ってはダメです……これは、お姉さまの」

霧が迫る瞬間、ギヤスパーは小猫を押しつけて先頭へ。

すれ違った一瞬、小猫の目はギヤスパーの目の変化を捉えていた。

「ぎゃー君……!?!」

ギヤスパーの神器が発動し、四人に向かっていた霧の時間を停止させる。

フオービドゥン・バロール・レユー
停止世界の邪眼の力に、黒歌は驚きつつも、止めた張本人の前へ行こうとするも……。

「……つちー」

ギヤスパーへの距離が二メートルと縮まりかけた所で、鋭い刃が黒歌の肌を通り過ぎる。

顔の部分に軽い切り傷が生まれるものの、仙術の応用で傷はすぐに消えた。

「女の子の顔に傷をつけるなんて、随分と酷い事するにや」

「そうだね。でも僕は、グレモリー眷属の『騎士』^{ナイト}。仲間を護る剣にならなきゃならない…彼の隣で」

剣を構え、持ち前のスピードを生かし攻めてくる裕斗。基本的には魔力や仙術。そして妖怪の力、妖力での攻撃を基本とする黒歌。肉弾戦はあまり得意では言えない。スピード系の裕斗とは特に相性が悪い。

聖魔剣での力強い横薙ぎを後方に下がり避ける。一旦距離を置こうとする黒歌の体が『停止』した。

その意味を即座に理解し、自分のいる場所が自身の放った霧とギヤスパーの間であり、彼に止められた事に気づく。

先程からの裕斗の剣にはここへ誘導する意味があった。

「えいっ！」

背中から撃ち込まれた一撃は、幼い頃から変わらない声。でも、その声の主は自分の名を呼び、その後ろをついてくる妹^{白音}ではない。小猫の仙術での一発は黒歌の妖術や仙術の使用を一瞬だけ、不可へ。

その一瞬を、姫島朱乃は逃さない。

前方に突き出した手には、バチバチと彼女の象徴とも言える雷が纏っている。

今までなら、これを敵に向けて放つ。それだけで彼女自体の魔力、それに伴う魔法の才能で敵を倒せてきた。

自分の中の血を、受け入れる。

小猫もギヤスパーも、前に進んでいる。

ここで自分も進むんだ。

その決意を雷に纏わせて、彼女は『雷光』を放った。

悪魔の力で作った雷に、墮天使の父と同じ光の力を上乘せ。

雷から雷光へと進化した一撃は、黒歌と言えどもダメージは否めなかった。悪魔である黒歌には、墮天使の力は堪える筈。

「へえ……結構やるじゃない……」

今ある全てをぶつけても、黒歌は倒れなかった。

それでもなお、裕斗たちに絶望は見えない。
同じ様に、ゼノヴィアと巧も絶望など見えていないのだから。

「アレン、助けるじゃなかったの。ゼノヴィアちやくん」

「黙、れっ!!」

デュランダルを振り上げて、気合いと共に袈裟斬りを放つ。デルタは体を半身にして最低限の動きのみで、一撃を避ける。ゼノヴィアは振り下ろしたデュランダルを地面に走らせ、横薙ぎの一撃へ繋がるものの、デルタは彼女の手首を掴む。

「コイツはいい剣だけど……それを扱う君自体がまだまだですなあ」
「……ッ!」

掴まれた手は、ギリギリと音を鳴らし、その痛みは徐々に広がっていく。少しするとデュランダルを手から放してしまった。

「はい、おーしまい」

デルタの軽い拳の一撃はゼノヴィアの腹部に直撃。彼女の体を後方の木へと激突させる。木に倒れかかり、動かなくなったゼノヴィアを見るとフリードの呼吸が僅かに速くなる。

ゼノヴィア。

その名前を呼ぶ、もう一人の自分。

本来の人格でもあるアレンは、傷ついた彼女を見て、フリードの精神を乗っ取ろうしてくる。

「そうかいそうかい。なら、殺すしかねえか」

この声を消すべく、デルタは彼女は近づいて、腰のホルスターにっ
いてる換装されたデルタフォンを取り外し、銃の形となったそれを、
ゼノヴィアへ。

『Error』

突然、デルタへの変身は解除され、元の体へ。

自分の手のひらや体を見ると変身前の服を着た自分が。

「なるほどね。そんなに死なせたくないですかい」

ならば、と言わんばかりに着ていたコートの裏から光剣を出現させる。漸く意識を取り戻したゼノヴィアの前には、自身の命を狩るべく首へ向けて剣を構えるフリードが。

「大好きなアレンの顔を見て……死んじやえ」

『Start Up』

聞いたことのある電子音。離れた場所から何かを殴る鈍い音が複数回聞こえ、次の瞬間には何かがフリードとゼノヴィアの間へ。

現れた何か——アクセルフォームを発動したファイズが振り下ろされた剣を受け止め、まずは腹部へ一撃。二撃目は、構えた頭の間を縫う様に撃ち込まれたアツパー。トドメの一撃は、胸の部分に勢い良く蹴りを放った。

『Time Out——Reformation』

十秒間の活動時間を経て、ノーマルフାଇズへと姿を戻す。

変身を解除して、ゼノヴィアに駆け寄る巧。

木にもたれかかるゼノヴィアの肩を掴み、声をかける。

「おい、起きろ。ゼノヴィアッ！」

「ああ……起きてるさ。助かったよイツセー」

普段よりも声に張りどポリュームは無いものの、意識があるのを確認し、地面に倒れているフリードを確認。

「イツセー君！」

裕斗の声と複数の足音が聞こえ、振り返ると傷を負った裕斗たちが。四人ともそれなりの傷はあるものの、致命傷に至った者は居ないことを確認し、フリードの近くに落ちてあるデルタギアを回収しようと近づいたその時。

「さっすが……ファイズ」

「ええ、ヴァーリが勝てなかっただけあるわね」

倒したはずの黒歌と美猴がフラフラになりながらも立ち上がっていた。理由としては、巧はアクセルフォームでの通常の攻撃しかしておらず、必殺技は放ってはいない。

仮に巧がアクセルフォームで技を発動させていれば、二人とも無事

では済まなかっただろう。

「お前ら……」

裕斗たちに下がっている、と言おうとした巧と黒歌の間に空間の切れ目が発生。切れ目からは聖なるオーラを放った剣を握る青年が出てきた。

思わぬ新たな新手に巧は、再びファイズドライバーを腰に巻きつける。

「遊びはここまでです。美猴、黒歌……フリード」

背広を羽織り、腰には二本の剣を携えた青年は、立ち上がった二人を見た後、地面に倒れてる筈のフリードに声をかける。

何事もなかったかの様にフリードは体を起こした。

「ちっ、まだまだ遊び足りないってーの！」

「既に悪魔が気付きました。ここでのこれ以上の戦闘は無意味です」

「アーサーの迎えが来たってことは本格的にトンスラだな」

「まっ、仕方ないわねえ」

剣士の青年、アーサーの言葉に三人は渋々ながらも従っていた。

不意に、剣士たる性故か、裕斗の視線とアーサーの視線がぶつかる。

「いつか、貴方とそしてデュランダルを使い手——ゼノヴィアとは剣を交えたいものです。ですが今は、その時ではありません」

裕斗の体がピクリと反応したのを見て、アーサーは更に言葉を続ける。

「聖王剣コールブランド、そして最後のエクスカリバー、

『エクスカリバー・ルトラ支配の聖剣』の相手に貴方達は相応しいのですから」

今の自分よりも何枚も上手の彼にそこまで言われて、黙っていられる裕斗ではなかった。

「ええ……僕達も貴方の相手に相応しい剣士になっているので、覚悟をしておいてください」

裕斗の啖呵に、アーサーは軽く微笑みを見せて、黒歌達を連れて消えていった。

それから数分後、タンニーンにより黒歌の結界が破壊され、巧達は漸く肩の荷を降ろせるのだった。

「また、ファイズですか」

アザゼルは、墮天使の副総督……シエムハザの眩きを聞き逃さなかった。

今回のパーティ、名目は若手悪魔の交流ではあったがあの場には悪魔の上役は勿論、アザゼルを始めとした他の種族のVIPも出席していた。

そんな場所にテロリスト、それも一人でも強力な力を持った者達があらわれた事もあり、パーティは途中で中止となった。

「それにしても報告によると……彼が『ヴァーリチーム』の二人と『デルタ』の対処をしたと、これはどう思いますか」

シエムハザは、現場巧にいた者達達の証言をまとめたプリントをアザゼルに手渡す。しかし、アザゼルはそれを一瞥もせずに彼に返した。

「その『ヴァーリチーム』のリーダーを倒したんだ。今更不思議でもなんでもねえよ」

勿論、プリントには巧一人で戦ったとは書いてはいない。それでもアザゼルは今の裕斗や朱乃達が黒歌にある程度戦えたことの方が驚きだ。それも小猫は仙術を扱い、ギヤスパーは目の力を更に強め、朱乃は雷光を手にした。これだけでグレモリー眷属のレベルアップは確実。顧問としては良い誤算の一言に尽きる。

「あまりに不思議ではありませんか……？　彼が、ここまでの力を今まで隠していたとは考えにくい」

彼が、兵藤一誠そして乾巧を指しているのを分かっているアザゼルは、巧のためにも敢えて言葉を選んだ。

「いいじゃねえのか、それで」

少なくとも、巧の事を知らせるのは早い。今伝えれば、三大勢力は並行世界から来た未知の種族に備えなければならない。それもテロ

リスト中に隠れた。その為にも巧のファイズの力を、アザゼルは神器らしき物と曖昧な答えを周囲には示している。

「どうやら、近頃のガキは年寄りの迎えにすら来れないらしい」

嫌味の含まれた声共に、室内に一人の老人が。

「ようやく来たか、北の田舎のジジイ」

「久しぶりでございます……オーデイン殿」

北欧神話の主神。文字通りの神さま——オーデインは、古ぼけた帽子を被り、白い髭を蓄えてた風貌で現れた。その後ろには護衛の銀髪の女性がアザゼルと挨拶の為にこちらに来たサーゼクスに軽く会釈を。

挨拶もそこそこに、オーデインの訪問により上役達の集まる室内の話題はテロリストのパーティ会場襲来からオーデインの興味の矛先、レーティング・ゲームへ。

悪魔とは違い神話体系を持つ北の主神が悪魔の催しに興味を持つ。レーティング・ゲームが多種族に高い人気を誇るいい証拠だな、そんな事を思いながら会話に加わった。

ここ数年のレーティング・ゲームの話題から、方向はリアスとソーナのゲームについて。話してるメンバーにセラフオールさえも加わっていた。

「お前達は二人はどちらが勝つと思ってるんじゃない？」

「ソーナちゃん！」

「リアスですよ」

尋ねられた魔王二人は、即座に妹の名前を。その目は勝つ事を疑っていない目だ。

尋ねたオーデインは、そうかそうかと笑い出した。いつのまにか話題をセラフオールの来ていたコスプレ用の服について。セラフオールの露わになった太腿に手を伸ばしたオーデインが護衛役の女性にハリセンで叩かれるのを横目に、サーゼクスはアザゼルを呼ぶ。

「アザゼル、君はどう見る。今度のゲーム」

「今のリアス達は若手の中では飛び抜けた力を持った奴が多い。そし

て今回の襲撃で小猫、朱乃は確実にレベルを一つあげた。そしてギヤスパ。あいつは今回の襲撃で神器の力を更に強めた。……まあ、コントロールの定まらない豪腕ピッチャーって所だ」

「そしてイツセー君……か」

「ああ。仮にファイズにならなくてもあいつは強い。それにアイツに付いていこうと眷属全員が前に進む。……逆に言えば、イツセーが倒されてもどう戦うかだ。ソーナがイツセーをどう対応するのかは見所の一つだな」

不意にアザゼルは、自分に真実を語る巧が頭を過る。

彼に課せられた役目はあまりに大きい。

その役目が、彼に牙を剥くことが無いように祈った。

「次のレーティングゲームで、仕掛けてくれ。……だけは、傷つけてはダメだ。……手筈はこちらで整える」

リアス眷属とシトリー眷属のレーティングゲームまであと二日。

ゲーム開始、そして。

シトリー眷属とのゲーム前日の夜。

リアス達眷属は、明日に向けての最後のミーティングをアザゼルの部屋で行なっていた。

「作戦については、『王』のリアス次第だ。次は敵の能力についてだ」
アザゼルの言葉に、朱乃と小猫がピクリと反応を示す。二人とも黒歌たちの襲撃で修行の結果を出す事に成功している。それに今の二人に迷いは一切見受けられない。特に不安に感じることなくアザゼルは次の話題へ話を進める。

「私たちの基本的な力や能力、戦い方をソーナは知ってるわ。こちらは相手の『女王』を含めて何人かの力は把握してる。でも、全てでは無いわ」

一度ゲームを経験したりリアス達はその映像をソーナ達に見られていると考えて間違いない。だが、ソーナ達は今回が初のゲームとなる訳で、残った何人かの能力の詳細を知りえていない。その差をどう埋めるか。

「能力……というよりかは、そこは戦い方次第だ」

言葉と共に、アザゼルはリアス達に部屋に置いてあるホワイトボードに文字を記し始める。

ホワイトボードには、レーティングゲームにおける戦い方のタイプ分けが記してある。

「リアス、朱乃。お前達は共にウィザードタイプ。魔法を軸に戦うタイプ。木場は技と速さを有するテクニック。ゼノヴィアは、スピードに長けたパワータイプ。小猫もまたパワータイプだ。アーシアとギヤスパーはサポートタイプ。イツセーはパワーとテクニックの二つだ」

ホワイトボードの上には、口頭よりも細かく各自のデータを記してある。

「特に、ゼノヴィアや小猫。……一応、イツセーも。お前らが警戒する

のはカウンターだ。力が強ければ強いほど、跳ね返ってきた自分の攻撃でやられる……なんてオチになりかねないからな。『神器』にはカウンターに富んだ能力を有する物もある。そういった奴と戦う時は同じテクニクタイプの木場かイツサーで対処しろ」

小猫とゼノヴィアは小さく頷く。特にゼノヴィアは悔しそうな表情だ。

「どうしたゼノヴィア」

「いや、少し前の私ならカウンターなど力で！　と思っていたけれど、アレン……いや、フリードにいいようにやられた。最後には剣はいいけど、それを扱う私が弱いと言われてしまった。いい気になっていたんだ。無詠唱でデュランダルを呼び出し、以前よりも強くなったけど……それでも勝てなかった」

ポツポツ、と呟いたゼノヴィアの言葉は普段の彼女からとは思えないほどに弱気な物。尋ねたアザゼルは嘆息と共に彼女にぶつかるべき言葉を選んだ。

「そこで止まるのか、お前は何馬鹿言ってるんだ。お前らはまだまだガキンチョ。フリードの奴がそこまで成長したんだ。同じガキのお前ならアイツに勝てるまで行けるかもしれねえだろ？」

厳しいアザゼルの言葉は、ゼノヴィアの中の負けん気に火をつける。

「いや、私は……負けぬ!!　今度のゲームも、フリードも、私は超えてみせる!!」

ゼノヴィアの言葉に触発されたのか、リアス達も掛け声を挙げていた。ただ一人、巧だけが浮かぬ表情をしていたのに、リアスは気づいてしまった。

打ち合わせがひと段落して、部屋を出ようとする巧にアザゼルが自身の机の上に置いてあった大きめのトランクケースを手渡した。

「なんだ、これ」

「俺からの餞別だ。ファイズ抜きでこれからのゲームを迎えようってんだ。これくらいはな」

トランクケースを開けると、丁度手首に巻きつけることが出来るような大きめのブレスレットが二つと一目見る限りでは普通のスニーカー。

「そいつを手首に巻いてみる。そのまま、魔力を手元に集中させろ」
言われた通り、ブレスレットの一つを聞き手側の手首に巻きつけて、自身の魔力を集中させる。するとブレスレットが腕全体を守る盾の形へ変化した。

「そいつはお前の魔力を感知し、ブレスレットから盾へ変化する。まあ、見ての通りお前の攻撃のサポートも防御にも役立つさ」

盾の形は六角形で、先端の方は尖っており、何より巧が集中させた魔力が込められているので十分武器になる。

「いいのか、こんな事して」

「勿論だ。俺はお前らだけでなく他の若手悪魔にも成長の為のアドバイスを送ってる。ソーナ達にもアドバイスや神器の支援をしてる。それにアイツらにも専属のアドバイザーがいるからな、不公平じゃねえよ」

巧の盾に、皆が視線を集める中リアスがトランクケースの中の靴を取り出した。

「ならこの靴は？」

「そいつは、使った使用者の足の負担軽減。そして、攻撃に使った場合はその力を100%相手に伝えるって代物だ。言つとくが、良い装備でも役に立つかは使用者次第だ。特に肉弾戦に特化した奴じゃなきゃこんな要らないだよ」

ふとここでギヤスパーが思い出したかのようにアザゼルに尋ねた。

「この武器って、あの男の人が作ったんですか？」

「ああ、より正確に言うとな俺とアイツの共作だ。向こうは否定するだろうがな」

修行期間、アザゼルを訪ねる事が多かったギヤスパーは、アザゼルと彼よりも少し上の年代の男性が酒を酌み交わしていた所を遠目で

見かけていたらしい。因みにその男性は、巧の武器と装備製造のみならずオートバジンを興味津々に眺めていたらしい。

「何者なのその人は？」

リアスの質問は全員の質問でもあった。

目の前の顧問は神器に関してはかなり技術者。その彼が認めるほどの技術を持つ者の正体を知りたがるのも無理はないだろう。

「イツセーの先生を引き受けた奴とはまた別の俺個人の伝手だ。……まあ人間で、『元武器製造会社』の元社長って所だ」

アザゼルの返答は、リアス達の疑問をより深まる物でしかなかった。

こんな形でグレモリー眷属は、正式な場での初めてのレーティングゲーム当日を迎えるのだった。

レーティングゲームが行われる空間へ直接向かうべく、グレモリー家の地下にある部屋に巧達は立っていた。

服装は各自自由で、リアスと朱乃と裕斗と小猫は学園の制服。ゼノヴィアは教会に属していた頃から着ていた戦闘服……体にピッタリとフィットしている為男性には目の毒……。アーシアは、シスター服。巧は適当にと使用人に任せ、スポーティな格好となった。

「リアス、皆さん。全力を尽くして、ぶつかりなさい」

「君たちの勝利を、信じているよ」

「頑張つて、リアスお姉様、皆さん！」

「まあ、今の段階でやれる事はやった。あとは気張れや」

ヴェネラナ達の声援を受けて、床に書かれた転移用の魔法陣から強い光が放ち、巧達を包んでいった。

転移された先は、見覚えのある場所。

周囲を見渡し、巧はここが商業施設の飲食店フロアである事に気づく。

「んんんん……」

アーシアの呟きで、巧も思い出す。

夏休み前には、同じクラスの松田や本浜、桐生愛華らと共に遊びに付き合わされ、その行き先は決まってここだった。駒王学園から近いのもその理由だろう。

『皆さま、この度のゲームの審判役を務めるルシファー眷属『女王』、グレイファイア・ルキフグスです』

上空から聞こえた声は、聞き慣れたグレイファイアの物。

そこから今回のゲームのルール、昇格プロモーションに必要な条件などを伝え始める。

少しして全てを伝え終えた彼女は、少し間をおいた。

『そしてこの度は不死鳥の涙を各チーム一つ支給します。なお、作戦を練る時間及びに開始時間は今から三十分後となります』

説明を終えると共にリアスは眷属の皆を呼んだ。

ルール要約。バトルフィールドを破壊し尽くさない事。

ギヤスパーク・ヴラディの神器の使用を禁ずる事。

ルール説明が書かれた紙を手にしたりリアスは、皆に指示を伝えていく。朱乃はそんなリアスのサポート、助言に徹した。他の者達は指示を聴き終えた後、各々の集中を切らさないように過ごす。

ゲーム開始まで残り時間少し、巧は飲食フロアを離れ一人で書店にいた。ふと手にした少年誌が内容まで本物同様に作られていることに、悪魔の技術力の高さを感じる。

「イツセー」

「どうした」

振り返った先には、リアスが居た。

その表情には申し訳なきが滲み、瞳は巧を優しく捉えていた。

「貴方に迷惑をかけてしまってるわね。苦しいのでしよう……ソーナや匙君達と戦うのが。いえ、『夢』を持つてる人と戦う事が」

返せない言葉は、肯定を意味していた。

匙の夢を語る顔や瞳は真っ直ぐで、眩しかった。上役の悪魔達に夢を笑われてもしつかりと立っていたソーナ。

このゲームは、彼らの評価や夢への足取りを厳しいものにしてしまいかねない。それだけレーティング・ゲームが今の悪魔には重要視されている事に巧も分かっていた。

「それでも、……全力で戦ってほしいの。貴方が手を抜いても、それはあの二人の為にはならないと思うの」

「俺の気持ちを勝手に決めつけんな」

昔なら夢なんて下らないものだ、と言えたのに。今では口が裂けてもそんな事は言えない。言えるはずがない。自分の気持ちを理解した上で、共に前に進もうと差し出されたリアスの手を巧は掴めなかった。

五分後、グレモリー眷属とシトリー眷属のゲームが開始された。

「どうしたんだイツセー」

「別になんでもねえよ」

ゲーム開始直後。リアスと朱乃とアーシアは、基本的に召還された本陣にて指示役に。巧はゼノヴィアと共に、ショツピングモールの店内からソーナ達の陣地へと進み、裕斗と小猫とギヤスパーは立体駐車場を経由して、最終的に合流する。

「敵の気配はいまのところはない……か」

どの駒にも変化できる巧を放置するほどソーナは愚かではない。少なくとも複数の敵を自分達に向けてきても不思議ではない。リアスの言葉でいつもより周囲への警戒を怠らないゼノヴィア。

三時間内での短期決戦形式がルールとなってる為に、敵も悠長な事をしてる筈がない。それがゼノヴィアの警戒意識を高める理由の一つ。

巧が進むルートは相手の本陣への直線ルートだが、最も目に付きやすく分かりやすい。

それは同時に敵の接近にも気づきやすくなる。

ふと、周囲に視線をチラつかせるゼノヴィアの少し前を歩く巧が止まった。黒歌達の襲撃の際にも巧の感知能力には感嘆するばかりだ。そんな事を思いながら、腰に帯刀していた裕斗の創り出した聖魔剣を抜刀。剣を構えたゼノヴィア。

巧の感知能力は修行期間でさらに磨きがかかっていた。今までは、オルフェノク的能力故のものだったが、今では遠くにいる敵の存在やその数を図れる物になっていた。

因みにこの力は、小猫が扱う仙術と呼ばれる物。本郷猛から見ても、学んだ物であった。

どこから来る……。

緊張の糸を切らないゼノヴィアの前方の天井部分に何か伸びていた。それは一本の線……いや、ライン。

振り子の要領で、こちらへと向かってくるのは二人の敵。ラインに吊るされた敵の数は二人。巧とゼノヴィアは、同時に左右に分かれて敵の一撃を難なく避ける。

ラインを伝って攻撃してきたの、匙元士郎と生徒会役員の女子生徒。

女子生徒――巡巴柄は、剣をすでに剣を構えていた。ゼノヴィアに

視線を向けている。

つまり巧の相手は……。

既に自分と相對する形で前方に立つ匙。その右腕には黒い蛇のようなものが巻きついていて。その先の手首あたりにも何やら器具——彼の神器が取り付けられていた。

「俺もかなりキツイ修行をしてきたんだよ、お前を倒す為にな！」

言葉と共に、龍を模した器具の口の部分から先ほどのラインが伸びる。

射出されたラインは、巧を通り越して後ろの雑貨店へ。匙は掴んだ感触を感じると前に突き出した右腕を引き絞る。

がらら……と何か引き摺られ、そしてこちらは向かってくる音に反応して巧の体は右方向へと飛び付く。着地と共に先程まで巧のいたところ。少し小ぶりの机が通り過ぎた。恐らくだが、後方の店にあつたものをぶつけようとしたのだろう。

匙もラインの上手く扱い、巧に躲かれたとみると即座に勢いを殺し、机を壁際に付ける。破壊行為の禁止というルール故。

「なんだよ、兵藤」

巧を見据えた匙は、さらに右腕の黒い蛇らしき物がさらに蠢く。彼の纏うオーラや魔力がまた上へ。彼の前方で、脱力した巧がいる。両腕には盾を展開してはいるものの攻める様子は見受けられない。

「ファイズに変身するまでもないって言いたいのかよ!!」

一気に加速した匙は、巧に拳をぶつけられるであろう距離まで近づき、勢いの込められた一撃を放つ。

匙の一撃に対し、盾を持って防ぎでもなく、軽く半身にする事だけで対処。匙はカウンターを警戒するものの、巧は何をするでもなく後方に下がる。

「舐めてるのかよ……兵藤おお!!」

激昂した匙の声は、通路に響き渡る。

響き渡る声をBGMにするかのように、匙自身が巧に突貫を仕掛ける。

匙が再びラインを伸ばした。その狙いは巧の右足。

巡と裕斗から借りた聖魔剣で、剣戟を交えるゼノヴィアは巧へ注意の声を飛ばす。

「それに捕まったら厄介だ！ 相手を拘束する術に長けてる！ それに顧問の説明では力も取られるらしい！」

その指示で、巧も後方に下がりラインから距離を置く。

伸びたラインは、再び匙の手首の神器へ。

匙の神器、『黒いアフソーション龍脈ライン』には五大龍王の一角、ヴリトラの力が込められた物の一つ。他にもヴリトラの力が込められた神器は存在している。この神器の力は、先ほどのゼノヴィアの説明通りで。龍を模した器具の口部分から伸びたラインは相手を拘束し、その力を奪うことが出来る。他にもその力を他者へ受け渡すことも可能にする。

「ラインだけが武器じゃないんでね！」

腕を前に突き出し、再びラインかと思わせた所で、魔力の塊を生成。ドンつと音を響かせて、巧へと放出。

「らあー！」

巧は向かってくる魔力弾を避けずに、即座に展開した盾での一撃を衝突の瞬間にぶつける。何秒間かの力の押し合いだったが、巧の一撃が匙の魔力弾を掻き消す。

一撃を消した巧の前には、追撃の拳を放とうとする匙の姿が。攻撃の動作から次の動作へ移る一瞬を狙って放たれた匙の拳を、巧はそれを掌で受け止める。

「なんだよ、攻撃しろよー！」

攻撃を止めた巧は、それ以上何もしようはしない。

匙もその意味と巧の迷いを感じ取っていたからこそ、苛立ちを隠さない。

「しないなら、こっちから行くぞー！」

そこから匙の連打が続いた。拳を叩きつける。足を振り上げて、蹴り込む。しかし巧は、それら全てを往なしていた。

匙は巧に一撃も与えられずにいた。

そんな攻防が数分間続いた。
攻めつぱなしの匙は肩を揺らし、呼吸も乱れていた。

「なあ……兵藤……俺さ、先生になりたいんだよ」

「ああ、知ってる」

「会長の作ろうとしている学校の通うかもしれない子供に、俺は言えねえよ。お前に、ライバルに手を抜かれて勝ちました、なんて」

その一言に、巧の顔が乱れる。

分かっていた。こんな事は意味が無いことを。ここで巧が匙に敗れたとしても、リアスに迷惑をかけ、匙とソーナの夢に泥を塗ると。彼らの夢は、彼ら自身の力で壁を乗り越えた先にあると誰よりも分かっていたのに。いざ自分が、その壁であると自覚すると彼らに対して拳を振るえない。

誰かの夢を守りたいと願った自分が、誰かの夢を遠ざけるような事はしたくなかった。

そんな巧の迷いに匙は、言葉と己の意思を示した。

「兵藤。お前が前に言ってたよな……『夢を守る事はできる』って。ならさ、俺の夢も守ってくれよ。俺の夢は、お前を超えた先にあるんだ。だから、本気のお前と戦いたい」

どこまでも真っ直ぐで不器用な匙の瞳から目を逸らしていた巧は、ゆっくりと彼と向き合う。その顔にはいつもの仏頂面では無い表情が浮かんでいた。

「悪かった、『匙』……」

初めて呼ばれた自分の名前。巧が、自分と本気で向き合ってくれた事に嬉しさがこみ上げる。

「おう！……行くぜ、兵藤おおお！」

『ソーナ様の『戦車』一名退……』

誰かの退場を告げるはずの通知が途中で切れた。

仲間の脱落と共に違和感を匙と巡を襲う。

剣を構えていたゼノヴィアも、流石に攻撃は出来ないと取り敢えず構えを解く。

『イツセー！　ゼノヴィア！　すぐにソーナか私の拠点に合流して！』

巧とゼノヴィアの耳につけたイヤホンから、焦りを感じるリアスの声。匙と巡もソーナから同様の指示を受けたのか巧とゼノヴィアに視線を向けていた。

「何があっただんだ……一体」

「分からないけど、取り敢えず会長の指示に従いましょう」

ゼノヴィアと巡の剣士二人組の会話を他所に、巧は周囲に目を向けていた。その様子を匙も見逃さず、近寄って声をかける。

「どうした兵藤。何をそんなにー」

匙の言葉が止まる。巧も背中越しに何かを感じる。

何度も相対してきた敵の存在。

転移用の魔法陣に乗って現れたのは、十名の悪魔と三体のオルフェノク。

「グレモリー眷属、兵藤一誠、ゼノヴィア。シトリー眷属、匙元士郎、巡巴柄。四名を確認、処分いたします」

突如現れた侵入者は、それだけを淡々と伝えて巧たちに襲いかかってきた。

三人目

「お前ら先に行けっ！」

盾を展開し、目の前の相手を迎え撃とうとする巧は後ろに控える三人に叫ぶ。けれど、ゼノヴィアと匙は首を縦に振らずに巧と共に戦うべく、構えを取る。一瞬遅れた巡も即座に剣を構えて、襲撃者に備える。

「バカっ……!!」

逃げろ、と叫ぼうとする巧の眼前に一体のオルフェノクが躍り出る。

犬を模したドッグオルフェノクは、モチーフの犬さながらの軽快な動きを見せる。

「あんたらにはここで死んでもらう！」

低く響いた声。そこからこのオルフェノク、いや男性の強い意志が巧には感じられる。感心する間も無く、指から鋭利な爪が伸びた。最早爪と呼ぶには大きすぎるそれを、巧に向けて振りかぶった。

振り下ろされた爪を左手の盾で受け止め、カウンターの一撃をまらずは拳で。繋げて前蹴りを全力で腹に叩き込む。

「……ぐっ……!!」

軽い嗚咽の様な声が聞こえ、ドッグオルフェノクの体は後方へ。やはりファイズではない為の身体能力のスペックの差を痛感。巧は他の三人に目を向ける。

もう一体のオルフェノクと戦闘を交えるゼノヴィア。

十人ほどの魔法使いと背中合わせて戦う匙と巡。

恐らく先程のリアスの声からして他のメンバーのいる場所にも敵が現れたとみて間違いはない。ならば、とドッグオルフェノクへ更なる攻撃を仕掛けようと前に突っ込む巧に匙が何かを投げた。

「兵藤、それを付けろ!!」

声に反応し、振り返った巧は匙の投げたサングラスを受け取る。一瞬どうすればいいか迷うものの、既に三人が掛けていた為に巧も遅れて掛ける。巧が掛けたのを確認し、匙は一本のラインを天井付近にま

で伸ばして、魔力を送ってからライトの明るさを底上げした。かなりの照度を誇ったそれは、襲撃者の目を眩ますことに成功。その隙をついた四人は即座にその場から退却を選択した。

同時刻。

レーティングゲーム観客席、VIPルーム。

VIPルームは混乱の渦の中にあつた。かくゆう俺ーアザゼルもその一人。

「侵入者は身元は旧魔王派と断定。ただちに救援部隊を送れ！」

サーゼクスの声が響き、近くの上級悪魔達がゾロゾロと動く。

そんな中、俺はひたすらに今の状況を分析するべく画面を見つめる。

突如現れた襲撃者からアーシアを守るべく戦うリアスと朱乃の姿を映した画面が。他にも、木場やイツセーの姿を映す画面が複数台設置されていた。

VIPルームに座る他の神話体系の神々も、どこか緊張した面持ちだ。それもそのはず、この画面の先には魔王の妹が二人もいるんだからな。

少しすると一人の兵士がサーゼクスに近寄り、何かを伝える。俺も内容を聞くべく近づいた所。

『我らは真の魔王の意思を継ぐ者、旧魔王派である』

モニターには、敢えて姿を現した一人の悪魔が。

フードの下から覗く素顔は端正が故に、コイツの精神の歪みを如実に表している。

『本来魔王の血を引かぬ者が、魔王の座に就くこの現状を我々は打破しなければならぬ！』

どこか演劇染みた動きと言葉で男は自分の中の鬱憤を言葉に。

まあ、要するに自分たちを追い出したサーゼクスや、それを容認する今の冥界が不満って所だな。

『我々は口火を切る！ 今日ここで、魔王の妹達の首を落とす事だな！』

男の宣言で、VIPルームだけじゃない。このゲームを見ている全ての奴に緊張が走る。

コイツらの手口を考えれば、ゲームを運営……いや、動かしている側の連中とつるんでるのは明白。

「アザゼル。既に信用出来る者達をゲームを操作する者達の元へ向かわせました」

「流石に早いな、シエムハザ」

俺の部下、シエムハザはあの短時間で俺の意思を即座に察知し、既に手を回していたらしい。まったくありがたい部下だな。

「彼を死なせる訳にはいきませんから」

シエムハザの視線は、ゼノヴィアや匙と共に逃げるイツセーへ。

「お前もあいつが気に入ったらしいな」

「貴方が彼に肩入れするからですよ」

俺たち二人の視線は、イツセーの元へ。

頼む、何とか持ちこたえてくれ。誰一人欠けるなよ。

「シエムハザ、あと一つ……頼まれてくれるか？」

「勿論です」

シエムハザはいつも見せる余裕の表情で俺の指示を待つ。

まあ、頼むのはシンプルな事だ。

「バイク一台とポストンバックをグレモリー本邸から持ってきてくれ」

「会長！」

一階西側にある喫茶店。

そこを身を隠していたソーナ達と合流し、匙は彼女の名前を呼んだ。

一方で、そこに居たのはシトリー眷属が五人。残り三人は見当たらない。

「安心してください、他の三名はリアスや木場君達と共にいますよ」

ソーナの言葉を聞いて、巧も今の時点での犠牲者が出てない事に取切り敢えずは安堵した。けど、まだ気は抜けない。ここからどうやって切り抜けるかという最大の問題が残っている。他にも、リアス達との合流も必死だ。

シトリー眷属の拠点がここ、一階西側。グレモリー眷属の二階の東側と真反対の位置。

「会長……どうしましょう」

巡の微かに震える声。巧はそれも不思議では無いと思った。先程まではあくまでレーティングゲームだった筈の勝負から一変、命と命のやり取りへ。それでも自らを奮い立たせる彼女は強いと素直に思えた。

「そうですね……」

指示につなげようとするソーナ。巧も言葉を待たんとした瞬間。背後からの気配を察知。しかしそれは、よく知る者達の気配とオーラ。

「……みんな」

現れたのはリアス達。それを確認し、匙やゼノヴィア、そして巧は彼らに駆け寄る。既に意識の無い生徒会メンバーの仁村留流子を背負う裕斗や腕に傷を負ったギヤスパークがいたからだ。

傷を負った二人をなんとか座らせ、アーシアが神器の力で治療を開始した。

「私が塔城さんに負けて……転送されると思ったら、あの人達が来た

んです」

「確かに一人目のリタイアを告げた瞬間に現れたな」

ゼノヴィアも領き、皆同じような反応を示す。

喫茶店で身を隠すものの、依然として状況は変わらない。敵の数もむしろ増えているくらいだ。

仙術の応用で、巧は敵の数を把握。覚悟を決め、店から出ようとする所で小さな手がそれを阻んだ。

「どこに行くんですか、イツセー先輩」

「……お前はここに残れ、リアス達とな」

巧よりも仙術に長けている小猫は、彼の考えを即座に見抜き、単独行動を禁止しようとする。ここで引いたら、修行の意味はない。そう言わんばかりに腕に力を込める。行かないでほしい、という小猫の想いを巧も分かってはいた。

誰にも死んでほしくない。

多くの死を見てきたが故に、巧は夢を持つリアスやソーナ。そして彼女達を支えようとする裕斗や匙達に傷ついてほしくなかった。

遠回りはしてほしくない。

「イツセー。貴方の気持ちは嬉しいけど、私達も行くわ」

二人の会話はいつのまにかリアス達にも聞こえており、その場にいる全員が既に覚悟を決めていた。

目の前の、不器用な彼を一人にしない。一人で戦わせない、と。

全員が、リアスの言葉と意思に同意していた。

その覚悟を、巧は覆せるだけの物を持ってはいない。

『リアス・グレモリー。ソーナ・シトリー。そしてその眷属達よ。この空間は今我々が支配している』

突如響いた声。

それもこのショッピングモールに響く音量からして、かなりの大きさ。その声に反応し、皆の僅かな呼吸音ができるだけになる。

『我々の目的は貴様らの首を取る』

リアス、ソーナはその意図に気付いた。敵は旧魔王派であり、自分たちを殺すことで見せしめにしたという事に。

二人以外の者達は彼女らを差し出すつもりなど毛頭ありはしない。そんな目的で二人を死なせてたまるか。特に匙に至っては怒りで爆発しそうなくらいだ。

『ただ、貴様らにも助かるチャンスを与えよう。この場にいる16名の内、15人は外からの魔力干渉を許してある。一人だけこの場に残ってもらおう』

ソーナはこの条件に違和感を感じた。なぜ、ここまでできてリアスと自分を逃すような条件を提示したのだろうか。本来、レーティングゲームにテロリストが介入することは簡単ではない。恐らくは内通者などの存在の手引きが大きいだろうが、そう簡単には行かない。そこまでの危険を背負った作戦なのにこんな条件を提示するだろうか。まるで敵は相反する二つの目的を持つかのように。

一つはリアスと自分の殺害。もう一つは。

「俺が残る」

ソーナの思考を停止を停止させたのは、巧の一言。その一言と、巧を見てソーナの直感が告げる。

「ーもう一つの目的は、兵藤君。」

自分たちに絶望を感じさせた上で、あの条件を出せば誰が残ると言い出すかは明白。しかし、このソーナの案には少なくとも巧の人となりを知る……もしくは、知る事が出来る人物が必要となる。自分たちの周りに裏切り者がいるのかも。そんな予測を立てつつも、彼女は巧を止めるべく声をかける。

「兵藤君。貴方のその行動を、敵は求めているかもしれません」

「相手の狙いは、イツセーってこと？」

少し遅れて、リアスもソーナの言葉の意味と襲撃者の詳細を思い出してから答えに行き着いた。

「ええ。私達二人が標的というのは間違いないでは無いと思います。敵の中にオルフェノクが居たことを考えると兵藤君こそが最も消したい人物……そう考えて動くべきです」

ソーナの推理を聞いて、裕斗と旧魔王派に目が行きがちだった事に

気づく。人数こそ少ないがあの中には確かにオルフェノクがいた。彼らにとつて一番の障害は、魔王でも墮天使総督でも天界の大天使達でもない。目の前にいる兵藤一誠だ。

前者は、オルフェノクが動いたとしてもそう簡単には動けない。彼らは一族の長という立場にいるから。けれど、ファイズにはそういった立場ではないから、自由に動ける。

そんな理由などなくとも、裕斗はこんな所に巧一人を置いていくような選択は選ばない。

『あーあ、お前ら聞こえてるか』

全員の耳につけたイヤホンから、聞き慣れたアザゼルの声か。

リアス達は彼の指示を待ち静寂を保つ。

『今から俺の指示に従ってもらうぞ』

有無を言わさないアザゼルの声は、彼を墮天使総督たらしめている何よりの証拠。そんな彼は、あまりにも残酷な指示を皆に伝える。

『イツセーを除いた全員で、こちらに戻ってこい』

一瞬、息が止まった。

今、この男は、何を言ったのか。

「ふざけないで、アザゼル!!」

敵が近くにいるのにもかかわらずリアスは声を張り上げた。彼の指示は、巧を犠牲にしろ。

レーティング・ゲームにある作戦としての、犠牲とは全くもって異なる。あの敵を、一人で……それも、ファイズにならない状態。

仲間の犠牲を強要する作戦を聞いたグレモリー眷属は皆、その言葉を否定するようにアザゼルへ言葉をぶつける。特に朱乃やアーシアは、嫌だ嫌だ、と巧の手を掴んで離そうとしない。勿論、ソーナ達も黙ってはいない。ソーナはリアスと共にアザゼルへ作戦の中止を要望したが……。

『ぐちやぐちや言うな。それとも何か、お前ら全員で奴らと一戦やらかすつてのか』

「少なくとも、私は残るわ。イツセーを置いて、一人で逃げる訳には」

『王を、取られたら負けだ。王には、時に眷属の死を受け入れる時がいつか来る。……それが今だ』

「これはゲームじゃない!!」

分かっていった。純血の悪魔である自分とソーナが帰還する様に言われるのは。巧が誰か残らなければならぬ一人に、充てがわれるかもしれない事は。

『今、こちらで出来るのはお前らの転移のみ。それもきちんと15人までしかない。それ以上の干渉はそれなりの時間を要する。15人を転移させちまったら、こちらから救援部隊は送れない。例えそれが『車』や『バイク』といった非生命体でもな』

敵が許したのは、リアス達の中の十五人の転移のみ。それ以降に救援部隊を送るとなると、その間にゲームへの干渉自体を止めなければならぬ。アザゼルの部下などが手を尽くしてはいるが、どれ程の時間を要するか分からない。そんな賭けは、出来ないと上層部は判断した。

話が止まりかけた途端、裕斗はリアスを見据えて、決意を口にする。

「僕も残ります」

「何を言ってるの、裕斗」

小さく、疲れたような声で、裕斗を呼ぶリアス。呼ばれた彼に、学校内で見せる爽やかさはない。あるのは、男としての決意と覚悟。

「僕は、グレモリー眷属の『騎士』です。主と、仲間を守る剣となる為にこの剣を振るわせてください」

自分に深々と頭を下げ、無茶を頼み込む眷属にリアスは戸惑った。今の裕斗は、決して死にたがっている訳じゃない。何か考えがある。その上で動いていると思えた。

「……………ッ」

リアスは唇を噛み締め、残酷な指示を告げようとする自分を恨んだ。

自分がもつと強ければ。

サーゼクス 兄や、グレイファイア 義理の姉程に強ければ、二人と共に戦えるのに。

そんな後悔を胸にしまい、リアスは『王』としての決断を下す。

「裕斗とイツセーを除いた皆で、そちらへ転移するわ。……アザゼル、お願い」

『ああ。分かった。グレイファイア、頼む』

残る二人を除いた皆は、少し距離を置いてから、侵入者達が敢えて使えるようにしていた転移の光に包まれていった。

巧さんと、裕斗を除いた皆が、お兄様やセラフオール様、グレイファイア、そしてアザゼルのいるVIPルームに転移した。

既に私達の目の前には、お兄様やセラフオール様が待っていた。その他にも他の勢力の所謂幹部クラスや冥界上層部の悪魔達。私の右側の壁にはアザゼルが寄りかかっていた。

「リアス……」

「ソーナちゃんっ!」

お兄様が私の名前を呼び、セラフオール様がソーナに抱きつく。ただし感動の場面とはならない。だってこの場には、本来居るはずの二人が居ないから。

私は、壁に寄りかかるアザゼルに詰め寄り、彼の頬を引つ叩いた。

「まあ、そりやそうだな」

「ええ、そうよ。むしろ足りないくらいだわ」

殴られたアザゼルも納得といった表情。彼の視線の先には、敵が待ち構えるショツピングモール中央へ歩く裕斗と巧さんに移す画面。

「木場はいい判断をした。イツセーの他にも、最低一人は残ってくれないと贈り物が届けられないからな」

「どう意味ですか?」

ギヤスパーが、アザゼルに問いかけて、彼はいつものあつけらかなとした態度で言葉を返した。

「アイツのバイク」

その言葉と共に、アザゼルは見覚えのあるナツプザックを取り出した。

「それって……、イツセイさんの」

私と同じくらい、”それ”を見たことのあるアーシアが一番に反応。少し遅れて私も、気づく。

アザゼルが持っているそれは、巧さんのファイズへの変身デバイスが常に入っていたナツプザックだった。

少しすると、巧さんと裕斗はモールの中央部へ到着した。

その様子を画面越しに、私達とソーナ達はアザゼルやお兄様と共に見つめていた。

巧さんは、アザゼルの友人が作った盾を展開、裕斗も聖魔剣を構えてこそいないが握ったまま。

『どうやら、貴様らは主人に捨てられたらしいな』

今回の侵入者、禍カオス・ブリゲードの団の派閥の一つ、旧魔王の構成員の一人の男が淡々と二人へ問いかける。

『ルシファーを輩出された名家の次期当主も案外冷酷だな。どうやら眷属ではなく、自分への慈愛に溢れているらしい』

男の皮肉に、部下か仲間の悪魔達がゲラゲラと笑う。その数は恐らくだが百程度。その中にはオルフェノクが十体ほど居た。今の私は、その皮肉を覆せない。現に二人を残してここにいるのだから。

同時に、私とソーナが帰還したのを見て安心し、巧さんや裕斗への心配を一切しない上層部の悪魔への怒りが出てきそうになる。

『それに加えてシトリー家の次期当主は現実を知らない夢見る乙女……くつくつ、これで将来の冥界は安泰だな』

ソーナを嘲る言葉に、匙くんが反応し、悔しそうな顔をした。いえ、匙くんだけじゃない。ソーナの眷属皆が同様の顔を見せる。

『聞けばシトリー家の次期当主殿は、”誰でも通えるレーディング

ゲームの学び舎”を作ると聞いている。……そんな絵空事を口にして
いる時点で底は見えている。下級悪魔は、我々の足元にひれ伏して
いれば良いものを』

『ちやうちやうるせえな』

笑っていたテロリスト達の空気をぶち壊す様に、巧さんは普段より
も大きめに声を出した。その顔には、呆れが浮かんでいるように見え
る。

『貴様らは、主人であるリアス・グレモリーに捨てられたのだぞ。よく
もそんな態度を取ってられるな』

『それは違う。僕たちはあの人達を守るために自分の意思でここに
いる。そしてリアス・グレモリー様にも、そしてソーナ・シトリー様
にも素晴らしい夢がある。僕たちは、それを護る』

裕斗の言葉に、ソーナや彼女の眷属は何処から胸のすく思いがあっ
たのか、嬉しそうな表情を浮かべていた。

少し前に進み、剣を構えた裕斗の隣に彼が並ぶ。

『お前らの相手してる暇なんか無いんだよ。アイツらには』

瞬間、イツセイさんと裕斗の間に光が降り注いだ。

降り注いだのは、外部からレーティングゲームの空間へ人や物を送
る為の転移の光。

「言っただろ、届け物が届けられるってな」

いつのまにか私の隣にいたアザゼルが、ニンマリと笑った。

「さあ、そろそろ反撃といこうや……」

光が消えて、現れたのは巧さんにとつての最高の相棒。

豪快なエンジン音は、私達に逆襲の狼煙のように聞こえた。

「バジン君ー」

裕斗の声で、巧も突如として現れた相棒に目を奪われる。その後部
座席に取り付けてあるナツプザックを見て、即座に駆け寄った。

バックからファイズギアを取り出した。腰にドライバーを巻きつ
ける巧を見て、裕斗は自身の賭けが勝った事を確信。

「先生が言つてた通りで良かった」

「なんの話だよ」

「十五人が転移したら、なにも送れない。つまり、誰かもう一人が残れば何かを送れるって言いたかつたんじゃないかな」

巧も、先ほどのアザゼルの指示内容を思い出し、そういえば……といった表情を浮かべる。

裕斗も、誰か一人が残れば……反撃のきっかけをアザゼルやサーゼクス、グレイファイアらが与えてくれると踏んでいた。

「つたく、最初からそう言えばいいだろうが」

「相手に盗聴されてる事も予想してたんだろうね」

まるで何事もないかのように、いつもの調子で会話を続ける二人。そんな二人を見ているうちに、呆気を取られていた急魔王派の悪魔達も現実に戻っていた。

「その奇妙な鉄馬が来たところで、貴様らの運命は変わらないぞ」

リーダー格の男を中心に、彼らの殺意が、敵意が、二人に向けられていく。既に戦闘態勢に入った者も多く、この場を異様な空気が包む。

剣を構えた裕斗の少し先に、腰にファイズドライバーを巻きつけ、変身コードを入力する巧が。

『Standying By』

「変身」

『Complete』

変身を完了させ、右手のスナップを効かせる。カシヤツと響きのいい音を合図に、ファイズと裕斗は敵に向かい突貫した。

「相手はたかが下級悪魔が二匹だ！」

今回の襲撃者のリーダーである男性悪魔は、内通者から貰ったデータをみて、木場裕斗、兵藤一誠の戦い方を知っていた。だからこそ、ここに集まった百の旧魔王派の構成員と禍カオス・ブリゲードの団に所属するオルフェノクの指示を担えるように立場を整えた。

そう、この場にいるオルフェノクは自らの意思で、ファイズと相對

させられている訳ではなかった。

それがこの男の命取りになるとは、男性自身も思いもよらなかった。

「下級悪魔があああ!!」

魔力を放とうと構える男性の胴体を聖魔剣で斬り裂き、隣にいた二人の敵も瞬く間に斬り伏せる。

聖魔剣の特性と、短い期間での修行は裕斗の戦闘能力を格段に上昇させた。

なんて感嘆に浸る間も無く、次から次へと攻撃が仕掛けられる。裕斗の移動は騎士の駒の特性を最大限に生かした物で、いかに上級悪魔とはいえど容易には捉えられないものではなかった。加えて、今はレーティングゲームのルールもない為に、この空間やショットピングモールへの破壊の考慮もする必要があった。

「はあ……はあ……」

常に移動しつつの実戦経験は裕斗にとって少ない。それも多対一の経験は師匠に比べれば、薄っぺらい物でしかない。

軽く息を整えようと呼吸を繰り返す、裕斗の目の前に再び悪魔が五人体制で飛翔し向かってくる。

既に察知していた為に、問題なく対応さんとする裕斗の前に巨大な影が割って入った。

「バジン君!」

既にバトルモードのバジンは、背後に裕斗が居ることをキチンと確認してから、バイク状態での前輪を利用して放つバスターホイールを悪魔に向けて放った。

「……ひっ!」

突然放たれた攻撃に、旧魔王派の悪魔達は肝を冷やした。

自身の体を、目の前のバイクから変形した何かが放った光の槍が穿った。それも一発ではない。気づいた頃には十発以上は被弾しており、強烈な痛みが肉体を駆け巡る。

バジンの背中越しで見ていた裕斗もこれには驚愕した。少なくとも、裕斗の知る限りはバジンは光の槍を放つ攻撃方法など持つてはいない。恐らくではあるが、あの顧問……そして巧の盾を造った男性による物と予想していた。

痛みも共に消滅していく旧魔王派の悪魔を確認し、裕斗は二手に分かれた巧と合流すべく、バジンと共にその場を離れた。

「うわあああ!!」

まだ声変わりを終えていない少年特有の声が、シヨツピングモールの中央に響く。

雄叫びと共にファイズに接近し、拳を振るうのはビーバーを想起させるビーバーオルフェノク。

しかし、その動きは拙さがありファイズから見ると、戦いに慣れていない者の戦い方。同様の感想を、自分を取り囲むオルフェノク全てに抱いていた。

彼らから感じられるのは、焦りと不安。それがどこから来るものなのかは分からない。

同時に巧の意識は、十体のオルフェノクのみならず、時折攻撃を仕掛けてくる旧魔王派の悪魔達にも向いていた。

戦闘開始と共に裕斗は持ち前のスピードを生かし、敵を分断させた。その為に巧の近くににいる悪魔は二十人程度。残りは裕斗に向かっていたが、バジンを援護に向かわせた為に何とかなると踏んでいた。

「ふんっ！」

ビーバーオルフェノクとは一回りは体格の違うオルフェノクが、ファイズに向けて突撃を仕掛けるものの、安直な動きの為にあっさりと回避され、後ろからの蹴りを叩き込まれる。振り返った先では、悪魔が遠方からの魔力弾を放つものの、右斜め前に体を転がして、事なきを得る。

攻撃の規模からして、ファイズのみならず周囲のオルフェノクへの

のダメージは配慮されてはいない。現に、何体かのオルフェノクは魔力攻撃を受け、地面に横たわる者もいた。

「しつかりするんだ！」

「痛いよ……」

倒れるビーバーオルフェノクに声を掛けるオルフェノク。ビーバーオルフェノクは声からして、まだ幼い少年であることが分かる。不意に巧は、オルフェノク達との関係を投げ捨てて、魔力攻撃をした悪魔達を仮面越しに睨む。

「どうした、ファイズよ。その獣たちは、貴様の相手だろ？」

悪魔たちの一人、今回の襲撃のリーダー格の男が、ニンマリと笑いながら巧とその背後にいるオルフェノクを見下した目線を向ける。思わず不快感をあらわにしたファイズは、軽く舌打ちをして彼らへと突貫。

真ん中にいたリーダーの男へ、拳を叩き付けようと構えるファイズの前にロープを羽織った悪魔が三人並び立つ。三人は両手を前に突き出し、魔力による結界を張り防御を図る。

「おらあ!!」

ファイズの一撃は、彼らの防御をいとも簡単に破壊し、防御越しの重い拳を防御を行なった一人の悪魔に叩き込む。

「……なにっ!？」

「たかが下級悪魔が!」

防御を行なったのは、上級悪魔に位置する者だった。周囲の者はそんな者たちの防御をただの拳で破壊し、戦闘不能にしたファイズに圧倒される。思わず動揺する悪魔たちを、ファイズが見逃すはずもなく蹴りや肘打ちや掌底を鳩尾や顎といった人体急所へ瞬く間に叩き込んだ。

「……!？」

二十人はいた悪魔たちが残り、リーダーを含めて五人。先程までの愉悦な笑みから一変、焦りを感じつつある顔へ。そんな男にも一切の油断も見せずにファイズは近づこうとした時。男の視線の先が、ファイズからオルフェノクへの移った。同時に男の顔色も変わった。

「ファイズ、いや兵藤一誠！　そこまでにしてもらうぞ」

不意に大声を放った男に、ファイズも立ち止まるが、また即座に歩み寄ろうとした途端。先程よりも更に大きな声を放った。

「ここにいる獣たちには、優しい人間の家族がいてな……彼らは今、我々の手の中だ」

突然、ファイズが首を上に向けた先にある空間に映像が映し出される。

それは、一人の少女が椅子に座らされている映像。その背後には旧魔王派の悪魔の姿が。

手を椅子の後ろで組まされ、顔には殴られたような跡が。

一瞬、ファイズに現れた動揺を見抜いた男は、更にそれを突く。

「ここにいる獣の一匹は、この小娘の兄だ。今、ここでお前の首を狩る事が、この娘を守る唯一の道」

巧の視線は、大人のオルフェノクに支えられて立ち上がったビーバーオルフェノクに。

彼も、映像が映し出された事に気付き、少女を呼んだ。

「ハナ!!　な、なんでだよ！　ファイズと戦えば、妹には手を出さなかって約束したじゃないか！」

ビーバーオルフェノクは、人間態に戻り……少年の姿へ。少し汚れた服であったが全体的には年相応の格好をした少年は、ファイズを通り越して、リーダーの悪魔の元へ。背が低く、胸ぐらは掴めないが軽く服の裾を掴む。振り返ると、十体のオルフェノク達全てが、人間態に戻り、そのうちの何人かは少年の元へ。

「黙れえ!!」

鈍い音がして、少年が地面に倒れる。周囲の人間態のオルフェノク達が彼に近寄り、声を掛ける。

「貴様らのような獣は、我々悪魔の家畜に過ぎない。……家畜は主人に逆らう物ではない。今から躰をしなくてはな」

刹那、手のひらを向けるリーダーの悪魔の手首を掴み上げ、ファイズは静かに呟く。

「止める。こいつらは、人間だ」

「……貴様、気は確かか？ こいつらの何処が人間だ。己の欲望のままに同胞と謳う者達を殺しているんだぞ。……化けの皮を剥がしてやろう！」

男が片手を上げると、映像に映る悪魔が少女に歩み寄ろうとした途端。激しい爆音が響いた。映像の中継先で何かが起こっているのは分からないが、この事象はリーダーの悪魔にも想定外らしく、困惑の色が顔に馴染んでいた。

何秒かすると少女ーハナの、顔色が明るくなった。

『聞こえてるか。今から、そっち行くぞー』

軽妙な声のみが聞こえ、映像が消えた。

困惑が空間を支配する中で、転移の光が発生した。おそらくして声の主が来るであろう事は分かっていたので、巧は変身を解除した。

光と共に現れたのは三人の影。

一人は、体格の大きく190cmはあろうかという男性。二人は、そんな男性に抱えられたハナ。三人目は、体格は細身の青年。身長は巧よりも少し大きい程度。

三人が現れた途端、十体……いや、十名の人間態のオルフェノク達が駆け寄る。その風景を見て、巧はとりあえずは肩の荷が降りた様に感じる。

「イツセー君ー」

聞き慣れた裕斗の声。彼と共にバジーンもいる。二人が無事である事も分かっていたが、やはり目で確認するのが一番。

裕斗は、十人以上の人間がいるという状況に着いてこれていなかったが巧の軽い説明で何となく分かった様だ。

その場にいた殆どの者がとりあえずは、安堵の表情を浮かべる中……。

「ぎ、ぎ、ぎ、貴様ら……どうやってこの場に!？」

先程までの得意げな顔はどこへやらと言わんばかりに、腰を抜かし

たリーダーの悪魔。他の四人と同様に、転移してきた三人に驚いている。

「あなた方が僕の部下を自分たちの馬鹿げた特攻に利用する為に、その家族を人質にしたと情報を耳にしましてね。安心して下さい、既に処理させてもらいました。同時に人質も無事保護できました」

「しよ、処理……だと」

悪魔の言葉を、転移で現れた青年が答える。黒と白のコントラストを強調する髪と伸びた前髪で青年の顔はキチンとは伺えない。

巧と裕斗も穏やかな内容ではない事は分かっていた。青年は、ハナとハナの兄ソーラへ配慮した言葉を選ぶ。

「まあ、旧魔王派が何をしようが、僕達には関係ない。……でも、彼らを巻き込んだんだ。それなら、僕等に、僕に……仕返しされても仕方ないよね」

青年は、魔法陣を展開して何かを手元に召喚した。その際、巧に一瞬視線を向けた。

「虎さん、みんなを連れて冥界へ行ってください。後は僕が引き受けます」

「おうー」

青年は自分を除いた者達での転移を指示。指示を受けた男性ソー虎も力強い返事で応える。

既に手筈を整えていたのか、即座に転移が開始されハナやソーラやその他のオルフェノク達は転移を完了させた。

彼らの転移が終わると同時に、青年の手元に、ソレが届いた。

「イツセー君！ あれは」

思わず裕斗か巧を呼んだ。

呼ばれた巧は、言葉を失う。

ーもう、ない。壊れたからな

カイザのベルトは、最終決戦の折に破壊された。

故に、巧は勘違いしていた。ベルトはもうない、と。

だが、仮にまだ新しいベルトの設計図が残っていたら？

ソレを影山冴子がこの世界で完成させていたら？

そんな嫌な予想の答えが、巧の目の前にあった。

『S t a n d y i n g B y』

「変身」

『C o m p l e t e』

青年は、巻きつけたベルトーサイガドライバーに、フワリと放り投げたサイガファンをうまくキャッチし、換装。

ファイズとも、カイザとも、デルタとも異なる青い光に包まれる。

「ふう……」

青年、天城奏は新たに制作されたベルトの一本、サイガの力を冥界の地で顕現させた。

赤と青の衝突

裕斗と巧の目に映るのは、裕斗は勿論巧すらも知らないライダーズギアを用いて変身した青年の姿。

彼は、巧を一瞥した後加速した。仲間内でも動体視力はトップの二人すらも捉えられない動きで、青年は悪魔たちの元へ。

「おのれえええ!!」

正気とは言えない声を張り上げ、悪魔は青年——サイガへ魔力を放とうと手を突き出す。突き出された手を軽く折り曲げた。鈍い音と共に関節の可動域には含まれない変化が生じる。

「ああああ!」

自身の体への痛みとショックは彼の体を駆け巡るも、サイガは手を緩めない。半狂乱な悪魔の首筋を白い素体に青いラインの入った腕が掴み上げる。

手に持ったペットボトルを掲げる様に、悪魔の体を持ち上げる。

持ち上げられた悪魔は、その場から離れようと体を動かすも、わずかに体が揺れるだけ。

その顔には、死への恐怖が映し出されていた。

仮面の下で、その表情を浮かべる悪魔を笑い、青年——奏は、静かに問う。

「どんな気分ですか。殺されるかもしれないっていうのは」

静かな口調、されどそこには計り知れない怒りを孕んでいる。その声にジタバタしていた悪魔の動きが固まる。まるで蛇に睨まれた蛙のように。

「貴方はそれを僕の仲間にしたんだ。だから、こうなる」

何かが折れる音が聞こえた。

サイガは掴んでいた悪魔の首から手を離した。すると掴まれていた悪魔は呆気なく倒れていく。

既に悪魔のリーダーは事切れていた。

そのことに気づいた一人が、眼前に立つ仮面の戦士に戦慄。咄嗟に転移用の魔法陣を展開した。

逃亡しようとする悪魔を前に、サイガは何故か追い討ちをせずにはの逃亡を見逃した。

襲撃者の悪魔たちが一人もいなくなり、後には変身を解除した奏と、目の前の光景に圧倒されていた巧と裕斗だけが残った。

「おいおい、マジかよ……」

私の隣で、アザゼルの小さな声が聞こえた。

今、私達の前には裕斗と巧さんがファイズとは違うベルトを使って変身した青年と相対しているのを映す画面が。

「朱乃。アレは、デルタではないのよね？」

「ええ」

朱乃に確認を取り、二人の前にまた新たな敵が現れた事を実感する。私はお兄様ーサーゼクス様の元へ向かう。

「サーゼクス様、あの二人の救助はどうなっていますか」

「ああ、先程の報告で、既にゲームへの介入者は殺されていたと報告を受けた。皆、灰にされていたようだ」

現場の状況を聞き、私や朱乃達は顔を見合わせた。その現象は、オルフェノクによるものと決定づける証拠。

同時に裕斗と巧さんへの不安をより掻き立てられる。

「あと十分もすれば救援部隊を送る事が可能になる。それまでは彼らに耐えてもらうしかない」

「そう、ですか」

その言葉を聞き、私は退がる事しかできない。

救援部隊を送るのを早めることも、ましてや私自身が彼らの元に行くほどの力を持ち合わせない事は何よりも悔しかった。

お願い、二人とも絶対に帰ってきて。

「イツセーくん」

自分を呼ぶ裕斗の声で、巧自身も取るべき選択を考えていた。目の前に居る四本目のベルトの持ち主を前にどうすべきか。

戦う、逃げる。

少なくとも巧にはこの二つの選択肢しか思い浮かばない。隣で剣を構える裕斗も仕掛けるべきか否かと迷いが生じていた。そんな裕斗と巧を見て、四本目のベルト―サイガのベルトの持ち主、天城奏は感情の乏しい表情で二人と向き合う。

「ここに来たのは、旧魔王派の処理の為です」

短く簡潔に伝えられた言葉は敵意の無さを示すものではあった。その言葉を聞いたからと言って油断出来る相手ではない。

「貴方達……そして悪魔と事を構える気はありませんよ」

「だからと言って、君が敵ではない証明にはならない」

天城の言葉に、裕斗もすかさず言葉を返す。巧の視線は一切の気の緩みも見せずに天城を捉え続ける。

天城自身も立場と状況から自分への態度に納得していたのか、特に焦る様子を見せることはない。

「そうですね、木場裕斗君。より正確に言えば、君は僕の標的ではない。君の標的は」

「俺だろ」

巧は裕斗よりも一歩前に出て、依然として変わらない態度で天城と向き合う。

天城もそんな巧に対して驚きはしないものの、微笑を浮かべて一歩前に出る。

「一つ、君に聞いてみたい事があります」

「なんだよ」

天城は敵に聞くような事ではありませんが。と前置きをしてから、特に間を空けるでもなく淡々とした様子で言葉をつなげる。

「君はなぜ、人間を守るのですか。悪魔である君が」

一瞬、裕斗は構えた剣を下ろしてしまいそうになった。巧に尋ねた天城の表情はおよそ自分から標的と称した者に向ける物ではなかった。どこにでもいる10代後半の青年がそこに居た。戸惑いを隠し

てれてはいなかった。

「既に君はリアス・グレモリーにより悪魔としての生を受けた筈です。つまり、君は人間ではなく悪魔だ。それなのに、ファイズの力を以って我々とオーオルフェノクと戦い続けている。ファイズの力を、悪魔の敵に対して用いるのならまだしも。貴方は悪魔でありながら人間の守護者でもある。それが僕には分からない」

先程までの感情に乏しさのある表情よりは、幾分か困惑という感情を滲ませて巧に問いかける天城。そんな彼に対して、巧は少しの間も置かずに答える。

「んなもん、人間を守るって決めたからだ」

アーシアを助け出す際にも告げた言葉。

それは彼が乾巧である時から、兵藤一誠に憑依してからも変わらな
い決意。

「その決意だけで。……」

巧の信念を感じ取った天城は、素直に感嘆してしまう。この目の前の宿敵に思わず尊敬の念を抱いてしまいかねない。そんな、甘い考えをした自分自身を軽く嗤って現実を見据える。

「僕は禍カオス・ブリゲードの団に所属するオルフェノク派の一人、天城奏。旧魔王は今の冥界そして三大勢力の転覆を目論む様に、僕達にも目的がある。人間界及び人間の制圧と殲滅だ」

裕斗の背中に寒気が走る。思わず眼前の青年に斬りかかろうとしてしまうほどに。白と黒の髪を持つ青年の目は、ひどく冷たい。その言葉にも同様の冷たさを感じる。

「だがその目的はあくまで人間で、悪魔・天使・墮天使は標的に含まれない」

裕斗も、そして勿論巧と彼の言葉の真意を分かっていた。

ここで退け、と。この青年は告げていた。

悪魔である巧と裕斗がわざわざ標的と見据えていないと言外に告げているのは、婉曲した彼なりの優しさとも取れる。

仮に裕斗と巧がここで退けば、天城にとって巧を殺す理由がなくなる。ファイズがオルフェノクと戦う必要がなくなる。悪魔とオル

フェノクがぶつかり合う必要はない。

そうなれば後はオルフェノクの独壇場だ。

カオス・ブリゲードの元で暗躍を続ければ、人間界は容易く墮ちるだろう。そうなれば多くの人間がオルフェノクと化し、それよりも更に多くの人間が命を、夢を失う事になる。

そんな事を、巧が……いや、『仮面ライダーファイズ』は許す筈がない。

「俺も裕斗もお前も同じ人間だ」

裕斗を指差しながら、天城をしつかりと見据えたまま巧は彼の言葉を遮る。一方の天城は、巧の言葉を心底分らないといった表情で受け止めていた。

「違う、君達も僕も、人間じゃない。ただの化け物だ」

僅かに溢れた感情は怒り。その怒りの矛先は巧か、はたまたこの残酷な世界なのか。

向き合う天城と巧を他所に、裕斗もまた巧の言葉を凶りかねていた。種族としては自分と巧は悪魔に。そして眼前の青年はオルフェノクになる。そんな事を巧と分かりきっている。それなのに、なぜ巧は自分たちを人間と称したのか。

その答えを裕斗は、自分の記憶から見つけ出す。

「誰かを大切に想える気持ち。それがあれば、僕達は『化け物』にはならない。いや、なれない」

今の仲間、オカルト研究部や生徒会メンバー。クラスメイトや、松田や元浜や桐生と言った面々の顔が自然に頭に浮かべられた。それは今の木場裕斗を創ってくれた大切な人。

過去の仲間。今もういないけれど、それでも自分を確かに想っている大切な人。決して忘れ得ぬ人達だ。

裕斗の確たる答えを、巧もまた同様に見つけ出していた。オルフェノクの中にも他者を、人間を思い遣る事が出来た者達は確かに居た。人間の中にもオルフェノクを思い遣る事の出来た者は確かに居た。そこに壁なんて、種族なんてものは存在しない。

悪魔であろうと、オルフェノクであろうと、心そのものが変わらな

ければ、人で有り続けられる。

だから乾巧は、立ちほだかる。他者を、種族なんてものを超えた光を持った持つ者達を護りたいから。

「……………完敗ですね」

自分の言葉に全く屈しない二人を見て、天城は紫色の空を仰ぎ見る。

ーああ、なんでまつすぐなんだ。

一人は、自分と比肩する強さを他者を護るために振るおうと。

一人は、そんな彼と共に有りたくて並び立とうとしている。

どちらも自分にはない『強さ』を持った二人。

どこまでいっても、自分はある風な選択はできないだろう。

既に自分は選んでしまった。真っ直ぐ光の下を歩くような旅は出来ない。自分にあるのは、歪んだ闇の下を這い蹲る様な旅。

だからこそ、引き返しはしない。

「……………見せてください。その人間の力を」

「ああ。俺は戦う。『人間』として…………『ファイズ』として！」

居るべき世界が変わろうと。乾巧は、その決意を、覚悟を、曲げる事なく貫き続ける。新たな決意を静かに胸に秘めながら、その言葉を叫ぶ!!

『『S t a n d y i n g B y』』

「変身ツツ!!」

「変身」

『『C o m p l e t e』』

異世界の空間にて、赤と青の光が混ざり合った。

仮面ライダー。

この世界にて、そう呼ばれる戦士がいる事を巧は最近知った。そし

てそう呼ばれている戦士の中に、自分が含まれている事も。

巧に修行をつけたあの男——本郷猛こそが原点。

始まりのライダー、仮面ライダー1号である事を、修行中の際にアザゼルから伝えられた。

巧は、自分はそんな柄じゃない。と返したが、彼の胸には、本郷猛と同じ意思が秘められている。

大切な人を、笑顔を、自由を、愛を、そして夢を護る。

その為に悪と戦うその心そのものを、人はこう呼ぶ。

仮面ライダー、と。

「くっ！」

巧と天城。いや、ファイズとサイガの衝突を至近距離にいた裕斗は思わず苦しげな声を漏らす。

「らあああ!!」

ファイズの怒涛の連打。その全てを躲す、又は捌き続けるサイガ。時折サイガから放たれるカウンターを難なく避けるファイズ。互いに格闘センスは他を圧倒する物がある。

避けた筈のファイズのハイキック。その蹴りにより生じた風圧でサイガの身体は思わず後退する。その一瞬で、懐へ入り込む高速のステツプイン。

「おらあ!!」

上半身を捻って、下半身に踏ん張りを効かせたアッパーカットは、サイガの仮面の下、顎を捉える。

顎は人体急所の一つ。ボクシングといった格闘技においてもそこに来る一撃は注意しなければならない。

その一撃に、仮面の下巧は不満気、というよりも違和感を感じていた。

「はああ!!」

その不安は、全身を使った一撃の後だからこそ起こる一瞬の硬直を

突いたカウンターにより現実には。鋭いという表現ですら足りないほどの威力を秘めたサイガの横蹴りは、しっかりとファイズを捉える。サッカーボールを蹴ったようにファイズの体は飛んでいき、シヨツピングモールの柱に叩きつけられる。

「っ……」

ファイズは40メートルは蹴り飛ばされたと推測し、その威力はまだまだ全力でないと判断する。先ほどの一撃は自分の隙をついたカウンターであり、自分のペースで行われる攻撃ではない。

ファイズやデルタをも上回るスペックにより攻撃に、さらに警戒を強める。

「イツセー君、避けるんだ！」

不安そうな裕斗の声。即座に、自身に向けて追い討ちを掛けるべく間合いに入り込み、ハイキックのステップを踏むサイガがいた事に反応。

「おおおおお!!」

「なにっ!?!」

咄嗟に出た行動は防御ではなく突進。サイガも防御を取ると踏んでいたのか、自身に向かってくるファイズに攻撃のタイミングをずらされる。それでもなお放った攻撃はファイズの腹部へ。同時に前に出たファイズの拳はサイガの仮面を捉える。

両者、その場に留まる。互いの攻撃はその威力を半減された状態で繰り出された物であった為に。

「いつまでも、腹蹴ってんじゃねえ！」

ファイズが自身の腹部を突き刺すように駆り出されたサイガの足を掴み、振り上げる。当然サイガはバランスを崩すも、空中にて一回転。視界を地面から正面にいる筈のファイズを捉えるべく正面を変えが。

「……!?!」

そこには既に、ファイズの姿はない。サイガの、天城の巧にも劣らない戦闘経験の賜物か、即座に上空へ視界を向ける。そして捉えた。

ファイズの全力を込めて振りかぶった一撃が自身の胸を捉えるの

を。

「……くっ!!」

一瞬、呼吸器が停止して酸素の供給が止まる。視界が歪み、意識も飛びそうなる自分を叱咤し、反撃に移させる。

『Burst Mode』

サイガドライバーからサイガファンを取り出し、ファイズ同様に銃形態へ。そのまま銃口をファイズの胸部リーフルメタルラングに添える。

「!?」

その感触に気付き、距離を置こうとしたファイズの反応も虚しく。銃口からフォトンブラッドの光弾がゼロ距離でファイズの胸に被弾。

「くっっ!」

サイガは、ファイズ、カイザ、デルタといったライダーとは一線を越えたスペックを誇る。当然、その武装品も同様に。今の攻撃も並みのオルフェノクであれば既に灰に還していたであろう威力を持つ。

痛みの為に何メートルか後退したファイズ。対照的にサイガはダメージはあるもののまだまだ余力を残し、尚も余裕さえ見える。

「……くっつたれ。」

仮面の下で巧は舌を打つ。この感覚はかつての戦いでもあった。その代表例は、巧が戦ってきたオルフェノクの中では最強クラスのドラゴンオルフェノク――北崎。ドラゴンオルフェノクは、数いるオルフェノクの中でも最も硬い防御力と強い攻撃力を誇るオルフェノクだ。三原修二、かつてのデルタと共に戦った際も二人のライダーの攻撃は殆ど通用しなかった。

シンプルなスペックの差。それが何よりも硬い壁として巧の前に立ちふさがる。

「貴方ならまだ上げられる……」

天城の呟いた言葉が聞こえた途端、ファイズの前にサイガの拳が。胸部を捉える筈のそれを、両手で無理やり押さえつける形で受け止める。膠着状態にある二人だが、徐々にサイガの腕力でファイズの防御が崩れ始める。

「……マジ、かよっ！」

「……」

無言で、力を更に込めてくるサイガを前にファイズは最後の切り札を切るべく防御の手を敢えて緩める。その瞬間、均衡が破られてサイガの拳は放たれるものの、体を逸らしたファイズの前に失敗に終わる。

ファイズアクセルに取り付けられたミッションメモリーを抜き取るべく、指を添えた瞬間。二人のライダーの上に影が生まれた。

影の主、オートバジンは既にバスターホイールを構えており、その意図を察したファイズはそこから横っ飛びで距離を置く。バジンもまた、主人が射程範囲外にいる事を感じしてから、主人の敵に向けて容赦の無い弾丸の雨を浴びせる。

何秒間か続いた弾丸の雨は止み、更に続け様に地面から剣の華がサイガを襲う。地面から突然生えた剣はサイガを囲う檻のようであり、そのうちの何本かはサイガの体を捉える。

「お前ら……」

「ごめんイツセー君。でも、やっぱり僕はここで見てるだけなんて出来ない！」

ファイズの前に揺るぎない覚悟を持って立つ裕斗。その隣には世界を変えても自分と共に戦うものオートバジン。一人と一台の相棒を前に、巧も言葉が出てこない。こんな自分と共に戦おうとしてくれる仲間がいてくれることが嬉しくて堪らなかった。

「ああ、サンキューな」

巧は差し出された裕斗の手を取り、立ち上がる。二人と一台は改めてサイガと向かい合う。今度こそとファイズアクセルに指を添えた瞬間、サイガは変身を解除した。天城奏の肉体に戻り、周囲を見回し始める。その様子は巧には何かを危惧しているように見えた。

「時間切れですね。……また会いましょう」

ズボンのポケットから一枚の紙切れを取り出して、指でその紙切れの中央に触れると眩い光が。

「待てっ！」

「くそっ！」

ファイズと裕斗は、それが今日何度も見せられた魔法陣による転移と察知して、その場から駆け出す。裕斗の剣とファイズの拳が、天城に届く一歩手前で、天城の肉体を転送の光が包んだ。

天城が転送を終えた直後、サーゼクスの送り出した救援部隊が到着した。

巧と裕斗、オートバジンの保護という結末により、今回の異例だらけのレーティングゲームは終わった。

旧魔王派とオルフェノクによるレーティングゲーム襲撃、そして巧すらも知らないベルトとライダーの出現。これらの濃すぎるイベントを持ってオカルト研究部、そして生徒会役員の悪魔としての夏休みは一先ずの終わりを迎える。

巧はまだ知らない。今回の一件が、彼をさらなる混乱に巻き込むその一因である事に。

リアス達はまだ知らない。自分達が望まない形で巧の運命と向き合う事になるとは。

冥界への滞在最終日。

巧達は、行きと同様に列車により駒王町へ向かう。そんな彼らを見送る形で、グレモリー夫妻やグレイフィア、ミリキヤス、そして魔王でもあるサーゼクスが。魔王という立場を一旦忘れて、リアスの兄という立場で見送りたいからと護衛の者達も付けてはいなかった。

「それでは皆さん、お体に気をつけてお過ごしを。リアス、これからも手紙をおねがいね」

「ええ、分かりましたお母様」

リアスとベネエラナが母と娘らしい会話を交わす。その様子にグ

レモリー卿も満足げな笑顔を浮かべている。ふと、巧と目が合った。逸らすのも失礼だが、見続ける事も出来ない巧は明後日の方向に視線を。今更、巧の態度は分かっていたらしく、まるで捻くれた息子を持つ優しい父親のような笑顔で巧に声をかける。

「イツセー君。娘を、リアスをよろしく頼む。何かと迷惑をかける事もあるだろうが」

「……うっす」

周囲の皆が思わず苦笑してしまうほどの下手な敬語で、巧は小さく頷いた。

会話も深まる所だったが列車の出発時間が迫ってきた。車掌から乗車するように指示があり、巧達は電車に乗り込む。

一人一人電車に乗り、最後となった巧の背にサーゼクスの声が響く。

「君は一人じゃない。確かに、君が立ち向かう事になる敵は強大だ。それでも君には私達もいる。そして何よりもリアス達が君と共にいる」

言葉を切って、一瞬の間を開けてからサーゼクスはその名を呼んだ。

「だから負けないさ。『仮面ライダーファイズ』」

列車は高らかに汽笛を鳴らして冥界の空を駆け出した。

「皆！ 夏休みの間、本当にご苦労様！」

リアスの号令で各々が解散となった。とは言え、基本的な方向は大體同じの為に一緒に帰宅する事になる。駅のホームを出た途端、巧と

裕斗は集団で歩くオカルト研究部のメンバーよりも前に飛び出す。皆が警戒した先には、1人の人物が。

その人物は、夏だというのにロープを羽織り、顔は見えない。

「何の用だ……」

巧の声が牽制の為にぶつけられる。目の前の相手は一般人というにはあまりにも強い魔力を放っている。既にリアスは巧のバックからファイズドライバーを取り出し、準備は万端。

「悪いけど、君たちに用は無いよ」

その人物は顔を覆っていたロープを取り、その素顔を晒す。同時に巧と裕斗の間を縫って、『彼女』の元へ向かう。

「あなたは……ディオドラ!？」

リアスの声で、巧がロープの男がリアスと同世代の若手悪魔の一人だと思い出した。隣の裕斗は、ここにいる理由が分からないといった様子。

ロープの男ーディオドラは、『彼女』の前に立つと膝を地面につけてから手を差し出し、その名を愛おしそうに呼んだ。

「アーシア。……僕はかつて君に助けられた悪魔なんだ」

言うが早い。ディオドラは来ていた服を捲る。その下には痛々しい傷が体を走り、その深さを物語る。その傷を見て、癒した本人アーシアも該当する記憶を見つけたのか驚きの表情を。

「貴方が……あの時の?」

「ああ。何年も君を探していたんだ。……あの時、冥界で君を見つけた時に思ったんだ。これは、運命なんだと」

言葉と同時に、アーシアの手の甲にそつと唇を落とす。その行為にリアスやゼノヴィアはキスされた当人以上に怒りをぶつけそうになる。けれどそんな事が吹き飛ばす程の火薬を、ディオドラは爆発させた。

「僕と結婚して、妻になって欲しい」

一難去ってまた一難。

そんな言葉が似合う巧の二度目の高校生活は、夏の空の下で新しい局面を迎える事になる。

とある日付、とある時間。冥界にて。

「ああ。せっかくのファイズに勝つ所見れたと思ったのに」
「それはちよつと無理……かな」

1組の男女が、夜の闇が満ちた山の中にいた。

男は、黒と白の髪をした青年――天城奏。

女は、美しい黒髪をした美女――黒歌。

「ふくん。本当のこと言わないなんて、奏は性格悪いにやん」

「本当さ。彼は強い。油断なんてしてたら、こつちが負けてた」

巧との戦いの際には決して見せなかつた落ち着いた表情。場所が違えば、どこにでもいるカップルだ。

「君だって、彼を認めてるんでしょ？ だから、妹さんを彼と彼の仲間の元に居られるようにしてる。……違う？」

天城の指摘に、どこ吹く風と言わんばかりに口笛を吹き、答えを有耶無耶にする黒歌。こんな態度も慣れたものなのか。天城は苦笑を浮かべるものの楽しげな様子だ。

「ああー!! 黒歌お姉ちゃんと奏兄ちゃん、また一緒だ!!」

「ずるーい! 私も奏お兄ちゃんと一緒がいい!」

2人の間に、聞き慣れた幼い声。天城の仲間でもあり、家族とも言える存在のソラとハナ。自分に駆け寄ってくる2人をキチンと受け止めて、その頭を優しく撫でる。表情は僅かに動く程度だが、黒歌にはしっかりと伝わっていた。その喜びと、僅かな哀しみを。

「やつぱりファイズの事、気に入ってるでしょ」

「うん、そうだよ」

ハナやソラと同じタイミングで来た他の仲間達のどんちゃん騒ぎを、少し離れた場所で見守る2人。黒歌の太ももにはソラが。天城の

太ももにはハナが。

「今日、2人が一緒に居られるのは彼のお陰だ。彼は、僕なんかとは違う本物の英雄だ」

そんな英雄に殺されるのなら、それはそれで構わない。そう言いたげな天城の表情を、黒歌の爪が捻る。

「必死こいて、奏も生きるの。……いい？」

「分かった。かつこ悪くても、それが僕だからね」

改めて、天城奏は決意する。

目の前にいる大切な女性を。

紡いでいきたい未来を担う子供を。

自分を慕い、付いてきてくれる大切な仲間を。

どんなにかつこ悪くても、歪んでいても、正しくなくとも。護り通してみせる、と。

彼もまた心に『仮面ライダー』の心を宿す『人間』である事を目の前の笑う黒歌は分かっていた。

第六章 体育館裏のホーリー 新学期が始まる。

「誰か、誰か助けてっ!!」

夜の駒王町。

月が浮かぶその下で、夜の道を走り抜ける女性。なぜ彼女は走っていたのか。理由は簡単、自身の身を守る為。延いては、背後から追いかけてくる灰色の怪物、オルフェノクから逃れるために。

「ははあ……。逃げろ、逃げろ〜」

軽くリズムを刻みながら歩くのは、ネズミを彷彿とさせるイメージのラットオルフェノク。口元からは武器にもなりうる歯を生やす。そんなラットオルフェノクは実に楽しそうに、女性の命を狙う。

「あら、残念。靴壊れちゃったのか」

「……いい、いや!! 来ないで!」

少しずつ距離を縮め、女性とラットオルフェノクの距離が2メートルを切る。女性の足は既に何分間も走り続けた結果、履いていたヒールが壊れ、足も赤くなっていた。逃げようのない状況に女性は涙し、絶望する。そんな表情をもっと近くで味わいたいと更に距離を縮めようとラットオルフェノクは次の一步を……。

「ラインよっ!!」

踏み出した途端、背後から聞こえる若い声と共に腰の部分に何かは接着した。

「なにっ!?!」

触れてきた何かに、触る間も無くラットオルフェノクの体は地面に倒されてる。同時に腰の部分に繋がった何かは紐のような物である事に気付く。それを引きちぎろうと力を込めるが……。

「なんで取れないんだよ!?!」

いくら力を込めようとも一切切れない紐ーラインに、悪戦苦闘してるうちに襲おうとした女性の姿は消えていた。恐らくは今の隙に乗じて逃げ出したらしい。

今の自分にとっての最高の時間を邪魔されたラットオルフェノクはラインの延長線上にある複数の人影を捉えた。

「お前たち……殺す！」

複数の人影もラットオルフェノクの姿を捉えて、こちらに向かってくる。その数は三つ。

「木場、襲われてた人は椿先輩達が自宅まで護衛する事になった」

「了解。ならば後は私達の役目だな」

「ああ、そうだね」

現れた人影は制服を着た三人の高校生。

そのうち二人は男子。残る一人は女子。だが、各々一般の学生としては逸脱した何かを装備していた。

男子と女子は、闇の中でも仄かな光を纏う剣。もう一人の男子は片方の手首に機械のような物を取り付けていた。

「それじゃあ……行くよー！」

開幕の鐘を鳴らすかのように、剣を持った男子ー木場裕斗は、ラットオルフェノクにすら捉えきれない速度で突貫した。

「……っ！」

ファイズに変身完了した巧は、椿やソーナから連絡で裕斗達がオルフェノクと交戦していると連絡を受けた。ここに来る以前に、ラットオルフェノクとは別に人を襲うオルフェノクと交戦。その敵を倒してから向かっていた。

「終わり……だっ!!」

微かに聞こえる裕斗の声。

角を一つ曲がりバイクを止めた、その先で。

裕斗の聖魔剣がラットオルフェノクの体を貫き、その体を青い炎と共に消滅する瞬間。裕斗の近くで、ゼノヴィアと匙が座り込んでいた。

「お前ら」

変身を解除し、彼らに声をかける。皆、呼吸が乱れて怪我也見受けられたが致命傷は見受けられない。ひとまず安心はしているが、それよりも彼らの表情が巧には気掛かりに。

「なんとか、倒せたよ」

「三人がかりでやっとだけどね」

青い炎に包まれるラットオルフェノクを見つめながら、その横顔に少しの哀愁を帯びる裕斗。ゼノヴィアは軽く目を瞑り呟くように、祈りを捧ぐ。

「私は、神の名の下に多くの命を奪ってきたが……こんな感覚は初めてだ」

背中に何かが乗りかかるような感覚。ゼノヴィアは決して消えはしない罪を背負う事を始めて自覚してた。神の信徒として戦っていた時には気づかなかった重荷。

「それでも私も、木場も、匙も、皆も決めたからね。君と共に戦う事を」
カオス・ブリゲード
禍の団のオルフェノクの派閥による人間界制圧の宣言。その言葉を受け、巧のみならずリアス達も共に戦う事を改めて決意。こうして街に現れるオルフェノクと戦いに身を投じる事に。

そんな戦いの日々の中で、学生でもある彼らに新学期が始まろうとしていた。

「ようイッサー！ よくも夏休み中のメール無視してくれたな！」

夏休みを終えた学生にとっては特に憂鬱となる新学期初の登校日。その日が面倒なのは巧とて同じだ。

始業式を終えて教室に入ろうとした巧を迎えたのは、松田と元浜の二人。あまりの勢いに、廊下の窓に追いやられそうになるのを何とか堪える。

「色々あったんだよ」

悪魔として冥界に行っていました、なんて言える訳もなく適当な言い訳で話を終わらせようとするが二人は当然納得しない。

「知ってるぞ、お前が……アーシアちゃんやゼノヴィアちゃんといったうちのクラスの美少女をはじめとした、オカルト研究部の面々と夏休みに合宿という名の旅行をした事を！」

松田は血涙を流しながら、巧に詰め寄る。この迫力に巧も返す言葉も見つからない。ある意味でオルフェノクの相手をしてる方が幾分かマシかも、なんて事を考える巧に思わぬ助け舟が。

「あらあら、モテない男の嫉妬は醜いわよー」

「ああ!?!」

どこぞのヤンキーのような唸り声で、割り込んできた女子の声に反応。三人の先には、当然同じクラスの女子ー桐生愛華。メガネの位置を指で治しながら、松田と元浜を揶揄う言葉を更に繋げる。

「その非モテ男二人組に用は無いわ。ところで兵藤、ちよつと」

「どうした」

未だに唸るアホ二人を押し退ける形で巧は桐生に言葉を返す。無愛想で口下手な巧ではあるが、アーシアやゼノヴィアらと共に行動する彼女ともそれなりに会話を交わし、幾分かは柔らかい対応が取れていた。

「アーシアの様子が変なのよ、あんた何か知らない?」

「なんで俺に聞くんだよ。アイツに直接聞けばいいだろ」

幾分か対応が柔らかくなったとはいえ、基本的には以前と変わらない。そんな巧には女子の気持ちの繊細さは計りかねたのか。桐生が聞いてきた意味を否定する言葉を返す。

「私よりもアンタの方があの子のそばにいるからでしょ。それに、アーシアって悩みとか全部一人で溜め込んだじやいそうなタイプだし」
悩み、その単語で巧も心当たりが見つかる。

恐らくではあるが、この前のディアドラ・アスタロトによる唐突な求婚。それが彼女の悩みの種であるのも予想がつく。その事を桐生に言うのも憚られた。

「心当たりアリって顔してるわね。……はあ」

あつさりと看破されたものの、桐生もそれ以上を追求する様子はないらしい。溜息を吐きながら、先に向かう彼女は巧に呟いた。

「アーシアが困ってたら、助けてあげて」

声が聞こえた直後、担任の教師が教室に入ってきて、廊下にいた巧達に席に着くように促した。

「このクラスに、転校生が来る」

漸く皆が席に着いたタイミングで担任の教師は、驚きの発言を。突然の発表に皆が各々の反応を示す。その中で続けざまに新たな情報が皆に発信される。

「しかも、女子だ」

男子達のボルテージはマックスへ。当然、頭の中に美少女の転校生というありきたりな、されど王道なストーリーが。一人を除いて、騒ぐ男子達を冷めた目で見つめる女子。ただ一人の男子、巧はどうでも良さそうに教室の窓越しの空を眺めている。基本的に自分からは声をかけない巧からすれば、転校生などさしてテンションが上がることもない。それが例え美少女であったとしても。

「じゃあ、入ってきなさい」

教師の言葉に促され、転校生は教室のドアを開けた。

転校生が来た途端、巧の顔にも多少の驚きが。

現れたのは栗色の髪をツインテールで纏める見覚えのある少女。

名前は……。

「初めまして、紫藤イリナです」

男子達は想像以上の美少女の登場に歓喜し、彼女の正体を知る三人には驚きが駆け巡る。

そんな混沌とした空気の中で、一人の男子の名を呼んだ。

「同じクラスになれてよかったわ、イツセイ君」

その瞬間、ゼノヴィアとアーシアを除いたクラス全員の視線が巧に注がれた。いつか彼女を無視したしっぺ返しを喰らった気分だ。

そんな視線を無視して、巧は明後日の方向へ視線を向かわせた。

イリナの転入というイベントは、駒王学園の裏の部分にもかなりの影響を与えていた。

放課後、いつものように部室に顔を出した巧達だったが、そこにはオカルト研究部の面々があった。その他にも生徒会メンバーやアザゼル。そして今日の話題の中心人物、紫藤イリナの姿が。

「あつ、ゼノヴィア達も来たの！」

巧達を見て、笑顔を浮かべるイリナを前に巧は仏頂面がさらに深まる。その理由は、イリナのあの発言のせいで巧はクラスメート、果てには他クラスの男子から追われる羽目に。松田や元浜、木場や匙の協力もあり、難を逃れられた。けれども要らない面倒ごとを背負わされた気分。

同時に、彼女が自分に向ける好意的な視線も巧を困らせていた。兵藤夫妻に話を聞いたところ、紫藤イリナと兵藤一誠は幼い頃によく遊んでいたらしい。つまりは幼馴染という事になる。例え種族が異なったとしても、その時の記憶までは変わらない。そんな彼女の優しい視線を受けるべき兵藤一誠の体に自分がいるからこそそのジレンマが巧にはある。

「じゃあ、全員集合って事でいいな」

椅子に座っていたアザゼルが立ち上がり、皆の視線の集まりやすい所へ。同時にイリナについての説明も行うために、彼女を隣へ。

「じゃ、軽く自己紹介だ」

「はい！ 初めましての方も、お久しぶりの方も居ます。それとお世話になった人も。紫藤イリナですっ！ 大天使ミカエル様の使いとして、この学園にやってきました！」

巧は朱乃の注いでくれた熱すぎない紅茶を飲みながら、話に耳を傾けていた。どうやら天界サイドの応援という事で、ここに派遣されたらしい。同時に聖書の神の消滅も知らされていた。既にその事実を乗り越えここに居る、と繰り返していた。

話もそこそこの所で、アザゼルが確認の為か話に入った。

「紫藤イリナ。お前は天使化をしたのか」

「ええ。私はミカエル様のAへ」^{キース}

聞きなれない単語に戸惑う面々だが、その現象をイリナは変化をもつて示す。

一瞬、イリナから強い光が発せられる。次の瞬間には、イリナの頭に輪つかと背中から一對の白い翼が。

文字通り、紫藤イリナは人間から転生天使へ。

「天界は悪魔や堕天使の技術を応用して、転生天使を生み出す事に成功したらしい」

ニンマリと笑みを浮かべるアザゼル。その顔からは技術者として喜びや更なる探求への欲求もチラつく。

イリナの説明が入り、天使化の詳しい説明が始まる。

ミカエルを始めとした十名のセラフには御使プレイブ・セイントいと呼ばれる配下として転生天使が座する事に。その転生天使達はトランプになぞらえた配置で十二人。イリナはその一人、という事に。転生天使についての話かと思いきや、イリナは徐々にセラフについての話しをし始める。唐突に話が逸れ始めるイリナを見てアザゼルは、方向転換の為に更なる情報を伝える。

「まあ、その内お前らとのレーティング・ゲームもあるかも知れねえからその辺は楽しみにしとけよ」

「まさかそこまで話が進んでいるとは……」

「でも、負けるつもりもないでしょうっ？」

アザゼルの情報に、王の二人は既にやる気は満々。勿論、その眷属達も同様に。盛り上がる空気の中で、リアスは立ち上がる。

「それじゃあ、この話はここまで。後はイリナさんの歓迎会にしましょう」

皆が各々の会話を交わす。

裕斗と匙、そしてギヤスパーら男子組が何やら盛り上がっていたり、オカルト研究部の女子陣も生徒会メンバーらと混じって会話を楽しむ。

特に誰と会話をする事もしない巧ではあったが、進んで会話をする

気性ではない。ただ静かに紅茶を飲むという時間も嫌いではない。むしろ、心地よくすらあった。

そんな巧の隣にある椅子にイリナが座った。その光景に、リアスは軽く視線を送る。アザゼルの他に唯一巧の憑依事情を知る彼女は、巧がイリナへの対応に戸惑っている事に気づいていた。

「なんか用か」

「ううん。……本当に変わっちゃったね、イツセー君」

「……ッ。誰かと喋りたかったら、他を当たれ」

思わず漏れ出す罪悪感を堪えて、吐き出したいつも通り……いや、いつも以上に雑な言葉。そんな言葉を前にしても、イリナは特に気分を害した様子は見せない。

「本当は自分からミカエル様に志願したの。私を駒王学園に派遣して下さいって」

いつのまにか会話も静まり、みんながイリナを見ていた。それに気づきながらもイリナは調子を崩さずに言葉を続けた。

「謝りたかった。酷いことを言ったアーシアさんや、喧嘩別れしちゃったゼノヴィアに」

先程、謝罪をしたゼノヴィアとアーシアに対しては申し訳なさは消えない。自分の言った事は、そんな事で帳消しにはならない。自分の向き合ってこなかった事実。神の名の下に、このセリフと共に、多くの悪魔を滅してきた。その命の重さなど気づこうともしてなかった。例え悪に身を堕としても、命を摘み取った事変わらない。それを気づかせてくれたのは、記憶喪失の幼馴染だ。

「一緒に戦いたかった、イツセー君と。この街を、大切な思い出のあるこの街を守りたいの。『人間』として、『天使』として」

その瞳には揺るぎない信念があった。先程までのハツラツな彼女からは想像もつかないほどに、戦士の顔をしていた。

「敵は、これまでとは違うかも知れないけど……」

言い切った所で、イリナは漸く自分が見られていた事に気づいた。途端に顔を赤くして照れ隠しの言葉を繋げる。

「まだ俺たちは頼りないけれど、お前と一緒に戦う、その気持ちは皆同

じだと思う」

いつのまにか巧の隣にいた匙が宣言するように眩く。

その瞳には先程のイリナと同じ光が宿る。

「何でもかんでも一人で背負い込む必要ないぜ、兵藤」

「背負ってねえよ」

掛けられた優しい言葉を、巧はいつもの口調で返す。巧は、そんな言葉をかけてくれる仲間の存在に嬉しさを感じる。けれどそれ以上にこの仲間達を巻き込みたくないという感情が上回る。

その迷いが、巧を逡巡させ続けていた。

夜、兵藤家にて真司と涼子が寝静まったことを確認した巧は外にいた。今日はオカルト研究部と生徒会メンバーの女性陣にイリナを加えた面々でソーナの家に泊まりに行っていた。

そんな日にアザゼルからの連絡で駒王町から離れた町にて複数のオルフェノクの出現が知らされる。

後は魔法陣による転移で現地に向かうのみ。

「そりゃってまた一人で行くのかよ」

バジンに跨る巧に声を掛けたのは、匙だった。

その両隣には裕斗とギヤスパーが立っていて、ここにいる理由も巧には容易に想像がつく。

「お前らなんで」

「部長に頼まれてね。今日、イツセー君の様子がおかしいから見ていて欲しいって」

どうやらあの泊まりという話は、自分を行動させやすくするための物だったらしい。一枚噛まされた、と心中で舌を打つ。

「どうして僕たちを頼ってくれないんですか？」

「俺の責任だからだ」

巧のその言葉の意味を裕斗達は知っていた。

サイガー―天城との戦いの後から、各地でオルフェノクの出現頻度

が高まっていた。同時にその強さも。特にそれが高いのがこの駒王町。

今は巧や裕斗達の他にも、アザゼルらが選抜した対策メンバーもオルフェノクの討伐に動いている。この行動の変化はオルフェノク派が人間界制圧に本格的に乗り出した事を意味している。

加速させたのは自分と考えている巧は、加速による敵を出来るだけ自分が倒したいと考えていた。

「違う」

顔を俯かせる巧を前に匙はしつかりと否定した。

「俺には妹と弟がいる。両親は事故で……もう居ない。俺しか、居ないんだ。あいつらが大人になるまでこの街で育つていくのを守るのは。だから、俺が守る。お前にだけ戦わせる訳にはいかないんだよ」匙の言葉と目に宿る想いに、巧は負けてしまった。

溜息を一つこぼしてから、彼等へ軽く分かった、とだけ呟いた。そのままバジンに跨り、アザゼルからもらった転移用の魔法陣が描かれた紙を取り出す。そこは魔力を流し込み、四人は光に包まれた。

「部長にはうまく伝えておいたよ」

「こつちもな」

転移されたのは駒王町から離れた町の外れ。木々が生い茂る山の中。裕斗と匙が其々、主人への報告を完了したのを確認。緊張しているギヤスパアの頭を軽く撫でて、四人はオルフェノクの出現地へ急行する。

「……か……!?!」

木々が生い茂るエリアを抜けて、現れたのは公園や広場の様な開けた空間。その中には既に戦闘状態にある事を示す墮天使達の姿が。

墮天使達が囲うのは、ローブを着た人影。巧はバジンで、他の三人は悪魔の羽を広げた滑空で墮天使達の元へ。

「無事か!」

「ああ。すまんファイズ、俺たちじゃ太刀打ちできなかつた」

何度か共にオルフェノクと戦った墮天使の男性。アザゼルが巧のサポートメンバーとして選んだ一人。その彼にここまで言わせるとは。改めて、目の前の相手への警戒を高める。

「だが、アイツは俺たちに攻撃はしたが、仕留めには来なかつたんだ」
「ええ。目的は貴方です。……兵藤一誠」

墮天使の言葉にかぶせる様に言葉が続けた人影はローブを外した。露わになった素顔は――女性。

巧はその素顔を見た瞬間に仲間の一人、アシアをその女性に重ねた。どこか彼女に似た雰囲気を感じている。

「なら、来いよ。相手してやる」

彼女から放たれる覇気は、巧に女性である事を忘れさせる。一瞬、墮天使達に視線を向ける。確かに負傷した者はいるが、致命傷に至った者はいない。

つまり、本当に彼女は自分が目的。ならば――

『Standying By』

「変身！」

『Complete』

即座に変身し、巧の体がファイズへ。同時に裕斗も剣を構え、匙も神器を顕現させ、ギヤスパも眼の力を高める。

いつも通りの右手のスナップ音が夜の山に響く。

「行きます」

構えるファイズ達を見て、女性は一瞬笑顔を浮かべてから、その体をビートルオルフェノクへと変えた。

ビートルオルフェノクの突進を、正面から受け止めたファイズはその力に後方に吹き飛ばされそうになるのを堪える。ゼロ距離から腹部に向けてボディブローを間を空ける事なく三発叩き込む。ビートルオルフェノクは思わず膝をつきそうになる。

「……?！」

怯むビートルオルフェノクへ追撃の一撃を浴びせようとするファ

イズの姿勢がいきなり崩される。敢えて膝をついたビートルオルフェノクは、カブトムシが他のオスとの戦う際に用いるシンプルな投げ技をファイズへ。思わぬ反撃に吹き飛ばされるファイズとすれ違いう形で裕斗が接近。間合いに入った瞬間に、聖魔剣の一撃を振り下ろす。

「次は私の番です」

振り下ろされた聖魔剣が体を捉える寸前で前に出る事で、裕斗の腕を掴むことに成功。悠斗の一撃を無効化した。

ならば、と地面から複数の剣を創造しその矛先をビートルオルフェノクへ。至近距離からの一撃を正面から受ける事に。

しかし一撃を与えるはずの裕斗の剣は、ビートルオルフェノクの体に傷一つ付けることは叶わなかった。刃こぼれこそしなかったが、裕斗の創造した剣は役目を終えて、地面に突き刺さるだけ。そんな裕斗へ接近するビートルオルフェノクを匙のラインが拘束。

「下がれ、木場！ ギヤスパークくん、今だ！」

匙のラインがピンク色に光る。そこから何かが吸収される。

匙の神器――黒い龍脈は、相手の力を吸収する事も可能で、それはオルフェノクとて例外ではない。

匙の視線の先にいたギヤスパークも匙の作り出したチャンスを更に確実な者にする為に、ビートルオルフェノクへ視線と意識を集中させる。

「……………行けっ!!」

小さく漏れた自分を鼓舞する言葉と共に、ギヤスパークの眼の力が解放される。その標的、ビートルオルフェノクの時間は止まる。

この瞬間に、彼が立ち上がって駆け出した。

『Ready』

『Exceed Charge』

ファイズの右手に握られたパンチングユニット、ファイズショットへフォトンブラッドが集約される。

「やああ!!」

ファイズ必殺の拳――グランインパクトが、ビートルオルフェノク

へ届く一瞬前に、その体を拘束した匙とギヤスパアの力を押しつけた。グランインパクトは空を切り、攻撃は失敗に終わる。途端に、ファイズの腹部へ強烈な一撃が。

「イツセーくん！」

堪らず駆け寄る裕斗にむけて掌から魔力弾を形成し、射出する。その一撃を聖魔剣の切っ先で逸らして、難を逃れた裕斗。

ファイズも裕斗が難を逃れたのを確認し、カウンターの裏拳を叩き込むがまたもや空を切った。

「こ、これってまさか……悪魔イーヴィル・ピースの駒の力なんじゃ」

「それってまさか……コイツは」

「転生悪魔って事だろうね」

先程からの超速回避、魔力の使用、耐久性や腕力の向上。普通のオルフェノクにしては能力値が上昇しすぎてる事を考えれば不思議ではない。

そして何より、巧の頭を過去の記憶が通り過ぎていく。

かつて巧が倒したはぐれ悪魔のバイザー。あの時も悪魔であるバイザーはオルフェノクへと変化した。つまり、悪魔がオルフェノクになりうる可能性もあり、目の前の女性が悪魔であったとしても不思議ではない。

「下がれ！」

ファイズへと突貫するビートルオルフェノクを察知し、木場や匙へ後方に下がる様に指示。二人が指示通りに後方に下がるのを確認したところでファイズは前へ駆け出す。

全体重を乗せて振りかぶったビートルオルフェノクの胸部へ叩き込む。流石の耐久力を持つビートルオルフェノクもこれには堪える。肩を掴まれたままボディブローを三発、連打の最後に顎へのアッパーカットを繰り出す。

一旦後方に下がるファイズと切り替わる形で、裕斗と匙が前に。

「なにっ!？」

迎撃に備えようとするビートルオルフェノクの視界を黒いコウモリたちが遮り、同時に力が抜けていく。

ギヤスパアの吸血の効果は確かで、匙の吸収した力による魔力弾、裕斗の剣戟を避ける事も出来ぬまま受け続ける。

ビートルオルフェノクは元々持つ耐久性に加えて、主人に与えられた女王の悪魔の駒イザイル・ピースによるプロモーションも可能としている。

女王の駒の効果で戦車、騎士、僧侶の特性を高めているが、同時にその硬さを超える程の力が打ち込まれ続けている。

「これで……っ！」

「終わりだっ!!」

裕斗と匙の最後の連打による一撃。匙の拳が腹部を捉え、重い一撃の前に後方に下がるビートルオルフェノクを下から掬い上げる形で一閃。軽く火花を散らし、防御力の低下を物語る。

「まだ倒れないんですか!?!」

裕斗と匙の連撃をもつてしても倒れないビートルオルフェノクの前に、ギヤスパアは驚愕に包まれる。

「私は……で……!!」

その言葉と共に、ビートルオルフェノクの背中から悪魔の羽とカブトムシとしての羽が出現。

その先を読んだファイズが裕斗と匙を飛び越す形で迫るも、一撃を打ち込む事はできなかった。

「速いっ！」

「裕斗先輩！」

二対の羽を持って、加速と滑空の二つを同時に行うビートルオルフェノク。そこに騎士の特性も相まった速度はファイズを上回る。その速度を持ってビートルオルフェノクは、裕斗の前に躍り出る。

先程ファイズとから貰った一撃同様に振りかぶった拳を、下ろそうとするものの裕斗は余裕を崩さない。

一瞬、不安に包まれる。されどそれを見せずに、その一撃を裕斗に放つものの、難なく躲される。

次いで間を開けずに放った蹴りも肘打ちも裕斗は難なく躲し続けた。

「確かに貴方は強い……！ けれど、そこには巧さはない！」

確かに、数字だけのスペックを言うならばビートルオルフェノクは裕斗では太刀打ちできない。けれど、その力を扱う本人が付いてこれていない。加えて、この戦闘が始まってからはファイズの後ろでその動きを見ていた裕斗からすれば、その動きを見極めるのは簡単な事だった。

後は速度に警戒をしつつ躲し続ければ……！

「……！」

「今だ！ イッセーくん！」

裕斗への更なる一撃を打ち込まんと振り上げた拳を、再び匙のライオンが捉える。加えて、ギヤスパアの眼の力で拘束。最後にファイズに視線を向かわせると。

『Exceed Charge』

二度目のグランインパクトは、ビートルオルフェノクへ間違いない直撃した。

「良かった……私は、敗けたんですね」

ビートルオルフェノクだった少女は、既にオルフェノクとしての姿を保てずに地面に横たわる。体は少しずつ青い炎と共に燃えていく事に嬉しきすら感じている様に見える。

「兵藤一誠……貴方に感謝します」

「お前、どうして」

消えゆく彼女は無表情だったその顔を、満面の笑みへ変える。巧も、そして裕斗達も気づく。彼女は自分達に倒されたがっていた。と。「私はもう主を信じれる身でも悪魔でも人間でもなくなってしまう。……本当の意味で、獣になるのを止めてくれてありがとうございます」

「君の主は一体……」

「それは言えません。貴方達では……」

裕斗による最後の質問に答える事はなく、少女は穏やかな表情で青

い炎と共に散っていった。

「くそっ！」

匙は、悔しそうに拳を地面に叩きつけた。

目の前で散った少女が、恐らくは何者かにより動かされていたのに気付かなかったから。

ギヤスパーもまた、彼女の最期の笑顔の意味を飲み込んでいたがやはり複雑な表情だ。

「あの人って……やっぱり」

「ああ、恐らくは主人により、無理矢理動かされていたって事だと思っよ」

この二人よりは、幾分か冷静な裕斗が今の状況から導ける答えを呟く。彼女の主人が誰か分かれば話は進むが、流石に裕斗とて眷属の顔を見ただけでその主人が分かるわけでない。

一旦、この話をアザゼルに持ち帰るべく巧に声をかけようと振り返る。

「アンタの分も、俺は背負う」

裕斗の視線の先にいた巧は、少女のいた場所に立っていた。

少女だった灰を握りしめる巧は散っていった少女に誓いを立てる。

「だから、見ててくれ」

恐らくあの少女は、人工的にオルフェノクにされた可能性が高い。

かつてのスマートブレインも、巧の仲間——真里、草加、三原、達を殺害し、その体にオルフェノクの記号を打ち込むと実験を行なった。その中でただ一人の成功例が澤田亜希。

彼もまたオルフェノクという種族に運命を翻弄された被害者だった。

この世界でそんな事が可能なのは、カオス・ブリーゲードの団、そしてその中に潜む影山冴子率いるオルフェノク派閥。

「あの連中は、俺が倒す」

掌に灰を握りしめたままの巧は、小さくも力強い宣言を仲間達の前

で眩く。裕斗達三人も、その姿一瞬だけ気圧される。巧から放たれる強い意志や覇気に、圧倒されたのである。けれど、彼の言葉を否定するものはそこに一人も居なかった。

体育祭に向けて

ビートルオルフェノクとの戦闘から数日。

持ち前の元気さとコミュ力を以って、イリナは既にクラスに馴染んでいた。ある意味、巧よりもクラスに馴染んでいる彼女は、今日も元気。今は二学期始めに行われる体育祭の種目決めの日。担任の教師も特に指示をする事はないが、代わりに学級委員長が取り仕切る。赤組となった巧のクラス。クラス内で決めた数人がその競技の赤組代表メンバーの一員として点数を競う。一度目の高校生活と同じ形式の体育祭ということもあつてか巧の熱は極めて低い。

「はい！ 私、借り物レースに参加したいです！」

そんな巧と対照的なのは、栗色のツインテール少女イリナ。

近くの席で、何に出場するかを決めているアシアとゼノヴィア。二人もイリナ程ではないが、体育祭というイベントへの熱はある模様。それは他のクラスメイトとて同じだ。

ーまあ、残ったのに出ればいいだろ

そんな気持ちで続々と決まる種目を眺めていると、不意に巧への視線が向けられた。

こちらを見ているのは、黒板に種目に出場する生徒の名を書き込む桐生愛華。その他にも、なぜか怒りの形相を浮かべる松田と元浜。

意味が分からないと首を傾げそうになる巧に、桐生は横を見るように指差した。釣られる形で横を見ると、頬を赤く染めたアシアが手を挙げていた。他には男子生徒が何名か。黒板を見ると、アシア達が出場したいと手を挙げたのは『二人三脚』

どうやら、彼等はアシアの相手に巧を浴えようとしている。そんな思惑など知らず、巧は一応挙げた手を下げようとしていた。

元々の競技に出たい訳ではない。あぶれた競技をやればいいのかというスタンスなので他にやりたい人がいる競技に参加するつもりもない。

巧なりの気遣いから、手を下げようとする彼を睨むのは桐生、ゼノヴィア、イリナら。

「アーシアは、初めての体育祭なのよね」

「は、はい。こういう事は今までやった事がないので」

アーシアの過去を悪魔や教会関係の事を誤魔化した上で知ってる桐生はほぼ自動的にアーシアを二人三脚の代表の一人へ。無論、巧を除いた男子達もそれに異論はない。むしろ、それが目的だ。

アーシアの人気は、学年を問わずに高い。このクラスにはゼノヴィアやイリナといった人気のある生徒がいるが男子への人気ではアーシアが一位だろう。

そんなアーシアと競技を通じて仲良しになりたい男子は少なからずいる。そんな彼等の共通のライバルは兵藤一誠——乾巧だ。

「なら、あとのパートナー役は」

手を挙げた男子達へ女子生徒らの冷たい視線が刺さる。

まあ、要するに空気を読めやお前ら。という訳だ。

アーシアが巧を慕っているのは、ある程度二人を見ていれば分かる事。アーシアは基本的に誰に対しても分け隔てない態度を取るが、巧へのそれは見れば分かるほどに違う。距離感などもクラスの男子とは比較にならないほどに近い、といった形で。

問題はその相手——巧にあった。基本的に恋愛事に関しては戦闘中に見せる機敏さや洞察力は全く感じさせない。そんな朴念仁を振り向かせようと必死になるアーシアの背中を押してあげたくなるのは、もはや自然な事だった。

「兵藤ね」

巧は自分が指定された事に驚き、先程まで手を挙げていた男子達が手を涙ながらに下ろしていた事に気付いた。

聞くのも憚られた巧はクラスの面々により、アーシアとの二人三脚による体育祭の出場が決定した。

「いち、に、さん、しゅー」

「いち、に、さん、し」

可愛らしいアーシアの声の後に巧の実に気怠そうな声が続く。巧

達は今、体育祭本番に向けて二人三脚の練習をしていた。

実を言うと、巧はこの競技の相手がアーシアで良かったと思っていた。個人種目ならいざ知らず、団体競技への参加となると、リレーなどを除いてはどうしても団結力が必要になる時もある。その時に、自分が居ると水を差しかねないと考えたからだ。

「イツセイさん、私もう少しなら速くできますよ」
「そうか」

共に競技を行う相手が、気の知れた仲間ならば巧も幾分かは楽になる。常時、いつもの仲間を除いては松田や元浜や桐生意外とはほとんど会話をしない。そんな自分といきなり組まされる相手も大変になると、変な気を遣っていた部分もある。

「じゃ、行くぞ」

アーシアに合わせていた足の速度を、巧は少しだけ上げた。すると必然的にアーシアは巧に合わせる形となり、元々近い二人の距離がさらに縮まる。自然な形で縮まる距離。巧は頬を赤く染めるアーシアには気付かずにグラウンドを走っていく。

その日の放課後。巧達ー巧、アーシア、ゼノヴィア、イリナはどういう訳かアザゼルに呼ばれた生徒会メンバーの一人、匙と共に部室へ向かった。

部室に入ると、既に巧達を除いたメンバーが集合しており、自分達が最後と気づく。巧達の入室を察知していたアザゼルは立ち上がり、全員の顔が見える位置へ。

「お前らに報告しておく事がある。今後の若手悪魔同士のレーティング・ゲームについてだ」

途端に、皆の顔が厳しい物へ。皆、襲撃時の事を思い出していたのだろう。そんな皆を落ち着かせる為にアザゼルは話を進める。

「まあ、分かっているとは思いますが暫くの間、若手悪魔同士のレーティング・ゲームは中止になった。勿論、その間にプロのゲームは問題なく行われるがな」

アザゼルの発表にリアスとソーナは納得した表情。他の皆も異論はない様子。特にリアスはまた同じ事が起きた時、誰がその対処をさせられるのが容易に想像できていたから。

「それで、中止期間というのはどれくらいになるのですか？」

「具体的な時期が定まらないってのが上層部の本音だ」

「では、貴方の本音は？」

ソーナの追求に思わず溜息を吐くアザゼル。どうやら、上層部が隠したい本当の部分を知っているらしい。

「内通者が捕まるまで、だ」

内通者、レーティング・ゲームの運営する者達を襲撃させて一時的にゲーム空間をテロリスト達に支配させる事に助力した者の存在。その存在にソーナは襲撃時の時点で気付いていた。

それも内通者がそれなりの身分を持ち合わせている事も。

「やはり、そうなのね。内通者はテロリストと通じてる、と捉えるべきかしら」

「ああ。それもそれなりに冥界に根付いた奴がな」

リアスの推測にアザゼルが言葉を足して、より現実味のある話に。自分達の敵が、自分達の身内の中にいる事になる。より一層の警戒が必要になってくる、とアザゼルが締めくくり、その話は終わりを迎えた。

話が変わり、体育祭に向けての話が行われる中で、巧の元に裕斗が近寄る。

二人にのみ聞こえる声で、裕斗は呟く。

「僕は、この前の人の主が内通者だと思ってるんだ」

先日、巧達が斃したビートルオルフェノクだった少女。元々悪魔だったであろう彼女がオルフェノクに自然に変異するとは考えづらい。けれど、アザゼル達の言う内通者が、あの少女の主人ならば辻褃は合う。テロリスト、延いては影山冴子らと繋がっている事にもなるからだ。

「ああ……俺もだ」

巧のその目には、まだ見ぬ内通者への確かな怒りが灯っていた。

翌日の朝、巧はいつかのようになりアスに叩き起こされ、学園のグラウンドに居た。そこにはまだ眠気が残る巧と脚を二人三脚用の紐で繋がっているアーシア。他にはリアスと朱乃の二人が。

二人はスターター役とストップウォッチを切る役を担うらしい。

「それじゃ……スターター！」

パンツ！ と脚を合わせながら徐々に速度を上げる巧とアーシア。本的な速度はアーシアに任せ、巧がそれに合わせると言う作戦だ。仮に巧に任せるとアーシアが付いてこれなくなり、二人三脚という形は成立しえないからだ。

アーシアの基本的な身体能力は、悪魔に転生した事もあり平均的なだ男子高校生のそれと然程変わらない物へと上昇。

その変化により、二人の速度はかなりの早さでゴールへ到達した。

「この速さなら問題はないわね」

「ええ、息もぴったりでした」

二人の褒め言葉に照れるアーシアとは違い、巧は特に反応を示すことは無い。女子三人はそれに何か言うわけでは無いが、変な間が生まれる。

「そ、それじゃあ、あと何本かやりましょう！」

リアスの提案にはい！ と力強く返答するアーシアと共に巧もスタートの位置へ。

走る際とは異なり、ゆっくりと進む二人にリアスは溜息をこぼす。そんなリアスの心情を把握している朱乃も苦笑を浮かべる。

「アーシアちゃんの事ですか？」

「ええ。あの時アーシアが断ったにも関わらず、ディアドラから何度もアプローチの手紙や品物が送られてきてね。イツセーは何も知らないし、アーシアには殆ど渡してないから」

毎回から駒王町に帰った際でのディアドラのプロポーズ。あの時、アーシアは驚いてはいたものの、巧の顔を二、三度見てから断りの返答を返した。

恐らくは巧に助け舟を出したつもりなのだろうが、当然巧がそんな事をするわけもなかった。

どちらにせよ、断つたはずのアーシアの元には頻繁に冥界からの贈り物が届いている。最初の内はアーシアにも知らせていたが、その回数や頻度に女性として危険を感じ、本人には知らせない事にした。

「そうですね。アーシアちゃんもそうですが、イツセー君には」

なぜ知らせないのか、という質問を朱乃は途中で飲み込んだ。リアスや朱乃から巧に言えば、なんとか動くことはあるかもしれないが、相手が相手なだけに、巧の立場を悪くする可能性もある。今の巧は、冥界でも名前が知られていると同時に、一部の冥界メデイアー上層部の年齢の高い悪魔らーからは非難の声も出ている事を、リアスはアザゼルから聞かされていた。

「それに今回の相手なら、私が表立って相手にした方が都合がいいわ」
「分かりました。では、私も『女王』として全力のサポートをさせていただきますわ」

三年生二人は、もう一度走り出そうとする後輩の男女が共に居られる時間を守るために動き出す事になる。

「へえ、イツセー君とアーシアさんで二人三脚か」

「まあな。で、お前は」

「僕は学年対抗のリレーに。確かゼノヴィアも出場するって聞いたけど」

放課後、同じクラスの面々や偶々廊下で合流した裕斗らと共に部室に向かう最中。裕斗と巧は体育祭の話となり、今朝起こされた話をしていたところだった。

二人の前を女子三人組が歩き、三人の会話を他所に男子は男子で会話を続けていた。

「ああ、そう言われればな」

悠人の言葉でゼノヴィアがクラスの女子に頼まれて、リレーのクラス代表の一人になった事を思い出した。

因みに巧は、アーシアとの二人三脚が無ければ、リレーに強制的に参加だった、と桐生に言われた。

それはそれで気が楽だったが、二人三脚も相手がアーシアだった事もあり、悪く無いと素直に思えるようになっていた。

自然と柔らかくなる表情は、普段の仏頂面もあって、何倍も魅力的な物に映る。隣を歩く裕斗は、この顔をリアスや朱乃やアーシアにも見せてあげればいいのに、なんて感想が出てくる。

下駄箱で靴を履き替えて、旧校舎は向かう五人。

その中で、裕斗と巧だけが違和感を察知。

旧校舎のある方向に感じたことのない魔力と、感じたことのある魔力の増大が。

その一つはリアスの物だった。

「まさか」

即座に裕斗と巧が旧校舎へ駆け出す。

それを見た女子三人も二人を追う形になる。

獣の如き反射神経を誇る巧と仲間内では最速を誇る裕斗は、ものの数秒で旧校舎前に到着。

ここで二人は一息つけた。

この中で、何か危険な事が行われていないとかを把握できたからだ。

一瞬、敵ーそれもオルフェノクによる物を想定した二人。特に巧は、ファイズである自分やその周囲の者たちは襲われる可能性が高いと考えていた為に、その反応も大きかった。

「どうしたの二人とも！」

「急に飛び出して」

イリナとゼノヴィアの指摘に、裕斗が敵かと思ったと素直に答える。

「イツセイさん、大丈夫ですか？」

「問題ねえよ。……気にすんな」

戦闘は無い筈なのに、嫌な予感が拭いきれない巧を見上げる形でアーシアが問う。漠然とした不安のために、下手に煽る様な事も言え

なかった。アーシアから見れば、丸わかりの誤魔化しの言葉を使う。

巧が先頭に立って、旧校舎に入り、部室へ向かう。

部室の扉の前に立って、深呼吸をしてから扉を開ける。

その先には巧の嫌な予感が的中する出来事だ。

「……アーシア、よく来てくれたね」

巧たち、というよりもアーシアを歓迎する様に立ち上がってから歩み寄る美少年。

その美少年からは、どこか執着心にも似た何かを纏った視線がアーシアに注がれる。

「ディアドラ、話は終わってないし……何より、アーシアに近づくのは辞めなさい」

美少年、ディアドラの動きを止めるべく、いつもよりも怒気を含ませた低いリアスの声が部室に響いた。

いつも優しい落ち着いたリアスとは異なる態度や言動に唾を飲む、イリナとゼノヴィア。

部屋の温度がいつもより低く感じた巧の手を、そつと掴む小さな手。

手の持ち主、アーシアはいつかとは違い、不安で折れそうになる自分を奮い立たせるべく、巧の手を掴んでいた。

「イツセーさん、私に勇気をください」

巧にのみ聞こえた声。その手から少しの震えを感じる巧は、アーシアの手を離すことはしなかった。

繋がれた二人の手を、ディオドラは細めていた目を軽く開き、捉えていた。

そして、巧に確かな怒りと嫌悪の視線を向けていた。

疫病神

私は目の前の状況を、まるで空から俯瞰して眺めていた。
この違和感に私は気づく。

ー夢、ね。これは

夢ということに気付いても、目の前の状況から目を逸らさない。
百、千という数では聞かない程の兵隊、まるでファイズに似たベルトや装甲を纏う戦士たちがたった二人を囲っていた。

一人は、見たことない女の子。顔立ちからして私たちとそこまで離れた年齢では無いと思う。

もう一人は、今の私や仲間たちならとても信頼できる戦士、ファイズ。その立ち姿や佇まいが今の巧さんに、私には重なって見えた。

やがて兵隊たちは痺れを切らしたかのように、一斉に二人にというよりはファイズに向かって突進した。

あまりにも差がある戦力。夢の中であるというのに加勢したくなるがやはり何も出来ない。

何も出来ないまま、ファイズの孤独な戦いを見守ることしか出来なかった。

ファイズは一人であるというのに、無数の兵隊に立ち向かい続けた。それでも相手は、その力を超えるほどの『数の暴力』をファイズに、巧さんに振るう。

「……………!!?」

バイクを巧みに操る兵隊達が持っていた銃の様なものから光弾を放つ。何回も続いた光弾の雨は、ファイズを何度も捉えた。

続けざまに振り続ける光弾の前にファイズの体からベルトが外される。

赤い光がファイズの体から消えて、私や朱乃よりも少し年上の青年の姿へ。男性にしては長い茶髪、裕斗とは違ったタイプの、けれど整った顔立ち。見たことはないけれど、彼が乾巧。私の知るイツセーではない、本当の彼。

「ああ!!!」

「巧っ！」

変身を解除された巧さん。次の瞬間、巧さんの肩の辺りをバイクが通り過ぎる。痛みを堪えきれず唸る様な声が出る。そんな巧さんを見て思わず叫んだ女の子。彼女は敵から逃れるために荒野の様な場所、泥まみれになりながらも逃げていた。

「真里……！」

体にある痛みを堪えながら、地面を這って巧さんは女の子――真里さんの元へ。

「巧……」

真里さんもまた、巧さんの元へゆつくりと、同じく這う様にして近づいていく。

やがて二人の伸ばした手が、繋がった。

互いの存在を確かめ合う様に、確かに繋がれたその手。二人は何があっても離れない様に繋がれたその手を見つめていた。

そんな時間は長くは続かない。

兵隊の一人が、巧さんの元へ向かい、その足を鎖の様なもので巻きつける。

咄嗟の事で抵抗も出来ない。加えて、先程の戦闘による疲労もあってか巧さんは呆気なく拘束される。

ここでも私は何も出来ない。自分の力を、二人を守るために使えない。

「巧!!」

巧さんを拘束した兵隊達は乗っていたバイクをそのまま発進させて、真里さんの視界から外れる様な形で、消えていった。

「……たく、み……」

ただ一人、そこに残された真里さんは巧さんの名前を呟く。

そんな光景を見ている私の意識が、徐々にクリアになっていく。

ああ……目が、覚める。

「リアス、どうかしたの？」

「ええ、少し嫌な夢を見て」

巧さんの奇妙な夢を見た日の放課後、私は嫌な予感ばかりしていた。最近巧さんの事で騒がれる事、ディオドラからアーシアへの突然の求婚。それらの矛先が全て、巧さんに向かうのでは。という荒唐無稽な私の予感。

「どんな夢だったの？」

紅茶を淹れるカップを机に置いて、私と向き合う位置に移動した朱乃。彼女の気遣いに感謝して、私はこの気持ちを吐き出すことにした。

「イツセーが負けてしまう夢。相手は前に裕斗とゼノヴィアからの報告にもあった、ファイズやデルタに似た兵隊達。夢の中なのに、私はあの子を助けることすら出来なかった。……それが、怖くて」

思ってもない私の思いに、流星に朱乃もすぐに言葉を返すことはない。けれど、その顔は私とは違い不安を感じさせない。

「確かにそんな風になってしまうのは怖いわ。だから、私達も彼と一緒に強くなる。少なくとも今はこの気持ちがあればいいんじゃないかしら」

「そう、ね。それしかないわね」

掛けられた言葉をゆっくりと飲み込んで、私は朱乃の淹れてくれた紅茶を飲む。

他のみんなが来るのを待っていた時、一つの魔法陣が部屋に展開される。その紋章が私や朱乃は誰を示すのか、即座に分かってしまった。

「……やあ、リアスさん。アーシアに会いに来ました」

「ディオドラ」

現れたディオドラの優しげな笑みは、今の私には不安を感じさせるモノにしか映らなかった。

「で、今日は何の用かしら」

一応デイオドラを、来客用としても使っているソフアーに座らせ、朱乃には私の後ろの壁側に待機してもらうと同時に、アザゼルやソーナへの連絡を任せる。私は、ニコニコと不気味なまでに笑顔を絶やさないデイアドラの相手をする事に。

「先程も言いましたが、アーシアに会いに」

「そう。でも、この前貴方断られたじゃない」

そう、この男はアーシアに唐突な求婚を申し込んだが、アーシアは困った顔こそしたが、丁寧に断りの返事をした。

一言で言ってしまうえば、あっさりとフラれたという事ね。

「あの時はいきなりの事でアーシアだった驚いてただろうし、何よりあの男が居ましたから」

「あの男、ね」

恐らくは巧さんの事を仄めかすデイオドラ。細めていた目を僅かに開き、そこから彼に対する侮蔑を覗かせている。

「残念だけど、貴方の行動は目に余るわ。これ以上、アーシアへのアプローチ……いえ、迷惑行為を続けるのなら、それなりの対応を取る事になるわ」

私なりの威嚇も含めて、僅かに魔力を漲らせてデイオドラに叩きつける。

この行為に特に反応を示さず、むしろデイオドラも私に向けて一瞬だけ魔力を瞬間的に高める。それはまるで、反抗の意を示すかの様。

ここで終わらせるべきなのかもしれない。

このまま問題を先送りにして、巧さんが動くことになるよりは……。

言葉が続けようとした時、まだ来てなかったアーシアや巧さん達が部屋に入ってきた。

一瞬、デイオドラの口元が歪んで見えた。

あの夢を思い出し、寒気がする。

どうか私の杞憂に終わって欲しい。

そんな願いを胸に秘めながら、私はアーシア達にここまでの経緯を伝えることにする。

巧達が来てから十分後、リアスの指示を受けた朱乃はアザゼルとソーナとその眷属らに連絡を入れた。

その連絡を受けて、彼らが到着すると共に一時的に止まっていた交渉が再び始まる。

「一応、彼らにも来てもらったわ。話し合いの公平さのためね。構わないかしら？」

「ええ。特に疚しい話ではありませんから」

さらりと軽い笑顔を浮かべるディオドラに、気味悪さを覚えつつもリアスは朱乃の淹れた紅茶を口に含んだ。

巧達はライザーの時と同様にリアスの座るソファの後ろで待機。ソーナ、シトリー眷属の代表として同行した匙と椿姫、アザゼルはディオドラの後ろ側に。

つまり、彼らがリアスに不用意な肩入れをしないと目に見える形で示している。

「先程も話したように……僕が望んでいるのは僧侶ベシヨツのトレードです」
トレード。

毎回のレーティング・ゲームは人間世界の野球やサッカーと同じようにチーム間での選手の移籍を可能としている。

つまり、この場合ではディオドラは自身の眷属を対価にリアスの眷属の一名を欲している。

「……っ」

ふと巧は、自分の隣に立つギヤスパーがディオドラに対し、敵意のような物を向けている事に気づく。

彼も分かっているのだ、目の前の男が何のためにここにいるのかを。

人見知りで、緊張しいな後輩の思わぬ部分での成長に口元が緩みかける巧は、そんな気恥ずかしさを隠すようにギヤスパーの頭をクシャリと髪型を崩す様に撫でた。

そんな巧とギヤスパの目の前で、交渉は前がかりになっていた。「僕は、アーシアをトレードで、我が眷属に迎え入れたい」

偽ることのない自身のリアスに伝えた。

そう、伝えただけだ。いくら真摯に語ろうと、いい条件を提示してこようとこの交渉はリアスが首を縦に振らなければ全く持つて意味をなさない。

そもそも、リアスはこの交渉をするメリットがないのだから。

「そう。なら残念ね、私は眷属をトレードする気は全くないの。話は終わりよ。文句があるから、私一人で話を聞くわ」

言うが早いのか、朱乃や裕斗に視線を向けると二人は非常に丁寧な姿勢で扉を開けてから、どうぞ、と声を掛ける。

つまるところ、早く帰れと言われてる事にディオドラも察していた。

ソファアから立ち上がると、裕斗と朱乃の開けた扉……ではなく、何故かアーシアの元に向かうディオドラ。

二人の間に立ちはだかるのは咄嗟に反応して見せたリアスと巧。

「……退いてくれませんか、リアスさん」

「貴方こそ、求婚を断られた女性に不用意に近づこうなんて、何のつもりなの？」

やはり自分と同じ立場の人間だからか、丁寧な言葉遣いで動くように頼むディオドラ。けれどそれで退くような弱い少女では、リアスはなかった。

妹同然に想っているアーシアに異常な程の執着を見せる男を差し出せる訳がない。

リアスの説得は諦め、ディオドラの視線と標的は、ここまですべて一切口を挟もうとすらしなかった巧へチェンジ。

「たかが下級悪魔の君が、僕とアーシアの真実の愛に横槍を入れる気がかい？」

「真実……ね」

どこか嘲笑うように吐き捨てた巧の眩きを、ディオドラは見逃せなかった。

「ああ、そうさ。たとえば世界中の誰が僕とアジアの仲を引き裂こうと僕は必ず、君の愛を勝ち取ってみせる。彼女は君のようなカスとは違う世界で、僕と幸せを育んでいくのさ」

もはや妄言と言えるディオドラの告白に、この場にいる全ての女性陣は寒気を催し、アーシアを守るように朱乃と小猫が隣に寄り添う。

何故か自信満々なディオドラに対し、巧は周囲……というか女性陣を見て、一言。

「まだ気付かないのかよ」

巧から見て、ディオドラとアーシアというカップルは一体どんな風に見えるのか、端的にその一言で纏めた。

「似合わねえんだよ、お前とアーシアじゃあな」

特に気にしていないが、アーシアの隣を幸せそうに微笑む男の役は少なくとも目の前の男でないことは巧でも、分かっていた。

トドメを刺された筈のディオドラは細めていた目を一瞬、僅かに開いた。

「なら、自分なら似合うとでも言いたいのかい？ 救世主気取りの疫病神である君の方が？」

一瞬、空気が静まる。

ディオドラの放った巧への蔑称の本当の意味を把握してるのは、リアスや朱乃を含んだ5名ほっただけ。

けれど、その言葉が彼を蔑んだ物であるのはその場にいた全員が把握できた。

リアスは、巧に掛ける言葉を探しているその間。思考が止まりかけたその時に乾いた音が部屋に響いた。

音の鳴った方向を見ると、アーシアと頬の一部を赤く腫らしたディオドラが居た。

恐らく……というかほぼ確実にアーシアがディオドラの頬を叩いた事に気付いたリアスは、アーシアが人に手をあげるといふ出来事に驚いていた。

「イツセーさんを、悪く言わないでください」

金色の髪が少し揺れ、涙声が小さく響く。殴られたディオドラは一

瞬、呆気にとられていたが即座に意識を切り替えて、優しく諭すように巧への悪意を撒き散らす。

「そうか、アーシアは君は知らないんだよね。そこの彼が、冥界でどんな風に称されているのかを」

アーシア、そしてこの場にいる全員に言い聞かせるように、ディオドラは続けた。

「そこの下級悪魔君がオルフェノクという薄汚い獣から人間を守るとか、人間として戦うなどと触れ回った所為で多くの悪魔がその余波を受けて命を落としている。彼の発言は、我々悪魔やそれを援助する者達が戦うと言外に言ってるような物だからね」

ディオドラは何も言わない、いや言えない巧を見て嬉々として、追い込むべく、言葉という狂気を突き立てる。

「そして、僕が何故アーシアへの求婚をしているのかは……君を守る為だ。たしかに、今回の一件は僕が事を急いでる様に見えるのは確かだ。そんな僕に不信感をリアスさんが抱くのも当然の事さ。でも、それは全て、君の幸せの為なんだよ」

「それは、どういう意味かしら」

言葉こそ納得できる物ではないと思ったりリアスだが、内心では自分を責めていた。

今のディオドラの言葉を、巧は明確に否定出来ない。むしろ、その通りと受け入れてしまいかねない。

自分の行動で、他者に不幸が降りかかっている。勿論、悪魔が巧の一言で動いてるわけではない。冥界の上層部や兄のサーゼクスを始めとした魔王達も、オルフェノクを冥界と敵対するテロリストの一部捉えている。

それらを差し引いても、巧を中心にオルフェノクによる問題が蠢いているのは今のリアスにも否定しきれない。

何よりも、それらの問題を自分には関係ないと割り切れたり、目をそらす様な真似を乾巧が出来ない人間なのが一番苦しかった。

「分かったかい、兵藤一誠。君は英雄でも救世主でもない。ただの疫病神なのさ」

「ああ、そうかもな。……そっちの方が気楽でいい」

そう返した巧の言葉こそいつも通りのものではあるが、最後の一言を呟いた時の表情は責任感と罪悪感に満ちた物だった。

「だから、アーシア、彼の近くから離れた方がいいんだ。いずれ、彼は救世主として戦う時がくる。君がわざわざ巻き込まれる必要はないんだ」

救世主、という言葉に嘲りの意味が込められた物だ。思わず、ディオドラを引つ叩きたくなる衝動を堪えるリアスの前で、アーシアが動いた。

「ごめんなさい。私は、貴方と結婚も出来ません。それに眷属になる事も出来ません」

いつも穏やかな彼女とは思えないほどの冷たく事務的な声。

全員が分かっていた彼女の答えー明確な拒絶。

「これ以上、私の大切な人を侮辱するのはやめてください。それに、私はここを、この街を離れたくありません。この街には、大切なお友達や家族や……眷属の皆さんが居ますから」

最後に、今日一番の冷たく……それでいて美しい笑顔でこの交渉を終わりへ向かわせた。

「もし、イツセイさんが疫病神なら、私はイツセイさんの隣で不幸になっても構いません。……ディオドラさんと共にいるよりも、きっと幸せになれると思います」

その笑顔を見て、ディオドラは今日の所は帰るといって捨て台詞を吐いて……今回の交渉は終わりを迎えた。

暗躍する外道

デイオドラとの邂逅から一日が過ぎた。巧は自分の中にあつたモヤモヤした気持ちと向き合うことが出来ないままだった。自動販売機の前にバジンを停車させて、持っていた小銭を入れてから冷たいお茶のボタンを押した。

ゴクゴク、と音を鳴らしながら一気にお茶を流し込む巧は背後に突然現れた2つの気配に向けて視線を向ける。

「おっと、流石だね。兵藤一誠」

「勝負なら受けねぞ」

「んなアホしねーよ。だよなヴァーリ」

ああ、と爽やかな声が巧にも届いたが警戒は緩められない。スラツクスの上に白いワイシャツを着たヴァーリは友人に声をかけるように巧に近づく。タンクトップを着た美猴はウキウキとした様子であり、そこからは以前戦った時とは違い闘気や殺気の類は感じない。とりあえずこの場での戦闘は巧も望んではない。

ため息を一つ零してから、いつも通りの仏頂面でヴァーリと向き合う。

「何の用だ」

「そう邪険にしないでくれ。一応、君への警告さ」

警告と言われても、いまいちピンとこない巧。一瞬の間を置いてから、ヴァーリは静かにその名を口にする。

「デイオドラ・アスタロト。彼には気をつけた方がいい。奴自身に力はないが、奴の立場は厄介な物でね。つまらない事で君に手を出されるのは俺としても本意ではない」

「おい……」

詳しい事を尋ねようと声をかけるも、すでに二人は巧に対して背を向けていてこれ以上の情報提供はしない意思表示にも見えた。

二人が去ってから、巧はその場を動かず、その手のひらの中にあつたお茶は少しだけあつたかくなっていた。

翌日の放課後

巧は昨晚のヴァーリの事をリアスとアザゼルに伝えた。

二人とも驚きこそしたが、ディオドラの事が主だった事もあり、いつの間にかオカルト研究部全員での討論となっていた。

部室の中央のソファアールとテーブルに皆が集まり、リアスを議長とした形での話し合いが進む。

「あのディオドラ・アスタロトのイツセーくんへの敵意は異常です。それにあのヴァーリが直接忠告してきたことから言えるのは……」

「ええ、奴はテロリスト側に関与してる可能性があるってことですな」

朱乃と裕斗が弾き出した1つの仮説に皆が頷く。勿論、壁に背中を預けながら渋い味のコーヒーを飲んだように顔を顰めながらもアザゼルも。

「デイ、ディオドラ・アスタロトの目的はアジア先輩ってことなんですかね？」

「ああ、そう見た方がいいだろうね」

「それかイツセーくんを……倒す、方かも」

ギヤスパールとゼノヴィアとイリナもいつにない真剣な表情でこの状況を把握しようと言話を進める。

「大丈夫ですか、アジア先輩」

「はい。心配要らないですよ、小猫ちゃん」

アジアの隣に座る小猫が少し震えるアジアの手に、自分のそれを重ね合わさる。少しして震えが止まり、アジアは堪らず笑みを溢す。

「リアス、分かってはいるが……」

「ええ。このことはお兄様はともかく、上層部には伝えられないわ」

誰かが漏らした、小さな動揺の息。皆の視線を受けて、リアスは内側から滲み出てくる悔しさを出来る限り抑えた上で、冷静を装いなが

ら続ける。

「この情報提供者が、ヴァーリという点が最大の問題なの。確かにデイオドラはアジアに異様な執着心と恋愛感情。イツセーには私達に隠さないほどの嫌悪……いえ、敵意を持っていたわ。だからといって彼がテロリストに関与している事の直接的な証拠にはなり得ない。それに加えて……」

「奴は、現魔王の一人を輩出した家の次期当主。そんな奴がテロリスト側だと知られてたら、悪魔陣営は民の信頼を落としかねない。つまり、今の奴は下手に叩く事が出来ねえ安全地帯にいるって事だ」

リアスとアザゼルの言葉は三大勢力の内側にいるオカルト研究部の面々なら痛い程に分かる事情だ。

先の大戦で多くの純血の悪魔が失われた今、デイオドラはその貴重な一人。仮にこの仮説が正しければ良かったが、そうでない場合もまた波乱を呼びかねない。

同時にこの情報元がヴァーリと知られると、現状は最も危険なテロリストと繋がりががあると突きつけられる可能性もあった。元々、ヴァーリはアザゼルの元にいた為に、今アザゼルが面倒を見ている巧達に疑いの目が向けられてもおかしくはない。

「それじゃ、このままでもいいんですか？」

裕斗の現状に対する怒りを染み込ませた言葉に、今の今まで黙っていた巧が小さく呟いた。

「いいだろ、別に」

「どうして、ですかイツセーさん」

なんとか紡がれたアジアの小さな声に、背を向けながらいつも以上にぶつきらぼうで、冷たさすら感じさせられる声で応えた。

「あいつの狙いが俺だからな」

その一言に、リアスが立ち上がった。その顔は巧が見たことまでに怒りに満ちていて、その矛先が自分であった為に更に巧を驚かせる。

即座に巧の前に立ったリアスは彼の右頬を強く叩いた。

リアスの行動に皆が呆気を取られ、叩かれた巧の顔色はいつもと変わらない様子。

「ふざけないで……。私は、私達は貴方に守られるだけのお姫様じゃないのよ。貴方と……イツセーの隣に立つ、仲間なの。だから、お願い」

その後の言葉が出ずに、大きな瞳から零れ落ちそうな涙を留める様に巧の胸に顔を押しつける。

縫るかのようなあまりに哀しい抱擁の前に、巧も何も出来ずにいると、無意識の内に、自分の手が彼女の紅の髪が集約された頭を優しく撫でていた。

オカルト研究部全員がほっこりとした気持ちになり、話が落ち着きかけていた瞬間のことだった。

部室のドアから勢いよく見慣れた少年と少女達が飛び出す。

この学園の生徒会長とその部下達だ。

「どうしたお前ら、んなに血相変えて」

「たっ、大変です。リアス、こんな情報が冥界……いえ、あらゆる勢力に向けて発信されました。私達もたった今受け取って」

呆れたように尋ねるアザゼルの視線の先にはソーナ達生徒会役員ら。普段の冷静沈着なソーナだが、その冷静さを欠いた様子で、一通の手紙と新聞紙を差し出す。

リアスが涙を拭いながら、その手紙と新聞紙を受け取り、文面を読んだ瞬間……呼吸が止まった。

その様子に思わず巧らも詰め寄り、その文面を注視。

「まじ……かよ」

一通の新聞紙は——招待状。

新聞紙には目を疑いたくなる事実として書かれた情報が大きな文字で書かれていた。

『冥界の次世代を担う、ディオドラ・アスタロトと謎の戦士ファイズ。一人の女性を巡って一対一のレーティングゲーム開催か!』

「ええ、あの記事についての話で。はい、分かりました」

冥界にいるグレモリー家の者に連絡を入れるリアスを前に、祐斗は

机の上に置かれた新聞紙を今一度手に取り、その文を目で追いかける。

その記事を追えば、追うほどに新聞紙を掴む手に力が入り、いつの間にか新聞紙はその形を変えてしまっていた。

「恐らくはディオドラの差し金でしょう。あの男は、部長同様に冥界のメディアには注目される存在。メディアへのパイプが太くても、不思議ではありません」

「副部長の言う通りだが……それにしてもこれは」

この場にはいないディオドラに対する侮蔑の目を隠さない朱乃とゼノヴィア。祐斗が形を変えてしまった新聞紙にはディオドラの元でねじ曲げられた情報が記載されていた。

『ディオドラ・アスタロトが求婚した女性、アーシア・アルジエントがその求婚に応じかけた時、ファイズこと兵藤一誠が待ったをかける形で割り込み、ディオドラ氏の求婚を取り止める様にした』

あの場に居たものが見れば、不愉快な一言では済まされない程に捏造された情報に当然リアスが憤慨。今、この情報を記載した新聞社に抗議の連絡を入れるようにグレモリー家への連絡を行なっている。

オカルト研究部は勿論、その場にいたソーナらも事が事だけに全面的な協力を約束してくれている。

そんな中、相変わらず浮かない顔をして、椅子に座るのが巧だ。

今回の騒動を不愉快そうな顔一つせず、受け入れている。まるでそれが当然の事のように受け流す巧に、祐斗らも疑問を隠せない。

「おい、どうしたんだよ兵藤」

「耐えきれずに、匙が声を掛ける。」

巧は基本的にオカルト研究部や生徒会含めても、言葉を交わす事は少ない。巧以外のメンバーは彼を仲間として見ている。勿論、巧も彼らの事を仲間と思っはいる。その中で巧に最も声を掛けるメンバーの一人は匙だ。

「なんかいつもと違って黙ってるからよ」

「なんでもねえよ。いちいち気にすんな」

言葉を続けられるのを避ける様に巧は立ち上がり、部室を出た。相

変わらないことだが、今回は少し違和感を感じる。それはこの場にいる全員の感想。

「僕が行きます」

「じゃあ、私も」

即座に朱乃と祐斗が立ち上がる。リアスも肯く形でGOサインを出して、二人に追いかける様に指示を出す。

部室を出る前に、匙から小さな声で頼む、と小さな言伝を受け取る。祐斗は勿論と言葉を返してから、朱乃と共に部室を出る。

「いつぶりだろうか。」

「こうして、一人で帰ろうとするのは。」

部室を出た巧は、部活動に励む生徒達を眺めながら校内を出ようとした。

「そんな彼の隣には誰も居ない。」

「疫病神か」

ディオドラの来訪の際に言われた多くの言葉の中で、最も自身に響いた言葉は無意識のうちに反芻していた。

「全くもってその通りだ。あんな風に多くの仲間迷惑をかけて、あの場にならないリアスの家族らにも面倒をかける自分をそれ以外と形容できるのだろうか。」

「そんな自分の隣に歩こうとするアーシアやリアス達。」

「そんな自分と共に戦おうとする祐斗や匙やギヤスパー達。」

「そんな自分に価値があるのだろうか。」

「兵藤一誠の人生を奪ってしまった、空っぽな自分に。」

「……………」

罪悪感と迷いが体を支配して、動かなくなりそうな体。仲間達からの信頼や好意は素直に嬉しい。こんな口下手で愛想のカケラも無い自分を仲間と言ってくれる彼らを出来るだけ危険から遠ざけたいのに、自分の所為で巻き込んでしまうくらいなら、いつそのこと――。

「…………朱乃、祐斗」

突然、温かい感触が巧の手を包み込んだ。驚きと同時に視線を向けると自分の手を掴む朱乃と祐斗が、そこに居た。

「悪い、面倒かけて……」

三人は、よく昼食を皆で取るときに使うグラウンド前の土手の様な場所に座り込んだ。

巧は軽く呟くように謝罪の言葉を二人に掛ける。けれど、二人は巧の予想とは異なる反応を見せた。

「そんな、迷惑なら僕の方が多くかけてるよ。……君が居なければ、僕は今ここに居ないかもしれないからね」

「私も祐斗くんと同じです。貴方が、居てくれたから、誰一人欠けずにここまで、新しい仲間に出会えたのよ」

軽く風が吹いて、巧は一瞬だけ無心になれた。何故か、兵藤一誠に憑依してからの事が頭に浮かび、一つの景色が見えた。

ここから見える、駒王学園の風景。

何処にでもある普通の高校だ。それでも、巧には多すぎるほどの思い出がここに詰め込まれてる。そんな巧の隣にはいつも誰かが、居て笑っていた。

「イツセーくん？　どうかしたの？」

「いい加減グズグズ考えるのも飽きたからな」

誰にいいかせるでもなく、自らに誓うかの様に巧は呟いた。

そんな彼の表情からは一切の迷いは見受けられない。

「……その、一緒に頼む」

「ああ、勿論！」

「ええ、安心して任せて」

「リアス、いいか？」

「イツセー!? どうしたの?」

部室に戻った巧は、出版社への抗議を入れるべく手続きを整えていたりアスに声を掛ける。

集中していたリアスは、巧が戻ってきたことに気づいていなかった。少々驚いてはいたが、すぐに気持ちを切り替えて真剣な面持ちで言葉を返す。

「俺は、……奴とレーティングゲームで勝負する」

その巧の決意の言葉に、流石のリアスも驚かざるを得なかった。

「……今、兵藤一誠からゲームの打診があつた」

「あら、まさかこんなに早くくるなんてね。あのお姫様が巻き込まれたからかしら?」

「これで奴を消せば、アジアは僕の物、そして貴方達は厄介払いが出来る……ですね」

「ええ、そのためならライオトルーパー隊も貸し出すわよ。デイオドラ君」

「それは有難い提案です。こちらも旧魔王のエージェントらを投入して、それなら一万は超えますね。貴方の願いもようやく叶いそうですね、Miss. 影山」

隣に居たい人、隣に居てくれた人

「はぁあ!!」

気合の雄叫びと共に振り下ろされた薙刀。

その軌道を実に見定めてから、バックステップ。

次いで向かってくるのは、剣を振り下ろさんと構える二人の少女。

「…当たらない!」

「どうなってるのよ、イツセイ君」

少女二人、イリナとゼノヴィアは、見事な一言としか言えないほどの流れる様な剣技を持って巧に攻撃を仕掛け続けるが、一太刀も浴びる気配はない。元々教会に属していた頃からのパートナーの二人。仲間内でのコンビネーションでは高い二人だ。

「…えいつ」

同時に振り下ろされた一撃を、横っ飛びでかわした直後。小さな気迫と共に小猫による飛び蹴りが巧に向かってくるが、身を低く構える事で直撃を避けた。

しかし、巧の回避を察した小猫もすれ違いざまに空中で身を捻りながらの裏拳を繰り出す。

巧からすれば死角の筈の一撃を肘を盾にする事で受け止める。

接触の後、着地した小猫は距離を置き背後に下がる。

「…っ!」

小猫が下がった直後、巧は自分の足元から魔力と悪寒を感じ取り、距離を置く。その一瞬後、直前に巧が居た場所からは剣の華が咲き乱れる。

巧の視線の先には自らの能力を全力で解放した裕斗が居る。

ため息と共に、今度はこつちだと言わんばかりに駆け出そうとした瞬間にタイムアップを告げる音が鳴った。

「お疲れ様、イツセー。はい、これ」
「おう」

どこまでも続いていそうな空間。冥界で見た風景と同じだ、なんて感想を抱きながら座り込む巧の隣にドリンクを渡したリアスが座る。今は、対デイトドラのレーティングゲームのトレーニングにオカルト研究部、そして生徒会役員の面々で勤しんでいる。

今回の騒動を巧の提案もありレーティングゲームでこの一件を収めることになった。その直後からソーナ達もバックアップに努める事を約束。今に落ち着く。

「すげえもんだな、お前の実家」

「ええ。お父様やお母様、お兄様達が全面的に協力してくれてるもの」
そして巧が見上げているトレーニング空間。

ここは、グレモリー家がリアス達のためにと用意した異空間。レーティングゲームの技術の応用で仕立てられた空間。その辺りの用立てにはリアスの兄であり、現魔王のサーゼクスの口添えもあり様々な設備が搭載されている。

「リアス」

「何？」

「サンキューな」

小さく呟かれた言葉と共に立ち上がり、巧は彼女に背中を見せる。そんな彼の背中を見送りながら、リアスは笑みを溢した。

「もっとキチンと言ってもいいのよ、巧さん」

紅の髪を揺らしながら、彼女は彼を追い掛けた。

トレーニングも終わり、自室でくつろごうとする巧ではあるが、そういう訳にもいかない。

何故なら、くつろごうとした部屋にリアス達をはじめとしたオカルト研究部全員が集合していたからだ。

元々一人用の部屋にリアスを除く八人が押し込まれており、人口密度は高い。

「お前らな…。とっと帰れ、狭くて仕方ねえ」

リアスとアーシアの下宿組を除く面々に、帰るように催促するも効果は見返られない。それどころか…。

「酷いですわ、イツセーくんは。せつかくこんな近くにいるのに帰れなんて」

「頼んでねえし…って、引っ付くなよ朱乃!!」

甘い言葉と共に巧の胸にしなだれかかる朱乃。以前よりも距離感が近くなったとは言え、ここまでは許容できない巧。

それに反応し、突貫するアーシアといつも通りの風景が広がる最中で部屋のドアが開く。

部屋に入ってきたリアスは、驚きの情報を皆に伝える。

「みんな聞いてちょうだい。今回のディオドラとのゲームの詳細が決まったのと、冥界でのテレビ出演が決まったわ」

ええー!!、と声を出して驚くのはイリナとギヤスパ。残りの面々は驚きこそしたが、特に声には出さない。

チラリ、とリアスはアーシアと巧の表情を窺う。

「とりあえず三日後に収録の為に、冥界へ向かうわ。…イツセーもね」その問いに答えることなく、巧は首を縦に振るだけだった。

私ーアーシア・アルジェントは、今とても困っています。

かつて、まだ私が聖女と呼ばれていた時に助けた悪魔の男性、ディオドラ・アスタロトさんに求婚されて、その事で部長さんを始めとする部員の皆さん、生徒会役員の皆さん、そしてイツセーさんに迷惑を掛けてしまっているんです。

同時に、みなさんが私の為にと共に戦おうとしてくださる事がとても嬉しいんです。

何より私は、この街に居たい。居続けたい理由が今は出来ました。昔はできなかつたお友達がたくさん出来て、そして好きな人が出来

たから。

だから私は、ここに居続けたいです。

あの人が傷ついた時に癒せるように、あの人が悲しい時に、隣に居られるように。あの人が笑った時、一緒に笑いたいです。

一誠さんの、隣にずっと。ずっとー。

冥界でのテレビ収録当日。

リアス・グレモリー眷属は見学としてきたイリナと共に控え室で待機をしていた。

こういった形式は人間界のテレビ業界と同じなのか、人数に応じた広い前室が用意されて、その中心のテーブルにはお菓子や紅茶がケータリングとして置かれている。

「こ、これでいいんでしょうか」

「ああ。バッチリだよ、アーシア」

「私としてはこんなメイクもいいかも！」

前室には化粧台やそれに伴いメイクさんも待機している。冥界全土で放送されるとありアーシアやゼノヴィアはメイクを施され、イリナはそんな二人を見て、もっとナチュラルな方が…と感想を。

「ギヤスパークくんは、女の子の格好なのかい？」

「は、はい。今ですし…僕にはこれが戦闘服です！」

「……段ボールも卒業したし、少し成長」

いまだギヤスパークの女装癖は治っていないが、似合い過ぎてはい。それよりも、あの超人見知り時代を知る祐斗と小猫から見れば、こうして人前に、それも冥界全土の前に立つことになる考えると凄まじい成長と言える。

二人はどこか成長した妹or弟を見送る気分はこんな感じなんだろう…なんて事を考えていた。

『冥界期待の新人、ディオドラ・アスタロトは語る！この試練を乗り越えて彼女の愛に応えて見せる』

『リアス・グレモリー眷属、兵藤一誠乱心か。上級悪魔の婚姻を二度も破る?』

『冥界上層部、ファイズは我々の先兵として戦うだろう』

冥界の世情を報道する新聞に目を通しながら、巧は一人で納得していた。

腹も立つし、気に食わないがディアドラの発言は筋が通っている。今の冥界での巧の評価は低く、中には強制的に先兵として旧魔王派との戦いに投入させる、と発言する上級悪魔も少なくない。

以前、ライザーとリアスの婚姻も破談にさせた経緯もある為か、一部のメディアではリアスではなく巧個人を批判する記事を出す物も。その一方で、四大魔王を始めとした穏健派や他の勢力との和平に賛成だった権力者や上級悪魔らは、巧を擁護する発言や記事を出している。

良くも悪くも今の冥界では話題の中心にいる。そんな評価を下されているのが巧の現状だ。

「こんな記事気にする必要ないわ」

言葉の裏にある苛立ちをそのままにしているリアスは新聞を片づけながら、巧の隣に腰を下ろす。

駒王学園の制服姿ながら、何時もとは少し趣向の異なるメイクが施されている。普段とは異なる美貌を放つリアスに言葉を差し出すわけでもないが、小さく頷く。

「ああ、元々どうでも良いからな。奴にも言ったが、疫病神の方が気楽でいい」

特に不貞腐れた様な意味合いはない本心を呟く巧に、リアスは目を背けたいくなる。

彼にこんな役回りをさせているのは、自分の力の無さだ。

少しでもその負担を減らせる様に動くのが今の自分の精一杯。

ならば、自分にできる事をやろう。

「そうね、貴方が私の自慢の眷族である事には変わらないものね」
「かもな」

短く返された言葉。顔を逸らして、そっぽを向く巧の横顔。けれど、リアスには見えていた。その口角が、ほんの僅かではあるが上に向いていた事が。

「つ、疲れましたあゝ」

まさに充電切れとも言えるギヤスパアの声が響く。

二時間ほどかかった番組の収録を終えたリアスたちは前室にて一息ついていた。

「まさか私たちにあれだけの人気が出ていたなんて驚きだよ」

「そうね、見ていた私たちも皆か芸能人みたいに感じたもの！」

撮影の際の風景を思い出し、未だ興奮冷めやまないゼノヴィアとイリナ。

番組のスタイルとしては、日本のよくあるバラエティ番組と同じで、司会を務めるMCとアシスタントの二人がゲストをもてなして、そこを視聴者が観覧する中でトークすると言ったものだった。

「みんな、これからはこう言った仕事も定期的に来るかもしれないから慣れていきましょう」

皆に引き締まる様にリアスが、声をかける。

先程の収録の際もただ一人、落ち着いた様子で臨んでいたのも幼い頃から冥界のメディアに出ていたのも起因しているのだろう。

「部長さんって本当に凄い人気なんですわね」

「ええ、部長は幼い頃から冥界でも人気が高いので眷属の私たちにも目が行きやすいのですよう」

番組の中で、当然ゲストの中でも多く言葉を発したのはリアスではあったが朱乃達眷属にも話が振られている。

朱乃を始めとした女性陣には若い男性悪魔からの黄色い声。

裕斗には女性悪魔の声、ギヤスパアにはその両方から。

そしてあの仏頂面の男には……。

「凄い人気だったね、イツセーくん」

「みたいだな、どうやら」

悪のソファーに深く腰掛ける巧に冷たいお茶を差し出しながら、いつも通りの笑みで声かける祐斗。

巧の頭には先ほどのスタジオにいた冥界の子供の視線と声があった。

『あつ、ファイズだ!!』

『あいぼうのけんしもいるよー』

スタジオに入る際、子供から声をかけられてどう言葉を返せばいいのか分からない巧。

咄嗟に祐斗が隣に立ち、軽く手を振る。巧はそこまではしなくても軽く手を上げてすぐに指定された椅子に座った。

「子供達にはわかるのかもしれない。君が、憧れるにふさわしいヒーローだってことが」

「どうだかな」

祐斗がまるで自分の事ように誇らしげになる姿に悪い気はしない。

巧も軽く笑った。

子供の一人が言った相棒。

その言葉に相応しい二人を見て、リアスは静かに安堵した笑みを浮かべる。

その日のうちに冥界から駒王町に戻り、自宅に戻ったりリアス達。

ディオドラとの決戦が近づく中、巧は寝れないでいた。

「……………」

屋根に登り、空を見上げる。空には満月が浮かび、夏も過ぎつつある季節のため夜風が体を通るたびに涼しさを感じさせる。

巧にとっては負けられないレーティングゲームは二回目になる。

前回のリアスの時のような二の舞はしないと固く心に誓いながら、昂りつつある心を少し鎮める。

「巧さん、ここにいたの？」

声が出た方向を探すと少し薄いネグリジエを着たりアスがいた。

おう、と短く言葉を返す巧の隣にリアスは座り込む。

そのまま二人とも何も言葉を発さずに時間だけが流れる。

「今日は、助かった」

「えっ？」

唐突にお礼の言葉を告げる巧にリアスも少し驚き、気の抜けた言葉を返した。

一体どうゆう理由でお礼を…と続けようとしたリアスを遮る様に巧は言葉を続ける。

「俺の話があまり振られなかったのは、お前が気を回してくれたんだろ」

今日の収録で巧はMCからディオドラ関連の話を聞かれる事が無かった。理由としては、子供も見たりする番組というのもあるが今の冥界で話題になる巧に対してあまり突っ込まないのも違和感があった。

恐らくはリアスやソーナ達が尽力してくれたのだと感じた巧は素直に感謝の言葉を繋げる。

「あ、ありがとな」

言い慣れない素直で真っ直ぐな言葉。

巧の性格的にあまり使う頻度の少ない言葉を引き出して、リアスに届ける。

受け取ったりアスは良かったと小さく呟いた。

「ねえ、巧さん。お願いだから、何処にも行っちゃダメよ」

「何処って、何処にいくんだよ」

「この前…巧さんが斃される夢を見たのよ。だから、それで…」

それ以上言葉を紡げないリアスを見て、巧は立ち上がり空を見上げてながら静かに呟く。

「俺はここにいます。この町で生きていく。お前や、オカルト研究部や生徒会やクラスの連中達と一緒に過ごしていたい」

自らの感情を混じり気なく伝える巧。

その顔は何か憑き物が晴れたような顔つきに変わる。静かに広がる夜の中でリアスと巧の時間は過ぎていく。

「私も貴方の隣にいたいわ。これからも一緒に」

リアスの言葉を静かに笑う事で受け止める巧。

二人はディオドラとの決戦を受け止める覚悟をより一層に深めていく。

レーティングゲーム開幕

ディオドラ・アスタロトとのレーティングゲーム当日。

巧達はオカルト研究部の部室から試合会場に向かう為、それまでの時間を部室にて待っていた。

「よしおまえら準備と気合いは出来てるな。まあ、いつも通りのお前らなら問題ないが、まあ今回はあの世間知らずのお坊ちゃんに一泡吐かせてこいや」

飄々としながらも鋭い観察眼を持つアザゼルは、リアス達がいつも以上の気合いを持ってこのゲームに臨んでいることを察していた。

否、そんな鋭さなど無くとも今のグレモリー眷属を見てそこに気づかない者は居ないだろうと感じさせる雰囲気を漂わせている。

「ええ、そのつもりよ」

そんな眷属を代表するようにリアスが力強さと凛々しさを含んだ声で応える。その姿は正に王の名を冠するのキングに相応しい姿だ。

「要らない心配みいだな。じゃあ、それは一足先に行ってるからよ。気張ってこいや」

そう言うのと冥界行きの魔法陣を展開させてアザゼルの姿はオカルト研究部から消え去る。

後に残る静寂を断つように、リアスが皆に声を掛ける。

「皆、今回のゲーム…完膚なきまでにディオドラを吹き飛ばして見せましょう!!」

『はっ!!!』

王の一声に、眷属達は強く応える。そこに迷いや恐れなどは一切無い。

ただ何処までも自分達の勝利を信じて前に突き進む若者達がそこにいた。

ほぼ同時刻、冥界ローアスタロト家、ディオドラの自室にて。

「それでは、今回はそう言った手筈で」

「あら、貴方は見ていかないの?」

「確かにあの男の息の根を止める瞬間を直接見れないのは残念ですが…それよりも僕にはやらなきゃいけない事があるので」

「それは残念。なら、私は存分に楽しませてもらうわ。ファイズの…兵藤一誠の死の瞬間を」

自身の欲望を堪えきれないと見るものを不快にさせる笑みを浮かべたディオドラは、黒髪の美女ロー影山冴子との会話を打ち切る。

ニタニタと笑うディオドラを前にしても、別段変わらない影山冴子の後ろには二人の青年がいる。

「ああ、あんなクソ変態に狙われちゃって大変ですなあアーシアちゃんは」

クルクルと手のひらでデルタファンを回転させ遊ぶフリード・セルゼンは一切同情した気持ちのない感想を楽しそうに呟く。

彼にとっては、ディオドラのアーシアへの執着など興味のない話でしかない。

「つーか、なんであんたまでんな所にいるの??あの猫又とニャンニャンしてるって思ってたけど」

自身の隣で自分以上に我関せずを貫く同年代の青年に対して、声をかけるフリード。

彼の些か品の無い問いに帝王のベルトの一本ローサイガドライブーを持つ天城奏は簡潔に答える。

「呼ばれたからですよ。これでも一応オルフェノク派のトップの一人なもので」

「まあ、確かにファイズ絶対に殺すマンな奴らからしたら、この作戦サイコーなものね」

「そうゆう事です」

彼の顔からも何処か不本意そうな雰囲気を感じつつも、これから起こす戦いを前にフリードは自分の中の昂りを抑える事など出来ない。「今回こそ、イツセー君をぶっ殺してついでにあのクソビッチも…っ!!」

ゼノヴィアを殺す。そう言い切ろうとした矢先に激しい頭痛と意識の混濁に飲み込まれそうになり寄りかかっていた壁に手をつく。

この現象の正体を知るフリードは、自身の中にある名前を、この身体の本래の持ち主である青年の名を呟く。

「アレン…まだこの体まだ明け渡さねえてか。幼馴染への深い愛?? ああ…やだやだ。ンなもん持つてるなんてキモチワリ」

なんとか堪えてたフリードは、端正な顔を醜悪な笑みと共に歪ませながら歩き出す。

「んじゃまあ、クソ悪魔達にクソビッチ達まとめてぶっ殺してさしましようか!」

不気味なスキップで歩き出すフリード、いやアレンの背中を見て天城は憐れみとその気持ちを抱きながら何もしない自分自身を嘲るように笑うことしか出来なかった。

「彼等は…何処までも貴方を壊そうとしてくれてるわ、乾巧。貴方も彼らと一緒に壊れてくれるかしら?」

歪で、何処までも壊れる結末を迎えることしかないであろう三人の青年をまるで面白い玩具を見つけた少女の様に、それでいて自分の目的の為に利用する冷徹さを持った大人として影山紗子は見つめていた。

「ここがゲーム会場ですか?」

誰に訊ねるでもなく呟いたアーシアの言葉が聞こえ、巧はゆっくりも睨み上げる。

数秒前に巧達はゲーム会場に向かう為の魔法陣を使用し転移をした。

転移の際に発生する光が落ち着き目を開けると何も無い殺風景な石畳と生き物を模した石像が祀られた空間が目飛び込んだ。

「どうやら今回は、僕らの街を模したと言うよりも…」

「何も無い広い空間を用いたゲームって事なんでしょうか」

転移されれば直ぐに聞こえるはずの進行役のアナウンスもない為、警戒を怠らない裕斗とこれから始まるゲームの内容を考察するギヤスパー。

二人とも警戒心が高まっている事を巧もまた感じている。

「リアス、こんなに何も無いなんて…」

「ええ、どうも何かおかしいわ。…皆、固まって!」

朱乃の言葉に、即判断したリアスは皆に警戒心を高める様に促す。

「どうやら部長の判断は…!」

「正しいみたいです」

即座にデュランダルを構えるゼノヴィアの隣で、猫又化を完了させた小猫が臨戦体制に入る。

リアスの判断が正しかったことが、巧達の前で無数に展開される魔法陣が証明する。

「あれって…!!」

「旧魔王派の魔法陣!」

巧達を中心に幾つもの魔法陣が現れて、そこから悪魔達が次から次へと現れる。

その光景は巧に自分の中のルールを即座に破らせる。

「冗談じゃねえ…!」

前回の乱入以降、もしものためとアザゼルに渡された一つの魔法陣が描かれた小さな紙を取り出す。

少し魔力をこめると紙に書かれた魔法陣が少し大きくなり、巧が腕

を入れる事ができるサイズまで変化。

迷いなくそこに手を入れて、別空間にあるはずのファイズドライブを取り出して、腰に巻き付ける。

『Standing By』

「変身！」

『Complette』

変身を完了させる巧だが、その間にも魔法陣から旧魔王派の悪魔達は転移を続けていた。

そこから何秒かして、ようやく転移の嵐は終わりを迎えた。

「こんにちわ、旧魔王派の皆様。これはどういう見なのかしら？」

いつも通り、ではなく怒りを見せるリアスが前に出ながら旧魔王派の者達に訊ねる。

体から沸々と魔力が漏れ出し、髪同様の紅のオーラがリアスの体を包み込む。

「偽りのグレモリーよ、今日こそはその首を頂戴する！」

携えた槍を構えながら悪魔の男が叫ぶ。

その声の後に、咆哮の様な猛り声がレーティングゲームの空間に反響する。

悪魔達の咆哮と共に、巧達を困う千人を超えた軍勢が同時に魔力弾を放つ。

「皆、後ろに!!」

眷属を守る為、魔力に長けたリアスと朱乃が咄嗟に前に出て魔力障壁を生み出す。

1秒で千発を超える魔力弾に耐えながら、部員を、眷属を守る為に二人はこれまでにないほどに魔力を放出させつつける。

「ほお、サーゼクスの妹もその『女王』も中々のものじゃ」

「ひゃあ!!」

魔力の雨、いや暴風雨とも言える状況の最中、リアスと朱乃の間の

抜けた声が巧達に届いた。

声の音源には、見たこともない長い白髪の老人がリアスと朱乃のスカートを捲り上げていた。

「オーデイン様！まだ学生の子達になにしてるんですか！」

「二人とも若さゆえのハリとツヤがあるから、ついこのう…」

白髪の老人「オーデインは、護衛のロスヴァイセに諫められつつリアス達のスカートから手を離す。

「ど、どうして僕たち無事なんですか？」

すでにリアス達が魔力障壁を出していないにも関わらず無傷な状況にギヤスパは周りを見渡す。

「どうやらオーデインがこの場にいる全員を守る障壁をリアス達の障壁の上から展開させていた。」

「お前さん達、さっさと身を隠せ」

「どういう意味ですか？」

オーデインの指示に、リアスが問い直す。オーデインは答えは答えずに一回手に持った杖で軽く地面を突く。すると先ほどリアス達を守る為に展開されていた障壁が瞬間的に大きく肥大。

この場にいた旧魔王派の悪魔達を飲み込み、文字通り消滅させた。

「今回の連中の参戦は最初から分かってた事じゃ」

「分かってたというのは…」

「『内通者』が分かったんじやよ。そいつが今回のゲームでお前さん達やワシら各勢力のトップに『禍の団』カオス・ブリゲードを差し向けようとしてたこともう。だからこそ今回で奴らを返り討ちにすべく、アザゼルの小僧に頼まれたんじや」

つまり自分達はこの迎撃作戦においての要であり、囃役に使われたと事実にはリアスたちは驚愕する。

それも自分達が頼りにしていた顧問から。

「まあ、アザゼルが珍しくワシに頭を下げたからなあ。お前さん達を傷一つ付けることなく守ってやってほしいとなあ」

「アザゼルが…」

顧問の意外な姿に皆が、関心とも困惑とも言える表情の中で巧はオーデインに一つの疑問をぶつけた。

「内通者ってのは誰なんだ」

巧の中で、その人物は一人しかいない。けれど、この予感が正解であれば彼女の人生が弄ばれていた可能性が高くなる。

それだけは、そんなことだけはあつてほしくないと願いつつ、オーデインの言葉を待つ。

「ディオドラ・アスタロト。奴が前回、そして今回の騒動で不貞の輩と繋がりを持った張本人じゃよ」

ちくしょう、仮面の下で舌を打つ巧は自身の嫌な予感が高まりつつあるのを感じる。

内通者でもあふディオドラにこの状況でアジアに何もしてこない訳がない。

「と言うわけで、お前さん達はさっさと何処かしらで身を隠しておれ。後はワシらでなんとかするからのでなあ」

「そんな事出来るわけ……!」

「そんなも何もないわい。ロスヴァイセ、この小娘達の護衛につけ。後はワシが引き受ける」

オーデインが障壁を解いた彼方の空から先程よりも数の多い旧魔王派の悪魔達がこちらに向け、進軍を開始している。

「ほれ、さっさと行かんか。この北欧の主神がお前達を最前線で守つてやると言ってるあるんじや」

そう幼子に言い聞かせる様なオーデインを前に、リアスは王としての判断を迫られる。

何秒かの間、リアスは顔を見上げてから眷属達に指示を出す。

「一旦、この場を離れましょう。……オーデイン様、ありがとうございます」

リアスの礼に手を軽く上げて応える。そこにはさっさと行けという意思があり、リアス達はこの場から離れる様に駆け出した。

オーデインと一旦別れてから30分経過。

最前線から距離を置くグレモリー眷属とグレイフィア。

敵の攻撃を難なく退ける一団は、前に進み続ける。

「オーデイン様のおかげで、大群とは遭遇しないけどっ！」

「敵との衝突は仕方ないっ！」

背中合わせに、眼前の敵を斬り伏せ続けるゼノヴィアと祐斗。

二人の近くでは、リアスや巧が旧魔王派の者達と交戦している。

オーデインが旧魔王派の大群を相手に大立ち回りをしているものグレモリー眷属も旧魔王派の者達と戦闘を繰り返している。

「でも、今の私たちなら！」

「問題ないわ!!」

雷光と滅びの魔力を放ち、魔力を展開する敵を打破するリアスと朱乃。

夏休みでの修行や日々の成長の中で、リアス達もその力を上げており旧魔王派の者達に遅れをとる事なく現状退ける事に成功している。

「でも…いつまでこの空間は支配されたままなんでしょうか」

「きつとアザゼル先生や魔王様達が止めてくれるよ」

敵との衝突は、体力のみならず精神的な疲れがのしかかる。弱音じみた不安を口にするギヤスパを奮起させる様に小猫が希望を口にする。

「イツセーさん、お怪我はありませんか？」

「問題ねえ。お前は体力は？」

「私もまだまだ大丈夫ー」

「あら、楽しそうな所悪いわね」

何度目かの襲撃を退けて、一息つくリアス達。非戦闘員であり、眷属の要でもあるアシアの呼吸が少し乱れている事に気づき、巧が声をかける。自身を心配する巧を安心させようと笑顔で応えるアシアが、忽然と消えた。

巧の視界から居なくなつたアシアは、背後にいた影山冴子ー口

ブスターオルフェノクに抱えられていた。

「い、イツセーさん！」

「そいつを、離せっ!!」

振り返ると同時に巧はロブスターオルフェノクに向かい、突貫。

自分の名を呼ぶ、アーシアを守る為に、ロブスターオルフェノクに
対して拳を振るう。

「甘いわね、ファイズ」

「ツッ!!」

そんな巧の拳は空を切り、ロブスターオルフェノクの武器であるレ
イピアがファイズの装甲を襲う。

激しい火花が散り、その体が宙に舞う。

「アーシアさんを離せ！」

「はあああ!!」

「残念、遅すぎるわ」

『騎士』二人もファイズとロブスターオルフェノクの攻防に気付き、即
座に距離を詰める。

聖魔剣とデュランダルの刃を、レイピアで受け流す様に捌き切り、
カウンターを二人に見舞う。

噴水の様に血が噴き出し、二人がその場で倒れる。

「イツセー、祐斗、ゼノヴィア!!」

「大丈夫ですか!!」

地面に倒れる三人の名を叫ぶリアス。三人の様子を見て、ダメージ
こそあるが致命傷は避けた事に安堵するロスヴァイセ。追撃から三
人を守るべく、小猫と朱乃とギヤスパーがロブスターオルフェノクと
三人の間に立ち塞がる。

そんな三人の覚悟を他所に突如、ロブスターオルフェノクが影山冴
子の姿に戻る。

「どういふつもりなのかしら…」

「この子を捕まえるのが私の仕事よ。貴方たちの相手は私の仕事じゃ
ないもの。……ねえ、ディオドラ君?」

突如、人の姿に戻った影山紗子を前に、朱乃問いかけるもどこ吹く

風といった様子。けれど彼女がその名を読んだ瞬間、魔法陣からデイオドラ・アスタロトが相変わらざる薄気味悪い笑顔と共に現れる。

「これはこれは、グレモリー眷属の皆さん」

「デイオドラっ！」

人を小馬鹿にした態度を崩さずに現れた内通者に、リアスは怒りを隠さずに視線を向ける。

「アーシア・アルジエントは僕がいただく。悪いね、ファイズ」

勝ち誇った笑みを浮かべ、影山紗子の腕の中にいたアーシアを自身の腕の中へ無理やり移動させる。

なんとか突き放そうとアーシアも抵抗するが、力が違いすぎる為か効果は見受けられない。そんな反抗もデイアドラにとっては、面白いのかアーシアの綺麗なブロンドの髪を撫でる。

「これから僕は、あそこの神殿でこの戦いの顛末を見届けさせてもらうよ。…その間に、アーシアとの永遠の契りを交わすつもりだ」

あまりにも一方的な発言にとうとう堪えきれないとリアスが前に出るのを巧が静かに制す。デイオドラが指差した方角には神殿が建てられており、本来のゲームが開催されればあそこがデイアドラの本陣になっていた事が窺える。

「アーシアを、離せ」

静かに呟かれた言葉と共に、ファイズは指をファイズアクセルメモリに添える。

ファイズアクセルに形態変化してデイオドラと影山冴子に必殺技を叩き込む。そんな思惑を分かっていたかのように、再びロブスターオルフェノクへの変身を完了させた影山冴子がファイズの前に躍り出る。

「甘いわね、ボーヤ」

ファイズアクセルメモリを抜き取る瞬間、信じられないほどの加速力を待ったロブスターオルフェノクはかつての戦いとはまるで違う

どうしてそこまで違うのかと答えを探す間もなく、激しい青い炎を

纏ったレイピアがファイズを襲う。

「イツセーさん!!」

「ーっ!!リアス!」

一撃目の正面からの振り下ろしこそ受けたものの二撃目が到達するよりも早く、振り下ろされるレイピアを掴みらロボスターオルフェノクの体を抑え込む。

呼ばれた名前の意図を汲み取り、リアスが滅びの魔力をロボスターオルフェノクへと叩き込む。

決して小さくない衝撃がその場で生まれる。

衝撃が止んだ後、ファイズは先ほどまでの拘束していたロボスターオルフェノクが何事もなかったかの様にディオドラの隣に立っている事に気づく。

「この空間にはまだまだ旧魔王派やそれ以外にも禍カオス・ブリゲードの団の者たちがまだ残ってるので、彼ら相手に精々奮闘してくれたまえ。…あっ、そうだ。せっかくだから、君たち相手に暴れさせたい子達がいってね」
「相手…ですって」

ディオドラがケタケタと笑うと、ディオドラの前に複数の魔法陣が転移のために展開される。

そこが現れるのは皆、年若い少女達ばかりで合計で四人程しかいない。
巧は少女達を見て、以前似たような雰囲気雰囲気の少女を見た事を思い出す。

「イツセー君、まさか!」

「ああ、アイツだ」

「それじゃあ、あの人の主って!!」

巧と共にその少女に会った祐斗、ギヤスパーが、少女達の顔に灰色のラインが走る事でディオドラを強く睨む。

何秒かして、少女達の体はー以前戦ったビートルオルフェノクへと変化していった。

「さあグレモリー眷属諸君、僕の下僕達相手にどれだけ食い下がってくれるかな?」

四体のビートルオルフェノクは、同時に巧達に襲い掛かる。

腹の立つ笑い声と共にこの場を離れようとするデイオドラを追わんとするファイズの前に、一体のビートルオルフェノクが立ち塞がる。

「どけっ!!」

巧の声に一切反応せずに、拳を振るうビートルオルフェノク。

左ストレートを受け流しながら、カウンターの回し蹴りを浴びせる。ファイズはそのままの勢いで、デイオドラの前に向かう。

「イツセー、ー」

しかしファイズが手を伸ばすよりも早く転移の魔法陣が発動。

アーシアを抱えたデイオドラは、不敵な笑みを浮かべる影山冴子と共にこの場から消え去った。

「イツセー君、そのままアーシアちゃんを追って下さい!」

ビートルオルフェノクの一体に雷光を浴びせながら、朱乃が巧を叱咤する。その声は呆然としていた意識が現実に戻り、再び自分のやるべきことを認識させる。

「ここは私たちでなんとかします!」

四つの魔法陣を同時に展開させ、両手で異なる魔法を操るロスヴァイセが二体のビートルオルフェノクを相手取りながら、巧に向かって叫ぶ。

「私たちもすぐに追いつくから!」

そしてリアスが、滅びの魔力でビートルオルフェノクに対して攻撃を放ち続ける。

このビートルオルフェノク達は悪魔だった為か、魔力も併用しつつ『悪魔の駒』の特性も活かしてくる。

今の彼女達だけでは戦況的に厳しい可能性が高い。

既に負傷した祐斗とゼノヴィアも小猫とギヤスパアの肩を借りて、なんとか立ち上がれる状態。

ここで自分が離れば、それこそ打つ手がなくなりかねない。

「…くそっ、たれっ!」

それでも、アーシアを放置も出来ない。

彼らに背を向けて走り出すことが出来ない巧は、仕方がないと再度
ファイズアクセルでこの場を切り抜ける事を決める。

アジアを助ける為には影山冴子との勝負も控えている。それで
も、この場でリアス達に背を向けて行くよりはー。

「いいえ、ここは私達に任せて下さい」

聞こえたのは、凜とした声。

リアスと向き合っていたビートルオルフェノクに向かい、薙刀を振
るう神羅椿姫が。

朱乃と向き合っていたビートルオルフェノクには、水の魔力を放つ
ソーナ・シトリーが。

そして匙元士郎を始めとするシトリー眷属が現れた。

「お前ら……」

「よう、兵藤。アルジェントさんがやばいって聞いてアザゼル先生が
俺らを助っ人に呼んだんだ。他にも何人か来てるみたいだけど俺ら
が一番乗りって訳だ。…アルジェントさん、絶対に助けてこい！」

そう叫ぶと匙は、ソーナと相対したビートルオルフェノクに対し
て、ラインを伸ばすとその体を拘束。

加えて、そこから更にもう一本のラインを射出し、椿姫の薙刀を避
け続けるビートルオルフェノクを拘束する。

「今です、リアス!!早くー!」

「ソーナ…ありがとう!」

最高の援軍に感謝して、リアス達はディオドラがいる神殿に向けて
駆け出した。

ビートルオルフェノクをソーナ達とロスヴァイセに任せ、リアス達
は神殿に到着しかけたその時。

先頭を走るファイズが足を止めた。リアス達もその先に何かがい
ると察知して息が止まる。

視線の先には、ファイズのベルトと似たベルトを腰に巻いた青年二

人がリアス達を待ち受けていた。

「やつぱ来てくれちやつたねえ、イツセーきゅん」

「行くぞ、外道神父」

天城はふざけた態度を崩さないフリードに促すように歩き出す。

仲間達に対しての丁寧な言葉遣いとは異なる雑な物言いではあるが、その眼光の鋭さは初めて巧と交戦した時と変わらない。むしろ、鋭さは増しているとすら言える。

「あんたらは、ここで首チョンパの刑でござますー変身」

『Standing By ーComplete』

「悪いですけど、全力でいかせてもらいます。変身」

『Standing By』

『Complete』

二人の体を異なる色の光が包み込む。

一瞬の内に、サイガとデルタへと変身を完了させる。同時に、二人がファイズに対して駆け出す。

迎え撃つファイズは、開戦の合図と言わんばかり手首をスナップする。

カシャと金属音を響かせたファイズもまた突貫。

「やあああ!!!」

三人のベルトの戦士が、衝突する。

巧にとって、大きな転機となる戦いが幕を開ける。

オカルト研究部 V S サイガ・デルタ

ーアーシアッ！

「イツセー、さん？」

私の名前を呼ぶイツセーさんの声が聞こえた様な気がします。

ゆつくりと目を開けるとその先には、イツセーさんでも木場さんでもない別の男性が私を見ていました。

「目が覚めた様だね、アーシア」

「ディオドラ、さん…？」

どうしてこの人がここに？

確か気を失う前の私は知らない女の人に急にー。

「ああ、悪いけど少し拘束させてもらったよ。君に是非、見てもらいたい物があつてね」

私を襲った女性がオルフェノクであつたことと、この人が冥界を裏切り『禍の団』の方々と繋がった人であるを思い出します。

この場から逃げるために力を込めますが、私の力ではとても振り解けない魔力による拘束をされている事に気付きました。

「どうしてこんなに酷い事を、冥界を裏切つたりしたのですか…？」

「……………」

逃げられない私は思わずディオドラさんに訊ねてしまいました。

大きな戦いを引き起こしては誰かを、多くの人を傷つけてしまいかねないのに。

「すべては、君を僕のモノにするためさ」

「ああ、君の心を堕としたいのさ。その為にー」

突然、私の前に大きな画面の様な物が現れて、何かが画面に映ります。

その先にいたのは、私の大切な人達。

「これから彼らは君のために、君を救わんと死ぬんだ」

「イツセー、さん。部長さん…」

画面には変身したイツセーさんにソックリな方が二人、そしてその

人達と戦うイツセーさん達の姿が映し出されていました。

「共に見届けようじゃないか、アーシア。彼らの最期を」

ディオドラさんの声なんか聞こえないくらいに。

私は、イツセーさん達の無事を祈ることに決めました。

それが今の私にできる精一杯だから。

「ひやはははは!!」

フリードの狂った笑みと共に振り上げられたハイキックを腕を立てて受け止める。

受け止めた衝撃で踏み込んだ大地に軽くヒビを入れる。

ファイズの視界から、距離を詰めるサイガの拳が無防備な仮面に叩き込まれる。

「…ぐっ」

その一撃で数十メートルは弾き飛ばされたファイズは、仮面の下で苦しげに声を漏らす。

追い討ちをかけるように、二人の戦士は距離を詰めるべく突貫。

ファイズはなんとか立ち上がり、二人を迎え撃つべく姿勢を低く保つ。

サイガが地面を強く蹴り、走り幅跳びの要領で突撃。

「…!」

「悪いけど、君の相手はイツセー君だけじゃない」

ファイズに向かうサイガを地面から花のように咲いた剣が襲う。剣は主人が敵の前に立ったのを認識すると光となり、その場から消えた。

剣の主人、木場祐斗は聖魔剣を構えながらサイガを見据える。

「なによそ見してるんです…!」

「デュランダル!!」

今度はファイズの背後から攻撃を仕掛けるデルタに、強い光を纏ったデュランダルを操るゼノヴィアが上空からの振り下ろしを見舞う。

直撃こそしないものの、避けられた一撃はデルタがいた場所の地面を变形させている。

「あらあら、折角のパーチーをお邪魔するの?」

「何度でも、邪魔をするさー!」

ゼノヴィアが青い髪を揺らしながら、振りかぶる一撃、横薙ぎの一撃と連撃を続けるもののそれらは全て空を切るだけ。

危なげなく避け続けるデルタは、ため息を一つ溢してドライバー側面に取り付けられたデルタフォンを取り外す。

「Fire」

『Burst Mode』

音声機能付きのデルタファンを顔に寄せ、モード変更の音声が響く。

機械音が響いた後、デルタは照準をゼノヴィアに合わせるとその引き金を引く。

「くっ!」

デルタの動作とこれまでファイズの戦いを見てきた経験から、デュランダルの刀身を盾にしてフォトンブラッドの光弾を防ぐ。

防御に達するゼノヴィアの隣を、猫又化した小猫が駆け抜ける。

『戦車』の特性を遺憾なく発揮した掌底の一撃をデルタの胸元に放つものの、横薙ぎの拳が到達を防ぐ。ならば、と言わんばかりに足元を狙ったローキックを見舞う。

「わるうござんす。そんな蹴りじゃダメージ入らんですよ」

「ならこれっ!」

以前の姉である黒歌が放った妖力を放出する一撃。

それを真似て、青い光を纏った拳をデルタへ。

「今のは効くねえ…おチビさん」

「チビじゃ、ありません」

大ダメージとまではいかないものこのこれまでのおちやらけた態度とは違い、明らかに小猫への殺意向けていることから少なからずなダメージは入った模様。

「よそ見を、するなあ!!!」

完全にデルタの意識外にいたゼノヴィアが開幕の一撃よりも更に鋭く強い光を刀身に纏わせた一発をデルタに向けて振り下ろす。

その一撃はデルタの胸元を鋭く駆け抜け、強い火花を発生させる。後ろに二、三步ほど後退したデルタは無言のまま、その場から消えた。

「勘違いしてんじゃねえぞ…クソ悪魔共があ!!」

二人の背後に回り込み小猫に裏拳を、ゼノヴィアには脇腹目掛けてハイキックを叩き込む。

ノーガードの一撃に二人とも勢いよく吹き飛ばされる。

「小猫！ゼノヴィア！」

二人の危機にリアスも堪らずに駆け寄ろうとするも、その先にサイガが立ち塞がる。

それでも構うものかと、滅びの魔力をサイガに対して放つ。

「悪いですけど、貴方達じゃ勝てない」

「それならこれはどうかしら！」

サイガは涼しげな声と共にリアスの放つ滅びの魔力を拳一つで掻き消してみせる。

焦る様子を見せることもなくリアスの隣に、朱乃が並び同時に魔力を放つ。滅びと雷光の魔力は、最短距離でサイガに到達するも前方に突き出した掌がそれを容易に受け止める。

「コカビエル如きに効かなかった技が、僕に通用するでも？」

感情の昂りを全く感じない、冷たさすら感じる声と共にゆっくりとリアス達との距離を詰め始めるサイガの前に、今度はファイズが拳を振りかぶりながら現れる。

「お前ら、あっち頼む!!」

「イツセー！」

不意をついた一撃を難なく躲すサイガに舌を打つものの、その相手を引き受けてゼノヴィア達のカバーにリアス達を向かわせる事が出来たファイズは改めて眼前の敵を見据える。

「気になりますか、仲間が。…アーシア・アルジェントさんが」

「だったらなんだよ」

「それなら急いだ方がいいですよ、あの男は危険ですし」

「くつくつくつ…そうだよ、そうなんですよ!」

サイガの同情した気持ちを窺わせる声に反応し、ファイズからは距離の離れたデルタの笑い声が聞こえた。

戦いの最中だというのに、その声は皆の視線を集める。

「だあくいい好きなシスター集めがあのだいオドラ坊ちゃんのご趣味なんですわ」

そういった語り口で、デルタはフリードはまるで読み聞かせを始める様に語り始めた。

曰く、ダイオドラは神を信仰する聖女が大好きだ。そんな彼女達の信仰心を砕き、自分の物にする事を愉しみにしている。

そんなある日、自分が物にしてきた少女達よりも誰よりも好みの聖女様を見つけたと。

その聖女を物にする為に敢えて自分を治療させて、教会に追放させた。

聖女の名前こそがー。

「黙れ」

『Exceed Charge』

「おおっと!いきなり必殺技なんて、あれあれ? イッセー君怒っちゃった?」

これ以上聞くに耐えない話を終わらせる為に、デルタの前にファイズショットを構えたファイズが躍り出る。

ファイズインパクトが放たれるよりも前に体を前に運ぶ。必殺の拳を封じる為に膝を掴みその動きを止める。

両者共に全力を注いでいる為、均衡状態が生まれる。

「退け!今からアーシアの所に行く!!邪魔するなら…」

その言葉を紡ぎ切ることなく、ファイズは拳を振り抜く。

初めて戦った時とは異なり、単純なガードだけではなくファイズショットが届く前に後ろへのバックステップで威力を軽減させる。

後方に下りはしたものの、以前ほどのダメージではないデルタはケロツとした態度でファイズと向き合う。

「悪いけど、そいつは難しいってのが分かってる?」

ファイズとリアス達の前後からデルタとサイガが立つ状況。

アーシアがいる神殿はすぐ前方に見えるがこの二人がそれを許さない。

最早切り札がどうだとか言ってる場合ではない。この状況を打破するべくファイズアクセルに指を添えるファイズを祐斗が制止する。

「イツセー君、まだそれは使わない方がいいかもしれない」

「ならいつ使えっつんだよ」

「少なくともまだ敵が、あのオルフェノクが居るはずだよ」

巧の頭に、影山冴子の不適な笑みが浮かぶ。

ファイズのパワーアップツールでもあるファイズアクセルには一回の使用で10秒間のみという制約の他にも一日の使用頻度は一回までとなっている。

ファイズアクセルはファイズの体を流れるエネルギー、フォトンブラットの質を一時的に急上昇させる。その力にファイズ自体が耐えられるのが10秒間のみ、仮に変身したままで35秒間と短い時間制約が付けられている。

仮にこの場で使ったら影山冴子との再戦では使用不可になる。

「おやおや、作戦会議はもういいですか!？」

「ああ、んなもんいらねえよ!!」

フリードの煽りに反応する様に、ファイズとゼノヴィアが同時に飛び出す。祐斗と小猫はその後に続く様に駆け抜ける。

「アンタも懲りないねえ、ゼノヴィアちゃん!」

「折れないことが、私の取り柄なんでな!!」

何度目かのゼノヴィアの突撃に呆れた様な声を出しつつも、デュランダルの剣戟を躲しつづける。

当たれば決してダメージが無いわけではないが、当たらないのであれば問題はないと言わんばかりの回避を見せつける。

「なら、これならどうだい?」

余裕綽々のデルタの背後に回った祐斗の聖魔剣が迫る。

「問題ねえて、言っただろ…色男」

振り向いたデルタは聖魔剣を難なく掴み取る。その早業に祐斗は目を見開き、カウンターの回し蹴りを右半身に見舞われる。

祐斗から奪った聖魔剣を、クルクルと回しながらゼノヴィアに剣を振るう。

「オラオラ、避けないと死んじゃうよ〜」

「舐めるなあ!!」

デルタの振り下ろしを横に倒したデュランダルで受け止めて、屈んだ姿勢からの前蹴りを放つ。

軽く下がるデルタとの距離を詰める為に先方に軽く飛びながら剣を振り下ろす!!

ゼノヴィアとデルタの距離がゼロになるその最中、画面の下にある幼馴染の顔を思い出し、そして彼を助ける事を誓ったゼノヴィアの思いが最大限に高まった。

「これで終わりだ、フリードっ!!」

「……っ!!?」

ゼノヴィアの声に呼応するデュランダルが強いオーラを纏う。

聖魔剣とぶつかり合ったその瞬間、聖魔剣を真っ二つに斬り裂きそのままデルタの体を通り過ぎていく。

攻撃を喰らい、何秒間か体がふらつくデルタ。少しするとその体は平衡感覚を取り戻した様に真っ直ぐに立ち尽くす。

『Error』

機械音が、ゼノヴィアに届いた時には変身の際の光が再度発生してデルタの体を幼馴染のそれへと戻す。その体は力なく崩れ落ちていく。

即座に幼馴染の……アレンの元に駆け寄り、その体を支える。

「……あらあら、この俺がこんな所で、か」

「今のお前は、どっちなんだ」

「さあねえ、ただ『アレン』なんてもう……い、ない……」

そう言ったアレンは、静かに目を閉じる。

けれどその鼓動は止まっていけない事から意識を失っただけである事は確信できる。

「ようやく…か」

そう呟いたゼノヴィアは、まだ戦う仲間の元へ向かうべく立ち上がる。彼女の視線の先には、赤と青が交錯し続けていた。

「…えいー！」

小猫の放った妖気の込められた一撃を、球技でもするかの様に蹴り返すサイガ。その狙いの先には攻撃を放った小猫が。

「小猫ちゃん！、…ってええ！」

『Burst Mode』

「ギヤスパ―君！私の後ろに！」

小猫に向かう一発を、自身の力で停止させてみせるギヤスパ―。

彼女を守れた安堵するのも束の間、今度はフォトンブラットの光弾がギヤスパ―へ。

逃げ遅れたギヤスパ―を守るべく朱乃が前に立ち魔力障壁を展開。

「よせっ！」

容赦なく朱乃に対するフォトンブラットを浴びせ続ける。ファイズはサイガファンを握る右手を掴み上げて、その方向を逸らす。

サイガも距離を詰めたファイズの体を軽く持ち上げて、ボールを投げることの様に投げ飛ばす。

「イツセー！」

名前こそ呼ぶものの、投げ飛ばされたファイズが綺麗に着地して見せたのを確認したら安堵の表情を浮かべる。ファイズがそのまま駆け出したのを確認し、同時に飛び出すと怪我をした面々の元へ駆け寄る。再度確認した時、ファイズは再び拳を大きく振りかぶっていた。

ファイズとサイガが互いの間合いに到達する直前、サイガが変身を解除した。

「何の真似だ」

「事情が変わりました。…貴方達の相手はここからです」

ファイズに対して、無防備なまでに背中を晒すサイガー―天城。

何処かファイズがこの状況で手を出すことないだろうと信頼している様にも見えるが…。

「早く行かないと、まずいんじゃないんですか？」

そう言い残して、天城の体が転移の光に包まれた。

後にはなにも残らず、風がファイズの仮面を静かに撫でるだけ。

「ここから先は、私とイツセーと祐斗とギヤスパーで行くわ」

リアスは今のメンバーの体の状態を鑑みた上での判断を伝える。

ゼノヴィアと小猫はデルタとの戦闘でダメージ的に今後の戦闘は難しいと判断。朱乃はその二人と護衛と捕縛したフリードの見張りとして残す事に決めた。

既にアザゼルに連絡し、少ししたら応援が来る手筈になる。

因みにシトリー眷属とロスヴァイセ達はビートルオルフェノク達との戦闘を終えたとの連絡も取れた。

杞憂はもうない。後はー。

「アーシアを助けるわ、今度こそディオドラを吹き飛ばし、この騒動にケリをつけるわ!!」

おう！と皆が答える。

巧達は、アーシアがいる神殿に向けて駆け出し始めた。

「待ってる、アーシア。必ず迎えに行く」

告白

「分かったわ、朱乃達も気をつけてね」

そう言って、私ーリアス・グレモリーは、通信用の魔法陣を切った。

ディオドラとのレーティングゲーム用に用意された、恐らくはディオドラ達の本陣であろう神殿の階段をアーシア元へ辿り着く為に再び走り出す。

「部長、それで朱乃さん達は？」

「フリードを引き渡して、こちらに来るわ。少し時間がかかるとは思うけれど」

先ほどまで朱乃と話をした内容をそのまま、祐斗やギヤスパー…そして、巧さんに伝える。

私たちの先頭を走る彼の顔は見えないけれど、取り敢えずみんなの無事を安堵している事は声から分かった。

「あとは、アイツらをぶっ飛ばして…アーシアを助けられればいいってこったな」

「ええ、そうよ」

「見えました!!」

女子の制服で必死に走るギヤスパーが前方を指差す。

その先には恐らくこの神殿の唯一にして、巨大な扉が鎮座している。

そして、アーシアがそこにいる事など想像に容易い。

「はあああ!!」

私は神殿の扉に魔力結界が貼られていることに気づき、前方の空間に手を突き出す。

立ち止まった私に三人が何をするのかと視線を集めるも、巧さんはすぐに目的に気づき、私の前方にいた位置から少し動く。

「っ!!!」

「す、凄いです部長」

私の突き出した手の僅か前方の空間で形成される魔力を感じたの

か、ギヤスパーが感嘆の声を呟く。

この魔力はこれまで私の放ってきたものはレベルが違っている。

そう、私は弱い。

本来『王』である私は、いざという時に眷属を守らなければならぬ。

勿論『王』が一番強ければならないわけではない。それでも、私にお兄様やグレイフィアの様な力があればと、この数ヶ月で何度も考えたのだろう。

強くないといけない。

今私の隣で、本来であれば戦うことが難しいほどに体力を消耗した大切な『眷属』を守る為に。

「つつ!!」

放った滅びの魔力は100mはあった筈の距離を即座に飛び越えてから扉へ衝突した。

扉に施された魔力とぶつかり合いながらも、滅びの魔力は扉を容易に穿つ。

「さあ、行きましょう」

扉が完全に破壊されたのを確認し、前を歩き出す。

今、私が放ったのはこれまでよりも滅びの力を高めた一撃。

私だって、あの一ヶ月レーティングゲームの理論を学んでいただけじゃない。

その証明が、私の前に結果として現れていた。

「きやああ!!」

突然起こった扉の爆発に、私ーアーシア・アルジエントは驚きの声を隠せませんでした。

それは、私だけでなく。

「あらあら、随分と派手な登場ね」

「そうみたいです。：アーシア、これから君の最後の希望を打ち砕

「こうじゃないか」

私をこの神殿に連れてきたディオドラさんとその隣に立つ日本人の女性も私ほどではないけれど、びっくりした様子を見せます。

ディオドラさんの隣にいる女性は、一見普通の女性に見えるのに：私に『過去』の話をしたディオドラさんよりも怖い人に見えます。

「そういうえば、貴方ファイズの恋人か何かかしら？」

「えっ」

女性を見ていたからか、向こうも私の視線に気づき、体が自由に動かない私の前に彼女はニコニコと不自然なまでの笑顔で近づきます。

突然の質問に、私は返す言葉が見つかりませんでした。

私は、イツセーさんのことが好きです。

確かに、あの人は不器用で一見冷たい人に見えるかもしれないけど、確かな優しさを持った純粋な人なんです。

そんな私の想いを見抜いてたのか、女性は突然背中を翻しました。

「答えは要らないわ。：：だつてもう、来たもの」

その言葉と共に、私の前にイツセーさんが、部長さんが、木場さんがギヤスパ―君が神殿の中に着いたんです。

「イツセーさん」

自分の名前を呼ぶアーシアを見て、握っていた拳の力を更に強める。

体は恐らくはディオドラが施したであろう魔法陣で拘束されて可憐で優しい顔は泣き疲れたのか目元は腫れて、表情は憔悴しきっている。唯一、良かった点は着衣に乱れがなかった点だ。

あの時のディオドラの表情からいきなり凶行に及ぶ可能性すらあったのだから。

「ディオドラ、貴方アーシアに」

「ああ、そうさ。全てを話したさ。そう、全てね」

雄弁に語るディオドラを前に、反吐を吐きそうな気分になる巧たち。

「それにしても君達とはつくづく縁があるみたいだ。レイナーレを倒したと思ったら、アーシアを掠め取り、僕の『女王』さえも葬ってくれたんだから」

「「っっ!!」」

ディオドラの発した言葉に、リアスを除く三人は過剰に反応。

三人の様子に、リアスは先ほどの会話と状況を思い出す。

「そういえば貴方の眷属がオルフェノクになっていたわね、あれは？」
「ああ、それは彼女達との契約だからね。彼女達の力を借りるのに、サンプルを提供したに過ぎない」

サンプルーそれはつまり自身の『眷属』を差し出したのだ。

悪魔をオルフェノクに変える為の実験に。

「そんな事の為に、貴方は!!」

「そんな事とは言ってくれるじゃない。あの子たちのお陰で、私たちはまた一歩偉大な計画を前に進められたわ」

ディオドラへ無意識的に足を進めるリアスを止めたのは、ディオドラの隣に立つ影山冴子。

「まあ、半分以上はオルフェノクにならずに死んでしまったけれどね。その代わりに新しい女の子はそこにいるわけだし、問題ないでしょ？」

「勿論さ。もうあの子たちには飽きてたし、アーシアが僕のモノになっってくれるならお釣りが来る程さ」

勝手な物言いに今にも二人に飛びかかりそうなりアスの横に、巧達が並び立つ。

「部長、ここは僕たちも」

「一緒に戦います!」

「ボケつとしてんじゃねえよ、リアス」

『Standing By』

ほん、とリアスの肩を軽く叩きながら変身コードを入力。
ファイズファンをいつも通りに高く掲げる。

「変身！」

『Complete』

巧の体を赤い閃光が包み込み、その体をファイズへと変身させる。

二人の敵を見据えながら、ファイズは手首をスナップさせる。

カシャ、と響きのいい音が開幕の合図となる。

「はああ!!」

開幕の一撃は、ファイズだった。即座に距離を詰めて、一足飛びと共に拳を振り上げて全力の右ストレートをディオドラへ。

一方のディオドラも、ファイズの一撃目に目を丸くするも特に防御もカウンターの姿勢も見せない。

「貴方の相手は、私よ」

全力のファイズのストレートを、死角から現れたロブスターオルフェノクがパリィ。

行き先をずらされた一撃は完全に空を切り、重心が乱れる。ロブスターオルフェノクが一瞬で膝を前に突き出した。腕を交錯させて防御を見せるがその上から叩き込まれた一撃はファイズを大きく吹き飛ばす。

「くそっ……!」

ロブスターオルフェノクの強さに、そんな言葉を吐かずにはられない。

余裕満々の様子で、距離を詰めるロブスターオルフェノクの姿を改めて見据える。

エビを模したロブスターオルフェノクいや影山冴子は、本来は力で押すというよりも技巧に長けた印象だった。

常に勝機の見えた状態で戦いに臨み、こちらの嫌な部分突いてくる。

そんな印象とは少し異なるパワーやスピード。

「ようやく気づいたのね。私は祝福を受けたのよ、『王』によってね」
影山冴子は巧がこの世界に来る前の最終決戦の折に、オルフェノクの王ーアークオルフェノクより、死の運命を乗り越える程の力を分け与えられたたった一人の存在。

それにより、巧の知らないパワーアップをしていたのだ。

「だとしても…アンタに、負けるわけにはいかねえんだよ！」

「いいわ、そろそろ貴方を終わりにしてあげるわ」

例え眼前の彼女が以前よりも強かろうが、彼女を倒さなければならぬ事には変わりはない。

決意と共に駆け駆け出すファイズを、いつの間にか出現させたレイピアを持って待ち構える。

ファイズの渾身の一撃がロブスターオルフェノクに向けて放たれた。

「イツセー先輩…！」

「ギヤスパー君、今はこっちに集中するんだ！」

ファイズの戦いに思わず目を向けるギヤスパーに祐斗は諫める様に声を掛ける。

ギヤスパーが注意が戻った事を確認し、祐斗は前に躍り出る。

聖魔剣を携えながら、悪魔の羽を展開し空中に浮かぶディオドラに向けて一撃を放つ。

「聖魔剣…か。残念ながら、そんなモノ今の僕には効かないよ」

刃がディオドラに届かず、彼が展開する魔力障壁とぶつかるのみ。

ならばと言わんばかりに着地した途端に地面を強く蹴り、多方向からの斬撃を見舞うもその全てが防がれてしまうばかり。

「くそっ…！」

「祐斗先輩の斬撃が効かないなんて」

「二人とも下がって！」

主の声が聞こえ、祐斗はギヤスパーを抱えてその場を離れる。

その後、リアスが放った滅びの魔力が二人のいた場所を駆け抜け、デリオドに到達する。

「凄まじいなあ、確かに以前の僕ならこれで終わってたさ。でも、今の僕にはオーフィスからもらった『蛇』があるからね！」

昂った声で、リアスの魔力を障壁で受け止める。デリオドラの体からは魔力が溢れ出し、徐々にその量を増加させる。

時間こそ掛けたものの、デリオドラは自身の魔力でリアスのそれを相殺してみせた。

「…悔しいけど、強いわね」

「そのようですね。でも…」

「あの人、何かおかしくありませんか？」

祐斗の斬撃を物ともせず、リアスの魔力を相殺して見せたデリオドラに思わず本音を溢すもギヤスパーがふと疑問を口にした。

事前に聞いていたデリオドラの力とはかけ離れているのだ。

元々、アスタロト家の次期当主でもある為決して弱いわけではない。けれどここまでの強さをあの男が隠していた点も腑に落ちない。

「それにさつき言ってたオーフィスの蛇って…」

「戦闘中におしやべりかい？随分と余裕そうだね！」

「部長！ギヤスパー君！」

呟いたリアスの頭上に魔力を放出するデリオドラ。

それを視認した祐斗が咄嗟に二人の体を抱えて距離をとる。

通常であれば難なく避け切れていた一撃だが、二人を抱えていたからかその威力を体で受け止める事になる。

「祐斗先輩！」

「祐斗、背中が…」

30m以上は距離を取った祐斗が苦悶の表情で膝を着く。

着ていた制服は破れ、爆発によるダメージで背中が爛れていた。

「大丈夫、です。それよりもデリオドラを！」

心配する二人に警戒を促す祐斗。その警鐘を示す様にデリオドラが追撃の為に三人の前に――

「やめろおお!!」

魔力を放たんと手を翳すディオドラの動きをギヤスパーが止まる。完全な静止、とまではいかないまでのその動きは先ほどのそれとは大きく異なる。

「吹き飛びなさいっ!!」

リアスが先ほどの扉への一撃よりも更に、滅びの力を高めた魔力をディオドラへ。

その一撃は、敵に放つというにはスピードはないもののギヤスパーの能力で足掻く事しか出来ないディオドラには十分な一撃になる。

——この僕が、こんな奴にいい:!!

静止したディオドラは喋る事も儘ならない状態で、刻々と迫るリアスの魔力を待つのみだった。

そんな彼の視界に、自身が拘束したアーシアが映り込む。

幼い頃にその存在を知り、興味を持った聖女。

神に祈りを捧げる美しい少女達。

輝く存在を前に、彼が抱いたのは悪魔としての欲望なのか——醜く汚して自分の物にしたい。

これまでの中で、最も心惹かれた存在。

自身を癒した可憐な聖女。

「あーしあ」

静止したディオドラはもう手は届かない存在の名前を呼びながら、滅びの力によりその体を包まれていった。

「おら!!」

「ふふふ、あつちは終わりみたいね」

ロブスターオルフェノクがファイズの右フックを軽くステップを踏んで避ける。彼女の呟いた言葉に、ファイズも一瞬目を向ける。

その先には手傷を負いながら地面に膝をつく祐斗と彼の体を支えるギヤスパー。最後に傷だらけのディオドラの身体を魔力で拘束するリアスが確認できた。

「なら、こつちも終わらせてやるよ」

『Exceed Charge』

ミッションメモリーを装填したファイズショットを構えながら、ファイズフアンのenterを押す。

フォトンブラットがファイズショットに集約され、一瞬赤く光るのを確認したファイズが駆け抜ける。

「やああああ!!」

渾身の力を込めたファイズの一撃は、ロブスターオルフェノクの不敵な笑みを前に空を切った。

避けられた感覚すら抱けない。一体どういう事かと答えを探すファイズの背後にレイピアを振りかぶる影が現れる。

「イツセー君、後ろ!!」

「!？」

祐斗の声に咄嗟に振り向いたファイズ。それと殆ど同時にレイピアが振り切られ、フルメタルラングから火花が散る。

巧の声が響くよりも先に、第二撃が打ち込まれる。右斜め上からの一撃を咄嗟に立てた腕で受け止める。

カウンターの一撃を腹部に見舞うものの、効果は見受けられない。そこからの乱撃を打ち込むが――

「だから言ったじゃない。『祝福』を受けたって」

ダメージで怯む様子すら見せない様子に巧は、かつての敵を思い出す。

ドラゴンオルフェノク、北崎。

彼は巧にとって苦戦した敵の一人であり、デルタとの同時必殺技さえも耐え切ったことすらある。

今の彼女には北崎に追隨する耐久力を感じ、以前からの違和感に答えを見つける。

「だからアンタ、前より強いんだな」

「ええ。ハッキリ言って今の貴方達をなんて容易く殺せるわ」

足音を神殿に響かせながら、ゆっくりとファイズとの距離を詰める。

その最中、ロブスターオルフェノクの足が止まるー否、静止する。ロブスターオルフェノクの背後に、能力を解放するギヤスパーがいた。

その一瞬でファイズは切り札を切る。

アクセルメモリーを抜き取り、ファイズフォンを換装。

『Complete』

ーありがとうな、お前ら。

このタイミングまでアクセルフォームを使用せずに乗り切れたのはリアス達や匙達の力無くしては難しかった。

巧は『仲間』達への感謝を呟きながら加速する。

『Start Up』

ファイズアクセルのボタンを押し込み、10秒間音速の世界へ。

既にこの時、ロブスターオルフェノクはギヤスパーの能力を跳ね除けファイズと同等の速度へ加速している。

ーここで、コイツを倒す。

ファイズはギヤスパーの『神器』を跳ね除けてアクセルフォームと同等の速度を誇るロブスターオルフェノクに驚嘆しつつもここで負けるわけにはいかないと1秒にも満たない速度で肉薄し、アッパーを振り抜く。

その一撃はクリーンヒットし、ロブスターオルフェノクの体が宙に舞う。

「やあああ!!!」

宙に浮いた体を複数のポインティングマーカ―が突き指す事で放たれる現状のファイズにとって最強の技ーアクセルクリムゾンスマッシュ。

その一撃目が突き刺さりんとした正にその時の事だった。

「悪いわね、もう効かないわそれ」

ファイズの、巧の耳朶に響いた呆れにも似た嘆きの声。

複数回にやるクリムゾンスマッシュの波状攻撃、その初撃をなんと真正面からレイピアに青い炎を纏わせる事で盾にして耐えてみせた。

既に複数のポインティングマーカ―がその体を拘束しているにも

関わらず、その上から防ぐという事すらやってのける。

「なに!!」

「今度はこっちの番よ」

一撃目を防がれたファイズは地面に着地し、残りカウントが6秒と確認。ならばと再度攻撃を仕掛けようとするファイズに刺突の雨が降り注ぐ。アクセルフォームと同等の速度から繰り出される斬撃に防戦一方になるのみ。

「ぐあああ!!」

均衡が突然崩れる。

一撃がファイズの体を襲う。二撃目はファイズの体か宙に浮く最中で放たれる。その後は三撃、四撃と続く。

『Time Out』

ロボスターオルフェノクの斬撃に倒れるファイズに、無情にも伝えられたのはアクセルフォームの時間制限を伝える機械音。

リアス達も、アクセルフォームからノーマルファイズに戻った状況とロボスターオルフェノクが健在な状態に驚くばかり。

「頼みの綱も使い切ったみたいね」

「なん、だと……!」

体勢を崩しながらも今までと変わらない様子で睨みつけるファイズを他所に標的をリアス達に変えるロボスターオルフェノク。

左手に持ったレイピアに青い炎を纏わせて、横に振るうと斬撃が実体化しリアス達へ。

「やめろおおお!!」

痛みに支配される体をなんとか動かして、体を前に運ばせる。

目の前で倒れる仲間達の姿が幻視した。

そんな結末など、こっちから願い下げだ。そんな独り言を呟きながらファイズは斬撃とリアス達の間へ突き進んだ。

ギヤスパーは凄まじい速度で肉薄する斬撃に、神器の力を発動させようとするも無意味に終わる。

リアスは祐斗とギヤスパーの前に立ち、魔力障壁を展開。

「部長！」

自身を呼ぶ声にリアスは微かに母笑みながら前を向いた。

この攻撃からこの二人を守り抜いたみせると。

覚悟を決めたリアスの目には、そんな自分さえ守ろうと身体を投げ出したファイズの姿だった。

「イツセーさん!!!」

未だ拘束されたままのアーシアの前で、ロブスターオルフェノクの攻撃を正面から受け止めドライバーは体から離れて変身解除した巧の姿が映る。身体中傷だらけで、このままでは死に至るのは誰の目にも明らかだった。

「イツセー!!」

「先輩!!」

「イツセー君!」

リアス達が倒れ伏す巧を呼ぶが、その声に反応し僅かに体が動くだけ。

そんな巧を殺さんとロブスターオルフェノクが足音を響かせながら近づき始めた。

「みなさん、逃げてください!!!」

アーシアの注意でリアスはロブスターオルフェノクの接近に気づき、三人の前に立つ。

手のひらに魔力を集中させ、滅びの魔力を放つものの青い炎を纏うレイピアの前では相殺されて意味を成さなかった。

「イツセー、さん…!!」

拘束された状態で巧の名を呼ぶ。いつもなら短いながらも確かな返事してくれた彼が今は僅かに呼吸をするだけ。

そんな彼を救うのは自分にしか出来ない。短いながらも、確かに身につけた力で大切な人を救う。

「お願い、あの人を――守りたいんです」

拘束された状態で、アーシアの『神器』トワイライトヒーリング 聖母の微笑みから彼女の瞳と同じ緑色の光が放たれる。

本来相手に触れる事で癒しの力が発動される筈だったが、アザゼルの助言によりもう一段階の上の進化を果たしかけていた。

遠距離からの治療。

アザゼルから提唱されたアイデアは、言うは易し行うは難しといった物だった。結果としては離れた距離からの治療の実施は可能ではあったもののその精度は触れた時のそれとは大きく差があった。

「……っ!!」

それでも、今この場で彼を癒せるのは自分しかない。

強い決意に呼応して指輪から離れた光は巧の体を照らしていく。

その光景に思わずロブスターオルフェノクも足を止めて、アーシアに目をやる。

少しすると先ほどまでみんなの声に微かにしか反応できなかった巧の体かは傷が減っていく。

「イツセー!!」

「……んだよ……」

光が消えると巧は意識を取り戻して体を起こす。

癒しの体は傷を癒すものの、体力や流れていった血液までは戻らない。

オルフェノクであり悪魔の巧と言えど体の構造には勝てない。ふらつく巧の体をリアスが支えて、改めてロブスターオルフェノクと向き合う。

「まだ続ける気? もう私には勝てないことは分かったでしょ?」

諭すような声は諦める様に促す様に聞こえるが、巧にとってそれは承服しかねる結末。

「ああ。アンタに負けるわけにはいかないんでね」

ロブスターオルフェノクが、レイピアに青い炎を纏わせる。10メートルを超える距離でもヒリヒリとその威力を感じ取れる。

「やっぱり貴方にはまず心から折れてもらおうわ」

そうやってロブスターオルフェノクはレイピアを振るったー
アーシアのいる方向に。

「アーシア!!」

「アーシア先輩ー」

リアスが青い炎が向かう先にいるアーシアの名を呼び、ギヤスパ
ーが炎を止めようと『神器』を発動するも止められない。

祐斗が足を前に運ぶの体のダメージがそれを許さない。

皆がアーシアの名を呼ぶしか出来なかった…巧を除いて。

「あああああ!!」

叫びとも猛りとも言える咆哮と共に、アーシアの前に立った巧の身
体は青い炎を受け止めながら変化を遂げた。

巧の正体、狼を模したウルフェノクに。

「イツセー…さん?」

自身に迫る青い炎の前に、思わず目を瞑ったアーシアが何秒かした
後にゆっくり目を開くとそこには思ってもいない光景が飛び込んだ。

「ハア…ハア…ハア…!!らああ!!」

呼吸が乱れながらも、地面を強く蹴ってウルフェノクの身体
を加速させる。ロブスターオルフェノクの懐に飛び込んでから、拳で
の乱撃を叩き込む。

ウルフェノクフェノクのスペックはノーマルファイズのそれを大き
く上回り、主な長所はアクセルフォームに追従する速度。速度自体は
アクセルフォームには敵わないながらもスタミナが切れるまでは維
持できるアドバンテージがある。

更にはファイズの時には使用できなかった魔力の行使も可能とな
り、以前までのウルフェノクとは比べ物にならない程の強さと
なっていた。

「さつきよりも、こっちの方が手強いわね!」

「知るか!!…今度こそケリをつける!!」

一瞬、自分の正体に驚いている仲間達に目を向けるもそんな余裕をひけらかせる相手ではないためすぐに向き直り、ハイキックを見舞う。

スウエーのみで交わしたロブスターオルフェノクが刺突を繰り返すもの赤い魔力を纏った拳がレイピアを弾く。

そこから一步距離を詰めた巧は。

「やあああああ!!!」

強く光った赤い魔力を纏いながら全力の右ストレートをロブスターオルフェノクの腹部へと叩き込んだ。

その身体はくの字に折れ曲がり、神殿の壁へと叩きつけられたー。

「…イツセーさん!!」

漸くディオドラの魔力が効果を失ったのかアシアを拘束していた魔法陣が消え去る。

解放されたアシアはそのまま駆け出す。巧を呼びながら両手を広げながら彼の元へ辿り着くと灰色の肌を優しく包み込む。

「…怖くないのか?」

「ビックリはしました。けど、怖くないです」

なんで、と続けようとする巧の背中をより一層強く抱きしめながらアシアは彼への変わらない気持ちを素直に伝える。

「だって、イツセーさんはイツセーさんですから」

以前巧が朱乃に伝えた言葉を今度はアシアが巧に向けて伝える。

言葉とは裏腹に微かに震えるアシアの手は、かつての仲間『園田真里』を巧に思い出させる。真里もまた巧がオルフェノクという事実を前に恐怖したもののそれでも巧が巧であることを信じたいと、隣にいる事を選んでくれた。

きつとアシアも、いやアシアだけではない。この世界で新たに出会えた仲間達もきつと同じであってほしいと願う。

言葉と共に微笑むアーシアと向き直り、ウルフオルフェノクから兵藤一誠の姿へ。

「そうか……。悪いな、遅くなって」

巧は自身を信じてくれた少女の手を握りながら、仲間達の元へと戻っていった。

こうしてアーシアを巡る戦いは一応の決着を見せた。

けれど、後の調査でリアス達が拘束したはずのディオドラと巧が退けた影山冴子の姿は確認されることはなかった。

巧達の戦いと同時に行われていた禍カオス・ブリゲードの団と三大勢力との戦い。

サーゼクス・ルシファアが旧魔王の幹部クルゼレイ・アスモデウスを討伐。

アザゼルが同じく幹部のシャルバ・ベルゼブブを討伐。

この間にアザゼルが首魁でもある無限を司るドラゴン、オーフィスと接触。

オーフィスの目的が空間と空間の境目でもある次元の狭間で静寂を得る事であり、そこに存在している夢幻を司るドラゴン、グレードレットを排する事が根底にあることも発覚。

この結果、旧魔王派は統率力を失い組織内でもその地位を下げている事となった。

だが依然として組織カオス・ブリゲードとしての禍の団は存在しており、そこに属するオルフェノク達も存在している。

戦いから何日か過ぎた頃、駒王学園体育祭当日。

体育着の巧はよく皆で昼食を取るグラウンド前の校庭で座り込む。

クラスメイト達が競技に夢中になる中、巧の少し後ろでスーツ姿のアザゼルから今回の事の顛末を聞かされていた。

「つてというのが、今の時点でハッキリしてる事だ」

「…そうか」

巧からしてみれば、オーフィスだのグレートレッドだのと言われてあまり理解できない。それでも、世界を揺るがす出来事の現場に居合わせていた事を実感していた。

「まあ、お前らにしてみればそんな事より、お前の告白の方が衝撃的だったか」

アーシアを救助した後、朱乃達やシトリー眷属達と合流した巧は改めて皆に自身の正体をイーウルフオルフェノクである事を伝えた。

皆、驚きはしたものの匙の発した一言がその場を落ち着かせた。

『お前がオルフェノクだからなんだってんだ！俺たちは【悪魔】だ。お前が化け物なら俺たちだって化け物なんだよ』

その言葉に皆も同意し、改めて巧はこの世界で出会えた仲間達に感謝をしなければと考えていた。

「アザゼル、俺はアイツらに出会えて良かった」

「ああ、良かったな」

グラウンドからアーシアがこちらに向かってくるのが見え、小さく笑ったアザゼルは巧の肩を叩く。

「ほら、さっさと行ってこい！」

「いきなり押すなよ！」

アザゼルに押された巧は、向かってきたアーシアと衝突しそうになるも直前にアーシアの体を受け止めて正面衝突を防ぐ。

思わぬ距離の近さに二人の息が止まる。

「悪い…」

「ごちらこそ、止まらなくて…」

会話の続かない二人に告げられる放送部のアナウンス。

次の種目は巧がアーシアと二人で行う二人三脚である事を通知。

二人は選手入場の入り口まで向かい、数分後競技開始の告げる空砲の音がグラウンドに響き渡った。

「アーシア、イツセー。お疲れ様」

競技を終えた二人を祝福する様にオカルト研究部が勢揃いで出迎える。

結果としては、巧とアーシアが走る組では一位を獲得。特にリアスが二人に感激をし、他の面々も一緒になって健闘を讃えるため今に至る。

素直に喜ぶアーシアの隣で、大した事じゃないと悪態をつく巧。

「そろそろ外すぞ」

「はい」

巧がアーシアと自分の足を固定する紐を外そうと手を添える。

スルスルと紐が解けて、足が自由に。

その時、巧は気づかなかった。アーシアが意を決した表情をして、そこから起こす行動を。

「イツセーさん」

「なんだーっつっつ!!?」

名前を呼ぶアーシアの声。振り向いた巧の唇に、自分の唇を重ねるアーシア。

アーシアからの突然のキスに、いつもの過敏さを一切感じさせない重い動きの巧にアーシアは更なる追い討ちをかける。

「私、イツセーさんの事が大好きです!!」

オカルト研究部全員の前で宣言するように告白するアーシアを前に、巧は思わずアクセルフォームを使用して逃げ出したい気持ちに駆られた。

ここから兵藤一誠が歩む世界とは異なる物語が紡がれる。

そして、乾巧の文字通り二度目の旅にしてオルフェノクとの最後の戦いが展開される。

幕間 外道神父の生きる道

やめて、お願い！

若い女性の声でした。

助けを懇願する血塗れの若き女性。

頼む、息子だけは！

子供を腕の中に抱えながら叫ぶ男性の声。

老若男女問わず様々な人々の助けを求める声。

そんな声を無視して、全ての命を奪い続けた自分。

ああ…また一つ命を奪った。彼は手に握った剣を振り下ろす。

「……………は」

どうして生きているんだろうか。

自身の死を願っていたフリード・セルゼンは視線の先にある天井を見て呟いた。

恐らくは自分のために用意された病室。

治療の為の設備を見て、どうやら自分は助けられた事に気づく。

「なんで生きたんですかあ…俺は…」

目が覚める前に見た最後の光景。

もう忘れたはずの幼馴染が自分を斬り伏せる瞬間、死を受け入れた。

けれど蓋を開ければ自分は生きていて、ずっと自分の思い通りに動かなかった体は自由に動くようになっていた。

「最悪だ」

フリード・セルゼン…本名アレン・デリットは、そう呟き再び目を閉じた。

巧達がディオドラ騒動を解決して一週間後。

冥界、ソーナ・シトリーの生家でもあり領地のシトリー領。

そこは冥界の中でも治療施設が発達し、人間界の医学レベルと魔力からの治療を併用した病院も存在する冥界屈指の医療レベルを誇る。その為様々な症状の患者達が身を寄せる場所でもあった。

「…んで、アンタらは俺に何してくれちゃったわけ？」

「貴方の意志を矯正していた薬物や凶暴な人格の抑制、そして主人格である貴方の意識の回復に努めていました」

目が覚めた事での健診の最中、自身の体を診察する医師に対し率直な質問をぶつける。対する医師もフリードの眼光の鋭さに気圧される事なく静かに言葉を返す。面白くなさそうに舌を鳴らすフリードに、医師は言葉を紡ぐ。

「ハッキリ言えば、主人格の復活は難しいでしょう。本来の貴方もう一つの人格を作り出してから年月も経つたますし、その間に投与された薬の影響は我々では完全に元に戻す事はー」

「分かっていますよ、今の俺はどうしようもねえ外道神父ってことだろ？ガキの頃の自分なんてとっくに昔に死んでる」

医師の言葉を待たずにフリードは答えを示した。

その顔には、自分の意思で行った行為を受け止めようとする余りにも幼い少年の色が映し出されていた。

「アレン!!!」

医師の診察から数時間後。

自身に用意された病室で何をするでもなく天井を見つめるフリードの元にもう居ない自分を呼ぶ声が響いた。

「よう、ゼノヴィアちゃん」

「目が覚めたのか？」

入ってきた記憶の片隅にある幼馴染の名前を軽妙な口調で呼びながら軽く手を振って出迎える。その顔には汗が浮かび、急いでここまでできた事が伺える。

少しすると複数の足音が聞こえ、さらに多くの姿がフリードの視界に映り込む。

「あらあら悪魔さん達勢揃いじゃないですか。なに、お礼参りでもしてくる感じ？」

病室に入ってきた悪魔達、オカルト研究部の面々に変わらない口調をぶつけるも相對した彼らは呆氣に取られた表情を見せるのみ。

「フリード、セルゼンなの？」

彼らの気持ちを代弁する様に、リアスが問う。

「ああアンタらも知っての通り：フリード・セルゼンだぜ」

そう答えた彼は以前とは全く異なり、悪意や殺人の快楽に魅せられた者が浮かべるような顔付きではなくなっていたのだ。

「…んで、俺は死刑にでもなるんですかい？」

「いえ、貴方は監視という形で今は落ち着いてるわ」

リアスから今の自分が現状軟禁状態である事を把握して、つまらなしいと言わんばかりに溜息を零す。

隣ではゼノヴィアが記憶の中との幼馴染とのギャップに驚きながら、彼を横目に捉えていた。その視線に気づいているフリードは居心地の悪さを感じていた。

「二つ、言っとく事がある。アンタの幼馴染はもう居ない」

ゼノヴィアの視線に耐えられなくなったのか、フリードは口を開き彼女に事実を伝える。

「だから、今の俺の中に昔の…アンタにとつての幼馴染を探さないでくれ。そういうのはマジでウザいんすわ」

声をかけようと向き直るゼノヴィアにフリードは残酷な言葉を突き立てる。何秒かして、小さく震える体に入力してゆつくりとゼノヴィアは立ち上がる。

「そうか…。でも、やっぱり私はお前が、こうして生きててくれてすごく嬉しいんだ。…それだけでも分かってくれればいい」

いつもの気丈な姿とは打って変わった力の無い背中。

病室に背を向けるゼノヴィアを追う様にリアス達も病室を後にした。

ただ一人、ここまで口を開かずに居た巧を除いて。

「イツセー君一っいいっすか?」

「内容によるな」

数分間の沈黙を破りフリードは巧に質問をする。

腕を組み質問を待つ巧にフリードは願望を口にする。

「俺の事、こころー」

「やだね」

最後まで言わずに巧は質問にNOと回答した。

あまりの速さに一瞬呆気にとられるフリードではあるが、即座にいつもの砕けた様子を取り戻す。

「やだやだ、全く冷たいねえイツセー君は」

「お前、なんで…」

死にたいのか。

口にごそしないが聞こえた問いに、フリードは嘲笑う様に答える。

「声が消えねえんすわ。自分^{フリード}が殺した連中の。人間も悪魔も墮天使も天使も、色んな奴らを殺して、愉しんだ。その中には自分よりも大切なモンの為に俺に懇願したヤツもいたんだよねえ…。んな奴らも含めて全員殺してきた。本来^{アレ}の自分^ンも最初の頃は止めようとしてけどいつからか、声が消えちゃったワケよ」

——なんで、なんで君は命を奪い続けるんだ!!

——決まってるでしょーが。愉しいから。ちゅーかそれ以外ないっしょ!

「きつとアレンの奴も気づいちゃったのさ、自分が生み出した存在が抱えきれない程の罪つてのを抱えてることに。そして、自分自身が生まれた事が罪つてジレンマに襲われて消えちゃった。その結果生まれたのが、フリードでもアレンでもない俺つてわけさ…アンダースタンド?」

だから俺に死という償いをさせて欲しい。

言葉にこそしないものの、その眼はそんな懇願と共に巧を射抜いていた。

一つ呼吸をして巧がフリード向き合う様な形で、口を開いた。

「だとしてもゼノヴィアはお前が生きる道を選んでほしいはずだ」

「許されるわけねえーでしょうが。アンタ話話聞いてた?それともバカア?」

何処ぞのサードチルドレンの様な罵倒を軽くスルーして、巧は肩にかけていたナツプザックからあるものを取り出し、ベットテーブルに置いた。

「お前がどうしたいのか、もう少しじっくり考えろ」

巧の言葉に耳を貸しつつも、視線はベットテーブルに置かれたそれに注視される。フリードにとっての罪の象徴でもあるデルタドライブとデルタフォン。

デルタギアに触れるフリードに背を向けて、巧もまた病室を後にしようとする。

「でもな、少なくとも生まれた事に罪はないっつて思うぜ。…俺はな」

そう言い残して、巧もまた病室を後にする。

ただ一人残ったフリードはベットテーブルに置かれたデルタギアにゆっくりと手を触れながら、静かに呟いた。

「畜生。どうすりゃいいんか、俺は」

そんな問いに答えてくれる相手も居ない。

病室には、自らを外道神父と名乗る少年の後悔と罪悪感の涙と啜り泣きが小さく響いた。

ゼノヴィア達との邂逅から数週間が経ち、フリードの体は大分回復の傾向を見せていた。

劣悪な環境と薬物による人格の改変は魔力と治療により矯正され、身体的な部分も問題はないとされ一応の退院の目処も経ち始めた頃。「…で、んで俺がアンタらと買物なんざしなきゃならねえんスカ？」「俺が知るか！…たくつ、せつかく会長達と楽しく過ごせると思ってたのによ」

「あははは…」

「……………」

入院していた病院から冥界の列車に揺られて30分ほどのシリ領の首都には周囲の目を引く四人の若者達。

不機嫌というより怪訝な顔つきのフリードに同行するのは、巧と祐斗と匙の三人。

この奇妙な男子四人組の組み合わせの理由は。

「仕方なきいき。君は退院をしたら駒王学園に編入するんだからその準備の為に色々と用意しないとならない物もあるしね」

ふと宥める様に補足を加え祐斗から視線を外し、フリードは頭をガシガシ掻きながら尋ねる。

「随分とお優しいですなあ、色男君。俺は、アンタと何度かやり合った相手なんですけど？」

「それはもちろん分かってるさ、でも今の君からは僕達に対する敵意や殺意は感じられない。…僕も出来る事なら仲間の大切な人を傷つたくはないからね」

祐斗の言葉にそうですか、と軽く返事をする事としか出来ない。

居心地の悪さを感じるフリードはいつも通り口数の少ない男に話

を振る。

「てか、イツセー君も来るなんてこれまた驚き」

「…アイツらに押し付けられたからな」

フリードの頭に、オカルト研究部の女性陣らが浮かび上がる。彼らに自分の監視を押し付けられる巧の姿を思い浮かべて思わず吹き出す。

「ぶっ！無敵のファイズさんも女には弱いって訳かよ！」

「ほっとけ」

ケラケラと笑うフリードに巧も短く返して前を向き直る。

その後も軽口を叩くフリードを主に匙が対応し、目的の店を転々と回っていく。

「あつソーナ様の『兵士』の人だ!!」

「ファイズもいるー!!」

フリードの新生活に必要な物を抱える四人の前に、何組かの親子が飛び出した。親子達の視線の先には巧や匙。

「あれって、木場さんじゃない?」

「えっ、ならサイン欲しい!!」

今度は人間界であれば中学生くらいの少女達が祐斗の前に。

ふとフリードは三人の立場を思い出す。

三人とも冥界では屈指の名家の次期当主の眷属。しかも直近では自分を含めたテロリスト達との戦いにも身を投じ、その名前を知らしめている。そんな若者達が冥界内で不人気なワケがない。

納得したフリードはしよーがないと人だかりの輪から外れ、落ち着くまで静かにしてるかと視線を巧達から外す。

そこに広がるの日々の営みを過ごす人達。

家族の為に働く男性、友人と共に買い物をする若い少女達、手を繋ぎながら歩く親子。

様々な人々はささやかなではあるが確かな幸せを噛み締めて生きている。

「…ハッ、人格が元通りになったて帳消しになるワケねえよね」

この景色を幾度となく破壊してきた罪の重さを更に実感していた。確かに今の彼の意思ではない。教会による無理な人体実験により生まれた人格は多く者の命を奪った。そう言った点を考慮され、今自分は監視の名目でのうのと生きている。

何が償いになるのだろうか。

見つからない答えを前に、フリードはいまだ人だかりの中にいる三人に背中を向けて歩き出した。

「…って黄昏た俺に追いかけてきたのがあんたなの？」

「ゼノヴィアさんでなくて悪かったな！」

フリードが人だかりを避けて向かった先は公園。

公園の中心には噴水があり、子供たちがはしゃぐ姿が見受けられる。

その背後には親たちがその様子を微笑みを浮かべつつ見守っていた。

そんな場所に似つかわしくない雰囲気醸し出すのはベンチに腰掛けたフリードと走って追いかけてきた為、息の上がつた匙だった。「なんで一人で行動しようとするんだよ。一応お前監視対象って立場なんだぞ」

「わかってますよ、自分の立場は。…恐らくアンタらよりもな」

自嘲気味に呟かれた言葉は匙にも届いていた。

下を向くフリードの横顔には後悔と喪失感の色が濃く現れていた。こうして向き合ってはいるものの、匙はフリードと多く言葉を交わしてきた訳ではない。むしろこの数週間での会話の方が圧倒的に多く、敵対していた時期は何度か顔を合わせた程度だ。

「だからこうして悩んでるっすよ。…殺した連中の関係者には何をしてやればいいのかって」

「それなら、ずっと考えてればいいんじゃないか」

ふとフリードは匙の言葉に僅かに反応を見せる。そんな彼の反応に気づかないまま匙は偽らない本音を伝える。

「そうやって苦しんで、苦しんで：俺たちとココで苦しめ。だからそう簡単に死なせるかよ」

「ハッ、生きて苦しめてか。文字通り悪魔だねえ：匙くんも」

「ああ、お前も知つての通り、立派な悪魔さ：俺もな」

ーー苦しめ、か。悪くないなあ。

心の中で反芻する言葉を噛み締めて、空を仰ぐ。

その空は彼の知る世界の空とは異なるものではあるが、彼の決意を受け止めるには広すぎる色が広がっている。

「フリードセルゼンだな」

「っ!？」

突如二人の前方に現れた魔法陣。

そこからは二人組のローブを纏う男たちが現れる。

顔を覆うフードから誰かはまでは分からないが、その正体を悟ったフリードは男に声をかける。

「旧魔王か、あの女のお迎えかな?…でもまあ、アンタらの所望のベルトちゃんは今お手元にございません」

「そうか、ならば…」

「貴様を殺し、回収させてもらう」

そう言い放った男達がローブを外す。

風に靡くローブから解放された男達の体に灰色のラインが走る。

その現象の意味を知ってる匙が咄嗟に神器を解放し、男達を拘束す

る為にラインを放つ。

「シトリー眷属の『兵士』よ。今の貴様の力では我々を拘束は出来ん」
「ああ…そうかよ!!」

男達がライオンオルフェノクに変身したと同時に匙の放ったラインがライオンオルフェノクAの腕に巻き付く。

相手の力を吸い取る効果のある匙の神器でも、ライオンオルフェノクAの力が強い為かあまり効果は見受けられない。

「それならこいつはどうだい!」

次第に大きく聞こえる声と共にドロップキックを見舞うフリード。空中を舞う一撃はライオンオルフェノクAの体を捉えて、その体を吹き飛ばす。

たまらずライオンオルフェノクBが突き出した掌から魔力を射出。

その行先には地面に着地したフリード。

咄嗟に防御の構えをするフリードの前方に複数の剣が地面から咲き誇り彼を守る。

「…つて事は色男君とイツセイ君か」

振り返る先にはすでにファイズに変身を完了した巧と聖魔剣を構える裕斗が。

ふと巧が手に持っていた物が目に止まり、フリードの動きが止まる。彼の持っていた物は今のフリードにはとても使う気にはなれない物だった。

「使え」

ぶつきらぼうな言葉と共にデルタドライバーとデルタフォンが宙を舞う。フリードにはとっては1分以上にも感じられた浮遊の後に彼の手元に収まる。

「ちよつと待て、なんでこれを」

「今のお前なら、そいつを『正しく』使えるつて事なんじゃねえのかよ」
戸惑うフリードに匙は、ライオンオルフェノクの攻撃を避けながら背中越しに声を掛ける。

攻撃をかわしつつ、カウンターを見舞う匙の姿を見てフリードは空を仰ぐ。

「ああ…そうかい。だったらまあご期待に応えちゃいますか！」
ガチャリと響きのいい音が鳴り、デルタフォンを口元に添える。
僅かな呼吸の後、彼は宣言した。

新たな自分へと【変身】する事を。

「変身!!」

『Standing ByllComplete』

白いフォトンストリームがフリードの体を走り、彼をもう一つの姿へと変身させる。

一際強い光が放たれた後、そこには一人の戦士がこの世界に誕生していた。

「頼れるもう一人の仮面ライダーが仲間になったね」

「かもな！」

その戦士の姿をみて、ファイズと裕斗は同時に匙の加勢に向かう為駆け出した。

「ああ…やってるやりますよ。…それが、俺の…フリード外道セルゼン神父の生きる道ですから」

そう言つて、デルタは仮面ライダーとしての第一歩を駆け出した。

巧たちの戦闘が終わり、シトリー家の悪魔たちが現場に現着。
幸いにも巧たちが直ぐに駆けつけたこともあり、市民に死者はおろか怪我人すら出ずにこの騒動は幕を閉じた。

すぐにソーナを通じて、リアスたちにも連絡が届きすぐにこの場に向かうと巧が連絡を受けた頃。

「アレン…」

「…ん？」

ベンチに腰掛けるフリードを、静かな声が呼ぶ。

声の主を分かりきっている為か特に驚く様子もなくその声に応じた。

「いや、すまない。フリードだったな」

声の主ーゼノヴィアは落ち着かない様子でフリードの様子を伺うように掛ける言葉を探していた。

「悪いのはこっち。…本当はあなたのツラも、声も、全部覚えてた。なのにあなたを遠ざけた。…あなたが待ち望んだ、【俺】じゃないから」
素直な謝罪と悔恨の言葉を返すフリードに更に掛ける言葉が見つからなくなるゼノヴィア。だから彼女は偽らない本当の気持ちを伝えることに決めた。

「確かに…あの頃とは違う形で、求めてた再会でもないのかもしれない。それでもやはり私は生きててくれたのが一番嬉しいんだ」

年相応の笑顔と目元に浮かぶゼノヴィアの涙を前に、フリードは自分でも意識していないうちに彼女の事を抱きしめていた。

「…ああ、暫くはハーデスの元に行く予定はないんで」

「ああ、そうして欲しい」

「これで一件落着って形かしら」

「そうだな」

抱擁の後で互いに赤くなるフリードとゼノヴィアの様子を巧とリアスは遠目から見守りながら、二人の時間を壊さないようにその場から離れていった。